

Hitachi Command Suite

Dynamic Link Manager Software

ユーザーズガイド (Linux[®]用)

3000-3-G24-60

対象製品

Hitachi Dynamic Link Manager 7.6.0

適用 OS の詳細については「ソフトウェア添付資料」でご確認ください。

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

商標類

AIX は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

AMD は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

AMD Opteron は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

Brocade は、米国またはその他の国における Brocade Communications Systems, Inc. の商標または登録商標です。

CLUSTERPRO は、日本電気株式会社の登録商標です。

Emulex は、米国 Emulex Corporation の登録商標です。

HP-UX は、Hewlett-Packard Development Company, L.P. のオペレーティングシステムの名称です。

HP および StorageWorks は、Hewlett-Packard Development Company, L.P. の商標です。

Intel Xeon は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

Itanium は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

LifeKeeper は、SIOS Technology Corp. の登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Pentium は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

PRIMECLUSTER は、富士通株式会社の登録商標です。

QLogic は、QLogic Corporation の登録商標です。

Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標もしくは商標です。

SUSE は日本における Novell, Inc. の商標です。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

Veritas および Veritas ロゴは、Symantec Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Xen は、Citrix Systems, Inc. の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

発行

2013 年 10 月 3000-3-G24-60

著作権

All Rights Reserved. Copyright © 2011, 2013, Hitachi, Ltd.

目次

はじめに.....	19
対象読者.....	20
マニュアルの構成.....	20
読書手順.....	21
このマニュアルで使用している記号.....	21
コマンドまたはユーティリティの文法で使用している記号.....	22
ファイル名で使用している記号.....	22
1. HDLM の概要.....	23
1.1 HDLM とは.....	24
1.2 HDLM の特長.....	24
2. HDLM の機能.....	27
2.1 HDLM で管理するデバイス.....	28
2.2 システム構成.....	28
2.2.1 FC-SAN を使用するシステム構成.....	28
2.2.2 IP-SAN を使用するシステム構成.....	29
2.3 LU 構成.....	31
2.4 プログラム構成.....	33
2.5 HDLM ドライバと HDLM デバイスの位置づけ.....	34
2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル.....	35
2.7 ロードバランスによる負荷分散.....	36
2.7.1 ロードバランスが適用されるパス.....	38
(1) SANRISE9500V シリーズ, または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合.....	38
(2) SANRISE9500V シリーズ, または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズ以外を使用している場合.....	39
2.7.2 ロードバランスのアルゴリズム.....	40
2.8 パス切り替えによるフェイルオーバーとフェイルバック.....	41
2.8.1 自動パス切り替え.....	41
(1) 自動フェイルオーバー.....	42
(2) 自動フェイルバック.....	43
2.8.2 手動パス切り替え.....	44
2.8.3 パスの状態遷移.....	44
(1) 稼働状態.....	44
(2) 閉塞状態.....	45
(3) パスの状態遷移.....	45
2.9 間欠障害の監視（自動フェイルバック使用時の機能）.....	46

2.9.1 間欠障害の確認.....	46
2.9.2 間欠障害監視の設定.....	47
2.9.3 間欠障害監視の動作.....	47
(1) 間欠障害が発生していると見なす場合.....	47
(2) 間欠障害が発生していないと見なす場合.....	48
(3) 間欠障害の監視中に間欠障害と見なす条件を変更した場合.....	48
2.9.4 ユーザの操作による間欠障害情報の変化.....	49
2.10 パスヘルスチェックによる障害検出.....	50
2.11 ダイナミック I/O パスコントロール機能による負荷分散.....	50
2.11.1 ダイナミックロードバランスコントローラ機能とは.....	50
2.11.2 ダイナミック I/O パスコントロール機能について.....	51
2.12 障害管理.....	51
2.12.1 採取するログの種類.....	52
2.12.2 障害情報のフィルタリング.....	53
2.12.3 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を使用した障害情報の収集.....	54
2.12.4 HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) を使用したインストール障害情報の収集.....	54
2.13 監査ログの採取.....	55
2.13.1 HDLM で監査ログに出力する種別と監査事象.....	56
2.13.2 監査ログ出力の前提条件.....	57
2.13.3 監査ログの出力先とフィルタリング.....	58
2.13.4 監査ログの出力形式.....	59
2.14 Global Link Manager による HDLM の統合管理.....	60
2.15 クラスタ対応.....	61
3. HDLM の環境構築.....	63
3.1 HDLM のシステム要件.....	65
3.1.1 HDLM がサポートするホストと OS.....	65
3.1.2 HDLM がサポートするストレージシステム.....	81
(1) ストレージシステム.....	81
(2) HBA (FC-SAN を使用する場合).....	83
(3) NIC (IP-SAN を使用する場合).....	83
(4) Hitachi RapidXchange 管理の中間ボリュームを扱う場合.....	83
3.1.3 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の関連製品.....	84
(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア.....	84
(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	117
(3) HDLM がサポートするファイルシステム.....	121
(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境.....	121
3.1.4 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品.....	127
(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア (FC-SAN を使用する場合).....	127
(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	158
(3) HDLM がサポートするファイルシステム.....	162
(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境 (FC-SAN を使用する場合).....	165
3.1.5 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合の関連製品.....	171
(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア.....	171
(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	176
(3) HDLM がサポートするファイルシステム.....	177
(4) HDLM がサポートするブートディスク環境.....	178
3.1.6 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の関連製品.....	179
(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア.....	179
(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	181
(3) HDLM がサポートするファイルシステム.....	182
(4) HDLM がサポートするブートディスク環境.....	182
3.1.7 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合の関連製品.....	183

(1) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	183
(2) HDLM がサポートするファイルシステム.....	185
(3) HDLM がサポートするブートディスク環境 (FC-SAN を使用する場合)	185
3.1.8 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合の関連製品.....	186
(1) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	187
(2) HDLM がサポートするファイルシステム.....	187
(3) HDLM がサポートするブートディスク環境.....	187
3.1.9 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品.....	188
(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア.....	188
(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	189
(3) HDLM がサポートするファイルシステム.....	189
(4) HDLM がサポートするブートディスク環境.....	190
3.1.10 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合の関連製品.....	190
(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア.....	190
(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	191
(3) HDLM がサポートするファイルシステム.....	191
(4) HDLM がサポートするブートディスク環境.....	191
3.1.11 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合の関連製品.....	192
(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア.....	192
(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ.....	192
(3) HDLM がサポートするファイルシステム.....	193
(4) HDLM がサポートするブートディスク環境.....	193
3.1.12 メモリ所要量とディスク占有量.....	193
(1) メモリ所要量.....	193
(2) ディスク占有量.....	194
3.1.13 HDLM がサポートする LU 数とパス数.....	195
3.1.14 HDLM がサポートする仮想環境.....	197
3.2 環境構築の流れ.....	199
3.3 HDLM のインストールの種別.....	199
3.4 HDLM のインストールについての事前知識.....	200
3.5 環境を構築する場合の注意事項.....	201
3.5.1 ハードウェアの設定についての注意事項.....	201
3.5.2 Linux に関する注意事項.....	201
3.5.3 インストールについての注意事項.....	202
3.5.4 再インストールまたはアップグレードインストールについての注意事項.....	203
3.5.5 Device Manager エージェントについての注意事項.....	204
3.6 HDLM のインストール.....	204
3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備.....	204
(1) HDLM 管理対象予定のデバイスへの操作.....	204
(2) ボリュームグループの確認方法.....	205
(3) syslogd の設定ファイルの設定.....	207
(4) マウントポイントの設定 (Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合)	208
(5) パーティションの確認.....	208
(6) Xen の設定.....	208
3.6.2 JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合の準備.....	208
(1) リモートインストールの流れ.....	208
(2) 前提条件.....	209
(3) HDLM のパッケージング.....	210
(4) HDLM の配布指令の作成および登録.....	211
3.6.3 HDLM の新規インストール.....	212
3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備.....	216
(1) HDLM 管理対象のデバイスへの操作.....	216
(2) md デバイスの非活性化.....	216
(3) ボリュームグループの非活性化.....	217
(4) Xen の設定.....	217

3.6.5 HDLM の再インストール.....	217
3.6.6 HDLM のアップグレードインストール.....	222
3.6.7 HDLM のサイレントインストール.....	226
3.6.8 ディスク複製 OS インストール.....	230
(1) Red Hat Enterprise Linux 5 (カーネルパラメータに LABEL を使用する) の場合.....	230
(2) Red Hat Enterprise Linux 6 (カーネルパラメータに UUID を使用する) の場合.....	234
3.7 ブートディスクを管理するための HDLM のインストール.....	239
3.7.1 ブートディスク環境へ HDLM をインストールする場合の注意事項.....	239
3.7.2 ブートディスク環境へ HDLM をインストールする手順の概要.....	241
(1) HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定.....	241
(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール.....	241
(3) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定.....	242
(4) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール.....	242
3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定.....	243
3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール.....	251
3.7.5 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定.....	257
3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール.....	266
3.7.7 HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処.....	279
(1) エラーメッセージを表示して OS が停止した場合.....	279
(2) メンテナンスを開始するためのパスワードを要求して OS が停止した場合.....	280
3.8 LUKS の設定.....	280
3.8.1 LUKS を使用する場合の注意事項.....	280
3.8.2 LUKS 環境への HDLM の適用.....	281
3.9 md デバイスの設定.....	282
3.9.1 md デバイスを設定する場合の注意事項.....	282
3.9.2 md デバイスの作成.....	283
3.9.3 md デバイス環境への HDLM の適用.....	286
(1) md デバイ스에 MULTIPATH 機能を使用していない場合.....	286
(2) md デ바이스에 MULTIPATH 機能を使用している場合.....	289
3.10 LVM2 の設定.....	292
3.10.1 LVM2 を使用する場合の注意事項.....	292
3.10.2 HDLM デバイスを使用して新規に論理ボリュームを作成する.....	293
3.10.3 シングルパス環境で SCSI デバイス上に作成済みの論理ボリュームを HDLM デバイスに移行する場合.....	297
3.11 Xen の設定.....	300
3.12 KVM の設定.....	301
3.13 CLUSTERPRO の設定.....	302
3.13.1 監視対象デバイスを HDLM デバイス、監視方法をディスクモニタリソースに設定する.....	302
3.13.2 監視対象デバイスをディスクハートビートで指定済みの RAW パーティション、監視方法を RAW モニタリソースに設定する.....	303
3.14 Heartbeat の設定.....	303
3.15 Oracle RAC の設定.....	303
3.16 RHCM の設定.....	305
3.16.1 RHCM を使用する場合の注意事項.....	306
3.16.2 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用している場合.....	306
3.16.3 Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合.....	306
3.17 VCS の設定.....	307
3.18 パス構成の確認.....	307
3.19 HDLM の機能の設定.....	308
3.19.1 変更前の設定内容の確認.....	308
3.19.2 機能の設定.....	309

(1) ロードバランスの設定.....	310
(2) パスヘルスチェックの設定.....	310
(3) 自動フェイルバックの設定.....	310
(4) 間欠障害監視の設定.....	311
(5) ダイナミック I/O パスコントロールの設定.....	311
(6) 障害ログ採取レベルの設定.....	312
(7) トレースレベルの設定.....	312
(8) 障害ログファイルサイズの設定.....	313
(9) 障害ログファイル数の設定.....	313
(10) トレースファイルサイズの設定.....	313
(11) トレースファイル数の設定.....	313
(12) 監査ログ採取の設定.....	314
(13) 監査ログの Facility の設定.....	315
3.19.3 変更後の設定の確認.....	315
3.20 プロセス別トレース情報ファイル.....	316
3.20.1 Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリを使用する場合の注意事項.....	316
3.21 HDLM デバイスのキャラクタ型デバイスファイルの作成.....	316
3.21.1 Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合.....	316
3.21.2 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合.....	317
3.22 ファイルシステムの構築（ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合）.....	317
3.22.1 ファイルシステムのマウント.....	317
3.22.2 ファイルシステムの作成例.....	318
3.23 自動マウントの設定.....	318
3.23.1 新規に HDLM デバイスを設定する場合.....	318
3.23.2 すでに SCSI デバイスを設定している環境から移行する場合.....	319
3.24 HDLM の設定解除.....	321
3.24.1 HDLM 管理対象のデバイスへの操作.....	321
3.24.2 Heartbeat の設定解除.....	322
3.24.3 Oracle RAC の設定解除.....	323
3.24.4 RHCM の設定解除.....	323
(1) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用している場合.....	323
(2) Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合.....	324
3.24.5 VCS の設定解除.....	324
3.24.6 Xen の設定解除.....	324
3.24.7 KVM の設定解除.....	325
3.24.8 LVM2 の設定解除.....	326
3.24.9 md デバイスの設定解除.....	330
(1) MULTIPATH 機能を使用しない md デバイスへ移行する場合.....	330
(2) MULTIPATH 機能を使用する md デバイスへ移行する場合.....	332
3.24.10 LUKS の設定解除.....	335
3.24.11 HDLM のアンインストール.....	336
(1) HDLM のアンインストール.....	336
(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合の HDLM のアンインストール.....	337
3.24.12 Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ（HNTRLlib2）のアンインストール.....	344
4. HDLM の運用.....	347
4.1 HDLM の使用上の注意事項.....	348
4.1.1 OS 共通の注意事項.....	348
4.1.2 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合の注意事項.....	349
4.1.3 Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, Oracle Enterprise Linux 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, または Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合の注意事項.....	350
4.1.4 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の注意事項.....	350
4.1.5 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合の注意事項.....	351
4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用.....	352

4.2.1 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, Oracle Enterprise Linux 4, Oracle Enterprise Linux 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 または SUSE LINUX Enterprise Server の場合.....	353
(1) HDLM デバイスをブートディスクとして使用していない場合.....	353
(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合.....	354
(3) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している場合.....	354
4.2.2 Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合.....	355
(1) HDLM デバイスをブートディスクとして使用していない場合.....	355
(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合.....	355
(3) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している場合.....	356
4.3 コマンドを使用した HDLM の運用.....	356
4.3.1 コマンドを使用する場合の注意事項.....	356
4.3.2 パスの情報を参照する.....	356
4.3.3 パスの状態を変更する.....	357
(1) パスの状態を Online 状態にする場合.....	357
(2) パスの状態を Offline(C)状態にする場合.....	357
4.3.4 LU の情報を参照する.....	358
4.3.5 HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を確認する.....	359
4.3.6 パスの統計情報を初期値にする.....	359
4.3.7 動作環境を参照または設定する.....	360
(1) 動作環境を参照する.....	360
(2) 動作環境を設定する.....	361
4.3.8 ライセンス情報を参照する.....	361
4.3.9 ライセンスを更新する.....	362
4.3.10 HDLM のバージョン情報を参照する.....	362
4.3.11 HDLM のコンポーネント情報を参照する.....	363
4.4 HDLM マネージャの起動と停止.....	363
4.4.1 HDLM マネージャの起動.....	364
4.4.2 HDLM マネージャの停止.....	364
4.5 HDLM の常駐プロセス.....	365
4.6 HDLM 運用環境の構成変更.....	365
4.6.1 HBA の交換.....	366
(1) HBA を交換する前の準備.....	366
(2) HBA の交換.....	367
(3) ホスト再起動後のパス情報の更新.....	369
4.6.2 ファイバケーブルの交換.....	371
4.6.3 ファイバチャネルスイッチの交換.....	372
4.6.4 HDLM デバイスの構成変更.....	374
(1) HDLM デバイスの構成を変更する場合の注意事項.....	375
(2) LU を追加する.....	376
(3) LU へのパスを追加する.....	378
(4) LU を削除する.....	378
(5) LU へのパスを削除する.....	379
(6) HDLM 管理対象のデバイスを管理対象外にする.....	380
(7) HDLM 管理対象外のデバイスを管理対象にする.....	381
(8) 断線状態で起動されたパスを復元する (再起動が必要となる場合)	382
(9) 断線状態で起動されたパスを復元する (再起動が不要な場合)	382
(10) 稼働中に断線状態となったパスを復元する.....	384
4.6.5 HDLM デバイス名の変更.....	385
4.6.6 新規 HDLM デバイス作成について.....	387
4.6.7 BladeSymphony の I/O ドロワーを追加する場合の注意事項.....	388
5. トラブルシューティング.....	391
5.1 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を使った障害情報の収集.....	392
5.2 メッセージでの障害情報の確認.....	392

5.3 パス障害時の対処.....	393
5.3.1 メッセージの監視.....	394
5.3.2 パス情報の取得.....	394
5.3.3 障害パスの抽出.....	394
5.3.4 障害発生ハードウェアの絞り込み.....	394
5.3.5 障害個所の特定・ハードウェアへの障害対処.....	395
5.3.6 パスを稼働状態に変更.....	395
5.4 プログラム障害時の対処.....	395
5.4.1 メッセージの監視.....	395
5.4.2 プログラム情報の取得.....	396
5.4.3 プログラム障害への対処.....	396
5.4.4 HDLM の購入元会社、または保守会社に連絡.....	396
5.5 パスやプログラム以外の障害時の対処.....	396
6. コマンドリファレンス.....	397
6.1 コマンド概要.....	398
6.2 clear パスの統計情報を初期値にする.....	398
6.2.1 形式.....	398
(1) パスの統計情報を初期値 (0) にする場合.....	398
(2) clear オペレーションの形式を表示する場合.....	399
6.2.2 パラメタ.....	399
(1) パスの統計情報を初期値 (0) にする場合.....	399
(2) clear オペレーションの形式を表示する場合.....	399
6.3 help オペレーションの形式を表示する.....	399
6.3.1 形式.....	399
6.3.2 パラメタ.....	400
6.4 offline パスを閉塞状態にする.....	401
6.4.1 形式.....	401
(1) パスを閉塞状態にする場合.....	401
(2) offline オペレーションの形式を表示する場合.....	401
6.4.2 パラメタ.....	401
(1) パスを閉塞状態にする場合.....	401
(2) offline オペレーションの形式を表示する場合.....	403
6.5 online パスを稼働状態にする.....	404
6.5.1 形式.....	404
(1) パスを稼働状態にする場合.....	404
(2) online オペレーションの形式を表示する場合.....	404
6.5.2 パラメタ.....	405
(1) パスを稼働状態にする場合.....	405
(2) online オペレーションの形式を表示する場合.....	406
6.6 set 動作環境を設定する.....	407
6.6.1 形式.....	407
(1) HDLM の動作環境を設定する場合.....	407
(2) set オペレーションの形式を表示する場合.....	408
6.6.2 パラメタ.....	408
(1) HDLM の動作環境を設定する場合.....	408
(2) set オペレーションの形式を表示する場合.....	417
6.7 view 情報を表示する.....	418
6.7.1 形式.....	418
(1) プログラム情報を表示する場合.....	418
(2) パス情報を表示する場合.....	418
(3) LU 情報を表示する場合.....	419
(4) HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を表示する場合.....	419
(5) view オペレーションの形式を表示する場合.....	419

6.7.2 パラメタ	420
(1) プログラム情報を表示する場合	420
(2) パス情報を表示する場合	424
(3) LU 情報を表示する場合	433
(4) HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を表示する場合	441
(5) view オペレーションの形式を表示する場合	442
6.8 add パスを動的に追加する	442
6.8.1 形式	442
(1) パスを動的に追加する場合	442
(2) add オペレーションの形式を表示する場合	443
6.8.2 パラメタ	443
(1) パスを動的に追加する場合	443
(2) add オペレーションの形式を表示する場合	443
6.9 delete パスを動的に削除する	443
6.9.1 形式	444
(1) パスを動的に削除する場合	444
(2) delete オペレーションの形式を表示する場合	444
6.9.2 パラメタ	444
(1) パスを動的に削除する場合	444
(2) delete オペレーションの形式を表示する場合	444
7. ユティリティリファレンス	445
7.1 ユティリティ概要	446
7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユティリティ	447
7.2.1 形式	447
7.2.2 パラメタ	447
7.2.3 収集される障害情報	449
7.3 dlmcfmgr HDLM 構成定義ユティリティ	463
7.3.1 形式	463
7.3.2 パラメタ	463
7.4 dlmcname HDLM デバイス名変更ユティリティ	470
7.4.1 形式	470
7.4.2 パラメタ	470
7.4.3 デバイス名変更定義ファイルの編集方法	471
(1) デバイス名変更定義ファイルの記述規則	471
(2) デバイス名変更定義ファイルの定義内容	471
7.5 dlmmkinitrd ブートディスクサポートユティリティ	471
7.5.1 形式	471
(1) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 の場合	471
(2) SUSE LINUX Enterprise Server の場合	472
7.5.2 パラメタ	472
(1) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 の場合	472
(2) SUSE LINUX Enterprise Server の場合	472
7.6 dlmpr HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ	473
7.6.1 形式	473
7.6.2 パラメタ	473
7.7 dlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユティリティ	475
7.7.1 形式	475
7.7.2 パラメタ	475
7.8 dlmstart HDLM 起動ユティリティ	478
7.8.1 形式	478
7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユティリティ	478
7.9.1 形式	479
7.10 installgetras HDLM インストール障害情報収集ユティリティ	479

7.10.1 形式.....	479
7.10.2 パラメタ.....	479
7.10.3 収集される障害情報.....	480
7.11 installhdlm HDLM インストールユティリティ.....	480
7.11.1 形式.....	480
7.11.2 パラメタ.....	480
7.11.3 インストール情報設定ファイルの編集方法.....	480
(1) インストール情報設定ファイルの記述規則.....	481
(2) インストール情報設定ファイルの定義内容.....	481
7.12 installux.sh HDLM 共通インストーラユティリティ.....	485
7.12.1 形式.....	486
7.12.2 パラメタ.....	486
7.12.3 ログファイルについて.....	486
8. メッセージ.....	487
8.1 メッセージ一覧を参照するための前提知識.....	488
8.1.1 メッセージ ID の出力形式と意味.....	488
8.1.2 メッセージおよびメッセージの説明で使用する用語.....	488
8.1.3 メッセージの言語種別.....	488
8.2 KAPL01001~KAPL02000.....	489
8.3 KAPL03001~KAPL04000.....	507
8.4 KAPL04001~KAPL05000.....	508
8.5 KAPL05001~KAPL06000.....	514
8.6 KAPL06001~KAPL07000.....	518
8.7 KAPL07001~KAPL08000.....	521
8.8 KAPL08001~KAPL09000.....	522
8.9 KAPL09001~KAPL10000.....	524
8.10 KAPL10001~KAPL11000.....	542
8.11 KAPL11001~KAPL12000.....	565
8.12 KAPL12001~KAPL13000.....	569
8.13 KAPL13001~KAPL14000.....	589
8.14 KAPL15001~KAPL16000.....	600
8.15 Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントのリターンコード.....	604
付録 A Linux のコマンドおよびファイルの注意事項.....	607
A.1 /proc/partitions ファイルについての注意事項.....	608
A.2 Linux のコマンドについての注意事項.....	608
A.3 iostat コマンドについての注意事項.....	609
A.4 mkfs コマンドについての注意事項.....	609
A.5 fdisk コマンドについての注意事項.....	609
A.6 sar コマンドについての注意事項.....	610
A.7 fdisk コマンドまたは parted コマンドについての注意事項.....	610
A.8 parted コマンドについての注意事項.....	610
A.9 vgrepname コマンドおよび lvrename コマンドについての注意事項.....	611
付録 B weak-modules スクリプトを使用している製品の障害時の対処.....	613
B.1 概要.....	614
B.2 weak-modules スクリプトを使用している製品のインストール.....	614

B.3 weak-modules スクリプトを使用している製品のアンインストール.....	617
付録 C kdump 機能の設定手順.....	619
C.1 前提条件.....	620
C.2 設定手順.....	620
C.2.1 カーネルダンプ出力用のディスクを追加する.....	620
C.2.2 カーネルダンプの出力先を設定する.....	621
C.2.3 ブートローダの設定ファイルを編集する.....	624
C.2.4 kdump 機能用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成する.....	626
C.2.5 カーネルダンプが正しく採取されることを確認する.....	626
C.3 注意事項.....	627
付録 D バージョン間の機能差異.....	629
D.1 7.6 以降と 7.6 より前のバージョンとの機能差異.....	630
D.2 7.2 以降と 7.2 より前のバージョンとの機能差異.....	630
D.3 6.2.1 以降と 6.2.1 より前のバージョンとの機能差異.....	630
D.4 6.1 以降と 6.1 より前のバージョンとの機能差異.....	630
D.5 6.0 以降と 6.0 より前のバージョンとの機能差異.....	630
D.6 05-94 以降と 05-94 より前のバージョンとの機能差異.....	630
D.7 05-91 以降と 05-91 より前のバージョンとの機能差異.....	631
D.8 05-90 以降と 05-90 より前のバージョンとの機能差異.....	631
D.9 05-80 以降と 05-80 より前のバージョンとの機能差異.....	631
D.10 05-71 以降と 05-71 より前のバージョンとの機能差異.....	632
D.11 05-70-/A 以降と 05-70-/A より前のバージョンとの機能差異.....	632
D.12 05-70 以降と 05-70 より前のバージョンとの機能差異.....	632
D.13 05-63 以降と 05-63 より前のバージョンとの機能差異.....	632
D.14 05-40 以降と 05-40 より前のバージョンとの機能差異.....	633
付録 E このマニュアルの参考情報.....	635
E.1 関連マニュアル.....	636
E.2 このマニュアルでの表記.....	636
E.3 このマニュアルで使用している略語.....	640
E.4 KB (キロバイト) などの単位表記について.....	642
 用語解説.....	 643
 索引.....	 649

目次

図 1-1 ホストとストレージシステムとの接続形態.....	24
図 2-1 FC-SAN を使用する HDLM のシステム構成.....	29
図 2-2 IP-SAN を使用する HDLM のシステム構成.....	30
図 2-3 HDLM をインストールしたあとにホスト側で認識される LU の構成.....	32
図 2-4 HDLM のプログラム構成.....	33
図 2-5 HDLM ドライバと HDLM デバイスの位置づけ.....	34
図 2-6 論理デバイスファイル名に付けられるアルファベットについて.....	36
図 2-7 ロードバランス機能を使用していない場合の I/O の流れ.....	37
図 2-8 ロードバランス機能を使用している場合の I/O の流れ.....	38
図 2-9 ロードバランス.....	39
図 2-10 パスの切り替え.....	43
図 2-11 パスの状態遷移.....	45
図 2-12 パスに間欠障害が発生していると見なす場合の動作.....	47
図 2-13 パスに間欠障害が発生していないと見なす場合の動作.....	48
図 2-14 間欠障害の監視中に間欠障害と見なす条件を変更した場合の動作.....	49
図 2-15 障害情報を採取するときのデータの流れ.....	52
図 2-16 HDLM と Global Link Manager を使用したシステム構成例.....	61
図 3-1 環境構築の流れ.....	199
図 3-2 mount コマンドの実行結果.....	205
図 3-3 /etc/fstab ファイルの編集例.....	205
図 3-4 vgdisplay -v の実行結果（物理ボリュームが 1 つの場合）.....	206
図 3-5 vgdisplay -v の実行結果（物理ボリュームが 2 つの場合）.....	207
図 3-6 syslogd の設定ファイルの内容例（Red Hat Enterprise Linux の場合）.....	207
図 3-7 リモートインストールの流れ.....	209
図 3-8 JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合のシステム構成.....	210
図 3-9 dlmcfgmgr ユティリティに-v パラメタおよび-udev パラメタを指定した実行例.....	240
図 3-10 LVM2 を使用している場合の/etc/fstab ファイルの内容例.....	258
図 3-11 mount コマンドの実行例.....	259
図 3-12 /etc/fstab ファイルの編集例.....	260
図 3-13 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例.....	261
図 3-14 /etc/grub.conf ファイルの編集例.....	263
図 3-15 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例（Xen をサポートしているカーネルを使用している場合）.....	263
図 3-16 /etc/elilo.conf ファイルの編集例.....	263
図 3-17 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例.....	269
図 3-18 /etc/grub.conf ファイルの編集例.....	269
図 3-19 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例（Xen をサポートしているカーネルを使用している場合）.....	270
図 3-20 /etc/elilo.conf ファイルの編集例.....	270

図 3-21 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例.....	273
図 3-22 /etc/grub.conf ファイルの編集例.....	275
図 3-23 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例 (Xen をサポートしているカーネルを使用している場合)	275
図 3-24 /etc/elilo.conf ファイルの編集例.....	276
図 3-25 誤った md デバイスの構成例.....	283
図 3-26 正しい md デバイスの構成例.....	283
図 3-27 HDLM デバイス上に md デバイスを作成した場合のデバイス構成.....	284
図 3-28 SCSI デバイス上にある md デバイスを HDLM デバイス上に移行した場合のデバイス構成 (md デバイスの RAID 機能を使用した環境)	286
図 3-29 SCSI デバイス上にある md デバイス (md デバイスの MULTIPATH 機能を使用した環境) から HDLM デバイス上に移行した場合のデバイス構成.....	290
図 3-30 HDLM デバイス上に論理ボリュームを作成した場合のデバイス構成.....	293
図 3-31 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例.....	295
図 3-32 SCSI デバイス上にある論理ボリュームを HDLM デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (シングルパス環境の場合)	297
図 3-33 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例.....	299
図 3-34 raw コマンドの実行例.....	317
図 3-35 ext2 ファイルシステムの作成例.....	318
図 3-36 HDLM コマンドの view オペレーション (-drv 指定) の実行例.....	319
図 3-37 HDLM コマンドの view オペレーション (-drv 指定) の実行例.....	320
図 3-38 HDLM の設定解除の流れ.....	321
図 3-39 HDLM デバイス上にある論理ボリュームを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成.....	327
図 3-40 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例.....	329
図 3-41 HDLM デバイス上にある md デバイスを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (md デバイスの RAID 機能を使用した環境)	330
図 3-42 HDLM デバイス上にある md デバイスを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (md デバイスの MULTIPATH 機能を使用した環境)	333
図 3-43 dlmcfmgr ユティリティに-v パラメタを指定した実行例.....	338
図 3-44 dlmcfmgr ユティリティに-v パラメタおよび-udev パラメタを指定した実行例.....	338
図 3-45 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例.....	339
図 3-46 LILO または GRUB を使用している場合の mount コマンドの実行例.....	342
図 3-47 ELILO を使用している場合の mount コマンドの実行例.....	342
図 4-1 アプリケーションが I/O 要求を発行してから応答が返るまでの所要時間の概要.....	348
図 4-2 ファイバケーブルを交換する手順説明の前提となるシステム構成.....	371
図 4-3 交換するファイバケーブルを経由するパスを Offline(C)にした状態.....	372
図 4-4 ファイバチャネルスイッチを交換する手順説明の前提となるシステム構成.....	373
図 4-5 交換するファイバチャネルスイッチを経由するパスを Offline(C)にした状態.....	374
図 5-1 KAPL08022-E が出力される場合の障害箇所.....	393
図 5-2 パス障害時の対処手順.....	394
図 5-3 プログラム障害時の対処手順.....	395
図 7-1 収集情報定義ファイルの記述例.....	448
図 A-1 /proc/partitions ファイルの表示例.....	608
図 A-2 iostat コマンドの実行例.....	609
図 A-3 sar コマンドの実行例.....	610

表目次

表 2-1 FC-SAN を使用する HDLM のシステム構成要素.....	29
表 2-2 IP-SAN を使用する HDLM のシステム構成要素.....	30
表 2-3 ホスト側で認識される要素.....	32
表 2-4 HDLM の各プログラムの役割.....	33
表 2-5 アプリケーションから LU にアクセスするとき使用するデバイスの論理デバイスファイル名の例.....	35
表 2-6 ロードバランスのアルゴリズムの特長.....	40
表 2-7 ユーザの操作による、間欠障害情報の変化.....	49
表 2-8 障害情報の種類.....	52
表 2-9 障害レベル.....	53
表 2-10 監査ログの種別と説明.....	55
表 2-11 監査ログに出力する種別と監査事象.....	56
表 2-12 指定できる重要度 (Severity)	58
表 2-13 メッセージ部に出力される情報.....	59
表 3-1 適用ホストの必要条件.....	65
表 3-2 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 のカーネル.....	66
表 3-3 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 5 のカーネル.....	71
表 3-4 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 6 のカーネル.....	74
表 3-5 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 10 のカーネル.....	75
表 3-6 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 11 のカーネル.....	77
表 3-7 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 4 のカーネル.....	78
表 3-8 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 5 のカーネル.....	79
表 3-9 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 のカーネル.....	80
表 3-10 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 のカーネル.....	81
表 3-11 Hitachi RapidXchange 管理の中間ボリュームを扱う場合の関連プログラム.....	83
表 3-12 Red Hat Enterprise Linux AS4(IA32)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	84
表 3-13 Red Hat Enterprise Linux ES4(IA32)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	93
表 3-14 Red Hat Enterprise Linux AS4(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	101
表 3-15 Red Hat Enterprise Linux ES4(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	104
表 3-16 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(EM64T)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	105
表 3-17 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(AMD64)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	112
表 3-18 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	117
表 3-19 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の BladeSymphony の動作環境.....	121
表 3-20 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境(IA32).....	122
表 3-21 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境(IPF).....	124
表 3-22 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境(EM64T/AMD64).....	124
表 3-23 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 で BladeSymphony およびブートディスクを使用している場合の動作環境.....	126

表 3-24 Red Hat Enterprise Linux 5(IA32)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	127
表 3-25 Red Hat Enterprise Linux 5(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	141
表 3-26 Red Hat Enterprise Linux 5(EM64T/AMD64)を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	142
表 3-27 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	158
表 3-28 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合のファイルシステム.....	162
表 3-29 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合の BladeSymphony の動作環境.....	165
表 3-30 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境.....	166
表 3-31 Red Hat Enterprise Linux 5 で BladeSymphony およびブートディスクを使用している場合の動作環境.....	170
表 3-32 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のクラスタソフトウェア (FC-SAN を使用する場合)	172
表 3-33 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のクラスタソフトウェア (IP-SAN を使用する場合)	176
表 3-34 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	176
表 3-35 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のファイルシステム.....	177
表 3-36 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (FC-SAN を使用する場合)	178
表 3-37 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (IP-SAN を使用する場合)	179
表 3-38 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	179
表 3-39 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	181
表 3-40 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合のブートディスクの動作環境.....	183
表 3-41 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	184
表 3-42 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合のファイルシステム.....	185
表 3-43 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合のブートディスクの動作環境.....	186
表 3-44 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	187
表 3-45 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合のブートディスクの動作環境.....	187
表 3-46 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	188
表 3-47 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	189
表 3-48 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のファイルシステム.....	189
表 3-49 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境.....	190
表 3-50 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	190
表 3-51 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	191
表 3-52 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境.....	191
表 3-53 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合のクラスタソフトウェア.....	192
表 3-54 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合のボリュームマネージャ.....	192
表 3-55 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境.....	193
表 3-56 ホストのメモリ所要量.....	194
表 3-57 ホストのディスク占有量.....	194
表 3-58 HDLM がサポートする LU 数とパス数.....	195
表 3-59 大規模構成での HDLM 運用環境の HDLM 構成定義ユティリティ実行時間の計測例.....	196
表 3-60 大規模構成での HDLM 運用環境のホスト起動時間の計測例.....	196
表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境.....	197
表 3-62 HDLM がサポートする KVM の動作環境.....	197
表 3-63 登録ファイルとインストーラ実行シェルスクリプトの名称および格納場所.....	210
表 3-64 各ディストリビューションのマウントポイント.....	212
表 3-65 各ディストリビューションのマウントポイント.....	218
表 3-66 各ディストリビューションのマウントポイント.....	222
表 3-67 各ディストリビューションのマウントポイント.....	227
表 3-68 ブートローダの設定ファイル名.....	243
表 3-69 ブートローダの設定ファイル名.....	251
表 3-70 設定できる監視対象デバイスと監視方法の組み合わせ.....	302
表 3-71 「MISSCOUNT」の計算式.....	304
表 3-72 「DISKTIMEOUT」の計算式.....	304
表 3-73 各機能のデフォルト値と推奨値.....	309
表 3-74 障害ログ採取レベルの設定値.....	312

表 3-75	トレースレベルの設定値.....	312
表 3-76	監査ログ採取レベルの設定値.....	314
表 3-77	監査ログ種別の設定値.....	314
表 3-78	監査ログの Facility の設定値.....	315
表 3-79	プロセス別トレース情報ファイルの設定値.....	316
表 4-1	カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用手順の参照先.....	352
表 4-2	HDLM の常駐プロセス一覧.....	365
表 4-3	SCSI デバイスの追加と削除.....	376
表 4-4	SCSI デバイスの追加.....	383
表 4-5	HDLM デバイスの新規割り当て例.....	387
表 6-1	HDLM コマンドのオペレーション一覧.....	398
表 6-2	各設定のデフォルト値と推奨値.....	408
表 6-3	障害ログ採取レベルの設定値.....	409
表 6-4	トレースレベルの設定値.....	410
表 6-5	自動フェイルバックおよび間欠障害監視の設定状況と、実行できる操作の関係.....	413
表 6-6	ライセンスキー種別.....	415
表 6-7	監査ログ採取レベルの設定値.....	415
表 6-8	監査ログ種別の設定値.....	416
表 6-9	監査ログの Facility の設定値.....	416
表 6-10	プログラム情報の表示項目.....	420
表 6-11	-path -item パラメタで選択できる表示項目と指定する後続パラメタ.....	426
表 6-12	パス情報の表示項目.....	428
表 6-13	パス名を構成する項目.....	431
表 6-14	プロダクト ID の表示内容.....	432
表 6-15	-lu -item パラメタで追加できる表示項目と指定する後続パラメタ.....	434
表 6-16	-lu -c -item パラメタで追加できる表示項目と指定する後続パラメタ.....	437
表 6-17	LU 情報の表示項目.....	438
表 6-18	HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報.....	441
表 7-1	cluster.tar.gz に含まれる情報.....	449
表 7-2	DLMgetras ユティリティ実行時に OS や HDLM のコマンドによって記録され、cluster.tar.gz ファイルに格納される情報.....	450
表 7-3	getras.tar.gz に含まれる情報.....	451
表 7-4	DLMgetras ユティリティ実行時に OS や HDLM のコマンドによって記録され、getras.tar.gz ファイルに格納される各種情報.....	457
表 7-5	dlimcfgmgr ユティリティのパラメタの機能.....	463
表 7-6	HDLM デバイスの新規割り当て例.....	464
表 7-7	HDLM デバイスの管理状態と構成を示す情報.....	467
表 7-8	dlimsetopt ユティリティで使用される conf ファイル.....	477
表 7-9	ブートローダの設定ファイル名.....	477
表 7-10	installgetras.tar.gz に含まれる情報.....	480
表 7-11	セクション[INSTALLATION_SETTINGS]のキー.....	481
表 7-12	セクション[ENVIRONMENT_SETTINGS]のキー.....	483
表 8-1	メッセージ ID (KAPLnnnnnI) の形式と意味.....	488
表 8-2	メッセージとメッセージの説明で使用する用語.....	488
表 8-3	LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	489
表 8-4	LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	507
表 8-5	LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	508
表 8-6	LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	514
表 8-7	LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	519
表 8-8	LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	521
表 8-9	LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	522

表 8-10 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	565
表 8-11 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	569
表 8-12 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別.....	589
表 A-1 Linux のコマンド実行時間の計測例.....	608
表 D-1 HDLM GUI 使用時の JRE/JDK のバージョン.....	631
表 D-2 HDLM GUI 使用時の JRE/JDK のバージョン.....	632



はじめに

このマニュアルは、次に示すプログラムプロダクトの機能と使用方法について説明したものです。

- Hitachi Dynamic Link Manager
 - 対象読者
 - マニュアルの構成
 - 読書手順
 - このマニュアルで使用している記号
 - コマンドまたはユティリティの文法で使用している記号
 - ファイル名で使用している記号

対象読者

このマニュアルは、Hitachi Dynamic Link Manager（以降、HDLM と表記します）を使ってストレージシステムの運用・管理をするシステム管理者を対象としています。また、次のことについて理解していることを前提としています。

- Linux の概要および管理機能
- ストレージシステムの管理機能
- クラスタソフトウェアの機能
- ボリューム管理ソフトウェアの機能

マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す章と付録から構成されています。

1. HDLM の概要

HDLM の概要と特長について説明しています。

2. HDLM の機能

HDLM の管理対象、システム構成、基本的な用語、および機能について説明しています。

3. HDLM の環境構築

HDLM の環境を構築する手順および設定を解除する手順について説明しています。

4. HDLM の運用

HDLM のコマンドを使用して HDLM を操作する方法、HDLM マネージャを手動で起動または停止するための操作手順について説明しています。また、パスが接続する HDLM 管理対象のデバイスの変更、パスを構成するハードウェアの交換など、HDLM を運用する環境の構成を変更する場合の操作について説明しています。

5. トラブルシューティング

パスに障害が発生した場合、HDLM に障害が発生した場合、などの対処方法について説明しています。

6. コマンドリファレンス

HDLM で使用するコマンドについて説明しています。

7. ユティリティリファレンス

HDLM で使用するユティリティについて説明しています。

8. メッセージ

HDLM から出力されるメッセージを参照するときに知っておいてほしい情報について説明しています。そのあと、HDLM から出力されるメッセージ、およびその対処について説明しています。

付録 A. Linux のコマンドおよびファイルの注意事項

Linux のコマンドおよびファイルの注意事項について説明しています。

付録 B. weak-modules スクリプトを使用している製品の障害時の対処

weak-modules スクリプトを使用している製品をインストールまたはアンインストールした場合に、障害が発生したときの対処について説明しています。

付録 C. kdump 機能の設定手順

HDLM デバイスをブートディスクとする環境で、`kdump` 機能を使用するために必要な設定手順について説明しています。

付録 D. バージョン間の機能差異

HDLM のバージョンによる機能の差異について説明しています。

付録 E. このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報について説明しています。

用語解説

このマニュアルで使用している用語について説明しています。

読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて直接章を選択して読むことができます。利用目的別に、次の表に従ってお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述箇所
HDLM の概要と特長を知りたい。	第 1 章
HDLM のシステム構成と機能を知りたい。	第 2 章
HDLM を使用するための、環境構築の手順を知りたい。	第 3 章
HDLM のコマンドを使用して HDLM を操作する方法を知りたい。	第 4 章
HDLM を運用する環境の構成を変更する場合の操作方法を知りたい。	第 4 章
運用時の注意事項について知りたい。	第 4 章
HDLM でバスの構成や状態を確認する方法を知りたい。	第 4 章
ライセンスの更新について知りたい。	第 4 章
障害対処の手順を知りたい。	第 5 章
HDLM のコマンドについて知りたい。	第 6 章
HDLM のユティリティについて知りたい。	第 7 章
HDLM 使用時に出力されるメッセージについて知りたい。	第 8 章
HDLM 使用時の Linux のコマンドおよびファイルの注意事項について知りたい。	付録 A
<code>weak-modules</code> スクリプトを使用している製品をインストールまたはアンインストールした場合に、障害が発生したときの対処について知りたい。	付録 B
HDLM デバイスをブートディスクとする環境で、 <code>kdump</code> 機能を使用するために必要な設定手順について知りたい。	付録 C
HDLM のバージョンによる機能の差異について知りたい。	付録 D
このマニュアルを読むに当たっての参考情報について知りたい。	付録 E
HDLM で使用する用語について知りたい。	用語解説

このマニュアルで使用している記号

このマニュアルでは、次に示す記号を使用しています。

記号	意味
[]	文字キーを意味します。 (例) [Ctrl] + [C]

記号	意味
	上記の例では、Ctrl キーと C キーを同時に押すことを示します。

コマンドまたはユティリティの文法で使用している記号

このマニュアルでは、次に示す記号をコマンドおよびユティリティの文法説明に使用しています。

文法記述記号	意味
[]	この記号で囲まれている項目は省略できます。 []内に、「 」で区切られた項目が複数ある場合は、どれか1つだけを指定するか、またはすべて省略できます。なお、項目に下線がある場合は、すべての項目を省略したときに、その項目が仮定されます。
{ }	この記号で囲まれている、「 」で区切られた項目のうちから、どれか1つだけを必ず指定します。
...	記述の省略の意味です。
正字体で記述された部分	キーワードとしてそのまま入力することを示します。 (例) dlnkmgr help
斜字体で記述された部分	該当する要素を指定することを示します。 (例) dlnkmgr online [-path] [-pathid パス管理 PATH_ID] [-s] 上記の例では、パス管理 PATH_ID の部分に、該当する ID を指定します。
#	コマンドを実行する画面上のプロンプトです。

ファイル名で使用している記号

このマニュアルでは、次に示す記号をファイル名に使用しています。

ファイル名記述記号	意味
[]	この記号で囲まれている文字または数値の範囲を示します。 []内の文字または数値が「-」で区切られている場合、範囲内の文字または数値を表します。

HDLM の概要

HDLM は、ストレージシステムとホストとを結ぶ経路を管理します。HDLM を使用することで、経路に掛かる負荷を分散したり、障害発生時に経路を切り替えたりして、システムの信頼性を向上できます。

この章では、HDLM の概要と特長について説明します。

- 1.1 HDLM とは
- 1.2 HDLM の特長

1.1 HDLM とは

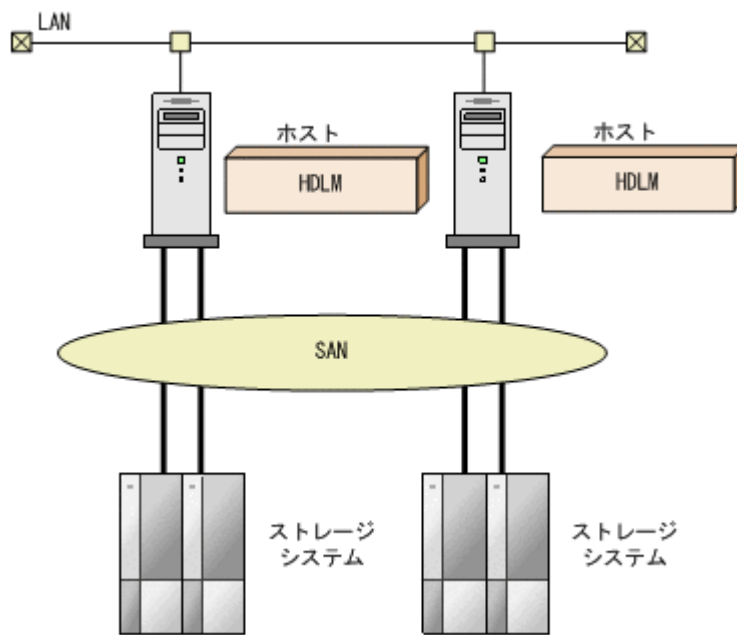
データウェアハウスの普及やマルチメディアデータの利用拡大によって、ネットワーク上で大容量のデータを高速に利用する要求が高まっています。このような要求に応えるために、SAN などのデータ転送専用のネットワークを使用してストレージシステムへアクセスする運用が始められています。

HDLM はストレージシステムへのアクセス経路を管理するプログラムです。

HDLM は、経路に掛かる負荷を分散してバランスを取ったり、経路の障害時にほかの経路に切り替えたりする機能を持ちます。HDLM を使用することでシステムの可用性と信頼性を向上させることができます。

ホストとストレージシステムとの接続形態を次の図に示します。HDLM がインストールされているサーバを、ホストと呼びます。

図 1-1 ホストとストレージシステムとの接続形態



HDLM がサポートするストレージシステムについては、「[3.1.2 HDLM がサポートするストレージシステム](#)」を参照してください。

1.2 HDLM の特長

HDLM には次の特長があります。

経路に掛かる負荷を分散できます (ロードバランス)

ホストとストレージシステムを複数の経路で接続している場合、負荷をそれぞれの経路へ分散します。こうすることで、1つの経路に負荷が偏って処理速度が遅くなることを防げます。

ロードバランスについては、「[2.7 ロードバランスによる負荷分散](#)」を参照してください。

障害発生時にも処理を継続できます (フェイルオーバー)

ホストとストレージシステムを複数の経路で接続している場合、使用中の経路に障害が発生したときに、自動的に経路が切り替えられます。こうすることで、経路に障害が発生しても処理を継続できます。

フェイルオーバーについては、「[2.8 パス切り替えによるフェイルオーバーとフェイルバック](#)」を参照してください。

障害から回復した経路を稼働状態にできます (フェイルバック)

経路が障害から回復したときに、経路の状態を稼働状態にできます。こうすることで、稼働状態の経路をできるだけ多く確保します。

経路のフェイルバックは、手動または自動で実行できます。自動フェイルバックは、ユーザーによって物理的な経路の障害を復旧したあと、**HDLM** が経路を自動的に稼働状態にします。

フェイルバックについては、「[2.8 パス切り替えによるフェイルオーバーとフェイルバック](#)」を参照してください。

一定の時間間隔で経路の状態を自動で確認できます (パスヘルスチェック)

ユーザーが指定した時間間隔で経路の状態を確認し、障害を検出します。これによって、ユーザーは経路の障害を把握し、必要な対処を取ることができます。

パスヘルスチェックについては、「[2.10 パスヘルスチェックによる障害検出](#)」を参照してください。

HDLM の機能

この章では、HDLM の機能について説明します。はじめに HDLM の管理対象、システム構成、および基本的な用語について説明します。そのあとで経路への負荷分散や経路切り替えなどの機能について説明します。

- 2.1 HDLM で管理するデバイス
- 2.2 システム構成
- 2.3 LU 構成
- 2.4 プログラム構成
- 2.5 HDLM ドライバと HDLM デバイスの位置づけ
- 2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル
- 2.7 ロードバランスによる負荷分散
- 2.8 パス切り替えによるフェイルオーバーとフェイルバック
- 2.9 間欠障害の監視（自動フェイルバック使用時の機能）
- 2.10 パスヘルスチェックによる障害検出
- 2.11 ダイナミック I/O パスコントロール機能による負荷分散
- 2.12 障害管理
- 2.13 監査ログの採取
- 2.14 Global Link Manager による HDLM の統合管理
- 2.15 クラスタ対応

2.1 HDLM で管理するデバイス

HDLM が管理できるデバイスと、管理できないデバイスを次に示します。HDLM が管理するデバイスを HDLM 管理対象デバイスと呼びます。

HDLM が管理できるデバイス

「1.1 HDLM とは」で示したストレージシステムの次のデバイスを管理します。

- SCSI デバイス
- ブートディスク

HDLM が管理できないデバイス

- 「1.1 HDLM とは」で示したストレージシステム以外の SCSI デバイス
- ディスク以外のデバイス（例：テープデバイス）
- 「1.1 HDLM とは」で示したストレージシステムのコマンドデバイス（例：日立製 RAID Manager のコマンドデバイス）

2.2 システム構成

HDLM は、SCSI ドライバを使用して、ホストとストレージシステムを結ぶ経路を制御します。ホストとストレージシステムは、FC-SAN または IP-SAN を使用して接続します。なお、FC-SAN と IP-SAN を組み合わせて同一環境に接続できません。

2.2.1 FC-SAN を使用するシステム構成

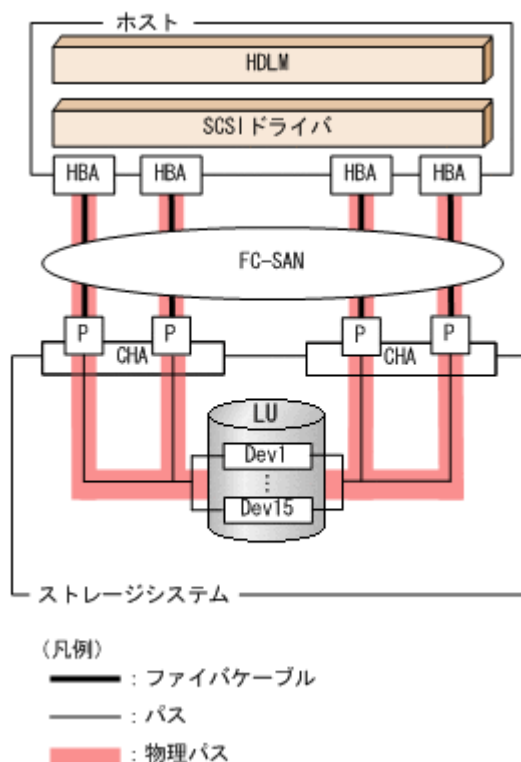
FC-SAN では、ホストとストレージシステムは、ファイバケーブルで接続します。ホスト側のケーブルの接続口はホストバスアダプタ（HBA）、ストレージシステム側のケーブルの接続口はチャンネルアダプタ（CHA）のポート（P）です。

ストレージシステムには、ホストからの入出力対象になる論理ユニット（LU）があります。LU は複数に分割して使用できます。分割してできるそれぞれの領域を Dev と呼びます。Dev は、パーティションに相当します。ホストと LU を結ぶ経路を物理パスと呼び、ホストと Dev を結ぶ経路をパスと呼びます。LU を複数の Dev に分割している場合、1 つの LU に設定されるパスの本数は、物理パスの本数に LU 内の Dev の数を掛けた数になります。

HDLM は、物理パスに ID を割り当てて、物理パス単位でパスを管理します。HDLM を操作する場合に、物理パスとパスの違いを意識する必要はないため、以降、物理パスとパスを区別しないでパスと呼ぶこともあります。HDLM が物理パスごとに割り当てる ID をパス管理 PATH_ID と呼びます。また、パスを管理対象物と呼ぶこともあります。

FC-SAN を使用する HDLM のシステム構成を次の図に示します。

図 2-1 FC-SAN を使用する HDLM のシステム構成



FC-SAN を使用する HDLM のシステム構成要素を次の表に示します。

表 2-1 FC-SAN を使用する HDLM のシステム構成要素

構成要素	説明
HBA	ホストバスアダプタです。ホスト側のケーブルの接続口です。
FC-SAN	ホストとストレージシステムがデータ転送に使用する、専用のネットワークです。
CHA	チャネルアダプタです。
P	CHA のポートです。ストレージシステム側のケーブルの接続口です。
LU	論理ユニット (ストレージシステム側で定義した、論理的なボリューム) です。ホストからの入出力対象となります。
Dev	LU を分割した場合にできる領域 (パーティション) です。
物理パス	ホストと LU を結ぶ経路です。
パス	ホストと LU 内の Dev を結ぶ経路です。

2.2.2 IP-SAN を使用するシステム構成

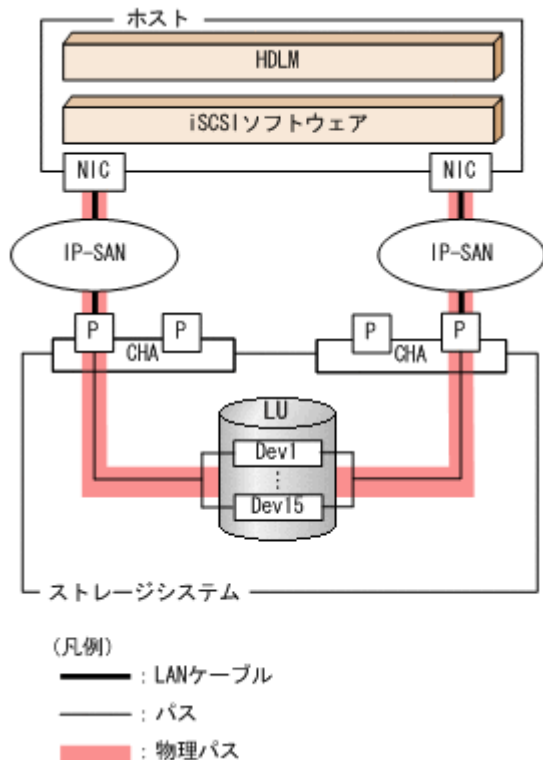
IP-SAN では、ホストとストレージシステムは、LAN ケーブルで接続します。ホスト側のケーブルの接続口はネットワークインタフェースカード (NIC) です。NIC を使用する場合は、ホストに iSCSI ソフトウェアがインストールされている必要があります。ストレージシステム側のケーブルの接続口は、iSCSI 接続に使用するチャネルアダプタ (CHA) のポート (P) です。

ストレージシステムには、ホストからの入出力対象になる論理ユニット (LU) があります。LU は複数に分割して使用できます。分割してできるそれぞれの領域を Dev と呼びます。Dev は、パーティションに相当します。ホストと LU を結ぶ経路を物理パスと呼び、ホストと Dev を結ぶ経路をパスと呼びます。LU を複数の Dev に分割している場合、1つの LU に設定されるパスの本数は、物理パスの本数に LU 内の Dev の数を掛けた数になります。

HDLM は、物理パスに ID を割り当てて、物理パス単位でパスを管理します。HDLM を操作する場合に、物理パスとパスの違いを意識する必要はないため、以降、物理パスとパスを区別しないでパスと呼ぶこともあります。HDLM が物理パスごとに割り当てる ID をパス管理 PATH_ID と呼びます。また、パスを管理対象物と呼ぶこともあります。

IP-SAN を使用する HDLM のシステム構成を次の図に示します。

図 2-2 IP-SAN を使用する HDLM のシステム構成



IP-SAN を使用する HDLM のシステム構成要素を次の表に示します。

表 2-2 IP-SAN を使用する HDLM のシステム構成要素

構成要素	説明
iSCSI ソフトウェア	iSCSI のイニシエーター機能を持つドライバソフトウェアです。
NIC	ネットワークインタフェースカードです。ホスト側のケーブルの接続口です。HDLM コマンドでは HBA と表示します。このマニュアルでは HBA と呼ぶことがあります。
IP-SAN	iSCSI 規格を用いてホストとストレージシステムを接続する、データ転送用のネットワークです。
CHA	チャネルアダプタです。
P	CHA のポートです。ストレージシステム側のケーブルの接続口です。
LU	論理ユニット (ストレージシステム側で定義した、論理的なボリューム) です。ホストからの入出力対象となります。
Dev	LU を分割した場合にできる領域 (パーティション) です。
物理パス	ホストと LU を結ぶ経路です。
パス	ホストと LU 内の Dev を結ぶ経路です。

HDLM がサポートする IP-SAN 環境

HDLM は、次に示す環境で IP-SAN を使用するシステム構成をサポートします。

- 適用 OS
 - Red Hat Enterprise Linux 5.6
 - Red Hat Enterprise Linux 5.6 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.7
 - Red Hat Enterprise Linux 5.7 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.8
 - Red Hat Enterprise Linux 5.8 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.9
 - Red Hat Enterprise Linux 5.9 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 6
 - SUSE LINUX Enterprise Server 11
- iSCSI ソフトウェア

OS に同梱されている、次の iSCSI イニシエーターをサポートします。

 - Red Hat Enterprise Linux 5.6, Red Hat Enterprise Linux 5.6 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.7, Red Hat Enterprise Linux 5.7 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.8, Red Hat Enterprise Linux 5.8 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.9, Red Hat Enterprise Linux 5.9 Advanced Platform, または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合
`iscsi-initiator-utils`
 - SUSE LINUX Enterprise Server 11 の場合
`open-iscsi`
- ストレージシステム

IP-SAN を適用できるストレージシステムは、Hitachi AMS2000 シリーズです。

IP-SAN 環境で使用する場合の制限事項

IP-SAN 環境で HDLM を使用する場合、次に示す制限事項があります。

- クラスタ構成での使用は、Red Hat Enterprise Linux 6 に RHCM を組み合わせた環境だけサポートします。
- `kdump` 機能は使用できません。

2.3 LU 構成

HDLM をインストールすると、ホスト側での LU 構成の認識が、次のように変わります。

HDLM をインストールする前

ホスト側では、パスごとに SCSI デバイスが接続されていると認識します。
つまり、ストレージシステム側の 1 つの LU が、パスと同じ数だけ存在するように見えます。

HDLM をインストールしたあと

ストレージシステム側の LU と 1 対 1 で対応する HDLM デバイスが、SCSI デバイスの上位に作成されます。*
このため、パスの数に関係なく、ストレージシステム側の 1 つの LU が、ホスト側でも 1 つに見えます。

注※

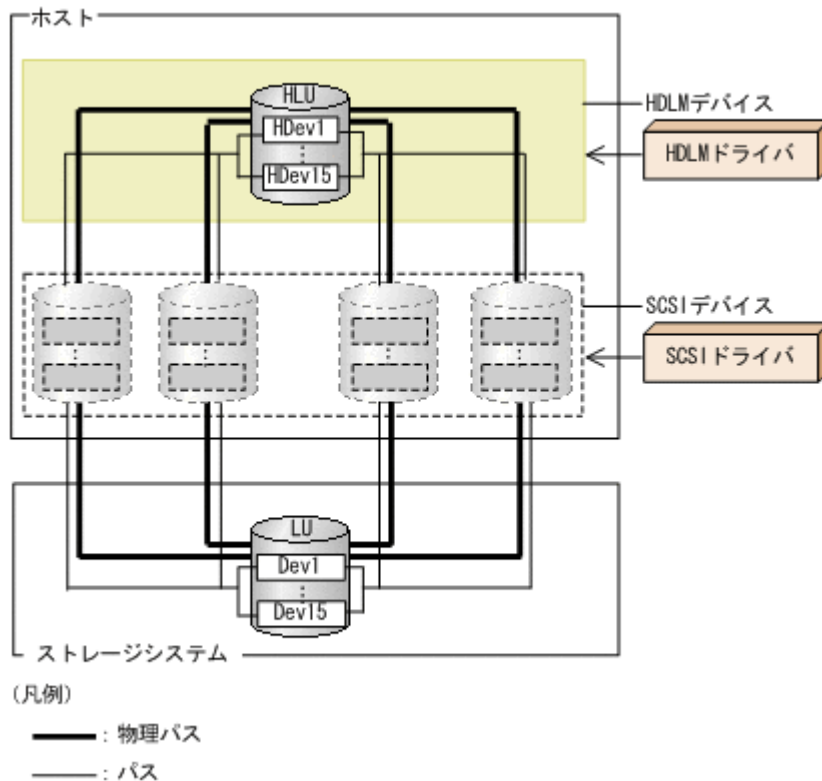
HDLM デバイスの論理デバイスファイルは、LU 全体を指すもの以外に、パーティション単位でも作成されます。

HDLM をインストールしたあとにホストが認識する LU をホスト LU (HLU) と呼びます。ストレージシステム側の LU 内の Dev (パーティション) に対応する、ホスト LU 内の領域をホストデバイス (HDev) と呼びます。

HDLM を使用したシステムでは、SCSI デバイスの論理デバイスファイルではなく、HDLM デバイスの論理デバイスファイルを使用して、目的の LU にアクセスします。

HDLM をインストールしたあとに、ホスト側で認識される LU の構成を次の図に示します。

図 2-3 HDLM をインストールしたあとにホスト側で認識される LU の構成



ホスト側で認識される要素を次の表に示します。

表 2-3 ホスト側で認識される要素

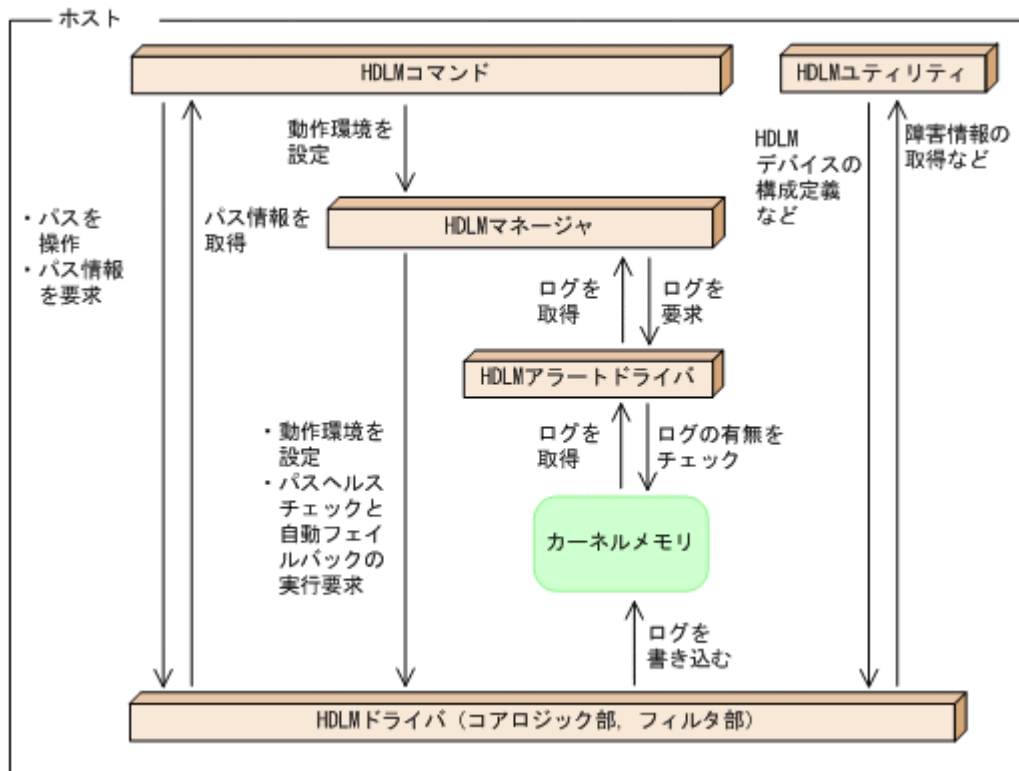
構成要素	説明
HLU	HDLM ドライバを通してホストが認識する LU です。ホスト LU と呼びます。バスの数に関係なく、ストレージシステム側の 1 つの LU に対して 1 つのホスト LU が認識されます。
HDev	HDLM ドライバを通してホストが認識する、LU 内の Dev (パーティション) です。ホストデバイスと呼びます。バスの数に関係なく、ストレージシステム側の 1 つの Dev に対して 1 つのホストデバイスが認識されます。

2.4 プログラム構成

HDLM は幾つかのプログラムを組み合わせて動作します。HDLM の操作には各プログラムが関わってくるため、それぞれの名称、位置づけ、役割を把握しておいてください。

HDLM のプログラム構成を次の図に示します。

図 2-4 HDLM のプログラム構成



各プログラムの役割を次の表に示します。

表 2-4 HDLM の各プログラムの役割

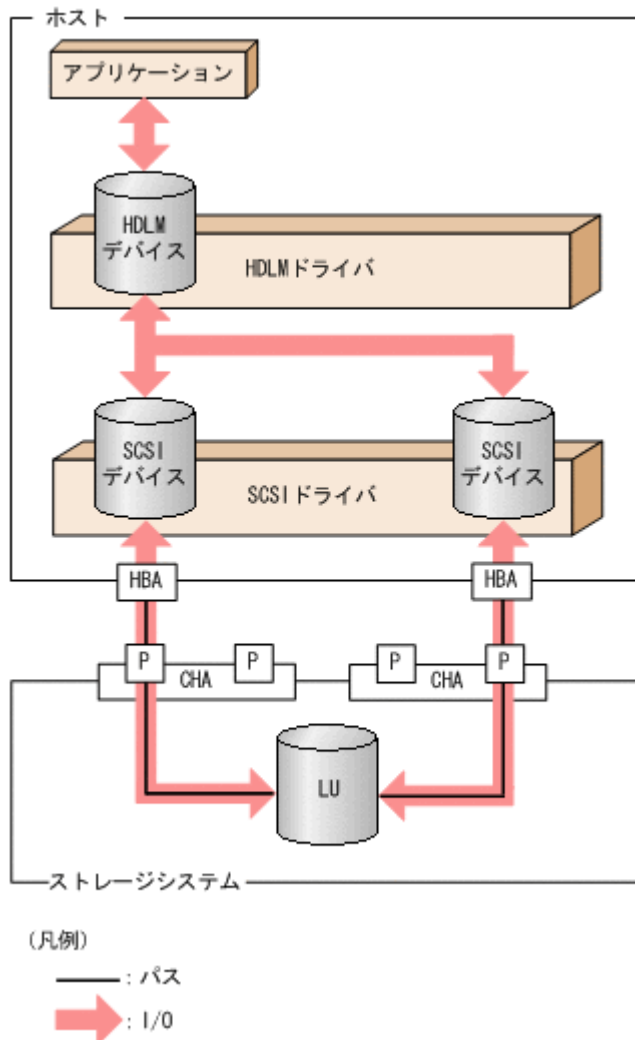
プログラム名	役割
HDLM コマンド	コマンドを使った次の機能を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> バスの管理 障害情報の表示 HDLM の動作環境の設定
HDLM ユティリティ	ユティリティを使った次の機能を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> 障害情報の収集 HDLM デバイスの構成定義 HDLM デバイスをブートディスクとして使用可能にする パーシステントリザーブの解除 HDLM のフィルタドライバに対する設定 HDLM のインストール後に実行する操作の一括処理 HDLM の情報を再登録する HDLM のインストール時に発生した障害情報の収集 HDLM のインストール
HDLM マネージャ	次の機能を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> HDLM の動作環境の設定 バスヘルスチェックと自動フェイルバックの実行要求 障害ログの採取

プログラム名	役割
HDLM アラートドライバ	HDLM ドライバが採取するログ情報を HDLM マネージャに通知します。ドライバ名は <code>sddlmdrv</code> です。
HDLM ドライバ	機能の制御、バスの管理、および障害検知をします。 HDLM ドライバの構成は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> コアロジック部 HDLM の基本機能を制御します。 フィルタ部 I/O を送受信します。ドライバ名は <code>sddlmdrv</code> です。

2.5 HDLM ドライバと HDLM デバイスの位置づけ

HDLM ドライバは SCSI ドライバの上位に位置します。ホストの各アプリケーションは、HDLM の生成する HDLM デバイス（論理デバイスファイル）を使用して、ストレージシステム内の LU にアクセスします。HDLM ドライバと HDLM デバイスの位置づけを次の図に示します。

図 2-5 HDLM ドライバと HDLM デバイスの位置づけ



2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル

HDLM デバイスの論理デバイスファイル名には、SCSI デバイスの論理デバイスファイル名とは別のファイル名が付けられます。HDLM デバイスの論理デバイスファイルをボリューム管理ソフトウェアなどのアプリケーションに設定すると、それらのアプリケーションから HDLM で管理する LU にアクセスできるようになります。

アプリケーションが LU にアクセスするときに使用する論理デバイスファイル名の例を、HDLM をインストールする前とインストールしたあとに分けて、次に示します。

表 2-5 アプリケーションから LU にアクセスするときに使用するデバイスの論理デバイスファイル名の例

ホストの状態	アプリケーションが使用する論理デバイスファイル名
HDLM をインストールする前	SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を使用します。 (例) sda sdb
HDLM をインストールしたあと	HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を使用します。 (例) sddlmaa

HDLM デバイスの論理デバイスファイル名は、次の形式で表されます。

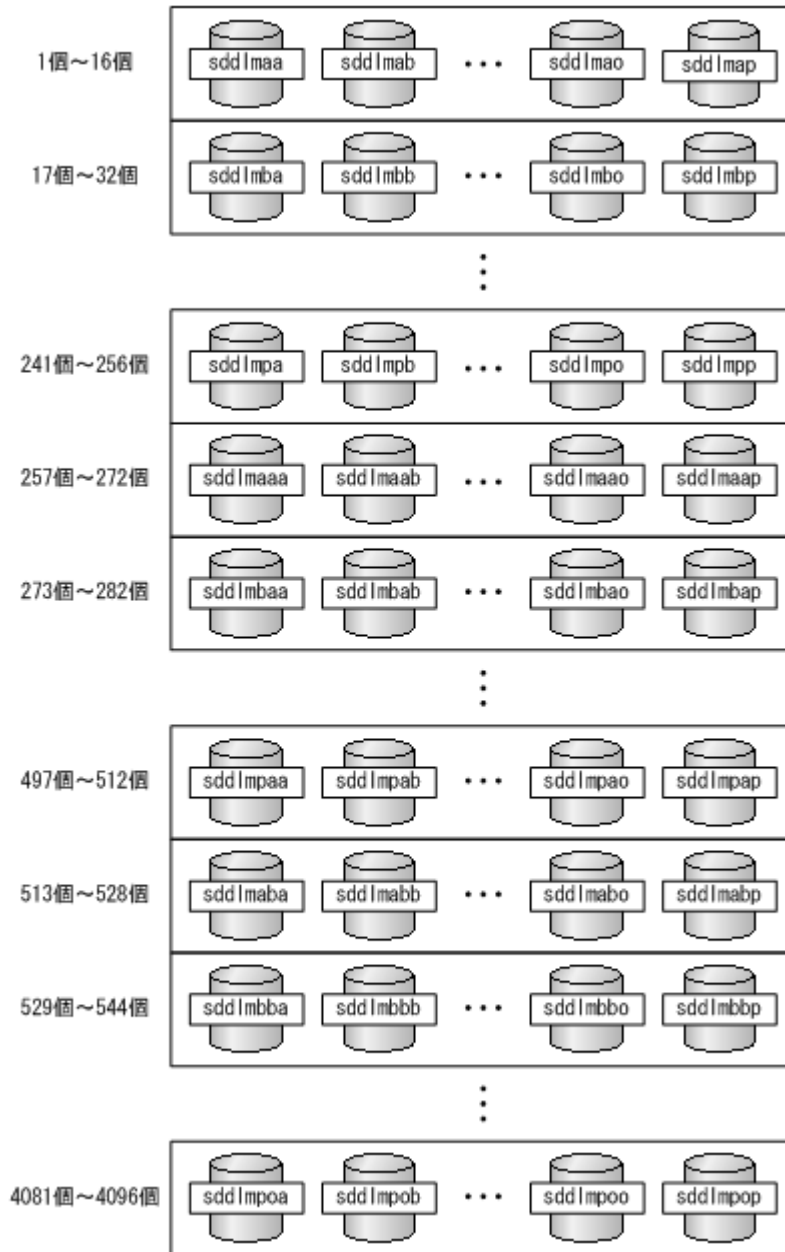
`/dev/sddl[aa-pop] [1-15]`

論理デバイスファイル名に付けられるアルファベットについて

- LU 数が 1 個目から 256 個目までは、2 文字のアルファベットが付けられます。1 文字目および 2 文字目ともに、値の範囲は「a」から「p」までとなります。
- LU 数が 257 個目以降からは、3 文字のアルファベットが付けられます。1 文字目および 3 文字目ともに、値の範囲は「a」から「p」までとなります。2 文字目の値は「a」から「o」までとなります。
- 1 文字目のアルファベットごとに、メジャー番号が 1 つ必要になります。

論理デバイスファイル名に付けられるアルファベットについて次の図に示します。

図 2-6 論理デバイスファイル名に付けられるアルファベットについて



論理デバイスファイル名に付けられる数値について

[1-15]は、該当する LU でのパーティション番号を表します。HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) の実行時に、1～15 のすべての論理デバイスファイルを作成します。

例えば、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名が sddlmaa1 の場合は、sddlmaa のパーティション 1 を表します。LU 全体を表す場合は、単に sddlmaa となります。なお、HDLM が作成するのはブロック型デバイスファイルです。このファイルが使用するブロックデバイス用のメジャー番号は、動的に選択されます。

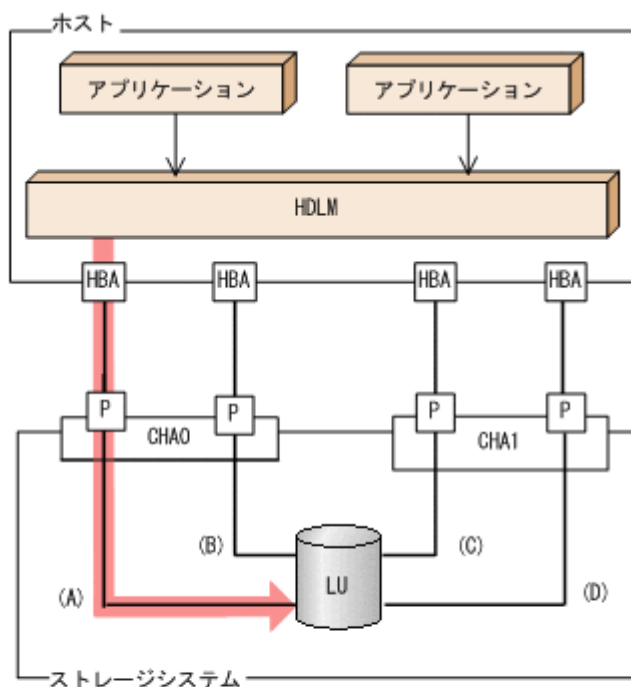
2.7 ロードバランスによる負荷分散

LU に対して複数のパスが接続されている構成の場合、複数のパスを使用して I/O を発行することで、パスに掛かる負荷を分散します。この機能をロードバランスと呼びます。この機能によって、1つのパスに負荷が偏ってシステム全体の性能が劣化することを防げます。

ただし、HDLM が管理する I/O には、パスごとに分配できる I/O と分配できない I/O があります。したがって、ロードバランス機能を使用してもパスごとに I/O が均等に割り振られない場合があります。

ロードバランス機能を使用していないときの I/O の流れを「図 2-7 ロードバランス機能を使用していない場合の I/O の流れ」に、ロードバランス機能を使用しているときの I/O の流れを「図 2-8 ロードバランス機能を使用している場合の I/O の流れ」に示します。どちらの図も、複数のアプリケーションから同一の LU に I/O が発行された場合の例です。

図 2-7 ロードバランス機能を使用していない場合の I/O の流れ

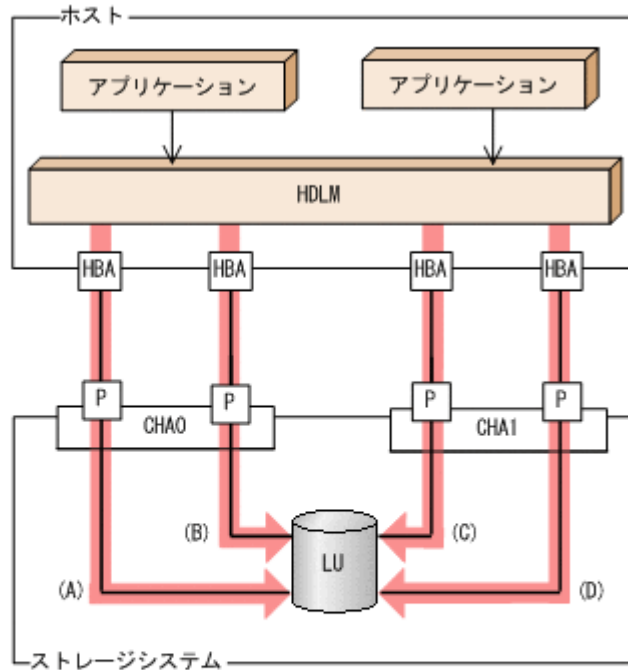


(凡例)

- : バス
- ➡ : I/Oが発行されるパス
- ➡ : I/O要求

ロードバランス機能を使用していない場合、(A)のパスに I/O が集中して発行されます。(A)のパスへの負荷がボトルネックとなり、システム全体の性能が劣化する場合があります。

図 2-8 ロードバランス機能を使用している場合の I/O の流れ



(凡例)

- : パス
- ➡ : I/Oが発行されるパス
- : I/O要求

ロードバランス機能を使用している場合、I/O は(A), (B), (C), (D)のパスへ分散して発行されます。1つのパスに負荷が偏ってシステム全体の性能が劣化することを防げます。

2.7.1 ロードバランスが適用されるパス

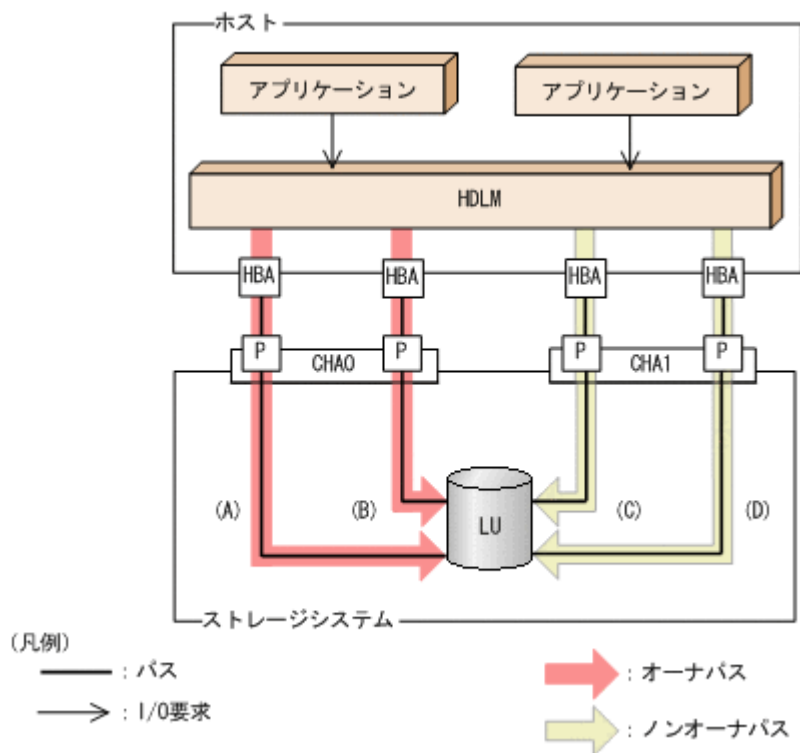
ロードバランス機能を使用したときに適用されるパスについて、ストレージシステムごとに説明します。

(1) SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合

ロードバランスはオーナパス同士、またはノンオーナパス同士で行われます。オーナパスとは、ストレージシステム側の LU のオーナコントローラに設定した、CHA を経由するパスです。オーナコントローラは LU ごとに異なるので、オーナパスも LU ごとに異なります。ノンオーナパスとは、オーナコントローラ以外の CHA (ノンオーナコントローラ) を経由するパスです。使用するパスは、オーナパス、ノンオーナパスの順で選択されます。システム全体の性能劣化を避けるために、オーナパスとノンオーナパスとの間でのロードバランスは行いません。障害などで、一部のオーナパスが使用できなくなった場合、残りの使用できるオーナパスの間でロードバランスが行われます。すべてのオーナパスが使用できなくなった場合、ノンオーナパスの間でロードバランスが行われま

「図 2-9 ロードバランス」の例で、LU のオーナコントローラが CHAO であるとしします。このとき、LU にアクセスする場合のロードバランスは、(A)と(B)のパスの間 (オーナパス同士)で行われます。障害などで、(A)のパスが使用できなくなった場合、(B)のパスだけで LU にアクセスします。(A)と(B)のパスが使用できなくなった場合、(C)と(D)のパスの間 (ノンオーナパス同士)で行われま

図 2-9 ロードバランス



(2) SANRISE9500V シリーズ, または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズ以外を使用している場合

すべてのパスがオーナパスになります。したがって、同じ LU にアクセスするすべてのパスの間でロードバランスが行われます。障害などで、一部のパスが使用できなくなった場合、残りの使用できるパスの間でロードバランスが行われます。

「図 2-8 ロードバランス機能を使用している場合の I/O の流れ」の例で、LU にアクセスする場合のロードバランスは、(A), (B), (C), (D) のパスの間で行われます。障害などで、どれかのパスが使用できなくなった場合、残りのパスの間でロードバランスが行われます。

注

対象となるストレージシステムを次に示します。

- SANRISE2000 シリーズ
- SANRISE9900V シリーズ
- Hitachi USP シリーズ
- Universal Storage Platform V/VVM シリーズ
- Virtual Storage Platform シリーズ
- Hitachi AMS2000 シリーズ※
- Hitachi SMS シリーズ※
- HUS100 シリーズ※
- HUS VM

注※ ダイナミック I/O パスコントロール機能を無効にしているときに対象になります。

2.7.2 ロードバランスのアルゴリズム

ロードバランスのアルゴリズムには、次の6つがあります。

- ラウンドロビン
- 拡張ラウンドロビン
- 最少 I/O 数
- 拡張最少 I/O 数
- 最少ブロック数
- 拡張最少ブロック数

上記のアルゴリズムは、処理方式によって2つに分類されます。それぞれのアルゴリズムについて説明します。

ラウンドロビン、最少 I/O 数、最少ブロック数

これらのアルゴリズムは、一定回数の I/O で、使用するパスが選択されます。使用するパスはそれぞれ次のように決定されます。

- ラウンドロビン：
接続しているすべてのパスが順番に選択されます。
- 最少 I/O 数：
接続しているすべてのパスのうち、処理中となっている I/O 数が最も少ないパスが選択されます。
- 最少ブロック数：
接続しているすべてのパスのうち、処理中となっている I/O のブロック数が最も少ないパスが選択されます。

拡張ラウンドロビン、拡張最少 I/O 数、拡張最少ブロック数

これらのアルゴリズムは、発行する I/O が1つ前に発行した I/O と連続性があるかどうか（シーケンシャルな I/O かどうか）を判別して、割り振るパスが決定されます。

1つ前に発行した I/O と連続性がある場合、1つ前の I/O を割り振ったパスが使用されます。ただし、発行した I/O 数が一定数に達したときは、次のパスに切り替わります。

1つ前に発行した I/O と連続性がない場合、I/O ごとに使用するパスが選択されます。

- 拡張ラウンドロビン：
接続しているすべてのパスが順番に選択されます。
- 拡張最少 I/O 数：
接続しているすべてのパスのうち、処理中となっている I/O 数が最も少ないパスが選択されます。
- 拡張最少ブロック数：
接続しているすべてのパスのうち、処理中となっている I/O のブロック数が最も少ないパスが選択されます。

ロードバランスのアルゴリズムの特長を次の表に示します。

表 2-6 ロードバランスのアルゴリズムの特長

アルゴリズムの種別	アルゴリズムの特長
<ul style="list-style-type: none">• ラウンドロビン※• 最少 I/O 数• 最少ブロック数	連続性がない I/O を多く発行する（シーケンシャルな I/O が少ない）場合に有効です。

アルゴリズムの種別	アルゴリズムの特長
<ul style="list-style-type: none"> ・ 拡張ラウンドロビン ・ 拡張最少 I/O 数 ・ 拡張最少ブロック数 	1つ前の I/O と連続性がある I/O でその I/O が Read 要求の場合、ストレージシステムのキャッシュ機能によって読み込み速度の向上が期待できます。連続性がある I/O を多く発行する（シーケンシャルな I/O が多い）場合に有効です。

注※

HDLM の管理する I/O には、パスごとに分配ができるものとできないものがあります。したがって、ラウンドロビンを設定しても、パスごとに I/O が均等に割り振られない場合がありますのでご注意ください。

HDLM を新規にインストールしたときには、拡張最少 I/O 数がデフォルト値として設定されます。アップグレードインストールしたときには従来の設定が引き継がれます。

使用しているシステム環境で、データアクセスの傾向に適したロードバランスのアルゴリズムを選択してください。データアクセスの傾向に特徴が見られない場合は、拡張最少 I/O 数の適用を推奨します。

ロードバランス機能は、HDLM コマンドの set オペレーションで指定します。set オペレーションについては、「[6.6 set 動作環境を設定する](#)」を参照してください。

2.8 パス切り替えによるフェイルオーバーとフェイルバック

LU に対して複数のパスが接続されている構成の場合、使用中のパスに障害が発生したときに、残りの正常なパスに切り替えてシステムの運用を継続できます。この機能をフェイルオーバーと呼びます。

また、障害が発生したパスが障害から回復した場合、使用するパスを、障害から回復したパスに切り替えられます。この機能をフェイルバックと呼びます。

次の 2 種類の方法でフェイルオーバー、およびフェイルバックができます。

- ・ 自動パス切り替え
- ・ 手動パス切り替え

フェイルオーバー、およびフェイルバックは、パスの状態を変更してパスを切り替える機能です。パスの状態は、稼働状態と閉塞状態の 2 つに大別できます。稼働状態とは、パスに対して I/O を正常に発行できる状態です。閉塞状態とは、次に示す理由で、パスに対して I/O を発行できない状態です。

- ・ パスに障害が発生している
- ・ ユーザが HDLM コマンドの offline オペレーションを実行した
offline オペレーションについては、「[6.4 offline パスを閉塞状態にする](#)」を参照してください。

パスの状態と状態遷移については、「[2.8.3 パスの状態遷移](#)」を参照してください。

2.8.1 自動パス切り替え

自動的にパスを切り替える機能である、自動フェイルオーバーと自動フェイルバックについて説明します。

(1) 自動フェイルオーバー

使用中のパスで障害を検知した場合、そのパスを閉塞状態にして、ほかの稼働状態のパスを使用してシステムの運用を続けることができます。これを、自動フェイルオーバーと呼びます。自動フェイルオーバーの対象となる障害は、パスに発生した次のレベルの障害です。

Critical

致命的で、システム停止の危険がある障害

Error

危険度は高いが、フェイルオーバーなどで回避できる障害

障害レベルについては、「2.12.2 障害情報のフィルタリング」を参照してください。

SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合、切り替え先のパスは、同じ LU にアクセスするオーナパス、ノンオーナパスの順で選択されます。

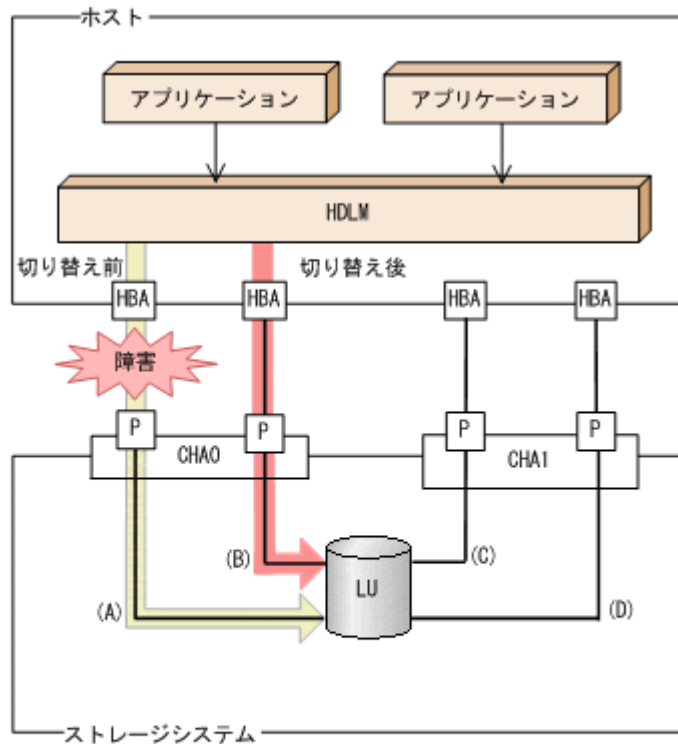
例えば、「[図 2-10 パスの切り替え](#)」で LU のオーナコントローラが CHA0 であるとし、(A)のパスだけで LU にアクセスしている場合、使用中のパスが閉塞状態になったあとは、(B)のパスが第 1 候補、(C)または(D)のパスが第 2 候補の切り替え先になります。

SANRISE2000 シリーズ、SANRISE9900V シリーズ、Hitachi USP シリーズ、Universal Storage Platform V/VM シリーズ、Virtual Storage Platform シリーズ、Hitachi AMS2000 シリーズ※、Hitachi SMS シリーズ※、HUS100 シリーズ※、または HUS VM を使用している場合、すべてのパスがオーナパスです。したがって、同じ LU にアクセスするすべてのパスが同時に切り替え先の候補になります。例えば、「[図 2-10 パスの切り替え](#)」で(A)のパスだけで LU にアクセスしている場合、使用中のパスが閉塞状態になったあとは、(B)、(C)、(D)のパスのどれかが切り替え先になります。

注※

ダイナミック I/O パスコントロール機能を無効にしているときに対象になります。

図 2-10 パスの切り替え



(凡例)

— : パス

→ : I/O要求

→ : 切り替え前のパス

→ : 切り替え後のパス

(2) 自動フェイルバック

使用中のパスが障害で閉塞状態になった場合、障害回復後に自動的に稼働状態にできます。これを、自動フェイルバックと呼びます。この機能を使用した場合、HDLM は定期的に障害回復を監視します。

SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合、使用するパスは、稼働状態のオーナパス、ノンオーナパスの順で選択されます。したがって、ノンオーナパスを使用しているときに、オーナパスの障害が回復して、自動的に稼働状態になると、使用するパスがオーナパスに切り替わります。

SANRISE2000 シリーズ、SANRISE9900V シリーズ、Hitachi USP シリーズ、Universal Storage Platform V/VM シリーズ、Virtual Storage Platform シリーズ、Hitachi AMS2000 シリーズ^{※1}、Hitachi SMS シリーズ^{※1}、HUS100 シリーズ^{※1}、または HUS VM を使用している場合、すべてのパスがオーナパスです。したがって、ほかのパスの障害が回復して、自動的に稼働状態になっても、使用するパスは切り替わりません。

なお、パスに間欠障害^{※2}が発生している場合、自動フェイルバックの設定をしていると、閉塞状態と稼働状態を繰り返すため、I/O の性能が低下することがあります。その場合は、間欠障害監視を設定して、間欠障害と見なされたパスを自動フェイルバックの対象外にすることをお勧めします。

自動フェイルバック機能、および間欠障害監視は、HDLM コマンドの set オペレーションで指定します。set オペレーションについては、「6.6 set 動作環境を設定する」を参照してください。

注^{※1}

ダイナミック I/O パスコントロール機能を無効にしているときに対象になります。

注※2

間欠障害とは、ケーブルの接触不良などが原因で、断続的に発生する障害です。

2.8.2 手動パス切り替え

パスを手動で稼働状態または閉塞状態にすることで、パスを切り替えられます。手動で一時的にパスを切り替えることで、システムのメンテナンスなどができます。

次に示す方法で、パスを手動で稼働状態または閉塞状態にできます。

- HDLM コマンドの online または offline オペレーションを実行する
online については「[6.5 online パスを稼働状態にする](#)」を、offline については「[6.4 offline パスを閉塞状態にする](#)」を参照してください。

ただし、ある LU に対する最後の稼働状態のパスは、手動で閉塞状態に切り替えられません。また、障害が復旧していないパスについては、稼働状態に切り替えられません。

切り替え先のパスについては、自動パス切り替えの場合と同じです。

SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合、オーナーパスが第 1 候補、ノンオーナーパスが第 2 候補の切り替え先になります。SANRISE2000 シリーズ、SANRISE9900V シリーズ、Hitachi USP シリーズ、Universal Storage Platform V/VM シリーズ、Virtual Storage Platform シリーズ、Hitachi AMS2000 シリーズ※、Hitachi SMS シリーズ※、HUS100 シリーズ※、または HUS VM を使用している場合、同じ LU にアクセスするすべてのパスが同時に切り替え先の候補になります。

閉塞状態にしたパスは、online オペレーションを実行することで稼働状態にできます。online オペレーションについては、「[6.5 online パスを稼働状態にする](#)」を参照してください。パスの状態を稼働状態に変更したあとに使用するパスは、自動パス切り替えと同じ仕組みで選択されます。

SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合、使用するパスは、稼働状態のオーナーパス、ノンオーナーパスの順で選択されます。SANRISE2000 シリーズ、SANRISE9900V シリーズ、Hitachi USP シリーズ、Universal Storage Platform V/VM シリーズ、Virtual Storage Platform シリーズ、Hitachi AMS2000 シリーズ※、Hitachi SMS シリーズ※、HUS100 シリーズ※、または HUS VM を使用している場合、すべてのパスがオーナーパスのためパスの状態を稼働状態に変更したあとも、使用するパスは切り替わりません。

注※

ダイナミック I/O パスコントロール機能を無効にしているときに対象になります。

2.8.3 パスの状態遷移

「[2.8 パス切り替えによるフェイルオーバーとフェイルバック](#)」で説明した稼働状態と閉塞状態は、さらにそれぞれ 2 つの状態に分けられます。4 つの状態を、稼働状態に含まれるものと閉塞状態に含まれるものに分けて説明します。

(1) 稼働状態

稼働状態に含まれるものを次に示します。

- Online 状態
正常に I/O を発行できます。
- Online(E)状態
パスに障害が発生しています。また、同じ LU にアクセスするほかのパスのうちに、Online 状態のパスがありません。

1つのLUにアクセスするパスのうち1つは Online 状態のパスがなくなった場合、パスの1つは Online(E)状態になります。1つのLUにアクセスするパスがすべて閉塞状態になることはありません。これは、LUにアクセスできなくなることを防ぐためです。Online(E)の「E」は、エラー属性を示します。エラー属性とは、パスに障害が発生していることを示すものです。

(2) 閉塞状態

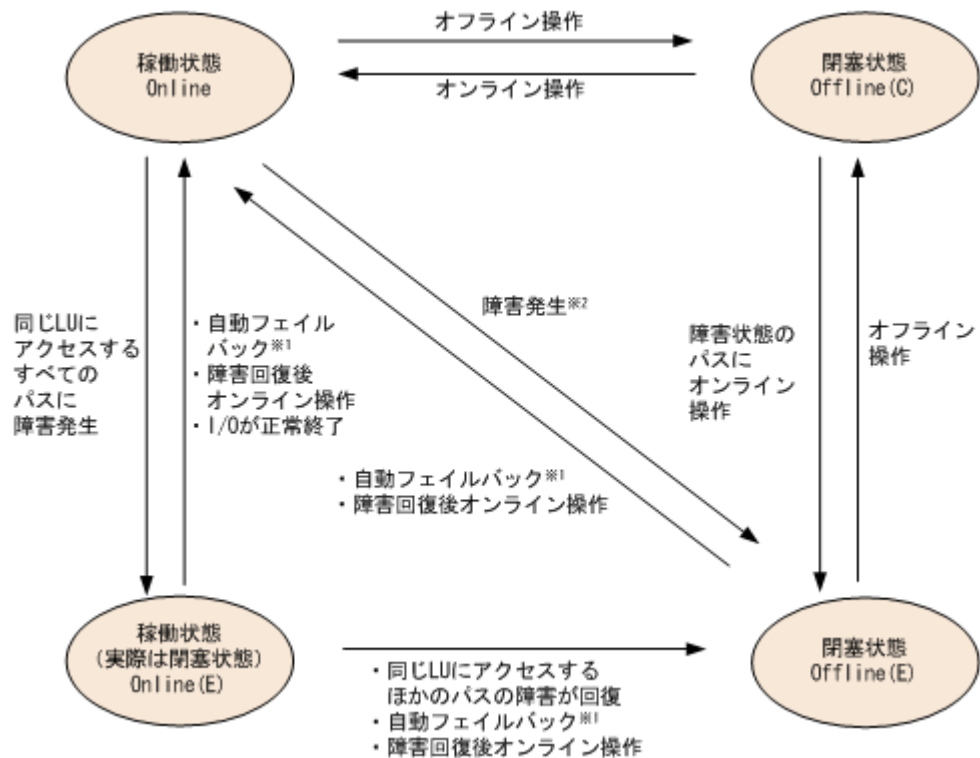
閉塞状態に含まれるものを次に示します。

- Offline(C)状態
offline オペレーションの実行によって、パスが閉塞状態になっています。offline オペレーションについては、「6.4 offline パスを閉塞状態にする」を参照してください。
Offline(C)の「C」は、コマンド属性を示します。コマンド属性とは、コマンドの操作によって、パスが閉塞状態になっていることを示すものです。
- Offline(E)状態
障害が発生したため、パスが閉塞状態になっています。
Offline(E)の「E」は、エラー属性を示します。エラー属性とは、パスに障害が発生していることを示すものです。

(3) パスの状態遷移

パスの状態遷移を次の図に示します。

図 2-11 パスの状態遷移



(凡例)

オンライン操作：HDLM コマンドの online オペレーションの実行

オフライン操作：HDLM コマンドの offline オペレーションの実行

注※1

次の条件をすべて満たす場合は、間欠障害が発生していると思なされたパスでも自動フェイルバックの対象になります。

- LU に接続するすべてのパスが **Online(E)**、**Offline(E)**、または **Offline(C)** となっている。
- LU に接続するすべてのパスに間欠障害が発生したと思なされている。
- LU に I/O が連続して発行され、I/O が成功している。

注※2

同じ LU にアクセスするほかのパスの中に、**Online** または **Offline(E)** のパスがある場合です。

各 LU に対する最後の稼働状態のパスは、offline オペレーションでは閉塞状態にできません。これは、LU にアクセスできなくなることを防ぐためです。offline オペレーションについては、「[6.4 offline パスを閉塞状態にする](#)」を参照してください。1 つの LU にアクセスするパスの中に、稼働状態 (**Online**) のパスがなくなった場合、パスの 1 つが **Online(E)** になります。自動フェイルバック機能を使用している場合、パスが障害から回復すると、そのパスは自動的に稼働状態 (**Online**) になります。

ただし、間欠障害を監視している場合、間欠障害と思なされたパスは、障害から回復しても自動的に稼働状態 (**Online**) になりません。この場合、パスを手動で稼働状態 (**Online**) にしてください。

注意事項

HDLM コマンドを使用してパスのオフライン操作を行った直後にパスに障害が発生すると、一度 **Offline(C)** となった状態が **Offline(E)** に遷移する場合があります。オフライン操作を実行した場合は、一定時間 (1 分程度) 待ってから再度 HDLM コマンドを使用してパスの状態を確認し、**Offline(C)** になっていることを確認してください。**Offline(E)** になっている場合は、再度オフライン操作を実行してください。

2.9 間欠障害の監視（自動フェイルバック使用時の機能）

間欠障害とは、ケーブルの接触不良などが原因で断続的に障害が発生する状態です。自動フェイルバックを使用しているときに間欠障害が発生すると、自動フェイルバックが繰り返し行われて I/O 性能が低下することがあります。このような現象を防ぐため、HDLM では間欠障害が発生しているパスを自動フェイルバックの対象から自動的に外すことができます。これを間欠障害監視といいます。

自動フェイルバックを使用する場合は、間欠障害監視をあわせて使用することをお勧めします。

間欠障害監視を使用すると、一定の時間内に一定の回数の障害が発生したパスは、間欠障害が発生していると思なされます。間欠障害が発生したと思なされたパスは、ユーザがオンライン操作を実行するまで障害状態のまま、自動フェイルバックは行われません。この状態を自動フェイルバック対象外と呼びます。

2.9.1 間欠障害の確認

パスが間欠障害と思なされているかどうかは、HDLM コマンドの `view` オペレーションの実行結果で確認できます。

`view` オペレーションについては、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

2.9.2 間欠障害監視の設定

間欠障害監視を設定する場合、まず有効にするか無効にするかを設定します。有効にした場合、間欠障害かどうかを判定するための条件（障害監視時間と障害発生回数）を指定できます。指定した監視時間内に、指定した回数の障害が発生すると、HDLMはそのパスに間欠障害が発生していると思なします。例えば、障害監視時間に30分、障害発生回数に3を指定すると、30分以内に3回以上障害が発生したパスが、間欠障害が発生していると思なされます。

間欠障害監視は、HDLM コマンドの `set` オペレーションで設定できます。

間欠障害監視は、自動フェイルバックが有効に設定されている場合にだけ設定できます。設定できる値は自動フェイルバックの設定値に依存します。設定方法については、「6.6 `set` 動作環境を設定する」を参照してください。

2.9.3 間欠障害監視の動作

間欠障害の監視は、パスごとに実施されます。間欠障害監視は、自動フェイルバックによってパスが障害から回復した時点で開始されます。

ここでは、間欠障害監視の動作を、次の3つの場合に分けて説明します。

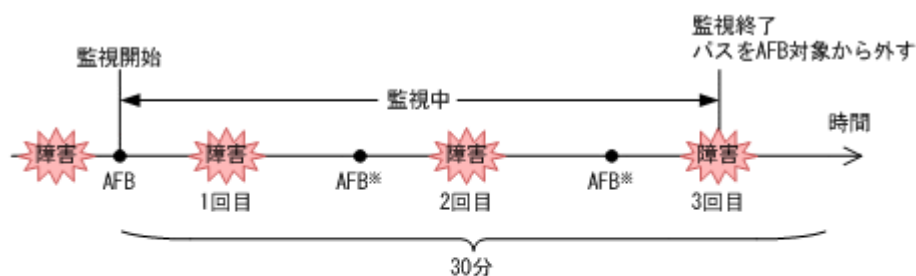
- ・ 間欠障害が発生していると思なす場合
- ・ 間欠障害が発生していないと思なす場合
- ・ 間欠障害の監視中に間欠障害と思なす条件を変更した場合

(1) 間欠障害が発生していると思なす場合

指定した監視時間内に指定した回数の障害がパスに発生した場合、間欠障害が発生していると思なし、該当するパスの監視を終了します。そして、そのパスを自動フェイルバックの対象から外します。自動フェイルバックの対象から外されたパスは、ユーザによるオンライン操作が成功するまで、障害状態のままです。ただし、一定の条件を満たす場合は自動フェイルバックの対象となり、自動的に稼働状態（Online）になります。条件については、「図 2-11 パスの状態遷移」を参照してください。

パスに間欠障害が発生していると思なす場合の間欠障害監視の動作を次の図に示します。30分以内に3回以上障害が発生した場合に間欠障害と思なす設定をしているときの例です。時間を示す矢印上に、1つのパスに発生するイベントを記載しています。

図 2-12 パスに間欠障害が発生していると思なす場合の動作



(凡例)

AFB : 自動フェイルバックによってパスが障害状態から稼働状態に回復

注※

ユーザによるオンライン操作も含まれます。

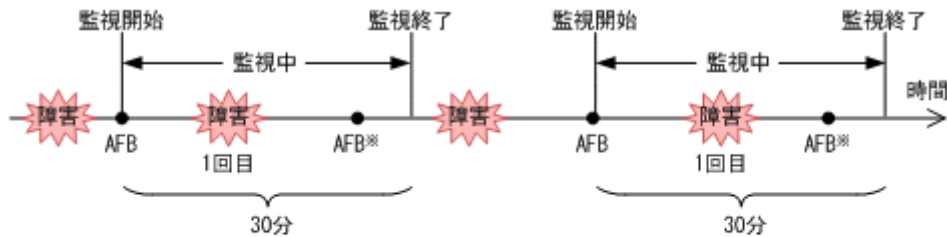
(2) 間欠障害が発生していないと見なす場合

指定した監視時間内に指定した回数の障害がパスに発生しない場合、間欠障害は発生していないと見なします。その場合、監視時間が終了した段階で該当するパスの監視を終了し、カウントした障害発生回数を0に初期化します。そのあとでパスに障害が発生し、自動フェイルバックによってパスが障害から回復した場合、その時点から監視を再開します。

長い間隔を置いて発生する障害を間欠障害と見なすためには、障害監視時間を延ばすか、または障害発生回数を減らしてください。

パスに間欠障害が発生していないと見なす場合の間欠障害監視の動作を次の図に示します。30分以内に3回以上障害が発生した場合に間欠障害と見なす設定をしているときの例です。時間を示す矢印上に、1つのパスに発生するイベントを記載しています。

図 2-13 パスに間欠障害が発生していないと見なす場合の動作



(凡例)

AFB : 自動フェイルバックによってパスが障害状態から稼働状態に回復

注※

ユーザによるオンライン操作も含まれます。

障害発生回数は、障害が発生するとカウントされます。通常は「図 2-13 パスに間欠障害が発生していないと見なす場合の動作」に示すように、間欠障害監視中に自動フェイルバックによって稼働状態に回復してから、障害が発生するごとに障害発生回数がカウントされます。ただし、パスが切断されているなどの理由によって、LUに接続するすべてのパスがOffline(E)、Online(E)、またはOffline(C)になっている場合は、自動フェイルバックによって稼働状態に回復しません。このような状態のLUへI/Oを継続して発行すると、パスが稼働状態にならなくても障害発生回数がカウントされることがあります。障害発生回数が指定値に達すると、パスに間欠障害が発生したと見なされます。その場合は、障害の原因を取り除いてから手動でオンライン操作をしてください。

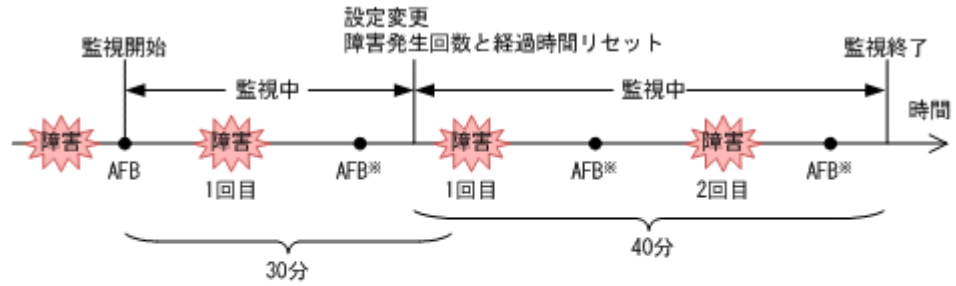
(3) 間欠障害の監視中に間欠障害と見なす条件を変更した場合

間欠障害の監視中に、間欠障害と見なす条件（障害監視時間または障害発生回数）を変更した場合、それまでにカウントされた障害発生回数、および監視を開始してから経過した時間が0に初期化されます。監視は終了されないで、変更した時点から、変更後の条件での監視が開始されます。

監視時間外に条件を変更した場合、次に自動フェイルバックによってパスが障害から回復した時点で、変更後の条件で監視が開始されます。

間欠障害の監視中に、間欠障害と見なす条件を変更した場合の間欠障害監視の動作を次の図に示します。間欠障害と見なす障害の発生条件を、「30分以内に3回以上」から、「40分以内に3回以上」に変更した場合の例です。時間を示す矢印上に、1つのパスに発生するイベントを記載しています。

図 2-14 間欠障害の監視中に間欠障害と見なす条件を変更した場合の動作



(凡例)

AFB : 自動フェイルバックによってパスが障害状態から稼働状態に回復

注※

ユーザによるオンライン操作も含まれます。

2.9.4 ユーザの操作による間欠障害情報の変化

間欠障害の監視中にカウントされている障害発生回数、監視を開始してから経過した時間、および間欠障害と見なされている（自動フェイルバック対象外）かどうかの情報は、ユーザが間欠障害の設定値を変更したり、パスの状態を変更したりすると、初期化されることがあります。ユーザがこれらの操作をしたときに、障害発生回数、監視を開始してから経過時間、および自動フェイルバック対象外の情報が初期化されるかどうかを、「表 2-7 ユーザの操作による、間欠障害情報の変化」に示します。

パスが間欠障害監視中かどうかは、HDLM コマンドの `view -path` オペレーションで `-iem` パラメータを指定することによって表示される IEP 項目で判断できます。この項目に 0 以上の数値が表示された場合、間欠障害監視中です。

表 2-7 ユーザの操作による、間欠障害情報の変化

ユーザの操作		障害発生回数および監視開始後の経過時間	自動フェイルバック対象外の情報
間欠障害監視の設定変更	「off」に設定	初期化	初期化※1
	間欠障害監視中に、間欠障害と見なす条件を変更	初期化※2	引き継ぎ
	間欠障害監視中に、set オペレーションで再度「on」に設定（条件変更なし）	初期化※2	引き継ぎ
	間欠障害監視時間外に、間欠障害と見なす条件を変更	－（カウントされていない）	引き継ぎ
自動フェイルバックの設定変更	「off」に設定	初期化	初期化
パスの状態変更	パスを Offline(C)に設定	初期化	初期化
	間欠障害監視時間外に、パスを Online に設定	－（カウントされていない）	引き継ぎ
	間欠障害監視中に、パスを Online に設定	引き継ぎ	－（自動フェイルバック対象外のパスは監視対象外）
HDLM マネージャ再起動		初期化※3	引き継ぎ
ホスト再起動		初期化	初期化

(凡例)

— : 該当なし

注※1

間欠障害監視を無効にすると、自動フェイルバック対象外の情報は初期化されます。間欠障害監視を無効にする場合に、自動フェイルバック対象外のパスを自動フェイルバック対象外のままとしたいときは、パスを閉塞状態（Offline(C)）にしてください。

注※2

障害発生回数、および監視を開始してから経過した時間が「0」に初期化され、変更後の監視条件に従い、設定を変更した時点から改めて監視が開始されます。

注※3

障害発生回数、および監視を開始してから経過した時間が「0」に初期化され、HDLM マネージャが起動した時点から改めて監視が開始されます。

2.10 パスヘルスチェックによる障害検出

HDLM は、I/O が行われていないパスに対して、パスの状態を一定間隔で確認して、障害を検出できます。この機能をパスヘルスチェックと呼びます。

通常、パスの状態は I/O が発行されたときにチェックされるため、I/O が発行されなければ障害を検出できません。しかし、パスヘルスチェック機能を使用すると、I/O の発行の有無に関係なく、稼働状態（Online）のパスが一定間隔でチェックされます。障害発生時はパスの状態が Offline(E)、または Online(E)に変更されるため、ユーザは HDLM コマンドの view オペレーションでパスの障害を確認できます。

例えば、クラスタ構成の待機系ホストのパスや、ノンオーナパス（SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズのストレージシステムにアクセスするパスの一部）には、通常 I/O が発行されません。最新のパス状態を基にして、パスの切り替え先を選択できるように、待機系ホストやノンオーナパスに接続しているホストでは、パスヘルスチェック機能を使用して障害を検出することをお勧めします。

パスヘルスチェック機能は、HDLM コマンドの set オペレーションで設定できます。set オペレーションについては「6.6 set 動作環境を設定する」を参照してください。

2.11 ダイナミック I/O パスコントロール機能による負荷分散

ダイナミックロードバランスコントローラ機能を備えたストレージシステムに対し、HDLM のダイナミック I/O パスコントロール機能を適用することで、HDLM のロードバランスによる負荷分散の効果を高めることができます。

2.11.1 ダイナミックロードバランスコントローラ機能とは

複数台のホストと 1 台のストレージシステムを接続したシステム構成では、ストレージシステム内のコントローラに I/O 処理の負荷が集中しやすくなり、システム全体のスループット性能が低下する要因となります。ダイナミックロードバランスコントローラ機能は、こうしたコントローラの負荷状態を判断してストレージシステムの性能低下を防ぎます。

HDLM がサポートしている、ダイナミックロードバランスコントローラ機能を持つストレージシステムを次に示します。

- Hitachi AMS2000 シリーズ※
- Hitachi SMS シリーズ※
- HUS100 シリーズ

注※

ダイナミックロードバランスコントローラ機能を使用するためには、導入するマイクロプログラムのバージョンに制限があります。詳細は HDLM のソフトウェア添付資料を確認してください。

2.11.2 ダイナミック I/O パスコントロール機能について

ダイナミックロードバランスコントローラ機能を備えたストレージシステムで、HDLM のロードバランスによる性能効果を得るにはダイナミック I/O パスコントロール機能を有効にしてください。

ダイナミック I/O パスコントロール機能を有効にすると、ダイナミックロードバランスコントローラ機能によって選択されているコントローラをオーナコントローラとして認識します。それ以外のコントローラをノンオーナコントローラとして認識します。

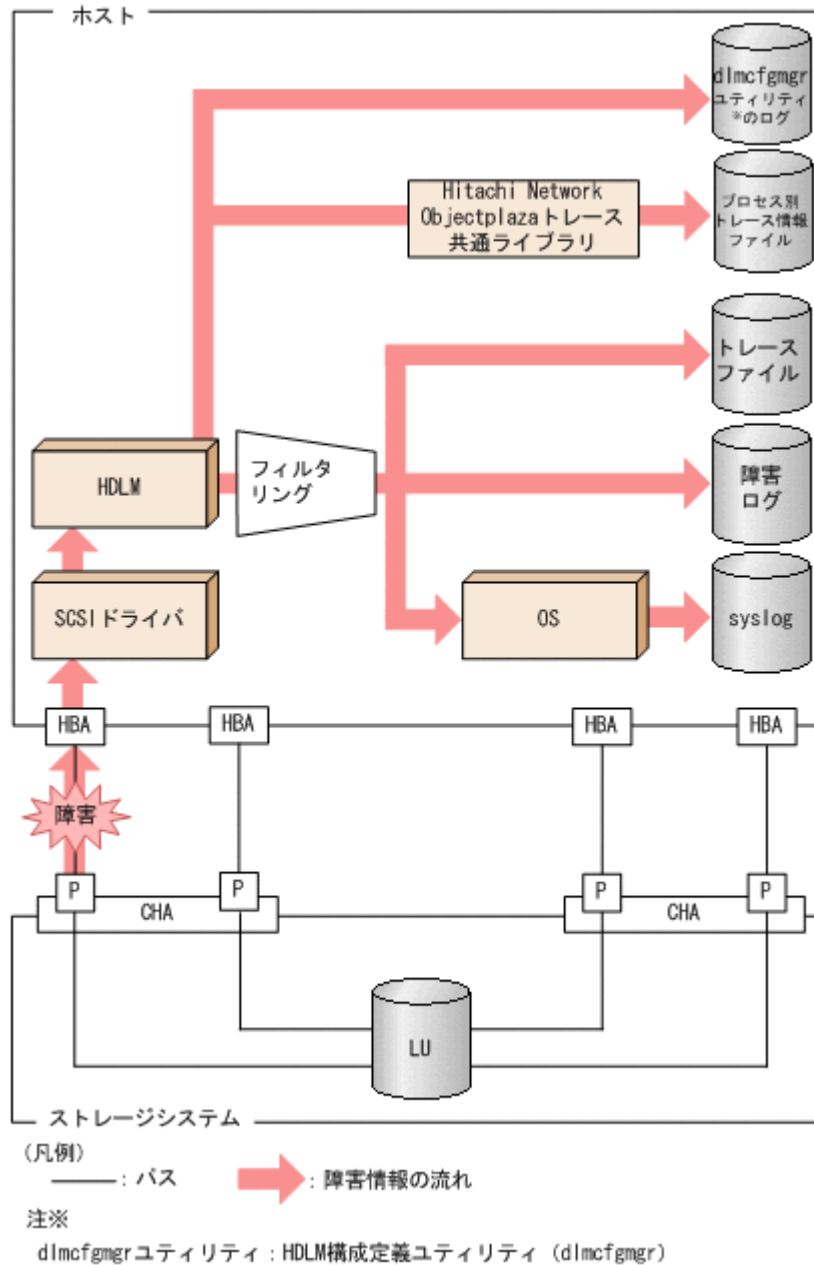
ダイナミック I/O パスコントロール機能は、ホスト単位、接続先のストレージシステム、および LU 単位で有効または無効を設定できます。

ダイナミック I/O パスコントロール機能は、HDLM コマンドの `set` オペレーションで指定します。`set` オペレーションについては、「[6.6 set 動作環境を設定する](#)」を参照してください。

2.12 障害管理

HDLM では、障害に対処するための情報をログファイルに採取します。障害情報は障害のレベルごとにフィルタリングして採取できます。HDLM が稼働するホストで障害情報を採取するときのデータの流れを次の図に示します。

図 2-15 障害情報を採取するときのデータの流れ



SCSI ドライバなどの HDLM の下位層でも、ログが採取される場合があります。それらのログについては、Linux のマニュアルを参照してください。

2.12.1 採取するログの種類

HDLM が検知した障害情報やトレース情報は、プロセス別トレース情報ファイル、トレースファイル、障害ログ、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgr) のログおよび syslog に採取されます。これらの障害情報から、障害状況の把握や原因の解析ができます。

それぞれのログで採取できる障害情報について次の表に示します。

表 2-8 障害情報の種類

ログ名	内容	出力先
プロセス別トレース情報ファイル	HDLM コマンドの動作ログが採取されます。	デフォルトのファイル名称を、次に示します。

ログ名	内容	出力先
		/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlnkmgr[1-2].log
トレースファイル	HDLM マネージャのトレース情報が、ユーザの設定したレベルで採取されます。障害が発生したときに、設定を変更してトレース情報を採取することがあります。	トレースファイルの名称を、次に示します。 /var/opt/DynamicLinkManager/log/hdlmtr[1-64].log
障害ログ	検知した障害の中で、ユーザが設定したレベルの障害情報が採取されます。デフォルトでは、検知したすべての障害情報が採取されます。	HDLM マネージャのログ /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmmgr[1-16].log Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントのログ /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmwebagent[1-N].log N の値は、dlmwebagent.properties ファイルの設定に依存します。
HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) ログ	dlmcfmgr ユティリティ実行時のログを採取します。	ログファイルの名称を、次に示します。 /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfgmgr[1-2].log /var/opt/DynamicLinkManager/dlminquiry.log
syslog	ユーザが syslogd の設定ファイルで設定したレベル以上の HDLM のメッセージが採取されます。*Information 以上の情報の出力を設定することをお勧めします。 syslog は、テキストエディタで確認できます。	デフォルトのファイル名称を、次に示します。 /var/log/messages syslog のファイルパスは、syslogd の設定ファイルで設定します。詳細は Linux のマニュアルを参照してください。

注※

syslog に HDLM のメッセージを出力したい場合、syslogd の設定ファイルに定義するシステム機能名は「user」を指定してください。次にシステム機能名が「user」で、かつ優先順位レベルが「情報メッセージ」(info) 以上のメッセージを/tmp/syslog.user.log ファイルに出力する例を示します。

```
user.info /tmp/syslog.user.log
```

障害レベルについては「2.12.2 障害情報のフィルタリング」を参照してください。

2.12.2 障害情報のフィルタリング

HDLM が検知する障害はレベル分けされています。障害レベルを、システムに対する影響度の高いレベルから低いレベルの順で次の表に示します。

表 2-9 障害レベル

障害レベル	意味
Critical	致命的な障害です。システム停止のおそれがあります。
Error	システムに与える影響が大きい障害ですが、フェイルオーバーなどで回避できます。
Warning	システムは動作しますが、放置しておくとシステムが正常に稼働しなくなるおそれがあります。
Information	システムが正常に稼働しているときの稼働履歴を示します。

障害情報は、障害レベルごとにフィルタリングされて採取されます。

障害レベルは、HDLM が出力するメッセージのレベルに相当します。メッセージのレベルについては、「8.1.1 メッセージ ID の出力形式と意味」を参照してください。

syslog には、ユーザが syslog の設定ファイルで設定したレベル以上の HDLM のメッセージが採取されます。Information 以上の情報の出力を設定することをお勧めします。

なお、HDLM が syslog にメッセージを出力するときのファシリティはすべて user となります。

障害ログ、トレースファイルには、設定した採取レベルで障害情報が採取されます。採取レベルは次のとおりです。

障害ログの採取レベル

- 障害ログを採取しない
- **Error** レベル以上の障害情報を採取する
- **Warning** レベル以上の障害情報を採取する
- **Information** レベル以上の障害情報を採取する
- **Information** レベル（保守情報も含む）以上の障害情報を採取する

トレースファイルの採取レベル

- トレースを出力しない
- エラー情報だけ出力する
- プログラムの動作概略を出力する
- プログラムの動作詳細を出力する
- すべての情報を出力する

採取レベルの設定方法については、「3.19.2 機能の設定」を参照してください。

2.12.3 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を使用した障害情報の収集

HDLM は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を提供しています。

DLMgetras ユティリティを実行すると、障害の解析に必要な障害ログ、プロセス別トレース情報ファイル、トレースファイル、定義ファイル、コアファイル、ライブラリなどの情報をまとめて収集できます。収集した情報は、HDLM の購入元会社、または保守会社への連絡時に利用できます。

DLMgetras ユティリティについては、「7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユティリティ」を参照してください。

2.12.4 HDLM インストール障害情報収集ユティリティ (installgetras) を使用したインストール障害情報の収集

HDLM は、HDLM インストール障害情報収集ユティリティ (installgetras) を提供しています。

installgetras ユティリティを実行すると、インストール時に発生した障害の解析に必要なログを収集できます。収集したログは、HDLM の購入元会社、または保守会社への連絡時に利用できます。

installgetras ユティリティについては、「7.10 installgetras HDLM インストール障害情報収集ユティリティ」を参照してください。

2.13 監査ログの採取

HDLMをはじめ、日立のストレージ関連製品では、法規制、セキュリティ評価基準、業界ごとの各種基準に従っていることなどを監査者や評価者に証明するために、監査ログを採取できます。日立のストレージ関連製品で採取できる監査ログを次の表に示します。

表 2-10 監査ログの種別と説明

種別	説明
StartStop	ハードウェアまたはソフトウェアの起動と終了を示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> OSの起動と終了 ハードウェアコンポーネント（マイクロを含む）の起動と終了 ストレージシステム上のソフトウェア、SVP上のソフトウェア、Hitachi Command Suite製品の起動と終了
Failure	ハードウェアまたはソフトウェアの異常を示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> ハードウェア障害 ソフトウェア障害（メモリエラーなど）
LinkStatus	機器間のリンク状態を示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> リンクアップまたはダウン
ExternalService	日立のストレージ関連製品と外部サービスとの通信結果を示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> RADIUSサーバ、LDAPサーバ、NTPサーバ、DNSサーバとの通信 管理サーバとの通信（SNMP）
Authentication	機器、管理者、またはエンドユーザが、接続または認証を試みて成功または失敗したことを示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> FCログイン 機器認証（FC-SP認証、iSCSIログイン認証、SSLサーバクライアント認証） 管理者またはエンドユーザ認証
AccessControl	機器、管理者、またはエンドユーザがリソースへのアクセスを試みて成功または失敗したことを示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> 機器のアクセスコントロール 管理者またはエンドユーザのアクセスコントロール
ContentAccess	重要なデータへのアクセスを試みて成功または失敗したことを示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> NAS上の重要なファイルまたはHTTPサポート時のコンテンツへのアクセス 監査ログファイルへのアクセス
ConfigurationAccess	管理者が許可された運用操作を実行し、操作が正常終了または失敗したことを示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> 構成情報の参照または更新 アカウントの追加、削除などのアカウント設定の更新 セキュリティの設定 監査ログ設定の参照または更新
Maintenance	保守操作を実行し、操作が正常終了または失敗したことを示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> ハードウェアコンポーネント増設または減設 ソフトウェアコンポーネント増設または減設
AnomalyEvent	しきい値のオーバーなどの異常が発生したことを示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> ネットワークトラフィックのしきい値オーバー CPU負荷のしきい値オーバー 内部に一時保存した監査ログの上限到達前通知やラップアラウンド 異常な通信の発生を示す事象。 <ul style="list-style-type: none"> 通常使用するポートへのSYNフラッド攻撃やプロトコル違反 未使用ポートへのアクセス（ポートスキャンなど）

採取できる監査ログは、製品ごとに異なります。以降では、HDLMで採取できる監査ログについて説明します。ほかの製品の監査ログについては、それぞれのマニュアルを参照してください。

2.13.1 HDLM で監査ログに出力する種別と監査事象

HDLM で監査ログに出力する種別と監査事象を次の表に示します。それぞれの監査事象には、重要度 (Severity) が設定されています。

表 2-11 監査ログに出力する種別と監査事象

種別	種別の説明	監査事象	重要度 (Severity) ※1	メッセージ ID
StartStop	ソフトウェアの起動と終了	HDLM マネージャの起動成功	6	KAPL15401-I
		HDLM マネージャの起動失敗	3	KAPL15402-E
		HDLM マネージャの停止	6	KAPL15403-I
		DLMgetras ユティリティの開始	6	KAPL15060-I
		DLMgetras ユティリティの終了 ※2	6	KAPL15061-I
		dlnstart ユティリティの処理成功	6	KAPL15062-I
		dlnstart ユティリティの処理失敗	3	KAPL15063-E
Authentication	管理者またはエンドユーザの認証	HDLM コマンドの実行権限なし	4	KAPL15111-W
		HDLM ユティリティの実行権限なし	4	KAPL15010-W
		HDLM マネージャの起動または停止の実行権限なし	4	KAPL15404-W
ConfigurationAccess	構成情報の参照または更新	バスの統計情報の初期化成功	6	KAPL15101-I
		バスの統計情報の初期化失敗	3	KAPL15102-E
		バスの Online/Offline 成功	6	KAPL15103-I
		バスの Online/Offline 失敗	4	KAPL15104-W
		動作環境の設定成功	6	KAPL15105-I
		動作環境の設定失敗	3	KAPL15106-E
		プログラム情報の表示成功	6	KAPL15107-I
		プログラム情報の表示失敗	3	KAPL15108-E
		HDLM 管理対象物の情報表示成功	6	KAPL15109-I
		HDLM 管理対象物の情報表示失敗	3	KAPL15110-E
		dlnmpr -k の処理成功	6	KAPL15001-I
		dlnmpr -k の処理失敗	3	KAPL15002-E
		dlnmpr -c の処理成功	6	KAPL15064-I
		dlnmpr -c の処理失敗	3	KAPL15065-E
		dlnmcfmgr -r の処理成功	6	KAPL15040-I
		dlnmcfmgr -r の処理失敗	3	KAPL15041-E
		dlnmcfmgr -o の処理成功	6	KAPL15042-I
		dlnmcfmgr -o の処理失敗	3	KAPL15043-E
		dlnmcfmgr -i の処理成功	6	KAPL15044-I
		dlnmcfmgr -i の処理失敗	3	KAPL15045-E
dlnmcfmgr -v の処理成功	6	KAPL15046-I		
dlnmcfmgr -v の処理失敗	3	KAPL15047-E		

種別	種別の説明	監査事象	重要度 (Severity) ※1	メッセージID
		dlimcfgmgr -u の処理成功	6	KAPL15048-I
		dlimcfgmgr -u の処理失敗	3	KAPL15049-E
		dlimmkinitrd の処理成功	6	KAPL15050-I
		dlimmkinitrd の処理失敗	3	KAPL15051-E
		dlimsetopt -r の処理成功	6	KAPL15052-I
		dlimsetopt -r の処理失敗	3	KAPL15053-E
		dlimsetopt -inqt の処理成功	6	KAPL15054-I
		dlimsetopt -inqt の処理失敗	3	KAPL15055-E
		dlimsetopt -inqr の処理成功	6	KAPL15056-I
		dlimsetopt -inqr の処理失敗	3	KAPL15057-E
		dlimupdatesysinit の処理成功	6	KAPL15058-I
		dlimupdatesysinit の処理失敗	3	KAPL15059-E
		dlimchname -o の処理成功	6	KAPL15301-I
		dlimchname -o の処理失敗	3	KAPL15302-E
		dlimchname の処理成功	6	KAPL15303-I
		dlimchname の処理失敗	3	KAPL15304-E
		dlimchname -f の処理成功	6	KAPL15305-I
		dlimchname -f の処理失敗	3	KAPL15306-E
		dlimsetopt -prsup の処理成功	6	KAPL15307-I
		dlimsetopt -prsup の処理失敗	3	KAPL15308-E
		パスの追加成功	6	KAPL15117-I
		パスの追加失敗	4	KAPL15118-W
		パスの削除成功	6	KAPL15119-I
		パスの削除失敗	4	KAPL15120-W

注※1

重要度 (Severity) の意味は次のとおりです。

3:Error 4:Warning 6:Informational

注※2

HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) の実行中に、[Ctrl] + [C] で DLMgetras ユティリティを中断した場合は、DLMgetras ユティリティの終了を示す監査ログは出力されません。

2.13.2 監査ログ出力の前提条件

監査ログを出力するには、次に示す条件をすべて満たしている必要があります。

- ・ syslog デーモンが有効であること
- ・ HDLM コマンドの set オペレーションで監査ログの出力を有効にしていること

ただし、上記の条件に関係なく、外部媒体から HDLM のユーティリティなどを実行した場合、監査ログが出力されることがあります※。

注※

次の内容で監査ログが出力されます。

- 出力される種別 : StartStop, Authentication, ConfigurationAccess
- 出力される重要度 (Severity) : 6 (Critical, Error, Warning, Informational)
- 出力先 : syslog (Facility 値は「user」)

注意事項

- 監査ログは大量に出力されるおそれがあるので、ログサイズの変更、採取したログの退避、保管などを実施してください。
- HDLM コマンドの set オペレーションで設定する重要度と、/etc/syslog.conf で設定する重要度が異なる場合、重要度の高い設定に従って監査ログが出力されます。

2.13.3 監査ログの出力先とフィルタリング

監査ログは syslog に出力されます。syslog には監査ログ以外の HDLM のメッセージが出力されるため、監査ログ専用の出力先を設定しておくことをお勧めします。

例えば、監査ログの出力先を /usr/local/audlog にするには、次の 2 つの設定を行います。

- /etc/syslog.conf ファイルで次のように設定します。

```
local0.info /usr/local/audlog
```

- HDLM コマンドの set オペレーションで、監査ログの Facility に「local0」を指定します。

また、HDLM コマンドの set オペレーションで監査ログの重要度 (Severity) と種別を指定することによってフィルタリングして出力できます。

重要度 (Severity) によるフィルタリング

指定できる重要度を次の表に示します。

表 2-12 指定できる重要度 (Severity)

重要度 (Severity)	出力される監査ログ	syslog の Severity との対応
0	なし	Emergency
1		Alert
2	Critical	Critical
3	Critical, Error	Error
4	Critical, Error, Warning	Warning
5		Notice
6	Critical, Error, Warning, Informational	Informational
7		Debug

種別によるフィルタリング

指定できる種別を次に示します。

- StartStop
- Authentication
- ConfigurationAccess
- 上記のすべての種別

監査ログの設定方法については、「3.19.2 機能の設定」を参照してください。

2.13.4 監査ログの出力形式

監査ログの出力形式を説明します。

syslog ファイルの内容

- プライオリティ
- 日付・時刻
- ホスト名
- プログラム名
- [プロセス ID]
- メッセージ部

メッセージ部の出力形式と内容を説明します。

メッセージ部の出力形式

統一識別子,統一仕様リビジョン番号,通番,メッセージ ID,日付・時刻,検出エンティティ,検出場所,監査事象の種別,監査事象の結果,監査事象の結果サブジェクト識別情報,ハードウェア識別情報,発生場所情報,ロケーション識別情報,FQDN,冗長化識別情報,エージェント情報,リクエスト送信元ホスト,リクエスト送信元ポート番号,リクエスト送信先ホスト,リクエスト送信先ポート番号,一括操作識別子,ログ種別情報,アプリケーション識別情報,予約領域,メッセージテキスト

メッセージ部には、半角で 950 文字まで表示されます。

表 2-13 メッセージ部に出力される情報

項目*	内容
統一識別子	「CELFSS」固定
統一仕様リビジョン番号	「1.1」固定
通番	監査ログのメッセージの通番
メッセージ ID	メッセージ ID 「KAPL15nnn-l」の形式で出力されます。
日付・時刻	メッセージが出力された日付と時刻 「[yyyy-mm-ddThh:mm:ss s タイムゾーン]」の形式で出力されます。
検出エンティティ	コンポーネント名やプロセス名
検出場所	ホスト名
監査事象の種別	事象の種別
監査事象の結果	事象の結果
監査事象の結果サブジェクト識別情報	事象に応じた、アカウント ID、プロセス ID または IP アドレス
ハードウェア識別情報	ハードウェアの型名や製番
発生場所情報	ハードウェアのコンポーネントの識別情報
ロケーション識別情報	ロケーション識別情報
FQDN	完全修飾ドメイン名
冗長化識別情報	冗長化識別情報
エージェント情報	エージェント情報
リクエスト送信元ホスト	リクエストの送信元のホスト名

項目※	内容
リクエスト送信元ポート番号	リクエストの送信元のポート番号
リクエスト送信先ホスト	リクエストの送信先のホスト名
リクエスト送信先ポート番号	リクエストの送信先のポート番号
一括操作識別子	プログラム内での操作の通番
ログ種別情報	「BasicLog」固定
アプリケーション識別情報	プログラムの識別情報
予約領域	出力されません。予約領域です。
メッセージテキスト	監査事象に応じた内容

注※ 監査事象によっては、出力されない項目もあります。

監査事象「HDLM 管理対象物の情報表示成功」で出力されるメッセージ部の例

```

CELFSS,1.1,0,KAPL15109-I,
2008-04-09T10:18:40.6+09:00,HDLMCommand,hostname=moon,ConfigurationAccess,Success,uid=root,,,,,,,,,,,,,"Information about HDLM-management targets was successfully displayed. Command Line = /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path "

```

2.14 Global Link Manager による HDLM の統合管理

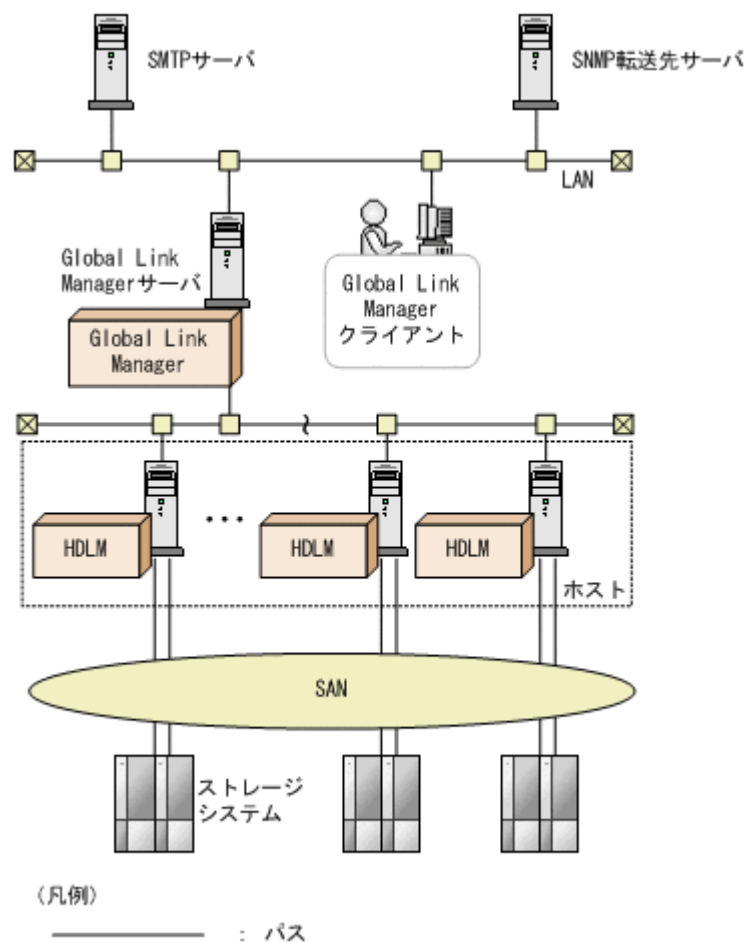
Global Link Manager を使用すると、複数の HDLM が稼働するシステムで、統合的にパスを管理できます。

HDLM が稼働するホストを何台も使用した大規模なシステム構成の場合、各ホストでパスを管理するための作業負荷は、規模の大きさに比例して増大します。HDLM と Global Link Manager を連携させると、複数の HDLM のパス情報を一元管理でき、作業負荷を軽減できます。また、システム全体での負荷バランスを考慮してパスの稼働状態を切り替えたり、HDLM の障害情報を Global Link Manager で集中して管理したりできます。

Global Link Manager では、複数のホストにインストールされた HDLM からパスに関する情報を収集して一元管理します。一元化された情報は、ホストを管理する複数のユーザがクライアントマシンから参照したり制御したりできます。

HDLM と Global Link Manager を使用したシステム構成例を次の図に示します。

図 2-16 HDLM と Global Link Manager を使用したシステム構成例



2.15 クラスタ対応

HDLM はクラスタ構成時にも使用できます。

HDLM がサポートするクラスタソフトウェアについては、使用している OS やバージョンに応じて次の項を参照してください。

- ・「3.1.3 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の関連製品」の「(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア」
- ・「3.1.4 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品」の「(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア (FC-SAN を使用する場合)」
- ・「3.1.5 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合の関連製品」の「(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア」
- ・「3.1.6 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の関連製品」の「(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア」
- ・「3.1.9 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品」の「(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア」
- ・「3.1.10 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合の関連製品」の「(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア」

HDLM は主系ホストのパスを使用して LU にアクセスします。

ホストの切り替えについては、アプリケーションに依存します。

HDLM の環境構築

この章では、HDLM の環境を構築する手順および設定を解除する手順について説明します。

HDLM のインストールおよび機能の設定は必ず行ってください。ボリュームグループおよびクラスタソフトウェアの設定は、お使いの環境に合わせて行ってください。

- 3.1 HDLM のシステム要件
- 3.2 環境構築の流れ
- 3.3 HDLM のインストールの種別
- 3.4 HDLM のインストールについての事前知識
- 3.5 環境を構築する場合の注意事項
- 3.6 HDLM のインストール
- 3.7 ブートディスクを管理するための HDLM のインストール
- 3.8 LUKS の設定
- 3.9 md デバイスの設定
- 3.10 LVM2 の設定
- 3.11 Xen の設定
- 3.12 KVM の設定
- 3.13 CLUSTERPRO の設定
- 3.14 Heartbeat の設定
- 3.15 Oracle RAC の設定
- 3.16 RHCM の設定
- 3.17 VCS の設定

- 3.18 パス構成の確認
- 3.19 HDLM の機能の設定
- 3.20 プロセス別トレース情報ファイル
- 3.21 HDLM デバイスのキャラクタ型デバイスファイルの作成
- 3.22 ファイルシステムの構築（ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合）
- 3.23 自動マウントの設定
- 3.24 HDLM の設定解除

3.1 HDLM のシステム要件

HDLM のインストール前に、次の項目を確認してください。

3.1.1 HDLM がサポートするホストと OS

HDLM がサポートするホストは、次の各表に示す OS が動作して、かつ「表 3-1 適用ホストの必要条件」に示す条件を満たすものです。

- ・「表 3-2 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 のカーネル」
- ・「表 3-3 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 5 のカーネル」
- ・「表 3-4 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 6 のカーネル」
- ・「表 3-5 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 10 のカーネル」
- ・「表 3-6 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 11 のカーネル」
- ・「表 3-7 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 4 のカーネル」
- ・「表 3-8 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 5 のカーネル」
- ・「表 3-9 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 のカーネル」
- ・「表 3-10 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 のカーネル」

表 3-1 適用ホストの必要条件

項目	必要条件
CPU	Intel 社製 Pentium III または Itanium2 833MHz 以上※1
	AMD 社製 Opteron
メモリ	512MB 以上
ディスクサイズ	170MB※2 以上

注※1

HDLM は Hyper-Threading テクノロジーに対応済みです。

注※2

インストール時に必要なサイズです。

HDLM は次の各表に示す OS が動作するホストにインストールできます。

- ・「表 3-2 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 のカーネル」
- ・「表 3-3 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 5 のカーネル」
- ・「表 3-4 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 6 のカーネル」
- ・「表 3-5 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 10 のカーネル」
- ・「表 3-6 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 11 のカーネル」
- ・「表 3-7 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 4 のカーネル」
- ・「表 3-8 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 5 のカーネル」
- ・「表 3-9 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 のカーネル」
- ・「表 3-10 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 のカーネル」

カーネルアーキテクチャおよび CPU のベンダについては、次に示す方法で確認してください。

1. 次に示すコマンドを実行して、使用しているカーネルのアーキテクチャを確認します。

```
# uname -m
```

```
x86_64
#
```

uname コマンドの表示結果は次のアーキテクチャを示します。

```
i686 : IA32
ia64 : IPF
x86_64 : AMD64/EM64T
```

2. 次に示すコマンドを実行して、使用している CPU のベンダを確認します。

```
# cat /proc/cpuinfo
processor      : 0
vendor_id     : AuthenticAMD
cpu family    : 15
model         : 37
model name    : AMD Opteron(tm) Processor 252
stepping      : 1
:
:
#
```

vendor_id の行を確認します。AMD 製 CPU の場合は AuthenticAMD と表示され、Intel 製 CPU の場合は GenuineIntel と表示されます。

注意事項

ストレージシステムとの接続に IP-SAN を使用する場合は、次に示す OS をサポートします。

- Red Hat Enterprise Linux 5.6
- Red Hat Enterprise Linux 5.6 Advanced Platform
- Red Hat Enterprise Linux 5.7
- Red Hat Enterprise Linux 5.7 Advanced Platform
- Red Hat Enterprise Linux 5.8
- Red Hat Enterprise Linux 5.8 Advanced Platform
- Red Hat Enterprise Linux 5.9
- Red Hat Enterprise Linux 5.9 Advanced Platform
- Red Hat Enterprise Linux 6
- SUSE LINUX Enterprise Server 11

なお、iSCSI ソフトウェアは、OS に同梱されている次の iSCSI イニシエーターをサポートします。

- Red Hat Enterprise Linux 5.6, Red Hat Enterprise Linux 5.6 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.7, Red Hat Enterprise Linux 5.7 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.8, Red Hat Enterprise Linux 5.8 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.9, Red Hat Enterprise Linux 5.9 Advanced Platform, または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合

iscsi-initiator-utils

- SUSE LINUX Enterprise Server 11 の場合

open-iscsi

表 3-2 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.9-11.ELhugemem
	2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELhugemem
	2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELhugemem
	2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELhugemem
	2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELhugemem
	2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELhugemem
	2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELhugemem
	2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELhugemem
	2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELhugemem
	2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELhugemem
	2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELhugemem
	2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELhugemem
	2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELhugemem
	2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELhugemem
	2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELhugemem
	2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELhugemem
	2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELhugemem
	2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.9-78.0.22.ELhugemem
	2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELhugemem
	2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELhugemem
	2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELhugemem
	2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELhugemem
	2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELhugemem
	IPF※3

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.9-89.0.20.ELlargesmp
	2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp
	2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELlargesmp
	2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELlargesmp
EM64T/AMD64※4	2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp
	2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELlargesmp
	2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELlargesmp
	2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELlargesmp
	2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELlargesmp
	2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELlargesmp
	2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp
	2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELlargesmp
	2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp
	2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp
	2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp
	2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp
	2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELlargesmp
	2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp
	2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp
	2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp
	2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp
	2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELlargesmp
	2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp
	2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp
	2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELlargesmp
	2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELlargesmp

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU に IPF 用カーネルがインストールされた環境です。

注※4

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
 - EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。
 - libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
 - libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
 - glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
- RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

表 3-3 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 5 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.18-8.el5 2.6.18-8.el5PAE
	2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE
	2.6.18-53.1.13.el5 2.6.18-53.1.13.el5PAE
	2.6.18-53.1.21.el5 2.6.18-53.1.21.el5PAE
	2.6.18-92.el5 2.6.18-92.el5PAE
	2.6.18-92.1.6.el5 2.6.18-92.1.6.el5PAE
	2.6.18-92.1.13.el5 2.6.18-92.1.13.el5PAE
	2.6.18-92.1.22.el5 2.6.18-92.1.22.el5PAE
	2.6.18-128.el5 2.6.18-128.el5PAE
	2.6.18-128.1.10.el5 2.6.18-128.1.10.el5PAE
	2.6.18-128.1.14.el5 2.6.18-128.1.14.el5PAE
	2.6.18-128.7.1.el5 2.6.18-128.7.1.el5PAE
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE
	2.6.18-164.9.1.el5 2.6.18-164.9.1.el5PAE
	2.6.18-164.11.1.el5 2.6.18-164.11.1.el5PAE
	2.6.18-164.15.1.el5 2.6.18-164.15.1.el5PAE
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE
	2.6.18-194.11.1.el5 2.6.18-194.11.1.el5PAE
	2.6.18-194.11.3.el5 2.6.18-194.11.3.el5PAE
	2.6.18-194.17.1.el5 2.6.18-194.17.1.el5PAE
	2.6.18-194.32.1.el5 2.6.18-194.32.1.el5PAE
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE
	2.6.18-238.1.1.el5 2.6.18-238.1.1.el5PAE
	2.6.18-238.9.1.el5

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル	
	2.6.18-238.9.1.el5PAE	
	2.6.18-238.19.1.el5 2.6.18-238.19.1.el5PAE	
	2.6.18-238.28.1.el5 2.6.18-238.28.1.el5PAE	
	2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE	
	2.6.18-274.12.1.el5 2.6.18-274.12.1.el5PAE	
	2.6.18-274.18.1.el5 2.6.18-274.18.1.el5PAE	
	2.6.18-308.el5 2.6.18-308.el5PAE	
	2.6.18-308.8.2.el5 2.6.18-308.8.2.el5PAE	
	2.6.18-308.11.1.el5 2.6.18-308.11.1.el5PAE	
	2.6.18-308.16.1.el5 2.6.18-308.16.1.el5PAE	
	2.6.18-348.el5 2.6.18-348.el5PAE	
	2.6.18-348.1.1.el5 2.6.18-348.1.1.el5PAE	
	IPF※3	2.6.18-8.el5
		2.6.18-53.el5
		2.6.18-53.1.13.el5
2.6.18-53.1.21.el5		
2.6.18-92.el5		
2.6.18-92.1.6.el5		
2.6.18-92.1.13.el5		
2.6.18-92.1.22.el5		
2.6.18-128.el5		
2.6.18-128.1.10.el5		
2.6.18-128.1.14.el5		
2.6.18-128.7.1.el5		
2.6.18-164.el5		
2.6.18-164.9.1.el5		
2.6.18-164.11.1.el5		
2.6.18-164.15.1.el5		
2.6.18-194.el5		
2.6.18-194.11.1.el5		
2.6.18-194.11.3.el5		
2.6.18-194.17.1.el5		
2.6.18-194.32.1.el5		
2.6.18-238.el5		

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.18-238.1.1.el5 2.6.18-238.9.1.el5 2.6.18-238.19.1.el5 2.6.18-238.28.1.el5 2.6.18-274.el5 2.6.18-274.12.1.el5 2.6.18-274.18.1.el5 2.6.18-308.el5 2.6.18-308.8.2.el5 2.6.18-308.11.1.el5 2.6.18-308.16.1.el5 2.6.18-348.el5 2.6.18-348.1.1.el5
EM64T/AMD64※4	2.6.18-8.el5 2.6.18-53.el5 2.6.18-53.1.13.el5 2.6.18-53.1.21.el5 2.6.18-92.el5 2.6.18-92.1.6.el5 2.6.18-92.1.13.el5 2.6.18-92.1.22.el5 2.6.18-128.el5 2.6.18-128.1.10.el5 2.6.18-128.1.14.el5 2.6.18-128.7.1.el5 2.6.18-164.el5 2.6.18-164.9.1.el5 2.6.18-164.11.1.el5 2.6.18-164.15.1.el5 2.6.18-194.el5 2.6.18-194.11.1.el5 2.6.18-194.11.3.el5 2.6.18-194.17.1.el5 2.6.18-194.32.1.el5 2.6.18-238.el5 2.6.18-238.1.1.el5 2.6.18-238.9.1.el5 2.6.18-238.19.1.el5 2.6.18-238.28.1.el5 2.6.18-274.el5 2.6.18-274.12.1.el5 2.6.18-274.18.1.el5 2.6.18-308.el5

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.18-308.8.2.el5
	2.6.18-308.11.1.el5
	2.6.18-308.16.1.el5
	2.6.18-348.el5
	2.6.18-348.1.1.el5

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU に IPF 用カーネルがインストールされた環境です。

注※4

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
- EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。
 - ・ libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
 - ・ libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
 - ・ glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm

RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

表 3-4 HDLM がサポートする Red Hat Enterprise Linux 6 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.32-71.el6.i686
	2.6.32-131.0.15.el6.i686
	2.6.32-220.el6.i686
	2.6.32-220.4.2.el6.i686
	2.6.32-220.17.1.el6.i686
	2.6.32-220.23.1.el6.i686
	2.6.32-220.31.1.el6.i686
	2.6.32-279.el6.i686
	2.6.32-279.19.1.el6.i686
	2.6.32-358.el6.i686
2.6.32-358.6.2.el6.i686	
EM64T/AMD64※3	2.6.32-71.el6.x86_64
	2.6.32-131.0.15.el6.x86_64
	2.6.32-220.el6.x86_64
	2.6.32-220.4.2.el6.x86_64

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.32-220.17.1.el6.x86_64
	2.6.32-220.23.1.el6.x86_64
	2.6.32-220.31.1.el6.x86_64
	2.6.32-279.el6.x86_64
	2.6.32-279.19.1.el6.x86_64
	2.6.32-358.el6.x86_64
	2.6.32-358.6.2.el6.x86_64

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
- EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。

- ・ libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
- ・ libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
- ・ glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm

RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

表 3-5 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 10 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.16.21-0.8-default※3
	2.6.16.21-0.8-smp※3
	2.6.16.21-0.8-bigsm※3
	2.6.16.27-0.9-default※3
	2.6.16.27-0.9-smp※3
	2.6.16.27-0.9-bigsm※3
	2.6.16.46-0.14-default※4
	2.6.16.46-0.14-smp※4
	2.6.16.46-0.14-bigsm※4
	2.6.16.60-0.21-default※5
	2.6.16.60-0.21-smp※5
	2.6.16.60-0.21-bigsm※5
	2.6.16.60-0.21-xenpae※5
	2.6.16.60-0.29-default※5
	2.6.16.60-0.29-smp※5
2.6.16.60-0.29-bigsm※5	
2.6.16.60-0.29-xenpae※5	
2.6.16.60-0.42.5-default※5	

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.16.60-0.42.5-smp※5
	2.6.16.60-0.42.5-bigsmpt※5
	2.6.16.60-0.42.5-xenpae※5
	2.6.16.60-0.54.5-default※6
	2.6.16.60-0.54.5-smpt※6
	2.6.16.60-0.54.5-bigsmpt※6
	2.6.16.60-0.54.5-xenpae※6
	2.6.16.60-0.85.1-default※7
2.6.16.60-0.85.1-smpt※7	
2.6.16.60-0.85.1-bigsmpt※7	
2.6.16.60-0.85.1-xenpae※7	
IPF※8	2.6.16.21-0.8-default※3
	2.6.16.27-0.9-default※3
	2.6.16.46-0.14-default※4
	2.6.16.60-0.21-default※5
	2.6.16.60-0.42.5-default※5
	2.6.16.60-0.54.5-default※6
	2.6.16.60-0.85.1-default※7
EM64T/AMD64※9	2.6.16.21-0.8-default※3
	2.6.16.21-0.8-smpt※3
	2.6.16.27-0.9-default※3
	2.6.16.27-0.9-smpt※3
	2.6.16.46-0.14-default※4
	2.6.16.46-0.14-smpt※4
	2.6.16.60-0.21-default※5
	2.6.16.60-0.21-smpt※5
	2.6.16.60-0.21-xen※5
	2.6.16.60-0.42.5-default※5
	2.6.16.60-0.42.5-smpt※5
	2.6.16.60-0.42.5-xen※5
	2.6.16.60-0.54.5-default※6
	2.6.16.60-0.54.5-smpt※6
	2.6.16.60-0.54.5-xen※6
2.6.16.60-0.85.1-default※7	
2.6.16.60-0.85.1-smpt※6	
2.6.16.60-0.85.1-xen※7	

注

SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の動作環境について次に示します。

- EVMS 機能を適用した HDLM デバイスは未サポートです。
- HDLM をインストールしている環境では DRBD 機能を使用できません。
- User-Mode Linux の環境では HDLM を使用できません。

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

gdb パッケージのバージョン 6.5-21.2 以降が適用された環境が前提となります。

注※4

SUSE LINUX Enterprise Server 10 用 SP1 のすべてのパッケージが適用された環境が前提となります。

注※5

SUSE LINUX Enterprise Server 10 用 SP2 のすべてのパッケージが適用された環境が前提となります。

注※6

SUSE LINUX Enterprise Server 10 用 SP3 のすべてのパッケージが適用された環境が前提となります。

注※7

SUSE LINUX Enterprise Server 10 用 SP4 のすべてのパッケージが適用された環境が前提となります。

注※8

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU に IPF 用カーネルがインストールされた環境です。

注※9

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。

表 3-6 HDLM がサポートする SUSE LINUX Enterprise Server 11 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.27.21-0.1.2-default
	2.6.27.21-0.1.2-pae
	2.6.27.21-0.1.2-xen
	2.6.27.39-0.3.1-default
	2.6.27.39-0.3.1-pae
	2.6.27.39-0.3.1-xen
	2.6.32.12-0.7.1-default
	2.6.32.12-0.7.1-pae
	2.6.32.12-0.7.1-xen
	2.6.32.24-0.2.1-default
	2.6.32.24-0.2.1-pae
	2.6.32.24-0.2.1-xen
	2.6.32.36-0.5.2-default
	2.6.32.36-0.5.2-pae
2.6.32.36-0.5.2-xen	
3.0.13-0.27-default	
3.0.13-0.27-pae	
3.0.76-0.11-default	

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	3.0.76-0.11-pae
IPF※3	2.6.27.21-0.1.2-default
	2.6.27.39-0.3.1-default
	2.6.32.12-0.7.1-default
	2.6.32.24-0.2.1-default
	2.6.32.36-0.5.2-default
	3.0.13-0.27-default
	3.0.76-0.11-default
EM64T/AMD64※4	2.6.27.21-0.1.2-default
	2.6.27.21-0.1.2-xen
	2.6.27.39-0.3.1-default
	2.6.27.39-0.3.1-xen
	2.6.32.12-0.7.1-default
	2.6.32.12-0.7.1-xen
	2.6.32.24-0.2.1-default
	2.6.32.24-0.2.1-xen
	2.6.32.36-0.5.2-default
	2.6.32.36-0.5.2-xen
	3.0.13-0.27-default
3.0.76-0.11-default	

注

SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合の動作環境について次に示します。

- EVMS 機能を適用した HDLM デバイスは未サポートです。
- HDLM をインストールしている環境では DRBD 機能を使用できません。
- User-Mode Linux の環境では HDLM を使用できません。

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU に IPF 用カーネルがインストールされた環境です。

注※4

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。

表 3-7 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 4 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.9-55.0.0.0.2.EL
	2.6.9-55.0.0.0.2.ELsmp
	2.6.9-55.0.0.0.2.ELhugemem
	2.6.9-67.0.0.0.1.EL

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.9-67.0.0.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.0.0.1.ELhugemem
EM64T/AMD64※3	2.6.9-55.0.0.0.2.EL 2.6.9-55.0.0.0.2.ELsmp 2.6.9-55.0.0.0.2.ELlargesmp
	2.6.9-67.0.0.0.1.EL 2.6.9-67.0.0.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.0.0.1.ELlargesmp

注

「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4」と記述された個所で、Oracle Enterprise Linux 4に関する断り書きがない場合、適宜それらをOracle Enterprise Linux 4に読み替えてください。

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
- EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。

- ・ libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
- ・ libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
- ・ glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm

RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

表 3-8 HDLM がサポートする Oracle Enterprise Linux 5 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE
	2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE
EM64T/AMD64※3	2.6.18-53.el5
	2.6.18-164.el5
	2.6.18-194.el5
	2.6.18-238.el5

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
	2.6.18-274.el5

注

「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux 5」と記述された個所で、Oracle Enterprise Linux 5に関する断り書きがない場合、適宜それらを Oracle Enterprise Linux 5に読み替えてください。

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
- EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。

- ・ libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
- ・ libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
- ・ glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm

RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

表 3-9 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.32-200.13.1.el5uek
	2.6.32-300.27.1.el5uek
EM64T/AMD64※3	2.6.32-100.26.2.el5
	2.6.32-200.13.1.el5uek
	2.6.32-300.27.1.el5uek

注

「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux 5」と記述された個所で、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5に関する断り書きがない場合、適宜それらを Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5に読み替えてください。

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
 - EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。
 - libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
 - libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i386.rpm
 - glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
- RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

表 3-10 HDLM がサポートする Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 のカーネル

カーネルアーキテクチャ※1	カーネル
IA32※2	2.6.39-200.24.1.el6uek.i686
	2.6.39-200.29.1.el6uek.i686
	2.6.39-200.29.2.el6uek.i686
EM64T/AMD64※3	2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64
	2.6.39-200.29.1.el6uek.x86_64
	2.6.39-200.29.2.el6uek.x86_64

注

「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux 6」と記述された個所で、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 に関する断り書きがない場合、適宜それらを Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 に読み替えてください。

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
 - EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。
 - libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
 - libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
 - glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
- RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

3.1.2 HDLM がサポートするストレージシステム

HDLM がサポートするストレージシステムを次に示します。

(1) ストレージシステム

HDLM は下記のストレージシステムに適用します。

FC-SAN を使用する場合

- H10000/H12000/H20000/H24000
- Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ
- Hitachi NSC55
- Hitachi Universal Storage Platform 100
- Hitachi Universal Storage Platform 600
- Hitachi Universal Storage Platform 1100
- Hitachi Universal Storage Platform V
- Hitachi Universal Storage Platform VM
- Hitachi Virtual Storage Platform
- Hitachi Virtual Storage Platform VP9500
- HP StorageWorks P9500 Disk Array
- HUS100 シリーズ
- HUS VM
- SANRISE 9500V シリーズ
- SANRISE 2000 シリーズ
- SANRISE 9900V シリーズ
- SANRISE H128/H1024
- SVS
- XP128/XP1024/XP10000/XP12000/XP20000/XP24000

IP-SAN を使用する場合

- Hitachi AMS2000 シリーズ

適用できるストレージシステムはデュアルコントローラ構成が前提です。HUB 接続環境で使用する場合は、接続されているすべてのホスト、およびすべてのストレージシステムのループ ID を一意に設定してください。なお、HDLM を使用するために必要なマイクロプログラムバージョンについては HDLM のソフトウェア添付資料を参照してください。ストレージの設定情報についてはストレージシステムの保守マニュアルを参照してください。

注意事項

BladeSymphony 環境およびブートディスク環境で適用できるストレージシステムについては、使用している OS やバージョンに応じて次の項を参照してください。

- 「3.1.3 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境」
- 「3.1.4 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境 (FC-SAN を使用する場合)」
- 「3.1.5 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
- 「3.1.6 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
- 「3.1.7 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合の関連製品」の「(3) HDLM がサポートするブートディスク環境 (FC-SAN を使用する場合)」
- 「3.1.8 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合の関連製品」の「(3) HDLM がサポートするブートディスク環境」

- 「3.1.9 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
- 「3.1.10 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
- 「3.1.11 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」

(2) HBA (FC-SAN を使用する場合)

適用できる HBA については、HDLM のソフトウェア添付資料を参照してください。

(3) NIC (IP-SAN を使用する場合)

適用できる NIC については、HDLM のソフトウェア添付資料を参照してください。

(4) Hitachi RapidXchange 管理の中間ボリュームを扱う場合

Hitachi RapidXchange で管理している中間ボリュームで、データを交換する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-11 Hitachi RapidXchange 管理の中間ボリュームを扱う場合の関連プログラム

カーネルアーキテクチャ ※1	カーネル	関連プログラム
IA32※2	2.6.32-279.el6.i686	File Access Library and File Conversion Utility (FAL/FCU) 01-05-66/26 以降
	2.6.32-279.19.1.el6.i686	
EM64T/AMD64※3	2.6.32-279.el6.x86_64	File Access Library and File Conversion Utility (FAL/FCU) 01-05-66/26 以降
	2.6.32-279.19.1.el6.x86_64	

注※1

OS 配布元からバイナリ形式で提供されているカーネルだけサポートします。

注※2

HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、IA32 用のカーネルがインストールされた環境です。

注※3

EM64T/AMD64 の環境での注意事項を次に示します。

- HDLM がサポートする環境は、Intel 社製 CPU または AMD 社製 CPU の Opteron のシステムに、EM64T と AMD64 用のカーネルがインストールされた環境です。
- EM64T/AMD64 の環境では、次に示す RPM パッケージが必要です。HDLM をインストールする前に、これらの RPM パッケージをインストールしてください。
 - libstdc++-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
 - libgcc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm
 - glibc-RPM パッケージのバージョン情報.i686.rpm

RPM パッケージのバージョン情報は、OS のバージョンによって異なります。

なお、Hitachi RapidXchange の詳細は、マニュアル「SANRISE2000/SANRISE9900/SANRISE Universal Storage Platform/Hitachi Universal Storage Platform V Hitachi Virtual Storage

Platform FAL for AIX FAL for HP-UX FAL for Solaris FAL for Windows FAL for NCR UNIX
 FAL for HI-UX/WE2 FAL for Tru64 UNIX FAL for LINUX ユーザーズガイド」を参照してください。

3.1.3 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の関連製品

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア

HDLM をクラスタ構成で使用する場合、そのクラスタを構成するすべてのノードには同じバージョンの HDLM をインストールしてください。異なるバージョンがインストールされている場合、クラスタが正常に動作しないおそれがあります。次に示すコマンドを実行して表示される「HDLM Version」および「Service Pack Version」が一致する場合、同じバージョンの HDLM になります。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

クラスタ構成を構築する場合の関連プログラムを次の各表に示します。

- ・ 「表 3-12 Red Hat Enterprise Linux AS4(IA32)を使用する場合のクラスタソフトウェア」
- ・ 「表 3-13 Red Hat Enterprise Linux ES4(IA32)を使用する場合のクラスタソフトウェア」
- ・ 「表 3-14 Red Hat Enterprise Linux AS4(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア」
- ・ 「表 3-15 Red Hat Enterprise Linux ES4(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア」
- ・ 「表 3-16 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(EM64T)を使用する場合のクラスタソフトウェア」
- ・ 「表 3-17 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(AMD64)を使用する場合のクラスタソフトウェア」

表 3-12 Red Hat Enterprise Linux AS4(IA32)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-11.EL	HA モニタ 01-12 ^{*1}
2.6.9-11.ELsmp	HA モニタ 01-12-/A ^{*1}
2.6.9-11.ELhugemem	HA モニタ 01-12-/B ^{*1}
	HA モニタ 01-12-/C ^{*1}
	HA モニタ 01-12-/D ^{*1}
	HA モニタ 01-13 ^{*1}
	HA モニタ 01-13-/A ^{*1}
	HA モニタ 01-20 ^{*1}
	HA モニタ 01-22 ^{*1}
	HA モニタ 01-32 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-33 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-40 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-41 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-42 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-42-01 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-50 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-51 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-52 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-52-01 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-53 ^{*1} ^{*2}
	HA モニタ 01-53-01 ^{*1} ^{*2}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle9i RAC Release 2(9.2.0.8.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} RHCM 1.0.0-0
2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELhugemem	CLUSTERPRO SE 3.1-8 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.0 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.1-2 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※10} HA モニタ 01-12 ^{※1} HA モニタ 01-12-/A ^{※1} HA モニタ 01-12-/B ^{※1} HA モニタ 01-12-/C ^{※1} HA モニタ 01-12-/D ^{※1} HA モニタ 01-13 ^{※1} HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-20 ^{※1} HA モニタ 01-22 ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle9i RAC Release 2(9.2.0.8.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} RHCM 1.0.4-0
2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELhugemem	LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} RHCM 1.0.4-0
2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.0 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.1-2 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※10} HA モニタ 01-12 ^{※1} HA モニタ 01-12-/A ^{※1} HA モニタ 01-12-/B ^{※1} HA モニタ 01-12-/C ^{※1} HA モニタ 01-12-/D ^{※1} HA モニタ 01-13 ^{※1} HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-20 ^{※1} HA モニタ 01-22 ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle9i RAC Release 2(9.2.0.8.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※10} HA モニタ 01-12 ^{※1} HA モニタ 01-12-/A ^{※1} HA モニタ 01-12-/B ^{※1} HA モニタ 01-12-/C ^{※1} HA モニタ 01-12-/D ^{※1} HA モニタ 01-13 ^{※1} HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-20 ^{※1} HA モニタ 01-22 ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.0-1 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.1-1 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.2-1 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{※10} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※10} HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-20 ^{※1} HA モニタ 01-22 ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} RHCM 1.0.17-0

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELhugemem	HA モニタ 01-13-/A※1 HA モニタ 01-33※1※2 HA モニタ 01-40※1※2 HA モニタ 01-41※1※2 HA モニタ 01-42※1※2 HA モニタ 01-42-01※1※2 HA モニタ 01-50※1※2 HA モニタ 01-51※1※2 HA モニタ 01-52※1※2 HA モニタ 01-52-01※1※2 HA モニタ 01-53※1※2 HA モニタ 01-53-01※1※2 HA モニタ 01-53-02※1※2 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0)※4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0)※11 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0)※6 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※7 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※7 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0)※8 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0)※9 RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.4-1※10 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0)※4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0)※11 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0)※6 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※7 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※7 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0)※8 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0)※9 RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELhugemem	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELhugemem	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3
2.6.9-67.0.15.EL	

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELhugemem	LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4}
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELhugemem	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELhugemem	HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-32-01 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELhugemem	HA モニタ 01-32-02 ^{※1※2} HA モニタ 01-32-03 ^{※1※2} HA モニタ 01-32-04 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELhugemem	HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELhugemem	HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELhugemem	HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELhugemem	HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※12}
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.6-1 ^{※10} LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※12}
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELhugemem	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELhugemem	Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※12}
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELhugemem	Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※11} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※7} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※12}

注※1

AMD 社製 Opteron のシステムへ、IA32 用のカーネルを適用した構成はサポートしません。

注※2

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※3

raw デバイスを使用した Oracle Cluster Management Software の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※4

自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※5

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
 - 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- また、カーネルに 2.6.9-11.ELsmp を使用している場合は、次の構成もサポートします。
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※6

次に示す構成をサポートします。

- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※7

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※8

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成
- Oracle Cluster File System 2 および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※9

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※10

「3.13 CLUSTERPRO の設定」を参照してください。

注※11

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※12

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

表 3-13 Red Hat Enterprise Linux ES4(IA32)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp 2.6.9-11.ELhugemem	HA モニタ 01-12 ^{※1} HA モニタ 01-12-/A ^{※1} HA モニタ 01-12-/B ^{※1} HA モニタ 01-12-/C ^{※1} HA モニタ 01-12-/D ^{※1} HA モニタ 01-13 ^{※1} HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-20 ^{※1} HA モニタ 01-22 ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※4} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.0-0
2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELhugemem	CLUSTERPRO SE 3.1-8 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.0 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1.1-2 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※9} HA モニタ 01-12 ^{※1} HA モニタ 01-12-/A ^{※1} HA モニタ 01-12-/B ^{※1} HA モニタ 01-12-/C ^{※1} HA モニタ 01-12-/D ^{※1}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-13 ^{※1} HA モニタ 01-13/A ^{※1} HA モニタ 01-20 ^{※1} HA モニタ 01-22 ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.4-0
2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELhugemem	LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.4-0

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.0 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1.1-2 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※9} HA モニタ 01-12 ^{※1} HA モニタ 01-12-/A ^{※1} HA モニタ 01-12-/B ^{※1} HA モニタ 01-12-/C ^{※1} HA モニタ 01-12-/D ^{※1} HA モニタ 01-13 ^{※1} HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-20 ^{※1} HA モニタ 01-22 ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{※9} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※9} HA モニタ 01-12 ^{※1} HA モニタ 01-12-/A ^{※1} HA モニタ 01-12-/B ^{※1} HA モニタ 01-12-/C ^{※1} HA モニタ 01-12-/D ^{※1}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-13 ^{*1} HA モニタ 01-13/A ^{*1} HA モニタ 01-20 ^{*1} HA モニタ 01-22 ^{*1} HA モニタ 01-32 ^{*1*2} HA モニタ 01-33 ^{*1*2} HA モニタ 01-40 ^{*1*2} HA モニタ 01-41 ^{*1*2} HA モニタ 01-42 ^{*1*2} HA モニタ 01-42-01 ^{*1*2} HA モニタ 01-50 ^{*1*2} HA モニタ 01-51 ^{*1*2} HA モニタ 01-52 ^{*1*2} HA モニタ 01-52-01 ^{*1*2} HA モニタ 01-53 ^{*1*2} HA モニタ 01-53-01 ^{*1*2} HA モニタ 01-53-02 ^{*1*2} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{*3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{*6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{*6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{*7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{*8} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.0-1 ^{*9} CLUSTERPRO X 1.1.1-1 ^{*9} CLUSTERPRO X 1.1.2-1 ^{*9} CLUSTERPRO X 1.1.3 ^{*9} CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{*9} HA モニタ 01-13/A ^{*1} HA モニタ 01-20 ^{*1} HA モニタ 01-22 ^{*1} HA モニタ 01-32 ^{*1*2} HA モニタ 01-33 ^{*1*2} HA モニタ 01-40 ^{*1*2} HA モニタ 01-41 ^{*1*2} HA モニタ 01-42 ^{*1*2} HA モニタ 01-42-01 ^{*1*2} HA モニタ 01-50 ^{*1*2} HA モニタ 01-51 ^{*1*2} HA モニタ 01-52 ^{*1*2}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELhugemem	HA モニタ 01-13-1A ^{※1} HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2} HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2} HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.4-1 ^{※9} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELhugemem	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELhugemem	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3
2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELhugemem	LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10}
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELhugemem	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELhugemem	HA モニタ 01-13-/A ^{※1} HA モニタ 01-32 ^{※1※2} HA モニタ 01-32-01 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELhugemem	HA モニタ 01-32-02 ^{※1※2} HA モニタ 01-32-03 ^{※1※2} HA モニタ 01-32-04 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELhugemem	HA モニタ 01-33 ^{※1※2} HA モニタ 01-40 ^{※1※2} HA モニタ 01-41 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELhugemem	HA モニタ 01-42 ^{※1※2} HA モニタ 01-42-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-50 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELhugemem	HA モニタ 01-51 ^{※1※2} HA モニタ 01-52 ^{※1※2} HA モニタ 01-52-01 ^{※1※2}
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELhugemem	HA モニタ 01-53 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-01 ^{※1※2} HA モニタ 01-53-02 ^{※1※2} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※11}
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELhugemem	CLUSTERPRO X 1.1.6-1 ^{※9} LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※11}
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELhugemem	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELhugemem	Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※11}
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELhugemem	Oracle RAC 10g Release 2(10.1.0.5.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※5} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※6} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※6}
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELhugemem	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※7} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※8} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※11}

注※1

AMD 社製 Opteron のシステムへ、IA32 用のカーネルを適用した構成はサポートしません。

注※2

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※3

自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※4

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

また, カーネルに 2.6.9-11.ELsmp を使用している場合は, 次の構成もサポートします。

- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※5

次に示す構成をサポートします。

- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※6

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※7

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成
- Oracle Cluster File System 2 および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※8

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※9

「3.13 CLUSTERPRO の設定」を参照してください。

注※10

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※11

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

表 3-14 Red Hat Enterprise Linux AS4(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-11.EL	HA モニタ 01-12 HA モニタ 01-12/A HA モニタ 01-12/B HA モニタ 01-12/C HA モニタ 01-12/D HA モニタ 01-13 HA モニタ 01-13/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0)※2 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0)※2 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0)※3
2.6.9-34.EL	HA モニタ 01-12 HA モニタ 01-12/A HA モニタ 01-12/B HA モニタ 01-12/C HA モニタ 01-12/D HA モニタ 01-13 HA モニタ 01-13/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0)※2 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0)※2 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0)※3 RHCM 1.0.4-0
2.6.9-42.EL	HA モニタ 01-12 HA モニタ 01-12/A HA モニタ 01-12/B HA モニタ 01-12/C HA モニタ 01-12/D HA モニタ 01-13 HA モニタ 01-13/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31※1

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.2A00 ^{※4} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-42.0.3.EL	HA モニタ 01-12 HA モニタ 01-12-/A HA モニタ 01-12-/B HA モニタ 01-12-/C HA モニタ 01-12-/D HA モニタ 01-13 HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31 ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-55.EL	HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31 ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.2A30 ^{※4※5} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-55.ELlargesmp	HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31 ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp	HA モニタ 01-13-/A Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2}
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp	
2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp	

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp	
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0)**2
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0)**2
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0)**3
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp	
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp	
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp	
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELlargesmp	
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp	
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp	
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELlargesmp	
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELlargesmp	

注※1

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※2

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」の注意事項を参照してください。

注※3

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」の注意事項を参照してください。

注※4

PRIMECLUSTER Enterprise Edition および PRIMECLUSTER GDS の構成だけをサポートします。

注※5

PRIMECLUSTER GDS による RAID 装置筐体間ミラーリング機能はサポートしません。

表 3-15 Red Hat Enterprise Linux ES4(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-11.EL	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*2}
2.6.9-34.EL	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*2} RHCM 1.0.4-0
2.6.9-42.EL	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*2} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.2A00 ^{*3} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-42.0.3.EL	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*2} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*2} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.2A30 ^{*3*4} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*1}
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*2} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp	
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp	
2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp	
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp	
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{*1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{*1}
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{*2}
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp	
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp	
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp	
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp	
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELlargesmp	

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp	
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp	
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELlargesmp	
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELlargesmp	

注※1

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※2

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※3

PRIMECLUSTER Enterprise Edition および PRIMECLUSTER GDS の構成だけをサポートします。

注※4

PRIMECLUSTER GDS による RAID 装置筐体間ミラーリング機能はサポートしません。

表 3-16 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(EM64T)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp	HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-32※1 HA モニタ 01-33※1 HA モニタ 01-40※1 HA モニタ 01-41※1 HA モニタ 01-42※1 HA モニタ 01-42-01※1 HA モニタ 01-50※1 HA モニタ 01-51※1 HA モニタ 01-52※1 HA モニタ 01-52-01※1 HA モニタ 01-53※1 HA モニタ 01-53-01※1 HA モニタ 01-53-02※1 LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.0-0 VCS 4.1 MP3 ^{※7}
2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELlargesmp	HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-32 ^{※1} HA モニタ 01-33 ^{※1} HA モニタ 01-40 ^{※1} HA モニタ 01-41 ^{※1} HA モニタ 01-42 ^{※1} HA モニタ 01-42-01 ^{※1} HA モニタ 01-50 ^{※1} HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.4-0 VCS 4.1 MP3 ^{※7}
2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELlargesmp	LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.4-0
2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELlargesmp	HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-32 ^{※1} HA モニタ 01-33 ^{※1} HA モニタ 01-40 ^{※1} HA モニタ 01-41 ^{※1} HA モニタ 01-42 ^{※1} HA モニタ 01-42-01 ^{※1} HA モニタ 01-50 ^{※1} HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.11-0 VCS 4.1 MP3 ^{※7}
2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELlargesmp	HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-20 HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-32 ^{※1} HA モニタ 01-33 ^{※1}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-40 ^{※1} HA モニタ 01-41 ^{※1} HA モニタ 01-42 ^{※1} HA モニタ 01-42-01 ^{※1} HA モニタ 01-50 ^{※1} HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELlargesmp	CLUSTERPRO X 1.1.0-1 ^{※8} CLUSTERPRO X 1.1.1-1 ^{※8} CLUSTERPRO X 1.1.2-1 ^{※8} HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-33 ^{※1} HA モニタ 01-40 ^{※1} HA モニタ 01-41 ^{※1} HA モニタ 01-42 ^{※1} HA モニタ 01-42-01 ^{※1} HA モニタ 01-50 ^{※1} HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp	HA モニタ 01-13-/A HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-32 ^{※1} HA モニタ 01-33 ^{※1} HA モニタ 01-40 ^{※1} HA モニタ 01-41 ^{※1} HA モニタ 01-42 ^{※1} HA モニタ 01-42-01 ^{※1} HA モニタ 01-50 ^{※1} HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELlargesmp	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-67.0.1.ELlargesmp	LifeKeeper v6 Update4
2.6.9-67.0.7.EL	LifeKeeper v7
2.6.9-67.0.7.ELsmp	LifeKeeper v7 Update1
2.6.9-67.0.7.ELlargesmp	LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.15.EL	LifeKeeper v6 Update2
2.6.9-67.0.15.ELsmp	LifeKeeper v6 Update3
2.6.9-67.0.15.ELlargesmp	LifeKeeper v6 Update4
2.6.9-67.0.22.EL	LifeKeeper v7
2.6.9-67.0.22.ELsmp	LifeKeeper v7 Update1
2.6.9-67.0.22.ELlargesmp	LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-78.EL	HA モニタ 01-13-/A
2.6.9-78.ELsmp	HA モニタ 01-32 ^{※1}
2.6.9-78.ELlargesmp	HA モニタ 01-32-01 ^{※1}
2.6.9-78.0.1.EL	HA モニタ 01-32-02 ^{※1}
2.6.9-78.0.1.ELsmp	HA モニタ 01-32-03 ^{※1}
2.6.9-78.0.1.ELlargesmp	HA モニタ 01-32-04 ^{※1}
2.6.9-78.0.5.EL	HA モニタ 01-33 ^{※1}
2.6.9-78.0.5.ELsmp	HA モニタ 01-40 ^{※1}
2.6.9-78.0.5.ELlargesmp	HA モニタ 01-41 ^{※1}
2.6.9-78.0.8.EL	HA モニタ 01-42 ^{※1}
2.6.9-78.0.8.ELsmp	HA モニタ 01-42-01 ^{※1}
2.6.9-78.0.8.ELlargesmp	HA モニタ 01-50 ^{※1}
2.6.9-78.0.17.EL	HA モニタ 01-51 ^{※1}
2.6.9-78.0.17.ELsmp	HA モニタ 01-52 ^{※1}
2.6.9-78.0.17.ELlargesmp	HA モニタ 01-52-01 ^{※1}
2.6.9-78.0.22.EL	HA モニタ 01-53 ^{※1}
2.6.9-78.0.22.ELsmp	HA モニタ 01-53-01 ^{※1}
2.6.9-78.0.22.ELlargesmp	HA モニタ 01-53-02 ^{※1} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9}
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELlargesmp	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp	LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2}
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9}
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3}
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※6} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9}

注※1

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※2

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※3

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※4

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※5

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成
- Oracle Cluster File System 2 および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※6

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※7

次に示す機能についてはサポートしません。

- VCS が提供する I/O フェンシング機能
- VCS が提供する DiskReservation 機能
- VxVM および VxFS との連携

注※8

「3.13 CLUSTERPRO の設定」を参照してください。

注※9

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

表 3-17 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(AMD64)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-11.EL	LifeKeeper v6
2.6.9-11.ELsmp	LifeKeeper v6 Update1
	LifeKeeper v6 Update2
	LifeKeeper v6 Update3
	LifeKeeper v6 Update4
	LifeKeeper v7
	LifeKeeper v7 Update1
	LifeKeeper v7 Update2
	LifeKeeper v7 Update3
	LifeKeeper v7 Update4
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1}
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2}
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2}
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3}
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.0-0 VCS 4.1 MP3 ^{※6}
2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELlargesmp	LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.4-0 VCS 4.1 MP3 ^{※6}
2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELlargesmp	LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.4-0
2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELlargesmp	LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5}

カーネル	クラスタソフトウェア
	RHCM 1.0.11-0 VCS 4.1 MP3 ^{※6}
2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELlargesmp	LifeKeeper v6 LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.11-0
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELlargesmp	CLUSTERPRO X 1.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 1.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 1.1.2-1 ^{※7} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELlargesmp	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.1.EL	LifeKeeper v6 Update2

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp	LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} RHCM 1.0.17-0
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELlargesmp	LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp	LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3}
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5}
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※8}
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp	
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELlargesmp	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp	LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.9-89.0.20.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1}
2.6.9-89.33.1.EL	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2}
2.6.9-89.33.1.ELsmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2}
2.6.9-89.33.1.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※8}
2.6.9-100.EL	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.2.0) ^{※1}
2.6.9-100.ELsmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2}
2.6.9-100.ELlargesmp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※2}
2.6.9-101.EL	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※3}
2.6.9-101.ELsmp	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4}
2.6.9-101.ELlargesmp	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※8}

注※1

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」の注意事項を参照してください。

注※2

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」の注意事項を参照してください。

注※3

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」の注意事項を参照してください。

注※4

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成
- Oracle Cluster File System 2 および Oracle Clusterware の構成

「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」の注意事項を参照してください。

注※5

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※6

次に示す機能についてはサポートしません。

- VCS が提供する I/O フェンシング機能
- VCS が提供する DiskReservation 機能
- VxVM および VxFS との連携

注※7

「3.13 CLUSTERPRO の設定」を参照してください。

注※8

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-18 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp 2.6.9-11.ELhugemem	LVM2.01.08-1.0.RHEL4
	2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELhugemem	LVM2.02.01-1.3.RHEL4 LVM2.02.21-5.el4
	2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELhugemem	LVM2.02.01-1.3.RHEL4
	2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELhugemem	LVM2.02.06-6.0.RHEL4
	2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELhugemem	
	2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELhugemem	LVM2.02.21-5.el4
	2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELhugemem	
	2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELhugemem	LVM2.02.27-2.el4

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ	
	2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELhugemem		
	2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELhugemem		
	2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELhugemem		
	2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELhugemem		
	2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELhugemem	LVM2.02.21-5.el4 LVM2.02.37-3.el4	
	2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELhugemem		
	2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELhugemem		
	2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELhugemem		
	2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELhugemem		
	2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELhugemem		
	2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELhugemem		LVM2.02.42-5.el4
	2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELhugemem		
	2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELhugemem		
	2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELhugemem	LVM2.02.42-9.el4	
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELhugemem			
IPF		2.6.9-11.EL	LVM2.01.08-1.0.RHEL4
		2.6.9-34.EL	LVM2.02.01-1.3.RHEL4 LVM2.02.21-5.el4
		2.6.9-42.EL	LVM2.02.06-6.0.RHEL4
		2.6.9-42.0.3.EL	
	2.6.9-55.EL	LVM2.02.21-5.el4	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ		
	2.6.9-55.ELlargesmp	LVM2.02.27-2.el4		
	2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp			
	2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELlargesmp			
	2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp			
	2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp			
	2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp			
	2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp			
	2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELlargesmp		LVM2.02.21-5.el4 LVM2.02.37-3.el4	
	2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp			
	2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp			
	2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp			
	2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp			
	2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp			
	2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELlargesmp		LVM2.02.42-5.el4	
	2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp			
	2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp			
	2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELlargesmp		LVM2.02.42-9.el4	
	2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELlargesmp			
	EM64T/AMD64		2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp	LVM2.01.08-1.0.RHEL4
			2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELlargesmp	LVM2.02.01-1.3.RHEL4 LVM2.02.21-5.el4
2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELlargesmp		LVM2.02.01-1.3.RHEL4		
2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELlargesmp		LVM2.02.06-6.0.RHEL4		
2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELlargesmp				

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ	
	2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELlargesmp	LVM2.02.21-5.el4	
	2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp		
	2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELlargesmp		LVM2.02.27-2.el4
	2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp		
	2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp		
	2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp		
	2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp		
	2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELlargesmp	LVM2.02.21-5.el4 LVM2.02.37-3.el4	
	2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp		
	2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp		
	2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp		
	2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp		
	2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp		
	2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELlargesmp		LVM2.02.42-5.el4
	2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp		
	2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp		
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELlargesmp	LVM2.02.42-9.el4		

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
	2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELlargesmp	

(3) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次に示します。

- ext2 (OS に同梱)
- ext3 (OS に同梱)

(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境

HDLM は「表 3-19 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の BladeSymphony の動作環境」に示す環境で BladeSymphony をサポートします。なお、BladeSymphony の各モデルがサポートする OS(カーネル)の詳細については、BladeSymphony のマニュアルを参照してください。ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-19 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の BladeSymphony の動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム
IA32	2.6.9-11.ELsmp	hitachi	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ※ ¹ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ※ ¹ ※ ² Universal Storage Platform V/VM シリーズ※ ¹ Virtual Storage Platform シリーズ※ ¹
	2.6.9-34.ELsmp		
	2.6.9-55.ELsmp		
	2.6.9-55.0.12.ELsmp		
	2.6.9-67.0.1.ELsmp		
	2.6.9-78.ELsmp		
	2.6.9-78.0.1.ELsmp		
	2.6.9-78.0.5.ELsmp		
	2.6.9-78.0.8.ELsmp		
	2.6.9-78.0.17.ELsmp		
	2.6.9-78.0.22.ELsmp		
IPF	2.6.9-11.EL		
	2.6.9-34.EL		
	2.6.9-42.0.3.EL		
	2.6.9-55.EL		
	2.6.9-55.0.12.EL		
	2.6.9-67.0.1.EL		
	2.6.9-78.EL		
	2.6.9-78.0.1.EL		
	2.6.9-78.0.5.EL		
	2.6.9-78.0.8.EL		
	2.6.9-78.0.17.EL		
2.6.9-78.0.22.EL			
EM64T	2.6.9-11.ELsmp		
	2.6.9-34.ELsmp		

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.9-55.ELsmp		
	2.6.9-55.0.12.ELsmp		
	2.6.9-67.0.1.ELsmp		
	2.6.9-78.ELsmp		
	2.6.9-78.0.1.ELsmp		
	2.6.9-78.0.5.ELsmp		
	2.6.9-78.0.8.ELsmp		
	2.6.9-78.0.17.ELsmp		
	2.6.9-78.0.22.ELsmp		

注※1

XP シリーズはサポートしていません。

注※2

ブートディスクに HDLM デバイスを指定した環境ではサポートしていません。

HDLM は次の各表に示す環境でブートディスクをサポートします。

- ・「表 3-20 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (IA32)」
- ・「表 3-21 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (IPF)」
- ・「表 3-22 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (EM64T/AMD64)」

表 3-20 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境(IA32)

カーネル	HBA	対応する ストレージシステム	
2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp 2.6.9-11.ELhugemem	QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ	
2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELhugemem			
2.6.9-34.0.2.EL 2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELhugemem			
2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELhugemem			
2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELhugemem			
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELhugemem			Emulex QLogic
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELhugemem			

カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELhugemem		
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELhugemem		
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELhugemem		
2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELhugemem		
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELhugemem		
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELhugemem		
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELhugemem		
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELhugemem		
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELhugemem		
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELhugemem		
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELhugemem		
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELhugemem		
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELhugemem		
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELhugemem		
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELhugemem		
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELhugemem		

表 3-21 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境(IPF)

カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELlargesmp	Emulex	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp		
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELlargesmp		
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp		
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp		
2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp		
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp		
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELlargesmp		
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp		
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp		
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp		
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp		
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp		
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELlargesmp		
2.6.9-89.0.20.EL 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp		
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp		
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELlargesmp		
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELlargesmp		

表 3-22 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合のブートディスクの動作環境(EM64T/AMD64)

カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
2.6.9-11.EL 2.6.9-11.ELsmp	QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/VM シリーズ
2.6.9-34.EL 2.6.9-34.ELsmp 2.6.9-34.ELlargesmp		
2.6.9-34.0.2.EL		

カーネル	HBA	対応する ストレージシステム	
2.6.9-34.0.2.ELsmp 2.6.9-34.0.2.ELhugemem		Virtual Storage Platform シリーズ	
2.6.9-42.EL 2.6.9-42.ELsmp 2.6.9-42.ELlargesmp			
2.6.9-42.0.3.EL 2.6.9-42.0.3.ELsmp 2.6.9-42.0.3.ELlargesmp			
2.6.9-55.EL 2.6.9-55.ELsmp 2.6.9-55.ELlargesmp	Emulex QLogic		
2.6.9-55.0.12.EL 2.6.9-55.0.12.ELsmp 2.6.9-55.0.12.ELlargesmp			
2.6.9-67.EL 2.6.9-67.ELsmp 2.6.9-67.ELlargesmp			
2.6.9-67.0.1.EL 2.6.9-67.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.1.ELlargesmp			
2.6.9-67.0.7.EL 2.6.9-67.0.7.ELsmp 2.6.9-67.0.7.ELlargesmp			
2.6.9-67.0.15.EL 2.6.9-67.0.15.ELsmp 2.6.9-67.0.15.ELlargesmp			
2.6.9-67.0.22.EL 2.6.9-67.0.22.ELsmp 2.6.9-67.0.22.ELlargesmp			
2.6.9-78.EL 2.6.9-78.ELsmp 2.6.9-78.ELlargesmp			
2.6.9-78.0.1.EL 2.6.9-78.0.1.ELsmp 2.6.9-78.0.1.ELlargesmp			
2.6.9-78.0.5.EL 2.6.9-78.0.5.ELsmp 2.6.9-78.0.5.ELlargesmp			
2.6.9-78.0.8.EL 2.6.9-78.0.8.ELsmp 2.6.9-78.0.8.ELlargesmp			
2.6.9-78.0.17.EL 2.6.9-78.0.17.ELsmp 2.6.9-78.0.17.ELlargesmp			
2.6.9-78.0.22.EL 2.6.9-78.0.22.ELsmp 2.6.9-78.0.22.ELlargesmp			
2.6.9-89.EL 2.6.9-89.ELsmp 2.6.9-89.ELlargesmp			
2.6.9-89.0.20.EL			

カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
2.6.9-89.0.20.ELsmp 2.6.9-89.0.20.ELlargesmp		
2.6.9-89.33.1.EL 2.6.9-89.33.1.ELsmp 2.6.9-89.33.1.ELlargesmp		
2.6.9-100.EL 2.6.9-100.ELsmp 2.6.9-100.ELlargesmp		
2.6.9-101.EL 2.6.9-101.ELsmp 2.6.9-101.ELlargesmp		

BladeSymphony 環境で HDLM デバイスをブートディスクとして使用する場合の動作環境を次の表に示します。

表 3-23 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 で BladeSymphony およびブートディスクを使用している場合の動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
IA32	2.6.9-11.ELsmp	hitachi	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ※ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ※ Virtual Storage Platform シリ ーズ※
	2.6.9-34.ELsmp		
	2.6.9-55.ELsmp		
	2.6.9-55.0.12.ELsmp		
	2.6.9-78.ELsmp		
	2.6.9-78.0.1.ELsmp		
	2.6.9-78.0.5.ELsmp		
	2.6.9-78.0.8.ELsmp		
	2.6.9-78.0.17.ELsmp		
	2.6.9-78.0.22.ELsmp		
IPF	2.6.9-11.EL		
	2.6.9-34.EL		
	2.6.9-42.0.3.EL		
	2.6.9-55.EL		
	2.6.9-55.0.12.EL		
	2.6.9-78.EL		
	2.6.9-78.0.1.EL		
	2.6.9-78.0.5.EL		
	2.6.9-78.0.8.EL		
	2.6.9-78.0.17.EL		
2.6.9-78.0.22.EL			
EM64T	2.6.9-11.ELsmp		
	2.6.9-34.ELsmp		
	2.6.9-55.ELsmp		
	2.6.9-55.0.12.ELsmp		
	2.6.9-78.ELsmp		

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.9-78.0.1.ELsmp		
	2.6.9-78.0.5.ELsmp		
	2.6.9-78.0.8.ELsmp		
	2.6.9-78.0.17.ELsmp		
	2.6.9-78.0.22.ELsmp		

注※

XP シリーズはサポートしていません。

BladeSymphony の環境で HDLM を使用する際の注意事項

BladeSymphony の環境で HDLM を使用する場合は、下記の機能を使用できません。

- HotPlug
- SystemManager 連携

3.1.4 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する際の関連製品

Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する際の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア (FC-SAN を使用する場合)

HDLM をクラスタ構成で使用する場合、そのクラスタを構成するすべてのノードには同じバージョンの HDLM をインストールしてください。異なるバージョンがインストールされている場合、クラスタが正常に動作しないおそれがあります。次に示すコマンドを実行して表示される「HDLM Version」および「Service Pack Version」が一致する場合、同じバージョンの HDLM になります。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

クラスタ構成を構築する際の関連プログラムを次の各表に示します。

- 「表 3-24 Red Hat Enterprise Linux 5(IA32)を使用する際のクラスタソフトウェア」
- 「表 3-25 Red Hat Enterprise Linux 5(IPF)を使用する際のクラスタソフトウェア」
- 「表 3-26 Red Hat Enterprise Linux 5(EM64T/AMD64)を使用する際のクラスタソフトウェア」

表 3-24 Red Hat Enterprise Linux 5(IA32)を使用する際のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.18-8.el5	LifeKeeper v6 Update1
2.6.18-8.el5PAE	LifeKeeper v6 Update2
	LifeKeeper v6 Update3
	LifeKeeper v6 Update4
	LifeKeeper v7
	LifeKeeper v7 Update1
	LifeKeeper v7 Update2
	LifeKeeper v7 Update3
	LifeKeeper v7 Update4
	LifeKeeper v7 Update5
	LifeKeeper v8

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} RHCM 2.0.60-1
2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.0.0-1 ^{※5※6} HA モニタ 01-22 ^{※7} HA モニタ 01-32 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※7※8} HA モニタ 01-33 ^{※7※8} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-53.1.13.el5 2.6.18-53.1.13.el5PAE	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-53.1.21.el5 2.6.18-53.1.21.el5PAE	HA モニタ 01-22 ^{※7} HA モニタ 01-32 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※7※8} HA モニタ 01-33 ^{※7※8} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-92.el5 2.6.18-92.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.0.2-1 ^{※5※6} HA モニタ 01-32 ^{※7※8}
2.6.18-92.1.6.el5 2.6.18-92.1.6.el5PAE	HA モニタ 01-32-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※7※8} HA モニタ 01-33 ^{※7※8} HA モニタ 01-40 ^{※7※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-41※7※8 HA モニタ 01-42※7※8 HA モニタ 01-42-01※7※8 HA モニタ 01-50※7※8 HA モニタ 01-51※7※8 HA モニタ 01-52※7※8 HA モニタ 01-52-01※7※8 HA モニタ 01-53※7※8 HA モニタ 01-53-01※7※8 HA モニタ 01-53-02※7※8 HA モニタ 01-54※8※12 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※2 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0)※3 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0)※4 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0)※9 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0)※9 RHCM 2.0.84-2
2.6.18-92.1.13.el5 2.6.18-92.1.13.el5PAE	HA モニタ 01-32※7※8 HA モニタ 01-32-01※7※8
2.6.18-92.1.22.el5 2.6.18-92.1.22.el5PAE	HA モニタ 01-32-02※7※8 HA モニタ 01-32-03※7※8 HA モニタ 01-32-04※7※8 HA モニタ 01-33※7※8 HA モニタ 01-40※7※8 HA モニタ 01-41※7※8 HA モニタ 01-42※7※8 HA モニタ 01-42-01※7※8 HA モニタ 01-50※7※8 HA モニタ 01-51※7※8 HA モニタ 01-52※7※8 HA モニタ 01-52-01※7※8 HA モニタ 01-53※7※8 HA モニタ 01-53-01※7※8 HA モニタ 01-53-02※7※8 HA モニタ 01-54※8※12 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.84-2
2.6.18-128.el5 2.6.18-128.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.1.2-1 ^{※5※6} CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※6} HA モニタ 01-32 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※7※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※7※8} HA モニタ 01-33 ^{※7※8} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.98-1
2.6.18-128.1.10.el5 2.6.18-128.1.10.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.98-1
2.6.18-128.1.14.el5	HA モニタ 01-40 ^{※7※8}
2.6.18-128.1.14.el5PAE	HA モニタ 01-41 ^{※7※8}
2.6.18-128.7.1.el5	HA モニタ 01-42 ^{※7※8}
2.6.18-128.7.1.el5PAE	HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.98-1
2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.1.2-1 ^{※5※6} CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※6} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A00 ^{※10※11}
2.6.18-164.9.1.el5 2.6.18-164.9.1.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※6} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9}
2.6.18-164.11.1.el5 2.6.18-164.11.1.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※6} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9}
2.6.18-164.15.1.el5 2.6.18-164.15.1.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※6} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-53※7※8 HA モニタ 01-53-01※7※8 HA モニタ 01-53-02※7※8 HA モニタ 01-54※8※12 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※2 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0)※3 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0)※4 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0)※9 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0)※9
2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE	CLUSTERPRO X 2.1.4-1※6 CLUSTERPRO X 3.1.1-1※6 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※2 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0)※3 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0)※4 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0)※9 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0)※9 RHCM 2.0.115-34
2.6.18-194.11.1.el5 2.6.18-194.11.1.el5PAE	LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2
2.6.18-194.11.3.el5 2.6.18-194.11.3.el5PAE	LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※2 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0)※3 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0)※4 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0)※9 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0)※9 RHCM 2.0.115-34

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.18-194.17.1.el5 2.6.18-194.17.1.el5PAE	CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} LifeKeeper v7 Update1
2.6.18-194.32.1.el5 2.6.18-194.32.1.el5PAE	LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.115-34
2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE	CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A00 ^{※10※11} RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.1.1.el5 2.6.18-238.1.1.el5PAE	CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8}
2.6.18-238.9.1.el5 2.6.18-238.9.1.el5PAE	HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-52-01※7※8 HA モニタ 01-53※7※8 HA モニタ 01-53-01※7※8 HA モニタ 01-53-02※7※8 HA モニタ 01-54※8※12 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※2 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0)※3 Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0)※4 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0)※9 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0)※9 RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.19.1.el5 2.6.18-238.19.1.el5PAE	HA モニタ 01-40※7※8 HA モニタ 01-41※7※8 HA モニタ 01-42※7※8 HA モニタ 01-42-01※7※8 HA モニタ 01-50※7※8 HA モニタ 01-51※7※8 HA モニタ 01-52※7※8 HA モニタ 01-52-01※7※8 HA モニタ 01-53※7※8 HA モニタ 01-53-01※7※8 HA モニタ 01-53-02※7※8 HA モニタ 01-54※8※12 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0)※1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597※2 RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.28.1.el5 2.6.18-238.28.1.el5PAE	HA モニタ 01-40※7※8 HA モニタ 01-41※7※8 HA モニタ 01-42※7※8 HA モニタ 01-42-01※7※8 HA モニタ 01-50※7※8 HA モニタ 01-51※7※8 HA モニタ 01-52※7※8 HA モニタ 01-52-01※7※8 HA モニタ 01-53※7※8 HA モニタ 01-53-01※7※8 HA モニタ 01-53-02※7※8 HA モニタ 01-54※8※12 LifeKeeper v7 Update3

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} RHCM 2.0.115-68
2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE	CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8} HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.115-85
2.6.18-274.12.1.el5 2.6.18-274.12.1.el5PAE	CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※6} HA モニタ 01-40 ^{※7※8}
2.6.18-274.18.1.el5 2.6.18-274.18.1.el5PAE	HA モニタ 01-41 ^{※7※8} HA モニタ 01-42 ^{※7※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-50 ^{※7※8} HA モニタ 01-51 ^{※7※8} HA モニタ 01-52 ^{※7※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※7※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※7※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※12} LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.115-85
2.6.18-308.el5 2.6.18-308.el5PAE	LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.115-96
2.6.18-308.8.2.el5 2.6.18-308.8.2.el5PAE	LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.115-96
2.6.18-308.11.1.el5 2.6.18-308.11.1.el5PAE	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2}
2.6.18-308.16.1.el5 2.6.18-308.16.1.el5PAE	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.115-96
2.6.18-348.el5 2.6.18-348.el5PAE	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※2}
2.6.18-348.1.1.el5 2.6.18-348.1.1.el5PAE	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※9} RHCM 2.0.115-109

注※1

次に示す構成をサポートします。

- Oracle Cluster File System 2 および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成

- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※2

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※3

次に示す構成をサポートします。

- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成
- Oracle Cluster File System 2 および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※4

次に示す構成をサポートします。

- Oracle Cluster File System 2 および Oracle Clusterware の構成
- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※5

Disk モニタ (TUR(legacy)) による監視は未サポートです。

注※6

「3.13 CLUSTERPRO の設定」を参照してください。

注※7

AMD 社製 Opteron のシステムへ, IA32 用のカーネルを適用した構成はサポートしません。

注※8

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は, OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※9

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

また, HDLM デバイス名を ASM に直接指定できます。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※10

PRIMECLUSTER Enterprise Edition および PRIMECLUSTER GDS の構成だけをサポートします。

注※11

PRIMECLUSTER GDS による RAID 装置筐体間ミラーリング機能はサポートしません。

注※12

HA モニタはパーシステントリザーブをサポートしています。

表 3-25 Red Hat Enterprise Linux 5(IPF)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.18-8.el5	RHCM 2.0.60-1
2.6.18-53.el5	HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31 ^{※1} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-53.1.13.el5	RHCM 2.0.73-1
2.6.18-53.1.21.el5	HA モニタ 01-30 HA モニタ 01-31 ^{※1} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-92.el5	HA モニタ 01-31 ^{※1} RHCM 2.0.84-2
2.6.18-92.1.6.el5	RHCM 2.0.84-2
2.6.18-92.1.13.el5	
2.6.18-92.1.22.el5	
2.6.18-128.el5	RHCM 2.0.98-1
2.6.18-128.1.10.el5	
2.6.18-128.1.14.el5	
2.6.18-128.7.1.el5	
2.6.18-164.el5	PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A00 ^{※2※3}
2.6.18-164.9.1.el5	—
2.6.18-164.11.1.el5	
2.6.18-164.15.1.el5	
2.6.18-194.el5	RHCM 2.0.115-34
2.6.18-194.11.1.el5	
2.6.18-194.11.3.el5	
2.6.18-194.17.1.el5	
2.6.18-194.32.1.el5	
2.6.18-238.el5	RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.1.1.el5	
2.6.18-238.9.1.el5	
2.6.18-238.19.1.el5	
2.6.18-238.28.1.el5	
2.6.18-274.el5	RHCM 2.0.115-85
2.6.18-274.12.1.el5	
2.6.18-274.18.1.el5	
2.6.18-308.el5	RHCM 2.0.115-96
2.6.18-308.8.2.el5	
2.6.18-308.11.1.el5	
2.6.18-308.16.1.el5	

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.18-348.el5	RHCM 2.0.115-109
2.6.18-348.1.1.el5	

(凡例)

— : 該当なし

注※1

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※2

PRIMECLUSTER Enterprise Edition および PRIMECLUSTER GDS の構成だけをサポートします。

注※3

PRIMECLUSTER GDS による RAID 装置筐体間ミラーリング機能はサポートしません。

表 3-26 Red Hat Enterprise Linux 5(EM64T/AMD64)を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネル	クラスタソフトウェア
2.6.18-8.el5	LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} RHCM 2.0.60-1
2.6.18-53.el5	CLUSTERPRO X 2.0.2-1 ^{※6※7} HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-32 ^{※8} HA モニタ 01-32-01 ^{※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※8} HA モニタ 01-33 ^{※8} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update1 LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-53.1.13.el5	LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-53.1.21.el5	HA モニタ 01-22 HA モニタ 01-32 ^{※8} HA モニタ 01-32-01 ^{※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※8} HA モニタ 01-33 ^{※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update2 LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} RHCM 2.0.73-1
2.6.18-92.el5	CLUSTERPRO X 2.0.2-1 ^{※6※7}
2.6.18-92.1.6.el5	HA モニタ 01-32 ^{※8} HA モニタ 01-32-01 ^{※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※8} HA モニタ 01-33 ^{※8} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.84-2
2.6.18-92.1.13.el5	HA モニタ 01-32 ^{※8}
2.6.18-92.1.22.el5	HA モニタ 01-32-01 ^{※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※8} HA モニタ 01-33 ^{※8} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update3 LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.84-2
2.6.18-128.el5	CLUSTERPRO X 2.1.0-1 ^{※6※7} CLUSTERPRO X 2.1.2-1 ^{※6※7} CLUSTERPRO X 2.1.3-1 ^{※6※7} CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} HA モニタ 01-32 ^{※8} HA モニタ 01-32-01 ^{※8} HA モニタ 01-32-02 ^{※8} HA モニタ 01-32-03 ^{※8} HA モニタ 01-32-04 ^{※8} HA モニタ 01-33 ^{※8} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.98-1
2.6.18-128.1.10.el5	CLUSTERPRO X 2.1.2-1 ^{※6※7} CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.98-1
2.6.18-128.1.14.el5	CLUSTERPRO X 2.1.2-1 ^{※6※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.98-1
2.6.18-128.7.1.el5	HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v6 Update4 LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.98-1
2.6.18-164.el5	CLUSTERPRO X 2.1.2-1 ^{※6※7} CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A00 ^{※11※12}
2.6.18-164.9.1.el5	CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※7}
2.6.18-164.11.1.el5	CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7}
2.6.18-164.15.1.el5	CLUSTERPRO X 3.0.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13}

カーネル	クラスタソフトウェア
	LifeKeeper v7 LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10}
2.6.18-194.el5	CLUSTERPRO X 2.1.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-34
2.6.18-194.11.1.el5	LifeKeeper v7 Update1
2.6.18-194.11.3.el5	LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-34
2.6.18-194.17.1.el5	CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-34
2.6.18-194.32.1.el5	CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} LifeKeeper v7 Update1 LifeKeeper v7 Update2 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-34
2.6.18-238.el5	CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A00 ^{※11※12} RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.1.1.el5	CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8}

カーネル	クラスタソフトウェア
	HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.9.1.el5	CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.19.1.el5	HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} RHCM 2.0.115-68
2.6.18-238.28.1.el5	HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} RHCM 2.0.115-68
2.6.18-274.el5	CLUSTERPRO X 2.1.7-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.0-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7}

カーネル	クラスタソフトウェア
	CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-85
2.6.18-274.12.1.el5	CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※7}
2.6.18-274.18.1.el5	CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※7} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} HA モニタ 01-40 ^{※8} HA モニタ 01-41 ^{※8} HA モニタ 01-42 ^{※8} HA モニタ 01-42-01 ^{※8} HA モニタ 01-50 ^{※8} HA モニタ 01-51 ^{※8} HA モニタ 01-52 ^{※8} HA モニタ 01-52-01 ^{※8} HA モニタ 01-53 ^{※8} HA モニタ 01-53-01 ^{※8} HA モニタ 01-53-02 ^{※8} HA モニタ 01-54 ^{※8※13} LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-85
2.6.18-308.el5	CLUSTERPRO X 3.1.4-1 ^{※7} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-96
2.6.18-308.8.2.el5	LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-96
2.6.18-308.11.1.el5	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1}
2.6.18-308.16.1.el5	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10} RHCM 2.0.115-96
2.6.18-348.el5	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.1.0) ^{※1}
2.6.18-348.1.1.el5	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.4.0) ^{※3} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.5.0) + Patch 11066597 ^{※1}

カーネル	クラスタソフトウェア
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※4}
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※5}
	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) + Patch 8833297 ^{※5}
	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.1.0) ^{※9}
	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※10}
	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※10}
	RHCM 2.0.115-109

注※1

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※2

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※3

次に示す構成をサポートします。

- Oracle Cluster File System 2 および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- raw デバイスおよび Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※4

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※5

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Clusterware の構成

- Oracle Cluster File System 2 および Oracle Clusterware の構成
「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※6

Disk モニタ (TUR(legacy)) による監視は未サポートです。

注※7

「3.13 CLUSTERPRO の設定」を参照してください。

注※8

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※9

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

また、HDLM デバイス名を ASM に直接指定できます。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※10

次に示す構成をサポートします。

- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成
また、HDLM デバイス名を ASM に直接指定できます。

- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (ASMLib Kernel driver(ASMLib)を使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※11

PRIMECLUSTER Enterprise Edition および PRIMECLUSTER GDS の構成だけをサポートします。

注※12

PRIMECLUSTER GDS による RAID 装置筐体間ミラーリング機能はサポートしません。

注※13

HA モニタはパーシステントリザーブをサポートしています。

(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-27 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.18-8.el5	LVM2.02.16-3.el5
	2.6.18-8.el5PAE	
	2.6.18-53.el5	LVM2.02.26-3.el5
	2.6.18-53.el5PAE	
	2.6.18-53.1.13.el5	
	2.6.18-53.1.13.el5PAE	
	2.6.18-53.1.21.el5	
	2.6.18-53.1.21.el5PAE	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
	2.6.18-92.el5 2.6.18-92.el5PAE	LVM2.02.32-4.el5
	2.6.18-92.1.6.el5 2.6.18-92.1.6.el5PAE	
	2.6.18-92.1.13.el5 2.6.18-92.1.13.el5PAE	
	2.6.18-92.1.22.el5 2.6.18-92.1.22.el5PAE	
	2.6.18-128.el5 2.6.18-128.el5PAE	LVM2.02.40-6.el5
	2.6.18-128.1.10.el5 2.6.18-128.1.10.el5PAE	
	2.6.18-128.1.14.el5 2.6.18-128.1.14.el5PAE	
	2.6.18-128.7.1.el5 2.6.18-128.7.1.el5PAE	
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE	LVM2.02.46-8.el5
	2.6.18-164.9.1.el5 2.6.18-164.9.1.el5PAE	
	2.6.18-164.11.1.el5 2.6.18-164.11.1.el5PAE	
	2.6.18-164.15.1.el5 2.6.18-164.15.1.el5PAE	
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE	LVM2.02.56-8.el5
	2.6.18-194.11.1.el5 2.6.18-194.11.1.el5PAE	
	2.6.18-194.17.1.el5 2.6.18-194.17.1.el5PAE	
	2.6.18-194.11.3.el5 2.6.18-194.11.3.el5PAE	
	2.6.18-194.32.1.el5 2.6.18-194.32.1.el5PAE	
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE	LVM2.02.74-5.el5 LVM2.02.84-3.el5 [※]
	2.6.18-238.1.1.el5 2.6.18-238.1.1.el5PAE	
	2.6.18-238.9.1.el5 2.6.18-238.9.1.el5PAE	
2.6.18-238.19.1.el5 2.6.18-238.19.1.el5PAE		
2.6.18-238.28.1.el5 2.6.18-238.28.1.el5PAE		
2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE	LVM2.02.84-3.el5	
2.6.18-274.12.1.el5 2.6.18-274.12.1.el5PAE	LVM2.02.84-6.el5	
2.6.18-274.18.1.el5		

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
	2.6.18-274.18.1.el5PAE	
	2.6.18-308.el5	LVM2.02.88-7.el5
	2.6.18-308.el5PAE	
	2.6.18-308.8.2.el5	
	2.6.18-308.8.2.el5PAE	
	2.6.18-308.11.1.el5	
	2.6.18-308.11.1.el5PAE	
	2.6.18-308.16.1.el5	LVM2.02.88-10.el5
2.6.18-308.16.1.el5PAE		
	2.6.18-348.el5	LVM2.02.88-10.el5
	2.6.18-348.el5PAE	
2.6.18-348.1.1.el5		
2.6.18-348.1.1.el5PAE		
IPF	2.6.18-8.el5	LVM2.02.16-3.el5
	2.6.18-53.el5	LVM2.02.26-3.el5
	2.6.18-53.1.13.el5	
	2.6.18-53.1.21.el5	
	2.6.18-92.el5	LVM2.02.32-4.el5
	2.6.18-92.1.6.el5	
	2.6.18-92.1.13.el5	
	2.6.18-92.1.22.el5	
	2.6.18-128.el5	LVM2.02.40-6.el5
	2.6.18-128.1.10.el5	
	2.6.18-128.1.14.el5	
	2.6.18-128.7.1.el5	
	2.6.18-164.el5	LVM2.02.46-8.el5
	2.6.18-164.9.1.el5	
	2.6.18-164.11.1.el5	
	2.6.18-164.15.1.el5	
	2.6.18-194.el5	LVM2.02.56-8.el5
	2.6.18-194.11.1.el5	
	2.6.18-194.11.3.el5	
	2.6.18-194.17.1.el5	
	2.6.18-194.32.1.el5	
	2.6.18-238.el5	LVM2.02.74-5.el5
	2.6.18-238.1.1.el5	LVM2.02.84-3.el5*
	2.6.18-238.9.1.el5	
	2.6.18-238.19.1.el5	
	2.6.18-238.28.1.el5	
	2.6.18-274.el5	LVM2.02.84-3.el5
	2.6.18-274.12.1.el5	LVM2.02.84-6.el5
	2.6.18-274.18.1.el5	
	2.6.18-308.el5	LVM2.02.88-7.el5
	2.6.18-308.8.2.el5	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
	2.6.18-308.11.1.el5	LVM2.02.88-10.el5
	2.6.18-308.16.1.el5	
	2.6.18-348.el5	
	2.6.18-348.1.1.el5	
EM64T/AMD64	2.6.18-8.el5	LVM2.02.16-3.el5
	2.6.18-53.el5	LVM2.02.26-3.el5
	2.6.18-53.1.13.el5	
	2.6.18-53.1.21.el5	
	2.6.18-92.el5	LVM2.02.32-4.el5
	2.6.18-92.1.6.el5	
	2.6.18-92.1.13.el5	
	2.6.18-92.1.22.el5	
	2.6.18-128.el5	LVM2.02.40-6.el5
	2.6.18-128.1.10.el5	
	2.6.18-128.1.14.el5	
	2.6.18-128.7.1.el5	
	2.6.18-164.el5	LVM2.02.46-8.el5
	2.6.18-164.9.1.el5	
	2.6.18-164.11.1.el5	
	2.6.18-164.15.1.el5	
	2.6.18-194.el5	LVM2.02.56-8.el5
	2.6.18-194.11.1.el5	
	2.6.18-194.11.3.el5	
	2.6.18-194.17.1.el5	
	2.6.18-194.32.1.el5	
	2.6.18-238.el5	LVM2.02.74-5.el5
	2.6.18-238.1.1.el5	LVM2.02.84-3.el5 [※]
	2.6.18-238.9.1.el5	
	2.6.18-238.19.1.el5	
	2.6.18-238.28.1.el5	
	2.6.18-274.el5	
	2.6.18-274.12.1.el5	LVM2.02.84-3.el5
	2.6.18-274.18.1.el5	LVM2.02.84-6.el5
	2.6.18-308.el5	
	2.6.18-308.8.2.el5	LVM2.02.88-7.el5
	2.6.18-308.11.1.el5	
2.6.18-308.16.1.el5		
2.6.18-348.el5		
2.6.18-348.1.1.el5	LVM2.02.88-10.el5	

注※

クラスタソフトウェアとの組み合わせは未サポートです。

(3) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次の表に示します。

表 3-28 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合のファイルシステム

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム
IA32	2.6.18-8.el5 2.6.18-8.el5PAE	ext2 (OS に同梱) ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE	
	2.6.18-53.1.13.el5 2.6.18-53.1.13.el5PAE	
	2.6.18-53.1.21.el5 2.6.18-53.1.21.el5PAE	
	2.6.18-92.el5 2.6.18-92.el5PAE	
	2.6.18-92.1.6.el5 2.6.18-92.1.6.el5PAE	
	2.6.18-92.1.13.el5 2.6.18-92.1.13.el5PAE	
	2.6.18-92.1.22.el5 2.6.18-92.1.22.el5PAE	
	2.6.18-128.el5 2.6.18-128.el5PAE	ext2 (OS に同梱) ext3 (OS に同梱) GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.18-128.1.10.el5 2.6.18-128.1.10.el5PAE	
	2.6.18-128.1.14.el5 2.6.18-128.1.14.el5PAE	
	2.6.18-128.7.1.el5 2.6.18-128.7.1.el5PAE	
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE	
	2.6.18-164.9.1.el5 2.6.18-164.9.1.el5PAE	
	2.6.18-164.11.1.el5 2.6.18-164.11.1.el5PAE	
	2.6.18-164.15.1.el5 2.6.18-164.15.1.el5PAE	
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE	
	2.6.18-194.11.1.el5 2.6.18-194.11.1.el5PAE	
	2.6.18-194.11.3.el5 2.6.18-194.11.3.el5PAE	
	2.6.18-194.17.1.el5 2.6.18-194.17.1.el5PAE	
	2.6.18-194.32.1.el5 2.6.18-194.32.1.el5PAE	
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE	ext2 (OS に同梱) ext3 (OS に同梱) ext4 (OS に同梱)
	2.6.18-238.1.1.el5	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム		
	2.6.18-238.1.1.el5PAE	GFS2 (OS に同梱) ※		
	2.6.18-238.9.1.el5 2.6.18-238.9.1.el5PAE			
	2.6.18-238.19.1.el5 2.6.18-238.19.1.el5PAE			
	2.6.18-238.28.1.el5 2.6.18-238.28.1.el5PAE			
	2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE			
	2.6.18-274.12.1.el5 2.6.18-274.12.1.el5PAE			
	2.6.18-274.18.1.el5 2.6.18-274.18.1.el5PAE			
	2.6.18-308.el5 2.6.18-308.el5PAE			
	2.6.18-308.8.2.el5 2.6.18-308.8.2.el5PAE			
	2.6.18-308.11.1.el5 2.6.18-308.11.1.el5PAE			
	2.6.18-308.16.1.el5 2.6.18-308.16.1.el5PAE			
	2.6.18-348.el5 2.6.18-348.el5PAE			
	2.6.18-348.1.1.el5 2.6.18-348.1.1.el5PAE			
	IPF		2.6.18-8.el5	ext2 (OS に同梱)
			2.6.18-53.el5	ext3 (OS に同梱)
2.6.18-53.1.13.el5				
2.6.18-53.1.21.el5				
2.6.18-92.el5				
2.6.18-92.1.6.el5				
2.6.18-92.1.13.el5				
2.6.18-92.1.22.el5				
2.6.18-128.el5			ext2 (OS に同梱)	
2.6.18-128.1.10.el5			ext3 (OS に同梱)	
2.6.18-128.1.14.el5			GFS2 (OS に同梱) ※	
2.6.18-128.7.1.el5				
2.6.18-164.el5				
2.6.18-164.9.1.el5				
2.6.18-164.11.1.el5				
2.6.18-164.15.1.el5				
2.6.18-194.el5				
2.6.18-194.11.1.el5				
2.6.18-194.11.3.el5				
2.6.18-194.17.1.el5				
2.6.18-194.32.1.el5				

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム
	2.6.18-238.el5	ext2 (OS に同梱)
	2.6.18-238.1.1.el5	ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-238.9.1.el5	ext4 (OS に同梱)
	2.6.18-238.19.1.el5	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.18-238.28.1.el5	
	2.6.18-274.el5	
	2.6.18-274.12.1.el5	
	2.6.18-274.18.1.el5	
	2.6.18-308.el5	
	2.6.18-308.8.2.el5	
	2.6.18-308.11.1.el5	
	2.6.18-308.16.1.el5	
	2.6.18-348.el5	
	2.6.18-348.1.1.el5	
EM64T/AMD64	2.6.18-8.el5	ext2 (OS に同梱)
	2.6.18-53.el5	ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-53.1.13.el5	
	2.6.18-53.1.21.el5	
	2.6.18-92.el5	
	2.6.18-92.1.6.el5	
	2.6.18-92.1.13.el5	
	2.6.18-92.1.22.el5	
	2.6.18-128.el5	ext2 (OS に同梱)
	2.6.18-128.1.10.el5	ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-128.1.14.el5	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.18-128.7.1.el5	
	2.6.18-164.el5	
	2.6.18-164.9.1.el5	
	2.6.18-164.11.1.el5	
	2.6.18-164.15.1.el5	
	2.6.18-194.el5	
	2.6.18-194.11.1.el5	
	2.6.18-194.11.3.el5	
	2.6.18-194.17.1.el5	
	2.6.18-194.32.1.el5	
	2.6.18-238.el5	ext2 (OS に同梱)
	2.6.18-238.1.1.el5	ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-238.9.1.el5	ext4 (OS に同梱)
	2.6.18-238.19.1.el5	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.18-238.28.1.el5	xfv (OS に同梱)
	2.6.18-274.el5	ext2 (OS に同梱)
	2.6.18-274.12.1.el5	ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-274.18.1.el5	ext4 (OS に同梱)

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム
	2.6.18-308.el5	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.18-308.8.2.el5	
	2.6.18-308.11.1.el5	
	2.6.18-308.16.1.el5	
	2.6.18-348.el5	
	2.6.18-348.1.1.el5	

注※

HDLM デバイスをブートディスクとして使用できません。

(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境 (FC-SAN を使用する場合)

HDLM は「表 3-29 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合の BladeSymphony の動作環境」に示す環境で BladeSymphony をサポートします。なお、BladeSymphony の各モデルがサポートする OS(カーネル)の詳細については、BladeSymphony のマニュアルを参照してください。

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-29 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合の BladeSymphony の動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
IA32	2.6.18-53.el5PAE	hitachi	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ※ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ※ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ※ Virtual Storage Platform シリ ーズ※
	2.6.18-53.1.13.el5PAE		
	2.6.18-53.1.21.el5PAE		
	2.6.18-92.el5PAE		
	2.6.18-92.1.6.el5PAE		
	2.6.18-92.1.13.el5PAE		
	2.6.18-92.1.22.el5PAE		
	2.6.18-128.el5PAE		
	2.6.18-128.1.10.el5PAE		
	2.6.18-128.1.14.el5PAE		
	2.6.18-128.7.1.el5PAE		
	2.6.18-164.el5PAE		
	2.6.18-164.9.1.el5PAE		
	2.6.18-164.11.1.el5PAE		
	2.6.18-164.15.1.el5PAE		
	2.6.18-238.el5PAE		
	2.6.18-238.1.1.el5PAE		
	2.6.18-238.9.1.el5PAE		
	2.6.18-238.19.1.el5PAE		
	2.6.18-238.28.1.el5PAE		
IPF	2.6.18-53.el5		
	2.6.18-53.1.13.el5		
	2.6.18-53.1.21.el5		

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.18-92.el5		
	2.6.18-92.1.6.el5		
	2.6.18-92.1.13.el5		
	2.6.18-92.1.22.el5		
EM64T	2.6.18-53.el5		
	2.6.18-53.1.13.el5		
	2.6.18-53.1.21.el5		
	2.6.18-92.el5		
	2.6.18-92.1.6.el5		
	2.6.18-92.1.13.el5		
	2.6.18-92.1.22.el5		
	2.6.18-128.el5		
	2.6.18-128.1.10.el5		
	2.6.18-128.1.14.el5		
	2.6.18-128.7.1.el5		
	2.6.18-164.9.1.el5		
	2.6.18-164.11.1.el5		
	2.6.18-164.15.1.el5		
	2.6.18-238.el5		
	2.6.18-238.1.1.el5		
2.6.18-238.9.1.el5			
2.6.18-238.19.1.el5			
2.6.18-238.28.1.el5			

注※

XP シリーズはサポートしていません。

HDLM は次の表に示す環境でブートディスクをサポートします。

表 3-30 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
IA32	2.6.18-8.el5	Emulex QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ Virtual Storage Platform シリ ーズ
	2.6.18-8.el5PAE		
	2.6.18-53.el5	Brocade Emulex QLogic	
	2.6.18-53.el5PAE		
	2.6.18-53.1.13.el5		
	2.6.18-53.1.13.el5PAE		
	2.6.18-53.1.21.el5		
	2.6.18-53.1.21.el5PAE		
	2.6.18-92.el5		
	2.6.18-92.el5PAE		
	2.6.18-92.1.6.el5		
	2.6.18-92.1.6.el5PAE		
	2.6.18-92.1.13.el5		
	2.6.18-92.1.13.el5PAE		

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.18-92.1.22.el5 2.6.18-92.1.22.el5PAE		
	2.6.18-128.el5※ 2.6.18-128.el5PAE※		
	2.6.18-128.1.10.el5※ 2.6.18-128.1.10.el5PAE※		
	2.6.18-128.1.14.el5※ 2.6.18-128.1.14.el5PAE※		
	2.6.18-128.7.1.el5※ 2.6.18-128.7.1.el5PAE※		
	2.6.18-164.el5※ 2.6.18-164.el5PAE※		
	2.6.18-164.9.1.el5※ 2.6.18-164.9.1.el5PAE※		
	2.6.18-164.11.1.el5※ 2.6.18-164.11.1.el5PAE※		
	2.6.18-164.15.1.el5※ 2.6.18-164.15.1.el5PAE※		
	2.6.18-194.el5※ 2.6.18-194.el5PAE※		
	2.6.18-194.11.1.el5※ 2.6.18-194.11.1.el5PAE※		
	2.6.18-194.11.3.el5※ 2.6.18-194.11.3.el5PAE※		
	2.6.18-194.17.1.el5※ 2.6.18-194.17.1.el5PAE※		
	2.6.18-194.32.1.el5※ 2.6.18-194.32.1.el5PAE※		
	2.6.18-238.el5※ 2.6.18-238.el5PAE※		
	2.6.18-238.1.1.el5※ 2.6.18-238.1.1.el5PAE※		
	2.6.18-238.9.1.el5※ 2.6.18-238.9.1.el5PAE※		
	2.6.18-238.19.1.el5※ 2.6.18-238.19.1.el5PAE※		
	2.6.18-238.28.1.el5※ 2.6.18-238.28.1.el5PAE※		
	2.6.18-274.el5※ 2.6.18-274.el5PAE※	Emulex QLogic	
	2.6.18-274.12.1.el5※ 2.6.18-274.12.1.el5PAE※		
	2.6.18-274.18.1.el5※ 2.6.18-274.18.1.el5PAE※		

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.18-308.el5 [※] 2.6.18-308.el5PAE [※]		
	2.6.18-308.8.2.el5 [※] 2.6.18-308.8.2.el5PAE [※]		
	2.6.18-308.11.1.el5 [※] 2.6.18-308.11.1.el5PAE [※]		
	2.6.18-308.16.1.el5 [※] 2.6.18-308.16.1.el5PAE [※]		
	2.6.18-348.el5 [※] 2.6.18-348.el5PAE [※]		
	2.6.18-348.1.1.el5 [※] 2.6.18-348.1.1.el5PAE [※]		
IPF	2.6.18-8.el5	Emulex	
	2.6.18-53.el5		
	2.6.18-53.1.13.el5		
	2.6.18-53.1.21.el5		
	2.6.18-92.el5		
	2.6.18-92.1.6.el5		
	2.6.18-92.1.13.el5		
	2.6.18-92.1.22.el5		
	2.6.18-128.el5 [※]		
	2.6.18-128.1.10.el5 [※]		
	2.6.18-128.1.14.el5 [※]		
	2.6.18-128.7.1.el5 [※]		
	2.6.18-164.el5 [※]		Brocade Emulex
	2.6.18-164.9.1.el5 [※]		
	2.6.18-164.11.1.el5 [※]		
	2.6.18-164.15.1.el5 [※]		
	2.6.18-194.el5 [※]		
	2.6.18-194.11.1.el5 [※]		
	2.6.18-194.11.3.el5 [※]		
	2.6.18-194.17.1.el5 [※]		
	2.6.18-194.32.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.el5 [※]	Emulex	
	2.6.18-238.1.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.9.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.19.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.28.1.el5 [※]		
	2.6.18-274.el5 [※]		
2.6.18-274.12.1.el5 [※]			
2.6.18-274.18.1.el5 [※]			

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.18-308.el5 [※]		
	2.6.18-308.8.2.el5 [※]		
	2.6.18-308.11.1.el5 [※]		
	2.6.18-308.16.1.el5 [※]		
	2.6.18-348.el5 [※]		
	2.6.18-348.1.1.el5 [※]		
EM64T/AMD64	2.6.18-8.el5	Emulex QLogic	
	2.6.18-53.el5	Brocade Emulex QLogic	
	2.6.18-53.1.13.el5		
	2.6.18-53.1.21.el5		
	2.6.18-92.el5		
	2.6.18-92.1.6.el5		
	2.6.18-92.1.13.el5		
	2.6.18-92.1.22.el5		
	2.6.18-128.el5 [※]		
	2.6.18-128.1.10.el5 [※]		
	2.6.18-128.1.14.el5 [※]		
	2.6.18-128.7.1.el5 [※]		
	2.6.18-164.el5 [※]		
	2.6.18-164.9.1.el5 [※]		
	2.6.18-164.11.1.el5 [※]		
	2.6.18-164.15.1.el5 [※]		
	2.6.18-194.el5 [※]	Brocade Emulex QLogic Cisco	
	2.6.18-194.11.1.el5 [※]		
	2.6.18-194.11.3.el5 [※]		
	2.6.18-194.17.1.el5 [※]		
	2.6.18-194.32.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.el5 [※]	Brocade Emulex QLogic	
	2.6.18-238.1.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.9.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.19.1.el5 [※]		
	2.6.18-238.28.1.el5 [※]		
	2.6.18-274.el5 [※]	Emulex QLogic	
	2.6.18-274.12.1.el5 [※]		
	2.6.18-274.18.1.el5 [※]		
	2.6.18-308.el5 [※]		
2.6.18-308.8.2.el5 [※]			
2.6.18-308.11.1.el5 [※]			
2.6.18-308.16.1.el5 [※]			

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.18-348.el5*		
	2.6.18-348.1.1.el5*		

注※

ブートディスクとして使用する HDLM デバイスには LUKS を適用できません。

BladeSymphony 環境で HDLM デバイスをブートディスクとして使用する場合の動作環境を次の表に示します。

表 3-31 Red Hat Enterprise Linux 5 で BladeSymphony およびブートディスクを使用している場合の動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム		
IA32	2.6.18-53.el5PAE	hitachi	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ* HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ* Virtual Storage Platform シリ ーズ*		
	2.6.18-53.1.13.el5PAE				
	2.6.18-53.1.21.el5PAE				
	2.6.18-92.el5PAE				
	2.6.18-92.1.6.el5PAE				
	2.6.18-92.1.13.el5PAE				
	2.6.18-92.1.22.el5PAE				
	2.6.18-128.el5PAE				
	2.6.18-128.1.10.el5PAE				
	2.6.18-128.1.14.el5PAE				
	2.6.18-128.7.1.el5PAE				
	2.6.18-164.el5PAE				
	2.6.18-164.9.1.el5PAE				
	2.6.18-164.11.1.el5PAE				
	2.6.18-164.15.1.el5PAE				
	2.6.18-238.el5PAE				
	2.6.18-238.1.1.el5PAE				
	2.6.18-238.9.1.el5PAE				
2.6.18-238.19.1.el5PAE					
2.6.18-238.28.1.el5PAE					
IPF	2.6.18-53.el5	hitachi	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ* HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ* Virtual Storage Platform シリ ーズ*		
	2.6.18-53.1.13.el5				
	2.6.18-53.1.21.el5				
	2.6.18-92.el5				
	2.6.18-92.1.6.el5				
	2.6.18-92.1.13.el5				
2.6.18-92.1.22.el5					
EM64T	2.6.18-53.el5			hitachi	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ* HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ* Virtual Storage Platform シリ ーズ*
	2.6.18-53.1.13.el5				
	2.6.18-53.1.21.el5				
	2.6.18-92.el5				

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
	2.6.18-92.1.6.el5		
	2.6.18-92.1.13.el5		
	2.6.18-92.1.22.el5		
	2.6.18-128.el5		
	2.6.18-128.1.10.el5		
	2.6.18-128.1.14.el5		
	2.6.18-128.7.1.el5		
	2.6.18-164.el5		
	2.6.18-164.9.1.el5		
	2.6.18-164.11.1.el5		
	2.6.18-164.15.1.el5		
	2.6.18-238.el5		
	2.6.18-238.1.1.el5		
	2.6.18-238.9.1.el5		
	2.6.18-238.19.1.el5		
	2.6.18-238.28.1.el5		

注※

XP シリーズはサポートしていません。

BladeSymphony の環境で HDLM を使用する際の注意事項

BladeSymphony の環境で HDLM を使用する場合は、下記の機能を使用できません。

- SystemManager 連携

3.1.5 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する際の関連製品

Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する際の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア

HDLM をクラスタ構成で使用する場合は、そのクラスタを構成するすべてのノードには同じバージョンの HDLM をインストールしてください。異なるバージョンがインストールされている場合、クラスタが正常に動作しないおそれがあります。次に示すコマンドを実行して表示される「HDLM Version」および「Service Pack Version」が一致する場合は、同じバージョンの HDLM になります。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

クラスタ構成を構築する際の関連プログラムを次の各表に示します。

- 「表 3-32 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する際のクラスタソフトウェア (FC-SAN を使用する場合)」
- 「表 3-33 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する際のクラスタソフトウェア (IP-SAN を使用する場合)」

表 3-32 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のクラスタソフトウェア (FC-SAN を使用する
場合)

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
IA32	2.6.32-71.el6.i686	LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 RHCM
	2.6.32-131.0.15.el6.i686	HA モニタ 01-42 ^{※1} HA モニタ 01-42-01 ^{※1} HA モニタ 01-50 ^{※1} HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 RHCM
	2.6.32-220.el6.i686	HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 RHCM
	2.6.32-220.4.2.el6.i686	HA モニタ 01-51 ^{※1}
	2.6.32-220.17.1.el6.i686	HA モニタ 01-52 ^{※1}
	2.6.32-220.23.1.el6.i686	HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 RHCM
2.6.32-220.31.1.el6.i686	HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} RHCM	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
	2.6.32-279.el6.i686	LifeKeeper v7 Update5
	2.6.32-279.19.1.el6.i686	LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 RHCM
	2.6.32-358.el6.i686	RHCM
	2.6.32-358.6.2.el6.i686	
EM64T/AMD64	2.6.32-71.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 CLUSTERPRO X 3.1.5-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.7-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.8-1 LifeKeeper v7 Update3 LifeKeeper v7 Update4 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM
	2.6.32-131.0.15.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.0.4-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.1-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 CLUSTERPRO X 3.1.5-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.7-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.8-1 HA モニタ 01-42 ^{※1} HA モニタ 01-42-01 ^{※1} HA モニタ 01-50 ^{※1} HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM
	2.6.32-220.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 CLUSTERPRO X 3.1.5-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.7-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.8-1 HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1}

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
		HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A10
	2.6.32-220.4.2.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※2}
	2.6.32-220.17.1.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.4-1 CLUSTERPRO X 3.1.5-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.7-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.8-1 HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A10
	2.6.32-220.23.1.el6.x86_64	HA モニタ 01-51 ^{※1} HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A10
	2.6.32-220.31.1.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.3-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.4-1 CLUSTERPRO X 3.1.5-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.7-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.8-1 HA モニタ 01-51 ^{※1}

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
		HA モニタ 01-52 ^{※1} HA モニタ 01-52-01 ^{※1} HA モニタ 01-53 ^{※1} HA モニタ 01-53-01 ^{※1} HA モニタ 01-53-02 ^{※1} HA モニタ 01-54 ^{※4※5} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM PRIMECLUSTER Enterprise Edition 4.3A10
	2.6.32-279.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.4-1 CLUSTERPRO X 3.1.5-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.7-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.8-1 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM
	2.6.32-279.19.1.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.7-1 ^{※2} CLUSTERPRO X 3.1.8-1 LifeKeeper v7 Update5 LifeKeeper v8 LifeKeeper v8 Update1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM
	2.6.32-358.el6.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.8-1 Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM
	2.6.32-358.6.2.el6.x86_64	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※3} RHCM

注※1

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※2

Disk モニタ (TUR(legacy)) による監視は未サポートです。

「[3.13 CLUSTERPRO の設定](#)」を参照してください。

注※3

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」の注意事項を参照してください。

注※4

Hitachi HA Booster Pack for Linux をあわせて使用する場合は、OS 障害通知機能だけをサポートします。

注※5

HA モニタはパーシステントリザーブをサポートしています。

表 3-33 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のクラスタソフトウェア (IP-SAN を使用する場合)

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
IA32	2.6.32-71.el6.i686	RHCM
	2.6.32-131.0.15.el6.i686	
	2.6.32-220.el6.i686	
	2.6.32-220.4.2.el6.i686	
	2.6.32-220.17.1.el6.i686	
	2.6.32-220.23.1.el6.i686	
	2.6.32-220.31.1.el6.i686	
	2.6.32-279.el6.i686	
	2.6.32-279.19.1.el6.i686	
	2.6.32-358.el6.i686	
	2.6.32-358.6.2.el6.i686	
EM64T/AMD64	2.6.32-71.el6.x86_64	
	2.6.32-131.0.15.el6.x86_64	
	2.6.32-220.el6.x86_64	
	2.6.32-220.4.2.el6.x86_64	
	2.6.32-220.17.1.el6.x86_64	
	2.6.32-220.23.1.el6.x86_64	
	2.6.32-220.31.1.el6.x86_64	
	2.6.32-279.el6.x86_64	
	2.6.32-279.19.1.el6.x86_64	
	2.6.32-358.el6.x86_64	
	2.6.32-358.6.2.el6.x86_64	

(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-34 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.32-71.el6.i686	LVM2.02.72-8.el6
	2.6.32-131.0.15.el6.i686	LVM2.02.83-3.el6
	2.6.32-220.el6.i686	LVM2.02.87-6.el6
	2.6.32-220.4.2.el6.i686	
	2.6.32-220.17.1.el6.i686	
	2.6.32-220.23.1.el6.i686	
	2.6.32-220.31.1.el6.i686	
	2.6.32-279.el6.i686	LVM2.02.95-10.el6

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
	2.6.32-279.19.1.el6.i686	
	2.6.32-358.el6.i686	LVM2.02.98-9.el6
	2.6.32-358.6.2.el6.i686	
EM64T/AMD64	2.6.32-71.el6.x86_64	LVM2.02.72-8.el6
	2.6.32-131.0.15.el6.x86_64	LVM2.02.83-3.el6
	2.6.32-220.el6.x86_64	LVM2.02.87-6.el6
	2.6.32-220.4.2.el6.x86_64	
	2.6.32-220.17.1.el6.x86_64	
	2.6.32-220.23.1.el6.x86_64	
	2.6.32-220.31.1.el6.x86_64	
	2.6.32-279.el6.x86_64	LVM2.02.95-10.el6
	2.6.32-279.19.1.el6.x86_64	
	2.6.32-358.el6.x86_64	LVM2.02.98-9.el6
	2.6.32-358.6.2.el6.x86_64	

(3) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次の表に示します。

表 3-35 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のファイルシステム

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム
IA32	2.6.32-71.el6.i686	ext2 (OS に同梱)
	2.6.32-131.0.15.el6.i686	ext3 (OS に同梱)
		ext4 (OS に同梱)
		GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.32-220.el6.i686	ext2 (OS に同梱)
	2.6.32-220.4.2.el6.i686	ext3 (OS に同梱)
	2.6.32-220.17.1.el6.i686	ext4 (OS に同梱)
	2.6.32-220.23.1.el6.i686	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.32-220.31.1.el6.i686	xfst (OS に同梱) ※
	2.6.32-279.el6.i686	ext2 (OS に同梱)
	2.6.32-279.19.1.el6.i686	ext3 (OS に同梱)
	2.6.32-358.el6.i686	ext4 (OS に同梱)
2.6.32-358.6.2.el6.i686	GFS2 (OS に同梱) ※	
EM64T/AMD64	2.6.32-71.el6.x86_64	ext2 (OS に同梱)
	2.6.32-131.0.15.el6.x86_64	ext3 (OS に同梱)
		ext4 (OS に同梱)
		GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.32-220.el6.x86_64	ext2 (OS に同梱)
	2.6.32-220.4.2.el6.x86_64	ext3 (OS に同梱)
	2.6.32-220.17.1.el6.x86_64	ext4 (OS に同梱)
	2.6.32-220.23.1.el6.x86_64	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.32-220.31.1.el6.x86_64	xfst (OS に同梱) ※
	2.6.32-279.el6.x86_64	ext2 (OS に同梱)
2.6.32-279.19.1.el6.x86_64	ext3 (OS に同梱)	
	ext4 (OS に同梱)	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム
	2.6.32-358.el6.x86_64	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.32-358.6.2.el6.x86_64	

注※

HDLM デバイスをブートディスクとして使用できません。

(4) HDLM がサポートするブートディスク環境

HDLM は次の各表に示す環境でブートディスクをサポートします。

- ・ 「表 3-36 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (FC-SAN を使用する場合)」
- ・ 「表 3-37 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (IP-SAN を使用する場合)」

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-36 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (FC-SAN を使用する場合)

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム
IA32	2.6.32-71.el6.i686※	Brocade Emulex QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ
	2.6.32-131.0.15.el6.i686※		
	2.6.32-220.el6.i686※	Emulex QLogic	
	2.6.32-220.4.2.el6.i686※		
	2.6.32-220.17.1.el6.i686※		
	2.6.32-220.23.1.el6.i686※		
	2.6.32-220.31.1.el6.i686※		
	2.6.32-279.el6.i686※		
	2.6.32-279.19.1.el6.i686※		
	2.6.32-358.el6.i686※		
	2.6.32-358.6.2.el6.i686※		
	EM64T/AMD64		
2.6.32-131.0.15.el6.x86_64※			
2.6.32-220.el6.x86_64※		Emulex QLogic	
2.6.32-220.4.2.el6.x86_64※			
2.6.32-220.17.1.el6.x86_64※			
2.6.32-220.23.1.el6.x86_64※			
2.6.32-220.31.1.el6.x86_64			
2.6.32-279.el6.x86_64※			
2.6.32-279.19.1.el6.x86_64※			
2.6.32-358.el6.x86_64※			
2.6.32-358.6.2.el6.x86_64※			

注※

ブートディスクとして使用する HDLM デバイスには LUKS を適用できません。

表 3-37 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境 (IP-SAN を使用する場合)

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム
IA32	2.6.32-220.el6.i686	Red Hat	Hitachi AMS2000 シリーズ
	2.6.32-220.4.2.el6.i686		
	2.6.32-220.17.1.el6.i686		
	2.6.32-220.23.1.el6.i686		
	2.6.32-220.31.1.el6.i686		
	2.6.32-279.el6.i686		
	2.6.32-279.19.1.el6.i686		
	2.6.32-358.el6.i686		
	2.6.32-358.6.2.el6.i686		
	EM64T/AMD64		
2.6.32-220.4.2.el6.x86_64			
2.6.32-220.17.1.el6.x86_64			
2.6.32-220.23.1.el6.x86_64			
2.6.32-220.31.1.el6.x86_64			
2.6.32-279.el6.x86_64			
2.6.32-279.19.1.el6.x86_64			
2.6.32-358.el6.x86_64			
2.6.32-358.6.2.el6.x86_64			

3.1.6 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の関連製品

SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア

HDLM をクラスタ構成で使用する場合、そのクラスタを構成するすべてのノードには同じバージョンの HDLM をインストールしてください。異なるバージョンがインストールされている場合、クラスタが正常に動作しないおそれがあります。次に示すコマンドを実行して表示される「HDLM Version」および「Service Pack Version」が一致する場合、同じバージョンの HDLM になります。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

クラスタ構成を構築する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-38 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
IA32	2.6.16.21-0.8-default	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※1}
	2.6.16.21-0.8-smp	
	2.6.16.21-0.8-bigsmp	
	2.6.16.27-0.9-default	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア	
	2.6.16.27-0.9-smp 2.6.16.27-0.9-bigsm		
	2.6.16.46-0.14-default 2.6.16.46-0.14-smp 2.6.16.46-0.14-bigsm	Heartbeat(2.0.8-0.19) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※1} Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※3}	
	2.6.16.60-0.21-default 2.6.16.60-0.21-smp 2.6.16.60-0.21-bigsm	Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2} Novell Open Enterprise Server 2 SP1	
	2.6.16.60-0.21-xenpae	Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2}	
	2.6.16.60-0.29-default 2.6.16.60-0.29-smp 2.6.16.60-0.29-bigsm	Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2} Novell Open Enterprise Server 2 SP1	
	2.6.16.60-0.29-xenpae	Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2}	
	2.6.16.60-0.42.5-default 2.6.16.60-0.42.5-smp 2.6.16.60-0.42.5-bigsm		
	2.6.16.60-0.42.5-xenpae		
	2.6.16.60-0.54.5-default 2.6.16.60-0.54.5-smp 2.6.16.60-0.54.5-bigsm 2.6.16.60-0.54.5-xenpae	Heartbeat(2.1.4-0.15.3) ^{※2}	
	2.6.16.60-0.85.1-default 2.6.16.60-0.85.1-smp 2.6.16.60-0.85.1-bigsm 2.6.16.60-0.85.1-xenpae	Heartbeat(2.1.4-0.24.9) ^{※2}	
	IPF	2.6.16.21-0.8-default	—
		2.6.16.27-0.9-default	
		2.6.16.46-0.14-default	Heartbeat(2.0.8-0.19) ^{※2}
2.6.16.60-0.21-default		Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2} Novell Open Enterprise Server 2 SP1	
2.6.16.60-0.42.5-default		Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2}	
2.6.16.60-0.54.5-default		Heartbeat(2.1.4-0.15.3) ^{※2}	
2.6.16.60-0.85.1-default		Heartbeat(2.1.4-0.24.9) ^{※2}	
EM64T/AMD64	2.6.16.21-0.8-default 2.6.16.21-0.8-smp	Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※1}	
	2.6.16.27-0.9-default 2.6.16.27-0.9-smp		
	2.6.16.46-0.14-default 2.6.16.46-0.14-smp	Heartbeat(2.0.8-0.19) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※1}	
	2.6.16.60-0.21-default 2.6.16.60-0.21-smp	Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2} Novell Open Enterprise Server 2 SP1	
	2.6.16.60-0.21-xen	Heartbeat(2.1.3-0.9) ^{※2}	
	2.6.16.60-0.42.5-default 2.6.16.60-0.42.5-smp		
	2.6.16.60-0.42.5-xen		
	2.6.16.60-0.54.5-default 2.6.16.60-0.54.5-smp 2.6.16.60-0.54.5-xen	Heartbeat(2.1.4-0.15.3) ^{※2}	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
	2.6.16.60-0.85.1-default 2.6.16.60-0.85.1-smp 2.6.16.60-0.85.1-xen	Heartbeat(2.1.4-0.24.9) ^{※2} Oracle RAC 10g Release 2(10.2.0.3.0) ^{※1}

(凡例)

— : 該当なし

注※1

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Cluster Ready Service(CRS)の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※2

Heartbeat と Oracle Cluster File System 2 を組み合わせて使用することもできます。

注※3

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-39 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.16.21-0.8-default 2.6.16.21-0.8-smp 2.6.16.21-0.8-bigsmp	LVM2.02.02-11.2
	2.6.16.27-0.9-default 2.6.16.27-0.9-smp 2.6.16.27-0.9-bigsmp	
	2.6.16.46-0.14-default 2.6.16.46-0.14-smp 2.6.16.46-0.14-bigsmp	
	2.6.16.60-0.21-default 2.6.16.60-0.21-smp 2.6.16.60-0.21-bigsmp 2.6.16.60-0.21-xenpae	LVM2.02.17-7.19
	2.6.16.60-0.29-default 2.6.16.60-0.29-smp 2.6.16.60-0.29-bigsmp 2.6.16.60-0.29-xenpae	
	2.6.16.60-0.42.5-default 2.6.16.60-0.42.5-smp 2.6.16.60-0.42.5-bigsmp 2.6.16.60-0.42.5-xenpae	
	2.6.16.60-0.54.5-default 2.6.16.60-0.54.5-smp 2.6.16.60-0.54.5-bigsmp 2.6.16.60-0.54.5-xenpae	LVM2.02.17-27.8
	2.6.16.60-0.85.1-default	LVM2.02.17-7.30.1

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
	2.6.16.60-0.85.1-smp 2.6.16.60-0.85.1-bigsmp 2.6.16.60-0.85.1-xenpae	
IPF	2.6.16.21-0.8-default	LVM2.02.02-11.2
	2.6.16.27-0.9-default	
	2.6.16.46-0.14-default	LVM2.02.17-7.9
	2.6.16.60-0.21-default	LVM2.02.17-7.19
	2.6.16.60-0.42.5-default	
	2.6.16.60-0.54.5-default	LVM2.02.17-27.8
	2.6.16.60-0.85.1-default	LVM2.02.17-7.30.1
EM64T/AMD64	2.6.16.21-0.8-default 2.6.16.21-0.8-smp	LVM2.02.02-11.2
	2.6.16.27-0.9-default 2.6.16.27-0.9-smp	
	2.6.16.46-0.14-default 2.6.16.46-0.14-smp	LVM2.02.17-7.9
	2.6.16.60-0.21-default 2.6.16.60-0.21-smp 2.6.16.60-0.21-xen	LVM2.02.17-7.19
	2.6.16.60-0.42.5-default 2.6.16.60-0.42.5-smp 2.6.16.60-0.42.5-xen	
	2.6.16.60-0.54.5-default 2.6.16.60-0.54.5-smp 2.6.16.60-0.54.5-xen	LVM2.02.17-27.8
	2.6.16.60-0.85.1-default 2.6.16.60-0.85.1-smp 2.6.16.60-0.85.1-xen	LVM2.02.17-7.30.1

ボリュームマネージャを使用する場合の注意事項

ボリュームマネージャを使用する場合の注意事項を次に示します。

- YaST2 のシステムにあるディスクの分割、システムのバックアップ機能はサポートしますが、YaST2 と LVM の組み合わせは未サポートです。

(3) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次に示します。

- ext2 (OS に同梱)
- ext3 (OS に同梱)
- ReiserFS (OS に同梱)

(4) HDLM がサポートするブートディスク環境

HDLM は「表 3-40 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合のブートディスクの動作環境」に示す環境でブートディスクをサポートします。

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-40 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合のブートディスクの動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム	
IA32	2.6.16.46-0.14-default 2.6.16.46-0.14-smp 2.6.16.46-0.14-bigsmp	QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ	
	2.6.16.60-0.21-default 2.6.16.60-0.21-smp 2.6.16.60-0.21-bigsmp	Brocade QLogic		
	2.6.16.60-0.21-xenpae	QLogic		
	2.6.16.60-0.29-default 2.6.16.60-0.29-smp 2.6.16.60-0.29-bigsmp	Brocade QLogic		
	2.6.16.60-0.29-xenpae	QLogic		
	2.6.16.60-0.42.5-default 2.6.16.60-0.42.5-smp 2.6.16.60-0.42.5-bigsmp	Brocade QLogic		
	2.6.16.60-0.42.5-xenpae	QLogic		
	2.6.16.60-0.54.5-default 2.6.16.60-0.54.5-smp 2.6.16.60-0.54.5-bigsmp 2.6.16.60-0.54.5-xenpae	Brocade QLogic		
	2.6.16.60-0.85.1-default 2.6.16.60-0.85.1-smp 2.6.16.60-0.85.1-bigsmp 2.6.16.60-0.85.1-xenpae	QLogic		
	IPF	2.6.16.60-0.21-default		Brocade
		2.6.16.60-0.42.5-default		
		2.6.16.60-0.54.5-default		
EM64T/AMD64	2.6.16.46-0.14-default 2.6.16.46-0.14-smp	QLogic		
	2.6.16.60-0.21-default 2.6.16.60-0.21-smp	Brocade QLogic		
	2.6.16.60-0.21-xen	QLogic		
	2.6.16.60-0.42.5-default 2.6.16.60-0.42.5-smp	Brocade QLogic		
	2.6.16.60-0.42.5-xen	QLogic		
	2.6.16.60-0.54.5-default 2.6.16.60-0.54.5-smp 2.6.16.60-0.54.5-xen	Brocade QLogic		
	2.6.16.60-0.85.1-default 2.6.16.60-0.85.1-smp 2.6.16.60-0.85.1-xen	QLogic		

3.1.7 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合の関連製品

SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-41 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ	
IA32	2.6.27.21-0.1.2-default 2.6.27.21-0.1.2-pae 2.6.27.21-0.1.2-xen	LVM2.02.39-17.3	
	2.6.27.39-0.3.1-default 2.6.27.39-0.3.1-pae 2.6.27.39-0.3.1-xen		
	2.6.32.12-0.7.1-default 2.6.32.12-0.7.1-pae 2.6.32.12-0.7.1-xen		LVM2.02.39-18.26.1
	2.6.32.24-0.2.1-default 2.6.32.24-0.2.1-pae 2.6.32.24-0.2.1-xen		
	2.6.32.36-0.5.2-default 2.6.32.36-0.5.2-pae 2.6.32.36-0.5.2-xen		
	3.0.13-0.27-default 3.0.13-0.27-pae	LVM2.02.84-3.25.5	
	3.0.76-0.11-default 3.0.76-0.11-pae	LVM2.02.98-0.25.3	
	IPF	2.6.27.21-0.1.2-default	LVM2.02.39-17.3
		2.6.27.39-0.3.1-default	
		2.6.32.12-0.7.1-default	LVM2.02.39-18.26.1
		2.6.32.24-0.2.1-default	
		2.6.32.36-0.5.2-default	LVM2.02.84-3.25.5
3.0.13-0.27-default			
3.0.76-0.11-default	LVM2.02.98-0.25.3		
EM64T/AMD64	2.6.27.21-0.1.2-default 2.6.27.21-0.1.2-xen	LVM2.02.39-17.3	
	2.6.27.39-0.3.1-default 2.6.27.39-0.3.1-xen		
	2.6.32.12-0.7.1-default 2.6.32.12-0.7.1-xen	LVM2.02.39-18.26.1	
	2.6.32.24-0.2.1-default 2.6.32.24-0.2.1-xen		
	2.6.32.36-0.5.2-default 2.6.32.36-0.5.2-xen		
	3.0.13-0.27-default	LVM2.02.84-3.25.5	
	3.0.76-0.11-default	LVM2.02.98-0.25.3	

ボリュームマネージャを使用する場合の注意事項

ボリュームマネージャを使用する場合の注意事項を次に示します。

- YaST2 のシステムにあるディスクの分割、システムのバックアップ機能はサポートしますが、YaST2 と LVM の組み合わせは未サポートです。

(2) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次の表に示します。

表 3-42 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合のファイルシステム

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム
IA32	2.6.27.21-0.1.2-default	ext2 (OS に同梱) ext3 (OS に同梱) ReiserFS (OS に同梱)
	2.6.27.21-0.1.2-pae	
	2.6.27.21-0.1.2-xen	
	2.6.27.39-0.3.1-default	
	2.6.27.39-0.3.1-pae	
	2.6.27.39-0.3.1-xen	
	2.6.32.12-0.7.1-default	
	2.6.32.12-0.7.1-pae	
	2.6.32.12-0.7.1-xen	
	2.6.32.24-0.2.1-default	
	2.6.32.24-0.2.1-pae	
	2.6.32.24-0.2.1-xen	
	2.6.32.36-0.5.2-default	
	2.6.32.36-0.5.2-pae	
2.6.32.36-0.5.2-xen		
IPF	3.0.13-0.27-default	
	3.0.13-0.27-pae	
	3.0.76-0.11-default	
	3.0.76-0.11-pae	
	2.6.27.21-0.1.2-default	
	2.6.27.39-0.3.1-default	
EM64T/AMD64	2.6.32.12-0.7.1-default	
	2.6.32.24-0.2.1-default	
	2.6.32.36-0.5.2-default	
	3.0.13-0.27-default	
	3.0.76-0.11-default	
	2.6.27.21-0.1.2-default	
	2.6.27.21-0.1.2-xen	
	2.6.27.39-0.3.1-default	
	2.6.27.39-0.3.1-xen	
	2.6.32.12-0.7.1-default	
	2.6.32.12-0.7.1-xen	
	2.6.32.24-0.2.1-default	
	2.6.32.24-0.2.1-xen	
	2.6.32.36-0.5.2-default	
2.6.32.36-0.5.2-xen		
3.0.13-0.27-default		
3.0.76-0.11-default		

(3) HDLM がサポートするブートディスク環境 (FC-SAN を使用する場合)

HDLM は「表 3-43 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合のブートディスクの動作環境」に示す環境でブートディスクをサポートします。

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-43 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合のブートディスクの動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム	
IA32	2.6.27.21-0.1.2-default 2.6.27.21-0.1.2-pae	Brocade QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ	
	2.6.27.21-0.1.2-xen	QLogic		
	2.6.27.39-0.3.1-default 2.6.27.39-0.3.1-pae	Brocade QLogic		
	2.6.27.39-0.3.1-xen	QLogic		
	2.6.32.12-0.7.1-default 2.6.32.12-0.7.1-pae 2.6.32.12-0.7.1-xen	Brocade QLogic		
	2.6.32.24-0.2.1-default 2.6.32.24-0.2.1-pae 2.6.32.24-0.2.1-xen			
	2.6.32.36-0.5.2-default 2.6.32.36-0.5.2-pae 2.6.32.36-0.5.2-xen			
	3.0.13-0.27-default 3.0.13-0.27-pae	QLogic		
	3.0.76-0.11-default 3.0.76-0.11-pae			
	IPF	2.6.27.21-0.1.2-default		Brocade
		2.6.27.39-0.3.1-default		
2.6.32.12-0.7.1-default				
2.6.32.24-0.2.1-default				
2.6.32.36-0.5.2-default				
EM64T/AMD64	2.6.27.21-0.1.2-default	Brocade QLogic		
	2.6.27.21-0.1.2-xen	QLogic		
	2.6.27.39-0.3.1-default	Brocade QLogic		
	2.6.27.39-0.3.1-xen	QLogic		
	2.6.32.12-0.7.1-default 2.6.32.12-0.7.1-xen	Brocade QLogic		
	2.6.32.24-0.2.1-default 2.6.32.24-0.2.1-xen			
	2.6.32.36-0.5.2-default 2.6.32.36-0.5.2-xen			
	3.0.13-0.27-default	QLogic		
	3.0.76-0.11-default			

3.1.8 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合の関連製品

Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-44 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.9-55.0.0.0.2.EL 2.6.9-55.0.0.0.2.ELsmp 2.6.9-55.0.0.0.2.ELhugemem	LVM2.02.21-5.el4
	2.6.9-67.0.0.0.1.EL 2.6.9-67.0.0.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.0.0.1.ELhugemem	LVM2.02.27-2.el4
EM64T/AMD64	2.6.9-55.0.0.0.2.EL 2.6.9-55.0.0.0.2.ELsmp 2.6.9-55.0.0.0.2.ELlargesmp	LVM2.02.21-5.el4
	2.6.9-67.0.0.0.1.EL 2.6.9-67.0.0.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.0.0.1.ELlargesmp	LVM2.02.27-2.el4

(2) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次に示します。

- ext2 (OS に同梱)
- ext3 (OS に同梱)

(3) HDLM がサポートするブートディスク環境

HDLM は「表 3-45 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合のブートディスクの動作環境」に示す環境でブートディスクをサポートします。

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-45 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合のブートディスクの動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム
IA32	2.6.9-55.0.0.0.2.EL 2.6.9-55.0.0.0.2.ELsmp 2.6.9-55.0.0.0.2.ELhugemem	QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ
	2.6.9-67.0.0.0.1.EL 2.6.9-67.0.0.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.0.0.1.ELhugemem		
EM64T/AMD64	2.6.9-55.0.0.0.2.EL 2.6.9-55.0.0.0.2.ELsmp 2.6.9-55.0.0.0.2.ELlargesmp		
	2.6.9-67.0.0.0.1.EL 2.6.9-67.0.0.0.1.ELsmp 2.6.9-67.0.0.0.1.ELlargesmp		

3.1.9 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品

Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア

HDLM をクラスタ構成で使用する場合、そのクラスタを構成するすべてのノードには同じバージョンの HDLM をインストールしてください。異なるバージョンがインストールされている場合、クラスタが正常に動作しないおそれがあります。次に示すコマンドを実行して表示される「HDLM Version」および「Service Pack Version」が一致する場合、同じバージョンの HDLM になります。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

クラスタ構成を構築する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-46 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
IA32	2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※1} RHCM 2.0.73-1
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※1}
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE	—
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE	—
	2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※2}
EM64T/AMD64	2.6.18-53.el5	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.6.0) ^{※1} RHCM 2.0.73-1
	2.6.18-164.el5	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.2.0) ^{※1}
	2.6.18-194.el5	—
	2.6.18-238.el5	—
	2.6.18-274.el5	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※2}

(凡例)

— : 該当なし

注※1

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※2

次に示す構成をサポートします。

- raw デバイスおよび Oracle Clusterware の構成
- 自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-47 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE	LVM2.02.26-3.el5
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE	LVM2.02.46-8.el5
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE	LVM2.02.56-8.el5
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE	LVM2.02.74-5.el5
	2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE	LVM2.02.84-3.el5
EM64T/AMD64	2.6.18-53.el5	LVM2.02.26-3.el5
	2.6.18-164.el5	LVM2.02.46-8.el5
	2.6.18-194.el5	LVM2.02.56-8.el5
	2.6.18-238.el5	LVM2.02.74-5.el5
	2.6.18-274.el5	LVM2.02.84-3.el5

(3) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次の表に示します。

表 3-48 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のファイルシステム

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ファイルシステム
IA32	2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE	ext2 (OS に同梱) ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE	ext2 (OS に同梱) ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE	
	2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE	
EM64T/AMD64	2.6.18-53.el5	ext2 (OS に同梱) ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-164.el5	ext2 (OS に同梱)
	2.6.18-194.el5	ext3 (OS に同梱)
	2.6.18-238.el5	GFS2 (OS に同梱) ※
	2.6.18-274.el5	

注※

HDLM デバイスをブートディスクとして使用できません。

(4) HDLM がサポートするブートディスク環境

HDLM は「表 3-49 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境」に示す環境でブートディスクをサポートします。

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-49 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム
IA32	2.6.18-53.el5 2.6.18-53.el5PAE	QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ
	2.6.18-164.el5 2.6.18-164.el5PAE	Emulex QLogic	
	2.6.18-194.el5 2.6.18-194.el5PAE		
	2.6.18-238.el5 2.6.18-238.el5PAE		
	2.6.18-274.el5 2.6.18-274.el5PAE		
EM64T/AMD64	2.6.18-53.el5	QLogic	
	2.6.18-164.el5	Emulex QLogic	
	2.6.18-194.el5		
	2.6.18-238.el5		
	2.6.18-274.el5		

3.1.10 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合の関連製品

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア

HDLM をクラスタ構成で使用する場合、そのクラスタを構成するすべてのノードには同じバージョンの HDLM をインストールしてください。異なるバージョンがインストールされている場合、クラスタが正常に動作しないおそれがあります。次に示すコマンドを実行して表示される「HDLM Version」および「Service Pack Version」が一致する場合、同じバージョンの HDLM になります。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

クラスタ構成を構築する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-50 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
IA32	2.6.32-200.13.1.el5uek	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※1}
	2.6.32-300.27.1.el5uek	
EM64T/AMD64	2.6.32-100.26.2.el5	Oracle RAC 11g Release 1(11.1.0.7.0) ^{※2} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※1}
	2.6.32-200.13.1.el5uek	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※1}

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
	2.6.32-300.27.1.el5uek	

注※1

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※2

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用), および Oracle Clusterware の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-51 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.32-200.13.1.el5uek	LVM2.02.84-6.0.1.el5
	2.6.32-300.27.1.el5uek	
EM64T/AMD64	2.6.32-100.26.2.el5	LVM2.02.74-5.el5
	2.6.32-200.13.1.el5uek	LVM2.02.84-6.0.1.el5
	2.6.32-300.27.1.el5uek	

(3) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次に示します。

- ext2 (OS に同梱)
- ext3 (OS に同梱)
- ext4 (OS に同梱)
- GFS2 (OS に同梱) ※

注※

HDLM デバイスをブートディスクとして使用できません。

(4) HDLM がサポートするブートディスク環境

HDLM は「表 3-52 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境」に示す環境でブートディスクをサポートします。

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-52 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合のブートディスクの動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
IA32	2.6.32-200.13.1.el5uek	Emulex	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ
	2.6.32-300.27.1.el5uek	QLogic	

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応する ストレージシステム
EM64T/AMD64	2.6.32-100.26.2.el5		HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ Universal Storage Platform V/ VM シリーズ Virtual Storage Platform シリ ーズ
	2.6.32-200.13.1.el5uek		
	2.6.32-300.27.1.el5uek		

3.1.11 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合の関連製 品

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合の関連製品を次に示します。

(1) HDLM がサポートするクラスタソフトウェア

HDLM をクラスタ構成で使用する場合、そのクラスタを構成するすべてのノードには同じバージョンの HDLM をインストールしてください。異なるバージョンがインストールされている場合、クラスタが正常に動作しないおそれがあります。次に示すコマンドを実行して表示される「HDLM Version」および「Service Pack Version」が一致する場合、同じバージョンの HDLM になります。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

クラスタ構成を構築する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-53 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合のクラスタソフトウェア

カーネルアーキテクチャ	カーネル	クラスタソフトウェア
EM64T/AMD64	2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64	Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※1}
	2.6.39-200.29.1.el6uek.x86_64	CLUSTERPRO X 3.1.5-1 ^{※2} Oracle RAC 11g Release 2(11.2.0.3.0) ^{※1}

注※1

自動ストレージ管理(ASM)機能 (raw デバイスを使用)、および Oracle Grid Infrastructure の構成だけをサポートします。

「3.15 Oracle RAC の設定」の注意事項を参照してください。

注※2

Disk モニタ (TUR(legacy)) による監視は未サポートです。

「3.13 CLUSTERPRO の設定」を参照してください。

(2) HDLM がサポートするボリュームマネージャ

ボリュームマネージャを使用する場合の関連プログラムを次の表に示します。

表 3-54 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合のボリュームマネージャ

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
IA32	2.6.39-200.24.1.el6uek.i686	LVM2.02.95-10.el6
	2.6.39-200.29.1.el6uek.i686	LVM2.02.87-6.el6

カーネルアーキテクチャ	カーネル	ボリュームマネージャ
	2.6.39-200.29.2.el6uek.i686	
EM64T/AMD64	2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64	LVM2.02.95-10.el6
	2.6.39-200.29.1.el6uek.x86_64	LVM2.02.87-6.el6
	2.6.39-200.29.2.el6uek.x86_64	

(3) HDLM がサポートするファイルシステム

HDLM がサポートするファイルシステムを次に示します。

- ext2 (OS に同梱)
- ext3 (OS に同梱)
- ext4 (OS に同梱)
- GFS2 (OS に同梱) ※

注※

HDLM デバイスをブートディスクとして使用できません。

(4) HDLM がサポートするブートディスク環境

HDLM は「表 3-55 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境」に示す環境でブートディスクをサポートします。

ストレージシステムの各モデルがサポートする OS (カーネル) の詳細については、ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

表 3-55 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合のブートディスクの動作環境

カーネルアーキテクチャ	カーネル	HBA	対応するストレージシステム
IA32	2.6.39-200.24.1.el6uek.i686	Emulex QLogic	Hitachi AMS2000/AMS/TMS/ WMS/SMS シリーズ Hitachi USP シリーズ HUS100 シリーズ HUS VM SANRISE 9500V シリーズ SANRISE 9900V シリーズ
	2.6.39-200.29.1.el6uek.i686		
	2.6.39-200.29.2.el6uek.i686		
EM64T/AMD64	2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64		Universal Storage Platform V/ VM シリーズ Virtual Storage Platform シリーズ
	2.6.39-200.29.1.el6uek.x86_64		
	2.6.39-200.29.2.el6uek.x86_64		

3.1.12 メモリ所要量とディスク占有量

メモリ所要量およびディスク占有量について説明します。

(1) メモリ所要量

ホストのメモリ所要量を次の表に示します。

表 3-56 ホストのメモリ所要量

OS	メモリ所要量
Red Hat Enterprise Linux SUSE LINUX Enterprise Server Oracle Enterprise Linux 4 Oracle Enterprise Linux 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6	26MB

(2) ディスク占有量

ホストのディスク占有量を次の表に示します。

表 3-57 ホストのディスク占有量

ディレクトリ	ディスク占有量
/tmp	570KB
/var	$p\text{MB}^{*1}+q\text{MB}^{*2}+4\text{MB}^{*3}+u\text{MB}^{*4}+20\text{MB}^{*5}+v\text{MB}^{*6}+45\text{MB}$ (100MB ^{*7})
/opt	168MB
/etc	$y\text{MB}^{*8}+z\text{MB}^{*9}+5.5\text{MB}$ (10MB ^{*7})
/root	580KB
/sbin	500KB

注※1

最大 30GB で、ログファイルの設定に依存します。

p は、障害ログファイルサイズを s (単位は KB, デフォルト値は 9900), 障害ログファイル数を m (デフォルト値は 2) とすると,

$$p = (s \times m) \div 1024 [\text{MB}]$$

として計算します。計算式で割り切れなければ 1MB 切り上げます。

注※2

最大 1000MB で、トレースファイルの設定に依存します。

q は、トレースファイルサイズを t (単位は KB, デフォルト値は 1000), トレースファイル数を n (デフォルト値は 4) とすると,

$$q = (t \times n) \div 1024 [\text{MB}]$$

として計算します。計算式で割り切れなければ 1MB 切り上げます。

注※3

プロセス別トレース情報ファイルサイズです。

注※4

inquiry 情報のログファイルサイズです。

u は,

$$u = (2500 \text{ バイト} \times \text{パス数}) \div 1024 \div 1024 [\text{MB}]$$

として計算します。計算式で割り切れなければ 1MB 切り上げます。

注※5

Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントのログファイルサイズのデフォルト値です。

ログファイル (dlmwebagent[1-N].log) 1 個当たりのファイルサイズは、9900KB (約 10MB) です。デフォルトの設定では、ログファイルが 2 個作成されるため、ログファイルサイズは約 20MB として計算しています。

ログファイルは、dlmwebagent.properties ファイルの設定で最大 16 個まで作成できます。ログファイルを 16 個作成する場合のログファイルサイズは、約 160MB です。

注※6

dlmcfgmgr ユティリティのログファイルサイズです。

最大 1954MB (約 2GB) で、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) のログファイルサイズの設定に依存します。

v は、dlmcfgmgr ユティリティのログファイルサイズを w (単位は KB, デフォルト値は 1024) とすると、

$$v = (w \times 2) \div 1024 [\text{MB}]$$

として計算します。計算式で割り切れなければ 1MB 切り上げます。

注※7

HDLM の機能の設定値にデフォルト値を適用し、パス数が 256 本の場合の概算値です。

HDLM の機能の設定値については、「3.19.2 機能の設定」の「表 3-73 各機能のデフォルト値と推奨値」を参照してください。

注※8

構成定義ファイルサイズです。

y は、

$$y = (2500 \text{ バイト} \times \text{パス数} \times 4) \div 1024 \div 1024 [\text{MB}]$$

として計算します。計算式で割り切れなければ 1MB 切り上げます。

注※9

除外ディスク定義ファイルサイズです。

z は、

$$z = (20 \text{ バイト} \times \text{除外ディスク数} \times 4) \div 1024 \div 1024 [\text{MB}]$$

として計算します。計算式で割り切れなければ 1MB 切り上げます。

3.1.13 HDLM がサポートする LU 数とパス数

HDLM がサポートする LU 数とパス数を次の表に示します。

表 3-58 HDLM がサポートする LU 数とパス数

対象		サポートする数
1LU 当たりのパス数	Red Hat Enterprise Linux Oracle Enterprise Linux 4 Oracle Enterprise Linux 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6	1~64
	SUSE LINUX Enterprise Server	1~32
ストレージシステム 1 ポートごとの LU 数	Red Hat Enterprise Linux 4 SUSE LINUX Enterprise Server Oracle Enterprise Linux 4 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5	1~512

対象	サポートする数	
	Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6	
	Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6 Oracle Enterprise Linux 5	1~4096※
合計のパス数 (LU数×1LU当たりのパス数)	Red Hat Enterprise Linux 4 SUSE LINUX Enterprise Server Oracle Enterprise Linux 4 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6	1~1024
	Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6 Oracle Enterprise Linux 5	1~8192※
合計の LU 数	Red Hat Enterprise Linux 4 SUSE LINUX Enterprise Server Oracle Enterprise Linux 4 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6	1~512
	Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6 Oracle Enterprise Linux 5	1~4096※

注※

管理対象のパス数が 1024 以上の大規模なシステム構成の場合、ホストの起動時間、HDLM 構成定義ユーティリティの実行時間などが長くなります。

次の環境における、ホストの起動時間と HDLM 構成定義ユーティリティの実行時間の計測例を「表 3-59 大規模構成での HDLM 運用環境の HDLM 構成定義ユーティリティ実行時間の計測例」と「表 3-60 大規模構成での HDLM 運用環境のホスト起動時間の計測例」に示します。

CPU: Xeon 3.07GHz×24

メモリ: 99GB

ホストとストレージ間の構成: 4096LU×2 パス(合計 8192 パス)

表 3-59 大規模構成での HDLM 運用環境の HDLM 構成定義ユーティリティ実行時間の計測例

HDLM 構成定義ユーティリティ	実行時間	説明
<code>dlmcfmgr -r</code>	4 分 31 秒	HDLM デバイスへのパスの登録を実行する。
<code>dlmcfmgr -o all</code>	9 分 34 秒	すべての管理対象の HDLM デバイス (4096 デバイス) を管理対象外にする。
<code>dlmcfmgr -i all</code>	63 分 43 秒	管理対象外にしていたすべての HDLM デバイス (4096 デバイス) を管理対象にする。
<code>dlmcfmgr -u all</code>	8 分 20 秒	<code>dlmcfmgr -v</code> を実行して表示された HDLM デバイスの構成情報で、Device 列に「-」(ハイフン) が表示されているすべてのパス (8192 パス) を削除する。

表 3-60 大規模構成での HDLM 運用環境のホスト起動時間の計測例

運用環境	起動時間
HDLM デバイスをブートディスクとしていない環境	30 分 14 秒

運用環境	起動時間
HDLM デバイスをブート ディスクとした環境	65 分 21 秒

3.1.14 HDLM がサポートする仮想環境

HDLM は次に示す仮想環境をサポートします。

- BladeSymphony のブレードサーバ部に搭載されているサーバ論理分割機構の Virtage
- Xen

Xen を使用する場合、HDLM は domain0 にインストールしてください。

HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境を次の表に示します。

表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境

OS	カーネルアーキテクチャ	カーネル	Xen ハイパーバイザのバージョン
SUSE LINUX Enterprise Server 10	IA32	2.6.16.60-0.21-xenpae	xen-3.2.0_16718_14-0.4
		2.6.16.60-0.29-xenpae	
		2.6.16.60-0.42.5-xenpae	
		2.6.16.60-0.54.5-xenpae	xen-3.2.3_17040_16-0.4.9
		2.6.16.60-0.85.1-xenpae	xen-3.2.3_17040_34-0.7
	EM64T/AMD64	2.6.16.60-0.21-xen	xen-3.2.0_16718_14-0.4
		2.6.16.60-0.42.5-xen	
		2.6.16.60-0.54.5-xen	xen-3.2.3_17040_16-0.4.9
SUSE LINUX Enterprise Server 11	IA32	2.6.27.21-0.1.2-xen	xen-3.3.1_18546_12-3.1
		2.6.27.39-0.3.1-xen	
		2.6.32.12-0.7.1-xen	xen-4.0.0_21091_04-0.2.6
		2.6.32.24-0.2.1-xen	
		2.6.32.36-0.5.2-xen	
	EM64T/AMD64	2.6.27.21-0.1.2-xen	xen-3.3.1_18546_12-3.1
		2.6.27.39-0.3.1-xen	
		2.6.32.12-0.7.1-xen	xen-4.0.0_21091_04-0.2.6
		2.6.32.24-0.2.1-xen	
		2.6.32.36-0.5.2-xen	

- KVM

KVM を使用する場合、ゲスト OS 上では HDLM 管理対象デバイスを仮想デバイスとして使用してください。

HDLM がサポートする KVM の動作環境を次の表に示します。

表 3-62 HDLM がサポートする KVM の動作環境

OS	カーネルアーキテクチャ	カーネル	KVM のバージョン
Red Hat Enterprise Linux 5	EM64T/AMD64	2.6.18-164.el5	OS に同梱されている KVM をサポートします。
		2.6.18-164.9.1.el5	

OS	カーネルアーキテクチャ	カーネル	KVM のバージョン
		2.6.18-164.11.1.el5	
		2.6.18-164.15.1.el5	
		2.6.18-194.el5	
		2.6.18-194.11.1.el5	
		2.6.18-194.11.3.el5	
		2.6.18-194.17.1.el5	
		2.6.18-194.32.1.el5	
		2.6.18-238.el5	
		2.6.18-238.1.1.el5	
		2.6.18-238.9.1.el5	
		2.6.18-238.19.1.el5	
		2.6.18-238.28.1.el5	
		2.6.18-274.el5	
		2.6.18-274.12.1.el5	
		2.6.18-274.18.1.el5	
		2.6.18-308.el5	
		2.6.18-308.8.2.el5	
		2.6.18-308.11.1.el5	
		2.6.18-308.16.1.el5	
		2.6.18-348.el5	
2.6.18-348.1.1.el5			
Red Hat Enterprise Linux 6**	EM64T/AMD64	2.6.32-71.el6.x86_64	
		2.6.32-131.0.15.el6.x86_64	
		2.6.32-220.el6.x86_64	
		2.6.32-220.4.2.el6.x86_64	
		2.6.32-220.17.1.el6.x86_64	
		2.6.32-220.23.1.el6.x86_64	
		2.6.32-220.31.1.el6.x86_64	
		2.6.32-279.el6.x86_64	
		2.6.32-279.19.1.el6.x86_64	
		2.6.32-358.el6.x86_64	
2.6.32-358.6.2.el6.x86_64			
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5	EM64T/AMD64	2.6.32-100.26.2.el5	
		2.6.32-200.13.1.el5uek	
		2.6.32-300.27.1.el5uek	
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6	IA32	2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64	
	EM64T/AMD64	2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64	
		2.6.39-200.29.1.el6uek.x86_64	
		2.6.39-200.29.2.el6uek.x86_64	

注※

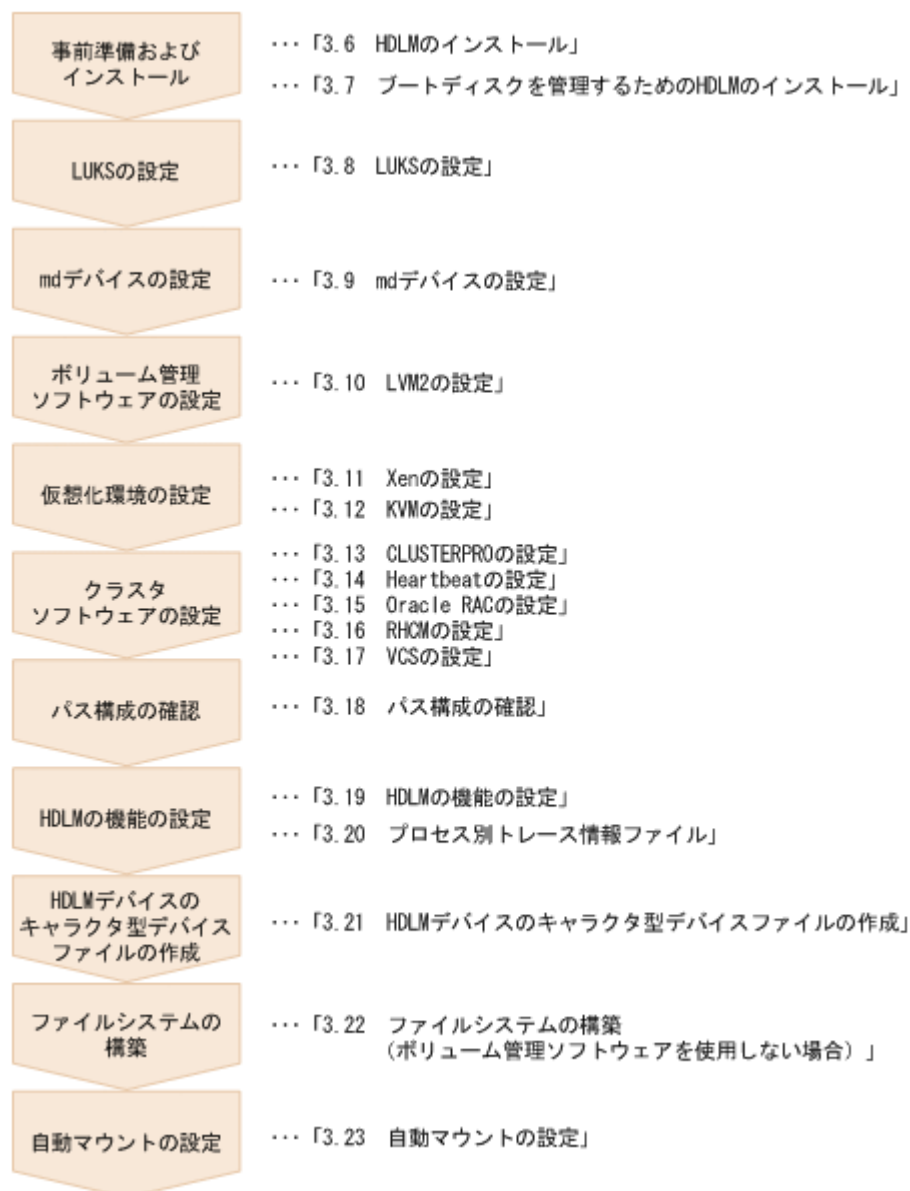
仮想デバイスのファイル形式に qcow2 を使用した構成だけをサポートします。

3.2 環境構築の流れ

「[図 3-1 環境構築の流れ](#)」の流れに従って、HDLM を使用する環境を構築してください。

なお、ボリューム管理ソフトウェアを使用する場合、図中にあるファイルシステムの構築の手順は不要です。

図 3-1 環境構築の流れ



3.3 HDLM のインストールの種別

HDLM の新規インストール、アップグレードインストール、および再インストールの種別について説明します。

HDLM の新規インストール

HDLM がインストールされていないサーバに HDLM をインストールすることを、HDLM の新規インストールと呼びます。

HDLM のアップグレードインストール

すでにインストールされている古いバージョンの HDLM をアンインストールしないまま、新しいバージョンの HDLM をインストールすることを、HDLM のアップグレードインストールと呼びます。

HDLM の再インストール

すでにインストールされている HDLM を修復するために、アンインストールしないまま再度同じバージョンの HDLM をインストールすることを、HDLM の再インストールと呼びます。

3.4 HDLM のインストールについての事前知識

- HDLM をインストールできるのは、次に示すディスクまたはデバイスです。
 - マシンの内蔵ディスク
 - ブートディスクとして使用しているストレージシステムの LU
- HDLM をインストールできるストレージシステムについては、使用している OS やバージョンに応じて次の項を参照してください。
- 「3.1.3 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境」
 - 「3.1.4 Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境と BladeSymphony 環境 (FC-SAN を使用する場合)」
 - 「3.1.5 Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
 - 「3.1.6 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
 - 「3.1.7 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合の関連製品」の「(3) HDLM がサポートするブートディスク環境 (FC-SAN を使用する場合)」
 - 「3.1.8 Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合の関連製品」の「(3) HDLM がサポートするブートディスク環境」
 - 「3.1.9 Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
 - 「3.1.10 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
 - 「3.1.11 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する場合の関連製品」の「(4) HDLM がサポートするブートディスク環境」
- HDLM はインストール実行時に障害解析のためのログ情報をファイルに出力します。出力先となるファイル名は `/var/tmp/hdlminstlog/installhdlm[01-10].log` で、最大で 10 ファイル作成されます。すでに 10 ファイル作成されている状態で、インストールを実行すると最も古いファイルが削除され、新たなログファイルが出力されます。
 - HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールしても、次の情報は以前の環境から引き継がれます。
 - HDLM デバイスの構成定義情報
 - HDLM の機能設定情報

- ログ情報
- ドライバの構成

3.5 環境を構築する場合の注意事項

ここでは、HDLM の環境を構築する場合の注意事項について説明します。

HDLM を運用する場合の注意事項については、「4.1 HDLM の使用上の注意事項」を参照してください。

3.5.1 ハードウェアの設定についての注意事項

- 1台のホストに設置する HBA の種類は、混在していてもかまいません。ただし、HDLM 管理対象のデバイスに接続している HBA は、すべて同一の種類にしてください。この場合、HBA のドライバのバージョンも合わせてください。異なる種類の HBA を使用すると、障害発生時にバスを切り替えられません。
- ストレージシステムのベンダ ID およびプロダクト ID を変更しないでください。変更すると、HDLM がストレージシステムを認識できなくなります。
- ストレージシステムの起動は、ホストを起動する前に行ってください。
- PCI バスにデバイスを追加した場合、HBA とほかのデバイスとで IRQ を共有すると、問題が発生することがあります。デバイスを追加する場合は、ほかのデバイスと IRQ を共有しないでください。
- ファイバチャネルスイッチを使用してホストとストレージシステムを接続した環境での注意事項を次に示します。

- ファイバチャネルスイッチとストレージシステム間のバスが断線したままホストを起動すると、再起動前とバスのターゲット ID が変わることがあります。このとき、ホスト稼働中は断線したバスを回復できない場合があります。また、HDLM コマンドでバスの状態を表示した場合に、変更前のターゲット ID のバスが表示されることや、断線したバスが表示されないことがあります。

この現象が発生した場合は、以前動作していた状態と同じ構成になるよう、断線したバスを交換してください。HDLM デバイスが変更されていた場合は、上位プログラムへの指定をし直してください。

- ファイバチャネルスイッチのゾーン設定を変更した場合、バスのターゲット ID が変わることがあります。そのため HDLM コマンドでバスの状態を表示した場合に、変更前のターゲット ID のバスが表示されることや、ホスト再起動後の HDLM デバイス名が変更されることがあります。ホストの再起動後に HDLM デバイス名を確認してください。HDLM デバイス名が変更されていた場合は、上位プログラムへの指定をし直してください。

ただし、これらの場合 HBA ドライバの Persistent Binding 機能を使用して各 LU へのターゲット ID を固定することによって、この注意事項を回避できます。ご使用の HBA ドライバでの Persistent Binding 機能サポートの有無や設定方法の詳細については、HBA ドライバ付属のマニュアルを参照してください。

3.5.2 Linux に関する注意事項

- HDLM をインストールおよびアンインストールする場合は、マルチユーザーモードの環境で実行してください。

- /var ディレクトリをルートディレクトリ「/」と別パーティションに設定した場合、OS 起動時に実行される/var ディレクトリのマウント処理が完了するまで、ログが/var/log/messages ファイルに出力されなくなります。
- 同じホスト内の物理的または論理的に異なるディスクに対して複数の OS がある場合、それぞれの OS に対して HDLM をインストールできます。また、1つの OS に複数のカーネルがある場合は、HDLM をインストールしたカーネルが起動された場合だけ、HDLM を使用できます。ただし、Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合は、HDLM をインストールしたカーネル以外を起動したときに、そのまま HDLM を使用できます。この場合、必要な設定はありません。
- Red Hat Enterprise Linux の場合、HDLM をインストールした状態で initscripts パッケージを更新して OS を再起動したあとに、/etc/rc.d/rc.sysinit ファイルに HDLM の情報が無いときは、システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) を実行してください。

HDLM の情報の有無は、次に示すコマンドで確認してください。

```
# grep DLM /etc/rc.d/rc.sysinit
```

コマンドを実行したあとに何も出力されない場合、HDLM の情報はありません。

dlmupdatesysinit ユティリティについては、「[7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユーティリティ](#)」を参照してください。

- SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合、HDLM をインストールした状態で aaa_base パッケージ、raidtools パッケージ、mdadm パッケージ、または lvm2 パッケージを更新して OS を再起動したあとに、次に示す現象が発生したときは dlmupdatesysinit ユティリティを実行してください。
 - 自動マウントの設定をしている HDLM デバイスがマウントされていない場合
 - HDLM デバイス上に構築した md デバイスが活性化されていない場合
 - HDLM デバイス上に構築した LVM が活性化されていない場合
 - /etc/init.d/boot.localfs ファイル、/etc/init.d/boot.md ファイル、および/etc/init.d/lvm2 ファイルのどれかに HDLM の情報がない場合、またはすべてのファイルに HDLM の情報がない場合

HDLM の情報は次に示すコマンドで確認してください。

```
# grep Required-Start /etc/init.d/boot.localfs
# grep Required-Start /etc/init.d/boot.md
# grep Required-Start /etc/init.d/boot.lvm
```

コマンドを実行したあとに「boot.hdlm」の記述が出力されない場合、HDLM の情報はありません。

dlmupdatesysinit ユティリティについては、「[7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユーティリティ](#)」を参照してください。

3.5.3 インストールについての注意事項

- HDLM を新規インストールする場合はライセンスキーが必要になります。HDLM のライセンスを更新する場合は、HDLM コマンドの set -lic オペレーションを実行します。ライセンスキーの期限は、ライセンスキーファイルに記述されているライセンスキーまたは入力したライセンスキーの種別によって設定されます。ライセンスキーの種別および set オペレーションについては、「[6.6 set 動作環境を設定する](#)」を参照してください。

- HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) を実行して HDLM デバイスの構成を変更する場合、HAL デーモン※の影響で、メモリ不足になることがあります。この場合、ホストが応答しなくなります。

これを回避するには、dlmcfmgr ユティリティを実行するとき HAL デーモンを停止してください。HAL デーモンを停止する手順を次に示します。

注※

USB デバイス、CD-ROM の挿入など、ハードウェア構成の変化を検知します。

- a. HAL デーモンの起動状態を確認します。

HAL デーモンの起動状態は、/sbin/service コマンドで確認できます。コマンドを実行した結果、HAL デーモンが起動している場合、「実行中」と表示されます。

```
# /sbin/service haldaemon status
```

HAL デーモンが停止している場合、「停止」と表示されます。

- b. 手順 a の結果、HAL デーモンが起動している場合、HAL デーモンを停止します。

/sbin/service コマンドを実行して、HAL デーモンを停止してください。なお、HAL デーモンが完全に停止するまで多少時間が掛かります。

```
# /sbin/service haldaemon stop
```

- c. HAL デーモンが停止したことを確認します。

/sbin/service コマンドを実行して、HAL デーモンが停止したことを確認してください。

```
# /sbin/service haldaemon status
```

- d. dlmcfmgr ユティリティ (dlmcfmgr -r または dlmcfmgr -i) を実行し、HDLM デバイスを構成します。

```
# /sbin/dlmcfmgr -r
```

または

```
# /sbin/dlmcfmgr -i
```

- e. HAL デーモンを起動します。

/sbin/service コマンドを実行して、HAL デーモンを起動してください。

```
# /sbin/service haldaemon start
```

- f. HAL デーモンが起動されたことを確認します。

/sbin/service コマンドを実行して、HAL デーモンが起動したことを確認してください。

```
# /sbin/service haldaemon status
```

3.5.4 再インストールまたはアップグレードインストールについての注意事項

- ライセンスの有効期限が過ぎている場合に HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールをするときは、ライセンスキーが必要になります。

HDLM のライセンスを更新する場合は、HDLM コマンドの set -lic オペレーションを実行します。ライセンスキーの期限は、ライセンスキーファイルに記述されているライセンスキーマ

たは入力したライセンスキーの種別によって設定されます。ライセンスキーの種別および set オペレーションについては、「[6.6 set 動作環境を設定する](#)」を参照してください。

- アップグレードインストール中は、HDLM マネージャが停止します。このため、アップグレードインストールを行う場合は、ログの出力など HDLM マネージャの動作を前提としているアプリケーションを停止してください。
 - アップグレードインストール中は HDLM マネージャが停止するため、障害ログは出力されません。また、HDLM の機能の設定もできなくなります。アップグレードインストール後は、すぐにホストを再起動してください。
 - アップグレードインストールは中断しないでください。

3.5.5 Device Manager エージェントについての注意事項

- 05-00 以降の Device Manager エージェントがインストールされているホストに HDLM をインストールする場合、インストール中に次に示す Device Manager エージェントのコマンドを実行しないでください。

hbsasrv, HiScan, hdvmagt_account, hdvmagt_schedule, hldutil, TIC

3.6 HDLM のインストール

HDLM を新規インストールする手順、再インストールする手順、およびアップグレードインストールする手順について説明します。HDLM のインストール手順には、HDLM のインストール後にホストを再起動する方法と、再起動しない方法とがあります。また、HDLM はサイレントインストールできます。サイレントインストールとは、HDLM のインストール時に応答処理を省略できるインストール方法です。ご使用の環境に適したインストール方法を選択してください。

HDLM デバイスを作成するには、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfgmgr) を使用します。dlmcfgmgr ユティリティについては、「[7.3 dlmcfgmgr HDLM 構成定義ユーティリティ](#)」を参照してください。

SCSI デバイスを使用したブートディスク環境に HDLM をインストールする場合は、「[3.7 ブートディスクを管理するための HDLM のインストール](#)」を参照してください。

HDLM は Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, Red Hat Enterprise Linux 5, Oracle Enterprise Linux 5, および Red Hat Enterprise Linux 6 で md デバイス環境をサポートします。すでに md デバイスが活性化されている環境に HDLM を新規インストールする場合は、「[3.9.3 md デバイス環境への HDLM の適用](#)」を参照してください。

3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備

HDLM を新規インストールする前の準備について説明します。HDLM 管理対象予定のデバイスのバックアップ、ハードウェアの設定、ボリューム管理ソフトウェアの設定などを行います。

(1) HDLM 管理対象予定のデバイスへの操作

この手順は、HDLM 管理対象予定のデバイスをすでに運用している場合に行ってください。

1. HDLM 管理対象予定のデバイスにアクセスする、すべてのアプリケーションのプロセスを終了します。
2. 必要があれば、HDLM 管理対象予定のデバイスの内容を、テープなどにバックアップします。
3. デバイスの登録を解除します。

クラスタソフトウェアを含むプログラム（ボリューム管理ソフトウェア以外）に HDLM が管理する予定のデバイスを登録している場合、登録を解除してください。HDLM インストール後に管理対象のデバイスにアクセスするときは、HDLM が作成する HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を使用するため、これまでの設定名ではアクセスできません。

4. マウントを解除します。

SCSI デバイスを指定して HDLM 管理対象予定のデバイスをマウントしている場合は、マウントを解除します。

はじめに、現在の設定を確認します。次に示すコマンドを実行します。

```
# mount
```

現在の設定が次に示すように出力されます。

図 3-2 mount コマンドの実行結果

```
# mount
/dev/hda5 on / type ext3 (rw)
/dev/sda on /mntpt type ext3 (rw)
none on /proc type proc (rw)
usbdevfs on /proc/bus/usb type usbdevfs (rw)
/dev/hda1 on /boot type ext3 (rw)
none on /dev/pts type devpts (rw,gid=5,mode=620)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)
none on /proc/sys/fs/binfmt_misc type binfmt_misc (rw)
#
```

網掛けの部分が HDLM で管理する予定の SCSI デバイスです。この SCSI デバイスに対して次に示すコマンドを実行して、マウントを解除します。

```
# umount /mntpt
```

5. ホストの起動時に自動でマウントする設定をしている場合は、`/etc/fstab` ファイルを編集してその設定を削除してください。

`/etc/fstab` ファイルの編集例を次に示します。

図 3-3 /etc/fstab ファイルの編集例

LABEL=/	/	ext3	defaults	1 1
/dev/hda1	/boot	ext3	defaults	1 2
/dev/sda	/mntpt	ext3	defaults,noauto	0 0
none	/dev/pts	devpts	gid=5,mode=620	0 0
none	/proc	proc	defaults	0 0
none	/dev/shm	tmpfs	defaults	0 0
/dev/hda3	swap	swap	defaults	0 0
/dev/cdrom	/mnt/cdrom	iso9660	noauto,owner,kudzu,ro	0 0
/dev/fd0	/mnt/floppy	auto	noauto,owner,kudzu	0 0

網掛け部分の行の先頭に「#」を付けてコメントアウトしてください。なお、SCSI デバイスに対して LABEL= を付ける Linux の機能は、HDLM ではサポートしていません。この機能は、使用しないでください。

(2) ボリュームグループの確認方法

すでに LVM を使用して物理ボリューム、ボリュームグループ、論理ボリュームを作成した場合、「3.10 LVM2 の設定」で説明する手順を実行するには、次に示すすべての条件を満たす必要があります。論理ボリュームやファイルシステムを作成していても、移行作業への影響はありません。

- 1つの HDLM 管理対象予定のデバイスに対してパスごとに存在する SCSI デバイスの論理デバイスファイルのうち、1つだけに対して物理ボリュームが作成され、その物理ボリュームに対してだけボリュームグループが作成されている。
ここでは、上記のことを確認する方法を説明します。
- 論理ボリュームのマウントが解除されている。

ここでは、vg02 というボリュームグループが、1つの物理ボリュームで作成されている場合、および2つの物理ボリュームで作成されている場合の確認の方法を説明します。なお、/dev/sde および/dev/sdu は同じ HDLM 管理対象予定のデバイスに対して定義された SCSI デバイスの論理デバイスファイルであることとします。

vg02 というボリュームグループが、どの物理ボリュームによって作成されているかを確認するためには、次に示すコマンドを実行します。

```
# vgdisplay -v
```

1つの物理ボリュームで作成されている場合（条件を満たす場合）と、2つの物理ボリュームで作成されている場合（条件を満たしていない場合）の実行例を次に示します。

図 3-4 vgdisplay -v の実行結果（物理ボリュームが1つの場合）

```
# vgdisplay -v
--- Volume group ---
VG Name          vg02
VG Access        read/write
VG Status        available/resizable
VG #             2
MAX LV           256
Cur LV          0
Open LV          0
MAX LV Size      255.99 GB
Max PV           256
Cur PV          1
Act PV           1
VG Size          2.29 GB
PE Size          4 MB
Total PE         585
Alloc PE / Size  0 / 0
Free PE / Size   585 / 2.29 GB
VG UUID          SCaKcF-17i2-0jxy-m2Xw-Y1xj-XE1h-WuyCk0

--- No logical volumes defined in "vg02" ---

--- Physical volumes ---
PV Name (#)      /dev/sde (1)
PV Status        available / allocatable
Total PE / Free PE  585 / 585
```

網掛けの部分を確認することによって、vg02 が、/dev/sde によって作成されていることを確認します。

図 3-5 vgdisplay -v の実行結果（物理ボリュームが 2 つの場合）

```
# vgdisplay -v
--- Volume group ---
VG Name                vg02
VG Access               read/write
VG Status               available/resizable
VG #                    2
MAX LV                  256
Cur LV                 0
Open LV                 0
MAX LV Size             255.99 GB
Max PV                  256
Cur PV                 2
Act PV                  2
VG Size                 4.57 GB
PE Size                 4 MB
Total PE                1170
Alloc PE / Size         0 / 0
Free PE / Size          1170 / 4.57 GB
VG UUID

--- No logical volumes defined in "vg02" ---

--- Physical volumes ---
PV Name (#)             /dev/sdu (2)
PV Status                available /allocatable
Total PE / Free PE      585 / 585

PV Name (#)             /dev/sde (1)
PV Status                available /allocatable
Total PE / Free PE      585 / 585
```

網掛けの部分を確認することによって、vg02 が、同一の HDLM 管理対象予定のデバイスに対応する /dev/sde および /dev/sdu によって作成されていることを確認します。

(3) syslogd の設定ファイルの設定

インストール実行時のログは、syslog に出力します。Red Hat Enterprise Linux の場合は、syslogd の設定ファイル（システムログの構成定義ファイル）を参照して、Error レベル以上のメッセージが出力される設定になっていることを確認します。

syslogd の設定ファイルの内容例を次に示します。

図 3-6 syslogd の設定ファイルの内容例（Red Hat Enterprise Linux の場合）

```
# cat /etc/syslog.conf | grep /var/log/messages
*.info:mail.none:authpriv.none:cron.none          /var/log/messages
#
```

監査ログを採取する場合は、拡張用の Facility（local0～7）に監査ログ専用の出力先を指定することを推奨します。また、拡張用の Facility の重要度は「info」を指定することを推奨します。/etc/syslog.conf の設定例を次に示します。

```
local0.info /usr/local/audlog
```

(4) マウントポイントの設定 (Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合)

Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合、DVD-ROM は自動マウントされません。

あらかじめ、`/media/cdrom` ディレクトリを作成してください。

(5) パーティションの確認

`/etc/opt` ディレクトリがルートディレクトリ「/」と同じパーティション上に配置されているか、確認してください。

`/etc/opt` ディレクトリは OS の構築時に作成しておいてください。

(6) Xen の設定

Xen を使用している場合は、あらかじめ `domainU` を停止しておいてください。また、`domain0` の起動と連携して `domainU` も自動的に起動されるよう設定している場合、`domainU` が自動的に起動しないよう一時的に設定を変更してください。

3.6.2 JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合の準備

JP1/NETM/DM を使用すると、分散している複数のホストに、一括して HDLM をリモートインストールできます。ここでは、HDLM をリモートインストールする場合の準備として、JP1/NETM/DM を使用した HDLM のパッケージング、HDLM の配布指令の作成、および HDLM の配布指令の登録について説明します。HDLM の配布指令の実行 (インストール) については、「3.6.3 HDLM の新規インストール」、「3.6.5 HDLM の再インストール」および「3.6.6 HDLM のアップグレードインストール」の順に含めて説明します。

このマニュアルでは、資源登録システムおよび配布管理システムの OS が UNIX で、かつ配布先システムの OS が Linux の場合について説明します。資源登録システムおよび配布管理システムの OS が Windows の場合は、使用する JP1/NETM/DM のバージョンに応じて、次のマニュアルを参照してください。

バージョンが 07-00 の場合

- 「JP1/NETM/DM システム構築 (Windows(R)用)」
- 「JP1/NETM/DM システム運用 1 (Windows(R)用)」
- 「JP1/NETM/DM システム運用 2 (Windows(R)用)」

バージョンが 08-00 以降の場合

- 「JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R)用)」
- 「JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R)用)」
- 「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用)」
- 「JP1/NETM/DM 運用ガイド 2 (Windows(R)用)」

HDLM はインストール先のホストに PUSH 型でインストールされます。PULL 型ではインストールできません。

(1) リモートインストールの流れ

「図 3-7 リモートインストールの流れ」に示す流れに従って、HDLM をリモートインストールしてください。

図 3-7 リモートインストールの流れ



(2) 前提条件

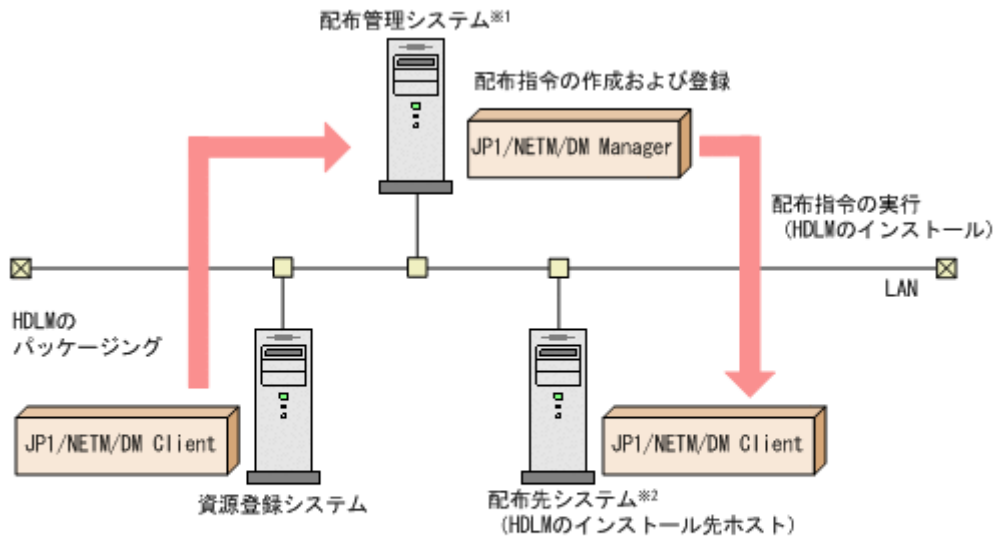
JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールするための条件を示します。

- プログラム
HDLM をリモートインストールする環境を構築するためには、次の製品が必要です。
 - JP1/NETM/DM Manager (UNIX 版 06-73 以降, Windows 版 07-00 以降)
配布管理システムに必要です。配布管理システムとは、ソフトウェアを配布先システムにインストールし、インストール状況やインストール先の状態を管理するシステムです。
 - JP1/NETM/DM Client (07-00 以降)
資源登録システム、および HDLM をインストールするすべてのホストに必要です。資源登録システムとは、ソフトウェアを配布管理システムへ登録するシステムです。

JP1/NETM/DM Manager の詳細については、マニュアル「JP1/NETM/DM Manager」を参照してください。JP1/NETM/DM Client の詳細については、マニュアル「JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用)」を参照してください。

- システム構成
JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合のシステム構成を次の図に示します。

図 3-8 JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合のシステム構成



注※1 配布管理システムにJP1/NETM/DM Clientをインストールした場合、配布管理システムでHDLMのパッケージングができます。

注※2 配布先システムでもHDLMのパッケージングができます。

まず、資源登録システムから配布管理システムに HDLM を登録（パッケージング）します。次に配布管理システムで、HDLM のインストール先などを指定した配布指令を作成して実行管理ファイルに登録します。配布指令を実行すると、HDLM が配布先システムにインストールされます。

配布指令を実行すると、配布先システムには展開前の HDLM が一時的に格納されます（HDLM の DVD-ROM に格納されているサンプルファイルを使用する場合、/var/tmp に格納されます）。配布先システムの HDLM の一時的な格納場所には、十分な空き容量を確保してください。

(3) HDLM のパッケージング

資源登録システムから配布管理システムへ HDLM を登録します。この操作は、資源登録システムで実行します。

1. 資源登録システムにログインします。
2. HDLM の DVD-ROM をセットします。
3. HDLM の製品名称やインストールに関する情報を設定した登録ファイル、および配布先システムで実行されるインストーラ実行シェルスクリプトを作成します。

HDLM の DVD-ROM に格納されている登録ファイルとインストーラ実行シェルスクリプトを、編集しないでそのまま使用することをお勧めします。

登録ファイルとインストーラ実行シェルスクリプトの名称および格納場所を次の表に示します。

表 3-63 登録ファイルとインストーラ実行シェルスクリプトの名称および格納場所

ファイルの種類	ファイル名	格納場所
登録ファイル	HDLM_regfile	DVD-ROM のマウントポイント/netmdm_sample/
インストーラ実行シェルスクリプト	install.sh	

登録ファイルの内容を次に示します。「xxxx」の部分には、HDLM のバージョンが表示されます。

網掛けの部分は変更できます。システムの構成や運用方法に合わせて、必要に応じて変更してください。変更する場合、網掛けの「/var/tmp/」の部分は、すべて同じパスにしてください。

```

Group           HC
ResourceName    HDLM_LINUX
ProgramName     HITACHI_DYNAMIC_LINK_MANAGER_SOFTWARE
Version         xxxx
APAfterGeneration /var/tmp/HDLM/netmdm_sample/install.sh
APWatchTimer    300
InstallDirectory /var/tmp/
InstallTiming   EXECUTE

```

インストーラ実行シェルスクリプトの内容を次に示します。

網掛けの部分は変更できます。システムの構成や運用方法に合わせて、必要に応じて変更してください。変更する場合、網掛けの「/var/tmp/」の部分は、登録ファイルの網掛けの「/var/tmp/」の部分と同じパスにしてください。

```

#!/bin/sh
if [ ! -f /var/tmp/hdlm_license ]; then
    exit 1
fi
/var/tmp/HDLM/installhdlm -s -p /var/tmp/HDLM/rpm 2>&1
rm -r /var/tmp/HDLM

```

- 次に示すコマンドを実行して、配布管理システムへ HDLM を登録します。

```

# mkdir -p /opt/NETMRDS/UPUPL/hd/HDLM
# cp -pr DVD-ROMのマウントポイント/* /opt/NETMRDS/UPUPL/hd/HDLM
# rdscm -k NETM/DMパスワード /opt/NETMRDS/UPUPL/hd/HDLM/netmdm_sample/HDLM_regfile

```

(4) HDLM の配布指令の作成および登録

HDLM の配布指令を作成および登録します。この操作は配布管理システムで実行します。コマンド例の「xxxx」の部分には、登録ファイルに設定したバージョンが表示されます。

- 配布管理システムにログインします。
- 次に示すコマンドを実行して、登録されているパッケージの一覧を表示し、HDLM のパッケージ名を確認します。

```
# rdsdmrsc -c
```

コマンドの実行例を次に示します。この例は、HDLM の DVD-ROM に格納されている登録ファイルを使用して、HDLM を登録した場合の例です。網掛けの部分が HDLM のパッケージ名です。

```

# rdsdmrsc -c
KDDH3043-I : Displaying the list of packages.
C      1
C.HC   1
C.HC.HDLM_LINUX.xxxx.0000

```

- 次に示すコマンドを実行して、配布指令を登録します。

```
# rdsdmind -d -a 配布先ホスト名 -s HDLM のパッケージ名
```

HDLM のパッケージ名には、手順 2 で表示された HDLM のパッケージ名を指定します。

コマンドの実行例を次に示します。網掛けの部分が HDLM のパッケージ名です。

```

# rdsdmind -d -a host1 -s C.HC.HDLM_LINUX.xxxx.0000
KDDH3023-I : Completed registering a job.

```

ライセンスキーファイルの配布と、配布管理システムからの配布指令の実行は、「3.6.3 HDLM の新規インストール」、「3.6.5 HDLM の再インストール」および「3.6.6 HDLM のアップグレードイン

ストール」で説明しているインストール手順に含まれています。手順に従って操作を進めてください。

3.6.3 HDLM の新規インストール

HDLM を新規にインストールする手順を、次に説明します。なお、インストール前には前提となる準備が必要です。インストール前の準備については「3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備」を参照してください。

JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合、HDLM をインストールするすべてのホストに対して手順 1 から手順 2 を実行してください。

1. Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
2. ライセンスキーの準備をします。

次のどちらかの方法で、所定のディレクトリにライセンスキーファイルを格納してください。

- /var/tmp ディレクトリに、ライセンスキーファイル（「*.plk」）を「hdlm_license」という名称で格納する。

```
/var/tmp/hdlm_license
```

- 次に示すコマンドを実行して、/etc/opt/DynamicLinkManager ディレクトリにライセンスキーファイル（dlm.lic_key）を作成する。

```
# mkdir /etc/opt/DynamicLinkManager
# echo " ライセンスキー " > /etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_key
```

JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合は、手順 3 に進んでください。HDLM をリモートインストールしない場合は、手順 4 に進んでください。

3. JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合は、HDLM のパッケージを登録した配布管理システムで、次のコマンドを実行します。

```
# rdsdmind -x
```

配布指令で指定したすべてのホストに HDLM がインストールされます。

インストールが完了したら手順 8 に進んでください。手順 8 以降の操作は、HDLM をインストールしたすべてのホストに対して実施してください。

4. HDLM をリモートインストールしない場合は、DVD-ROM をセットしてマウントします。

DVD-ROM が自動的にマウントされなかったときは、mount コマンドを実行して決められたマウントポイントに DVD-ROM をマウントします。

マウントポイントが、/media/cdrom の場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
# mount /dev/cdrom /media/cdrom
```

各ディストリビューションでの決められたマウントポイントを次の表に示します。

表 3-64 各ディストリビューションのマウントポイント

ディストリビューション	マウントポイント
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4	/media/cdrecorder
Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6	/media/cdrom
SUSE LINUX Enterprise Server	/media/cdrom DVD-ROM が自動的にマウントされた場合は

ディストリビューション	マウントポイント
	/media/メディアのボリュームID※

注1

上記以外のマウントポイントにマウントした場合、HDLMをインストールできません。

注2

DVD-ROMの内容をコピーし、コピー先のディレクトリからインストールする場合、上記に示すマウントポイントと同じ名称のディレクトリに、DVD-ROMの内容をそのままコピーしてください。ファイルのパーミッションやディレクトリ構成が異なると、HDLMをインストールできません。

注※

ISO-9660ファイルシステムでフォーマットされたメディア（CD-ROMなど）のボリューム名のことです。メディアのボリュームIDは、volnameコマンドで確認してください。メディアのボリュームIDが「VOL01234」の場合の実行例を次に示します。

```
# volname /dev/cdrom
VOL01234
```

5. HDLMのバージョンを確認します。

HDLMのDVD-ROMに格納されているinstallux.shまたはHDLMインストールユーティリティ（installhdlm）を実行して、インストールするHDLMのバージョンを確認します。

DVD-ROMのマウントポイントが、/media/cdromの場合のコマンドの実行例を次に示します。

- installux.shを実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh -v
```

- installhdlmユーティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdlm -v
```

コマンドの実行結果を次に示します。「x.x.x-xx」の部分がHDLMのバージョンです。

```
KAPL09177-I HDLM version: x.x.x-xx
```

6. インストールを実行します。

HDLMのDVD-ROMに格納されているinstallux.shまたはinstallhdlmユーティリティを指定して、インストールを実行します。

DVD-ROMのマウントポイントが、/media/cdromの場合のインストール実行例を次に示します。

- installux.shを実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh
```

- installhdlmユーティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdlm
```

7. 新規インストールを確認する KAPL09093-I メッセージが表示されるので、HDLMのバージョンを確認して、問題なければ「y」を入力します。

インストールが完了すると、ライセンスキーファイルは消去されます。

8. HDLM がインストールされていることを確認します。

次に示すコマンドを実行して、インストールされたパッケージの詳細情報を表示します。

```
# rpm -qi HDLM
Name       : HDLM
Version    : x.x.x.x.xxx
Release    : xx
:
```

「Version」に「x.x.x.x.xxx」が表示されていれば、正しいバージョンがインストールされています。x.x.x.x.xxx にはインストールされた HDLM のバージョンが表示されます。

9. ホストとストレージシステムとの接続に IP-SAN を使用している場合は、/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf ファイルに定義されている「iscsi_boot=n」の記述を、「iscsi_boot=y」に変更します。

10. HDLM のドライバオプションを設定する場合は HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ (dlmsetopt) を実行します。

詳細については「7.7 dlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ」を参照してください。

この手順を実行した場合は、手順 13 に進んでください。

11. ホストを再起動しないでインストールをする場合は、手順 12 以降を行います。再起動する場合は、手順 13 に進んでください。

12. HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart) を実行します。

詳細については「7.8 dlmstart HDLM 起動ユーティリティ」を参照してください。

13. root ユーザが使用するシェルの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、/opt/DynamicLinkManager/bin を追加します。

root ユーザの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、次の記述を追加します。これによって、HDLM コマンドや HDLM ユティリティを簡潔に実行できます。

BourneAgain シェル、または Korn シェルを使用している場合

```
PATH=$PATH:/opt/DynamicLinkManager/bin ; export PATH
```

C シェルを使用している場合

```
set path= ( $path /opt/DynamicLinkManager/bin )
```

PATH 環境変数を設定しない場合は、絶対パスを指定してコマンドやユーティリティを実行してください。

手順 12 を行っている場合は、手順 15 に進んでください。

14. ホストを再起動します。

次に示すコマンドを実行してホストを再起動してください。

```
# shutdown -r now
```

HDLM デバイスにパスが設定されて、HDLM マネージャが起動します。

15. 「3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備」の「(1) HDLM 管理対象予定のデバイスへの操作」で/etc/fstab ファイルを編集した場合は、次に示す行を追加して SCSI デバイス指定から HDLM デバイス指定に変更します。

なお、SCSI デバイスに対して LABEL= を付ける Linux の機能は、HDLM ではサポートしていません。この機能は、使用しないでください。

/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

LABEL=/	/	ext3	defaults	1 1
/dev/hda1	/boot	ext3	defaults	1 2
#/dev/sda	/mnt/pt	ext3	defaults, noauto	0 0
/dev/sdd1maa	/mnt/pt	ext3	defaults, noauto	0 0
none	/dev/pts	devpts	gid=5, mode=620	0 0
none	/proc	proc	defaults	0 0
none	/dev/shm	tmpfs	defaults	0 0
/dev/hda3	swap	swap	defaults	0 0
/dev/cdrom	/mnt/cdrom	iso9660	noauto, owner, kudzu, ro	0 0
/dev/fd0	/mnt/floppy	auto	noauto, owner, kudzu	0 0

図に示した網掛けの行を追加します。

16. LUKS の使用に必要な設定をします。

ホストの OS で LUKS を使用する場合に設定します。また、LUKS の設定をした SCSI デバイスを HDLM で管理する場合は、LUKS の設定を SCSI デバイスから HDLM デバイスに移行する必要があります。

LUKS の設定については、「[3.8 LUKS の設定](#)」を参照してください。

17. md デバイスの使用に必要な設定をします。

md デバイスを使用する場合は、マルチパス環境で md デバイスを作成してください。

md デバイスの設定については、「[3.9 md デバイスの設定](#)」を参照してください。

18. ボリューム管理ソフトウェアの使用に必要な設定をします。

ボリューム管理ソフトウェアで作成された論理ボリュームを、すでに使用している場合、HDLM デバイスを物理ボリュームとする論理ボリュームに置き換えます。

ボリューム管理ソフトウェアの設定については、「[3.10 LVM2 の設定](#)」を参照してください。

19. 仮想環境の使用に必要な設定をします。

Xen を使用する場合は、domainU で HDLM デバイスを使用するように設定します。KVM を使用する場合は、HDLM デバイスをハードウェア設定ファイルに登録します。

HDLM がサポートする仮想環境の動作環境は、「[3.1.14 HDLM がサポートする仮想環境](#)」を参照してください。仮想環境の設定については、「[3.11 Xen の設定](#)」または「[3.12 KVM の設定](#)」を参照してください。

20. クラスタ構成での運用に必要な設定をします。

クラスタ構成の場合、クラスタで指定されている SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名に書き換えます。

クラスタソフトウェアの設定については、「[3.13 CLUSTERPRO の設定](#)」、「[3.14 Heartbeat の設定](#)」、「[3.15 Oracle RAC の設定](#)」、「[3.16 RHCM の設定](#)」、または「[3.17 VCS の設定](#)」を参照してください。

21. HDLM コマンドの view オペレーションを実行して、HDLM の設定および各プログラムの状態を表示します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
HDLM Version           : x.x.x-xx
Service Pack Version   :
Load Balance           : on(extended lio)
Support Cluster        :
Elog Level             : 3
Elog File Size (KB)    : 9900
Number Of Elog Files   : 2
Trace Level            : 0
Trace File Size (KB)   : 1000
Number Of Trace Files  : 4
Path Health Checking   : on(30)
Auto Failback          : off
Reservation Status     :
Intermittent Error Monitor : off
Dynamic I/O Path Control : off(10)
```

```

HDL Manager Ver      WakeupTime
Alive      x.x.x-xx  yyyy/mm/dd hh:mm:ss
HDL Alert Driver Ver  WakeupTime      ElogMem Size
Alive      x.x.x-xx  yyyy/mm/dd hh:mm:ss 1000
HDL Driver Ver      WakeupTime
Alive      x.x.x-xx  yyyy/mm/dd hh:mm:ss
License Type      Expiration
Permanent      -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

クラスタソフトウェアを使用している場合、「Support Cluster」には何も表示されません。しかし、クラスタ機能は問題なく動作します。

22. 正しいバージョンの HDLM がインストールされているか確認します。

「HDL Version」に「x.x.x-xx」が表示されていれば、正しいバージョンがインストールされています。「x.x.x-xx」はインストールされた HDLM のバージョンです。

23. プログラムが正常に動作しているか確認します。

「HDL Manager」、「HDL Alert Driver」、および「HDL Driver」がすべて「Alive」であれば、プログラムが正常に動作しています。

正常に動作していない場合の対処方法については、「5.4 プログラム障害時の対処」を参照してください。

インストールが完了したら、「3.18 パス構成の確認」に記載されている手順に従って、パス構成を確認してください。

3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備

HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備について説明します。

HDLM を再インストールする場合は、「3.6.5 HDLM の再インストール」を参照してください。

HDLM をアップグレードインストールする場合は、「3.6.6 HDLM のアップグレードインストール」を参照してください。

(1) HDLM 管理対象のデバイスへの操作

HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前に、HDLM 管理対象のデバイスに対応する HDLM デバイスのマウントを解除します。HDLM 管理対象のデバイスのバックアップなどを行ってください。

1. HDLM 管理対象のデバイスにアクセスする、すべてのアプリケーションのプロセスを終了します。
2. HDLM デバイスのマウントを解除します。
HDLM デバイスを指定して HDLM 管理対象のデバイスをマウントしている場合は、マウントを解除してください。
3. HDLM 管理対象のデバイスの内容を、テープなどにバックアップします。
この操作は、必要に応じて実施してください。

(2) md デバイスの非活性化

md デバイスを使用している場合は、HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前に、次の手順を実行して md デバイスを非活性化してください。

1. 次のコマンドを実行して、md デバイスを非活性化します。


```
# mdadm -S --scan
```

2. 次のコマンドを実行して、md デバイスが非活性化されていることを確認します。
RAID1 (ミラーリング) を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat  
Personalities : [raid1]  
unused devices: <none>
```

「mdx : active」と表示されないことを確認してください。

(3) ボリュームグループの非活性化

HDLM デバイス上の論理ボリュームを使用している場合は、HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前に、次の手順を実行してボリュームグループを非活性化してください。

1. HDLM デバイス上の論理ボリュームをアンマウントします。
論理ボリュームが/mnt/lvol1 にマウントされている場合の実行例を次に示します。

```
# umount /mnt/lvol1
```

2. ボリュームグループを非活性化します。

HDLM デバイス上の論理ボリュームが、vg01 (ボリュームグループ) に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -an vg01  
0 logical volume(s) in volume group "vg01" now active
```

(4) Xen の設定

Xen を使用している場合は、あらかじめ domainU を停止しておいてください。また、domain0 の起動と連携して domainU も自動的に起動されるよう設定している場合、domainU が自動的に起動しないよう一時的に設定を変更してください。

3.6.5 HDLM の再インストール

HDLM を再インストールする手順を、次に説明します。なお、インストール前には前提となる準備が必要です。インストール前の準備については「3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備」を参照してください。

ライセンスの有効期限が切れている状態で HDLM を再インストールする場合は、ライセンスキーファイルが必要です。

JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合、手順 1 から手順 2 までを、HDLM をインストールするすべてのホストに対して実行してください。

1. Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
2. ライセンスキーの準備をします。

/var/tmp ディレクトリに、ライセンスキーファイル (*.plk) を「hdlm_license」という名称で格納します。

```
/var/tmp/hdlm_license
```

JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合は、手順 3 に進んでください。HDLM をリモートインストールしない場合は、手順 4 に進んでください。

再インストール時のライセンスキーについて

すでに永久ライセンスキーが入力されている場合は、ライセンスキーファイルの作成は不要です。

一時ライセンスキー、または非常用ライセンスキーが入力されている場合は、一時ライセンスキー、または非常用ライセンスキーの期限満了日が表示されます。

一時ライセンスキー、または非常用ライセンスキーの期限が切れている場合、`/etc/opt/DynamicLinkManager` ディレクトリにあるライセンスキーファイル (`d1m.lic_key`) を更新する必要があります。

インストールの実行時にライセンスキーファイルがない場合は、「KAPL09090-W ライセンスを更新せずに、処理を続行します。」というメッセージが表示されて処理が続行されます。

ライセンスキーファイルの作成方法については「[3.6.3 HDLM の新規インストール](#)」を参照してください。

ライセンスキーについては「[6.6.2 パラメタ](#)」を参照してください。

3. JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合は、HDLM のパッケージを登録した配布管理システムで、次のコマンドを実行します。

```
# rdsdmind -x
```

配布指令で指定したすべてのホストに HDLM がインストールされます。

インストールが完了したら手順 8 に進んでください。手順 8 以降の操作は、HDLM をインストールしたすべてのホストに対して実施してください。

4. HDLM をリモートインストールしない場合は、DVD-ROM をセットしてマウントします。DVD-ROM が自動的にマウントされなかったときは、`mount` コマンドを実行して決められたマウントポイントに DVD-ROM をマウントします。マウントポイントが、`/media/cdrom` の場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
# mount /dev/cdrom /media/cdrom
```

各ディストリビューションでの決められたマウントポイントを次の表に示します。

表 3-65 各ディストリビューションのマウントポイント

ディストリビューション	マウントポイント
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4	<code>/media/cdrecorder</code>
Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6	<code>/media/cdrom</code>
SUSE LINUX Enterprise Server	<code>/media/cdrom</code> DVD-ROM が自動的にマウントされた場合は <code>/media/メディアのボリューム ID</code> ※

注 1

上記以外のマウントポイントにマウントした場合、HDLM をインストールできません。

注 2

DVD-ROM の内容をコピーし、コピー先のディレクトリからインストールする場合、上記に示すマウントポイントと同じ名称のディレクトリに、DVD-ROM の内容をそのままコピーしてください。ファイルのパーミッションやディレクトリ構成が異なると、HDLM をインストールできません。

注※

ISO-9660 ファイルシステムでフォーマットされたメディア (CD-ROM など) のボリューム名のことです。メディアのボリューム ID は、volname コマンドで確認してください。メディアのボリューム ID が「VOL01234」の場合の実行例を次に示します。

```
# volname /dev/cdrom
VOL01234
```

5. HDLM のバージョンを確認します。

HDLM の DVD-ROM に格納されている installux.sh または HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) を実行して、インストールする HDLM のバージョンを確認します。DVD-ROM のマウントポイントが、/media/cdrom の場合のコマンドの実行例を次に示します。

- installux.sh を実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh -v
```

- installhdlm ユティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdlm -v
```

コマンドの実行結果を次に示します。「x.x.x-xx」の部分が HDLM のバージョンです。

```
KAPL09177-I HDLM version: x.x.x-xx
```

6. インストールを実行します。

HDLM の DVD-ROM に格納されている installux.sh または installhdlm ユティリティを指定して、インストールを実行します。

DVD-ROM のマウントポイントが、/media/cdrom の場合のインストール実行例を次に示します。

- installux.sh を実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh
```

- installhdlm ユティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdlm
```

7. 再インストールを確認する KAPL09093-I メッセージが表示されるので、HDLM のバージョンを確認して、問題なければ「y」を入力します。

8. HDLM がインストールされていることを確認します。

次に示すコマンドを実行して、インストールされたパッケージの詳細情報を表示します。

```
# rpm -qi HDLM
Name           : HDLM
Version        : x.x.x.x.xxx
Release        : xx
               :
```

「Version」に「x.x.x.x.xxx」が表示されていれば、正しいバージョンがインストールされています。x.x.x.x.xxx にはインストールされたバージョンが表示されます。

9. HDLM のドライバオプションを設定する場合は HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ (dlmsetopt) を実行します。

詳細については「7.7 dlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ」を参照してください。

この手順を実行した場合は、手順 12 に進んでください。

10. ホストを再起動しないでインストールをする場合は、手順 11 以降を行います。再起動する場合は、手順 12 に進んでください。

11. HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart) を実行します。

詳細については「7.8 dlmstart HDLM 起動ユーティリティ」を参照してください。

12. root ユーザが使用するシェルの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、/opt/DynamicLinkManager/bin を追加します。

root ユーザの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、次の記述を追加します。これによって、HDLM コマンドや HDLM ユティリティを簡潔に実行できます。

BourneAgain シェル、または Korn シェルを使用している場合

```
PATH=$PATH:/opt/DynamicLinkManager/bin ; export PATH
```

C シェルを使用している場合

```
set path= ( $path /opt/DynamicLinkManager/bin )
```

PATH 環境変数を設定しない場合は、絶対パスを指定してコマンドやユーティリティを実行してください。

手順 11 を行っている場合は、手順 14 に進んでください。

13. ホストを再起動します。

次に示すコマンドを実行してホストを再起動してください。

```
# shutdown -r now
```

HDLM デバイスにパスが設定されて、HDLM マネージャが起動します。

14. 「3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備」の「(1) HDLM 管理対象予定のデバイスへの操作」で/etc/fstab ファイルを編集した場合は、次に示す行を追加して SCSI デバイス指定から HDLM デバイス指定に変更します。

なお、SCSI デバイスに対して LABEL=を付ける Linux の機能は、HDLM ではサポートしていません。この機能は、使用しないでください。

/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

LABEL=/	/	ext3	defaults	1 1
/dev/hda1	/boot	ext3	defaults	1 2
#/dev/sda	/mntpt	ext3	defaults, noauto	0 0
/dev/sddlmaa	/mntpt	ext3	defaults, noauto	0 0
none	/dev/pts	devpts	gid=5, mode=620	0 0
none	/proc	proc	defaults	0 0
none	/dev/shm	tmpfs	defaults	0 0
/dev/hda3	swap	swap	defaults	0 0
/dev/cdrom	/mnt/cdrom	iso9660	noauto, owner, kudzu, ro	0 0
/dev/fd0	/mnt/floppy	auto	noauto, owner, kudzu	0 0

図に示した網掛けの行を追加します。

15. LUKS の使用に必要な設定をします。

ホストの OS で LUKS を使用する場合に設定します。また、LUKS の設定をした SCSI デバイスを HDLM で管理する場合は、LUKS の設定を SCSI デバイスから HDLM デバイスに移行する必要があります。

LUKS の設定については、「3.8 LUKS の設定」を参照してください。

16. md デバイスを使用する場合は、次のコマンドを実行して、md デバイスを活性化します。

```
# mdadm -A -scan
```

```
mdadm: /dev/md0 has been started with 2 drives.
```

17. md デバイスを使用する場合は、次のコマンドを実行して、md デバイスが活性化されていることを確認します。

RAID1（ミラーリング）を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sddlmaa1[0] sddlma1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]

unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、HDLM デバイスが表示されていることを確認してください。

18. ボリューム管理ソフトウェアの使用に必要な設定をします。

「3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備」の「(3) ボリュームグループの非活性化」を実行した場合は、次の手順を実行してボリュームグループを活性化してください。

手順 13 を実行していない場合

手順 19 に進んでください。

手順 13 を実行している場合

手順 20 に進んでください。

ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合は、手順 22 に進んでください。

その他のボリューム管理ソフトウェアの設定については、「3.10 LVM2 の設定」を参照してください。

19. ボリュームグループを活性化します。

HDLM デバイス上の論理ボリュームが、vg01（ボリュームグループ）に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -ay vg01
vgchange -- volume group "vg01" successfully activated
```

20. HDLM デバイス上の論理ボリュームをマウントします。

論理ボリュームが/dev/vg01/lvol1 で、これを/mnt/lvol1 にマウントする場合の実行例を次に示します。

```
# mount /dev/vg01/lvol1 /mnt/lvol1
```

21. 仮想環境の使用に必要な設定をします。

Xen を使用する場合は、domainU で HDLM デバイスを使用するように設定します。KVM を使用する場合は、HDLM デバイスをハードウェア設定ファイルに登録します。

HDLM がサポートする仮想環境の動作環境は、「3.1.14 HDLM がサポートする仮想環境」を参照してください。仮想環境の設定については、「3.11 Xen の設定」または「3.12 KVM の設定」を参照してください。

22. クラスタ構成での運用に必要な設定をします。

クラスタ構成の場合、クラスタで指定されている SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名に書き換えます。

クラスタソフトウェアの設定については、「3.13 CLUSTERPRO の設定」、「3.14 Heartbeat の設定」、「3.15 Oracle RAC の設定」、「3.16 RHCM の設定」、または「3.17 VCS の設定」を参照してください。

3.6.6 HDLM のアップグレードインストール

HDLM をアップグレードインストールする手順を、次に説明します。なお、インストール前には前提となる準備が必要です。インストール前の準備については「3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備」を参照してください。

05-40 より前のバージョンの HDLM からアップグレードインストールする場合、またはライセンスの有効期限が切れている状態で 05-40 以降のバージョンの HDLM をインストールする場合は、ライセンスキーファイルが必要です。

JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合、手順 1 から手順 2 までを、HDLM をインストールするすべてのホストに対して実行してください。

1. Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
2. ライセンスキーの準備をします。

次のどちらかの方法で、所定のディレクトリにライセンスキーファイルを格納してください。

- /var/tmp ディレクトリに、ライセンスキーファイル (*.plk) を「hdlm_license」という名称で格納する。

```
/var/tmp/hdlm_license
```

- 次に示すコマンドを実行して、/etc/opt/DynamicLinkManager ディレクトリにライセンスキーファイル (dlm.lic_key) を作成する。

/etc/opt/DynamicLinkManager ディレクトリがない場合は、mkdir コマンドでディレクトリを作成してください。

```
# mkdir /etc/opt/DynamicLinkManager
# echo " ライセンスキー " > /etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_key
```

JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合は、手順 3 に進んでください。HDLM をリモートインストールしない場合は、手順 4 に進んでください。

3. JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールする場合は、HDLM のパッケージを登録した配布管理システムで、次のコマンドを実行します。

```
# rdsdmind -x
```

配布指令で指定したすべてのホストに HDLM がインストールされます。

インストールが完了したら手順 8 に進んでください。手順 8 以降の操作は、HDLM をインストールしたすべてのホストに対して実施してください。

4. HDLM をリモートインストールしない場合は、DVD-ROM をセットしてマウントします。DVD-ROM が自動的にマウントされなかったときは、mount コマンドを実行して決められたマウントポイントに DVD-ROM をマウントします。

マウントポイントが、/media/cdrom の場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
# mount /dev/cdrom /media/cdrom
```

各ディストリビューションでの決められたマウントポイントを次の表に示します。

表 3-66 各ディストリビューションのマウントポイント

ディストリビューション	マウントポイント
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4	/media/cdrecorder
Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6	/media/cdrom
SUSE LINUX Enterprise Server	/media/cdrom

ディストリビューション	マウントポイント
	DVD-ROM が自動的にマウントされた場合は /media/メディアのボリューム ID ※

注 1

上記以外のマウントポイントにマウントした場合、HDLM をインストールできません。

注 2

DVD-ROM の内容をコピーし、コピー先のディレクトリからインストールする場合、上記に示すマウントポイントと同じ名称のディレクトリに、DVD-ROM の内容をそのままコピーしてください。ファイルのパーミッションやディレクトリ構成が異なると、HDLM をインストールできません。

注※

ISO-9660 ファイルシステムでフォーマットされたメディア（CD-ROM など）のボリューム名のことです。メディアのボリューム ID は、volname コマンドで確認してください。メディアのボリューム ID が「VOL01234」の場合の実行例を次に示します。

```
# volname /dev/cdrom
VOL01234
```

5. HDLM のバージョンを確認します。

HDLM の DVD-ROM に格納されている installux.sh または HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) を実行して、インストールする HDLM のバージョンを確認します。

DVD-ROM のマウントポイントが、/media/cdrom の場合のコマンドの実行例を次に示します。

- installux.sh を実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh -v
```

- installhdlm ユティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdlm -v
```

コマンドの実行結果を次に示します。「x.x.x-xx」の部分が HDLM のバージョンです。

```
KAPL09177-I HDLM version: x.x.x-xx
```

6. インストールを実行します。

HDLM の DVD-ROM に格納されている installux.sh または installhdlm ユティリティを指定して、インストールを実行します。

DVD-ROM のマウントポイントが、/media/cdrom の場合のインストール実行例を次に示します。

- installux.sh を実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh
```

- installhdlm ユティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdlm
```

7. アップグレードインストールを確認する KAPL09093-I メッセージが表示されるので、HDLM のバージョンを確認して、問題なければ「y」を入力します。

8. HDLM がインストールされていることを確認します。

次に示すコマンドを実行して、インストールされたパッケージの詳細情報を表示します。

```
# rpm -qi HDLM
Name       : HDLM
Version    : x.x.x.x.xxx
Release    : xx
          :
```

「Version」に「x.x.x.x.xxx」が表示されていれば、正しいバージョンがインストールされています。x.x.x.x.xxxにはインストールされたバージョンが表示されます。

9. ホストとストレージシステムとの接続に IP-SAN を使用している場合は、`/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf` ファイルに定義されている「`iscsi_boot=n`」の記述を、「`iscsi_boot=y`」に変更します。

10. HDLM のドライバオプションを設定する場合は HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ (`dlmsetopt`) を実行します。

詳細については「[7.7 dlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ](#)」を参照してください。

この手順を実行した場合は、手順 13 に進んでください。

11. ホストを再起動しないでインストールをする場合は、手順 12 以降を行います。再起動する場合は、手順 13 に進んでください。

12. HDLM 起動ユーティリティ (`dlmstart`) を実行します。

詳細については「[7.8 dlmstart HDLM 起動ユーティリティ](#)」を参照してください。

13. root ユーザが使用するシェルの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、`/opt/DynamicLinkManager/bin` を追加します。

root ユーザの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、次の記述を追加します。これによって、HDLM コマンドや HDLM ユティリティを簡潔に実行できます。

BourneAgain シェル、または Korn シェルを使用している場合

```
PATH=$PATH:/opt/DynamicLinkManager/bin ; export PATH
```

C シェルを使用している場合

```
set path= ( $path /opt/DynamicLinkManager/bin )
```

PATH 環境変数を設定しない場合は、絶対パスを指定してコマンドやユーティリティを実行してください。

手順 12 を行っている場合は、手順 15 に進んでください。

14. ホストを再起動します。

次に示すコマンドを実行してホストを再起動してください。

```
# shutdown -r now
```

HDLM デバイスにパスが設定されて、HDLM マネージャが起動します。

15. 「[3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備](#)」の「(1) HDLM 管理対象予定のデバイスへの操作」で `/etc/fstab` ファイルを編集した場合は、次に示す行を追加して SCSI デバイス指定から HDLM デバイス指定に変更します。

なお、SCSI デバイスに対して LABEL= を付ける Linux の機能は、HDLM ではサポートしていません。この機能は、使用しないでください。

`/etc/fstab` ファイルの編集例を次に示します。

LABEL=/	/	ext3	defaults	1 1
/dev/hda1	/boot	ext3	defaults	1 2
#/dev/sda	/mnt/pt	ext3	defaults, noauto	0 0
/dev/sdd1maa	/mnt/pt	ext3	defaults, noauto	0 0
none	/dev/pts	devpts	gid=5, mode=620	0 0
none	/proc	proc	defaults	0 0
none	/dev/shm	tmpfs	defaults	0 0
/dev/hda3	swap	swap	defaults	0 0
/dev/cdrom	/mnt/cdrom	iso9660	noauto, owner, kudzu, ro	0 0
/dev/fd0	/mnt/floppy	auto	noauto, owner, kudzu	0 0

図に示した網掛けの行を追加します。

16. LUKS の使用に必要な設定をします。

ホストの OS で LUKS を使用する場合に設定します。また、LUKS の設定をした SCSI デバイスを HDLM で管理する場合は、LUKS の設定を SCSI デバイスから HDLM デバイスに移行する必要があります。

LUKS の設定については、「[3.8 LUKS の設定](#)」を参照してください。

17. md デバイスを使用する場合は、次のコマンドを実行して、md デバイスを活性化します。

```
# mdadm -A -scan
mdadm: /dev/md0 has been started with 2 drives.
```

18. md デバイスを使用する場合は、次のコマンドを実行して、md デバイスが活性化されていることを確認します。

RAID1 (ミラーリング) を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sdd1maa1[0] sdd1mab1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]

unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、HDLM デバイスが表示されていることを確認してください。

19. ボリューム管理ソフトウェアの使用に必要な設定をします。

「[3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備](#)」の「(3) ボリュームグループの非活性化」を実行した場合は、次の手順を実行してボリュームグループを活性化してください。

手順 14 を実行していない場合

手順 20 に進んでください。

手順 14 を実行している場合

手順 21 に進んでください。

ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合は、手順 23 に進んでください。

その他のボリューム管理ソフトウェアの設定については、「[3.10 LVM2 の設定](#)」を参照してください。

20. ボリュームグループを活性化します。

HDLM デバイス上の論理ボリュームが、vg01 (ボリュームグループ) に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -ay vg01
vgchange -- volume group "vg01" successfully activated
```

21. HDLM デバイス上の論理ボリュームをマウントします。

論理ボリュームが/dev/vg01/lvol1で、これを/mnt/lvol1にマウントする場合の実行例を次に示します。

```
# mount /dev/vg01/lvol1 /mnt/lvol1
```

22. 仮想環境の使用に必要な設定をします。

Xenを使用する場合は、domainUでHDLMデバイスを使用するように設定します。KVMを使用する場合は、HDLMデバイスをハードウェア設定ファイルに登録します。

HDLMがサポートする仮想環境の動作環境は、「[3.1.14 HDLMがサポートする仮想環境](#)」を参照してください。仮想環境の設定については、「[3.11 Xenの設定](#)」または「[3.12 KVMの設定](#)」を参照してください。

23. クラスタ構成での運用に必要な設定をします。

クラスタ構成の場合、クラスタで指定されているSCSIデバイスの論理デバイスファイル名を、HDLMデバイスの論理デバイスファイル名に書き換えます。

クラスタソフトウェアの設定については、「[3.13 CLUSTERPROの設定](#)」、「[3.14 Heartbeatの設定](#)」、「[3.15 Oracle RACの設定](#)」、「[3.16 RHCMの設定](#)」、または「[3.17 VCSの設定](#)」を参照してください。

3.6.7 HDLMのサイレントインストール

HDLMを新規インストール、再インストール、またはアップグレードインストールする場合、サイレントインストールできます。サイレントインストールとは、HDLMのインストール時に応答処理を省略できるインストール方法です。

HDLMをサイレントインストールする手順を、次に説明します。なお、インストール前には前提となる準備が必要です。新規インストール前の準備については「[3.6.1 HDLMを新規インストールする前の準備](#)」を参照してください。アップグレードインストールまたは再インストール前の準備については「[3.6.4 HDLMを再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備](#)」を参照してください。

1. Linuxに、root権限を持つユーザでログインします。

2. 次の場合はライセンスキーの準備をします。

- HDLMを新規インストールする場合
- ライセンスの期限が切れている状態でHDLMを再インストールまたはアップグレードインストールする場合

インストール情報設定ファイルでライセンスキーまたはライセンスキーファイルの格納パスを指定する場合は、任意の格納ディレクトリ名およびファイル名を使用できます。なお、指定したライセンスキーまたはライセンスキーファイルはインストール後に削除されません。

指定方法の詳細は、「[7.11.3 インストール情報設定ファイルの編集方法](#)」を参照してください。

3. DVD-ROMをセットしてマウントします。

DVD-ROMが自動的にマウントされなかったときは、mountコマンドを実行して決められたマウントポイントにDVD-ROMをマウントします。

マウントポイントが、/media/cdromの場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
# mount /dev/cdrom /media/cdrom
```

各ディストリビューションでの決められたマウントポイントを次の表に示します。

表 3-67 各ディストリビューションのマウントポイント

ディストリビューション	マウントポイント
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4	/media/cdrecorder
Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6	/media/cdrom
SUSE LINUX Enterprise Server	/media/cdrom DVD-ROM が自動的にマウントされた場合は /media/メディアのボリュームID ※

注 1

上記以外のマウントポイントにマウントした場合、HDLM をインストールできません。

注 2

DVD-ROM の内容をコピーし、コピー先のディレクトリからインストールする場合、上記に示すマウントポイントと同じ名称のディレクトリに、DVD-ROM の内容をそのままコピーしてください。ファイルのパーミッションやディレクトリ構成が異なると、HDLM をインストールできません。

注※

ISO-9660 ファイルシステムでフォーマットされたメディア（CD-ROM など）のボリューム名のことです。メディアのボリューム ID は、volname コマンドで確認してください。メディアのボリューム ID が「VOL01234」の場合の実行例を次に示します。

```
# volname /dev/cdrom
VOL01234
```

4. HDLM のバージョンを確認します。

HDLM の DVD-ROM に格納されている installux.sh または HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) を実行して、インストールする HDLM のバージョンを確認します。

DVD-ROM のマウントポイントが、/media/cdrom の場合のコマンドの実行例を次に示します。

- installux.sh を実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh -v
```

- installhdlm ユティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdlm -v
```

コマンドの実行結果を次に示します。「x.x.x-xx」の部分が HDLM のバージョンです。

```
KAPL09177-I HDLM version: x.x.x-xx
```

5. インストール情報設定ファイルを作成します。

インストールしたい設定に従って、インストール情報設定ファイルを編集してください。インストール情報設定ファイルで設定しなかった各種設定については、必要に応じて HDLM をインストールしたあとに設定してください。

サンプルファイルを使用する場合は、DVD-ROM から任意のディレクトリにコピーしてください。なお、サンプルファイルは任意のファイル名に変更できます。

DVD-ROM のマウントポイントが、/media/cdrom の場合のインストール実行例を次に示します。

```
# cp -p /media/cdrom/HDLM_Linux/config/sample_installhdml.conf /任意のディレクトリ/任意のファイル名
```

インストール情報設定ファイルの編集方法については、「[7.11.3 インストール情報設定ファイルの編集方法](#)」を参照してください。

6. インストールを実行します。

HDLM の DVD-ROM に格納されている `installux.sh` または `installhdml` ユティリティを指定して、インストールを実行します。

DVD-ROM のマウントポイントが、`/media/cdrom` の場合のインストール実行例を次に示します。

- `installux.sh` を実行する場合

```
# /media/cdrom/installux.sh -f / 任意のディレクトリ / インストール情報設定ファイル
```

- `installhdml` ユティリティを実行する場合

```
# /media/cdrom/HDLM_Linux/installhdml -f / 任意のディレクトリ / インストール情報設定ファイル
```

なお、手順 5 のインストール情報設定ファイルの編集で、ホストの再起動を指定している場合は、自動でホストが再起動されます。

7. HDLM がインストールされていることを確認します。

次に示すコマンドを実行して、インストールされたパッケージの詳細情報を表示します。

```
# rpm -qi HDLM
Name       : HDLM
Version    : x.x.x.x.xxx
Release    : xx
          :
```

「Version」に「`x.x.x.x.xxx`」が表示されていれば、正しいバージョンがインストールされています。`x.x.x.x.xxx` にはインストールされた HDLM のバージョンが表示されます。

8. HDLM のドライバオプションを設定する場合は HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (`dmlmsetopt`) を実行します。

詳細については「[7.7 dmlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユティリティ](#)」を参照してください。

9. root ユーザが使用するシェルの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、`/opt/DynamicLinkManager/bin` を追加します。

root ユーザの環境設定ファイルの PATH 環境変数に、次の記述を追加します。これによって、HDLM コマンドや HDLM ユティリティを簡潔に実行できます。

BourneAgain シェル、または Korn シェルを使用している場合

```
PATH=$PATH:/opt/DynamicLinkManager/bin ; export PATH
```

C シェルを使用している場合

```
set path= ( $path /opt/DynamicLinkManager/bin )
```

PATH 環境変数を設定しない場合は、絶対パスを指定してコマンドやユティリティを実行してください。

10. 「[3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備](#)」の「(1) HDLM 管理対象予定のデバイスへの操作」で `/etc/fstab` ファイルを編集した場合は、次に示す行を追加して SCSI デバイス指定から HDLM デバイス指定に変更します。

なお、SCSI デバイスに対して LABEL= を付ける Linux の機能は、HDLM ではサポートしていません。この機能は、使用しないでください。

/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

LABEL=/	/	ext3	defaults	1 1
/dev/hda1	/boot	ext3	defaults	1 2
#/dev/sda	/mntpt	ext3	defaults, noauto	0 0
/dev/sdd1maa	/mntpt	ext3	defaults, noauto	0 0
none	/dev/pts	devpts	gid=5, mode=620	0 0
none	/proc	proc	defaults	0 0
none	/dev/shm	tmpfs	defaults	0 0
/dev/hda3	swap	swap	defaults	0 0
/dev/cdrom	/mnt/cdrom	iso9660	noauto, owner, kudzu, ro	0 0
/dev/fd0	/mnt/floppy	auto	noauto, owner, kudzu	0 0

図に示した網掛けの行を追加します。

11. LUKS の使用に必要な設定をします。

ホストの OS で LUKS を使用する場合に設定します。また、LUKS の設定をした SCSI デバイスを HDLM で管理する場合は、LUKS の設定を SCSI デバイスから HDLM デバイスに移行する必要があります。

LUKS の設定については、「[3.8 LUKS の設定](#)」を参照してください。

12. md デバイスの使用に必要な設定をします。

md デバイスを使用する場合は、マルチパス環境で md デバイスを作成してください。

md デバイスの設定については、「[3.9 md デバイスの設定](#)」を参照してください。

13. ボリューム管理ソフトウェアの使用に必要な設定をします。

「[3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備](#)」の「(3) ボリュームグループの非活性化」を実行した場合は、次の手順を実行してボリュームグループを活性化してください。

手順 5 のインストール情報設定ファイルの編集で、ホストの再起動を指定していない場合
手順 14 に進んでください。

手順 5 のインストール情報設定ファイルの編集で、ホストの再起動を指定している場合
手順 15 に進んでください。

ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合は、手順 17 に進んでください。

その他のボリューム管理ソフトウェアの設定については、「[3.10 LVM2 の設定](#)」を参照してください。

14. ボリュームグループを活性化します。

HDLM デバイス上の論理ボリュームが、vg01 (ボリュームグループ) に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -ay vg01
vgchange -- volume group "vg01" successfully activated
```

15. HDLM デバイス上の論理ボリュームをマウントします。

論理ボリュームが/dev/vg01/lvol1 で、これを/mnt/lvol1 にマウントする場合の実行例を次に示します。

```
# mount /dev/vg01/lvol1 /mnt/lvol1
```

16. 仮想環境の使用に必要な設定をします。

Xen を使用する場合は、domainU で HDLM デバイスを使用するように設定します。KVM を使用する場合は、HDLM デバイスをハードウェア設定ファイルに登録します。

HDLM がサポートする仮想環境の動作環境は、「[3.1.14 HDLM がサポートする仮想環境](#)」を参照してください。仮想環境の設定については、「[3.11 Xen の設定](#)」または「[3.12 KVM の設定](#)」を参照してください。

17. クラスタ構成での運用に必要な設定をします。

クラスタ構成の場合、クラスタで指定されている SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名に書き換えます。

クラスタソフトウェアの設定については、「3.13 CLUSTERPRO の設定」、「3.14 Heartbeat の設定」、「3.15 Oracle RAC の設定」、「3.16 RHCM の設定」、または「3.17 VCS の設定」を参照してください。

3.6.8 ディスク複製 OS インストール

Compute Systems Manager のマスターイメージデプロイ機能または Deployment Manager のディスク複製機能を使用して HDLM がインストールされた環境を複製する手順を説明します。必要に応じて Compute Systems Manager のマニュアルも参照してください。

なお、この手順は次の環境に対して適用できます。

- Red Hat Enterprise Linux 5
- Red Hat Enterprise Linux 6

補足事項

複製元ホストでディスクイメージを作成するときは、複製元ホストが認識している LU 数を 256 以下にしてください。ディスクイメージを複製先ホストに配布したあと、複製先ホストで HDLM がサポートする最大 LU 数まで LU を増設できます。

(1) Red Hat Enterprise Linux 5 (カーネルパラメータに LABEL を使用する) の場合

Red Hat Enterprise Linux 5 でカーネルパラメータに LABEL を使用する手順を次に示します。

1. 複製元ホストをバックアップします。

複製作業後に複製元ホストを元に戻すため、およびディスク複製 OS インストールの操作で障害が発生した場合に元の状態に戻せるようにするため、Compute Systems Manager のシステムバックアップ機能または Deployment Manager を使用して、複製元ホストをバックアップしてください。

2. 複製元ホストで、`/etc/fstab` ファイルに記述された HDLM デバイスを確認します。

HDLM デバイスが記述されている `/etc/fstab` ファイルの例を次に示します。

```
      :
/dev/sddlmaa1      /boot                ext3      defaults  1 2
      :
/dev/sddlmaa3      swap                 swap      defaults  0 0
      :
```

3. 複製元ホストで、HDLM デバイスに付けられた LABEL を確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa1
/dev/sddlmaa1: LABEL="/boot" TYPE="ext3"
```

LABEL が「/boot」であることを確認できます。

LABEL が設定されていない場合の出力結果の例を次に示します。

パーティションタイプが `swap` 以外かつファイルシステムタイプが `ext2` または `ext3` の場合：

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa1
/dev/sddlmaa1: SEC_TYPE="ext2" TYPE="ext3"
```

パーティションタイプが `swap` の場合：

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa3
/dev/sddlmaa3: TYPE="swap"
```

LABEL が設定されていない場合、次の手順で設定してください。LABEL にはホスト上でほかのブロックデバイスと重複しない名称を設定してください。また、手順では tune2fs コマンドを使用していますが、e2label コマンドでも設定できます。

パーティションタイプが swap 以外かつファイルシステムタイプが ext2 または ext3 の場合：

- a. tune2fs コマンドを実行して LABEL を設定します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/tune2fs -L /boot /dev/sddlmaa1
tune2fs 1.39 (29-May-2006)
```

- b. blkid コマンドを実行して LABEL が設定されていることを確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa1
/dev/sddlmaa1: SEC_TYPE="ext2" TYPE="ext3" LABEL="/boot"
```

パーティションタイプが swap の場合：

- a. swapoff コマンドを実行して swap デバイスを無効にします。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/swapoff /dev/sddlmaa3
```

- b. mkswap コマンドを実行して LABEL を設定した swap デバイスを再作成します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/mkswap -L SWAP-sda3 /dev/sddlmaa3
Setting up swapspace version 1, size = 4095996 KiB
LABEL=SWAP-sda3, no uuid
```

- c. swapon コマンドを実行して swap デバイスを有効にします。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/swapon /dev/sddlmaa3
```

- d. blkid コマンドを実行して LABEL が設定されていることを確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/blkid /dev/sddlmaa3
/dev/sddlmaa3: TYPE="swap" LABEL="SWAP-sda3"
```

4. 複製元ホストで、/etc/fstab ファイルを編集します。

/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

(変更前)

```
      :
/dev/sddlmaa1      /boot      ext3      defaults  1 2
      :
/dev/sddlmaa3      swap      swap      defaults  0 0
      :
```

(変更後)

```
      :
#/dev/sddlmaa1      /boot      ext3      defaults  1 2
LABEL=/boot      /boot      ext3      defaults  1 2
      :
#/dev/sddlmaa3      swap      swap      defaults  0 0
LABEL=SWAP-sda3      swap      swap      defaults  0 0
      :
```

- a. HDLM デバイスが記述された行をコピーします。
 - b. コピー元の行の先頭に#を付けてコメントアウトします。
 - c. コピーした行の HDLM デバイスを、LABEL を使用した記述に変更します。
5. 複製元ホストで複製の準備をします。

Compute Systems Manager の場合

複製元ホストから **Compute Systems Manager** の Web クライアントにアクセスします。
[ツール] メニューの [ダウンロード] から Linux 用の **Sysprep** ツールをダウンロードし、
複製元ホストで解凍後、次のコマンドを実行してください。

```
< Sysprep ツールの解凍先 > /linuxrep/LinuxRepSetUp
```

Deployment Manager の場合

複製元ホストで次のコマンドを実行してください。

```
< Deployment Manager のインストールメディアのマウントポイント > /Linux/<ホスト  
のアーキテクチャ > /bin/linuxrep/LinuxRepSetUp
```

6. **Compute Systems Manager** の場合、複製用のマスターイメージを作成します。
Deployment Manager の場合、複製元ホストのディスクイメージを作成します。

Compute Systems Manager の場合

Compute Systems Manager を使用して、複製元ホストのスナップショットを取得してください。

Deployment Manager の場合

Deployment Manager を使用して、複製元ホストのディスクをバックアップしてください。

7. 複製元ホストの状態を戻します。

Compute Systems Manager の場合

複製元ホストを継続して業務で利用する場合、手順 1 でバックアップしたイメージを、
Compute Systems Manager のシステムリストア機能を使用して、複製元ホストにリストアしてください。

Deployment Manager の場合

複製元ホストを継続して業務で利用する場合、手順 1 でバックアップしたイメージを、
Deployment Manager を使用して、複製元ホストにリストアしてください。

8. **Compute Systems Manager** の場合、複製先ホストのデプロイテンプレート情報を入力します。
Deployment Manager の場合、複製先ホストのディスク複製用情報ファイルを作成します。

Compute Systems Manager の場合

Compute Systems Manager を使用して、複製先ホスト用のデプロイテンプレート情報を入力してください。

Deployment Manager の場合

Deployment Manager を使用して、複製先ホスト用のディスク複製用情報ファイルを作成してください。

9. **Compute Systems Manager** の場合、複製先ホストへマスターイメージを配布します。
Deployment Manager の場合、複製先ホストへディスクイメージを配布します。

Compute Systems Manager の場合

手順 6 で作成したマスターイメージと手順 8 で入力した情報を使用して、複製先ホストに対し **Compute Systems Manager** のマスターイメージデプロイ機能を実行してください。

Deployment Manager の場合

Deployment Manager を使用して、複製先ホストへディスクイメージを配布してください。

10. 複製先ホストで、ファイルシステムのマウントポイントとデバイスの対応関係、および swap デバイスに使用されているデバイスをそれぞれ確認します。

HDLM デバイスは、複製先ホストで新しく構成されます。このため、HDLM デバイス名は複製元ホストと複製先ホストの間で異なります。

mount コマンドを実行し、/etc/fstab ファイルに記載されたファイルシステムのマウントポイントとデバイスの対応関係を確認します。また、swapon -s コマンドを実行して、swap デバイスに使用されているデバイスを確認します。

ここでは、手順 4 で /boot と swap の行を編集した例を基に説明します。実行結果には、HDLM デバイスが表示される場合と SCSI デバイスが表示される場合があります。

HDLM デバイスが表示される場合：

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /bin/mount
:
/dev/sddlma1 on /boot type ext3 (rw)
:
/boot が「/dev/sddlma1」であることを確認できます。
# /sbin/swapon -s
Filename      Type          Size      Used      Priority
/dev/sddlma3  partition    4095992  0         -1
swap が「/dev/sddlma3」であることを確認できます。
```

HDLM デバイスが表示された場合は、手順 12 に進んでください。

SCSI デバイスが表示される場合：

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /bin/mount
:
/dev/sda1 on /boot type ext3 (rw)
:
/boot が「/dev/sda1」であることを確認できます。
# /sbin/swapon -s
Filename      Type          Size      Used      Priority
/dev/sda3     partition    4095992  0         -1
swap が「/dev/sda3」であることを確認できます。
```

- 複製先ホストで、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に -v パラメータを指定して確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
HDevName      Management    Device      Host      Channel  Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured    -           2         0        0       0
              -            2         0        1       0       0
/dev/sddlma3  configured    /dev/sda   3         0        0       0
              /dev/sdb   3         0        1       0       0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.
```

SCSI デバイス「/dev/sda」および「/dev/sdb」が HDLM デバイス「/dev/sddlma3」に対応していることが確認できます。

また、Device 列に「-」が表示されることがありますが問題ありません。

- 複製先ホストで、/etc/fstab ファイルを編集します。

手順 10 および手順 11（手順 10 で SCSI デバイスが表示された場合だけ実施）で確認した結果から、/etc/fstab ファイルを編集します。

手順 4 で編集した /etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

(変更前)

```
:
# /dev/sddlmaa1 /boot ext3 defaults 1 2
LABEL=/boot /boot ext3 defaults 1 2
:
# /dev/sddlmaa3 swap swap defaults 0 0
LABEL=SWAP-sda3 swap swap defaults 0 0
:
```

(変更後)

```

:
#/dev/sddlmaa1      /boot          ext3    defaults 1 2
#LABEL=/boot       /boot          ext3    defaults 1 2
/dev/sddlmaab1     /boot          ext3    defaults 1 2
:
#/dev/sddlmaa3      swap           swap    defaults 0 0
#LABEL=SWAP-sda3   swap           swap    defaults 0 0
/dev/sddlmaab3     swap           swap    defaults 0 0
:

```

- a. デバイスが LABEL で記述された行をコピーします。
- b. コピー元の行の先頭に#を付けてコメントアウトします。
- c. コピーした行の LABEL で記述されたデバイスを、HDLM デバイスを使用した記述に変更します。

13. 複製先ホストを再起動します。

手順 12 の編集結果を反映するため、次に示すコマンドを実行して複製先ホストを再起動します。

```
# /sbin/shutdown -r now
```

14. 複製先ホストに作成された HDLM デバイスの不要な情報を削除します。

HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgr -u all -s) を実行し、HDLM デバイスの不要な情報を削除します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# dlmcfmgr -u all -s
KAPL10340-E Several processes failed. See the /var/opt/
DynamicLinkManager/log/dlmcfmgr1.log file. Check the message output
before this message.
```

KAPL10340-E のメッセージが出力されますが、HDLM の動作上の問題はありません。

15. HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -lu) を実行して、HDLM が認識しているストレージの数、LU 数、パス数が正しいことを確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
Product      : AMS
SerialNumber  : 85003482
LUs          : 1
```

```
iLU HDevName Device PathID Status
0115 sddlmaab /dev/sda 000000 Online
      /dev/sdb 000001 Online
```

KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss

上記の実行結果は、ストレージシステムが 1 台、2 パス構成の LU が 1 つあることを示しています。

なお、手順 1 で作成したバックアップは、以降使用する必要がない場合は削除してもかまいません。

(2) Red Hat Enterprise Linux 6 (カーネルパラメータに UUID を使用する) の場合

Red Hat Enterprise Linux 6 でカーネルパラメータに UUID を使用する場合の手順を次に示します。

1. 複製元ホストをバックアップします。

複製作業後に複製元ホストを元に戻すため、およびディスク複製 OS インストールの操作で障害が発生した場合に元の状態に戻せるようにするため、Compute Systems Manager のシステムバックアップ機能または Deployment Manager を使用して、複製元ホストをバックアップしてください。

2. 複製元ホストで、/etc/fstab ファイルに記述された HDLM デバイスを確認します。

複製元ホストのディスクイメージを作成するために、UUID を使った記述に HDLM デバイスを変更します。

HDLM デバイスが記述されている/etc/fstab ファイルの例を次に示します。

```
:
/dev/sddlmaa1      /boot             ext4      defaults  1 2
:
/dev/sddlmaa3      swap              swap      defaults  0 0
:
```

3. 複製元ホストで、HDLM デバイスに付けられた UUID を確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa1
/dev/sddlmaa1: UUID="a136da75-c151-472d-ac5c-20f165f93776" TYPE="ext4"
```

UUID が「a136da75-c151-472d-ac5c-20f165f93776」であることを確認できます。

UUID が設定されていない場合の出力結果の例を次に示します。

パーティションタイプが swap 以外かつファイルシステムタイプが ext4 の場合：

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa1
/dev/sddlmaa1: TYPE="ext4"
```

パーティションタイプが swap の場合：

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa3
/dev/sddlmaa3: TYPE="swap"
```

UUID が設定されていない場合、次の手順で設定してください。

パーティションタイプが swap 以外かつファイルシステムタイプが ext4 の場合：

a. tune2fs コマンドを実行して UUID を設定します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/tune2fs -U `/usr/bin/uuidgen` /dev/sddlmaa1
tune2fs 1.39 (29-May-2006)
```

b. blkid コマンドを実行して UUID が設定されていることを確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa1
/dev/sddlmaa1: UUID="9cc2f846-cb45-4506-927b-a3c1e3f7b8a2"
TYPE="ext4"
```

パーティションタイプが swap の場合：

a. swapoff コマンドを実行して swap デバイスを無効にします。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/swapoff /dev/sddlmaa3
```

b. mkswap コマンドを実行して UUID を設定した swap デバイスを再作成します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/mkswap -U `/usr/bin/uuidgen` /dev/sddlmaa3
mkswap: /dev/sddlmaa3: warning: don't erase bootbits sectors
on whole disk. Use -f to force.
Setting up swapspace version 1, size = 2097148 KiB
no label, UUID=ae3d45f6-202e-48c5-9050-c04f172a95fe
```

c. swapon コマンドを実行して swap デバイスを有効にします。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/swapon /dev/sddlmaa3
```

d. blkid コマンドを実行して UUID が設定されていることを確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/blkid -c /dev/null /dev/sddlmaa3
/dev/sddlmaa3: UUID="ae3d45f6-202e-48c5-9050-c04f172a95fe"
TYPE="swap"
```

4. 複製元ホストで、`/etc/fstab` ファイルを編集します。

`/etc/fstab` ファイルの編集例を次に示します。

(変更前)

```
:
/dev/sddlmaa1      /boot              ext4      defaults  1 2
:
/dev/sddlmaa3      swap               swap      defaults  0 0
:
```

(変更後)

```
:
#/dev/sddlmaa1     /boot              ext4      defaults  1 2
UUID=a136da75-c151-472d-ac5c-20f165f93776 /boot ext4 defaults 1 2
:
#/dev/sddlmaa3     swap               swap      defaults  0 0
UUID=898c0125-39b1-4e0d-9dad-4118de688349 swap swap defaults 0 0
:
```

- a. HDLM デバイスが記述された行をコピーします。
 - b. コピー元の行の先頭に#を付けてコメントアウトします。
 - c. コピーした行の HDLM デバイスを、UUID を使用した記述に変更します。
5. 複製元ホストで複製の準備をします。

Compute Systems Manager の場合

複製元ホストから **Compute Systems Manager** の Web クライアントにアクセスします。
[ツール] メニューの [ダウンロード] から Linux 用の **Sysprep** ツールをダウンロードし、複製元ホストで解凍後、次のコマンドを実行してください。

```
< Sysprep ツールの解凍先 > /linuxrep/LinuxRepSetUp
```

Deployment Manager の場合

複製元ホストで次のコマンドを実行してください。

```
< Deployment Manager のインストールメディアのマウントポイント > /Linux/<ホストのアーキテクチャ>/bin/linuxrep/LinuxRepSetUp
```

6. **Compute Systems Manager** の場合、複製用のマスターイメージを作成します。
Deployment Manager の場合、複製元ホストのディスクイメージを作成します。

Compute Systems Manager の場合

Compute Systems Manager を使用して、複製元ホストのスナップショットを取得してください。

Deployment Manager の場合

Deployment Manager を使用して、複製元ホストのディスクをバックアップしてください。

7. 複製元ホストの状態を戻します。

Compute Systems Manager の場合

複製元ホストを継続して業務で利用する場合、手順 1 でバックアップしたイメージを、**Compute Systems Manager** のシステムリストア機能を使用して、複製元ホストにリストアしてください。

Deployment Manager の場合

複製元ホストを継続して業務で利用する場合、手順 1 でバックアップしたイメージを、**Deployment Manager** を使用して、複製元ホストにリストアしてください。

8. **Compute Systems Manager** の場合、複製先ホストのデプロイテンプレート情報を入力します。
Deployment Manager の場合、複製先ホストのディスク複製用情報ファイルを作成します。

Compute Systems Manager の場合

Compute Systems Manager を使用して、複製先ホスト用のデプロイテンプレート情報を入力してください。

Deployment Manager の場合

Deployment Manager を使用して、複製先ホスト用のディスク複製用情報ファイルを作成してください。

9. Compute Systems Manager の場合、複製先ホストへマスターイメージを配布します。

Deployment Manager の場合、複製先ホストへディスクイメージを配布します。

Compute Systems Manager の場合

手順 6 で作成したマスターイメージと手順 8 で入力した情報を使用して、複製先ホストに対し Compute Systems Manager のマスターイメージデプロイ機能を実行してください。

Deployment Manager の場合

Deployment Manager を使用して、複製先ホストへディスクイメージを配布してください。

10. 複製先ホストで、ファイルシステムのマウントポイントとデバイスの対応関係、および swap デバイスに使用されているデバイスをそれぞれ確認します。

HDLM デバイスは、複製先ホストで新しく構成されます。このため、HDLM デバイス名は複製元ホストと複製先ホストの間で異なります。

mount コマンドを実行し、/etc/fstab ファイルに記載されたファイルシステムのマウントポイントとデバイスの対応関係を確認します。また、swapon -s コマンドを実行して、swap デバイスに使用されているデバイスを確認します。

ここでは、手順 4 で /boot と swap の行を編集した例を基に説明します。実行結果には、HDLM デバイスが表示される場合と SCSI デバイスが表示される場合があります。

HDLM デバイスが表示される場合：

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /bin/mount
:
/dev/sddlmb1 on /boot type ext4 (rw)
:
/boot が「/dev/sddlmb1」であることを確認できます。
# /sbin/swapon -s
Filename      Type          Size      Used      Priority
/dev/sddlmb3  partition    4095992  0         -1
swap が「/dev/sddlmb3」であることを確認できます。
```

HDLM デバイスが表示された場合は、手順 12 に進んでください。

SCSI デバイスが表示される場合：

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /bin/mount
:
/dev/sda1 on /boot type ext4 (rw)
:
/boot が「/dev/sda1」であることを確認できます。
# /sbin/swapon -s
Filename      Type          Size      Used      Priority
/dev/sda3     partition    4095992  0         -1
swap が「/dev/sda3」であることを確認できます。
```

11. 複製先ホストで、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に -v パラメータを指定して確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
HDevName      Management      Device      Host      Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured      -           2         0         0       0
/dev/sddlmaa  configured      -           2         0         1       0
/dev/sddlma3  configured      /dev/sda   3         0         0       0
/dev/sddlma3  configured      /dev/sdb   3         0         1       0
```

KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.

SCSI デバイス「/dev/sda」および「/dev/sdb」が HDLM デバイス「/dev/sddlma3」に対応していることが確認できます。

また、Device 列に「-」が表示されることがありますが問題ありません。

12. 複製先ホストで、/etc/fstab ファイルを編集します。

手順 10 および手順 11（手順 10 で SCSI デバイスが表示された場合だけ実施）で確認した結果から、/etc/fstab ファイルを編集します。

手順 4 で編集した/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

(変更前)

```
:
#/dev/sddlmaa1      /boot          ext4 defaults 1 2
UUID=a136da75-c151-472d-ac5c-20f165f93776 /boot ext4 defaults 1 2
:
#/dev/sddlmaa3      swap           swap defaults 0 0
UUID=898c0125-39b1-4e0d-9dad-4118de688349 swap swap defaults 0 0
:
```

(変更後)

```
:
#/dev/sddlmaa1      /boot          ext4 defaults 1 2
#UUID=a136da75-c151-472d-ac5c-20f165f93776 /boot ext4 defaults 1 2
/dev/sddlma3        /boot          ext4 defaults 1 2
:
#/dev/sddlmaa3      swap           swap defaults 0 0
#UUID=898c0125-39b1-4e0d-9dad-4118de688349 swap swap defaults 0 0
/dev/sddlma3        swap           swap defaults 0 0
:
```

- デバイスが UUID で記述された行をコピーします。
- コピー元の行の先頭に#を付けてコメントアウトします。
- コピーした行の UUID で記述されたデバイスを、HDLM デバイスを使用した記述に変更します。

13. 複製先ホストを再起動します。

手順 12 の編集結果を反映するため、次に示すコマンドを実行して複製先ホストを再起動します。

```
# /sbin/shutdown -r now
```

14. 複製先ホストに作成された HDLM デバイスの不要な情報を削除します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfgmgr -u all -s) を実行し、HDLM デバイスの不要な情報を削除します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# dlmcfgmgr -u all -s
KAPL10340-E Several processes failed. See the /var/opt/
DynamicLinkManager/log/dlmcfgmgr1.log file. Check the message output
before this message.
```

KAPL10340-E のメッセージが出力されますが、HDLM の動作上の問題はありません。

15. HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -lu) を実行して、HDLM が認識しているストレージの数、LU 数、バス数が正しいことを確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
Product      : AMS
SerialNumber : 85003482
```

LUs : 1

```
iLU HDevName Device PathID Status
0115 sddlmb /dev/sda 000000 Online
      /dev/sdb 000001 Online
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

上記の実行結果は、ストレージシステムが 1 台、2 パス構成の LU が 1 つあることを示しています。

なお、手順 1 で作成したバックアップは、以降使用する必要がない場合は削除してもかまいません。

3.7 ブートディスクを管理するための HDLM のインストール

ストレージシステムの SCSI デバイスにあるブートディスクの環境に HDLM をインストールして HDLM デバイスを作成し、ブートディスクを HDLM デバイスにするための環境設定の手順を説明します。

3.7.1 ブートディスク環境へ HDLM をインストールする場合の注意事項

ブートディスクに HDLM を適用した場合の注意事項を次に示します。

- ブートディスクを作成できるストレージシステムとして、次の条件を満たしている必要があります。
 - HDLM を使用しない状態でも、ストレージシステムがブートディスクとしての機能をサポートしている
 - HBA が、ストレージシステムからの起動をサポートしている
- OS をインストールする場合は、ルートディレクトリ「/」と /boot ディレクトリを別のパーティションに作成してください。
- HDLM をブートディスクとして使用する場合は、カーネルパラメタの `resume`、`journal` および `dump` に HDLM デバイスを指定しないでください。
- Red Hat Enterprise Linux, SUSE LINUX Enterprise Server では、ブートディスクに LVM2 を使用している環境をサポートします。
- Red Hat Enterprise Linux, SUSE LINUX Enterprise Server では、ブートディスクに md デバイスを使用している環境はサポートしていません。
- 起動中に構成を変更したり、`/etc/fstab` ファイルの設定が正しくなかった場合は、システムが起動できなくなることがあります。
- 起動時にルートディレクトリ「/」がマウントされないと、障害ログ (`/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlmboot.log`) を取得できません。その場合は、コンソールに出力されるログを参照して問題を解析してください。
- 起動時の `dlmcfmgr` のログは、`/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlmboot.log` ファイルに出力されます。
- HDLM デバイスから起動する環境を構築したあとで、ブートディスクを変更することはできません。
- ブートディスクに設定した SANRISE のディスクを HDLM デバイスとして使用しない場合には、HDLM をインストールする前に、次の手順に従って `/etc/fstab` ファイルの記述を LABEL 指定から sd デバイス指定に編集してください。

- a. LABEL で指定されている OS のインストール先ディレクトリを確認します。
- ```
cat /etc/fstab
LABEL=/ / ext3 defaults 1 1
LABEL=/boot /boot ext3 defaults 1 2
```
- ルートディレクトリと/boot ディレクトリが LABEL 指定であることが確認できます。
- b. LABEL と sd デバイスの関係を確認します。
- ```
# mount
/dev/sda2 on / type ext3 (rw)
none on /proc type proc (rw)
none on /dev/pts type devpts (rw,gid=5,mode=620)
usbdevfs on /proc/bus/usb type usbdevfs (rw)
/dev/sda1 on /boot type ext3 (rw)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)
```
- ルートディレクトリが/dev/sda2、/boot ディレクトリが/dev/sda1 であることが確認できます。
- c. vi などのエディタを使用して、LABEL 指定を sd デバイス指定に変更します。
- (変更前)
- ```
LABEL=/ / ext3 defaults 1 1
LABEL=/boot /boot ext3 defaults 1 2
```
- (変更後)
- ```
/dev/sda2 / ext3 defaults 1 1
/dev/sda1 /boot ext3 defaults 1 2
```
- d. HDLM のインストールを行います。
- e. HDLM デバイス構成後に、dlmcfmgr -o コマンドを実行して、ブートディスクに対応する HDLM デバイスを管理対象外にしてください。
- udev 機能で SCSI デバイス名を変更している場合は、「3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定」および「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」で SCSI デバイス名を udev 機能で変更した SCSI デバイス名 (udev 名) に読み替えて操作してください。
- HDLM がインストールされた環境では HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) で SCSI デバイスと udev 名の対応関係を確認することができます。
- dlmcfmgr ユティリティに -v パラメタおよび -udev パラメタを指定して実行する例を次に示します。

図 3-9 dlmcfmgr ユティリティに -v パラメタおよび -udev パラメタを指定した実行例

```
# dlmcfmgr -v -udev
HDevName      Management  Device      Host  Channel Target  Lun  Udev
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda    0     0       0     0  /dev/aaaaaaaa
KAPL10302-l /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイス、Udev 列は udev 名になります。

- カーネルパッケージを更新する場合、使用している OS によって次のように対応ください。
 - Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合
カーネルパッケージの更新手順は「4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用」を参照してください。
 - Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合
カーネルパッケージを更新するときは、HDLM をいったんアンインストールしてからカーネルパッケージを更新し、再度 HDLM をインストールしてください。なお、HDLM のインストールとアンインストールを実行するため、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係が、アンインストール前とインストール後で変わる場合があります。

- カーネルパッケージを更新する場合で、次の条件をすべて満たすときは、Persistent Binding の設定を変更する必要があります。
 - ホストが BladeSymphony である
 - HDLM でブートディスクを管理している
 - Persistent Binding の機能が有効である
 Persistent Binding の設定については、マニュアル「Hitachi Gigabit Fibre Channel アダプタ ユーザーズガイド」を参照してください。
- ブートディスクに HDLM を適用する場合は、swap パーティションに LUKS を使用できません。
- HDLM デバイスをブートディスクとする環境で kdump 機能を使用する場合、SCSI デバイスを使用したシングルバス構成のブートディスクの環境で、kdump 機能用の初期 RAM ディスクイメージファイルの作成が必要になることがあります。HDLM デバイスをブートディスクとする環境で kdump 機能を使用する場合は、「付録 C. kdump 機能の設定手順」を参照してください。

3.7.2 ブートディスク環境へ HDLM をインストールする手順の概要

ブートディスク環境へ HDLM をインストールする手順について、概要を説明します。

(1) HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定

SCSI デバイスを使用したブートディスク環境へ HDLM を新規インストールするための手順について、概要を説明します。詳細については、「3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定」を参照してください。

- LABEL の使用の有無を確認して、使用している場合は解除します。
HDLM の環境では、LABEL に設定した値から SCSI デバイスを特定できないため、HDLM を使用する場合は、設定を解除する必要があります。「3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定」の手順 1 から手順 16 を参照してください。
- HDLM をインストールします。
「3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定」の手順 17 を参照してください。
- 設定ファイルを編集して、HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。
設定ファイルを編集したあとで、ホストを再起動して設定を有効にします。「3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定」の手順 18 から手順 34 を参照してください。

これらの手順を実行すると、SCSI デバイスを使用したブートディスク環境へ HDLM を新規インストールできます。

(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール

SCSI デバイスを使用したブートディスク環境へ HDLM をアップグレードインストールするための手順について、概要を説明します。詳細については、「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」を参照してください。

- 設定ファイルを編集して、SCSI デバイスが設定された状態で OS を起動する定義に変更します。
変更前は、HDLM が設定された状態で OS を起動する定義になっています。「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 1 から手順 16 を参照してください。

2. HDLM をアップグレードインストールします。
「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 17 を参照してください。
3. HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。
設定ファイルをアップグレードインストールを実施する前の状態に戻します。「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 18 から手順 32 を参照してください。

これらの手順を実行すると、SCSI デバイスを使用したブートディスク環境へ HDLM をアップグレードインストールできます。

(3) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定

SCSI デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使ったシングルパス構成のブートディスクの環境を、HDLM デバイス上の論理ボリュームを使ったマルチパス構成のブートディスク環境に移行する手順について、概要を説明します。詳細については、「3.7.5 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定」を参照してください。

1. LABEL の使用の有無を確認して、使用している場合は解除します。
HDLM の環境では、LABEL に設定した値から SCSI デバイスを特定できないため、HDLM を使用する場合は、設定を解除する必要があります。「3.7.5 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定」の手順 1 から手順 9 を参照してください。
2. HDLM をインストールします。
「3.7.5 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定」の手順 10 を参照してください。
3. 設定ファイルを編集して、HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。
設定ファイルを編集したあとで、ホストを再起動して設定を有効にします。「3.7.5 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定」の手順 11 から手順 27 を参照してください。

これらの手順を実行すると、HDLM デバイス上の論理ボリュームを使ったマルチパス構成のブートディスク環境に移行できます。

(4) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール

HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使ったマルチパス構成のブートディスクの環境で HDLM をアップグレードインストールするための手順について、概要を説明します。詳細については、「3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」を参照してください。

1. 設定ファイルを編集して、SCSI デバイスが設定された状態で OS を起動する定義に変更します。
変更前は、HDLM が設定された状態で OS を起動する定義になっています。「3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 1 から手順 20 を参照してください。
2. HDLM をアップグレードインストールします。
「3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 21 を参照してください。
3. HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。

設定ファイルをアップグレードインストールを実施する前の状態に戻します。「3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 22 から手順 38 を参照してください。

これらの手順を実行すると、HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使ったマルチパス構成のブートディスクの環境で HDLM をアップグレードインストールできます。

3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定

SCSI デバイスを使ったシングルパス構成のブートディスクの環境に、HDLM を新規インストールして環境を設定する方法について説明します。

設定を誤ると、OS が起動できなくなることがあるので、注意してください。HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処については、「3.7.7 HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処」を参照してください。

この手順で使用するブートローダの設定ファイル名は、ブートローダまたは OS によって異なります。ブートローダの設定ファイル名を次の表に示します。

表 3-68 ブートローダの設定ファイル名

ブートローダ		設定ファイル名
GRUB	Red Hat Enterprise Linux の場合	/etc/grub.conf
	SUSE LINUX Enterprise Server の場合	/boot/grub/menu.lst
LILO		/etc/lilo.conf
ELILO		/etc/elilo.conf

- Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
- SUSE LINUX Enterprise Server 10 に SP3 以降を適用している場合は、ブートローダの設定ファイルに「multipath=off」を設定します。

ブートローダの設定ファイルのカーネルパラメタに「multipath=off」が設定されていない場合は、「multipath=off」を設定してください。「multipath=off」の設定例を次に示します。

- ブートローダとして ELILO を使用している場合

```

:
:
image = vmlinuz-2.6.16.60-0.54.5-default
label = 51
append = "splash=silent multipath=off"
description = Linux
initrd = initrd-2.6.16.60-0.54.5-default
root = /dev/disk/by-id/scsi-35001862001472c70-part12

```

下線部に、「multipath=off」が設定されています。

- Xen 対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合

Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

```

:
:
title XEN
root (hd0,0)
kernel /xen-pae.gz
module /vmlinuz-2.6.16.60-0.54.5-xenpae ¥
root=/dev/disk/by-id/scsi-SFUJITSU_MAS3735NC_A050P360007N-part6
vga=0x317 ¥

```

```

resume=/dev/disk/by-id/scsi-SFUJITSU_MAS3735NC_A050P3600077-
part2 ¥
splash=silent showopts multipath=off
module /initrd-2.6.16.60-0.54.5-xenpae

```

下線部に、「multipath=off」が設定されています。

- Xen 非対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合
HDLM でサポートしているカーネルは、「3.1.1 HDLM がサポートするホストと OS」を参照してください。

```

:
:
title SUSE LINUX Enterprise Server 10 SP3
root (hd0,0)
kernel /vmlinuz-2.6.16.60-0.54.5-smp root=/dev/VG/root
vga=0x31a ¥
resume=/dev/VG/swap splash=silent showopts multipath=off
initrd /initrd-2.6.16.60-0.54.5-smp

```

下線部に、「multipath=off」が設定されています。

3. /etc/fstab ファイルの定義を確認します。

/etc/fstab ファイルに LABEL が使用されているかどうかを確認してください。
「LABEL=xxxxx」と記載されている場合は、LABEL が使用されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合は、次の下線部のように UUID= から始まるブ
ロックデバイス名 (udev 名) が指定されていることも確認してください。

```

UUID=55574d05-07dc-4c94-a585-5599c284d79b / ext4 defaults
1 1
UUID=33ef8ca1-595a-4fbf-8567-76f70760d743 /boot ext4 defaults
1 2
:
:

```

SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、次の下線部のように /dev/disk ディ
レクトリから始まるデバイス名 (udev 名) が指定されていることも確認してください。

```

/dev/disk/by-id/scsi-1HITACHI_D60H03750019-part2 swap swap
defaults 0 0
/dev/disk/by-id/scsi-1HITACHI_D60H03750019-part3 / ext3
acl,user_xattr 1 1
:
:

```

4. ブートローダの設定ファイルの定義を確認します。

ブートローダの設定ファイルの定義に LABEL が使用されているかどうかを確認してください。
LABEL の使用例を、次に示します。

- Xen 非対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合
HDLM でサポートしているカーネルは、「3.1.1 HDLM がサポートするホストと OS」を参
照してください。

```

:
:
title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
root (hd0,0)
kernel /vmlinuz-2.6.18-194.el5 ro root=LABEL=
initrd /initrd-2.6.18-194.el5

```

下線部に、LABEL が設定されています。

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

```

:
:
image=/boot/vmlinuz-2.6.18-194.el5
label=linux
initrd=/boot/initrd-2.6.18-194.el5
read-only
append="root=LABEL="

```

下線部に、**LABEL** が設定されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合は、次の下線部のように **UUID=** から始まるブロックデバイス名 (**udev** 名) が指定されていることも確認してください。

```

:
:
title Red Hat Enterprise Linux (2.6.32-71.el6.i686)
root (hd0,0)
kernel /vmlinuz-2.6.32-71.el6.i686 ro
root=UUID=55574d05-07dc-4c94-a585-5599c284d79b rd_NO_LUKS rd_NO_LVM
rd_NO_MD rd_NO_DM LANG=ja_JP.UTF-8 KEYBOARDTYPE=pc KEYTABLE=jp106
crashkernel=auto rhgb quiet
initrd /initramfs-2.6.32-71.el6.i686.img

```

SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、次の下線部のように **/dev/disk** ディレクトリから始まるデバイス名 (**udev** 名) が指定されていることも確認してください。**Xen** 対応のカーネルで、ブートローダとして **GRUB** を使用している場合の例を次に示します。**Xen** 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする **Xen** ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

```

:
:
title XEN
root (hd0,1)
kernel /boot/xen.gz
module /boot/vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen root=/dev/disk/by-id/
scsi-1HITACHI_D60H03750027-part2 vga=0x31a resume=/dev/sda1
splash=silent showopts
module /boot/initrd-2.6.16.60-0.21-xen

```

手順 3 および手順 4 で **LABEL** またはデバイス名 (**udev** 名) が使用されていなかった場合は、手順 17 に進んで **HDLM** を新規インストールしてください。

また、デバイス名 (**udev** 名) が指定されていた場合、以降の手順では「**LABEL**」を「デバイス名 (**udev** 名)」に読み替えて実行してください。

5. **mount** コマンドを実行して、マウントされているファイルシステムを確認します。

手順 3 および手順 4 で確認した **LABEL** と、**SCSI** デバイスの対応関係を確認します。この情報は、**LABEL** の設定を解除するときに必要なになります。

```

# mount
/dev/sda2 on / type ext2 (rw)
:
:
/dev/sda1 on /boot type ext2 (rw)
/dev/sda4 on /tmp type ext2 (rw)
/dev/sda5 on /var type ext2 (rw)
/dev/sda6 on /usr type ext2 (rw)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)

```

下線部を確認してください。

6. Red Hat Enterprise Linux, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、**/proc/swaps** ファイルを参照して **SCSI** デバイス名を確認します。**SCSI** デバイス名は、**Filename** 列の部分に表示されています。

7. 手順 3 および手順 4 で、ブロックデバイス名または **udev** 名が指定されていた場合は、次のコマンドを実行して、**SCSI** デバイスを確認します。

- **Red Hat Enterprise Linux 6** の場合

udevadm コマンドを実行します。-n にはブロックデバイス名を指定してください。

```
# udevadm info --query name -n /dev/disk/by-uuid/55574d05-07dc-4c94-a585-5599c284d79b
sda2
```

出力された **sda2** が、55574d05-07dc-4c94-a585-5599c284d79b と対応する **SCSI** デバイス名です。

- **SUSE LINUX Enterprise Server** の場合

udevinfo コマンドを実行します。-n には /dev/disk ディレクトリ以下のデバイス名 (**udev** 名) を指定してください。

```
# udevinfo -q name -n /dev/disk/by-id/scsi-2000c50fffecb6ae0-part2
sda2
```

出力された **sda2** が、/dev/disk/by-id/scsi-2000c50fffecb6ae0-part2 と対応する **SCSI** デバイス名です。

8. /etc/fstab ファイルをバックアップします。

9. /etc/fstab ファイルを編集して、**LABEL** の設定を解除します。

手順 3 で確認した **LABEL** が使用されている行を、先頭に # を付けてすべてコメントアウトし、手順 5 で確認した **LABEL** と **SCSI** デバイスの対応関係を参考にして、次のように **SCSI** デバイスで指定する行を追加してください。

```

:
:
#LABEL=/          /          ext2          defaults      1 1
/dev/sda2         /          ext2          defaults      1 1
#LABEL=/boot     /boot     ext2          defaults      1 2
/dev/sda1         /boot     ext2          defaults      1 2
:
:
```

/etc/fstab ファイルに「#LABEL=SWAP-sda3」という記述がある場合も、上記と同じように、手順 6 で確認した **SCSI** デバイスで指定する行を追加してください。

10. ブートローダの設定ファイルをバックアップします。

11. ブートローダの設定ファイルに記載されている、**LABEL** 指定の起動用の設定をコピーします。設定の内容例を、次に示します。なお、内容例の「オプション」は、ユーザ環境に応じた任意指定のオプションを表します。

- **Xen** 対応のカーネルで、ブートローダとして **GRUB** を使用している場合

Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする **Xen** ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

```

:
:
title XEN
    root (hd0,1)
    kernel /boot/xen.gz
    module /boot/vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen root=/dev/disk/by-id/
scsi-1HITACHI_D60H03750027-part2 vga=0x31a resume=/dev/sda1
splash=silent showopts
    module /boot/initrd-2.6.16.60-0.21-xen
```

- Xen 非対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合
HDLM でサポートしているカーネルは、「3.1.1 HDLM がサポートするホストと OS」を参照してください。

```

:
:
title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
  root (hd0,0)
  kernel /vmlinuz-2.6.18-194.el5 ro オプション root=LABEL=/ オプシ
ン
  initrd /initrd-2.6.18-194.el5

```

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

```

:
:
image=/boot/vmlinuz-2.6.18-194.el5
  label=linux
  initrd=/boot/initrd-2.6.18-194.el5
  read-only
  append="オプション root=LABEL=/ オプション"

```

12. ブートローダの設定ファイルに記載されている設定の名前を変更します。

手順 11 でコピーした設定の名前を変更してください。SCSI デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。

- ブートローダとして GRUB を使用している場合

次の下線部を変更します。

変更前

```
title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
```

変更後

```
title sd-Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
```

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

次の下線部を変更します。

変更前

```
label=linux
```

変更後

```
label=linux-sd
```

13. 手順 5 で確認した LABEL と SCSI デバイスの対応関係を基に、ブートローダの設定ファイルに記載されている root の指定を、LABEL から SCSI デバイスに変更します。

手順 11 でコピーした設定の root の指定を変更してください。

ユーザ環境に応じた任意指定のオプションが設定されている場合は、オプションを削除しないように注意してください。

- ブートローダとして GRUB を使用している場合

kernel の行にある root の指定を、「root=SCSI デバイス」に変更してください。

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

root の指定を、「root=SCSI デバイス」に変更してください。なお、append の行に、ユーザ環境に応じた任意指定のオプションが設定されていない場合は、append の行を削除するかコメントアウトしてください。

14. ブートローダの設定ファイルを編集して、起動時に使用する設定を指定します。

- ブートローダとして GRUB を使用している場合

手順 11 でコピーした設定で起動できるように、default の数字を変更します。

```
default= 2
```

- ブートローダとして **LILO** または **ELILO** を使用している場合
default に label を記述します。

```
default linux-sd
```

15. ブートローダとして **LILO** を使用している場合は、`/sbin/lilo` コマンドを実行して、変更を有効にします。
16. ホストを再起動して、**SCSI** デバイスから起動できることを確認します。
17. **HDLM** をインストールします。

「[3.6.3 HDLM の新規インストール](#)」を参照して手順 2, 手順 4 から手順 13, および手順 14 (ホストを再起動する場合だけ実行) を実行し、**HDLM** デバイスを作成してください。インストール後にホストを再起動する場合と再起動しない場合とで、手順が異なりますので注意してください。

18. **HDLM** 構成定義ユーティリティ (`dlnmcfmgmr`) に `-v` パラメタを指定して実行して、**SCSI** デバイスと **HDLM** デバイスの対応関係を確認します。

```
# dlnmcfmgmr -v
HDevName      Management Device      Host      Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured /dev/sda   0          0         0       0
KAPL10302-I /sbin/dlnmcfmgmr completed normally.
```

HDevName 列は **HDLM** デバイス, Device 列は **SCSI** デバイスを表します。

19. **HDLM** 用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

ホストの **OS** に応じて、次の手順を実行してください。

パラメタに指定する初期 RAM ディスクイメージファイル名は、現在使用しているものと異なる名前を指定してください。

- **Red Hat Enterprise Linux 6** の場合

- a. `/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf` に定義されている「`hdlm_dracut=n`」の記述を、「`hdlm_dracut=y`」に変更します。

- b. `dracut` コマンドを実行します。
コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dracut /boot/initramfs-hdlm-2.6.32-71.el6.i686.img
`uname -r`
```

- 上記以外の **OS** の場合

ブートディスクサポートユーティリティ (`dlmmkinitrd`) を実行します。

`dlmmkinitrd` ユティリティについては、「[7.5 dlmmkinitrd ブートディスクサポートユーティリティ](#)」を参照してください。

20. `/etc/fstab` ファイルをバックアップします。

21. `/etc/fstab` ファイルを編集します。

次に示す **HDLM** 管理対象デバイスのマウントポイントを、**SCSI** デバイスから **HDLM** デバイスに書き換えます。

- ブートローダとして **ELILO** を使用している場合
ルートディレクトリ「/」, `/boot/efi`, `/tmp`, `/usr`, `/var`, `swap`
- ブートローダとして **GRUB** を使用している場合
ルートディレクトリ「/」, `/boot`, `/tmp`, `/usr`, `/var`, `swap`
- ブートローダとして **LILO** を使用している場合

ルートディレクトリ「/」、/tmp、/usr、/var、swap

既存の SCSI デバイス指定は先頭に#を付けてコメントアウトして、手順 18 で確認した SCSI デバイスと HDLM デバイスの対応関係を基に、次のように HDLM デバイス指定を追加します。

```

:
:
#LABEL=/          /          ext2    defaults    1 1
#/dev/sda2        /          ext2    defaults    1 1
/dev/sddlmaa2     /          ext2    defaults    1 1
:
:
#LABEL=/tmp       /tmp     ext2    defaults    1 2
#/dev/sda4        /tmp     ext2    defaults    1 2
/dev/sddlmaa4     /tmp     ext2    defaults    1 2
:
:

```

22. ブートローダの設定ファイルをバックアップします。
23. 手順 14 で SCSI デバイスからの起動に使用していた、ブートローダの設定ファイルに記載されている設定をコピーします。
24. ブートローダの設定ファイルに記載されている設定の名前を変更します。
手順 23 でコピーした設定の名前を変更してください。HDLM デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。

- ブートローダとして GRUB を使用している場合

次の下線部を変更します。

変更前

```
title sd-Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
```

変更後

```
title HDLM-Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
```

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

次の下線部を変更します。

変更前

```
label=linux-sd
```

変更後

```
label=linux-HDLM
```

25. ブートローダの設定ファイルに記載されている root の指定を編集します。
ホストの OS に応じて、次の手順を実行してください。

- Red Hat Enterprise Linux 6 の場合

次の手順を実行して、root にルートデバイスの UUID を指定します。

- a. mount コマンドを実行して、ルートパーティション「/」にマウントされたデバイス名を確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# mount
/dev/sda2 on / type ext4 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
:
:
```

下線部のデバイス名を確認してください。

- b. blkid コマンドを指定して、先の手順で確認したデバイスの UUID を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。

```
# blkid /dev/sda2
/dev/sda2: UUID="19597725-5d20-4d1d-9906-f9f891b7711a"
TYPE="ext4"
#
```

- c. 手順 23 でコピーした設定の `root` の指定を、先の手順で確認した `UUID` に変更します。

```
root=UUID=19597725-5d20-4d1d-9906-f9f891b7711a
```

- 上記以外の OS の場合

手順 23 でコピーした設定の `root` の指定を削除してください。Xen 対応のカーネルを使用している場合は、`module` で指定された `root` デバイスの記述を削除してください。Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

26. 手順 19 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルをブートローダの設定ファイルに記載されている `initrd` に指定します。

手順 23 でコピーした設定の `initrd` の指定を変更してください。Xen 対応のカーネルを使用している場合は、`module` で指定された `initrd` ファイル名を手順 19 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルに変更してください。Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

`initrd` はブートローダによって指定の方法が異なるので注意してください。

また、ユーザ環境に応じた任意指定のオプションが設定されている場合、オプションを削除しないように注意してください。

27. SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、ブートローダの設定ファイルに記載されている `resume` の設定を削除します。

手順 23 でコピーした設定に記載されている、`resume` の設定を削除してください。カーネルパラメタに `resume` が設定されている場合、HDLM では `resume` をサポートしていないため、`resume` の設定を削除してください。

28. ブートローダの設定ファイルを編集して、起動時に使用する設定を指定します。

- ブートローダとして GRUB を使用している場合

手順 23 でコピーした設定で起動できるように、`default` の数字を変更します。

```
default= 3
```

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

`default` に `label` を記述します。

```
default linux-HDLM
```

29. ブートローダとして LILO を使用している場合は、`/sbin/lilo` コマンドを実行して、変更を有効にします。

30. ホストを停止します。

次に示すコマンドを実行して、ホストを停止します。

```
# shutdown -h now
```

31. シングルパス構成からマルチパス構成に変更します。

32. ホストを起動します。

33. `mount` コマンドを実行して、HDLM デバイスがマウントされていることを確認します。

ブートローダとして GRUB を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# mount
/dev/sddlmaa2_on / type ext2 (rw)
:
:
```

```

/dev/sddlmaa1 on /boot type ext2 (rw)
/dev/sddlmaa4 on /tmp type ext2 (rw)
/dev/sddlmaa5 on /var type ext2 (rw)
/dev/sddlmaa6 on /usr type ext2 (rw)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)

```

下線部を確認してください。

34. Red Hat Enterprise Linux, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は, swap パーティションに HDLM デバイスが割り当てられていることを確認します。
- /proc/swaps ファイルを参照して, Filename 列の部分に HDLM デバイス名が表示されていることを確認してください。

3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール

HDLM デバイスを使ったマルチパス構成のブートディスクの環境に, HDLM をアップグレードインストールして環境を設定する方法について説明します。

設定を誤ると, OS が起動できなくなることがあるので, 注意してください。HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処については, 「3.7.7 HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処」を参照してください。

この手順で使用するブートローダの設定ファイル名は, ブートローダまたは OS によって異なります。ブートローダの設定ファイル名を次の表に示します。

表 3-69 ブートローダの設定ファイル名

ブートローダ		設定ファイル名
GRUB	Red Hat Enterprise Linux の場合	/etc/grub.conf
	SUSE LINUX Enterprise Server の場合	/boot/grub/menu.lst
LILO		/etc/lilo.conf
ELILO		/etc/elilo.conf

- Linux に, root 権限を持つユーザでログインします。
- /etc/fstab ファイルの定義に HDLM デバイスが指定されていることを確認します。
次に示す HDLM 管理対象デバイスのマウントポイントが, HDLM デバイスをマウントする定義になっていることを確認します。

- ブートローダとして ELILO を使用している場合
ルートディレクトリ 「/」, /boot/efi, /tmp, /usr, /var, swap
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合
ルートディレクトリ 「/」, /boot, /tmp, /usr, /var, swap
 - ブートローダとして LILO を使用している場合
ルートディレクトリ 「/」, /tmp, /usr, /var, swap
- /etc/fstab ファイルの例を次に示します。

```

:
:
/dev/sddlmaa2 / ext2 defaults 1 1
:
:
/dev/sddlmaa4 /tmp ext2 defaults 1 2
:
:

```

3. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に `-v` パラメータを指定して実行して、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management Device      Host      Channel Target Lun
/dev/sddlmaa configured /dev/sda  0         0         0         0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスを表します。

4. `/etc/fstab` ファイルを編集します。

手順 2 で確認した HDLM 管理対象デバイスのマウントポイントを、HDLM デバイスから SCSI デバイスに書き換えます。既存の HDLM デバイス指定は先頭に # を付けてコメントアウトして、手順 3 で確認した HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、次のように SCSI デバイス指定を追加します。

```
          :
          :
# /dev/sddlmaa2 / ext2 defaults 1 1
/dev/sda2 / ext2 defaults 1 1
          :
          :
# /dev/sddlmaa4 /tmp ext2 defaults 1 2
/dev/sda4 /tmp ext2 defaults 1 2
          :
          :
```

5. HDLM デバイスからの起動に使用していた、ブートローダの設定ファイルに記載されている設定をコピーします。

設定の内容例を、次に示します。なお、内容例の「オプション」は、ユーザ環境に応じた任意指定のオプションを表します。

- Xen 対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合

Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

```
          :
          :
title XEN
  root (hd0,1)
  kernel /boot/xen.gz
  module /boot/vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent
showopts
  module /boot/initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hdlm
```

- Xen 非対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合

HDLM でサポートしているカーネルは、「3.1.1 HDLM がサポートするホストと OS」を参照してください。

```
          :
          :
title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
  root (hd0,0)
  kernel /vmlinuz-2.6.18-194.el5 ro オプション ramdisk_size=18958 オプション
  initrd /initrd-hdlm-2.6.18-194.el5.gz
```

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

```
          :
          :
image=/boot/vmlinuz-2.6.18-194.el5
```

```

label=HDLM_194.EL
initrd=/boot/initrd-hdlm-2.6.18-194.el5.gz
read-only
append="オプション ramdisk_size=18958 オプション"

```

6. ブートローダの設定ファイルに記載されている設定の名前を変更します。
手順5でコピーした設定の名前を変更してください。SCSI デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合
次の下線部を変更します。
変更前

```

title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)

```

 変更後

```

title sd-Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)

```
 - ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合
次の下線部を変更します。
変更前

```

label= HDLM_194.EL

```

 変更後

```

label= sd-HDLM_194.EL

```
7. 手順3で確認した SCSI デバイスをブートローダの設定ファイルの root に指定します。
手順5でコピーした設定の root の指定を変更してください。
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合
kernel の行に「root=SCSI デバイス」を追加してください。


```

:
:
title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
root (hd0,0)
kernel /vmlinuz-2.6.18-194.el5 ro オプション ramdisk_size=18958
root=/dev/sda2 オプション

```
 - ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合
設定の最後の行に「root=SCSI デバイス」を追加してください。
8. Red Hat Enterprise Linux 6 の場合は、/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf に定義されている「hdlm_dracut」の記述を確認します。
「hdlm_dracut=y」の記述があるときは、「hdlm_dracut=n」に変更します。
「hdlm_dracut=y」の記述がないときは、手順9に進んでください。
9. SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルをブートローダの設定ファイルの initrd に指定します。
手順5でコピーした設定の initrd の指定を変更してください。Xen 対応のカーネルを使用している場合は、module で指定された initrd ファイル名を SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルに変更してください。Xen 対応のカーネルは、「[表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境](#)」を参照してください。
また、ユーザ環境に応じた任意指定のオプションが設定されている場合、オプションを削除しないように注意してください。
SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルは、OS の mkinitrd コマンドまたは dracut コマンドのマニュアルを参考に作成してください。
10. ブートローダの設定ファイルを編集して、起動時に使用する設定を指定します。
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合

手順 5 でコピーした設定で起動できるように、default の数字を変更します。

```
default= 2
```

- ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合

default に label を記述します。

```
default sd-HDLM_194.EL
```

- ブートローダとして LILO を使用している場合は、/sbin/lilo コマンドを実行して、変更を有効にします。

- ホストを停止します。

次に示すコマンドを実行して、ホストを停止します。

```
# shutdown -h now
```

- マルチパス構成をシングルパス構成に変更します。

- ホストを起動します。

- mount コマンドを実行して、SCSI デバイスがマウントされていることを確認します。

ブートローダとして GRUB を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# mount
/dev/sda2 on / type ext2 (rw)
:
:
/dev/sda1 on /boot type ext2 (rw)
/dev/sda4 on /tmp type ext2 (rw)
/dev/sda5 on /var type ext2 (rw)
/dev/sda6 on /usr type ext2 (rw)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)
```

下線部を確認してください。

- Red Hat Enterprise Linux, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、swap パーティションに SCSI デバイスが割り当てられていることを確認します。

/proc/swaps ファイルを参照して、Filename 列の部分に指定した SCSI デバイス名が表示されていることを確認してください。

- HDLM をアップグレードインストールします。

「3.6.6 HDLM のアップグレードインストール」を参照して手順 2, および手順 4 から手順 13, および手順 14 (ホストを再起動する場合だけ実行) を実行し、HDLM デバイスを作成してください。インストール後にホストを再起動する場合と再起動しない場合とで、手順が異なりますので注意してください。

- dlnmcmdmgr ユティリティに-v パラメタを指定して実行して、SCSI デバイスと HDLM デバイスの対応関係を確認します。

```
# dlnmcmdmgr -v
HDevName      Management Device      Host      Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured /dev/sda  0         0         0     0
KAPL10302-I /sbin/dlnmcmdmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス, Device 列は SCSI デバイスを表します。

- HDLM 用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

ホストの OS に応じて、次の手順を実行してください。

- Red Hat Enterprise Linux 6 の場合

- /etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf に定義されている「hdlm_dracut=n」の記述を、「hdlm_dracut=y」に変更します。

- b. dracut コマンドを実行します。

作成する初期 RAM ディスクイメージファイルがすでにある場合、初期 RAM ディスクイメージファイルを上書きするために、`-f` パラメタを指定してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dracut /boot/initramfs-hdlm-2.6.32-71.el6.i686.img
`uname -r`
```

- o. 上記以外の OS の場合
ブートディスクサポートユティリティ (`dlmmkinitrd`) を実行します。
作成する初期 RAM ディスクイメージファイルがすでにある場合、Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用しているときは、初期 RAM ディスクイメージファイルを上書きするために、`-f` パラメタを指定してください。SUSE LINUX Enterprise Server を使用しているときは、パラメタを指定しなくても、初期 RAM ディスクイメージファイルが上書きされます。
`dlmmkinitrd` ユティリティについては、「7.5 `dlmmkinitrd` ブートディスクサポートユティリティ」を参照してください。
- 20. 初期 RAM ディスクイメージファイルを作成したときにファイルを上書きしていない場合は、不要になった既存の初期 RAM ディスクイメージファイルを削除します。
- 21. HDLM デバイスからの起動に使用していた、ブートローダの設定ファイルに記載されている設定をコピーします。
- 22. ブートローダの設定ファイルに記載されている設定の名前を変更します。
手順 21 でコピーした設定の名前を変更してください。更新後の HDLM デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。
 - o. ブートローダとして GRUB を使用している場合
次の下線部を変更します。
変更前

```
title sd-Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
```


変更後

```
title HDLM-Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
```
 - o. ブートローダとして LILO または ELILO を使用している場合
次の下線部を変更します。
変更前

```
label=sd-HDLM_194.EL
```


変更後

```
label=HDLM-HDLM_194.EL
```
- 23. ブートローダの設定ファイルに記載されている `root` の指定を編集します。
ホストの OS に応じて、次の手順を実行してください。
 - o. Red Hat Enterprise Linux 6 の場合
次の手順を実行して、`root` にルートデバイスの UUID を指定します。
 - a. `mount` コマンドを実行して、ルートパーティション「/」にマウントされたデバイス名を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。

```
# mount
/dev/sda2 on / type ext4 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
:
```

:

下線部のデバイス名を確認してください。

- b. blkid コマンドを指定して、先の手順で確認したデバイスの **UUID** を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。

```
# blkid /dev/sda2
/dev/sda2: UUID="19597725-5d20-4d1d-9906-f9f891b7711a"
TYPE="ext4"
#
```

- c. 手順 21 でコピーした設定の **root** の指定を、先の手順で確認した **UUID** に変更します。

```
root=UUID=19597725-5d20-4d1d-9906-f9f891b7711a
```

- 上記以外の OS の場合

手順 21 でコピーした設定の **root** の指定を削除してください。Xen 対応のカーネルを使用している場合は、**module** で指定された **root** デバイスの記述を削除してください。Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

24. 手順 19 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルをブートローダの設定ファイルに記載されている **initrd** に指定します。

手順 21 でコピーした設定の **initrd** の指定を変更してください。Xen 対応のカーネルを使用している場合は、**module** で指定された **initrd** ファイル名を手順 19 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルに変更してください。Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

initrd はブートローダによって指定の方法が異なるので注意してください。

また、ユーザ環境に応じた任意指定のオプションが設定されている場合、オプションを削除しないように注意してください。

25. ブートローダの設定ファイルを編集して、起動時に使用する設定を指定します。

- ブートローダとして **GRUB** を使用している場合

手順 21 でコピーした設定で起動できるように、**default** の数字を変更します。

```
default= 3
```

- ブートローダとして **LILLO** または **ELILO** を使用している場合

default に **label** を記述します。

```
default HDLM-HDLM_194.EL
```

26. ブートローダとして **LILLO** を使用している場合は、**/sbin/lilo** コマンドを実行して、変更を有効にします。

27. **/etc/fstab** ファイルを編集します。

次に示す **HDLM** 管理対象デバイスのマウントポイントを、**SCSI** デバイスから **HDLM** デバイスに書き換えます。

- ブートローダとして **ELILO** を使用している場合

ルートディレクトリ 「/」、**/boot/efi**、**/tmp**、**/usr**、**/var**、**swap**

- ブートローダとして **GRUB** を使用している場合

ルートディレクトリ 「/」、**/boot**、**/tmp**、**/usr**、**/var**、**swap**

- ブートローダとして **LILLO** を使用している場合

ルートディレクトリ 「/」、**/tmp**、**/usr**、**/var**、**swap**

既存の SCSI デバイス指定は先頭に#を付けてコメントアウトして、手順 18 で確認した SCSI デバイスと HDLM デバイスの対応関係を基に、次のように HDLM デバイス指定を追加します。

```

:
:
#/dev/sddlmaa2 / ext2 defaults 1 1
#/dev/sda2 / ext2 defaults 1 1
/dev/sddlmaa2 / ext2 defaults 1 1
:
:
#/dev/sddlmaa4 /tmp ext2 defaults 1 2
#/dev/sda4 /tmp ext2 defaults 1 2
/dev/sddlmaa4 /tmp ext2 defaults 1 2
:
:
```

28. ホストを停止します。

次に示すコマンドを実行してホストを停止します。

```
# shutdown -h now
```

29. シングルパス構成からマルチパス構成に変更します。

30. ホストを起動します。

31. mount コマンドを実行して、HDLM デバイスがマウントされていることを確認します。

ブートローダとして GRUB を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# mount
/dev/sddlmaa2 on / type ext2 (rw)
:
:
/dev/sddlmaa1 on /boot type ext2 (rw)
/dev/sddlmaa4 on /tmp type ext2 (rw)
/dev/sddlmaa5 on /var type ext2 (rw)
/dev/sddlmaa6 on /usr type ext2 (rw)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)
```

下線部を確認してください。

32. Red Hat Enterprise Linux, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、swap パーティションに HDLM デバイスが割り当てられていることを確認します。

/proc/swaps ファイルを参照して、Filename 列の部分に HDLM デバイス名が表示されていることを確認してください。

3.7.5 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用するための設定

SCSI デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使ったシングルパス構成のブートディスクの環境を、HDLM デバイス上の論理ボリュームを使ったマルチパス構成のブートディスク環境に移行する方法について説明します。設定を誤ると、OS が起動できなくなることがあるので、注意してください。

この項では、ブートローダは Red Hat Enterprise Linux, または SUSE LINUX Enterprise Server でデフォルトとして使われる、GRUB または ELILO を用いた場合の設定を示します。

1. Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
2. SUSE LINUX Enterprise Server 10 に SP3 以降を適用している場合は、ブートローダの設定ファイルに「multipath=off」を設定します。

ブートローダの設定ファイルのカーネルパラメタに「multipath=off」が設定されていない場合は、「multipath=off」を設定してください。「multipath=off」の設定例を次に示します。

- ブートローダとして ELILO を使用している場合

```

:
:
image = vmlinuz-2.6.16.60-0.54.5-default
label = 51
append = "splash=silent multipath=off "
description = Linux
initrd = initrd-2.6.16.60-0.54.5-default
root = /dev/disk/by-id/scsi-35001862001472c70-part12

```

下線部に、「multipath=off」が設定されています。

- Xen 対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合

Xen 対応のカーネルは、「表 3-61 HDLM がサポートする Xen ハイパーバイザの動作環境」を参照してください。

```

:
:
title XEN
root (hd0,0)
kernel /xen-pae.gz
module /vmlinuz-2.6.16.60-0.54.5-xenpae ¥
root=/dev/disk/by-id/scsi-SFUJITSU_MAS3735NC_A050P360007N-part6
vga=0x317 ¥
resume=/dev/disk/by-id/scsi-SFUJITSU_MAS3735NC_A050P3600077-
part2 ¥
splash=silent showopts multipath=off
module /initrd-2.6.16.60-0.54.5-xenpae

```

下線部に、「multipath=off」が設定されています。

- Xen 非対応のカーネルで、ブートローダとして GRUB を使用している場合

HDLM でサポートしているカーネルは、「3.1.1 HDLM がサポートするホストと OS」を参照してください。

```

:
:
title SUSE LINUX Enterprise Server 10 SP3
root (hd0,0)
kernel /vmlinuz-2.6.16.60-0.54.5-smp root=/dev/VG/root
vga=0x31a ¥
resume=/dev/VG/swap splash=silent showopts multipath=off
initrd /initrd-2.6.16.60-0.54.5-smp

```

下線部に、「multipath=off」が設定されています。

3. /etc/fstab ファイルの定義を確認します。

/etc/fstab ファイルの内容例を次に示します。

図 3-10 LVM2 を使用している場合の/etc/fstab ファイルの内容例

```

/dev/VolGroup00/LogVol100 / ext3 defaults 1 1
LABEL=/boot /boot ext3 defaults 1 2
none /dev/pts devpts gid=5,mode=620 0 0
none /dev/shm tmpfs defaults 0 0
none /proc proc defaults 0 0
none /sys sysfs defaults 0 0
/dev/VolGroup00/LogVol102 /tmp ext3 defaults 1 2
/dev/VolGroup00/LogVol103 /var ext3 defaults 1 2
/dev/VolGroup00/LogVol101 swap swap defaults 0 0

```

網掛けの部分に、**LABEL** が設定されています。

この例は **GRUB** を使用した場合です。ELILO を使用した IPF の場合は、`/boot` が記述されている行のマウントポイント `/boot` は `/boot/efi` に、ファイルシステムタイプ `ext3` は `vfat` と表示されます。

Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合は、次の下線部のように `UUID=` から始まるブロックデバイス名 (`udev` 名) が指定されていることも確認してください。

```
UUID=33ef8ca1-595a-4fbf-8567-76f70760d743 /boot ext4 defaults  
1 2
```

SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、次の下線部のように `/dev/disk` ディレクトリから始まるデバイス名 (`udev` 名) が指定されていることも確認してください。

```
/dev/disk/by-id/scsi-1HITACHI_D60H03750019-part1 /boot reiserfs  
defaults 1 2
```

`/etc/fstab` ファイルで **LABEL** またはデバイス名 (`udev` 名) が使用されていなかった場合は、手順 10 に進んで **HDLM** をインストールしてください。`/etc/fstab` ファイルで **LABEL** またはデバイス名 (`udev` 名) が使用されていた場合は、手順 4 から手順 8 を実行して、マウントされているファイルシステムを確認してから **LABEL** の設定を解除してください。

また、デバイス名 (`udev` 名) が使用されていた場合、以降の手順では「**LABEL**」を「デバイス名 (`udev` 名)」に読み替えて実行してください。

4. `mount` コマンドを実行してマウントされているファイルシステムを確認します。
手順 3 で確認した **LABEL** と **SCSI** デバイスの対応関係を確認します。この情報は、**LABEL** の設定を解除するときに必要なになります。
`mount` コマンドの実行例を次に示します。

図 3-11 mount コマンドの実行例

```
# mount  
/dev/mapper/VolGroup00-LogVol00 on / type ext3 (rw)  
none on /proc type proc (rw)  
none on /sys type sysfs (rw)  
none on /dev/pts type devpts (rw,gid=5,mode=620)  
usbfs on /proc/bus/usb type usbfs (rw)  
/dev/sda1 on /boot type ext3 (rw)  
none on /dev/shm type tmpfs (rw)  
/dev/mapper/VolGroup00-LogVol02 on /tmp type ext3 (rw)  
/dev/mapper/VolGroup00-LogVol03 on /var type ext3 (rw)  
none on /proc/sys/fs/binfmt_misc type binfmt_misc (rw)  
sunrpc on /var/lib/nfs/rpc_pipefs type rpc_pipefs (rw)
```

網掛けの部分は、**LABEL** が設定されている **SCSI** デバイスです。

この例は **GRUB** を使用した場合です。ELILO を使用した IPF の場合は、`/boot` が記述されている行のマウントポイント `/boot` は `/boot/efi` に、ファイルシステムタイプ `ext3` は `vfat` と表示されます。

マウントされているファイルシステムの情報を参考に、手順 6 から手順 8 で、`/etc/fstab` ファイルの **LABEL** の設定を解除します。

また、手順 3 でデバイス名 (`udev` 名) が使用されていた場合は、手順 5 を参照して **SCSI** デバイス名を確認してください。

5. 手順 3 でブロックデバイス名または `udev` 名が指定されていた場合は、次のコマンドを実行して、**SCSI** デバイスを確認します。
 - Red Hat Enterprise Linux 6 の場合
`udevadm` コマンドを実行します。`-n` にはブロックデバイス名を指定してください。

```
# udevadm info --query name -n /dev/disk/by-uuid/55574d05-07dc-4c94-
a585-5599c284d79b
sda1
```

出力された sda1 が、55574d05-07dc-4c94-a585-5599c284d79b と対応する SCSI デバイス名です。

- SUSE LINUX Enterprise Server の場合

udevinfo コマンドを実行します。-n には /dev/disk ディレクトリ以下のデバイス名 (udev 名) を指定してください。

```
# udevinfo -q name -n /dev/disk/by-id/scsi-2000c50fffecb6ae0-part1
sda1
```

出力された sda1 が、/dev/disk/by-id/scsi-2000c50fffecb6ae0-part1 と対応する SCSI デバイス名です。

6. /etc/fstab ファイルを編集して LABEL の設定を解除します。

具体的な編集方法を、手順 7 および手順 8 に示します。

/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

図 3-12 /etc/fstab ファイルの編集例

```
/dev/VolGroup00/LogVol100 / ext3 defaults 1 1
#LABEL=/boot /boot ext3 defaults 1 2
/dev/sda1 /boot ext3 defaults 1 2
none /dev/pts devpts gid=5,mode=620 0 0
none /dev/shm tmpfs defaults 0 0
none /proc proc defaults 0 0
none /sys sysfs defaults 0 0
/dev/VolGroup00/LogVol102 /tmp ext3 defaults 1 2
/dev/VolGroup00/LogVol103 /var ext3 defaults 1 2
/dev/VolGroup00/LogVol101 swap swap defaults 0 0
```

LABEL の行をコメントアウトします。網掛けの行を追加します。

この例は GRUB を使用した場合です。ELILO を使用した IPF の場合は、/boot が記述されている行のマウントポイント /boot は /boot/efi に、ファイルシステムタイプ ext3 は vfat と表示されます。

7. 必要に応じて /etc/fstab ファイルをバックアップします。

8. /etc/fstab ファイルを編集します。

手順 4 で確認した LABEL と SCSI デバイスの対応関係を参考にします。

LABEL 指定の登録をコピーします。

既存の設定内容はコメントアウトします。

LABEL 指定が無効になり、SCSI デバイス指定が有効になるように編集します。

9. ホストを再起動して SCSI デバイスからの起動ができることを確認します。

以上で、LABEL の設定の解除は終了です。

10. HDLM をインストールします。

「3.6.3 HDLM の新規インストール」を参照して手順 2、手順 4 から手順 13、および手順 14 (ホストを再起動する場合だけ実行) を実行し、HDLM デバイスを作成してください。インストール後にホストを再起動する場合と再起動しない場合とで、手順が異なりますので注意してください。

次に示す手順 12 から手順 27 では、設定ファイルを編集して、HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。

11. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmgr) に -v パラメータを指定して実行して、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management Device      Host      Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda  0         0         0      0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス, Device 列は SCSI デバイスを表します。

12. LVM2 が SCSI デバイスではなく HDLM デバイスを認識するように, /etc/lvm/lvm.conf ファイルを編集します。

/etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例を次に示します。

図 3-13 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例

```
# This section allows you to configure which block devices should
# be used by the LVM system.
devices {
    :
    :
    # filter = [ "a/*/" ]
    filter = [ "a|sddl[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
    :
    :
    # types = [ "fd", 16 ]
    types = [ "sddlmdrv", 16 ]
    :
    :
    md_component_detection=0
}
```

既存の filter と types の行をコメントアウトし, 図に示した網掛けの行を追加します。

md_component_detection の項目に 0 を設定します。HDLM をアンインストール, アップグレードインストールをするときに使用するため, md_component_detection の元の値は控えてください。

13. HDLM 用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

ホストの OS に応じて, 次の手順を実行してください。

パラメタに指定する初期 RAM ディスクイメージファイル名は, 現在使用しているものと異なる名前を指定してください。

- Red Hat Enterprise Linux 6 の場合

a. /etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf に定義されている「hdlm_dracut=n」の記述を, 「hdlm_dracut=y」に変更します。

b. dracut コマンドを実行します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dracut /boot/initramfs-hdlm-2.6.32-71.el6.i686.img
`uname -r`
```

- 上記以外の OS の場合

ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) を実行します。

dlmmkinitrd ユティリティについては, 「7.5 dlmmkinitrd ブートディスクサポートユーティリティ」を参照してください。

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例を、次に示します。

GRUB を使用した場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd /boot/initrd-
hdlm-2.6.9-11.EL.gz `uname -r`
KAPL12329-I The utility for supporting the boot disk started.
KAPL12344-I A compressed initial ramdisk image /boot/initrd-
hdlm-2.6.9-11.EL.gz was created.
KAPL12330-I The utility for supporting the boot disk completed.
```

ELILO を使用した IPF の場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd /boot/efi/efi/redhat/
initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz `uname -r`
KAPL12329-I The utility for supporting the boot disk started.
KAPL12344-I A compressed initial ramdisk image /boot/efi/efi/
redhat/initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz was created.
KAPL12330-I The utility for supporting the boot disk completed.
```

SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd
KAPL12329-I The utility for supporting the boot disk started.
KAPL12344-I A compressed initial ramdisk image /boot/
initrd-2.6.16.46-0.14-default.hdlm was created.
KAPL12330-I The utility for supporting the boot disk completed.
```

14. /etc/fstab ファイルをバックアップします。

15. /etc/fstab ファイルを編集します。

手順 8 で変更した /boot のマウントポイントを、SCSI デバイスから HDLM デバイスに書き換えます。既存の SCSI デバイス指定は先頭に # を付けてコメントアウトして、手順 11 で確認した HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、次のように HDLM デバイス指定を追加します。

```
          :
          :
#LABEL=/boot          /boot          ext3          defaults          1 2
#/dev/sda1            /boot          ext3          defaults          1 2
/dev/sddlmaa1        /boot          ext3          defaults          1 2
          :
          :
```

この例は GRUB を使用した場合です。ELILO を使用した IPF の場合は、/boot が記述されている行のマウントポイント /boot は /boot/efi に、ファイルシステムタイプ ext3 は vfat と表示されます。

16. ブートローダの設定ファイルを編集して、OS の起動時に HDLM を設定した状態で起動する定義に変更します。

「[図 3-14 /etc/grub.conf ファイルの編集例](#)」「[図 3-15 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例 \(Xen をサポートしているカーネルを使用している場合\)](#)」、および「[図 3-16 /etc/elilo.conf ファイルの編集例](#)」に示すように、ブートローダの設定ファイルを編集します。

SUSE LINUX Enterprise Server を使用しているときは、/etc/grub.conf ファイルの代わりに /boot/grub/menu.lst ファイルを編集してください。

設定ファイルの編集例を次に示します。使用しているブートローダに応じて、どれか 1 つの編集例を参照してください。

具体的な編集方法については、手順 17 から手順 22 で説明します。

図 3-14 /etc/grub.conf ファイルの編集例

```
#default=0
default=1
timeout=5
splashimage=(hd1,0)/grub/splash.xpm.gz
Hiddenmenu

title Red Hat Enterprise Linux AS (2.6.9-11.EL)
    root (hd1,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro root=/dev/VolGroup00/LogVol100 rhgb quiet
    initrd /initrd-2.6.9-11.EL.img

title Red Hat Enterprise Linux AS (HDLM 2.6.9-11.EL)
    root (hd1,0)
#   kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro root=/dev/VolGroup00/LogVol100 rhgb quiet
kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro rhgb quiet
#   initrd /initrd-2.6.9-11.EL.img
initrd /initrd-hd1m-2.6.9-11.EL.gz
```

網掛けの部分を編集します。

図 3-15 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例 (Xen をサポートしているカーネルを使用している場合)

```
#default 0
default 1
timeout 8
gfxmenu (hd0,0)/message

title XEN
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz
    module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen root=/dev/VolGroup00/LogVol100 vga=0x31a
    resume=/dev/sda3 splash=silent showopts
    module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen

title XEN-hd1m
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz
#   module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen root=/dev/VolGroup00/LogVol100 vga=0x31a
resume=/dev/sda3 splash=silent showopts
module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent showopts
#   module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen
module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hd1m
```

網掛けの部分を編集します。

図 3-16 /etc/elilo.conf ファイルの編集例

```
prompt
timeout=10
#default=as4u1
default=as4u1-hd1m
relocatable

image=vmlinuz-2.6.9-11.EL
    label=as4u1
    initrd=initrd-2.6.9-11.EL.img
    read-only
    append="rhgb quiet root=/dev/VolGroup00/LogVol100"

image=vmlinuz-2.6.9-11.EL
#   label=as4u1
label=as4u1-hd1m
#   initrd=initrd-2.6.9-11.EL.img
initrd=initrd-hd1m-2.6.9-11.EL.gz
    read-only
#   append="rhgb quiet root=/dev/VolGroup00/LogVol100"
append="rhgb quiet"
```

網掛けの部分を編集します。

17. 必要に応じてファイルをバックアップします。
18. SCSI デバイスからの起動に使用していた設定をコピーします。
19. コピーした設定に、HDLM デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合
title を変更します。
 - ブートローダとして ELILO を使用している場合
label を変更します。
20. ブートローダの設定ファイルに記載されている root の指定を編集します。
ホストの OS に応じて、次の手順を実行してください。
 - Red Hat Enterprise Linux 6 の場合
root にルートデバイス名、または UUID を指定します。
root にルートデバイス名を指定するときの手順を次に示します。
 - a. mount コマンドを実行して、ルートデバイス名を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。下線部がルートデバイス名を示す部分です。

```
# mount
/dev/mapper/systemvg-rootlv on / type ext4 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
:
:
```
 - b. 手順 18 でコピーした設定の root の指定を、先の手順で確認したルートデバイス名に変更します。

```
root=/dev/mapper/systemvg-rootlv
```


root に UUID を指定するときの手順を次に示します。
 - a. mount コマンドを実行して、ルートデバイス名を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。下線部がルートデバイス名を示す部分です。

```
# mount
/dev/mapper/systemvg-rootlv on / type ext4 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
:
:
```
 - b. blkid コマンドを実行して、先の手順で確認したルートデバイス名の UUID を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。下線部が UUID を示す部分です。

```
# blkid /dev/mapper/systemvg-rootlv
/dev/mapper/systemvg-rootlv: UUID="313af869-127e-4923-88af-a5c2056104c4" TYPE="ext4"
#
```
 - c. 手順 18 でコピーした設定の root の指定を、先の手順で確認した UUID に変更します。

```
root=UUID=313af869-127e-4923-88af-a5c2056104c4
```
 - 上記以外の OS の場合

手順 18 でコピーした設定の `root` の指定を削除してください。Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、`module` で指定された `root` デバイスの記述を削除してください。

21. 手順 13 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルを `initrd` に指定します。

Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、`module` で指定された `initrd` ファイル名を手順 13 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルに変更してください。

ユーザ環境に依存したオプションが設定されている場合、オプションを削除しないように注意してください。

SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合、`resume` が指定されていることがあります。この場合は `resume` を削除してください。

22. 起動時に使用される設定を記述します。

- ブートローダとして GRUB を使用している場合
`default` に何番目の有効な `title` であるかを記述します。
- ブートローダとして ELILO を使用している場合
`default` に `label` を記述します。

23. ホストを停止します。

次に示すコマンドを実行してホストを停止します。

```
# shutdown -h now
```

24. シングルパス構成からマルチパス構成に変更します。

25. ホストを起動します。

26. ボリュームグループの情報を更新します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループの情報を更新します。

```
# vgscan
Reading all physical volumes. This may take a while...
Found volume group "VolGroup00" using metadata type lvm2
```

27. ボリュームグループと HDLM デバイスの関係を確認します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループを構成する物理ボリュームが HDLM デバイスであることを確認します。

```

# vgsdisplay -v
  Finding all volume groups
  Finding volume group "VolGroup00"
  --- Volume group ---
VG Name          VolGroup00
System ID
Format           lvm2
Metadata Areas   1
Metadata Sequence No 95
VG Access        read/write
VG Status        resizable
MAX LV           0
Cur LV          4
Open LV          4
Max PV           0
Cur PV          1
Act PV           1
VG Size          19.88 GB
PE Size          32.00 MB
Total PE         636
Alloc PE / Size  635 / 19.84 GB
Free PE / Size   1 / 32.00 MB
VG UUID          Lt5T32-00oC-d56S-KR0n-yt0e-wZuu-xJreLx

  --- Logical volume ---
LV Name          /dev/VolGroup00/LogVol00
VG Name          VolGroup00
LV UUID          Bo6xD9-vmBz-qIDF-Mw0o-grbd-Gvmh-NHZ1aX
LV Write Access  read/write
LV Status        available
# open           1
LV Size          9.78 GB
Current LE       313
Segments         1
Allocation       inherit
Read ahead sectors 0
Block device     252:0

                :
                :

  --- Physical volumes ---
PV Name          /dev/sdd1maa2
PV UUID          Xm0ok4-uPGI-Sirs-7Xx0-pVrm-nJrz-ATm2pg
PV Status        allocatable
Total PE / Free PE 636 / 1

```

3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール

HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使ったマルチパス構成のブートディスクの環境で、HDLM をアップグレードインストールする方法を説明します。設定を誤ると、OS が起動できなくなることがあるので、注意してください。

この項では、ブートローダは Red Hat Enterprise Linux, または SUSE LINUX Enterprise Server でデフォルトとして使われる、GRUB または ELILO を用いた場合の設定を示します。

1. Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
2. /etc/fstab ファイルの定義で、/boot に HDLM デバイスが指定されていることを確認します。

```

                :
                :
/dev/sdd1maa1    /boot           ext3           defaults       1 2
                :
                :

```

この例は GRUB を使用した場合です。ELILO を使用した IPF の場合は、/boot が記述されている行のマウントポイント/boot は/boot/efi に、ファイルシステムタイプ ext3 は vfat と表示されます。

3. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmgr) に -v パラメータを指定して実行して、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

```
# dlmcfmgmgr -v
HDevName      Management Device      Host      Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured /dev/sda  0         0         0       0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスを表します。

4. /etc/fstab ファイルを編集します。

手順 2 で確認した /boot のマウントポイントを、HDLM デバイスから SCSI デバイスに書き換えます。既存の HDLM デバイス指定は先頭に # を付けてコメントアウトして、手順 3 で確認した HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、次のように SCSI デバイス指定を追加します。

```
          :
          :
#/dev/sddlmaa1      /boot      ext3      defaults      1 2
/dev/sda1           /boot      ext3      defaults      1 2
          :
          :
```

5. ボリュームグループの情報を更新します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループの情報を更新します。

```
# vgscan
Reading all physical volumes. This may take a while...
Found volume group "VolGroup00" using metadata type lvm2
```

6. ボリュームグループと HDLM デバイスの関係を確認します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループを構成する物理ボリュームが HDLM デバイスであることを確認します。

```

# vgdisplay -v
  Finding all volume groups
  Finding volume group "VolGroup00"
  --- Volume group ---
VG Name                VolGroup00
System ID
Format                 lvm2
Metadata Areas        1
Metadata Sequence No  95
VG Access              read/write
VG Status              resizable
MAX LV                0
Cur LV               4
Open LV               4
Max PV                0
Cur PV               1
Act PV                1
VG Size               19.88 GB
PE Size               32.00 MB
Total PE              636
Alloc PE / Size       635 / 19.84 GB
Free PE / Size        1 / 32.00 MB
VG UUID               Lt5T32-00oC-d56S-KR0n-yt0e-wZuu-xJreLx

  --- Logical volume ---
LV Name                /dev/VolGroup00/LogVol00
VG Name                VolGroup00
LV UUID                Bo6xD9-vmBz-qIDF-Mw0o-grbd-Gvmh-NHZ1aX
LV Write Access        read/write
LV Status              available
# open                 1
LV Size                9.78 GB
Current LE             313
Segments               1
Allocation              inherit
Read ahead sectors     0
Block device           252:0

                        :
                        :

  --- Physical volumes ---
PV Name                /dev/sdd1maa2
PV UUID                Xm0ok4-uPGI-Sirs-7Xx0-pVrm-nJrz-ATm2pg
PV Status              allocatable
Total PE / Free PE     636 / 1

```

7. LVM2 が HDLM デバイスではなく SCSI デバイスを認識するように、`/etc/lvm/lvm.conf` ファイルを編集します。

`/etc/lvm/lvm.conf` ファイルの編集例を次に示します。

図 3-17 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例

```
# This section allows you to configure which block devices should
# be used by the LVM system.
devices {

    # Where do you want your volume groups to appear ?
    dir = "/dev"

    :
    :

    # filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
    filter = [ "r|sddlm[a-p][a-p].*|", "a|/dev/sd|" ]

    :
    :

    # types = [ "fd", 16 ]
    # types = [ "sddlmfdrv", 16 ]

    :
    :

    md_component_detection=0
}
```

既存の filter と types の行をコメントアウトし、図に示した網掛けの行を追加します。

また、md_component_detection の項目をインストール前の値に戻します。

8. ブートローダの設定ファイルを編集して、OS の起動時に SCSI デバイスを設定した状態で起動する定義に変更します。

「図 3-18 /etc/grub.conf ファイルの編集例」、 「図 3-19 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例 (Xen をサポートしているカーネルを使用している場合)」、 および 「図 3-20 /etc/elilo.conf ファイルの編集例」 に示すように、ブートローダの設定ファイルを編集します。

SUSE LINUX Enterprise Server を使用しているときは、/etc/grub.conf ファイルの代わりに /boot/grub/menu.lst ファイルを編集してください。

設定ファイルの編集例を次に示します。使用しているブートローダに応じて、どれか 1 つの編集例を参照してください。

具体的な編集方法については、手順 9 から手順 14 で説明します。

図 3-18 /etc/grub.conf ファイルの編集例

```
#default=0
default=1
timeout=5
splashimage=(hd1,0)/grub/splash.xpm.gz
Hiddenmenu

title Red Hat Enterprise Linux AS (HDLM 2.6.9-11.EL)
    root (hd1,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro rhgb quiet
    initrd /initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz

title Red Hat Enterprise Linux AS (2.6.9-11.EL)
    root (hd1,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro root=/dev/VolGroup00/LogVol100 rhgb quiet
#    initrd /initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.img
    initrd /initrd-2.6.9-11.EL.img
```

網掛けの部分を編集します。

図 3-19 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例 (Xen をサポートしているカーネルを使用している場合)

```
#default 0
default 1
timeout 8
gfxmenu (hd0,0)/message

title XEN-hdlm
  root (hd0,0)
  kernel /xen.gz
  module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent showopts
  module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hdlm

title XEN-sd
  root (hd0,0)
  kernel /xen.gz
  # module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent showopts
  module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen root=/dev/VolGroup00/LogVol100 vga=0x31a splash=silent
  showopts
  # module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hdlm
  module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen
```

網掛けの部分を編集します。

図 3-20 /etc/elilo.conf ファイルの編集例

```
prompt
timeout=10
#default=as4u1-hdlm
default=as4u1
relocatable

image=vmlinuz-2.6.9-11.EL
  label=as4u1-hdlm
  initrd=initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
  read-only
  append="rhgb quiet"

image=vmlinuz-2.6.9-11.EL
#  label=as4u1-hdlm
  label=as4u1
#  initrd=initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
  initrd=initrd-2.6.9-11.EL.img
  read-only
  append="rhgb quiet"
#  append="rhgb quiet root=/dev/VolGroup00/LogVol100"
```

網掛けの部分を編集します。

9. HDLM デバイスからの起動に使用していた設定をコピーします。
10. コピーした設定に名前を付けます。
SCSI デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。
title を変更します。
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合
title を変更します。
 - ブートローダとして ELILO を使用している場合
label を変更します。
11. /etc/fstab ファイルで「/」にマウントされるデバイス名を root に指定します。
Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、ブートローダ設定ファイルの編集規則に従って root デバイスを追記してください。
12. Red Hat Enterprise Linux 6 の場合は、/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf に定義されている「hdlm_dracut」の記述を確認します。

「hdmlm_dracut=y」の記述があるときは、「hdmlm_dracut=n」に変更します。

「hdmlm_dracut=y」の記述がないときは、手順 14 に進んでください。

13. SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルを `initrd` に指定します。

Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、`module` で指定された `initrd` ファイル名を SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルに変更してください。

ユーザ環境に依存したオプションが設定されている場合、オプションを削除しないように注意してください。

SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルは、OS の `mkinitrd` コマンドまたは `dracut` コマンドのマニュアルを参考に作成してください。

14. 起動時に使用される設定を記述します。

- ブートローダとして GRUB を使用している場合
default に何番目の有効な title であるかを記述します。
- ブートローダとして ELILO を使用している場合
default に label を記述します。

15. ホストを停止します。

次に示すコマンドを実行してホストを停止します。

```
# shutdown -h now
```

16. マルチパス構成をシングルパス構成に変更します。

17. ホストを起動します。

18. `mount` コマンドを実行して、`/boot` に SCSI デバイスがマウントされていることを確認します。
ブートローダとして GRUB を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# mount
      :
      :
/dev/sda1 on /boot type ext3 (rw)
      :
      :
```

下線部を確認してください。

19. ボリュームグループの情報を更新します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループの情報を更新します。

```
# vgscan
Reading all physical volumes. This may take a while...
Found volume group "VolGroup00" using metadata type lvm2
```

20. ボリュームグループと HDLM デバイスの関係を確認します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループを構成する物理ボリュームが HDLM デバイスでないことを確認します。

```

# vgdisplay -v
  Finding all volume groups
  Finding volume group "VolGroup00"
  --- Volume group ---
VG Name          VolGroup00
System ID
Format           lvm2
Metadata Areas   1
Metadata Sequence No 95
VG Access        read/write
VG Status        resizable
MAX LV           0
Cur LV          4
Open LV          4
Max PV           0
Cur PV          1
Act PV           1
VG Size          19.88 GB
PE Size          32.00 MB
Total PE         636
Alloc PE / Size  635 / 19.84 GB
Free PE / Size   1 / 32.00 MB
VG UUID          Lt5T32-00oC-d56S-KR0n-yt0e-wZuu-xJreLx

  --- Logical volume ---
LV Name          /dev/VolGroup00/LogVol00
VG Name          VolGroup00
LV UUID          Bo6xD9-vmBz-qIDF-Mw0o-grbd-Gvmh-NHZ1aX
LV Write Access  read/write
LV Status        available
# open           1
LV Size          9.78 GB
Current LE       313
Segments         1
Allocation       inherit
Read ahead sectors 0
Block device     252:0

                :
                :

  --- Physical volumes ---
PV Name          /dev/sda2
PV UUID          Xm0ok4-uPGI-Sirs-7Xx0-pVrm-nJrz-ATm2pg
PV Status        allocatable
Total PE / Free PE 636 / 1

```

21. HDLM をアップグレードインストールします。

「3.6.6 HDLM のアップグレードインストール」を参照して手順 2, および手順 4 から手順 13, および手順 14 (ホストを再起動する場合だけ実行) を実行し, HDLM デバイスを作成してください。インストール後にホストを再起動する場合と再起動しない場合とで, 手順が異なりますので注意してください。

22. `dlmcfmgr` ユティリティに `-v` パラメタを指定して実行して, HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

```

# dlmcfmgr -v
HDevName      Management Device      Host      Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda  0         0         0     0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.

```

HDevName 列は HDLM デバイス, Device 列は SCSI デバイスを表します。

23. LVM2 が SCSI デバイスではなく HDLM デバイスを認識するように, `/etc/lvm/lvm.conf` ファイルを編集します。

`/etc/lvm/lvm.conf` ファイルの編集例を次に示します。

図 3-21 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例

```
# This section allows you to configure which block devices should
# be used by the LVM system.
devices {
    :
    :
    # filter = [ "r|sddm[a-p][a-p].*|", "a|/dev/sd|" ]
    filter = [ "a|sddm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
    :
    :
    # types = [ "fd", 16 ]
    types = [ "sddmfd", 16 ]
    :
    :
    md_component_detection=0
}

```

既存の filter と types の行をコメントアウトし、図に示した網掛けの行を追加します。

md_component_detection の項目に 0 を設定します。HDLM をアンインストール、アップグレードインストールをするときに使用するため、md_component_detection の元の値は控えてください。

24. HDLM 用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

ホストの OS に応じて、次の手順を実行してください。

- Red Hat Enterprise Linux 6 の場合

- a. /etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf に定義されている「hdlm_dracut=n」の記述を、「hdlm_dracut=y」に変更します。

- b. dracut コマンドを実行します。

作成する初期 RAM ディスクイメージファイルがすでにある場合、初期 RAM ディスクイメージファイルを上書きするために、-f パラメタを指定してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dracut /boot/initramfs-hdlm-2.6.32-71.el6.i686.img
`uname -r`

```

- 上記以外の OS の場合

ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) を実行します。

作成する初期 RAM ディスクイメージファイルがすでにある場合、Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用しているときは、初期 RAM ディスクイメージファイルを上書きするために、-f パラメタを指定してください。SUSE LINUX Enterprise Server を使用しているときは、パラメタを指定しなくても、初期 RAM ディスクイメージファイルが上書きされます。

dlmmkinitrd ユティリティについては、「7.5 dlmmkinitrd ブートディスクサポートユーティリティ」を参照してください。

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例を、次に示します。

GRUB を使用した場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd /boot/initrd-
hdlm-2.6.9-11.EL.gz `uname -r`
KAPL12329-I The utility for supporting the boot disk started.

```

```
KAPL12344-I A compressed initial ramdisk image /boot/initrd-
hdlm-2.6.9-11.EL.gz was created.
KAPL12330-I The utility for supporting the boot disk completed.
```

ELILO を使用した IPF の場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd /boot/efi/efi/redhat/
initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz `uname -r`
KAPL12329-I The utility for supporting the boot disk started.
KAPL12344-I A compressed initial ramdisk image /boot/efi/efi/
redhat/initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz was created.
KAPL12330-I The utility for supporting the boot disk completed.
```

SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合の dlmmkinitrd ユティリティの実行例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd
KAPL12329-I The utility for supporting the boot disk started.
KAPL12344-I A compressed initial ramdisk image /boot/
initrd-2.6.16.46-0.14-default.hdlm was created.
KAPL12330-I The utility for supporting the boot disk completed.
```

25. 初期 RAM ディスクイメージファイルを作成したときにファイルを上書きしていない場合は、不要になった既存の初期 RAM ディスクイメージファイルを削除します。

次に示すコマンドを実行します。

- GRUB を使用した場合の実行例

```
# rm /boot/initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
```

- ELILO を使用した IPF の場合の実行例

```
# rm /boot/efi/efi/redhat/initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
```

26. /etc/fstab ファイルを編集します。

手順 4 で変更した /boot のマウントポイントを、SCSI デバイスから HDLM デバイスに書き換えます。既存の SCSI デバイス指定は先頭に # を付けてコメントアウトして、手順 22 で確認した HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、次のように HDLM デバイス指定を追加します。

```

:
:
#/dev/sda1          /boot      ext3      defaults    1 2
/dev/sddlmaa1     /boot      ext3      defaults    1 2
:
:
```

この例は GRUB を使用した場合です。ELILO を使用した IPF の場合は、/boot が記述されている行のマウントポイント /boot は /boot/efi に、ファイルシステムタイプ ext3 は vfat と表示されます。

27. ブートローダの設定ファイルを編集して、OS の起動時に HDLM を設定した状態で起動する定義に変更します。

「[図 3-22 /etc/grub.conf ファイルの編集例](#)」, 「[図 3-23 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例 \(Xen をサポートしているカーネルを使用している場合\)](#)」, および 「[図 3-24 /etc/elilo.conf ファイルの編集例](#)」 に示すように、ブートローダの設定ファイルを編集します。

SUSE LINUX Enterprise Server を使用しているときは、/etc/grub.conf ファイルの代わりに /boot/grub/menu.lst ファイルを編集してください。

設定ファイルの編集例を次に示します。使用しているブートローダに応じて、どれか 1 つの編集例を参照してください。

具体的な編集方法については、手順 28 から手順 32 で説明します。

図 3-22 /etc/grub.conf ファイルの編集例

```
#default=0
#default=1
default=2
timeout=5
splashimage=(hd1,0)/grub/splash.xpm.gz
Hiddenmenu

title Red Hat Enterprise Linux AS (HDLM 2.6.9-11.EL)
    root (hd1,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro rhgb quiet
    initrd /initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.img

title Red Hat Enterprise Linux AS (2.6.9-11.EL)
    root (hd1,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro root=/dev/VolGroup00/LogVol100 rhgb quiet
#    initrd /initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.img
    initrd /initrd-2.6.9-11.EL.img

title Red Hat Enterprise Linux AS (HDLM UP 2.6.9-11.EL)
    root (hd1,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro rhgb quiet
    initrd /initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
```

網掛けの部分を編集します。

図 3-23 /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例 (Xen をサポートしているカーネルを使用している場合)

```
#default 0
#default 1
default 2
timeout 8
gfxmenu (hd0,0)/message

title XEN-hdlm
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz
    module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent showopts
    module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hdlm

title XEN-sd
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz
#    module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent showopts
    module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen root=/dev/VolGroup00/LogVol100 vga=0x31a splash=silent
    showopts
#    module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hdlm
    module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen

title XEN-hdlm-up
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz
    module /vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent showopts
    module /initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hdlm
```

網掛けの部分を編集します。

図 3-24 /etc/elilo.conf ファイルの編集例

```

prompt
timeout=10
#default=as4ul-hdlm
#default=as4ul
default=as4ul-up-hdlm
relocatable

image=vmlinuz-2.6.9-11.EL
    label=as4ul-hdlm
    initrd=initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
    read-only
    append="rhgb quiet"

image=vmlinuz-2.6.9-11.EL
#    label=as4ul-hdlm
    label=as4ul
#    initrd=initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
    initrd=initrd-2.6.9-11.EL.img
    read-only
#    append="rhgb quiet"
    append="rhgb quiet root=/dev/VolGroup00/LogVol100"

image=vmlinuz-2.6.9-11.EL
#    label=as4ul-hdlm
#    label=as4ul
    label=as4ul-up-hdlm
#    initrd=initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
#    initrd=initrd-2.6.9-11.EL.img
    initrd=initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz
    read-only
#    append="rhgb quiet"
#    append="rhgb quiet root=/dev/VolGroup00/LogVol100"
    append="rhgb quiet"

```

網掛けの部分を編集します。

28. SCSI デバイスからの起動に使用していた設定をコピーします。
29. コピーした設定に、更新後の HDLM デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合
title を変更します。
 - ブートローダとして ELILO を使用している場合
label を変更します。
30. ブートローダの設定ファイルに記載されている root の指定を編集します。
ホストの OS に応じて、次の手順を実行してください。
 - Red Hat Enterprise Linux 6 の場合
root にルートデバイス名、または UUID を指定します。
root にルートデバイス名を指定するときの手順を次に示します。
 - a. mount コマンドを実行して、ルートデバイス名を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。下線部がルートデバイス名を示す部分です。


```

# mount
/dev/mapper/systemvg-rootlv on / type ext4 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
:
:

```
 - b. 手順 28 でコピーした設定の root の指定を、先の手順で確認したルートデバイス名に変更します。

```
root=/dev/mapper/systemvg-rootlv
```

root に UUID を指定するときの手順を次に示します。

- a. mount コマンドを実行して、ルートデバイス名を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。下線部がルートデバイス名を示す部分です。

```
# mount
/dev/mapper/systemvg-rootlv on / type ext4 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
:
:
```

- b. blkid コマンドを実行して、先の手順で確認したルートデバイス名の UUID を確認します。
コマンドの実行例を次に示します。下線部が UUID を示す部分です。

```
# blkid /dev/mapper/systemvg-rootlv
/dev/mapper/systemvg-rootlv: UUID="313af869-127e-4923-88af-a5c2056104c4" TYPE="ext4"
#
```

- c. 手順 28 でコピーした設定の root の指定を、先の手順で確認した UUID に変更します。

```
root=UUID=313af869-127e-4923-88af-a5c2056104c4
```

- 上記以外の OS の場合

手順 28 でコピーした設定の root の指定を削除してください。Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、module で指定された root デバイスの記述を削除してください。

31. 手順 24 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルを initrd に指定します。
Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、module で指定された initrd ファイル名を手順 24 で作成した初期 RAM ディスクイメージファイルに変更してください。
ユーザ環境に依存したオプションが設定されている場合、オプションを削除しないようにしてください。
32. 起動時に使用される設定を記述します。
 - ブートローダとして GRUB を使用している場合
default に何番目の有効な title であるかを記述します。
 - ブートローダとして ELILO を使用している場合
default に label を記述します。
33. ホストを停止します。
次に示すコマンドを実行してホストを停止します。

```
# shutdown -h now
```

34. シングルパス構成からマルチパス構成に変更します。

35. ホストを起動します。

36. mount コマンドを実行して、/boot に HDLM デバイスがマウントされていることを確認します。

ブートローダとして GRUB を使用している場合の実行例を次に示します。

```
# mount
```

```

:
:
/dev/sddlmaa1 on /boot type ext3 (rw)
:
:

```

下線部を確認してください。

37. ボリュームグループの情報を更新します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループの情報を更新します。

```

# vgscan
Reading all physical volumes. This may take a while...
Found volume group "VolGroup00" using metadata type lvm2

```

38. ボリュームグループと HDLM デバイスの関係を確認します。

次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループを構成する物理ボリュームが HDLM デバイスであることを確認します。

```

# vgsdisplay -v
Finding all volume groups
Finding volume group "VolGroup00"
--- Volume group ---
VG Name          VolGroup00
System ID
Format           lvm2
Metadata Areas   1
Metadata Sequence No 95
VG Access        read/write
VG Status        resizable
MAX LV           0
Cur LV          4
Open LV          4
Max PV           0
Cur PV          1
Act PV           1
VG Size          19.88 GB
PE Size          32.00 MB
Total PE         636
Alloc PE / Size  635 / 19.84 GB
Free PE / Size   1 / 32.00 MB
VG UUID          Lt5T32-00oC-d56S-KR0n-yt0e-wZuu-xJreLx

--- Logical volume ---
LV Name          /dev/VolGroup00/LogVol00
VG Name          VolGroup00
LV UUID          Bo6xD9-vmBz-qIDF-Mw0o-grbd-Gvmh-NHZ1aX
LV Write Access  read/write
LV Status        available
# open           1
LV Size          9.78 GB
Current LE       313
Segments         1
Allocation       inherit
Read ahead sectors 0
Block device     252:0

:
:

--- Physical volumes ---
PV Name          /dev/sddlmaa2
PV UUID          Xm0ok4-uPGI-Sirs-7Xx0-pVrm-nJrz-ATm2pg
PV Status        allocatable
Total PE / Free PE 636 / 1

```

3.7.7 HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処

HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処方法について説明します。OS の起動に失敗した場合、次のどちらかの現象が起こります。

- ・ エラーメッセージを表示して OS が停止する
- ・ メンテナンスを開始するためのパスワードを要求して OS が停止する

それぞれの場合の対処方法を、次に示します。

(1) エラーメッセージを表示して OS が停止した場合

エラーメッセージを表示して OS が停止した場合の原因を次に示します。

原因 1

ブートローダの設定で初期 RAM ディスクイメージファイルを誤って設定した場合

原因 2

初期 RAM ディスクイメージファイルが壊れている場合

原因 3

システムの環境構成を変更したためにホスト起動時に起動用ディスクが最初に認識されなくなった場合

システムの環境構成を変更したために起動ディスクが見つからない場合、次のように表示されます。

```
KAPL10302-I Multiple instances of the utility for supporting the boot disk cannot
be executed concurrently.
KAPL10325-I The command started. Command name = /sbin/dlmcfgmgr -v
/usr/bin/expr: syntax error
/bin/echo: write error: Invalid argument
KAPL10328-I Execution of linuxrc completed.
/bin/mv: cannot move `/etc/dlmtmplog' to `/opt/DynamicLinkManager/Root/etc/opt/
DynamicLinkManager/hdlmboot.log': No such file or directory
VFS: Cannot open root device "" or 08:03
Please append a correct "root=" boot option
Kernel panic: VFS: Unable to mount root fs on 08:03
```

これらの対処方法を次に示します。

1. ホストを再起動します。
2. ブートローダの起動について設定する画面が表示されたら、SCSI デバイスからの起動を選択します。

SCSI デバイスからの起動に失敗する場合は、OS をインストールした LU へのパスだけを有効にして起動してください。

3. /etc/lilo.conf ファイル、/etc/grub.conf ファイル、/etc/elilo.conf ファイルまたは/boot/grub/menu.lst ファイルの定義に、初期 RAM ディスクイメージファイルおよび ramdisk_size が正しく設定されていることを確認します。

誤っている場合は修正します。

初期 RAM ディスクイメージファイルおよび ramdisk_size を正しく設定しても HDLM デバイスからの起動に失敗する場合は、初期 RAM ディスクイメージファイルが壊れているおそれがあります。ブートディスクサポートユーティリティを実行して、初期 RAM ディスクイメージファイルを作成し直してください。

4. ホストを再起動し、HDLM デバイスで OS を起動します。

(2) メンテナンスを開始するためのパスワードを要求して OS が停止した場合

メンテナンスを開始するためのパスワードを要求して OS が停止した場合の原因を次に示します。

- ブートローダの設定に SCSI デバイスからの起動を選択して、`/etc/fstab` ファイルでは HDLM デバイスをマウントするように設定した場合

対処方法を次に示します。

1. `root` ユーザのパスワードを入力します。
2. `mount -o remount rw /` を実行してルートディレクトリをマウントし直します。
3. `/etc/fstab` ファイルに定義されている `root` のマウント先を SCSI デバイスに変更します。
4. ホストを再起動し、SCSI デバイスで起動します。
5. HDLM デバイスからの起動を行う場合は、手順に従って環境を構築します。

「3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定」または「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」で示す手順に従ってください。

3.8 LUKS の設定

LUKS を使用する場合、ユーザが実行する必要がある手順を説明します。

3.8.1 LUKS を使用する場合の注意事項

LUKS を使用する場合の注意事項を次に示します。

- HDLM は、次の OS で提供している LUKS をサポートします。
 - Red Hat Enterprise Linux 5.3
 - Red Hat Enterprise Linux 5.3 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.4
 - Red Hat Enterprise Linux 5.4 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.5
 - Red Hat Enterprise Linux 5.5 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.6
 - Red Hat Enterprise Linux 5.6 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.7
 - Red Hat Enterprise Linux 5.7 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.8
 - Red Hat Enterprise Linux 5.8 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 5.9
 - Red Hat Enterprise Linux 5.9 Advanced Platform
 - Red Hat Enterprise Linux 6
- ブートディスクとして使用する HDLM デバイスには LUKS を適用できません。
- HDLM デバイスに LUKS を設定するには、SCSI デバイスに LUKS を設定するのと同様、`/sbin/cryptsetup` コマンドを実行してください。

- HDLM デバイスで LUKS を使用する場合は、`/etc/crypttab` ファイルの第 2 フィールドには HDLM デバイスファイル名を直接指定してください。

3.8.2 LUKS 環境への HDLM の適用

SCSI デバイスに LUKS が適用された環境から HDLM デバイスへ移行する手順を説明します。次の手順では、`/dev/sdh` から `/dev/sddlmaa` へ移行しています。

1. SCSI デバイスから移行する HDLM デバイスを確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (`dlmcfmgmgr`) などのコマンドを使用して、SCSI デバイスと HDLM デバイスの対応を確認してください。

`dlmcfmgmgr` ユティリティに `-v` パラメータを指定して実行する例を示します。

```
# dlmcfmgmgr -v
HDevName      Management  Device      Host  Channel  Target  Lun
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
/dev/sddlmaa   configured  /dev/sdh    1     0         0      0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgmgr completed normally.
#
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスになります。

2. `/etc/crypttab` ファイルの第 2 フィールドを確認します。

- SCSI デバイスが直接指定されている場合は、`/etc/crypttab` ファイルの第 2 フィールドを、手順 1 で確認した HDLM デバイス名に変更してください。手順 4 へ進んでください。

`/etc/crypttab` ファイルの変更前と変更後の例を示します。

変更前

```
luks-volume1 /dev/sdh /etc/cryptpassword1
```

変更後

```
luks-volume1 /dev/sddlmaa /etc/cryptpassword1
```

- UUID の形式でデバイス名が指定されている場合は、手順 3 へ進んでください。

3. 次のコマンドを実行して、UUID とデバイス名の対応関係を確認します。

```
# blkid -t UUID="050f9901-3ab8-4556-a091-9c6e4a404f09" -l -o device
/dev/sdh
#
```

- HDLM デバイス名が出力された場合、`/etc/crypttab` ファイルの第 2 フィールドを、出力された HDLM デバイス名に変更してください。

- SCSI デバイス名が出力された場合、`/etc/crypttab` ファイルの第 2 フィールドを、手順 1 で確認した HDLM デバイス名に変更してください。

`/etc/crypttab` ファイルの変更前と変更後の例を示します。

変更前

```
luks-volume1 UUID="050f9901-3ab8-4556-a091-9c6e4a404f09" /etc/cryptpassword1
```

変更後

```
luks-volume1 /dev/sddlmaa /etc/cryptpassword1
```

4. SCSI デバイスとデバイス Mapper で使用されているデバイスとのマッピングを解除します。

SCSI デバイスと `/dev/mapper/luks-volume1` のマッピングを解除する例を示します。

```
# cryptsetup luksClose luks-volume1
```

```
#
```

5. HDLM デバイスにデバイスマッパーで使用されているデバイスをマッピングします。

キーファイル(/etc/cryptpassword1)を使用する場合、手順 4 で解除した/dev/mapper/luks-volume1 を HDLM デバイスにマッピングする例を示します。

```
# cryptsetup -d /etc/cryptpassword1 luksOpen /dev/sddlmaa luks-volume1
key slot 0 unlocked.
Command successful.
#
```

6. シングルパス構成からマルチパス構成に変更します。

3.9 md デバイスの設定

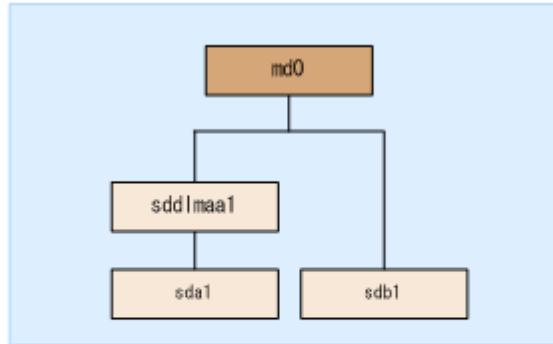
md デバイスを使用する場合、ユーザが実行する必要がある手順を説明します。

3.9.1 md デバイスを設定する場合の注意事項



md デバイスを使用する場合の注意事項を次に説明します。

- HDLM はマルチパスソフトであるため、md デバイスの MULTIPATH 機能と同時に使用できません。
- HDLM をインストールする前に、md デバイスの MULTIPATH 機能を使用している場合は、HDLM のインストール後に md デバイスの機能を LINEAR 機能に変更してください。
- ブートディスク環境には、HDLM 上に作成した md デバイスを使用できません。
- /opt, /tmp, および/var ディレクトリなど、システム運用中にアンマウントできないディレクトリに md デバイスが適用されている場合、その md デバイスには、HDLM を適用できません。
- ディスクパーティションタイプの RAID (fd) は利用できません。
- バージョンが 1.6.0-2 以下の mdadm パッケージでは、メジャー、またはマイナー番号が 256 以上のデバイスを管理することができません。mdadm パッケージのバージョンは 1.6.0-3 以上のものを使用してください。
- md デバイスの構成デバイスとして、SCSI デバイスと HDLM デバイスを同時に指定することはできません。誤って SCSI デバイスと HDLM デバイスを同時に指定した場合の例を次の図に示します。

図 3-25 誤った md デバイスの構成例

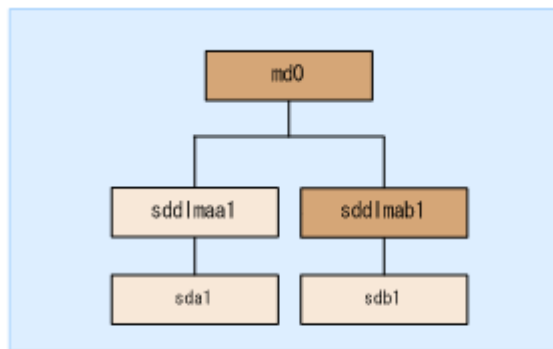


(凡例)



- | | |
|---|------------------------|
|  : デバイスファイル | md0 : mdデバイス |
|  : 操作対象のデバイスファイル | sddlmaa1 : HDLM デバイス |
| | sda1, sdb1 : SCSI デバイス |

HDLM で md デバイスを管理したい場合は、SCSI デバイスによって構成されている md デバイスは HDLM デバイスによって構成されている md デバイスに移行してください。移行した例を次の図に示します。

図 3-26 正しい md デバイスの構成例



(凡例)

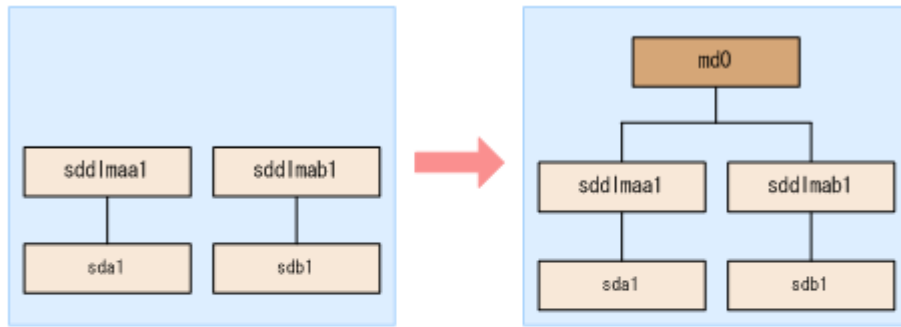
- | | |
|---|-------------------------------|
|  : デバイスファイル | md0 : mdデバイス |
|  : 操作対象のデバイスファイル | sddlmaa1, sddlma1 : HDLM デバイス |
| | sda1, sdb1 : SCSI デバイス |

3.9.2 md デバイスの作成

HDLM をインストールしたマルチパス環境で新規に md デバイスを作成する手順を、次に説明します。

次の手順では、`/dev/sddlmaa1` および `/dev/sddlma1` 上に `/dev/md0` を作成しています。「[図 3-27 HDLM デバイス上に md デバイスを作成した場合のデバイス構成](#)」に示す環境は、次の手順で構築してください。

図 3-27 HDLM デバイス上に md デバイスを作成した場合のデバイス構成



(凡例)

- : デバイスファイル
 - : 操作対象のデバイスファイル
 - : 移行操作
- md0 : mdデバイス
sddlmaa1, sddlma1 : HDLM デバイス
sda1, sdb1 : SCSI デバイス

1. ディスクパーティションを作成します。

ディスクパーティションタイプは 83 に設定して作成してください。

fdisk コマンドを実行してディスクパーティションを作成する場合の例を次に示します。

```
# fdisk /dev/sddlmaa
コマンド (m でヘルプ): n
コマンドアクション
  e   拡張
  p   基本領域 (1-4)
p
領域番号 (1-4): 1
最初 シリンダ (1-1018, default 1):
Using default value 1
終点 シリンダ または +サイズ または +サイズM または +サイズK (1-1018, default 1018):
Using default value 1018

コマンド (m でヘルプ): t
Selected partition 1
16 進数コード (L コマンドでコードリスト表示): 83

コマンド (m でヘルプ): p

Disk /dev/sddlmaa: 5368 MB, 5368709120 bytes
166 heads, 62 sectors/track, 1018 cylinders
Units = シリンダ数 of 10292 * 512 = 5269504 bytes

デバイス Boot Start End Blocks Id System
/dev/sddlmaa1 1 1018 5238597 83 Linux

コマンド (m でヘルプ): w
領域テーブルは交換されました！

ioctl() を呼び出して領域テーブルを再読み込みします。
ディスクを同期させます。
/dev/sddlma1 も同様に実行してください。
```

2. md デバイスを作成します。

md デバイスに RAID1 (ミラーリング) が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# mdadm -C /dev/md0 -l1 -n2 /dev/sddlmaa1 /dev/sddlma1
mdadm: /dev/sddlmaa1 appears to contain an ext2fs file system
      size=5238592K mtime=Fri Jan 25 19:26:25 2008
mdadm: /dev/sddlma1 appears to contain an ext2fs file system
      size=5238592K mtime=Fri Jan 25 19:27:07 2008
```

```
Continue creating array? y
mdadm: array /dev/md0 started.
```

3. md デバイスが HDLM 上に作成されたことを確認します。

md デバイ스에 RAID1 (ミラーリング) を使用されている場合の執行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sddlmaa1[0] sddlma1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]

unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、HDLM デバイスが表示されていることを確認してください。

4. 必要に応じてコンフィグレーションファイルをバックアップします。

すでにコンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)が作成されている場合は、次のコマンドを実行してバックアップを作成してください。

```
# cp -pr /etc/mdadm.conf /etc/mdadm.conf.backup
```

5. 次のコマンドを実行して、コンフィグレーションファイルを作成します。

```
# echo "DEVICE /dev/sddlmaa1 /dev/sddlma1" >> /etc/mdadm.conf
# mdadm --detail --scan | grep -w "/dev/md0" >> /etc/mdadm.conf
```

sddlmaa1 および sddlma1 には手順 3 で表示された md0 と対応する HDLM デバイスを指定してください。

コンフィグレーションファイルの作成例を次に示します。

```
# cat /etc/mdadm.conf
DEVICE /dev/sddlmaa1 /dev/sddlma1
ARRAY /dev/md0 level=raid1 num-devices=2
UUID=e39a6b15:32e48a5d:ca05f4db:25bc8af9
```

コンフィグレーションファイルの記述内容については、Linux のマニュアルや man コマンドを参照してください。

6. 手順 5 で作成したコンフィグレーションファイルを編集します。

/etc/mdadm.conf ファイルを編集して、ARRAY 行に「auto=yes」を追加してください。

```
DEVICE /dev/sddlmaa1 /dev/sddlma1
ARRAY /dev/md0 level=raid1 num-devices=2
UUID=e39a6b15:32e48a5d:ca05f4db:25bc8af9 auto=yes
```

7. ホストを再起動します。

8. md デバイスが活性化されていることを確認します。

md デバイ스에 RAID1 (ミラーリング) が適用されている場合の執行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sddlmaa1[0] sddlma1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]

unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、HDLM デバイスが表示されていることを確認してください。

3.9.3 md デバイス環境への HDLM の適用

SCSI デバイスを使って md デバイスを構築している環境から、HDLM 管理対象デバイスを使って md デバイスを構築している環境へ移行する手順を次に説明します。

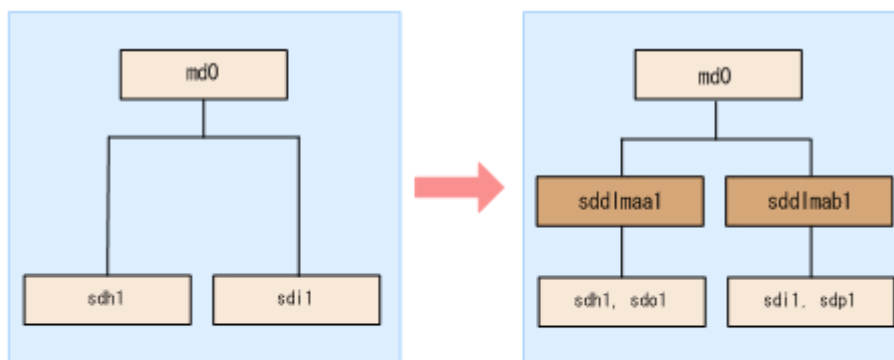
md デバイスに MULTIPATH 機能を使用していない場合は、「(1) md デバイスに MULTIPATH 機能を使用していない場合」の手順を実行してください。md デバイスに MULTIPATH 機能を使用している場合は、「(2) md デバイスに MULTIPATH 機能を使用している場合」の手順を実行してください。

(1) md デバイスに MULTIPATH 機能を使用していない場合

MULTIPATH 機能を使用していない md デバイスの環境に、HDLM を適用する手順を説明します。この手順は、md デバイスに RAID 機能が使用されている場合を例に説明します。

次の手順では、/dev/sdh1 および/dev/sdi1 上の/dev/md0 を、/dev/sddlmaa1 および/dev/sddlma1 上の/dev/md0 に移行しています。「[図 3-28 SCSI デバイス上にある md デバイスを HDLM デバイス上に移行した場合のデバイス構成 \(md デバイスの RAID 機能を使用した環境\)](#)」に示す環境は、次の手順で構築してください。

図 3-28 SCSI デバイス上にある md デバイスを HDLM デバイス上に移行した場合のデバイス構成 (md デバイスの RAID 機能を使用した環境)



(凡例)

□ : デバイスファイル

■ : 操作対象のデバイスファイル

→ : 移行操作

md0 : mdデバイス

sddlmaa1, sddlma1 : HDLM デバイス

sdh1, sdi1, sdo1, sdp1 : SCSI デバイス

1. 既存の md デバイスを使用しているアプリケーションをすべて停止します。
2. 必要に応じて md デバイス上のアプリケーションのデータをバックアップします。
3. md デバイス上にファイルシステムをマウントしている場合は、アンマウントします。
4. md デバイスの状態を確認します。

次のコマンドを実行して、md デバイスの構成状態を確認します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sdh1[0] sdi1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]
```

unused devices: <none>

「md0 : active」と表示され、SCSI デバイスが表示されることを確認してください。「md0 : active」が表示されなかった場合は、md デバイスを活性化させてください。

- すでにコンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)を使用していた場合、そのコンフィグレーションファイルをバックアップします。

次のコマンドを実行してコンフィグレーションファイルのバックアップを作成してください。

```
# cp -pr /etc/mdadm.conf /etc/mdadm.conf.backup
```

- 次のコマンドを実行して、コンフィグレーションファイルを作成します。

手順5で、すでにコンフィグレーションファイルを使用していた場合でも、md デバイスを HDLM 管理対象デバイスにするため、コンフィグレーションファイルを作成し直してください。

```
# echo "DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1" >> /etc/mdadm.conf
# mdadm --detail --scan | grep -w "/dev/md0" >> /etc/mdadm.conf
```

sdh1 および sdi1 は手順4で表示された SCSI デバイスを指定してください。

コンフィグレーションファイルの作成例を次に示します。下線部の行がこの手順で追加した行です。

```
# cat /etc/mdadm.conf
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1
DEVICE /dev/sdf1 /dev/sdg1 /dev/sdh1 /dev/sdi1
ARRAY /dev/md0 level=raid1 num-devices=2
UUID=e39a6b15:32e48a5d:ca05f4db:25bc8af9
ARRAY /dev/md0 level=linear num-devices=1 UUID=426a9f1c:
9cfa6310:6aa9a80b:11ea2102
```

コンフィグレーションファイルの記述内容については、Linux のマニュアルや man コマンドを参照してください。

新規にコンフィグレーションファイルを作成した場合は、手順9に進んでください。

- すでにコンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)を使用していた場合、コンフィグレーションファイル内の不要な ARRAY 行を削除します。

手順6で作成した ARRAY 行と同じ md デバイス名(md0)の ARRAY 行を削除してください。次の例では、下線部の行が削除対象になります。

```
# cat /etc/mdadm.conf
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1
DEVICE /dev/sdf1 /dev/sdg1 /dev/sdh1 /dev/sdi1
ARRAY /dev/md0 level=raid1 num-devices=2
UUID=e39a6b15:32e48a5d:ca05f4db:25bc8af9
ARRAY /dev/md0 level=linear num-devices=1 UUID=426a9f1c:
9cfa6310:6aa9a80b:11ea2102
```

- すでにコンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)を使用していた場合、DEVICE 行を編集します。

すでに記載されている DEVICE 行が手順6で作成した DEVICE 行の SCSI デバイスを含むように設定している場合、それを除外するように DEVICE 行を編集してください。

修正例を次に示します。

修正前

```
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1
DEVICE /dev/sdf1 /dev/sdg1 /dev/sdh1 /dev/sdi1
```

修正後

```
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1
DEVICE /dev/sdf1 /dev/sdg1
```

- /etc/mdadm.conf ファイルを編集して、コンフィグレーションファイルの ARRAY 行に「auto=yes」を追加します。

```
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1
```

```
DEVICE /dev/sdf1 /dev/sdg1
ARRAY /dev/md0 level=raid1 num-devices=2
UUID=e39a6b15:32e48a5d:ca05f4db:25bc8af9_auto=yes
```

10. HDLM をインストールします。

「3.6.3 HDLM の新規インストール」の手順 2, 手順 4 から手順 12 を実行し, HDLM をインストールしてください。

11. HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に -v パラメータを指定して実行してください。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management Device      Host Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured /dev/sdh   1       0       0       0
/dev/sddlmaab configured /dev/sdi   1       0       0       1
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス, Device 列は SCSI デバイスになります。

12. 次のコマンドを実行して, md デバイスを非活性化します。

```
# mdadm -Ss /dev/md0
```

13. md デバイスが非活性化されていることを確認します。

md デバイスに RAID1 (ミラーリング) が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示されないことを確認してください。

14. コンフィグレーションファイルを編集します。

手順 11 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に, DEVICE 行の SCSI デバイス名を HDLM デバイス名に変更してください。

修正前

```
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1
```

修正後

```
DEVICE /dev/sddlmaa1 /dev/sddlmaab1
```

DEVICE 行を編集する場合は, デバイス名だけを変更してください。パーティション番号は変更しないでください。

15. HDLM デバイスのディスクパーティションタイプが fd の場合, タイプを 83 に変更してください。

fdisk コマンドを実行して, ディスクパーティションタイプを 83 に変更する例を次に示します。

```
# fdisk /dev/sddlmaa
```

コマンド (m でヘルプ): p

```
Disk /dev/sddlmaa: 5368 MB, 5368709120 bytes
166 heads, 62 sectors/track, 1018 cylinders
Units = シリンダ数 of 10292 * 512 = 5269504 bytes
デバイス Boot Start End Blocks Id System
/dev/sddlmaa1 1 1018 5238597 fd Linux raid 自動検出
```

コマンド (m でヘルプ): t

Selected partition 1

16 進数コード (L コマンドでコードリスト表示): 83

領域のシステムタイプを 1 から 83 (Linux) に変更しました

```
コマンド (m でヘルプ): p
Disk /dev/sddlmaa: 5368 MB, 5368709120 bytes
166 heads, 62 sectors/track, 1018 cylinders
Units = シリンダ数 of 10292 * 512 = 5269504 bytes
```

```
デバイス Boot Start End Blocks Id System
/dev/sddlmaa1 1 1018 5238597 83 Linux
```

```
コマンド (m でヘルプ): w
領域テーブルは交換されました！
```

ioctl() を呼び出して領域テーブルを再読み込みします。
ディスクを同期させます。

/dev/sddlmaab も同様に実行してください。

16. 次のコマンドを実行して、md デバイスを活性化します。

```
# mdadm -As /dev/md0
mdadm: /dev/md0 has been started with 2 drives.
```

17. md デバイスが活性化されていることを確認します。

md デバイスに RAID1 (ミラーリング) が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sddlmaa1[0] sddlmaab1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]

unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、HDLM デバイスが表示されていることを確認してください。

18. md デバイス上のファイルシステムをマウントする必要がある場合は、ファイルシステムをマウントします。

19. LU パスを追加します。

該当 LU へのパスを接続してから、ホストを再起動してください。または、「4.6.4 HDLM デバイスの構成変更」の「(3) LU へのパスを追加する」を参照して、既存の LU へのパスを追加してください。

(2) md デバイスに MULTIPATH 機能を使用している場合

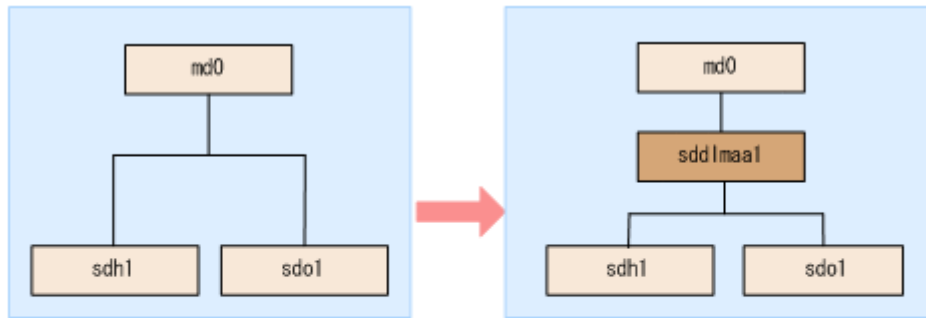
MULTIPATH 機能を使用した md デバイスの環境に、HDLM を適用する手順を説明します。HDLM を適用するためには、md デバイスの MULTIPATH 機能を解除する必要があります。ここでは、MULTIPATH 機能を使用した md デバイスから LINEAR 機能を使用した md デバイスに、移行する場合を例に説明します。

注意事項

Red Hat Enterprise Linux 6 は、MULTIPATH 機能を使用した md デバイスから LINEAR 機能を使用した md デバイスに移行できません。

次の手順では、/dev/sdo1 および/dev/sdh1 上の/dev/md0 を、/dev/sddlmaa1 上の/dev/md0 に移行しています。「[図 3-29 SCSI デバイス上にある md デバイス \(md デバイスの MULTIPATH 機能を使用した環境\) から HDLM デバイス上に移行した場合のデバイス構成](#)」に示す環境は、次の手順で構築してください。

図 3-29 SCSI デバイス上にある md デバイス (md デバイスの MULTIPATH 機能を使用した環境) から HDLM デバイス上に移行した場合のデバイス構成



(凡例)

- デバイスファイル
- 操作対象のデバイスファイル
- md0 : mdデバイス
- sddlmaa1 : HDLM デバイス
- sdh1, sdo1 : SCSI デバイス
- 移行操作

1. 既存の md デバイスを使用しているアプリケーションをすべて停止します。
2. 必要に応じて md デバイス上のアプリケーションのデータをバックアップします。
3. md デバイス上にファイルシステムをマウントしている場合は、アンマウントします。
4. md デバイスの状態を確認します。

次のコマンドを実行して、md デバイスの構成状態を確認します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [multipath]
md0 : active multipath sdo1[0] sdh1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]

unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、SCSI デバイスが表示されることを確認してください。「md0 : active」が表示されなかった場合は、md デバイスを活性化させてください。

5. md デバイスの設定をして、HDLM をインストールします。
「(1) md デバイスに MULTIPATH 機能を使用していない場合」の手順 5 から手順 10 を実行してください。
6. HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に -v パラメタを指定して確認してください。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management Device      Host Channel Target Lun
/dev/sddlmaa configured /dev/sdh      1          0          0  0
                /dev/sdo      2          0          0  1
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスになります。

7. md デバイスを作成します。
手順 6 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、md デバイスを作成してください。
デバイス名を指定する場合は、必ずパーティション番号も指定してください。パーティション番号は、手順 4 で表示されたデバイスのパーティション番号を設定してください。

```
# mdadm -C /dev/md0 -l linear -f -n1 /dev/sddlmaa1
mdadm: /dev/sddlmaa1 appears to contain an ext2fs file system
      size=5238528K mtime=Wed Feb  6 19:17:08 2008
```

```
mdadm: /dev/sddlmaa1 appears to be part of a raid array:
        level=-4 devices=2 ctime=Wed Feb  6 19:16:07 2008
Continue creating array? y
mdadm: array /dev/md0 started.
```

8. コンフィグレーションファイルを作成します。

次のコマンドを実行して、既存のコンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)に **md** デバイスの定義を追加してください。

```
# mdadm --detail --scan | grep -w "/dev/md0" >> /etc/mdadm.conf
```

コンフィグレーションファイルの作成例を次に示します。下線部の行がこの手順で追加した行です。

```
# cat /etc/mdadm.conf
DEVICE /dev/sdo1 /dev/sdh1
ARRAY /dev/md0 level=multipath num-devices=2 UUID=6b2ec21b:
06d0f50b:bbf04d32:1e00b09a auto=yes
ARRAY /dev/md0 level=linear num-devices=1 UUID=426a9f1c:
9cfa6310:6aa9a80b:11ea2102
```

コンフィグレーションファイルの記述内容については、Linux のマニュアルや man コマンドを参照してください。

9. コンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)を作成し直した場合、コンフィグレーションファイル内の不要な ARRAY 行を削除します。

手順 8 で作成した ARRAY 行と同じ **md** デバイス名(md0)の ARRAY 行を削除してください。次の例では、下線部の行が削除対象になります。

```
# cat /etc/mdadm.conf
DEVICE /dev/sdo1 /dev/sdh1
ARRAY /dev/md0 level=multipath num-devices=2 UUID=6b2ec21b:
06d0f50b:bbf04d32:1e00b09a auto=yes
ARRAY /dev/md0 level=linear num-devices=1 UUID=426a9f1c:
9cfa6310:6aa9a80b:11ea2102
```

10. /etc/mdadm.conf ファイルを編集して、コンフィグレーションファイルの ARRAY 行に「auto=yes」を追加します。

```
DEVICE /dev/sdo1 /dev/sdh1
ARRAY /dev/md0 level=linear num-devices=1 UUID=426a9f1c:
9cfa6310:6aa9a80b:11ea2102 auto=yes
```

11. コンフィグレーションファイルの DEVICE 行の SCSI デバイス名を HDLM デバイス名に変更します。

手順 6 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、DEVICE 行の SCSI デバイス名を HDLM デバイス名に変更してください。

修正前

```
DEVICE /dev/sdo1 /dev/sdh1
```

修正後

```
DEVICE /dev/sddlmaa1
```

DEVICE 行を編集する場合は、デバイス名だけを変更してください。パーティション番号は変更しないでください。

12. 次のコマンドを実行して、md デバイスを非活性化します。

```
# mdadm -Ss /dev/md0
```

13. md デバイスが非活性化されていることを確認します。

md デバイ스에 LINEAR 機能が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [linear] [multipath]※
unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示されないことを確認してください。

注※

[multipath]は再起動するまで表示されますが、動作に問題はありません。

14. md デバイスを活性化して、LU パスを追加します。

「(1) md デバイ스에 MULTIPATH 機能を使用していない場合」の手順 15 から手順 19 を実行してください。

また、「(1) md デバイ스에 MULTIPATH 機能を使用していない場合」の手順 17 で [multipath]は再起動するまで表示されますが、動作に問題はありません。

3.10 LVM2 の設定

ここでは、LVM2 の環境で次に示す項目を設定する場合の手順を説明します。

- HDLM デバイスを使用して新規に論理ボリュームを作成する場合
- シングルパス環境で SCSI デバイス上に作成済みの論理ボリュームを HDLM デバイスに移行する場合

HDLM を LVM2 の環境で使用する場合、HDLM デバイスを LVM2 の物理ボリュームとして使用します。

3.10.1 LVM2 を使用する場合の注意事項

LVM2 を使用する場合の注意事項を次に示します。

- HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用した場合は、LVM2 の物理ボリュームとして SCSI デバイスを使用できません。
- LVM2 の物理ボリュームとして SCSI デバイスと HDLM デバイスを同時に使用する場合は、HDLM の管理対象となる SCSI デバイスが LVM2 に認識されないように、`/etc/lvm/lvm.conf` を編集してください。

LVM2 の物理ボリュームとして、SCSI デバイス (`/dev/sda`) と HDLM デバイスを同時に使用する場合の編集例を次に示します。

```
filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "a|/dev/sda[1-9].*|", "r|/dev/sd|" ]
```

下線部は、LVM2 に認識させたい SCSI デバイスを表します。

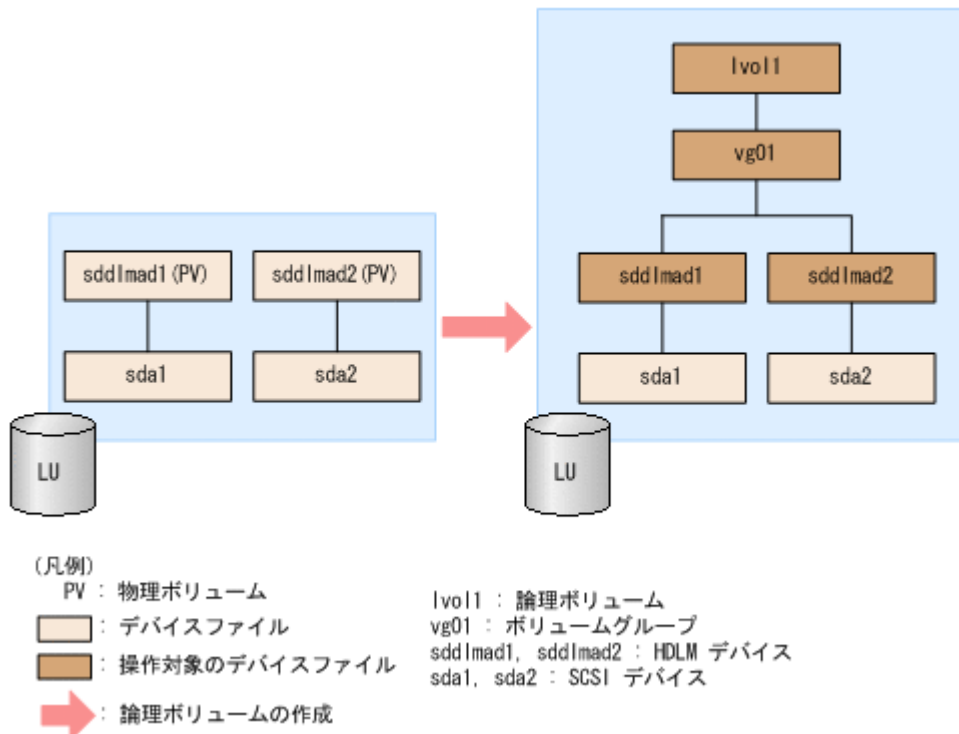
なお、この項ではすべての SCSI デバイスが LVM2 に認識されないように、`/etc/lvm/lvm.conf` の `filter` の記述を次のとおりにしています。

```
filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
```

3.10.2 HDLM デバイスを使用して新規に論理ボリュームを作成する

ここでは、新規に HDLM デバイスを使用して、論理ボリュームを作成する手順を説明します。「図 3-30 HDLM デバイス上に論理ボリュームを作成した場合のデバイス構成」に示す環境は、次の手順で構築してください。

図 3-30 HDLM デバイス上に論理ボリュームを作成した場合のデバイス構成



1. HDLM デバイスを使用しているプロセス、サービスなどをすべて停止します。
2. HDLM デバイス上にディスクパーティションを作成し、システム ID を「Linux」(16 進数で表記した場合、83) から「Linux LVM」(16 進数で表記した場合、8e) に変更します。
/dev/sddlmad (HDLM デバイス) に 2 つのパーティションを作成する場合の実行例を次に示します。

fdisk コマンドの実行例 (IA32)

```

# fdisk /dev/sdd1mad

Command (m for help): p

Disk /dev/sdd1mad: 255 heads, 63 sectors, 130 cylinders
Units = cylinders of 16065 * 512 bytes

Device Boot      Start   End  Blocks  Id System
/dev/sdd1mad1    1       65    522081   83  Linux
/dev/sdd1mad2    66      130    522112+  83  Linux

Command (m for help): t
Partition number (1-4): 1
Hex code (type L to list codes): 8e

Command (m for help): t
Partition number (1-4): 2
Hex code (type L to list codes): 8e

Command (m for help): p

Disk /dev/sdd1mad: 255 heads, 63 sectors, 130 cylinders
Units = cylinders of 16065 * 512 bytes

Device Boot      Start   End  Blocks  Id System
/dev/sdd1mad1    1       65    522081   8e  Linux LVM
/dev/sdd1mad2    66      130    522112+  8e  Linux LVM

Command (m for help): w
The partition table has been altered!

Calling ioctl() to re-read partition table.
Syncing disks.

```

parted コマンドの実行例 (IA32, IPF または EM64T/AMD64)

```

# parted /dev/sdd1mad
GNU Parted 1.6.15
Copyright (C) 1998 - 2004 Free Software Foundation, Inc.
This program is free software, covered by the GNU General Public License.

This program is distributed in the hope that it will be useful, but WITHOUT ANY WARRANTY;
without even the implied warranty of MERCHANTABILITY
or FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. See the GNU General Public License for more details.

Using /dev/sdd1mad
(parted) p
Disk geometry for /dev/sdd1mad: 0.000-1025.000 megabytes
Disk label type: msdos
Minor  Start   End     Type    Filesystem  Flags
(parted) mkpart primary 1 500
(parted) mkpart primary 501 1000
(parted) p
Disk geometry for /dev/sdd1mad: 0.000-1025.000 megabytes
Disk label type: msdos
Minor  Start   End     Type    Filesystem  Flags
1      1.000  500.000 primary  ext2        type=83
2      501.000 1000.000 primary  ext2        type=83
(parted) mkfs 1 ext2
(parted) mkfs 2 ext2
(parted) p
Disk geometry for /dev/sdd1mad: 0.000-1025.000 megabytes
Disk label type: msdos
Minor  Start   End     Type    Filesystem  Flags
1      1.000  500.000 primary  ext2        lvm, type=83
2      501.000 1000.000 primary  ext2        lvm, type=83
(parted) set 1 lvm on
(parted) set 2 lvm on
(parted) p
Disk geometry for /dev/sdd1mad: 0.000-1025.000 megabytes
Disk label type: msdos
Minor  Start   End     Type    Filesystem  Flags
1      1.000  500.000 primary  ext2        lvm, type=8e
2      501.000 1000.000 primary  ext2        lvm, type=8e
(parted)q

# blockdev --rereadpt /dev/sdd1mad

```

parted コマンドでパーティションを変更する場合には、HDLM デバイス上のパーティションを認識させるために、parted コマンドの実行後に blockdev コマンドを実行してください。

3. /etc/lvm/lvm.conf ファイルを編集します。

SCSI デバイスの構成を無効にして HDLM デバイスの構成を有効にするために、ファイル中のデバイスセクションに対して次の編集を行います。

- filter エントリ情報の追加と削除

次に示す行を追加し、ほかのすべての filter エントリ情報をコメントアウトします。

```
filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
```

- types エントリ情報の追加

次に示す行を追加します。

```
types = [ "sddlmfdrv", 16 ]
```

このとき、types=["fd", 16]がコメントアウトされていることを確認します。

OS が SUSE LINUX Enterprise Server 11 の場合の編集例を次に示します。網掛けの部分が編集箇所です。

図 3-31 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例

```
# This section allows you to configure which block devices should
# be used by the LVM system.
devices {

    # Where do you want your volume groups to appear ?
    dir = "/dev"

    # An array of directories that contain the device nodes you wish
    # to use with LVM2.
    scan = [ "/dev" ]

    # A filter that tells LVM2 to only use a restricted set of devices.
    # The filter consists of an array of regular expressions. These
    # expressions can be delimited by a character of your choice, and
    # prefixed with either an 'a' (for accept) or 'r' (for reject).
    # The first expression found to match a device name determines if
    # the device will be accepted or rejected (ignored). Devices that
    # don't match any patterns are accepted.

    # Remember to run vgscan after you change this parameter to ensure
    # that the cache file gets regenerated (see below).

    # By default we accept every block device except udev names:
    # filter = [ "r|/dev/.*/by-path/.*/", "r|/dev/.*/by-id/.*/", "a/.*/" ]
    filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]

    cache = "/etc/lvm/.cache"

    # You can turn off writing this cache file by setting this to 0.
    write_cache_state = 1

    # Advanced settings.

    # List of pairs of additional acceptable block device types found
    # in /proc/devices with maximum (non-zero) number of partitions.
    # types = [ "fd", 16 ]
    types = [ "sddlmfdrv", 16 ]

    # the block devices it believes are valid.
    # 1 enables; 0 disables.
    sysfs_scan = 1

    # By default, LVM2 will ignore devices used as components of
    # software RAID (md) devices by looking for md superblocks.
    # 1 enables; 0 disables.
    md_component_detection=0
}
```

4. 物理ボリュームを作成します。

/dev/sddlmd1 および/dev/sddlmd2 を物理ボリュームとして定義する場合の実行例を次に示します。

```
# pvcreate /dev/sddlmd1
  Physical volume "/dev/sddlmd1" successfully created
# pvcreate /dev/sddlmd2
  Physical volume "/dev/sddlmd2" successfully created
```

5. ボリュームグループを作成します。

物理ボリュームである/dev/sddlmd1 および/dev/sddlmd2 を使用して、vg01 (ボリュームグループ) を作成する場合の実行例を次に示します。

```
# vgcreate vg01 /dev/sddlmd1 /dev/sddlmd2
  Volume group "vg01" successfully created
```

6. 論理ボリュームを作成します。

vg01 (ボリュームグループ) を使用して、論理ボリューム (lv01 : 100MB) を作成する場合の実行例を次に示します。

```
# lvcreate -L 100M -n lv01 vg01
  Logical volume "lv01" created
```

7. ファイルシステムを作成します。

mke2fs コマンドを使用して、lv01 (論理ボリューム) にファイルシステムを作成する場合の実行例を次に示します。

```
# mke2fs /dev/vg01/lv01
Filesystem label=
OS type: Linux
Block size=1024 (log=0)
Fragment size=1024 (log=0)
25688 inodes, 102400 blocks
5120 blocks (5.00%) reserved for the super user
First data block=1
13 block groups
8192 blocks per group, 8192 fragments per group
1976 inodes per group
Superblock backups stored on blocks:
    8193, 24577, 40961, 57345, 73729
```

```
Writing inode tables: done
```

```
Writing superblocks and filesystem accounting information: done
```

```
This filesystem will be automatically checked every 38 mounts or
180 days, whichever comes first. Use tune2fs -c or -i to override.
```

8. 論理ボリュームをマウントするディレクトリを作成します。

/mnt/lv01 ディレクトリを作成する実行例を、次に示します。

```
# mkdir /mnt/lv01
```

9. 論理ボリュームをマウントします。

/mnt/lv01 ディレクトリにマウントする実行例を、次に示します。

```
# mount /dev/vg01/lv01 /mnt/lv01
```

10. Red Hat Enterprise Linux 6 の場合は、ボリュームグループの情報を更新します。

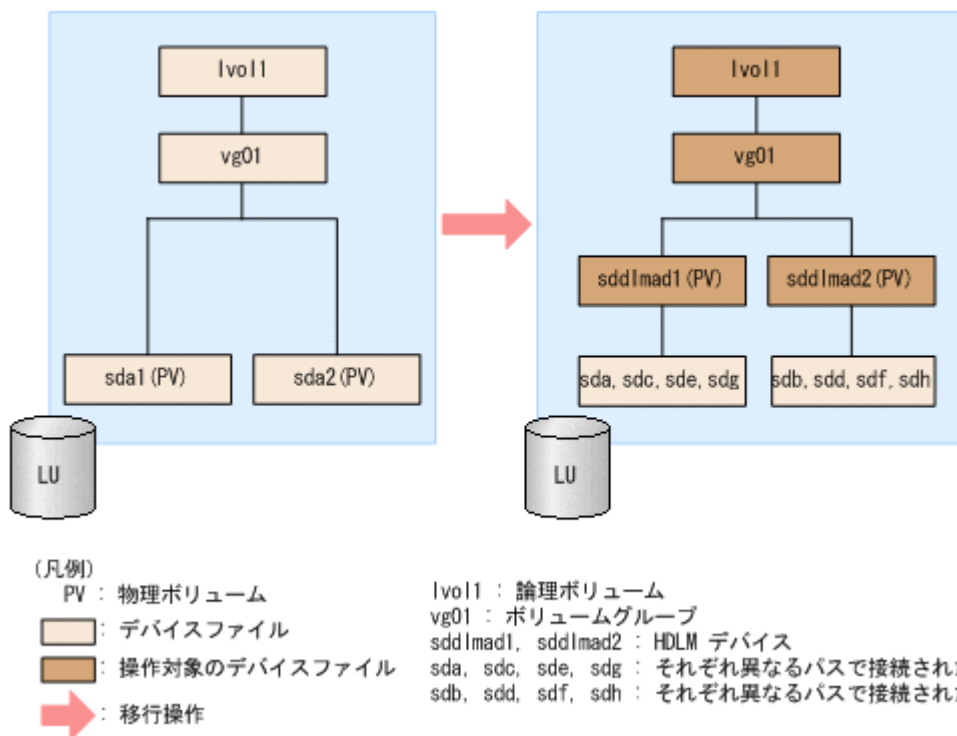
次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループの情報を更新します。

```
# vgs
  Reading all physical volumes.  This may take a while...
  Found volume group "VolGroup00" using metadata type lvm2
```


3.10.3 シングルパス環境で SCSI デバイス上に作成済みの論理ボリュームを HDLM デバイスに移行する場合

ここでは、シングルパス環境の場合に SCSI デバイス上にある論理ボリュームをマルチパス環境の HDLM デバイス上に移行する手順を説明します。「図 3-32 SCSI デバイス上にある論理ボリュームを HDLM デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (シングルパス環境の場合)」に示す環境は、次の手順で構築してください。

図 3-32 SCSI デバイス上にある論理ボリュームを HDLM デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (シングルパス環境の場合)



「図 3-32 SCSI デバイス上にある論理ボリュームを HDLM デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (シングルパス環境の場合)」の sdn は、それぞれ別の LU を示します。sddlmd1 と sddlmd2 はそれぞれの LU に対応する HDLM デバイスを示します。

1. HDLM がインストールされていることを確認します。

rpm コマンドを実行して、HDLM がインストールされていることを確認します。

```
# rpm -q HDLM
HDLM-x.x.x.x.xxx-x
```

2. シングルパス状態であることを確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に -v パラメータを指定して実行して、LU に対するパスがシングルパス状態であることを確認します。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management   Device      Host  Channel  Target  Lun
/dev/sddlmaa   configured   /dev/sda    2     0        0       0
/dev/sddlmaab configured   /dev/sdb    2     0        0       1
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

3. SCSI デバイスおよび HDLM デバイスを使用しているプロセス、サービスなどをすべて停止します。

4. 移行対象の論理ボリュームをアンマウントします。

論理ボリュームが /mnt/lv01 にマウントされている場合の実行例を次に示します。

```
# umount /mnt/lvol1
```

5. ボリュームグループを非活性化します。

移行対象の論理ボリュームが、**vg01**（ボリュームグループ）に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -an vg01
0 logical volume(s) in volume group "vg01" now active
```

6. ボリュームグループをエクスポートします。

vg01（ボリュームグループ）の情報をエクスポートする場合の実行例を次に示します。

```
# vgexport vg01
Volume group "vg01" successfully exported
```

7. `/etc/lvm/lvm.conf` ファイルを編集します。

SCSI デバイスの構成を無効にして HDLM デバイスの構成を有効にするために、ファイル中のデバイスセクションに対して次の編集を行います。

- `filter` エントリ情報の追加と削除

次に示す行を追加し、ほかのすべての `filter` エントリ情報をコメントアウトします。

```
filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
```

- `types` エントリ情報の追加

次に示す行を追加します。

```
types = [ "sddlmfdrv", 16 ]
```

このとき、`types=["fd", 16]`がコメントアウトされていることを確認します。

OS が SUSE LINUX Enterprise Server 11 の場合の編集例を次に示します。網掛けの部分が編集箇所です。

図 3-33 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例

```
# This section allows you to configure which block devices should
# be used by the LVM system.
devices [

    # Where do you want your volume groups to appear ?
    dir = "/dev"

    # An array of directories that contain the device nodes you wish
    # to use with LVM2.
    scan = [ "/dev" ]

    # A filter that tells LVM2 to only use a restricted set of devices.
    # The filter consists of an array of regular expressions. These
    # expressions can be delimited by a character of your choice, and
    # prefixed with either an 'a' (for accept) or 'r' (for reject).
    # The first expression found to match a device name determines if
    # the device will be accepted or rejected (ignored). Devices that
    # don't match any patterns are accepted.

    # Remember to run vgscan after you change this parameter to ensure
    # that the cache file gets regenerated (see below).

    # By default we accept every block device except udev names:
    # filter = [ "r|/dev/.*by-path/.*/", "r|/dev/.*by-id/.*/", "a/.*/" ]
    filter = [ "a|sddm[a-p][a-p].*/", "r|/dev/sd|" ]

    cache = "/etc/lvm/.cache"

    # You can turn off writing this cache file by setting this to 0.
    write_cache_state = 1

    # Advanced settings.

    # List of pairs of additional acceptable block device types found
    # in /proc/devices with maximum (non-zero) number of partitions.
    # types = [ "fd", 16 ]
    types = [ "sddmfdrv", 16 ]

    # the block devices it believes are valid.
    # 1 enables: 0 disables.
    sysfs_scan = 1

    # By default, LVM2 will ignore devices used as components of
    # software RAID (md) devices by looking for md superblocks.
    # 1 enables: 0 disables.
    md_component_detection=0
]
```

- VG スキャンを実行します。

HDLM デバイスでボリュームグループを再構築するために、vgscan コマンドを実行します。実行例を次に示します。

```
# vgscan
Reading all physical volumes. This may take a while...
Found exported volume group "vg01" using metadata type lvm2
```

- ボリュームグループをインポートします。

vg01 (ボリュームグループ) の情報をインポートする場合の実行例を次に示します。

```
# vgimport vg01
Volume group "vg01" successfully imported
```

- 移行が正常に終了したかどうかを pvscan コマンドを実行して確認します。

移行対象の論理ボリュームの物理ボリューム情報が HDLM デバイスになっていることを確認するために、次のコマンドを実行します。

```
# pvscan
PV /dev/sddlmd1   VG vg01   lvm2 [468.00 MB / 368.00 MB free]
PV /dev/sddlmd2   VG vg01   lvm2 [548.00 MB / 548.00 MB free]
Total: 2 [1016.00 MB] / in use: 2 [1016.00 MB] / in no VG: 0 [0 ]
```

- ボリュームグループを活性化します。

移行対象の論理ボリュームが、**vg01**（ボリュームグループ）に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -ay vg01
  1 logical volume(s) in volume group "vg01" now active
```

12. LU へパスを追加します。

「4.6.4 HDLM デバイスの構成変更」の「(3) LU へのパスを追加する」を参照して、既存の LU へのパスを追加します。

13. 移行対象の論理ボリュームをマウントします。

移行対象の論理ボリュームが `/dev/vg01/lvol1` で、これを `/mnt/lvol1` にマウントする場合の実行例を次に示します。

```
# mount /dev/vg01/lvol1 /mnt/lvol1
```

3.11 Xen の設定

Xen を使用している環境に HDLM をインストールした直後は、HDLM デバイスと対応している SCSI デバイスも、**domainU** 環境からアクセスできるようになっています。このため、直接 **domainU** 環境から SCSI デバイスにはアクセスできないよう設定しておく必要があります。

ここでは、**domainU** 環境内にシングルパスで接続されている SCSI デバイス「`/dev/sda`」を、マルチパスで接続した HDLM デバイス「`/dev/sddlmaa`」上に移行する手順を説明します。

1. HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (`d1mcfmgr`) に `-v` パラメータを指定して確認してください。

```
# /sbin/d1mcfmgr -v
HDevName      Management      Device           Host  Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured      /dev/sda         2     0       0       0
/dev/sddlmaB  configured      /dev/sdb         2     0       0       1
:
:
KAPL10302-I /sbin/d1mcfmgr completed normally.
#
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスになります。

2. SCSI デバイスを HDLM デバイスに移行できるか確認します。

次のコマンドを実行してください。

管理用 **domain** から **domU** の構成情報を確認する例

```
# /usr/sbin/xm list -l domU
:
:
(device
  (vbd
    (uuid 6b393aaa-89e7-44dc-7a57-24d477dee43d)
    (bootable 0)
    (driver paravirtualised)
    (dev sdx)
    (uname phy: /dev/sda)
    (mode w)
  )
)
:
:
```

`uname phy` の行に表示されている SCSI デバイスが、手順 1 で確認した SCSI デバイスである場合は、手順 3 に進んでください。手順 1 で確認した SCSI デバイスではない場合、HDLM デバイスに移行できません。

3. domainU が起動している場合は、domainU を停止します。
domain0 の起動にあわせて自動的に domainU が起動されるように設定している場合は、一時的に domainU が起動されないように設定を変更してください。
4. domainU で SCSI デバイスを使用しないように設定します。
ブロックデバイスの設定を domainU から解除してください。詳細は Linux のマニュアルを参照してください。
5. HDLM デバイスを domainU で使用するよう設定します。
ブロックデバイスを domainU に設定 (エクスポート) してください。詳細は Linux のマニュアルを参照してください。
手順 1 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に設定してください。
6. シングルパス構成からマルチパス構成に変更します。
7. domainU を起動します。
手順 3 で domainU の設定を自動的に起動しないように変更した場合は、元に戻してください。

3.12 KVM の設定

KVM を使用している環境に HDLM をインストールした場合、HDLM デバイスをハードウェア設定ファイル(/etc/libvirt/qemu/ドメイン名.xml)に登録する必要があります。ハードウェア設定ファイルについては OS のマニュアルを参照してください。

ここでは、virsh コマンドを使った手順を説明します。

1. 次のコマンドを実行して、ゲスト OS のドメイン名と動作環境を確認します。

```
# virsh list --all
 Id Name                               State
-----
 1  domK                               running
```

下線部がドメイン名です。

2. ゲスト OS が動作中の場合は、ゲスト OS を停止します。
ゲスト OS の停止方法については、OS のマニュアルを参照してください。
3. 新規に HDLM デバイスを登録する場合は、ハードウェア設定ファイルに HDLM デバイスを登録します。

HDLM デバイス(/dev/sddlmac)を、ゲスト OS に IDE デバイス(/dev/hdb)として登録する場合の例を次に示します。

```
<disk type='block' device='disk'>
  <source dev='/dev/sddlmac'/>
  <target dev='hdb' bus='ide'/>
</disk>
```

disk type, target dev, および target bus に指定できるその他の値については、OS のマニュアルを参照してください。

4. SCSI デバイスを使用した環境から HDLM デバイスを使用した環境に移行する場合は、ハードウェア設定ファイルに登録されている SCSI デバイスを HDLM デバイスに変更します。
SCSI デバイス(/dev/sda)から HDLM デバイス(/dev/sddlmac)に移行する場合のハードウェア設定ファイルの変更例を次に示します。

変更前

```
<source dev='/dev/sda'/>
```

変更後

```
<source dev='/dev/sddlmd' />
```

SCSI デバイスに対応する HDLM デバイスは、「4.3.5 HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を確認する」を参照して確認してください。

5. 次のコマンドを実行して、ハードウェア設定ファイルの内容を有効にします。

```
# virsh define /etc/libvirt/qemu/domK.xml
```

6. ゲスト OS を起動します。

ゲスト OS の起動方法については、OS のマニュアルを参照してください。

3.13 CLUSTERPRO の設定

CLUSTERPRO を使用する場合に設定できる監視対象デバイスと監視方法の組み合わせを次の表に示します。

表 3-70 設定できる監視対象デバイスと監視方法の組み合わせ

監視対象デバイス	監視方法	設定手順の参照先
HDLM デバイス	ディスクモニタリソース	監視対象デバイスを HDLM デバイス、監視方法をディスクモニタリソースに設定する
ディスクハートビートで指定済みの RAW パーティション	RAW モニタリソース	監視対象デバイスをディスクハートビートで指定済みの RAW パーティション、監視方法を RAW モニタリソースに設定する

3.13.1 監視対象デバイスを HDLM デバイス、監視方法をディスクモニタリソースに設定する

監視対象デバイスを HDLM デバイス、監視方法をディスクモニタリソースに設定する場合は、次の手順を実行してください。

1. HDLM デバイスをディスクリソースとして定義し、クラスタ起動時にもう一方のノードで自動マウントさせます。
2. 手順 1 で定義したリソースを、ディスクモニタリソースで監視します。
 - ディスクモニタリソースの「監視対象デバイス名」に監視対象の HDLM デバイスを設定してください。
 - ディスクモニタリソースの監視方法は、CLUSTERPRO の種別に応じて次のとおり設定してください。
 - ・ CLUSTERPRO X 2.0/2.1 (2.1.4 を除く) の場合：「READ(O_DIRECT)」
 - ・ CLUSTERPRO X 2.1.4/3.0/3.1 (3.1.4 を除く) の場合：「TUR(legacy)」または「READ(O_DIRECT)」
 - ・ Red Hat Enterprise Linux 5 と CLUSTERPRO X 3.1.4 および Red Hat Enterprise Linux 6 と CLUSTERPRO X 3.0/3.1 を組み合わせて使用する場合：「READ(O_DIRECT)」
 - ・ Red Hat Enterprise Linux 6 と CLUSTERPRO X 3.1.4-1 または CLUSTERPRO X 3.1.8-1 を組み合わせて使用する場合：「TUR(generic)」
 - ・ 上記以外の CLUSTERPRO の場合：「TUR(legacy)」

3.13.2 監視対象デバイスをディスクハートビートで指定済みの RAW パーティション、監視方法を RAW モニタリソースに設定する

RAW モニタの監視対象デバイスには、ディスクハートビートとして指定していない HDLM デバイスを直接監視対象に設定できません。ディスクハートビートとして指定していない HDLM デバイスを、RAW モニタリソースを使用して監視する場合は、次の手順を実行してください。

1. ディスクハートビートに、HDLM デバイスを設定します。
2. 監視したい HDLM デバイスをディスクリソースとして登録します。
3. RAW モニタリソースのパラメタの「監視対象 RAW デバイス名」に、未定義の RAW デバイスをダミーとして設定します。

RAW モニタリソースのパラメタの「デバイス名」には、手順 1 でディスクハートビートとして指定した HDLM デバイスを設定してください。

なお、運用時の注意事項として、アクセス経路障害回復後、HDLM デバイスのパスの状態を Online にする場合は、監視対象に設定したディスクハートビート用 RAW パーティションに対する HDLM デバイスのパスの状態も必ず Online にしてください。

3.14 Heartbeat の設定

SUSE LINUX Enterprise Server で Heartbeat を使用している環境に HDLM をインストールした場合、ユーザが実行する必要がある手順を説明します。

Heartbeat の設定手順を、次に説明します。

1. Heartbeat のクラスタのサービスを停止します。
Heartbeat のサービスが起動している場合、次に示すコマンドを実行して停止してください。

```
# etc/init.d/heartbeat stop
```

2. Heartbeat が使用している SCSI デバイスを HDLM デバイスに移行します。
HDLM デバイスの下位の SCSI デバイスをファイルシステムリソースとして使用している場合、次に示すように編集してください。

```
# host1 172.26.4.321 Filesystem::/dev/sda::/mnt/point::ext3  
host1 172.26.4.321 Filesystem::/dev/sddlmaa::/mnt/point::ext3
```

ここでは、SCSI デバイスの `/dev/sda` が定義されている行をコメントアウトし、HDLM デバイスの `/dev/sddlmaa` を追加しています。

3. Heartbeat のクラスタのサービスを起動します。
次に示すコマンドを実行して起動してください。

```
# /etc/init.d/heartbeat start
```

3.15 Oracle RAC の設定

Oracle RAC を使用する場合は、注意事項を次に説明します。

- Oracle RAC 環境で Oracle Cluster file System を使用する場合は、`/etc/ocfs.conf` ファイル中のパラメタ「`comm_voting`」を「0」に設定してください。

- Oracle RAC 環境で Oracle Cluster file System 2 を使用する場合は、`/etc/sysconfig/o2cbf` ファイル中のパラメタ「O2CB_HEARTBEAT_THRESHOLD」を次の値に設定してください。
 - SANRISE2000 シリーズ, SANRISE9900V シリーズ, Hitachi USP シリーズ, Universal Storage Platform V/VM シリーズ, Virtual Storage Platform シリーズ, または HUS VM を使用している場合
(Oracle Cluster file System 2 へ接続するパス数×60 秒÷2) + 1
 - SANRISE9500V シリーズ, Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ, または HUS100 シリーズを使用している場合
(Oracle Cluster file System 2 へ接続するパス数×30 秒÷2) + 1
- ホストと Oracle RAC の投票ディスク (Voting Disk) を複数のパスで接続しているとき, それらのパスの一部で I/O タイムアウトが発生すると通常のパスと同様に HDLM はフェイルオーバー処理を実行します。
ただし, Oracle RAC の設定状態によっては, HDLM のフェイルオーバー処理が完了する前に Oracle RAC 側でノード障害が発生したと見なし, クラスタを再構成してしまうおそれがあります。
したがって, Oracle RAC の投票ディスクに接続したパスを HDLM が管理する場合, 使用している Oracle RAC のバージョンに応じて, 次に示す設定値を変更してください。
 - Oracle RAC 10g 10.1.0.3.0 以降, または Oracle RAC 11g を使用している場合
ストレージシステムの種別に応じて, 「MISSCOUNT」の値を変更してください。設定する値は, 次に示す表に従って計算してください。算出した値以上に変更してください。

表 3-71 「MISSCOUNT」の計算式

ストレージシステム種別	「MISSCOUNT」に設定する値の計算式
<ul style="list-style-type: none"> • SANRISE2000 シリーズ • SANRISE9900V シリーズ • Hitachi USP シリーズ • Universal Storage Platform V/VM シリーズ • Virtual Storage Platform シリーズ • HUS VM 	投票ディスクへ接続するパスの数×60 秒
<ul style="list-style-type: none"> • Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ • HUS100 シリーズ • SANRISE9500V シリーズ 	投票ディスクへ接続するパスの数×30 秒

- Oracle RAC 10g 10.2.0.2.0 以降, または Oracle RAC 11g を使用している場合
上記の「MISSCOUNT」の値の変更に加え, 「DISKTIMEOUT」の値も変更してください。「DISKTIMEOUT」に設定する値は, 「MISSCOUNT」の値の変更と同様, ストレージシステムの種別に応じて異なります。設定する値は, 次に示す表に従って計算してください。算出した値以上に変更してください。

表 3-72 「DISKTIMEOUT」の計算式

ストレージシステム種別	投票ディスクへ接続するパスの数	「DISKTIMEOUT」に設定する値の計算式
<ul style="list-style-type: none"> • SANRISE2000 シリーズ • SANRISE9900V シリーズ • Hitachi USP シリーズ • Universal Storage Platform V/VM シリーズ 	3 以下	「DISKTIMEOUT」の値を変更する必要はありません。
	4 以上	投票ディスクへ接続するパスの数×60 秒

ストレージシステム種別	投票ディスクへ接続するパスの数	「DISKTIMEOUT」に設定する値の計算式
<ul style="list-style-type: none"> Virtual Storage Platform シリーズ HUS VM 		
<ul style="list-style-type: none"> Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ HUS100 シリーズ SANRISE9500V シリーズ 	6 以下	「DISKTIMEOUT」の値を変更する必要はありません。
	7 以上	投票ディスクへ接続するパスの数×30 秒

「MISSCOUNT」および「DISKTIMEOUT」の変更方法については、Oracle サポートサービスを契約した会社へお問い合わせください。

なお、上記の構成から HDLM をアンインストールする場合、変更した「MISSCOUNT」や「DISKTIMEOUT」の設定値を元の値に戻す必要があるため、変更する前のそれぞれの設定値を控えておいてください。

- Oracle の `oracleasm` コマンドを HDLM デバイスに対して実行すると、KAPL05023-E のメッセージを `syslog` に出力する場合があります。

このエラーメッセージのあとに、次に示す `oracleasm` コマンド成功のメッセージを出力している場合は、HDLM の動作上の問題はありません。

```
oracleasm: succeeded
```

- Oracle RAC 10g または Oracle RAC 11g と HDLM を組み合わせて使用する場合は、Oracle RAC 10g または Oracle RAC 11g の ASMLib を使用するときは、ASMLib 構成ファイルの設定を変更する必要があります。

ASMLib をインストールしたあと、すべてのノードに対して次に示す操作を行ってください。

- 次に示すコマンドを実行し、ASMLib 構成ファイルを作成します。

- ASMLib のバージョンが 2.1.0 以降の場合
/usr/sbin/oracleasm configure
- ASMLib のバージョンが 2.1.0 より前の場合
/etc/init.d/oracleasm configure

- ASMLib 構成ファイル (`/etc/sysconfig/oracleasm`) を開きます。

- `ORACLEASM_SCANORDER` の行を、次のように変更します。

```
ORACLEASM_SCANORDER ="sddl"
```

HDLM デバイスに定義済みの ASM ディスクがすでに存在する場合は、この手順を実行したあとすべてのノードを再起動します。

この操作は、設定を有効にするために行います。

- Red Hat Enterprise Linux のバージョンによって次のように異なります。
 - Red Hat Enterprise Linux 6.0 / 6.1 / 6.2 で、Oracle RAC 11g Release 2 と HDLM を組み合わせて使用する場合は、ADVM および ACFS で作成した共有ファイルシステムを、アーカイブ REDO ログの領域として使用できます。ただし、PSU 11.2.0.3.3 以降が必要です。
 - Red Hat Enterprise Linux 6.0 / 6.1 / 6.2 以外で、Oracle RAC 11g Release 2 と HDLM を組み合わせて使用する場合は、ADVM および ACFS で作成した共有ファイルシステムを、アーカイブ REDO ログの領域として使用できません。

3.16 RHCM の設定

RHCM を使用している環境に HDLM をインストールした場合、ユーザが実行する必要がある手順を説明します。

注

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 の場合、RHCM を組み合わせた環境はサポートしていません。

3.16.1 RHCM を使用する場合の注意事項

RHCM を使用する場合の注意事項を次に説明します。

- クラスタサービスが使用する HDLM デバイスと Quorum が使用する HDLM デバイスは、同じ HDLM デバイスを使用してください。

3.16.2 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用している場合

RHCM の設定手順を、次に説明します。

- RHCM のクラスタのサービスを停止します。

RHCM のサービスが起動している場合、次に示すコマンドを実行して停止します。

```
# service rgmanager stop
# service cman stop
# service ccsd stop
```

- RHCM が使用している SCSI デバイスを HDLM デバイスに置き換えます。

HDLM デバイス (/dev/sddlmaa) の下位の SCSI デバイス (/dev/sda) を、/dev/raw/raw1 として使用している場合、次に示すように編集します。

```
# vi /etc/sysconfig/rawdevices
# /dev/raw/raw1 /dev/sda
/dev/raw/raw1 /dev/sddlmaa
```

/dev/sda をコメントアウトし、/dev/sddlmaa を追加しています。

- rawdevices サービスを再起動し、手順 2 の変更を有効にします。

次に示すコマンドを実行して再起動します。

```
# service rawdevices restart
```

- RHCM のクラスタのサービスを起動します。

次に示すコマンドを実行して起動します。

```
# service ccsd start
# service cman start
# service rgmanager start
```

3.16.3 Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合

RHCM の設定手順を、次に説明します。

- RHCM のクラスタのサービスを停止します。

RHCM のサービスが起動している場合、次に示すコマンドを実行して停止します。

```
# service rgmanager stop
# service cman stop
```

2. RHCM が使用している SCSI デバイスを HDLM デバイスに置き換えます。
HDLM デバイス (/dev/sddlmaa) の下位の SCSI デバイス (/dev/sda) を、/dev/raw/raw1 として使用している場合、次に示すように編集します。

```
# vi /etc/udev/rules.d/60-raw.rules
# ACTION=="add", KERNEL=="sda", RUN+="/bin/raw /dev/raw/raw1 %N"
ACTION=="add", KERNEL=="sddlmaa", RUN+="/bin/raw /dev/raw/raw1 %N"
```

KERNEL=="sda"をコメントアウトし、KERNEL=="sddlmaa"を追加しています。

3. ホストを再起動する場合は、手順 4 に進んでください。ホストを再起動しない場合は、手順 5 以降に進んでください。
4. ホストを再起動し、手順 2 の変更を有効にします。
次に示すコマンドを実行して再起動します。

```
# shutdown -r now
```

以上で RHCM の設定は終了です。

5. 次に示すコマンドを実行して、手順 2 の変更を有効にします。

```
# /sbin/start_udev
```

6. RHCM のクラスタのサービスを起動します。
次に示すコマンドを実行して起動します。

```
# service cman start
# service rgmanager start
```

3.17 VCS の設定

VCS を使用している環境に HDLM をインストールした場合、ユーザが実行する必要のある手順を説明します。なお、VCS の GUI からの操作については、VCS のマニュアルを参照してください。

1. VCS のクラスタのサービスを停止します。
2. VCS が使用している SCSI デバイスを HDLM デバイスに置き換えます。
Mount リソースの Block Devices パラメタを、SCSI デバイスから HDLM デバイスに変更します。
3. VCS のクラスタのサービスを起動します。

3.18 パス構成の確認

ロードバランスやフェイルオーバーなどの HDLM の機能は、1 つの HDLM 管理対象デバイスに対して複数の稼働状態のパスがあるときにだけ使用できます。HDLM のインストール後、およびハードウェア構成の変更後には、パスの構成や状態を確認してください。

パス情報は、HDLM コマンドの view オペレーションで確認できます。

パス情報を確認する手順について、次に説明します。view オペレーションの詳細については、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

-path パラメタを指定して出力した情報を確認する
次に示すコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path > リダイレクト先のファイル1
```

リダイレクト先のファイル 1 を開いて、次のことを確認します。

- パスがアクセスする LU があるか
パスは「PathName」で特定できます。パスがアクセスする LU は「DskName」と「iLU」の組み合わせで特定できます。
- パスはすべて Online 状態か
「PathStatus」が「Online」であることを確認してください。Online 状態ではないパスが存在する場合は、「Reduced」と表示されます。
- 同じ LU にアクセスするパスが経由する CHA ポート（「ChaPort」）と HBA ポート（「PathName」に表示されたホストポート番号およびバス番号）の組み合わせが異なっているか
「PathName」のうち、左端の番号がホストポート番号です。ホストポート番号の右側にあるピリオドから 2 番目のピリオドまでの番号が、バス番号です。
- 物理的な HBA のポートの数だけ、異なるホストポート番号/バス番号があるか

-drv パラメタを指定して出力した情報を確認する

次に示すコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv > リダイレクト先のファイル2
```

リダイレクト先のファイル 2 の「HDevName」と「Device」を参照して、SCSI デバイスに対応する HDLM デバイスが作成されていることを確認します。

3.19 HDLM の機能の設定

HDLM には、ロードバランス、自動フェイルバック、障害ログの採取、監査ログの採取などの機能があります。これらの機能は、HDLM コマンドの set オペレーションで設定できます。ここでは、それぞれの方法で HDLM の機能を設定する手順を説明します。

3.19.1 変更前の設定内容の確認

HDLM コマンドの view オペレーションを使って変更前の設定内容を確認する方法について説明します。

次のコマンドを実行して現在の設定内容を確認してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -sfunc
HDLM Version           : x.x.x-xx
Service Pack Version   :
Load Balance           : on(extended lio)
Support Cluster        :
Elog Level             : 3
Elog File Size(KB)     : 9900
Number Of Elog Files   : 2
Trace Level           : 0
Trace File Size(KB)    : 1000
Number Of Trace Files  : 4
Path Health Checking   : on(30)
Auto Failback          : off
Reservation Status     :
Intermittent Error Monitor : off
Dynamic I/O Path Control : off(10)
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

```
#
```

監査ログの現在の設定内容を確認する場合は、次のコマンドを実行してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -audlog
Audit Log                : off
Audit Log Category      : -
Audit Log Facility      : -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
#
```

3.19.2 機能の設定

HDLM で設定できる各機能について次の表にまとめています。各機能の詳細は「(1) ロードバラン
スの設定」以降を参照してください。

各機能の設定値には、デフォルト値と推奨値があります。HDLM コマンドの set オペレーションで
機能を設定しない場合、機能の設定値にはデフォルト値が適用されます。推奨値は、機能を設定す
る場合の目安となる値です。

表 3-73 各機能のデフォルト値と推奨値

機能	デフォルト値	推奨値
ロードバランス	on アルゴリズムは拡張最少 I/O 数	on アルゴリズムの推奨値は運用環境に よって異なります。
バスヘルスチェック	on チェック間隔 30 (分)	on チェック間隔の推奨値は運用環境に よって異なります。
自動フェイルバック	off	off
間欠障害監視	off	off
ダイナミック I/O パスコント ロール※	off チェック間隔 10 (分)	off チェック間隔の推奨値は運用環境に よって異なります。
障害ログ採取レベル	3 : Information レベル以上の障害情報 を採取	3 : Information レベル以上の障害情 報を採取
トレースレベル	0 : トレースを出力しない	0 : トレースを出力しない
障害ログファイルサイズ	9900 (KB)	9900 (KB)
障害ログファイル数	2	2
トレースファイルサイズ	1000 (KB)	1000 (KB)
トレースファイル数	4	4
監査ログ採取	off	推奨値は運用環境によって異なりま す。 監査ログを採取したい場合「on」を 設定してください。
監査ログの Facility	user	local0~7

注※

ストレージシステムが Hitachi AMS2000 シリーズ, Hitachi SMS シリーズ, または HUS100
シリーズを使用している場合にだけ適用されます。

(1) ロードバランスの設定

ロードバランス機能を使用するかどうかを設定します。

ロードバランスを設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -lb on -lbtype exlio
```

ロードバランスを使用する場合は、「on」を、使用しない場合は「off」を指定します。「on」を指定した場合、-lbtype オプションのあとに、次に示すアルゴリズムを指定します。

- ラウンドロビンの場合は「rr」
- 拡張ラウンドロビンの場合は「exrr」
- 最少 I/O 数の場合は「lio」
- 拡張最少 I/O 数の場合は「exlio」
- 最少ブロック数の場合は「lbk」
- 拡張最少ブロック数の場合は「exlbk」

-lbtype で設定したアルゴリズムは、-lb off を指定してロードバランス機能を無効にしても、記憶されています。そのため、再度ロードバランス機能を有効にし、アルゴリズムを指定しなかった場合、記憶されているアルゴリズムでロードバランスが実行されます。

(2) パスヘルスチェックの設定

パスヘルスチェック機能を使用するかどうかを設定します。

パスヘルスチェックを設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -pchk on -intvl 10
```

パスヘルスチェックを使用する場合は、「on」を、使用しない場合は「off」を指定します。「on」を指定した場合、-intvl パラメータでチェック間隔を指定できます。チェック間隔を指定しない場合は、前回指定した設定値になります。例えば、チェック間隔を 15 分に設定して実行したあと、パスヘルスチェックに「off」を設定して実行します。このあと、再度チェック間隔を指定しないでパスヘルスチェックに「on」を設定して実行した場合、前回指定した設定値の 15 分を再び使用します。

(3) 自動フェイルバックの設定

自動フェイルバック機能を使用するかどうかを設定します。

間欠障害監視を使用して「障害発生回数」が「2」以上の場合、次の条件が満たされている必要があります。

間欠障害の障害監視時間 \geq
自動フェイルバックのチェック間隔 \times 間欠障害監視で指定する障害発生回数

この条件が満たされない場合はエラーとなり、KAPL01080-W のメッセージが表示されます。

エラーになった場合は、自動フェイルバックのチェック間隔、間欠障害の監視時間、または間欠障害監視で指定する障害発生回数のどれかを変更してください。障害発生回数に「1」を指定した場合、上記の条件を満たす必要はありません。

自動フェイルバックを設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -afb on -intvl 10
```

自動フェイルバックを使用する場合は「on」を、使用しない場合は「off」を指定します。「on」を指定した場合、-intvl パラメタでパスの状態をチェックする間隔を指定できます。チェック間隔を指定しない場合は、前回指定した設定値になります。例えば、チェック間隔を5分に設定して実行したあと、自動フェイルバックに「off」を設定して実行します。このあと、再度チェック間隔を指定しないで自動フェイルバックに「on」を設定して実行した場合、前回指定した設定値の5分を再び使用します。

(4) 間欠障害監視の設定

間欠障害監視は、自動フェイルバック機能を使用しているときだけ設定できます。間欠障害が発生したときの I/O 性能の低下を防ぐため、自動フェイルバックを使用する場合は、間欠障害を監視することをお勧めします。

間欠障害監視を使用した場合、「障害監視時間」および「障害発生回数」で、間欠障害と見なす条件を指定できます。障害監視時間のデフォルト値は「30」、障害発生回数のデフォルト値は「3」です。

間欠障害の監視が開始されてから指定した時間（分）が経過するまでの間に、指定した回数の障害が発生した場合に、該当するパスに間欠障害が発生していると見なします。間欠障害が発生していると見なされたパスは、自動フェイルバックの対象外になります。なお、間欠障害の監視は、自動フェイルバックによってパスが障害から回復した時点で開始されます。監視は、パスごとに実施されます。

「障害発生回数」に「2」以上の値を指定した場合、「(3) 自動フェイルバックの設定」に示す条件が満たされている必要があるので、参照してください。

パスが間欠障害と見なされているかどうかは、HDLM コマンドの view オペレーションの実行結果で確認できます。

間欠障害監視を設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -iem on -intvl 20 -iemnum 2
```

間欠障害を監視する場合は「on」を、監視しない場合は「off」を指定します。「on」を指定した場合、-intvl パラメタおよび-iemnum パラメタで、間欠障害と見なす条件を指定できます。-intvl パラメタでは障害監視時間を、-iemnum パラメタでは障害発生回数を指定します。条件の指定を省略すると、30分以内に3回以上障害が発生した場合に間欠障害と見なします。

(5) ダイナミック I/O パスコントロールの設定

I/O 性能の低下を防ぐため、ストレージシステム側で行われるコントローラ切り替えに追従して、HDLM の出力先コントローラを動的に切り替えます。

ダイナミック I/O パスコントロール機能はストレージシステム単位または LU 単位に設定できます。また、ストレージシステム側で行われるコントローラ切り替えを追従するに当たり、切り替え情報を見直すチェック間隔も設定できます。

ダイナミック I/O パスコントロール機能を設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -dpc on -pathid 000001 -lu  
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -dpcintvl 10
```

ダイナミック I/O パスコントロール機能を有効にする場合は「on」を、無効にする場合は「off」を指定します。-pathid パラメタでは LU または、ストレージシステムに接続されているパス ID を指定します。-dpcintvl パラメタでは、ストレージシステム側で行われるコントローラ切り替え情報を見直すチェック間隔を、分単位で指定します。

(6) 障害ログ採取レベルの設定

障害ログ（HDLM マネージャのログ（dlmmgr[1-16].log））を採取するレベルを設定します。

障害ログ採取レベルの設定値とその説明を次の表に示します。

表 3-74 障害ログ採取レベルの設定値

設定値	説明
0	障害ログを採取しません。
1	Error レベル以上の障害情報を採取します。
2	Warning レベル以上の障害情報を採取します。
3	Information レベル以上の障害情報を採取します。
4	Information レベル（保守情報も含む）以上の障害情報を採取します。

障害が発生したときは、障害ログ採取レベルに「1」以上を設定してログを採取します。設定値が大きいかほど出力される情報量が多くなります。ログの出力量が多いと、古い障害ログファイルが新しい情報で上書きされるまでの時間が短くなります。

障害ログ採取レベルを設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -ellv 2
```

障害ログを採取するレベルを数字で指定します。

(7) トレースレベルの設定

トレースを出力するレベルを設定します。

トレースレベルを設定できるトレースファイルは、hdlmtr[1-64].log です。

トレースレベルの設定値とその説明を次の表に示します。

表 3-75 トレースレベルの設定値

設定値	説明
0	トレースを出力しません。
1	エラー情報だけ出力します。
2	プログラムの動作概略を出力します。
3	プログラムの動作詳細を出力します。
4	すべての情報を出力します。

障害が発生したときは、トレースレベルに「1」以上を設定してトレース情報を採取します。設定値が大きいかほど出力される情報量が多くなります。トレース情報の出力量が多いと、古いトレースファイルが新しい情報で上書きされるまでの時間が短くなります。

通常の運用では、トレースレベルに「0」を設定することを推奨します。必要以上にトレースレベルの設定値を大きくすると、HDLM の処理性能が低下したり、障害の要因分析に必要なトレース情報が上書きされたりするおそれがあります。

トレースレベルを設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -systflv 1
```

トレースの出力レベルを数字で指定します。

(8) 障害ログファイルサイズの設定

障害ログファイル (HDLM マネージャのログ (dlmmgr[1-16].log)) のサイズを設定します。

障害ログファイルサイズには、キロバイト単位で 100~2000000 の値を指定します。HDLM マネージャのログには指定値が反映されます。

障害ログファイルが設定サイズに達すると、最も古い障害ログファイルから順に新しいログ情報が上書きされます。障害ログファイル数の指定と合わせて、採取できる障害ログの合計サイズの最大値は 32000000KB (約 30GB) です。

障害ログファイルサイズを設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -elfs 1000
```

障害ログファイルのサイズを、キロバイト単位で指定します。

(9) 障害ログファイル数の設定

障害ログ (HDLM マネージャのログ (dlmmgr[1-16].log)) のファイル数を設定します。

障害ログファイル数 (HDLM マネージャのログファイル数) には、2~16 の値を指定します。障害ログファイルサイズの指定と合わせて、採取できる障害ログの合計サイズの最大値は 32000000KB (約 30GB) です。

障害ログファイル数を設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -elfn 5
```

障害ログファイルの数を数字で指定します。

(10) トレースファイルサイズの設定

トレースファイルのサイズを設定します。

ファイルサイズを設定できるトレースファイルは、hdlmtr[1-64].log です。トレースファイルは固定長です。したがって、書き込まれるトレース情報が設定したファイルサイズに満たない場合でも、出力されるトレースファイル1つ当たりのファイルサイズは常に固定です。

トレースファイルサイズには、キロバイト単位で 100~16000 の値を指定します。設定されている値よりも小さい値を指定した場合、実行を確認する KAPL01097-W のメッセージが表示されてトレースファイルはいったん削除されます。すべてのトレースファイルにトレースが書き込まれると、最も古いトレースファイルに新しいトレースが上書きされます。

トレースファイル数の指定と合わせて、採取できるトレースの合計サイズの最大値は 1024000KB です。

トレースファイルサイズを設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -systfs 2000
```

トレースファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。

(11) トレースファイル数の設定

トレースファイルの数を設定します。

ファイル数を設定できるトレースファイルは、hdlmtr[1-64].log です。

トレースファイル数には、2～64 の値を指定します。設定されている値よりも小さい値を指定した場合、実行を確認する KAPL01097-W のメッセージが表示されてトレースファイルはいったん削除されます。

トレースファイルサイズの指定と合わせて、採取できるトレースの合計サイズの最大値は 1024000KB です。

トレースファイル数を設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -systfn 10
```

トレースファイルの数を数字で指定します。

(12) 監査ログ採取の設定

監査ログを採取するかどうか設定します。

監査ログを採取する場合には、監査ログ採取レベルおよび監査ログ種別を設定します。

監査ログの採取レベルの設定値とその説明を次の表に示します。監査ログ採取レベルは重要度 (Severity) で設定します。デフォルトの設定値は「6」です。

表 3-76 監査ログ採取レベルの設定値

設定値 (重要度)	説明
0	監査ログを採取しません。
1	
2	Critical レベルの監査ログを採取します。
3	Critical, および Error レベルの監査ログを採取します。
4	Critical, Error, および Warning レベルの監査ログを採取します。
5	
6	Critical, Error, Warning, および Informational レベルの監査ログを採取します。
7	

監査ログ種別の設定値とその説明を次の表に示します。デフォルトの設定値は「all」です。

表 3-77 監査ログ種別の設定値

設定値	説明
ss	StartStop の監査ログ事象を採取します。
a	Authentication の監査ログ事象を採取します。
ca	ConfigurationAccess の監査ログ事象を採取します。
all	StartStop, Authentication, および ConfigurationAccess の監査ログ事象を採取します。

監査ログ採取を設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -audlog on -audlv 6 -category all
```

監査ログを採取する場合は「on」を、採取しない場合は「off」を指定します。「on」を指定した場合、-audlv パラメタで監査ログ採取レベルを、-category パラメタで監査ログ種別を指定できます。

監査ログの Facility を設定する場合は、「(13) 監査ログの Facility の設定」を参照してください。

(13) 監査ログの Facility の設定

監査ログの出力先を指定する場合、次の設定を行います。

監査ログの Facility を `dlnkmgr set -audfac` で指定し、その Facility の出力先を `/etc/syslog.conf` ファイルで定義することで、監査ログだけを指定のディレクトリに出力できます。監査ログの Facility の設定値を次の表に示します。デフォルトの設定値は「user」です。

表 3-78 監査ログの Facility の設定値

設定値	/etc/syslog.conf ファイルでの対応する Facility 値
user または 1	user
local0 または 16	local0
local1 または 17	local1
local2 または 18	local2
local3 または 19	local3
local4 または 20	local4
local5 または 21	local5
local6 または 22	local6
local7 または 23	local7

監査ログの Facility を設定する例を、次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -audfac local0
```

3.19.3 変更後の設定の確認

HDLM コマンドの `set` オペレーションを使って設定した内容を確認する方法について説明します。

変更後の HDLM の機能設定情報を表示します。実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -sfunc
HDLM Version           : x.x.x-xx
Service Pack Version   :
Load Balance           : on(extended lio)
Support Cluster        :
Elog Level             : 2
Elog File Size(KB)     : 1000
Number Of Elog Files   : 5
Trace Level           : 1
Trace File Size(KB)    : 2000
Number Of Trace Files  : 10
Path Health Checking   : on(10)
Auto Failback          : on(10)
Reservation Status     :
Intermittent Error Monitor : on(2/20)
Dynamic I/O Path Control : off(10)
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

監査ログ採取を設定した場合は、次のコマンドで確認してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -audlog
Audit Log              : on(6)
Audit Log Category     : all
Audit Log Facility     : local0
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

3.20 プロセス別トレース情報ファイル

HDLM を使用している場合、HDLM コマンドの動作ログは、Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2) のプロセス別トレース (マルチプロセス対応トレース) 情報ファイル (/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlnkmgrn.log (n はファイルの番号)) に出力されます。

プロセス別トレース情報ファイルの設定値を次の表に示します。

表 3-79 プロセス別トレース情報ファイルの設定値

設定	設定値※
プロセス別トレース情報ファイルのサイズ	2048 (KB)
プロセス別トレース情報ファイルの数	2

注※

設定値は変更できません。

3.20.1 Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリを使用する場合の注意事項

Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリを使用する場合の注意事項について、次に説明します。

- HDLM をアンインストールしようとした際に、ほかの日立製品が HNTRLib2 を使用していた場合は、HNTRLib2 はアンインストールされません。

3.21 HDLM デバイスのキャラクタ型デバイスファイルの作成

HDLM デバイスのキャラクタ型デバイスファイルの作成について説明します。

- HDLM は、ブロック型デバイスだけを /dev 以下に作成します。
- Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合は、udev ルールファイルを使用して作成します。Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または SUSE LINUX Enterprise Server の場合は、raw コマンドを使用して作成します。
raw コマンドを使用した作成方法と、udev ルールファイルを使用した作成方法の違いを次に示します。
 - raw コマンドを使用して作成したキャラクタ型デバイスファイルは、ホストを再起動すると削除されます。
 - udev ルールファイルを使用して作成したキャラクタ型デバイスファイルは、ホストを再起動しても削除されません。

3.21.1 Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合

udev ルールファイルを使用して、キャラクタ型デバイスファイルを作成します。

udev ルールファイルを使用して、キャラクタ型デバイスファイルを作成する手順を次に示します。

1. /etc/udev/rules.d/60-raw.rules ファイルを編集します。
/etc/udev/rules.d/60-raw.rules ファイルの編集例を次に示します。

```
ACTION=="add", KERNEL=="sddlmaa", RUN+="/bin/raw /dev/raw/raw1 %N"
```

2. ホストを再起動、または start_udev コマンドを実行します。
ホストを再起動、または start_udev コマンドを実行することによって、手順 1 の指定が有効になります。

start_udev コマンドの実行例を次に示します。

```
# /sbin/start_udev
```

3.21.2 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合

キャラクタ型デバイスファイルを作成する場合、Linux の raw コマンドを使用して HDLM デバイスから作成します。HDLM デバイスに対して、raw コマンドを実行する例を次に示します。

図 3-34 raw コマンドの実行例

```
# raw /dev/raw/raw1 /dev/sddlmaa  
/dev/raw/raw1: bound to major 253, minor 0
```

ここでは、コマンドの実行によって、/dev/raw/raw1 が /dev/sddlmaa (メジャー番号が 253、マイナー番号が 0) 用のキャラクタ型デバイスファイルとして作成されました。

3.22 ファイルシステムの構築（ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場合）

ボリューム管理ソフトウェアを使用しないで、HDLM 管理対象デバイスにファイルシステムを構築する方法について説明します。

3.22.1 ファイルシステムのマウント

HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を指定して HDLM 管理対象のデバイスをファイルシステムとしてマウントする手順を説明します。

1. HDLM デバイスを使用してファイルシステムを作成します。
すでにファイルシステムを作成してある場合、手順 2 に進んでください。
なお、HDLM がサポートするファイルシステムは、ext2, ext3, GFS2, ReiserFS, VxFS, および xfs です。ファイルシステムの作成例については、「3.22.2 ファイルシステムの作成例」を参照してください。
2. ファイルシステムをマウントするディレクトリを作成します。コマンドの実行例を次に示します。

```
# mkdir /mnt/hdlm
```

ここでは、マウントポイントに使用する /mnt/hdlm を作成しました。

3. ファイルシステムをマウントします。
実行するコマンドの例を次に示します。

```
# mount /dev/sddlmaa /mnt/hdlm
```

ここでは、/dev/sddlmaa (HDLM デバイスの論理デバイスファイル名) を/mnt/hdlm にマウントしました。

3.22.2 ファイルシステムの作成例

HDLM がサポートするファイルシステムは、ext2, ext3, GFS2, ReiserFS, VxFS, および xfs です。ここでは、/dev/sddlmaa1 に ext2 ファイルシステムを作成する場合の例を次に示します。

図 3-35 ext2 ファイルシステムの作成例

```
# mkfs -t ext2 /dev/sddlmaa1
mke2fs 1.26 (3-Feb-2002)
warning: 184 blocks unused.

Filesystem label=
OS type: Linux
Block size=1024 (log=0)
Fragment size=1024 (log=0)
100744 inodes, 401409 blocks
20079 blocks (5.00%) reserved for the super user
First data block=1
49 block groups
8192 blocks per group, 8192 fragments per group
2056 inodes per group
Superblock backups stored on blocks:
    8193, 24577, 40961, 57345, 73729, 204801, 221185

Writing inode tables: done
Writing superblocks and filesystem accounting information: done

This filesystem will be automatically checked every 39 mounts or
180 days, whichever comes first. Use tune2fs -c or -i to override.
```

3.23 自動マウントの設定

ホストの起動時に、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を指定することで、SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を指定することと同じように、HDLM 管理対象のデバイスを自動マウントします。自動マウントを設定する/etc/fstab ファイルには、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名とマウントポイントを指定できます。このファイルを編集することによって、Linux の起動時に、指定した HDLM 管理対象のデバイスを自動マウントできます。なお、SCSI デバイスに対して LABEL=を付ける Linux の機能は、HDLM ではサポートしていません。この機能は、使用しないでください。

HDLM を使用するために必要な作業を、次に説明します。

3.23.1 新規に HDLM デバイスを設定する場合

新規に HDLM デバイスを設定して HDLM 管理対象のデバイスを自動マウントする場合の方法を説明します。

1. 自動マウントする HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を特定します。

HDLM コマンドの view オペレーションを実行して、該当する HDLM デバイスの論理デバイスファイル名、および該当する SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を特定します。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。実行例を次に示します。

図 3-36 HDLM コマンドの view オペレーション (-drv 指定) の実行例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkgr view -drv
PathID HDevName      Device           LDEV
000000 sddlmaa        /dev/sda         SANRISE 9900V.15001.05B7
000001 sddlmaa        /dev/sdq         SANRISE 9900V.15001.05B7
000002 sddlmac        /dev/sdr         SANRISE 9900V.15001.05B0
000003 sddlmac        /dev/sds         SANRISE 9900V.15001.05B1
000004 sddlmac        /dev/sdt         SANRISE 9900V.15001.05B2
          :
000025 sddlmac        /dev/sdj         SANRISE 9900V.15001.05B0
000026 sddlmac        /dev/sdk         SANRISE 9900V.15001.05B1
000027 sddlmac        /dev/sdl         SANRISE 9900V.15001.05B2
000028 sddlmae        /dev/sdm         SANRISE 9900V.15001.05B3
000029 sddlmaf        /dev/sdn         SANRISE 9900V.15001.05B4
000030 sddlmag        /dev/sdo         SANRISE 9900V.15001.05B5
000031 sddlmah        /dev/sdp         SANRISE 9900V.15001.05B6
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

実行例では、/dev/sda に対応する HDLM デバイスの論理デバイスファイル名は、sddlmaa だと特定できます。

2. /etc/fstab ファイルに、手順 1 で調べた HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を追加します。

/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

- FC-SAN 環境の場合

```
/dev/sddlmaa /mnt/sda ext2 defaults 0 0
```

- IP-SAN 環境の場合

- OS が Red Hat Enterprise Linux 5.6, Red Hat Enterprise Linux 5.6 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.7, Red Hat Enterprise Linux 5.7 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.8, Red Hat Enterprise Linux 5.8 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.9, Red Hat Enterprise Linux 5.9 Advanced Platform, または Red Hat Enterprise Linux 6 のとき

```
/dev/sddlmaa /mnt/sda ext2 _netdev 0 0
```

- OS が SUSE LINUX Enterprise Server 11 のとき

```
/dev/sddlmaa /mnt/sda ext2 nofail 0 0
```

/dev/sddlmaa (HDLM デバイスの論理デバイスファイル名) を追加しています。IP-SAN 環境の場合は、マウントオプションに「_netdev」または「nofail」を指定してください。

3. ホストを再起動または手動でマウントします。

HDLM 管理対象のデバイスは、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名でマウントされます。

3.23.2 すでに SCSI デバイスを設定している環境から移行する場合

すでに設定されている SCSI デバイスを HDLM デバイスに移行する場合の方法を説明します。

1. 自動マウントする HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を特定します。

HDLM コマンドの view オペレーションを実行して、該当する HDLM デバイスの論理デバイスファイル名、および該当する SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を特定します。view

オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。実行例を次に示します。

図 3-37 HDLM コマンドの view オペレーション (-drv 指定) の実行例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv
PathID HDevName      Device          LDEV
000000 sddlmaa        /dev/sda       SANRISE 9900V.15001.05B7
000001 sddlmaa        /dev/sdq       SANRISE 9900V.15001.05B7
000002 sddlmaab       /dev/sdr       SANRISE 9900V.15001.05B0
000003 sddlmac        /dev/sds       SANRISE 9900V.15001.05B1
000004 sddlmad        /dev/sdt       SANRISE 9900V.15001.05B2
      ⋮
000025 sddlmaab       /dev/sdj       SANRISE 9900V.15001.05B0
000026 sddlmac        /dev/sdk       SANRISE 9900V.15001.05B1
000027 sddlmad        /dev/sdl       SANRISE 9900V.15001.05B2
000028 sddlmae        /dev/sdm       SANRISE 9900V.15001.05B3
000029 sddlmaf        /dev/sdn       SANRISE 9900V.15001.05B4
000030 sddlmag        /dev/sdo       SANRISE 9900V.15001.05B5
000031 sddlmah        /dev/sdp       SANRISE 9900V.15001.05B6
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view. 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

実行例では、/dev/sda に対応する HDLM デバイスの論理デバイスファイル名は、sddlmaa だと特定できます。

2. /etc/fstab ファイルに定義されている SCSI デバイスの論理デバイスファイル名を、手順 1 で調べた HDLM デバイスの論理デバイスファイル名に変更します。

/etc/fstab ファイルの編集例を次に示します。

- FC-SAN 環境の場合

```
# /dev/sda          /mnt/sda          ext2    defaults    0 0
/dev/sddlmaa       /mnt/sda          ext2    defaults    0 0
```

- IP-SAN 環境の場合

- OS が Red Hat Enterprise Linux 5.6, Red Hat Enterprise Linux 5.6 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.7, Red Hat Enterprise Linux 5.7 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.8, Red Hat Enterprise Linux 5.8 Advanced Platform, Red Hat Enterprise Linux 5.9, Red Hat Enterprise Linux 5.9 Advanced Platform, または Red Hat Enterprise Linux 6 のとき

```
# /dev/sda          /mnt/sda          ext2    _netdev     0 0
/dev/sddlmaa       /mnt/sda          ext2    _netdev     0 0
```

- OS が SUSE LINUX Enterprise Server 11 のとき

```
# /dev/sda          /mnt/sda          ext2    nofail      0 0
/dev/sddlmaa       /mnt/sda          ext2    nofail      0 0
```

/dev/sda (SCSI デバイスの論理デバイスファイル名) をコメントアウトし、/dev/sddlmaa (HDLM デバイスの論理デバイスファイル名) を追加しています。IP-SAN 環境の場合、マウントオプションに「_netdev」または「nofail」が指定されていないときは追加してください。

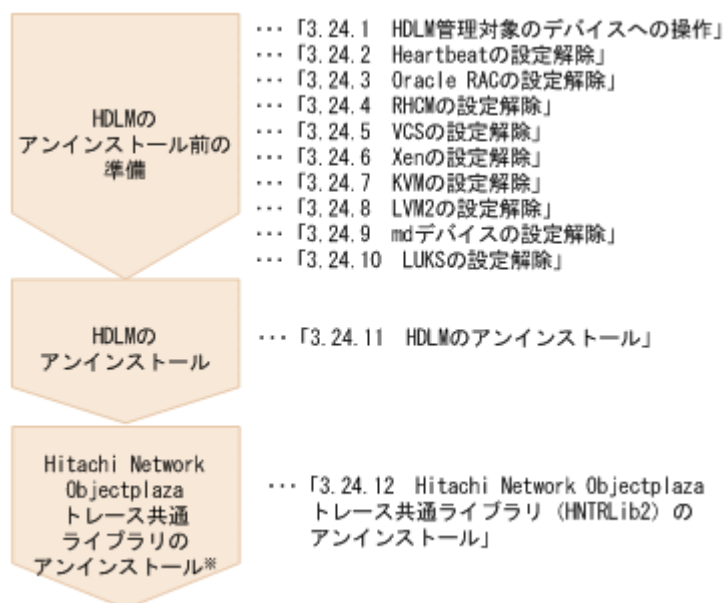
3. ホストを再起動または手動でマウントします。

HDLM 管理対象のデバイスは、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名でマウントされます。

3.24 HDLM の設定解除

「[図 3-38 HDLM の設定解除の流れ](#)」の流れに従って、HDLM を使用する環境を、HDLM を使用する前の環境に戻してください。

図 3-38 HDLM の設定解除の流れ



注※

必要に応じて行ってください。

3.24.1 HDLM 管理対象のデバイスへの操作

HDLM をアンインストールする前に実施する必要がある操作の手順を、次に説明します。

1. 必要に応じて、HDLM 管理対象のデバイスの内容をテープなどにバックアップします。
2. HDLM デバイスの論理デバイスファイル名およびストレージシステムの内部 LU 番号の対応情報を控えておきます。

これは、HDLM をアンインストール後に、SCSI デバイスの論理デバイスファイル名と LU の対応が付けられるようにするためです。

3. アプリケーションから HDLM デバイスの登録を解除します。

アプリケーションは、アクセス時に HDLM デバイスを使用しているため、アンインストール後に同じ HDLM デバイスを使用して該当する LU にアクセスできません。クラスタソフトウェアを含むアプリケーション（ボリューム管理ソフトウェア以外）のプログラムに HDLM 管理対象のデバイスを登録している場合、HDLM デバイスの登録を解除してください。

Heartbeat の設定を解除する手順については、「[3.24.2 Heartbeat の設定解除](#)」を参照してください。Oracle RAC の設定を解除する手順については、「[3.24.3 Oracle RAC の設定解除](#)」を参照してください。RHCM の設定を解除する手順については、「[3.24.4 RHCM の設定解除](#)」を参照してください。VCS の設定を解除する手順については、「[3.24.5 VCS の設定解除](#)」を参照してください。

4. Xen の設定を解除します。

HDLM デバイスを domainU で使用できないように設定します。

Xen の設定解除の手順については、「[3.24.6 Xen の設定解除](#)」を参照してください。

5. KVM の設定を解除します。

HDLM デバイスをハードウェア設定ファイルから削除します。

KVM の設定解除の手順については、「[3.24.7 KVM の設定解除](#)」を参照してください。

6. HDLM デバイスのマウントを解除します。

HDLM デバイスを指定して HDLM 管理対象のデバイスをマウントしている場合は、マウントを解除してください。また、ホストの起動時に自動でマウントする設定をしている場合は、`/etc/fstab` ファイルを編集してその設定を削除してください。

設定解除の方法については、「[3.6.1 HDLM を新規インストールする前の準備](#)」の「[\(1\) HDLM 管理対象予定のデバイスへの操作](#)」を参照してください。ただし、すでに定義されている HDLM デバイスを解除して SCSI デバイスを追加する手順で、実施してください。

7. ボリューム管理ソフトウェアから HDLM デバイスの登録を解除します。

HDLM デバイスをボリューム管理ソフトウェアに登録している場合は、登録を解除してください。

LVM の設定解除の手順については、「[3.24.8 LVM2 の設定解除](#)」を参照してください。

8. md デバイスを SCSI デバイスに移行します。

HDLM 管理対象デバイスを使って md デバイスを構築している場合は、HDLM 管理対象デバイスから SCSI デバイスに移行する必要があります。

md デバイスの設定解除の手順については、「[3.24.9 md デバイスの設定解除](#)」を参照してください。

9. LUKS の設定を解除します。

HDLM デバイスに LUKS が適用された環境から SCSI デバイスに移行します。

LUKS の設定解除の手順については、「[3.24.10 LUKS の設定解除](#)」を参照してください。

3.24.2 Heartbeat の設定解除

SUSE LINUX Enterprise Server で Heartbeat を使用している場合、HDLM デバイスの設定を heartbeat 上で解除する必要があります。

HDLM デバイスがすでに Heartbeat で使用されている環境から、SCSI デバイスのキャラクタ型デバイスを使用する環境に移行する手順を次に示します。

1. Heartbeat のクラスタのサービスを停止します。

Heartbeat のサービスが起動している場合、次に示すコマンドを実行して停止してください。

```
# etc/init.d/heartbeat stop
```

2. Heartbeat が使用している HDLM デバイスを SCSI デバイスに移行します。

HDLM デバイスの下位の SCSI デバイスをファイルシステムリソースとして使用する場合、次に示すように編集してください。

```
# host1 172.26.4.321 Filesystem::/dev/sddlmaa::/mnt/point::ext3
host1 172.26.4.321 Filesystem::/dev/sda::/mnt/point::ext3
```

ここでは、HDLM デバイスの `/dev/sddlmaa` をコメントアウトし、SCSI デバイスの `/dev/sda` を追加しています。

3. Heartbeat のクラスタのサービスを起動します。

次に示すコマンドを実行して起動してください。

```
# /etc/init.d/heartbeat start
```

3.24.3 Oracle RAC の設定解除

Oracle RAC を使用している環境で、HDLM のために設定した値を解除する場合の手順を説明します。

- Oracle RAC 10g の 10.1.0.3.0 以降のリリースを使用している場合は、投票ディスクの I/O タイムアウトのしきい値である「MISSCOUNT」を、HDLM をインストールする前の値に戻す必要があります。
「MISSCOUNT」を設定する方法については、Oracle サポートサービスを契約した会社へお問い合わせください。
- Oracle RAC 10g の 10.2.0.2.0 以降のリリースを使用している場合は、「DISKTIMEOUT」を、HDLM をインストールする前の値に戻す必要があります。
「DISKTIMEOUT」を設定する方法については、Oracle サポートサービスを契約した会社へお問い合わせください。

3.24.4 RHCM の設定解除

RHCM を使用している環境で、HDLM デバイスの設定を RHCM 上で解除する場合の手順を説明します。HDLM デバイスがすでに RHCM で使用されている環境の場合、SCSI デバイスのキャラクター型デバイスを使用する環境に移行するためには、次に示す手順を実行する必要があります。

注

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 の場合、RHCM を組み合わせた環境はサポートしていません。

(1) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用している場合

RHCM の解除手順を、次に説明します。

1. RHCM のクラスタのサービスを停止します。

RHCM のサービスが起動している場合、次に示すコマンドを実行して停止します。

```
# service rgmanager stop
# service cman stop
# service ccscd stop
```

2. RHCM が使用している HDLM デバイスを SCSI デバイスに置き換えます。

HDLM デバイス (/dev/sddlmaa) の下位の SCSI デバイス (/dev/sda) を、/dev/raw/raw1 として使用する場合、次に示すように編集します。

```
# /dev/raw/raw1 /dev/sddlmaa
/dev/raw/raw1 /dev/sda
```

/dev/sddlmaa をコメントアウトし、/dev/sda を追加しています。

3. rawdevices サービスを再起動し、手順 2 の変更を有効にします。

次に示すコマンドを実行して再起動します。

```
# service rawdevices restart
```

4. RHCM のクラスタのサービスを起動します。

次に示すコマンドを実行して起動します。

```
# service ccscd start
# service cman start
# service rgmanager start
```

(2) Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合

RHCM の解除手順を、次に説明します。

1. RHCM のクラスタのサービスを停止します。

RHCM のサービスが起動している場合、次に示すコマンドを実行して停止します。

```
# service rgmanager stop
# service cman stop
```

2. RHCM が使用している HDLM デバイスを SCSI デバイスに置き換えます。

HDLM デバイス (/dev/sddlmaa) の下位の SCSI デバイス (/dev/sda) を、/dev/raw/raw1 として使用する場合、次に示すように編集します。

```
# ACTION=="add", KERNEL=="sddlmaa", RUN+="/bin/raw /dev/raw/raw1 %N"
ACTION=="add", KERNEL=="sda", RUN+="/bin/raw /dev/raw/raw1 %N"
```

KERNEL=="sddlmaa"をコメントアウトし、KERNEL=="sda"を追加しています。

3. ホストを再起動する場合は、手順 4 に進んでください。ホストを再起動しない場合は、手順 5 以降に進んでください。
4. ホストを再起動し、手順 2 の変更を有効にします。

次に示すコマンドを実行して再起動します。

```
# shutdown -r now
```

以上で RHCM の設定解除は終了です。

5. 次に示すコマンドを実行して、手順 2 の変更を有効にします。

```
# /sbin/start_udev
```

6. RHCM のクラスタのサービスを起動します。

次に示すコマンドを実行して起動します。

```
# service cman start
# service rgmanager start
```

3.24.5 VCS の設定解除

VCS を使用している環境で、HDLM デバイスの設定を VCS 上で解除する場合の手順について説明します。なお、VCS の GUI からの操作方法については、VCS のマニュアルを参照してください。

1. VCS のクラスタのサービスを停止します。
2. VCS が使用している HDLM デバイスを SCSI デバイスに置き換えます。

Mount リソースの Block Devices パラメタを、HDLM デバイスから SCSI デバイスに変更します。

3.24.6 Xen の設定解除

Xen を使用している環境で、HDLM デバイスの設定を解除する手順について説明します。

ここでは、マルチパスの HDLM デバイス「/dev/sddlmaa」を使用した domainU 環境から、シングルパスの SCSI デバイス「/dev/sda」を使用した環境に移行する手順を説明します。

1. HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に `-v` パラメータを指定して確認してください。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
HDevName      Management      Device      Host  Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured      /dev/sda    2     0       0       0
              :
              :
/dev/sddlmaab configured      /dev/sdb    2     0       0       1
              :
              :
KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.
#
```

HDevName 列は HDLM デバイス, Device 列は SCSI デバイスになります。

2. HDLM デバイスが SCSI デバイスに移行できるか確認します。

次のコマンドを実行してください。

管理用 domain から domU の構成情報を確認する例

```
# /usr/sbin/xm list -l domU
:
:
(device
  (vbd
    (uuid 6b393aaa-89e7-44dc-7a57-24d477dee43d)
    (bootable 0)
    (driver paravirtualised)
    (dev sdx)
    (uname phy: /dev/sddlmaa)
    (mode w)
  )
)
:
:
```

uname phy 行に表示されている HDLM デバイスが, 手順 1 で確認した HDLM デバイスとなっています。

3. domainU が起動している場合は, domainU を停止します。
domain0 の起動にあわせて自動的に domainU が起動されるように設定している場合は, 一時的に domainU が起動されないように設定を変更してください。
4. マルチパス構成からシングルパス構成に変更します。
5. domainU で HDLM デバイスを使用しないように設定します。
ブロックデバイスの設定を domainU から解除してください。詳細は Linux のマニュアルを参照してください。
6. SCSI デバイスを domainU で使用するように設定します。
ブロックデバイスを domainU に設定 (エクスポート) してください。詳細は Linux のマニュアルを参照してください。
手順 1 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に設定してください。
7. domainU を起動します。
手順 3 で domainU の設定を自動的に起動しないように変更した場合は, 元に戻してください。

3.24.7 KVM の設定解除

KVM を使用している場合, HDLM デバイスをハードウェア設定ファイル(/etc/libvirt/qemu/ドメイン名.xml)から削除する必要があります。ハードウェア設定ファイルについては OS のマニュアルを参照してください。

ここでは, virsh コマンドを使った手順を説明します。

1. 次のコマンドを実行して, ゲスト OS のドメイン名と動作状態を確認します。

```
# virsh list --all
 Id Name                               State
-----
 1  domK                               running
```

下線部がドメイン名です。

2. ゲスト OS が動作中の場合は、ゲスト OS を停止します。
ゲスト OS の停止方法については、OS のマニュアルを参照してください。
3. HDLM デバイスを削除する場合は、ハードウェア設定ファイルから HDLM デバイスを削除します。

HDLM デバイス(/dev/sddlmac)を削除する場合、次の記述を削除します

```
<disk type='block' device='disk'>
  <source dev='/dev/sddlmac' />
  <target dev='hdb' bus='ide' />
</disk>
```

4. HDLM デバイスを使用した環境から SCSI デバイスを使用した環境に移行する場合は、ハードウェア設定ファイルに登録されている HDLM デバイスを SCSI デバイスに変更します。
HDLM デバイス(/dev/sddlmad)から SCSI デバイス(/dev/sda)に移行する場合のハードウェア設定ファイルの変更例を次に示します。

変更前

```
<source dev='/dev/sddlmad' />
```

変更後

```
<source dev='/dev/sda' />
```

SCSI デバイスに対応する HDLM デバイスは、「[4.3.5 HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を確認する](#)」を参照して確認してください。

5. 次のコマンドを実行して、ハードウェア設定ファイルの内容を有効にします。

```
# virsh define /etc/libvirt/qemu/domK.xml
```

6. ゲスト OS を起動します。

ゲスト OS の起動方法については、OS のマニュアルを参照してください。

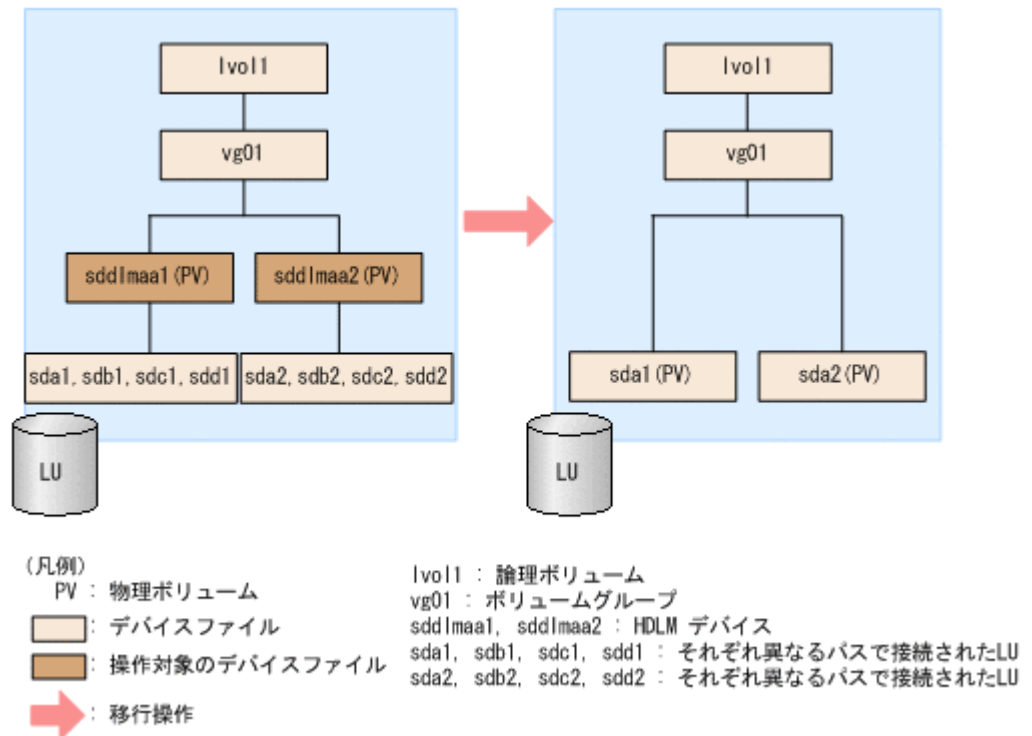
3.24.8 LVM2 の設定解除

HDLM デバイスで LVM の物理ボリュームを使用する環境から、SCSI デバイスで LVM の物理ボリュームを使用する環境に移行する手順を説明します。

ここでは、LVM2 の環境で、マルチパス環境の HDLM デバイス上にある論理ボリュームを、シングルパス環境の SCSI デバイス上に移行する場合の手順について説明します。

「[図 3-39 HDLM デバイス上にある論理ボリュームを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成](#)」に示す環境を作成するには、次の手順で行ってください。HDLM をアンインストールするときは、この手順をアンインストールの前に実施してください。

図 3-39 HDLM デバイス上にある論理ボリュームを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成



「図 3-39 HDLM デバイス上にある論理ボリュームを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成」の sda1, sdb1, sdc1, sdd1 は同じ LU を示します。また, sda2, sdb2, sdc2, sdd2 も同じ LU を示します。sddlmaa1 と sddlmaa2 はそれぞれの LU に対応する HDLM デバイスを示します。

1. SCSI デバイス, および HDLM デバイスを使用しているプロセス, サービスなどをすべて停止します。
2. 移行対象の論理ボリュームをアンマウントします。
論理ボリュームが /mnt/lv01 にマウントされている場合の実行例を次に示します。

```
# umount /mnt/lv01
```

3. ボリュームグループを非活性化します。
移行対象の論理ボリュームが, vg01 (ボリュームグループ) に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -an vg01
0 logical volume(s) in volume group "vg01" now active
```

4. ボリュームグループをエクスポートします。
vg01 (ボリュームグループ) の情報をエクスポートする場合の実行例を次に示します。

```
# vgexport vg01
Volume group "vg01" successfully exported
```

5. マルチパス構成で HDLM デバイスを使用した LVM 環境である場合は, 既存 LU へのパスをシングルパス構成にします。

「4.6.4 HDLM デバイスの構成変更」の「(5) LU へのパスを削除する」を参照して, 既存 LU へのパスをシングルパス構成にしてください。

注意事項

再起動を行う場合、`/etc/fstab` ファイルに操作対象の論理ボリュームをマウントする記述があるときは、その記述をコメントアウトしてください。また、操作対象の論理ボリュームにアクセスするアプリケーションを停止してください。

6. `/etc/lvm/lvm.conf` ファイルを編集します。

SCSI デバイスの構成を有効にして HDLM デバイスの構成を無効にするために、ファイル中のデバイスセクションに対して次の編集を行います。

- `filter` エントリ情報の追加と削除

次に示す行を追加します。

```
filter = [ "r|sddlm[a-p][a-p].*|", "a|/dev/sd|" ]
```

次に示す行を削除またはコメントアウトします。

```
filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
```

- `types` エントリ情報の追加と削除

次に示す行を削除またはコメントアウトします。

```
types = [ "sddlmfdrv", 16 ]
```

HDLM をアンインストールする場合は、次の操作を行ってください。

```
filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]および types =  
[ "sddlmfdrv", 16 ]を削除します。
```

`filter` エントリのコメントを解除して、HDLM のデバイスの構成を有効にする前の状態に戻してください。

OS が SUSE LINUX Enterprise Server 11 の場合の編集例を次に示します。網掛けの部分が編集箇所です。

図 3-40 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例

```
# This section allows you to configure which block devices should
# be used by the LVM system.
devices {

    # Where do you want your volume groups to appear ?
    dir = "/dev"

    # An array of directories that contain the device nodes you wish
    # to use with LVM2.
    scan = [ "/dev" ]

    # A filter that tells LVM2 to only use a restricted set of devices.
    # The filter consists of an array of regular expressions. These
    # expressions can be delimited by a character of your choice, and
    # prefixed with either an 'a' (for accept) or 'r' (for reject).
    # The first expression found to match a device name determines if
    # the device will be accepted or rejected (ignored). Devices that
    # don't match any patterns are accepted.

    # Remember to run vgscan after you change this parameter to ensure
    # that the cache file gets regenerated (see below).

    # By default we accept every block device except udev names:
    # filter = [ "r|/dev/.*by-path/.*/", "r|/dev/.*by-id/.*/", "a/.*/" ]
    filter = [ "r|sddm[a-p][a-p].*/", "a|/dev/sd|" ]
    # filter = [ "a|sddm[a-p][a-p].*/", "r|/dev/sd|" ]

    cache = "/etc/lvm/.cache"

    # You can turn off writing this cache file by setting this to 0.
    write_cache_state = 1

    # Advanced settings.

    # List of pairs of additional acceptable block device types found
    # in /proc/devices with maximum (non-zero) number of partitions.
    # types = [ "fd", 16 ]
    # types = [ "sddmfd", 16 ]

    # the block devices it believes are valid.
    # 1 enables: 0 disables.
    sysfs_scan = 1

    # By default, LVM2 will ignore devices used as components of
    # software RAID (md) devices by looking for md superblocks.
    # 1 enables: 0 disables.
    md_component_detection=0
}
```

7. VG スキャンを実行します。

HDLM デバイスでボリュームグループを再構築するために、vgscan コマンドを実行します。実行例を次に示します。

```
# vgscan
Reading all physical volumes. This may take a while...
Found exported volume group "vg01" using metadata type lvm2
```

8. ボリュームグループをインポートします。

vg01 (ボリュームグループ) の情報をインポートする場合の実行例を次に示します。

```
# vgimport vg01
Volume group "vg01" successfully imported
```

9. 移行が正常に終了したかどうかを pvscan コマンドを実行して確認します。

pvscan コマンドの実行例を次に示します。

```
# pvscan
PV /dev/sda1   VG vg01   lvm2 [468.00 MB / 368.00 MB free]
PV /dev/sda2   VG vg01   lvm2 [548.00 MB / 548.00 MB free]
Total: 2 [1016.00 MB] / in use: 2 [1016.00 MB] / in no VG: 0 [0 ]
```

10. ボリュームグループを活性化します。

移行対象の論理ボリュームが、vg01（ボリュームグループ）に属している場合の実行例を次に示します。

```
# vgchange -ay vg01
  1 logical volume(s) in volume group "vg01" now active
```

11. 手順 5 で/etc/fstab ファイルを編集した場合は、該当する行のコメントアウトを解除します。

12. 移行対象の論理ボリュームをマウントします。

移行対象の論理ボリュームが/dev/vg01/lvol1 で、これを/mnt/lvol1 にマウントする場合の実行例を次に示します。

```
# mount /dev/vg01/lvol1 /mnt/lvol1
```

3.24.9 md デバイスの設定解除

HDLM 管理対象デバイスを使って md デバイスを構築している環境から、SCSI デバイスを使って md デバイスを構築する環境に移行する手順を次に説明します。

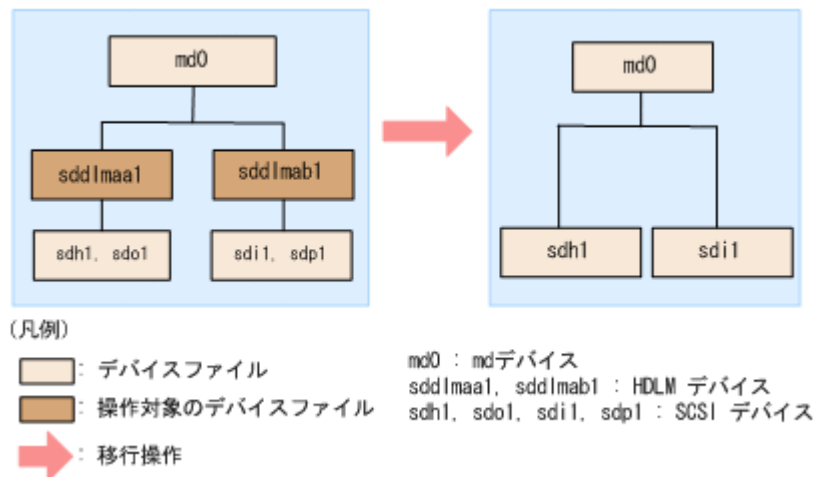
SCSI デバイスを使用した md デバイスの構築時、md デバイスで MULTIPATH 機能を使用しない場合は、「(1) MULTIPATH 機能を使用しない md デバイスへ移行する場合」の手順を実行してください。md デバイスで MULTIPATH 機能を使用したい場合は、「(2) MULTIPATH 機能を使用する md デバイスへ移行する場合」の手順を実行してください。

(1) MULTIPATH 機能を使用しない md デバイスへ移行する場合

ここでは、RAID 機能を使用した md デバイスを例に、HDLM デバイス上にある md デバイスの環境から、SCSI デバイス上にある md デバイスの環境へ移行する手順を説明します。

次の手順では、/dev/sddlmaa1 および/dev/sddlma1 上の/dev/md0 を、/dev/sdh1 および/dev/sdi1 上の/dev/md0 に移行しています。「[図 3-41 HDLM デバイス上にある md デバイスを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成 \(md デバイスの RAID 機能を使用した環境\)](#)」に示す環境は、次の手順で構築してください。

図 3-41 HDLM デバイス上にある md デバイスを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (md デバイスの RAID 機能を使用した環境)



1. ホストを停止して、マルチパス構成からシングルパス構成に変更します。
2. ホストを起動します。
3. 既存の md デバイスを使用しているアプリケーションをすべて停止します。
4. 必要に応じて md デバイス上のアプリケーションのデータをバックアップします。

5. md デバイス上にファイルシステムをマウントしている場合は、アンマウントします。
6. md デバイスの状態を確認します。

次のコマンドを実行して、md デバイスの構成状態を確認します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sddlmaa1[0] sddlma1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]
unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、HDLM デバイスが表示されることを確認してください。

7. 次のコマンドを実行して、md デバイスを非活性化します。

```
# mdadm -Ss /dev/md0
```

8. md デバイスが非活性化されていることを確認します。

md デバイスに RAID1 (ミラーリング) が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示されないことを確認してください。

9. HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に -v パラメータを指定して実行してください。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management Device   Host   Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured /dev/sdh   1      0      0      0
/dev/sddlma1  configured /dev/sdi   1      0      0      1
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスになります。

10. コンフィグレーションファイルを編集します。

手順 9 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、DEVICE 行の HDLM デバイス名を SCSI デバイス名に変更してください。

修正前

```
DEVICE /dev/sddlmaa1 /dev/sddlma1
```

修正後

```
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdi1
```

DEVICE 行を編集する場合は、デバイス名だけを変更してください。パーティション番号は変更しないでください。

11. SCSI デバイスのディスクパーティションタイプを fd に戻す必要がある場合、タイプを fd に変更します。

fd に変更すると、/etc/mdadm.conf ファイルがなくても、ホストが再起動したとき自動的に md デバイスが活性化されます。

fdisk コマンドを実行して、ディスクパーティションタイプを fd に変更する例を次に示します。

```
# fdisk /dev/sddlmaa
```

```
コマンド (m でヘルプ): p
```

```
Disk /dev/sddlmaa: 5368 MB, 5368709120 bytes
```

```
166 heads, 62 sectors/track, 1018 cylinders
Units = シリンダ数 of 10292 * 512 = 5269504 bytes
```

デバイス	Boot	Start	End	Blocks	Id	System
/dev/sddlmaa1		1	1018	5238597	83	Linux

```
コマンド (m でヘルプ): t
Selected partition 1
16進数コード (L コマンドでコードリスト表示): fd
領域のシステムタイプを 1 から fd (Linux) に変更しました
```

```
コマンド (m でヘルプ): p
```

```
Disk /dev/sddlmaa: 5368 MB, 5368709120 bytes
166 heads, 62 sectors/track, 1018 cylinders
Units = シリンダ数 of 10292 * 512 = 5269504 bytes
```

デバイス	Boot	Start	End	Blocks	Id	System
/dev/sddlmaa1		1	1018	5238597	fd	Linux raid 自動検出

```
コマンド (m でヘルプ): w
領域テーブルは交換されました!
```

```
ioctl() を呼び出して領域テーブルを再読み込みします。
ディスクを同期させます。
```

```
/dev/sddlmaa も同様に実行してください。
```

12. 次のコマンドを実行して、md デバイスを活性化します。

```
# mdadm -As /dev/md0
mdadm: /dev/md0 has been started with 2 drives.
```

13. md デバイスが活性化されていることを確認します。

md デバイスに RAID1 (ミラーリング) が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [raid1]
md0 : active raid1 sdh1[0] sdi1[1]
      5238528 blocks [2/2] [UU]
```

```
unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、SCSI デバイスが表示されていることを確認してください。

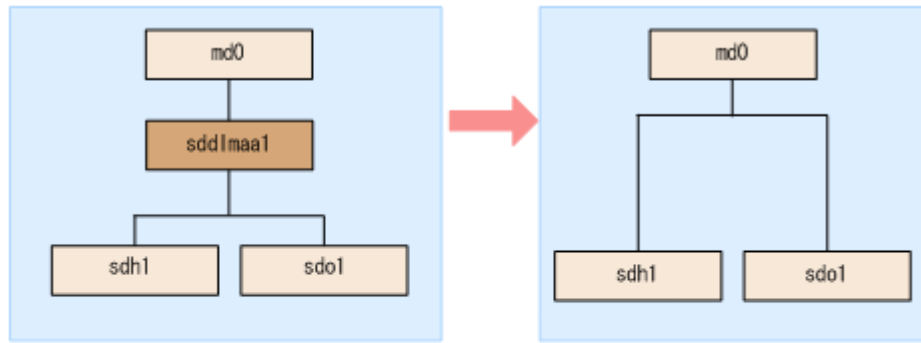
14. md デバイス上のファイルシステムをマウントする必要がある場合は、ファイルシステムをマウントします。

(2) MULTIPATH 機能を使用する md デバイスへ移行する場合

HDLM デバイス上にある md デバイスの環境から、SCSI デバイス上にある md デバイスの環境へ移行する手順を説明します。ここでは、LINEAR 機能を使用した HDLM デバイス上にある md デバイスを、MULTIPATH 機能を使用した SCSI デバイス上にある md デバイスへ移行する場合を例に説明します。

次の手順では、/dev/sddlmaa1 上の /dev/md0 を、/dev/sdh1 および /dev/sdo1 上の /dev/md0 に移行しています。「[図 3-42 HDLM デバイス上にある md デバイスを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成 \(md デバイスの MULTIPATH 機能を使用した環境\)](#)」に示す環境を作成するには、次の手順で行ってください。

図 3-42 HDLM デバイス上にある md デバイスを SCSI デバイス上に移行する場合のデバイス構成 (md デバイスの MULTIPATH 機能を使用した環境)



(凡例)

- : デバイスファイル
 - : 操作対象のデバイスファイル
 - : 移行操作
- md0 : mdデバイス
 sddlmaa1 : HDLM デバイス
 sdh1, sdo1 : SCSI デバイス

1. md デバイスを非活性化します。
「(1) MULTIPATH 機能を使用しない md デバイスへ移行する場合」の手順 3 から手順 5 を実行してください。

2. md デバイスの状態を確認します。
次のコマンドを実行して、md デバイスの構成状態を確認します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [linear]
md0 : active linear sddlmaa1[0]
      5238528 blocks 64k rounding

unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示され、HDLM デバイスが表示されることを確認してください。

3. 次のコマンドを実行して、md デバイスを非活性化します。

```
# mdadm -Ss /dev/md0
```

4. md デバイスが非活性化されていることを確認します。
md デバイスに LINEAR 機能が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [linear]
unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示されないことを確認してください。

5. HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。
HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に -v パラメタを指定して実行してください。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management Device      Host Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured /dev/sdh    1      0      0      0
              _/dev/sdo    2      0      0      1
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスになります。

6. md デバイスを作成します。

手順 5 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、md デバイスを作成してください。

デバイス名を指定する場合は、必ずパーティション番号も指定してください。パーティション番号は、手順 2 で表示されたデバイスのパーティション番号を設定してください。

HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスをすべて指定してください。

```
# mdadm -C /dev/md0 -lmp -n2 /dev/sdh1 /dev/sd01
mdadm: /dev/sdh1 appears to contain an ext2fs file system
      size=5238528K  mtime=Wed Feb  6 20:02:45 2008
mdadm: /dev/sdh1 appears to be part of a raid array:
      level=-1 devices=1 ctime=Wed Feb  6 19:31:04 2008
mdadm: /dev/sd01 appears to contain an ext2fs file system
      size=5238528K  mtime=Wed Feb  6 20:02:45 2008
mdadm: /dev/sd01 appears to be part of a raid array:
      level=-1 devices=1 ctime=Wed Feb  6 19:31:04 2008
Continue creating array? y
mdadm: array /dev/md0 started.
```

7. コンフィグレーションファイルを作成します。

次のコマンドを実行して、既存のコンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)に md デバイスの定義を追加してください。

```
# mdadm --detail --scan | grep -w "/dev/md0" >> /etc/mdadm.conf
```

コンフィグレーションファイルの作成例を次に示します。下線部の行がこの手順で追加した行です。

```
# cat /etc/mdadm.conf
DEVICE /dev/sddlmaa1
ARRAY /dev/md0 level=linear num-devices=1 UUID=426a9f1c:
9cfa6310:6aa9a80b:11ea2102 auto=yes
ARRAY /dev/md0 level=multipath num-devices=2
UUID=8db667ff:e7472a25:3a84b801:025a6a57
```

コンフィグレーションファイルの記述内容については、Linux のマニュアルや man コマンドを参照してください。

8. コンフィグレーションファイル(/etc/mdadm.conf)を作成し直した場合、コンフィグレーションファイル内の不要な ARRAY 行を削除します。

手順 7 で作成した ARRAY 行と同じ md デバイス名(md0)の ARRAY 行を削除してください。次の例では、下線部の行が削除対象になります。

```
# cat /etc/mdadm.conf
DEVICE /dev/sddlmaa1
ARRAY /dev/md0 level=linear num-devices=1 UUID=426a9f1c:
9cfa6310:6aa9a80b:11ea2102 auto=yes
ARRAY /dev/md0 level=multipath num-devices=2
UUID=8db667ff:e7472a25:3a84b801:025a6a57
```

9. /etc/mdadm.conf ファイルを編集して、コンフィグレーションファイルの ARRAY 行に「auto=yes」を追加します。

```
DEVICE /dev/sd01 /dev/sdh1
ARRAY ARRAY /dev/md0 level=multipath num-devices=2
UUID=8db667ff:e7472a25:3a84b801:025a6a57 auto=yes
```

10. コンフィグレーションファイルの DEVICE 行の HDLM デバイス名を SCSI デバイス名に変更します。

手順 5 で表示された HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、DEVICE 行の HDLM デバイス名を SCSI デバイス名に変更してください。

修正前

```
DEVICE /dev/sddlmaa1
```

修正後

```
DEVICE /dev/sdh1 /dev/sdo1
```

HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスをすべて指定してください。

DEVICE 行を編集する場合は、デバイス名だけを変更してください。パーティション番号は変更しないでください。

11. 次のコマンドを実行して、md デバイスを非活性化します。

```
# mdadm -Ss /dev/md0
```

12. md デバイスが非活性化されていることを確認します。

md デバイ스에 MULTIPATH 機能が適用されている場合の実行例を次に示します。

```
# cat /proc/mdstat
Personalities : [linear]※ [multipath]
unused devices: <none>
```

「md0 : active」と表示されないことを確認してください。

注※

[linear]は再起動するまで表示されますが、動作に問題はありません。

13. md デバイスを活性化します。

「(1) MULTIPATH 機能を使用しない md デバイスへ移行する場合」の手順 11 から手順 14 を実行してください。

また、「(1) MULTIPATH 機能を使用しない md デバイスへ移行する場合」の手順 13 で [linear]は再起動するまで表示されますが、動作に問題はありません。

3.24.10 LUKS の設定解除

HDLM デバイスに LUKS が適用された環境から SCSI デバイスへ移行する手順を説明します。次の手順では、/dev/sddlmaa から /dev/sdh へ移行しています。

1. マルチパス構成からシングルパス構成に変更します。

2. HDLM デバイスから移行する SCSI デバイスを確認します。

HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmgr) などのコマンドを使用して、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応を確認してください。

dlmcfmgmgr ユティリティに -v パラメタを指定して実行する例を示します。

```
# dlmcfmgmgr -v
HDevName      Management  Device      Host  Channel  Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sdh    1     0        0      0
/dev/sddlmaab configured  /dev/sdj    1     0        0      1
:
:
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgmgr completed normally.
#
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスになります。

3. 次のコマンドを実行して、デバイス名と UUID の対応関係を確認します。

手順 2 で確認した SCSI デバイス名を指定してください。

```
# cryptsetup luksUUID /dev/sdh
```

```
050f9901-3ab8-4556-a091-9c6e4a404f09
#
```

4. /etc/crypttab ファイルの第 2 フィールドを、出力された UUID に変更します。

変更前

```
luks-volume /dev/sddlmaa /etc/cryptpassword
```

変更後

```
luks-volume UUID="050f9901-3ab8-4556-a091-9c6e4a404f09" /etc/
cryptpassword
```

3.24.11 HDLM のアンインストール

HDLM のアンインストールの手順を次に説明します。

(1) HDLM のアンインストール

注意事項

- パスヘルスチェックまたは自動フェイルバックが実行されるときに HDLM のアンインストールを実行すると、KAPL04023-E のメッセージを syslog に出力する場合があります。しかし、HDLM の動作上の問題はありません。
- HDLM のアンインストールを実行しても、HDLM のインストール時に作成された障害ログ (/var/tmp/hdlminstlog/installhdlm[01-10].log) はアンインストールされません。そのため、必要に応じて /var/tmp/hdlminstlog/installhdlm[01-10].log ファイルを削除してください。
installhdlm[01-10].log ファイルについては、「3.4 HDLM のインストールについての事前知識」を参照してください。
- 05-00 以降の Device Manager エージェントがインストールされているホストから HDLM をアンインストールする場合、アンインストール中に次に示す Device Manager エージェントのコマンドを実行しないでください。また、次に示す Device Manager エージェントのコマンドを実行中に、HDLM をアンインストールしないでください。

```
hbsasrv, HiScan, hdvmagt_account, hdvmagt_schedule, hldutil, TIC
```

1. Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
2. HDLM の管理対象パスを使用しているプロセス、サービスなどをすべて停止します。
HDLM の管理対象パスを使用している DBMS、各種アプリケーションのプロセス、およびサービスを、すべて停止します。
また、Xen を使用している場合は、あらかじめ domainU を停止してください。domain0 を起動すると自動的に domainU が起動されるよう設定している場合、自動的に domainU が起動しないよう一時的に設定を変更してください。

3. HDLM が使用しているマウントポイントを、すべて解除します。
次に示すコマンドを実行します。

```
# umount マウントポイント
```

4. root の環境設定ファイルの PATH 環境変数の設定を変更します。
root ユーザが使用するシェルの環境設定ファイルの PATH 環境変数から /opt/DynamicLinkManager/bin を削除します。
5. HDLM デバイスが使用されていないことを確認します。
次に示すコマンドを実行して、sddlmdrv の Used が 0 になっていることを確認してください。


```
# /sbin/lsmmod
Module                Size  Used by
:
:
sddlmfdrv             254092  0
```

Used が 0 以外の場合は、「3.24.1 HDLM 管理対象のデバイスへの操作」を実行したあと、手順 2 および手順 3 を再度実行して、HDLM デバイスを使用しないようにしてください。

- アンインストールを実行します。

次に示すコマンドを実行して、アンインストールを開始します。

```
# rpm -e HDLM
```

- アンインストールが完了したかどうか確認します。

次に示すコマンドを実行して、アンインストールが完了したことを確認します。出力される情報を次に示します。

```
# rpm -qi HDLM
パッケージ HDLM はインストールされていません
```

- 手順 2 で停止したプロセス、サービスを起動します。

起動後、クラスタソフトウェアやボリューム管理ソフトウェアが起動します。

また、手順 2 で domainU の設定を自動的に起動しないように変更した場合は、元に戻してください。

(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合の HDLM のアンインストール

HDLM デバイスを使ったマルチパス構成のブートディスクの環境から HDLM をアンインストールして、SCSI デバイスを使ったブートディスクの環境に変更する方法を説明します。設定を誤ると、OS が起動できなくなることもあるので、注意してください。

HDLM のアンインストール時に KAPL09019-E、KAPL09020-E のメッセージが出力された場合は、「3.24.12 Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2) のアンインストール」の手順に従って、HNTRLib2 をアンインストールしてください。ただし、KAPL09026-I のメッセージが出力された場合は、HDLM 以外のプログラムが Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2) を使用しているので、HDLM だけがアンインストールされません。

なお、LVM2 を用いたブートディスク環境の設定手順を説明します。ここではブートローダに grub を用いた場合を示します。

- Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。

- /etc/fstab ファイルの定義に HDLM デバイスが指定されていることを確認します。

次に示す HDLM 管理対象デバイスのマウントポイントが、HDLM デバイスをマウントする定義になっていることを確認します。

- ブートローダとして ELILO を使用している場合
ルートディレクトリ 「/」、/boot/efi、/tmp、/usr、/var、swap
- ブートローダとして GRUB を使用している場合
ルートディレクトリ 「/」、/boot、/tmp、/usr、/var、swap
- ブートローダとして LILO を使用している場合
ルートディレクトリ 「/」、/tmp、/usr、/var、swap
- LVM2 を使用している場合

```
/boot
/etc/fstab ファイルの例を次に示します。
```

```

:
:
/dev/sddlmaa2 / ext2 defaults 1 1
:
:

```

3. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に `-v` パラメタを指定して実行して、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

udev 機能で SCSI デバイス名を変更している場合は、`-udev` パラメタを指定してください。
dlmcfmgr ユティリティの実行例を次に示します。

図 3-43 dlmcfmgr ユティリティに `-v` パラメタを指定した実行例

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management  Device      Host  Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda    0     0      0    0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

図 3-44 dlmcfmgr ユティリティに `-v` パラメタおよび `-udev` パラメタを指定した実行例

```
# dlmcfmgr -v -udev
HDevName      Management  Device      Host  Channel Target Lun Udev
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda    0     0      0    0 /dev/aaaaaaaa
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイス、Udev 列は udev 名になります。

4. `/etc/fstab` ファイルを編集します。
手順 2 で確認した HDLM 管理対象デバイスのマウントポイントを、HDLM デバイスから SCSI デバイスに書き換えます。既存の HDLM デバイス指定は先頭に `#` を付けてコメントアウトして、手順 3 で確認した HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を基に、次のように SCSI デバイス指定を追加します。

```

:
:
#/dev/sddlmaa2 / ext2 defaults 1 1
/dev/sda2 / ext2 defaults 1 1
:
:

```

LVM2 を使用している場合は手順 5 に、LVM2 を使用していない場合は手順 6 に進んでください。

5. LVM2 を使用している場合は、LVM2 が HDLM デバイスではなく SCSI デバイスを認識するように、`/etc/lvm/lvm.conf` ファイルを編集します。

`/etc/lvm/lvm.conf` ファイルの編集例を次に示します。

図 3-45 /etc/lvm/lvm.conf ファイルの編集例

```
# This section allows you to configure which block devices should
# be used by the LVM system.
devices {

    # Where do you want your volume groups to appear ?
    dir = "/dev"

    :
    :

    # filter = [ "a|sddlm[a-p][a-p].*|", "r|/dev/sd|" ]
    filter = [ "r|sddlm[a-p][a-p].*|", "a|/dev/sd|" ]

    :
    :

    # types = [ "fd", 16 ]
    # types = [ "sddlmfdrv", 16 ]

    :
    :

    md_component_detection=0
}

```

既存の filter と types の行をコメントアウトし、図に示した網掛けの行を追加します。

また、md_component_detection の項目をインストール前の値に戻します。

- ブートローダの設定ファイルを SCSI 起動用に編集します。

SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用しているときは、/etc/grub.conf ファイルの代わりに/boot/grub/menu.lst ファイルを編集してください。

具体的な編集方法を、手順 7 から手順 11 に示します。

ブートローダとして LILO を使用している場合、ブートローダとして GRUB を使用している場合、IPF ホストでブートローダとして ELILO を使用している場合および LVM2 を使用している場合に分けて説明します。

なお、設定ファイルの編集例にある「オプション」は、ユーザ環境に応じた任意指定のオプションを表します。

- ブートローダとして LILO を使用している場合

/etc/lilo.conf ファイルの編集例（下線部）を次に示します。

変更後/sbin/lilo コマンドを実行して設定を有効にしてください。HDLM デバイス指定用の設定は削除しても問題ありません。

```
boot=/dev/sda
map=/boot/map
install=/boot/boot.b
prompt
timeout=50
linear
#default=HDLM_194.EL
default=linux

image=/boot/vmlinuz-2.6.18-194.el5
label=HDLM_194.EL
initrd=/boot/initrd-hdlm-2.6.18-194.el5.gz
read-only
append="オプション ramdisk_size=18245 オプション"

image=/boot/vmlinuz-2.6.18-194.el5
label=linux
initrd=/boot/initrd-2.6.18-194.el5
read-only
append="オプション"

```

root=/dev/sda2

- ブートローダとして GRUB を使用している場合

/etc/grub.conf ファイルの編集例（下線部）を例 1 に示します。

また、SUSE LINUX Enterprise Server 10 で Xen をサポートしているカーネルを使用している場合の/boot/grub/menu.lst ファイルの編集例（下線部）を、例 2 に示します。

default の値に誤った指定をしないように注意してください。HDLM デバイス指定用の設定は削除しても問題ありません。

(例 1) /etc/grub.conf ファイルの編集例

```
#default=0
default=1
timeout=10
splashimage=(hd0,0)/grub/splash.xpm.gz

title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
  root (hd0,0)
  kernel /vmlinuz-2.6.18-194.el5 ro オプション ramdisk_size=18245 オプション
  initrd /initrd-hdlm-2.6.18-194.el5.gz

title Red Hat Enterprise Linux (2.6.18-194.el5)
  root (hd0,0)
  kernel /vmlinuz-2.6.18-194.el5 ro root=/dev/sda2 オプション
  initrd /initrd-2.6.18-194.el5
```

(例 2) /boot/grub/menu.lst ファイルの編集例（SUSE LINUX Enterprise Server 10 で Xen をサポートしているカーネルを使用している場合）

```
#default 0
default 1
timeout 8
gfxmenu (hd0,1)/boot/message

title XEN-hdlm
  root (hd0,1)
  kernel /boot/xen.gz
  module /boot/vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen vga=0x31a splash=silent
showopts
  module /boot/initrd-2.6.16.60-0.21-xen.hdlm

title XEN-sd
  root (hd0,1)
  kernel /boot/xen.gz
  module /boot/vmlinuz-2.6.16.60-0.21-xen root=/dev/sda2
vga=0x31a splash=silent showopts
  module /boot/initrd-2.6.16.60-0.21-xen
```

- IPF ホストでブートローダとして ELILO を使用している場合

/etc/elilo.conf ファイルの編集例（下線部）を次に示します。

HDLM デバイス指定用の設定は削除しても問題ありません。

```
prompt
timeout=50
#default= HDLM 2.6.18-194.el5
default= 2.6.18-194.el5-sd

image=vmlinuz-2.6.18-194.el5
  label=HDLM_2.6.18-194.el5
  initrd=initrd-hdlm-2.6.18-194.el5.img
  read-only
  append="オプション ramdisk_size=18245 オプション"

image=vmlinuz-2.6.18-194.el5
```

```

label=2.6.18-194.el5-sd
initrd=initrd-2.6.18-194.el5.img
read-only
append="オプション"
root=/dev/sda2

```

- LVM2 を使用している場合

/etc/grub.conf ファイルの編集例（下線部）を次に示します。

```

#default=0
default=1
timeout=5
splashimage=(hd1,0)/grub/splash.xpm.gz
Hiddenmenu

title Red Hat Enterprise Linux AS (HDLM 2.6.9-11.EL)
root (hd1,0)
kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro rhgb quiet
initrd /initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.gz

title Red Hat Enterprise Linux AS (2.6.9-11.EL)
root (hd1,0)
kernel /vmlinuz-2.6.9-11.EL ro root=/dev/VolGroup00/LogVol10
rhgb quiet
#   initrd /initrd-hdlm-2.6.9-11.EL.img
initrd /initrd-2.6.9-11.EL.img

```

7. HDLM デバイスからの起動に使用していた設定をコピーします。

8. コピーした設定に名前を付けます。

SCSI デバイス指定用だとわかるような名前を任意に付けます。

ブートローダとして LILO または IPF ホストで ELILO を使用している場合は label を変更します。ブートローダとして LILO を使用している場合は /sbin/lilo コマンドを実行して設定を有効にしてください。

ブートローダとして GRUB を使用している場合は title を変更します。

9. 手順 3 で確認した SCSI デバイスを root に指定します。

SUSE LINUX Enterprise Server 10 で Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、ブートローダ設定ファイルの編集規則に従って root デバイスを追記してください。

LVM2 を使用している場合は、/etc/fstab ファイルで「/」にマウントされるデバイス名を root に指定します。

10. Red Hat Enterprise Linux 6 の場合は、/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf に定義されている「hdlm_dracut=y」の記述を、「hdlm_dracut=n」に変更します。

11. SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルを initrd に指定します。

SUSE LINUX Enterprise Server 10 で Xen をサポートしているカーネルを使用している場合は、module で指定された initrd ファイル名を SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルに変更してください。

また、編集時には次の点に注意してください。

- ユーザ環境に依存したオプションが設定されている場合
オプションを削除しないようにしてください。
- ブートローダとして LILO または IPF ホストで ELILO を使用して、かつユーザ環境に依存したオプションが設定されていない場合
append を削除するかコメントアウトしてください。

SCSI デバイス用の初期 RAM ディスクイメージファイルは OS の mkinitrd コマンドまたは dracut コマンドのマニュアルを参考に作成してください。

12. ホストを停止します。

次に示すコマンドを実行してホストを停止します。

```
# shutdown -h now
```

13. マルチパス構成をシングルパス構成に変更します。
14. ホストを起動します。
LVM2 を使用している場合は、手順 16 に進んでください。
15. ファイルシステムと swap に SCSI デバイスが使用されていることを確認します。
ルートディレクトリが SCSI デバイスに関連づけられていること、SCSI デバイスがマウントされていること、および swap に SCSI デバイスが割り当てられていることを確認します。
 - ブートローダとして LILO または GRUB を使用している場合
mount コマンドの実行例を次に示します。

図 3-46 LILO または GRUB を使用している場合の mount コマンドの実行例

```
# mount
/dev/sda2 on / type ext2 (rw)
none on /proc type proc (rw)
none on /dev/pts type devpts (rw,gid=5,mode=620)
usbdevfs on /proc/bus/usb type usbdevfs (rw)
/dev/sda1 on /boot type ext2 (rw)
/dev/sda4 on /tmp type ext2 (rw)
/dev/sda5 on /var type ext2 (rw)
/dev/sda6 on /usr type ext2 (rw)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)
```

- IPF ホストでブートローダとして ELILO を使用している場合
mount コマンドの実行例を次に示します。

図 3-47 ELILO を使用している場合の mount コマンドの実行例

```
# mount
/dev/sda2 on / type ext3 (rw)
none on /proc type proc (rw)
none on /dev/pts type devpts (rw,gid=5,mode=620)
usbdevfs on /proc/bus/usb type usbdevfs (rw)
/dev/sda1 on /boot/efi type vfat (rw)
/dev/sda4 on /tmp type ext3 (rw)
/dev/sda5 on /var type ext3 (rw)
/dev/sda6 on /usr type ext3 (rw)
none on /dev/shm type tmpfs (rw)
```

/proc/swaps ファイルを参照して、Filename の部分に指定した SCSI デバイス名が表示されていることを確認します。

手順 18 に進んでください。

16. ボリュームグループの情報を更新します。
次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループの情報を更新します。

```
# vgscan
Reading all physical volumes. This may take a while...
Found volume group "VolGroup00" using metadata type lvm2
```

17. ボリュームグループと HDLM デバイスの関係を確認します。
次に示すコマンドを実行して、ボリュームグループを構成する物理ボリュームが HDLM デバイスでないことを確認します。

```

# vgdisplay -v
  Finding all volume groups
  Finding volume group "VolGroup00"
  --- Volume group ---
VG Name          VolGroup00
System ID
Format           lvm2
Metadata Areas   1
Metadata Sequence No 95
VG Access        read/write
VG Status        resizable
MAX LV           0
Cur LV          4
Open LV          4
Max PV           0
Cur PV          1
Act PV           1
VG Size          19.88 GB
PE Size          32.00 MB
Total PE         636
Alloc PE / Size  635 / 19.84 GB
Free PE / Size   1 / 32.00 MB
VG UUID          Lt5T32-00oC-d56S-KRQn-yt0e-wZuu-xJreLx

  --- Logical volume ---
LV Name          /dev/VolGroup00/LogVol100
VG Name          VolGroup00
LV UUID          Bo6xD9-vmBz-qIDF-Mw0o-grbd-Gvmh-NHZ1aX
LV Write Access  read/write
LV Status        available
# open           1
LV Size          9.78 GB
Current LE       313
Segments         1
Allocation       inherit
Read ahead sectors 0
Block device     252:0

                :
                :

  --- Physical volumes ---
PV Name          /dev/sda2
PV UUID          Xm0ok4-uPGI-Sirs-7Xx0-pVrm-nJrz-ATm2pg
PV Status        allocatable
Total PE / Free PE 636 / 1

```

18. ブートディスクサポートユティリティ (dlmknitrd) または dracut コマンドで作成した初期 RAM ディスクイメージファイルを削除します。

次に示すコマンドを実行します。

- IA32 ホストを使用している場合の実行例


```
# rm /boot/initrd-2.6.18-194.el5.gz
```
- IPF ホストを使用している場合の実行例


```
# rm /boot/efi/efi/redhat/initrd-hdlm-2.6.18-194.el5.gz
```

19. ルートディレクトリ以外で使用している HDLM を停止します。

HDLM を停止する手順については、「[3.24.1 HDLM 管理対象のデバイスへの操作](#)」および「[\(1\) HDLM のアンインストール](#)」の手順 2 から 4 を参照してください。

20. HDLM デバイスが使用されていないことを確認します。

次に示すコマンドを実行して、sddlmfdrv の Used が 0 になっていることを確認してください。

```

# /sbin/lsmmod
Module          Size  Used by
:

```

```
      :  
sddlmfdrv                254092  0
```

Used が 0 以外の場合は、「3.24.1 HDLM 管理対象のデバイスへの操作」を実行したあと、「(1) HDLM のアンインストール」の手順 2 および手順 3 を実行して、HDLM デバイスを使用しないようにしてください。

21. アンインストールを実行します。

次に示すコマンドを実行して、アンインストールを開始します。

```
# rpm -e HDLM
```

22. アンインストールが完了したかどうか確認します。

次に示すコマンドを実行して、アンインストールが完了したことを確認します。出力される情報を次に示します。

```
# rpm -qi HDLM  
パッケージ HDLM はインストールされていません
```

3.24.12 Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2) のアンインストール

HDLM のアンインストール時に KAPL09019-E または KAPL09020-E のメッセージが出力された場合は、次に示す手順で HNTRLib2 をアンインストールしてください。

1. Linux に、root 権限を持つユーザでログインします。
2. 次に示すコマンドを実行して、バンドル PP 名称の登録を解除します。

```
# /opt/hitachi/HNTRLib2/etc/hntr2cancel "JP1/HiCommand Dynamic Link  
Manager"
```

3. 次に示すコマンドを実行します。

```
# /opt/hitachi/HNTRLib2/etc/hntr2setup
```

HNTRLib2 のセットアップメニューが表示されます。

4. セットアップメニューから、「9」を選択します。

HNTRLib2 がアンインストールされます。

ほかのプログラムが HNTRLib2 を使用していない場合

HNTRLib2 が正常にアンインストールされ、次に示すメッセージが出力されます。

```
Unsetup is complete.
```

ほかのプログラムが HNTRLib2 を使用している場合

次に示すメッセージが出力され、HNTRLib2 はアンインストールされません。

```
Because a bundle PP name is registered,  
I did not do the Uninstall.
```

HNTRLib2 がアンインストールされなかった場合、次に示すコマンドを実行して、HNTRLib2 を使用しているプログラムを確認してください。

```
# /opt/hitachi/HNTRLib2/etc/hntr2getname
```

ほかのプログラムが HNTRLib2 を使用していない場合で、アンインストールできないときは、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。

注意事項

HNTRLib2 でログの出力先をデフォルト以外に設定していた場合、HNTRLib2 のアンインストール時にログファイルが削除されません。HNTRLib2 をアンインストールしたあとで、ログファイルを削除してください。

HDLM の運用

この章では、HDLM の運用方法について説明します。運用方法には、HDLM の操作方法、HDLM マネージャの操作方法および運用環境の構成変更が含まれます。

- 4.1 HDLM の使用上の注意事項
- 4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用
- 4.3 コマンドを使用した HDLM の運用
- 4.4 HDLM マネージャの起動と停止
- 4.5 HDLM の常駐プロセス
- 4.6 HDLM 運用環境の構成変更

4.1 HDLM の使用上の注意事項

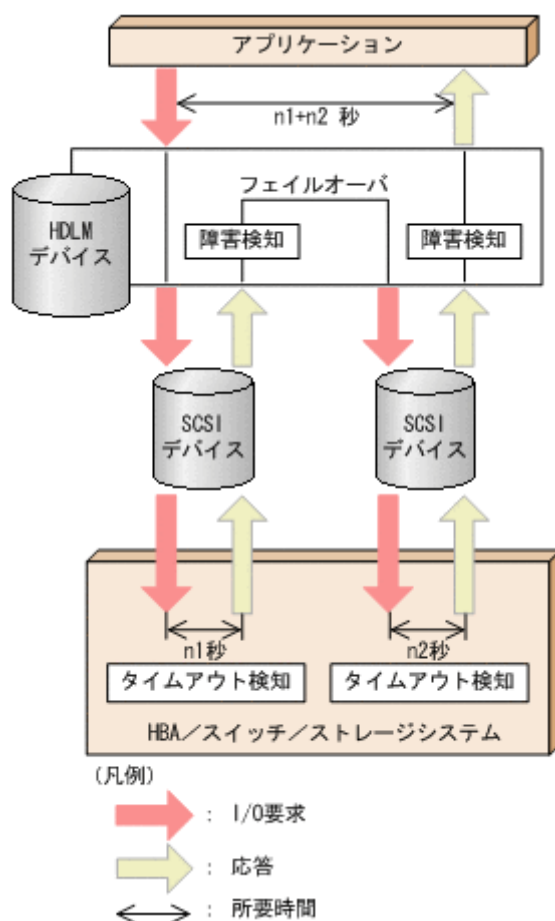
HDLM を使用する場合の注意事項を次に示します。

4.1.1 OS 共通の注意事項

OS で共通の注意事項を次に示します。

- 複数のサーバから同一のボリュームグループを同時にアクティブにしないでください。
- パス障害が発生している場合、アプリケーションから HDLM への I/O 要求に対する応答が返るまでの時間は、ファイバチャネルスイッチや HBA などのタイムアウト値の設定に依存します。このため、1LU に複数あるパスのすべてで障害が発生している場合に、アプリケーションから HDLM への I/O 要求に対する応答が返るまでの時間は、それぞれのパスの I/O 要求に対してファイバチャネルスイッチや HBA などがタイムアウトを検知する時間の合計値となります。ファイバチャネルスイッチや HBA などのタイムアウト値については、該当する機器のマニュアルを参照してください。アプリケーションが I/O 要求を発行してから応答が返るまでの所要時間の概要を次の図に示します。

図 4-1 アプリケーションが I/O 要求を発行してから応答が返るまでの所要時間の概要



図に示すように、HDLM デバイスに対応するパス (SCSI デバイス) が 2 つある場合、アプリケーションが I/O 要求を発行してから応答が返るまでの時間は、最大で SCSI デバイス A を使用するパスのタイムアウト値 ($n1$ 秒) と、SCSI デバイス B を使用するパスのタイムアウト値 ($n2$ 秒) の合計値 ($n1+n2$ 秒) になります。

- HDLM をクラスタ環境で使用する場合、パスがフェイルオーバーする前にクラスタのノードがフェイルオーバーしてしまうことがあります。そのため、クラスタソフトウェアで設定するノード

のフェイルオーバーのタイムアウト値には、上記の注意事項で算出した、応答が返るまでの所要時間より大きい値を設定してください。

- ファイルシステムの作成、フォーマット、`fsck`などの操作の実行中にパス障害が発生すると、操作が完了しない場合があります。この場合、パス障害を回復してから操作を再実行してください。
- HDLM デバイスの論理デバイスファイル名は、Red Hat Enterprise Linux の Hardware Browser には表示されません。
- SCSI デバイスに対して LABEL= を付ける Linux の機能は、HDLM ではサポートしていません。HDLM では、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名が同じであれば、常に同じ LU にアクセスできます。
- 次に示す条件をすべて満たす場合は、パスの状態が正常であっても、Offline(E)状態や Online(E)状態になるおそれがあります。
 - SATA ドライブを搭載しているストレージシステムを使用している
 - ストレージシステムに対する I/O の負荷が高い
 - パスヘルスチェックを ON に設定しているこの場合は、I/O の負荷を減らしてオンライン操作でパスの状態を Online に戻してください。
- アラートドライブまたはフィルタドライブをロードするとそれぞれ次のようなメッセージが出力されますが、HDLM の動作上の問題はありません。

```
sddlmadv: unsupported module, tainting kernel.  
sddlmadv: module license 'Proprietary: Contact Hitachi for any bugs'  
taints kernel.
```

- HDLM コマンドの `view` オペレーション (`-path` または `-lu` 指定) を実行して、PathName のターゲット ID (16 進数) の値が、0000000000000100 以上で表示されるパスは、一部のパスが障害の状態です。この Offline (E) のパスは、`online` コマンドもしくは、自動フェイルバック機能ではオンライン状態になりません。このパスをオンラインにするためには、`dlmcfmgmr ユティリティ (dlmcfmgmr -r)` を実行してください。

4.1.2 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Oracle Enterprise Linux 4 を使用する際の注意事項

OS に Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Oracle Enterprise Linux 4 を使用している場合の注意事項を次に示します。

- カーネルパッケージを更新する場合、または OS のアップデートパッケージを適用する場合は、HDLM をアンインストールしてから実施してください。そのあと、HDLM を再度インストールしてください。
手順の詳細については、「[4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用](#)」を参照してください。
- HDLM デバイス使用中に、対応する SCSI デバイスを動的に削除できてしまいます。SCSI デバイスを動的に削除する前には次の操作を実行してください。
 - a. HDLM デバイスでマウントされているデバイスがあれば、アンマウントしてください。
 - b. HDLM デバイスを `dlmcfmgmr -o` コマンドを実行して、HDLM 管理対象外にしてください。
- `udev` 機能を使用してデバイスが動的に構成される場合、コンソールや `syslog` に次のメッセージが出力されることがありますが、HDLM の動作に問題はありません。

```
scsi_id[a01]: Cannot find sysfs device associated with /sys/block/  
sddlma01
```

上記の `a01` には任意の英数字が出力されます。

- `partprobe` コマンドは HDLM デバイスをサポートしていないため、HDLM デバイスに対しては `partprobe` コマンドを実行できません。

HDLM デバイス (LU) にパーティションを追加または削除する場合は、対象となる HDLM デバイス (LU) を使用しているアプリケーションをすべて停止して、HDLM デバイス (LU) を未使用状態[※]にしてから追加または削除してください。

なお、HDLM デバイス (LU) を未使用状態にしないでパーティションを追加または削除した場合は、ホストを再起動して、パーティションテーブルを再読み込みさせてください。

注※

HDLM デバイス (LU) 内のすべてのパーティションが使用されていない状態を示します。

4.1.3 Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, Oracle Enterprise Linux 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, または Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する際の注意事項

OS に Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, Oracle Enterprise Linux 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, または Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用している際の注意事項を次に示します。

- HDLM デバイス使用中に、対応する SCSI デバイスを動的に削除できてしまいます。SCSI デバイスを動的に削除する前には次の操作を実行してください。
 - a. HDLM デバイスでマウントされているデバイスがあれば、アンマウントしてください。
 - b. HDLM デバイスを `d1mcfgmgr -o` コマンドを実行して、HDLM 管理対象外にしてください。
- HDLM デバイスを使って、`md` デバイスを作成できません。
- `udev` 機能を使用してデバイスが動的に構成される場合、コンソールや `syslog` に次のメッセージが出力されることがありますが、HDLM の動作に問題はありません。

```
scsi_id[a01]: scsi_id: unable to access parent device of '/block/  
sddlma01'
```

上記の `a01` には任意の英数字が出力されます。

- Red Hat Enterprise Linux 5 で HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合、`weak-modules` スクリプトを使用している製品をインストールまたはアンインストールすると、障害が発生するおそれがあります。詳細は「付録 B. `weak-modules` スクリプトを使用している製品の障害時の対処」を参照してください。
- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 でカーネルパッケージを更新する場合、または OS のアップデートパッケージを適用する場合は、HDLM をアンインストールしてから実施してください。そのあと、HDLM を再度インストールしてください。

手順の詳細については、「4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用」を参照してください。

4.1.4 SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する際の注意事項

OS に SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用している際の注意事項を次に示します。

- カーネルパッケージを更新する場合、または OS のアップデートパッケージを適用する場合は、HDLM をアンインストールしてから実施してください。そのあと、HDLM を再度インストールしてください。

手順の詳細については、「[4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用](#)」を参照してください。

- HDLM デバイス使用中に、対応する SCSI デバイスを動的に削除できてしまいます。SCSI デバイスを動的に削除する前には次の操作を実行してください。
 - a. HDLM デバイスでマウントされているデバイスがあれば、アンマウントしてください。
 - b. HDLM デバイスを `dlmcfmgr -o` コマンドを実行して、HDLM 管理対象外にしてください。
- HDLM デバイスを使って、md デバイスを作成できません。
- ext3/ReiserFS でマウントされているファイルシステム上で `sync` コマンドを実行すると `syslog` に次のメッセージを出力しますが、HDLM の動作上の問題はありません。

```
JBD: barrier-based sync failed on sddlmaal - disabling barriers
```

- 下記の条件をすべて満たした環境で、システムで発生した I/O 量がストレージシステムの実行性能を超えた場合、KAPL05008-E のメッセージおよびカーネルのコールトレースが出力されることがあります。

- HDLM 管理対象デバイスに Hitachi WMS シリーズがある
- HDLM ドライバオプションユティリティ (`dlmsetopt`) でメモリ確保のリトライ回数に 0 ~ 2147483646 を設定している

この場合、システムが不安定になり、実行中の I/O がエラーになるおそれがあります。

`dlmsetopt` ユティリティで、メモリ確保のリトライ回数に、現在の設定値よりも大きな値、または -1 を設定して、システムを再度起動してください。リトライ回数を -1 に設定しても、コールトレースが出力される場合はメモリの増設や不要なプロセスの停止を検討してください。

- `udev` 機能を使用してデバイスが動的に構成される場合、コンソールや `syslog` に次のメッセージが出力されることがありますが、HDLM の動作に問題ははありません。

```
scsi_id[a01]: scsi_id: unable to access parent device of '/block/sddlma01'
```

上記の `a01` には任意の英数字が出力されます。

4.1.5 SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する際の注意事項

OS に SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合の注意事項を次に示します。

- カーネルパッケージを更新する場合、または OS のアップデートパッケージを適用する場合は、HDLM をアンインストールしてから実施してください。そのあと、HDLM を再度インストールしてください。

手順の詳細については、「[4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用](#)」を参照してください。

- HDLM デバイス使用中に、対応する SCSI デバイスを動的に削除できてしまいます。SCSI デバイスを動的に削除する前には次の操作を実行してください。
 - a. HDLM デバイスでマウントされているデバイスがあれば、アンマウントしてください。
 - b. HDLM デバイスを `dlmcfmgr -o` コマンドを実行して、HDLM 管理対象外にしてください。
- HDLM デバイスを使って、md デバイスを作成できません。

- ext3/ReiserFS でマウントされているファイルシステム上で sync コマンドを実行すると syslog に次のメッセージを出力しますが、HDLM の動作上の問題はありません。

JBD: barrier-based sync failed on sddlmaa1 - disabling barriers

- 下記の条件をすべて満たした環境で、システムで発生した I/O 量がストレージシステムの実行性能を超えた場合、KAPL05008-E のメッセージおよびカーネルのコールトレースが出力されることがあります。

- HDLM 管理対象デバイスに Hitachi WMS シリーズがある
- HDLM ドライバオプションユティリティ (dlmsetopt) でメモリ確保のリトライ回数に 0 ~ 2147483646 を設定している

この場合、システムが不安定になり、実行中の I/O がエラーになるおそれがあります。dlmsetopt ユティリティで、メモリ確保のリトライ回数に、現在の設定値よりも大きな値、または-1 を設定して、システムを再度起動してください。リトライ回数を-1 に設定しても、コールトレースが出力される場合はメモリの増設や不要なプロセスの停止を検討してください。

- システムの運用中に、次に示す事象が起きた場合、SCSI デバイスの削除操作をしなくても、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -v) や HDLM コマンドの view オペレーション (-lu または -drv 指定) の実行結果に表示される Device 列の SCSI デバイス名に、「-」(ハイフン) が表示されることがあります。これは、OS のホットプラグ機能によるものです。HDLM の動作上の問題ははありません。
 - パスが断線した
 - LU を削除した
 - ファイバケーブルの接続を変更した
 - ファイバチャネルスイッチのゾーン設定を変更した

4.2 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用

この節では、HDLM をインストールしたホストで、カーネルパッケージを更新する場合、または OS のアップデートパッケージを適用する場合の手順について説明します。

OS およびインストール環境ごとの手順の参照先を、次の表に示します。

表 4-1 カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用手順の参照先

ホストの OS	HDLM のインストール環境		手順の参照先
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Oracle Enterprise Linux 4 Oracle Enterprise Linux 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 SUSE LINUX Enterprise Server	ブートディスクを使用していない環境		「4.2.1」の「(1)」
	ブートディスク環境	HDLM デバイス	「4.2.1」の「(2)」
		HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2)	「4.2.1」の「(3)」
Red Hat Enterprise Linux 5 Red Hat Enterprise Linux 6	ブートディスクを使用していない環境		「4.2.2」の「(1)」
	ブートディスク環境	HDLM デバイス	「4.2.2」の「(2)」

ホストの OS	HDLM のインストール環境		手順の参照先
		HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2)	「4.2.2」の「(3)」

4.2.1 Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, Oracle Enterprise Linux 4, Oracle Enterprise Linux 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 または SUSE LINUX Enterprise Server の場合

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, Oracle Enterprise Linux 4, Oracle Enterprise Linux 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合、カーネルパッケージを更新または OS のアップデートパッケージを適用する前に、HDLM をアンインストールする必要があります。

なお、HDLM をアンインストールすると、再度 HDLM をインストールしても HDLM デバイスと LDEV 情報の対応関係は引き継がれません。ここで説明する手順では、HDLM デバイスと LDEV 情報の対応関係を引き継ぐことを前提としています。

HDLM デバイスと LDEV 情報の対応関係を引き継ぐ必要がない場合、ここで説明する手順は不要です。「3.24.11 HDLM のアンインストール」に従って HDLM をアンインストールしたあと、カーネルパッケージを更新、または OS のアップデートパッケージを適用してください。そのあと、「3.6 HDLM のインストール」に従って再度 HDLM をインストールしてください。

(1) HDLM デバイスをブートディスクとして使用していない場合

HDLM デバイスをブートディスクとして使用していない場合、カーネルパッケージを更新または OS のアップデートパッケージを適用する手順を、次に説明します。

- 次に示すファイルを、任意のディレクトリにコピーします。

- /etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf
- /etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.unconf※

注※

ファイルが存在しない場合、コピーする必要はありません。

- HDLM をアンインストールします。

HDLM のアンインストールについては「3.24.11 HDLM のアンインストール」を参照してください。

- カーネルパッケージを更新、または OS のアップデートパッケージを適用します。

- HDLM をインストールします。

HDLM のインストールについては「3.6 HDLM のインストール」を参照してください。

HDLM をインストールするとき、「3.6.3 HDLM の新規インストール」の手順 11 は、次の内容に読み替えてください。

- HDLM をアンインストールする前にコピーしたファイル (.dlmfdrv.conf および .dlmfdrv.unconf) を、/etc/opt/DynamicLinkManager ディレクトリにコピーします。
コピーしたあと、手順 14 に進んでホストを再起動してください。

(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合

HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合、カーネルパッケージを更新または OS のアップデートパッケージを適用する手順を、次に説明します。

1. 次に示すファイルを、任意のディレクトリにコピーします。

- /etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf
- /etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.unconf※

注※

ファイルが存在しない場合、コピーする必要はありません。

2. HDLM をアンインストールします。

HDLM のアンインストールについては「[3.24.11 HDLM のアンインストール](#)」を参照してください。

3. カーネルパッケージを更新、または OS のアップデートパッケージを適用します。

4. HDLM をインストールします。

HDLM のインストールについては「[3.7 ブートディスクを管理するための HDLM のインストール](#)」を参照してください。

HDLM をインストールするとき、「[3.7.3 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定](#)」の手順 17 は、次の内容に読み替えてください。

- 「[3.6.3 HDLM の新規インストール](#)」を参照して手順 2, 手順 4 から手順 11, 手順 13, および手順 14 を実行し、HDLM デバイスを作成してください。

また、「[3.6.3 HDLM の新規インストール](#)」の手順 11 は、次の内容に読み替えてください。

- HDLM をアンインストールする前にコピーしたファイル (.dlmfdrv.conf および .dlmfdrv.unconf) を、/etc/opt/DynamicLinkManager ディレクトリにコピーします。

コピーしたあと、手順 14 に進んでホストを再起動してください。

(3) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している場合

HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している場合、カーネルパッケージを更新または OS のアップデートパッケージを適用する手順を、次に説明します。

1. 次に示すファイルを、任意のディレクトリにコピーします。

- /etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf
- /etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.unconf※

注※

ファイルが存在しない場合、コピーする必要はありません。

2. HDLM をアンインストールします。

HDLM のアンインストールについては「[3.24.11 HDLM のアンインストール](#)」を参照してください。

3. カーネルパッケージを更新、または OS のアップデートパッケージを適用します。

4. HDLM をインストールします。

HDLM のインストールについては「[3.7 ブートディスクを管理するための HDLM のインストール](#)」を参照してください。

HDLM をインストールするとき、「[3.7.5 HDLM デバイス上の論理ボリューム \(LVM2\) をブートディスクとして使用するための設定](#)」の手順 10 は、次の内容に読み替えてください。

- 「3.6.3 HDLM の新規インストール」を参照して手順 2, 手順 4 から手順 11, 手順 13, および手順 14 を実行し, HDLM デバイスを作成してください。

次に示す手順 12 から手順 27 では, 設定ファイルを編集して, HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。

また, 「3.6.3 HDLM の新規インストール」の手順 11 は, 次の内容に読み替えてください。

- HDLM をアンインストールする前にコピーしたファイル (.dlmfdrv.conf および .dlmfdrv.unconf) を, /etc/opt/DynamicLinkManager ディレクトリにコピーします。
コピーしたあと, 手順 14 に進んでホストを再起動してください。

4.2.2 Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合

Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合, HDLM はインストールした状態で, カーネルパッケージの更新または OS のアップデートパッケージの適用ができます。

(1) HDLM デバイスをブートディスクとして使用していない場合

HDLM デバイスをブートディスクとして使用していない場合, カーネルパッケージを更新または OS のアップデートパッケージを適用する手順を, 次に説明します。

- 1 「3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備」の手順を実行します。
- 2 カーネルパッケージを更新, または OS のアップデートパッケージを適用します。
- 3 システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) を実行します。
dlmupdatesysinit ユティリティの詳細については, 「7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユーティリティ」を参照してください。
- 4 ホストを再起動します。

(2) HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合

HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合, カーネルパッケージを更新または OS のアップデートパッケージを適用する手順を, 次に説明します。

- 1 「3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備」の手順を実行します。
- 2 設定ファイルを編集して, SCSI デバイスが設定された状態で OS を起動するように定義を変更します。
「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 1 から手順 16 を実行してください。
- 3 カーネルパッケージを更新, または OS のアップデートパッケージを適用します。
- 4 システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) を実行します。
dlmupdatesysinit ユティリティの詳細については, 「7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユーティリティ」を参照してください。
- 5 ホストを再起動します。
- 6 HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。
「3.7.4 HDLM デバイスをブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 18 から手順 32 を実行してください。

(3) HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している場合

HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している場合、カーネルパッケージを更新または OS のアップデートパッケージを適用する手順を、次に説明します。

1. 「3.6.4 HDLM を再インストールまたはアップグレードインストールする前の準備」の手順を実行します。
2. 設定ファイルを編集して、SCSI デバイスが設定された状態で OS を起動するように定義を変更します。
「3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 1 から手順 20 を実行してください。
3. カーネルパッケージを更新、または OS のアップデートパッケージを適用します。
4. システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) を実行します。
dlmupdatesysinit ユティリティの詳細については、「7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユーティリティ」を参照してください。
5. ホストを再起動します。
6. HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための設定をします。
「3.7.6 HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) をブートディスクとして使用している環境でのアップグレードインストール」の手順 22 から手順 38 を実行してください。

4.3 コマンドを使用した HDLM の運用

この節では、HDLM コマンドで、HDLM の機能を使用する手順について説明します。各コマンドについては、「6. コマンドリファレンス」を参照してください。

4.3.1 コマンドを使用する場合の注意事項

- root 権限を持つユーザで、コマンドを実行してください。
- パラメタで指定する値にスペースが含まれる場合には、値全体を「"」（引用符）で囲ってください。

4.3.2 パスの情報を参照する

HDLM コマンドでパスの情報を参照する手順について説明します。

パスの情報を参照するには、HDLM コマンドの view オペレーションに -path パラメタを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

指定したホストデバイスにアクセスするパスの情報だけを参照する場合は、HDLM コマンドの view オペレーションに -path -hdev パラメタを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```

# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -hdev addmas
Paths:000004 OnlinePaths:000004
PathStatus IO-Count IO-Errors
Online 0 0

PathID PathName DiskName iLU ChgPort Status Type IO-Count IO-Errors DNun HDevName
000000 0000.0000.0000000000000000.0000 HITACHI .DF500F .0115 0000 0A Online Own 0 0 0 sdd lnas
000020 0000.0000.0000000000000001.0000 HITACHI .DF500F .0115 0000 1A Online Non 0 0 0 sdd lnas
000040 0001.0000.0000000000000000.0000 HITACHI .DF500F .0115 0000 0A Online Own 0 0 0 sdd lnas
000041 0001.0000.0000000000000001.0000 HITACHI .DF500F .0115 0000 1A Online Non 0 0 0 sdd lnas
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view. 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

表示される項目と説明については、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

4.3.3 パスの状態を変更する

パスの状態を変更する手順について、次に説明します。

(1) パスの状態を Online 状態にする場合

1. 現在のパスの状態を確認します。

パスを HBA ポート単位、CHA ポート単位、パス単位で Online 状態にする場合は、パス名またはパス管理 PATH_ID を確認してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

SCSI デバイス名を指定してパスを Online 状態にする場合は、パスの SCSI デバイス名を確認してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
```

2. パスの状態を Online 状態にするには、HDLM コマンドの online オペレーションを実行します。

Online 状態にするパスは、HBA ポート単位、CHA ポート単位、パス単位で指定できます。また、パスを指定する代わりに SCSI デバイス名を指定することもできます。パスの指定については、「6.5 online パスを稼働状態にする」を参照してください。

例えば、特定の HBA ポートを通るすべてのパスを Online 状態にする場合は、HDLM コマンドの online オペレーションに -hba パラメータを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -hba 0010.0000
```

```
KAPL01057-I 指定された HBA を通る全てのパスを Online にします。よろしいですか?
```

```
[y/n] :y
```

```
KAPL01061-I 3本のパスを Online にしました。失敗したパス = 0本。オペレーション名 = online
```

3. 変更したパスの状態を確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

(2) パスの状態を Offline(C)状態にする場合

1. 現在のパスの状態を確認します。

パスを HBA ポート単位, CHA ポート単位, パス単位で **Offline(C)**状態にする場合は, パス名またはパス管理 **PATH_ID**を確認してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

SCSI デバイス名を指定してパスを **Offline(C)**状態にする場合は, パスの SCSI デバイス名を確認してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
```

2. パスの状態を **Offline(C)**状態にするには, HDLM コマンドの **offline** オペレーションを実行します。

Offline(C)状態にするパスは, HBA ポート単位, CHA ポート単位, パス単位で指定できます。また, パスを指定する代わりに SCSI デバイス名を指定することもできます。パスの指定については, 「[6.4 offline パスを閉塞状態にする](#)」を参照してください。

例えば, 特定の HBA ポートを通るすべてのパスを **Offline(C)**状態にする場合は, HDLM コマンドの **offline** オペレーションに **-hba** パラメタを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -hba 0010.0000
KAPL01055-I 指定された HBA を通る全てのパスを Offline (C)にします。よろしいですか? [y/n] :y
KAPL01056-I 指定された HBA を通る全てのパスが Offline (C)になってもよい場合は y を入力してください。そうでない場合は n を入力してください。 [y/n] :y
KAPL01061-I 3 本のパスを Offline (C)にしました。失敗したパス = 0 本。オペレーション名 = offline
#
```

3. 変更したパスの状態を確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

4.3.4 LU の情報を参照する

HDLM コマンドで LU の情報を参照する手順について説明します。

LU の情報を参照するには, HDLM コマンドの **view** オペレーションに **-lu** パラメタを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
Product      : 9500V
SerialNumber : 0115
LUs          : 5

iLU  HDevName Device   PathID Status
0000 sddlmac  /dev/sds 000002 Online
      /dev/sdd 000007 Online
      /dev/sdi 000012 Online
      /dev/sdn 000017 Online
0001 sddlmad  /dev/sdt 000003 Online
      /dev/sde 000008 Online
      /dev/sdj 000013 Online
      /dev/sdo 000018 Online
0002 sddlmae  /dev/sdu 000004 Online
      /dev/sdf 000009 Online
```

```

                                /dev/sdk 000014 Online
                                /dev/sdp 000019 Online
0003 sddlmaa /dev/sdq 000000 Online
                                /dev/sdv 000005 Online
                                /dev/sdg 000010 Online
                                /dev/sdl 000015 Online
0004 sddlmaab /dev/sdr 000001 Online
                                /dev/sdw 000006 Online
                                /dev/sdh 000011 Online
                                /dev/sdm 000016 Online
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

表示される項目と説明については、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

4.3.5 HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を確認する

HDLM コマンドで HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を確認する手順について説明します。

HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応は, HDLM コマンドの view オペレーションに, -drv パラメタを指定して実行することで確認できます。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。このオペレーションの実行結果は, パスごとに 1 行ずつ表示されます。

次に view オペレーションの実行結果の例を示します。

```

# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv
PathID HDevName Device LDEV
000000 sddlmaa /dev/sdag SANRISE 9900V.15001.05B7
000001 sddlmaa /dev/sdq SANRISE 9900V.15001.05B7
000002 sddlmaab /dev/sdr SANRISE 9900V.15001.05B0
000003 sddlmac /dev/sds SANRISE 9900V.15001.05B1
000004 sddlmad /dev/sdt SANRISE 9900V.15001.05B2
000005 sddlmae /dev/sdu SANRISE 9900V.15001.05B3
000006 sddlmaf /dev/sdv SANRISE 9900V.15001.05B4
000007 sddlmag /dev/sdw SANRISE 9900V.15001.05B5
:
000028 sddlmae /dev/sdm SANRISE 9900V.15001.05B3
000029 sddlmaf /dev/sdn SANRISE 9900V.15001.05B4
000030 sddlmag /dev/sdo SANRISE 9900V.15001.05B5
000031 sddlmaah /dev/sdp SANRISE 9900V.15001.05B6
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

表示される項目と説明については、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

4.3.6 パスの統計情報を初期値にする

HDLM が管理するすべてのパスについて, 統計情報 (I/O 回数, および I/O 障害回数) の値を初期値 (0) にする手順について説明します。

この手順は, I/O 回数や I/O 障害回数を初期値 (0) にした時点から, I/O や I/O 障害が何回発生するかを調査したい場合に役立ちます。

1. 現在のパスの状態を確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

2. HDLM が管理する、すべてのパスの統計情報 (I/O 回数, I/O 障害回数) の値を初期値にするには、HDLM コマンドの clear オペレーションに -pdst パラメタを指定して実行します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr clear -pdst
KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = clear。よろしいですか? [y/n] : y
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = clear, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

3. パスの統計情報が初期値になったかどうかを確認します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

4.3.7 動作環境を参照または設定する

HDLM の動作環境を参照、または設定する手順について説明します。

(1) 動作環境を参照する

動作環境を参照するには、HDLM コマンドの view オペレーションに -sys -sfunc パラメタを指定して実行します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -sfunc
HDLM Version                : x.x.x-xx
Service Pack Version        :
Load Balance                 : on(extended lio)
Support Cluster              :
Elog Level                   : 3
Elog File Size(KB)           : 9900
Number Of Elog Files         : 2
Trace Level                  : 0
Trace File Size(KB)         : 1000
Number Of Trace Files       : 4
Path Health Checking         : on(30)
Auto Failback                : off
Reservation Status          :
Intermittent Error Monitor   : off
Dynamic I/O Path Control    : off(10)
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

監査ログの動作環境を参照するには、HDLM コマンドの view オペレーションに -sys -audlog パラメタを指定して実行します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -audlog
Audit Log                    : off
Audit Log Category          : -
Audit Log Facility           : -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

表示される項目と説明については、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

(2) 動作環境を設定する

HDLM の動作環境を設定するには、HDLM コマンドの `set` オペレーションを実行します。HDLM コマンドの `set` オペレーションで次の機能を設定できます。

- ロードバランス機能
- パスヘルスチェック機能
- 自動フェイルバック機能
- 間欠障害監視機能
- ダイナミック I/O パスコントロール機能
- 障害ログ採取レベル
- トレースレベル
- 障害ログファイルサイズ
- 障害ログファイル数
- トレースファイルサイズ
- トレースファイル数
- 監査ログ採取
- 監査ログの Facility
- ロードバランスの同一パス使用回数
- 拡張ロードバランスの同一パス使用回数

各機能の設定については、「6.6 set 動作環境を設定する」を参照してください。

例えば、障害ログ採取レベルを設定する場合は、HDLM コマンドの `set` オペレーションに `-ellv` パラメータを指定して実行します。確認メッセージに対して、コマンドを実行する場合は「y」を、実行しない場合は「n」を入力してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -ellv 1
KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = set。よろしいですか?
[y/n] : y
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = set, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

設定した内容が反映されているかどうか確認するには、「(1) 動作環境を参照する」の手順を実行してください。

4.3.8 ライセンス情報を参照する

ライセンス情報を参照する手順について説明します。

ライセンス情報を参照するには、HDLM コマンドの `view` オペレーションに `-sys -lic` パラメータを指定して実行します。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -lic
License Type Expiration
Permanent -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

#

表示される項目と説明については、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

4.3.9 ライセンスを更新する

ライセンスを更新する手順について説明します。

ライセンスを更新するには、HDLM コマンドの `set` オペレーションに `-lic` パラメタを指定して実行します。確認メッセージに対して、コマンドを実行する場合は「y」を、実行しない場合は「n」を入力してください。ライセンスキーファイルがない場合は、ライセンスキーの入力を求めるメッセージが表示されます。ライセンスキーの入力を求めるメッセージに対して、ライセンスキーを入力してください。

注意事項

HDLM コマンドの `set` オペレーションに `-lic` パラメタを指定してライセンスのインストールを実行する場合は、必ず単独で実行してください。HDLM コマンドの `set` オペレーションに `-lic` パラメタを含む HDLM コマンドを複数同時に実行しないでください。複数同時に実行した場合、コアファイルが生成され、次のメッセージを出力することがあります。

```
KAPL01075-E HDLM 内で重大エラーが発生しました。システム環境が不正です。
```

このメッセージが出力された場合は、HDLM コマンドの `view` オペレーションに `-sys -lic` パラメタを指定して実行し、ライセンスが正しくインストールされているかを確認してください。

コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -lic

KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = set。よろしいですか? [y/n] : y
KAPL01071-I 永久ライセンスがインストールされました。
#
```

4.3.10 HDLM のバージョン情報を参照する

HDLM のバージョン情報を参照する手順について、次に説明します。

HDLM のバージョン情報を参照するには、HDLM コマンドの `view` オペレーションに `-sys` パラメタを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
HDLM Version           : x.x.x-xx
Service Pack Version   :
Load Balance           : on(extended lio)
Support Cluster        :
Elog Level             : 3
Elog File Size (KB)    : 9900
Number Of Elog Files   : 2
Trace Level            : 0
Trace File Size(KB)    : 1000
Number Of Trace Files  : 4
Path Health Checking   : on(30)
Auto Failback          : off
Reservation Status     :
Intermittent Error Monitor : off
Dynamic I/O Path Control : off(10)
HDLM Manager Ver      : WakeupTime
Alive                  : x.x.x-xx   yyyy/mm/dd   hh:mm:ss
```

```

HDLM Alert Driver Ver      WakeupTime      ElogMem Size
Alive      x.x.x-xx      yyyy/mm/dd  hh:mm:ss 1000
HDLM Driver Ver      WakeupTime
Alive      x.x.x-xx      yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
License Type Expiration
Permanent      -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
#

```

「HDLM Version」に表示されているバージョンが HDLM のバージョンです。

4.3.11 HDLM のコンポーネント情報を参照する

HDLM のコンポーネント情報を参照する手順について、次に説明します。

HDLM のコンポーネント情報を参照するには、HDLM コマンドの view オペレーションに `-sys` パラメタを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```

# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
HDLM Version      : x.x.x-xx
Service Pack Version      :
Load Balance      : on(extended lio)
Support Cluster      :
Elog Level      : 3
Elog File Size (KB)      : 9900
Number Of Elog Files      : 2
Trace Level      : 0
Trace File Size(KB)      : 1000
Number Of Trace Files      : 4
Path Health Checking      : on(30)
Auto Failback      : off
Reservation Status      :
Intermittent Error Monitor      : off
Dynamic I/O Path Control      : off(10)
HDLM Manager Ver      WakeupTime
Alive      x.x.x-xx      yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
HDLM Alert Driver Ver      WakeupTime      ElogMem Size
Alive      x.x.x-xx      yyyy/mm/dd  hh:mm:ss 1000
HDLM Driver Ver      WakeupTime
Alive      x.x.x-xx      yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
License Type Expiration
Permanent      -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
#

```

表示される項目のうち、「HDLM Manager」、「HDLM Alert Driver」、および「HDLM Driver」が HDLM のコンポーネント情報です。

また、HDLM のコンポーネントごとに情報を参照できます。HDLM コマンドの view オペレーションに `-sys` パラメタと後続パラメタを指定して実行します。コマンドの実行例を次に示します。

```

# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -msrv
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -adrv
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -pdrv

```

4.4 HDLM マネージャの起動と停止

HDLM のプログラムに障害が発生した場合などに、HDLM マネージャを手動で起動、または停止して対処することがあります。

4.4.1 HDLM マネージャの起動

停止している HDLM マネージャを起動する場合、root 権限を持つユーザで Linux にログインして、次に示すコマンドを実行します。

```
# /etc/init.d/DLMManager start
Starting DLMManager: [ OK ]
```

コマンド名には次のように小文字 (dlmmanager) も使用できます。

```
# /etc/init.d/dlmmanager start
Starting DLMManager: [ OK ]
```

HDLM のインストール時に設定された起動スクリプトが起動し、HDLM マネージャが起動します。

注意事項

HDLM マネージャの停止処理後、すぐに起動処理を行う場合は、HDLM マネージャが停止したこと (/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -msrv で "Dead" が表示される) を確認してから起動処理を行ってください。

補足事項

HDLM マネージャの停止処理では、HDLM マネージャの停止に成功した旨のメッセージが表示されたあと、プロセスの終了処理に数秒かかります。そのため、停止処理後、直ちに起動処理を行うと、HDLM マネージャが起動中と判断し、起動処理が成功の旨のメッセージが出力されますが、HDLM マネージャの起動処理は中断され、その後、HDLM マネージャが停止した状態となります。

HDLM マネージャの起動は、次の方法で確認してください。

HDLM コマンドの view オペレーションで確認する場合

次のコマンドを実行してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -msrv
HDLM Manager Ver      WakeupTime
Alive      x.x.x-xx    yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd  hh:mm:ss
#
```

「HDLM Manager」が「Alive」であれば、マネージャが起動しています。

確認スクリプトで確認する場合

次のコマンドを実行して、HDLM マネージャの起動を確認してください。

```
# /etc/init.d/DLMManager status
.dlmngr_exe (pid 1936 1917 1916 1915 1913) を実行中...
```

注意事項

障害発生時、HDLM コマンドの view オペレーションと、DLMManager status コマンドの実行結果に差異が生じる場合があります。この場合、HDLM コマンドの実行結果を参照してください。

4.4.2 HDLM マネージャの停止

HDLM マネージャを停止する場合、root 権限を持つユーザで Linux にログインして、次に示すコマンドを実行します。

```
# /etc/init.d/DLManager stop
Stopping DLManager: [ OK ]
```

コマンド名には次のように小文字 (dlmmanager) も使用できます。

```
# /etc/init.d/dlmmanager stop
Stopping DLManager: [ OK ]
```

HDLM のインストール時に設定された停止スクリプトが起動し、HDLM マネージャが停止します。

HDLM マネージャの停止は、次の方法で確認してください。

HDLM コマンドの view オペレーションで確認する場合

次のコマンドを実行してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -msrv
HDLM Manager Ver      WakeupTime
Dead
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

「HDLM Manager」が「Dead」であれば、マネージャが停止しています。

確認スクリプトで確認する場合

次のコマンドを実行して、HDLM マネージャの停止を確認してください。

```
# /etc/init.d/DLManager status
Stopping DLManager: [ OK ]
```

注意事項

障害発生時、HDLM コマンドの view オペレーションと、DLManager status コマンドの実行結果に差異が生じる場合があります。この場合、HDLM コマンドの実行結果を参照してください。

4.5 HDLM の常駐プロセス

HDLM の常駐プロセスを次の表に示します。システムの運用で HDLM のプロセスを監視する必要がある場合は、次のプロセスを指定してください。

表 4-2 HDLM の常駐プロセス一覧

プロセス名	説明
.dlmnggr_exe	HDLM マネージャのプロセス
hbsa_service	Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントのプロセス※

注※

HDLM と Global Link Manager を連携させない場合は、このプロセスを監視する必要はありません。

4.6 HDLM 運用環境の構成変更

この節では、HDLM を運用する環境の構成を変更する場合の操作について説明します。

次に示す場合、この節で説明している操作が必要になります。

- パスを構成するハードウェアを交換する。
- 新規 LU を追加する。
- 既存 LU を削除する。
- LU へのパスを追加または削除する。
- デバイスを HDLM の管理対象にする、または管理対象から除外する。

4.6.1 HBA の交換

次の条件をすべて満たす場合、アプリケーションを実行させたまま HBA を交換できます。

- ホストの OS が次のどちらかである※。
 - Red Hat Enterprise Linux 5
 - Red Hat Enterprise Linux 6

注※

Oracle Enterprise Linux 5, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, および Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 はサポートしていません。

- HBA が交換できるホストを使用していて、同じ機種 of HBA に交換する。
- 複数の HBA を運用していて、それらの HBA を経由するパスが同じ LU に接続されている。
- LU に対して複数の稼働状態のパスがある。
- BladeSymphony 環境である。

HBA の交換手順については、「[\(2\) HBA の交換](#)」を参照してください。

(1) HBA を交換する前の準備

HBA を交換する前に次の手順を実行して、acpiphp モジュールがロードされていることを確認してください。

1. OS の lsmod コマンドを実行します。

```
# /sbin/lsmod | grep acpiphp
acpiphp                58713      0
```

acpiphp モジュールがロードされている場合は、「[\(2\) HBA の交換](#)」の手順に従って、HBA を交換してください。

acpiphp モジュールがロードされていない場合は、手順 2 に進んでください。

2. acpiphp.modules を作成します。

次に示すコマンドを実行してください。

```
# vi /etc/sysconfig/modules/acpiphp.modules
```

acpiphp.modules の編集内容を次に示します。

```
#!/bin/bash
/sbin/modprobe acpiphp
```

編集内容を保存したら、OS の chmod コマンドで実行権限を設定してください。

```
# chmod 755 /etc/sysconfig/modules/acpiphp.modules
```

chmod コマンドを実行したら、実行権限が次の下線部のとおりに設定されていることを確認してください。

```
# ls -l /etc/sysconfig/modules/acpiphp.modules
-rwxr-xr-x 1 root root 35 mm dd hh:mm
/etc/sysconfig/modules/acpiphp.modules
```

3. acpiphp モジュールをロードします。
手順 2 で作成した、acpiphp.modules を実行します。

```
# /etc/sysconfig/modules/acpiphp.modules
```

コマンドを実行したら、acpiphp モジュールがロードされていることを確認してください。

```
# /sbin/lsmmod | grep acpiphp
acpiphp          58713    0
```

(2) HBA の交換

HBA の交換では、あらかじめ交換する HBA を経由するパスを閉塞状態にしておく必要があります。HBA の交換手順を次に示します。

1. 交換する HBA のポート WWN 情報を確認します。

次に示すコマンドを実行します。

```
# /opt/hitachi/drivers/hba/hfcmgr -g
Time:yyyy/mm/dd hh:mm:ss
      :
      :
Model      : HFC0402-E
Parts Number : 3HAC82101-A
Firmware   : 260803
           WWPN:2400000047010278 Device:hfcldd0 [LinkUp]
           WWPN:240000004701027a Device:hfcldd1 [LinkUp]

Model      : HFC0402-E
Parts Number : 3HAC82101-A
Firmware   : 260803
           WWPN:2400000047010270 Device:hfcldd2 [LinkUp]
           WWPN:2400000047010272 Device:hfcldd3 [LinkUp]
```

WWPN のあとに表示される数字が、HBA のポート WWN 情報です。

以降、下線部で示すポート WWN 情報を持つ HBA を交換対象として説明します。

2. HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path -hbaportwwn) を実行して、交換する HBA を経由するパスの情報を確認します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -hbaportwwn
Paths:000007 OnlinePaths:000007
PathStatus IO-Count IO-Errors
Online      39783      0

PathID PathName                HBAPortWWN      DskName          iLU  ChaPort
Status  Type  IO-Count  IO-Errors  DNum HDevName
000000 0000 0000 0000000000000000 0000 2400000047010278 HITACHI .DF600F .85011515 0186 1C
Online Own      30      0      0 sddlmaa
000001 0000 0000 0000000000000000 0001 2400000047010278 HITACHI .DF600F .85011515 0187 1C
Online Own      30      0      0 sddlmaab
000002 0000 0000 0000000000000000 0002 2400000047010278 HITACHI .DF600F .85011515 0188 1C
Online Own      30      0      0 sddlmac
000003 0003 0000 0000000000000000 0000 2400000047010272 HITACHI .DF600F .73010227 0090 0A
Online Own    38693      0      0 sddlmaad
000004 0002 0000 0000000000000000 0001 2400000047010270 HITACHI .DF600F .85011515 0186 0A
Online Own      0      0      0 sddlmaa
000005 0002 0000 0000000000000000 0002 2400000047010270 HITACHI .DF600F .85011515 0187 0A
Online Own      0      0      0 sddlmaab
000006 0002 0000 0000000000000000 0003 2400000047010270 HITACHI .DF600F .85011515 0188 0A
Online Own      0      0      0 sddlmac
KAPLO1001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

手順1で確認した HBA のポート WWN 情報と、実行結果に表示された HBAPortWWN を参照して、PathName に表示されたホストポート番号とバス番号を確認します。

PathName のうち、左端の番号がホストポート番号です。ホストポート番号の右側にあるピリオドから2番目のピリオドの番号までが、バス番号です。

ホストポート番号とバス番号は、手順3でバスを Offline (C) 状態にするときに指定します。

この実行例の場合、交換する HBA のポート WWN 情報（下線部）に対応するホストポート番号とバス番号は、網掛けの部分です。

3. HDLM コマンドの offline オペレーション (dlnkmgr offline -hba) を実行して、手順2で確認した HBA ポートを通るすべてのバスを Offline (C) 状態にします。

-hba パラメータには、手順2で確認したホストポート番号とバス番号を、ピリオドで区切って指定します。

ホストポート番号が 0000、バス番号が 0000 のバスを Offline (C) 状態にする場合の実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -hba 0000.0000
```

offline オペレーションを実行したら、HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path -hbaortwwn) を実行して、交換する HBA を経由するバスの Status がすべて Offline (C) 状態になっていることを確認してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -hbaortwwn
```

4. HBA を交換します。
5. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -r) を実行して、HDLM デバイスを再構成します。

```
# dlmcfgmgr -r
```

6. HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path -hbaortwwn) を実行して、新しいバスが追加されていることを確認します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -hbaortwwn
Paths:00010 OnlinePaths:00007
PathStatus IO-Count IO-Errors
Reduced 214 0

PathID PathName HBAPortWWN DevName ILU ChaPort
Status Type IO-Count IO-Errors DNum HDevName
000000 0000.0000.0000000000000000.0000 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0186 1C
Offline(C) Own 0 0 0 sddlmaa
000001 0000.0000.0000000000000000.0001 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0187 1C
Offline(C) Own 0 0 0 sddlmaab
000002 0000.0000.0000000000000000.0002 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0188 1C
Offline(C) Own 0 0 0 sddlmac
000003 0003.0000.0000000000000000.0000 2400000047010272 HITACHI DF600F .73010227 0090 0A
Online Own 214 0 0 sddlmad
000004 0002.0000.0000000000000000.0001 2400000047010270 HITACHI DF600F .85011515 0186 0A
Online Own 0 0 0 sddlmaa
000005 0002.0000.0000000000000000.0002 2400000047010270 HITACHI DF600F .85011515 0187 0A
Online Own 0 0 0 sddlmaab
000006 0002.0000.0000000000000000.0003 2400000047010270 HITACHI DF600F .85011515 0188 0A
Online Own 0 0 0 sddlmac
000007 000A.0000.0000000000000000.0000 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0186 1C
Online Own 0 0 0 sddlmaa
000008 000A.0000.0000000000000000.0001 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0187 1C
Online Own 0 0 0 sddlmaab
000009 000A.0000.0000000000000000.0002 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0188 1C
Online Own 0 0 0 sddlmac
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

網掛けの部分に、新しいバスが追加されています。

HBA の交換前に offline (C) 状態にした古いパスの情報（下線部）が残っていますが、これは手順8を実行することで削除されます。

7. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -v) を実行して、新しい SCSI デバイスが追加されていることを確認します。

```
# dlmcfgmgr -v
```

HDevName	Management	Device	Host	Channel	Target	Lun
/dev/sddlmaa	configured	<u>/dev/sda</u>	0	0	0	0
		<u>/dev/sde</u>	2	0	0	1
		<u>/dev/sda</u>	10	0	0	0
/dev/sddlmac	configured	<u>/dev/sdf</u>	2	0	0	2
		<u>/dev/sdb</u>	0	0	0	1
		<u>/dev/sdb</u>	10	0	0	1
/dev/sddlmac	configured	<u>/dev/sdc</u>	0	0	0	2
		<u>/dev/sdg</u>	2	0	0	3
		<u>/dev/sdc</u>	10	0	0	2
/dev/sddlmad	configured	/dev/sdh	3	0	0	0

```
KAPL10302-1 /sbin/dlmcfgmgr completed normally.
```

網掛けの部分に、新しい SCSI デバイスが追加されています。

HBA を交換する前の古い SCSI デバイスの情報 (下線部) が残っていますが、これは手順 8 を実行することで削除されます。

8. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -u) を実行して、古いパスおよび SCSI デバイスの情報を削除します。

-u パラメタには、手順 7 で参照した、古い SCSI デバイスの情報が含まれている HDevName を指定します。古い SCSI デバイスの情報が含まれているすべての HDevName に対して、dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。

HDevName が /dev/sddlmaa の場合の実行例を次に示します。

```
# dlmcfgmgr -u /dev/sddlmaa
```

9. HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path -hbaportwwn) を実行して、Offline (C) 状態だった古いパスの情報がすべて削除されたことを確認します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -hbaportwwn
```

10. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -v) を実行して、古い SCSI デバイスの情報がすべて削除されたことを確認します。

```
# dlmcfgmgr -v
```

以上で、HBA の交換は終了です。

HBA の交換後にホストを再起動した場合は、「(3) ホスト再起動後のパス情報の更新」に示す手順を実行して、パスの情報を更新してください。

(3) ホスト再起動後のパス情報の更新

HBA の交換後にホストを再起動すると、HCTL 情報のホストポート番号が再設定されます。このため、HBA を交換したときに存在していたパスの情報が古くなり、Offline (E) 状態となって残ります。これを解消するには、次の手順を実行して、古くなったパスの情報を削除してください。

1. HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path -hbaportwwn) を実行して、パスの状態を確認します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnmgr view -path -hbaportwn
Paths:000010 OnlinePaths:000007
PathStatus IO-Count IO-Errors
Reduced 31367 0

PathID PathName HBAPortWWN DiskName iLU
ChaPort
Status Type IO-Count IO-Errors DNum HDevName
000000 0002.0000.0000000000000000.0001 2400000047010270 HITACHI DF600F .85011515 0186 0A
Online Own 29 0 0 sddlmaa
000001 0002.0000.0000000000000000.0002 2400000047010270 HITACHI DF600F .85011515 0187 0A
Online Own 29 0 0 sddlmaab
000002 0002.0000.0000000000000000.0003 2400000047010270 HITACHI DF600F .85011515 0188 0A
Online Own 29 0 0 sddlmac
000003 0003.0000.0000000000000000.0000 2400000047010272 HITACHI DF600F .73010227 0090 0A
Online Own 31280 0 0 sddlmad
000004 000A.0000.0000000000000000.0000 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0186 1C
Offline(E) Own 0 0 0 sddlmaa
000005 000A.0000.0000000000000000.0001 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0187 1C
Offline(E) Own 0 0 0 sddlmaab
000006 000A.0000.0000000000000000.0002 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0188 1C
Offline(E) Own 0 0 0 sddlmac
000007 0000.0000.0000000000000000.0000 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0186 1C
Online Own 0 0 0 sddlmaa
000008 0000.0000.0000000000000000.0001 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0187 1C
Online Own 0 0 0 sddlmaab
000009 0000.0000.0000000000000000.0002 2400000047010278 HITACHI DF600F .85011515 0188 1C
Online Own 0 0 0 sddlmac
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

HBA を交換したときに存在していたパスが、Offline (E) 状態となって残っています。

2. dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -v) を実行して、HDLM デバイスの状態を確認します。

```
# dlmcfmgmgr -v
HDevName Management Device Host Channel Target Lun
/dev/sddlmaa configured /dev/sde 2 0 0 1
- 10 0 0 0
/dev/sddlmaab configured /dev/sda 0 0 0 0
- 10 0 0 1
/dev/sddlmac configured /dev/sdf 2 0 0 2
/dev/sdb 0 0 0 1
/dev/sddlg /dev/sdg 2 0 0 3
- 10 0 0 2
/dev/sddlc /dev/sdc 0 0 0 2
/dev/sddlmad configured /dev/sdh 3 0 0 0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgmgr completed normally.
```

HBA を交換したときに存在していたパスが Offline (E) 状態のため、Device に「-」(ハイフン) が表示されています。

3. dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -u) を実行して、古いパスおよび SCSI デバイスの情報を削除します。

-u パラメータには、手順 2 で参照した、Device に「-」(ハイフン) が表示されている HDevName を指定します。Device に「-」(ハイフン) が表示されているすべての HDevName に対して、dlmcfmgmgr ユティリティを実行してください。

HDevName が /dev/sddlmaa の場合の実行例を次に示します。

```
# dlmcfmgmgr -u /dev/sddlmaa
```

4. dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -v) を実行して、Device に「-」(ハイフン) が表示された行がすべて削除されたことを確認します。

```
# dlmcfmgmgr -v
```

5. HDLM コマンドの view オペレーション (dlnmgr view -path -hbaportwn) を実行して、Offline (E) 状態だったパスの情報がすべて削除されたことを確認します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -hbaportwvn
```

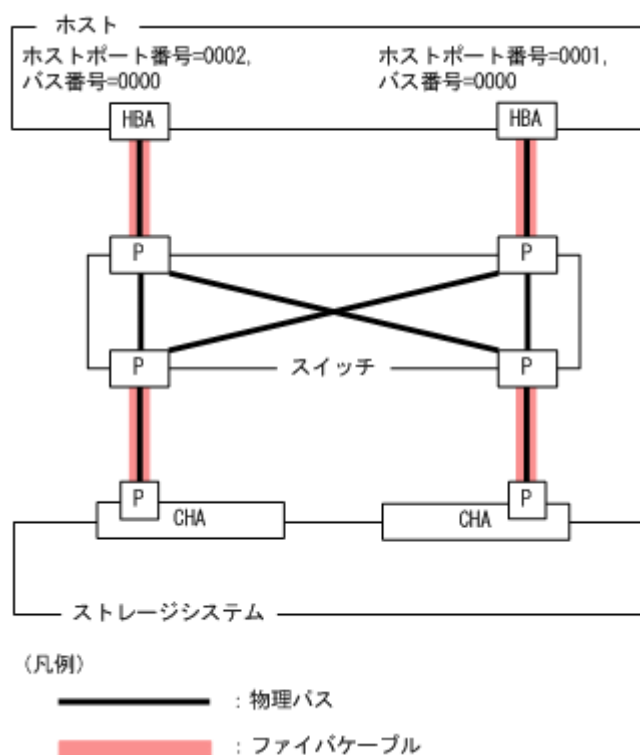
4.6.2 ファイバケーブルの交換

LU に対して複数の稼働状態のパスがある場合、交換するファイバケーブルを経由するパスだけを閉塞状態にして、そのほかのパスを使用してアクセスを続けることで、アプリケーションを運用したままファイバケーブルを交換できます。

ファイバケーブルを交換する手順の例を次に示します。なお、次に示す手順で交換できるのは、ファイバケーブルだけです。

「[図 4-2 ファイバケーブルを交換する手順説明の前提となるシステム構成](#)」に基づいてファイバケーブルを交換する手順を説明します。

図 4-2 ファイバケーブルを交換する手順説明の前提となるシステム構成



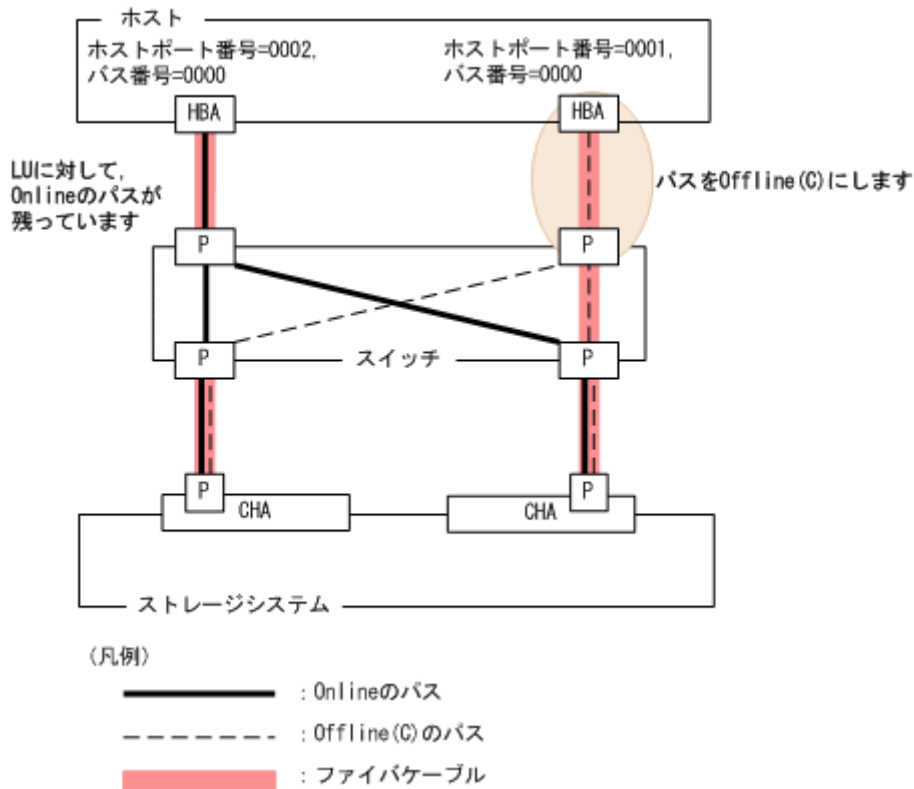
1. 交換するファイバケーブルを経由するパス（ファイバケーブルが接続している HBA を経由するパス）を Offline(C)状態にします。

ホストポート番号=0001, バス番号=0000 の HBA を経由するパスを Offline(C)状態にする場合、次のコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -hba 0001.0000
```

ホストポート番号=0001 の HBA を経由するパスが Offline 状態になりますが、ホストポート番号=0002 の HBA を経由するパスは Online 状態です。

図 4-3 交換するファイバケーブルを経由するパスを Offline(C)にした状態



2. パスを Offline(C)状態にしたファイバケーブルを交換します。
ここでは、ホストポート番号=0001 の HBA に接続しているファイバケーブルを交換します。
3. 交換したファイバケーブルを経由するパス（ファイバケーブルが接続している HBA を経由するパス）を Online 状態にします。
ホストポート番号=0001, バス番号=0000 の HBA を経由するパスを Online 状態にする場合、次のコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -hba 0001.0000
```

4. パス情報を確認します。
次のコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

パス情報の詳細については、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

4.6.3 ファイバチャネルスイッチの交換

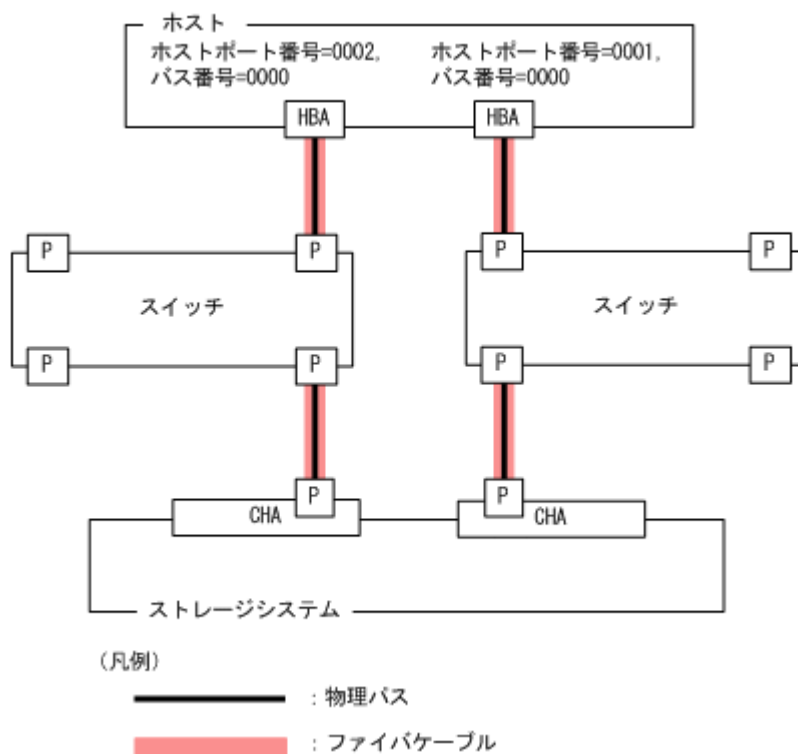
LU に対して複数の稼働状態のパスがある場合、交換するファイバチャネルスイッチを経由するパスだけを閉塞状態にして、そのほかのファイバチャネルスイッチを使用してアクセスを続けることで、アプリケーションを運用したままファイバチャネルスイッチを交換できます。

ファイバチャネルスイッチを交換する手順の例を次に示します。なお、次に示す手順で交換できるのは、ファイバチャネルスイッチだけです。

次の構成のシステムがあるとして。

「図 4-4 ファイバチャネルスイッチを交換する手順説明の前提となるシステム構成」に基づいてファイバチャネルスイッチを交換する手順を説明します。

図 4-4 ファイバチャネルスイッチを交換する手順説明の前提となるシステム構成



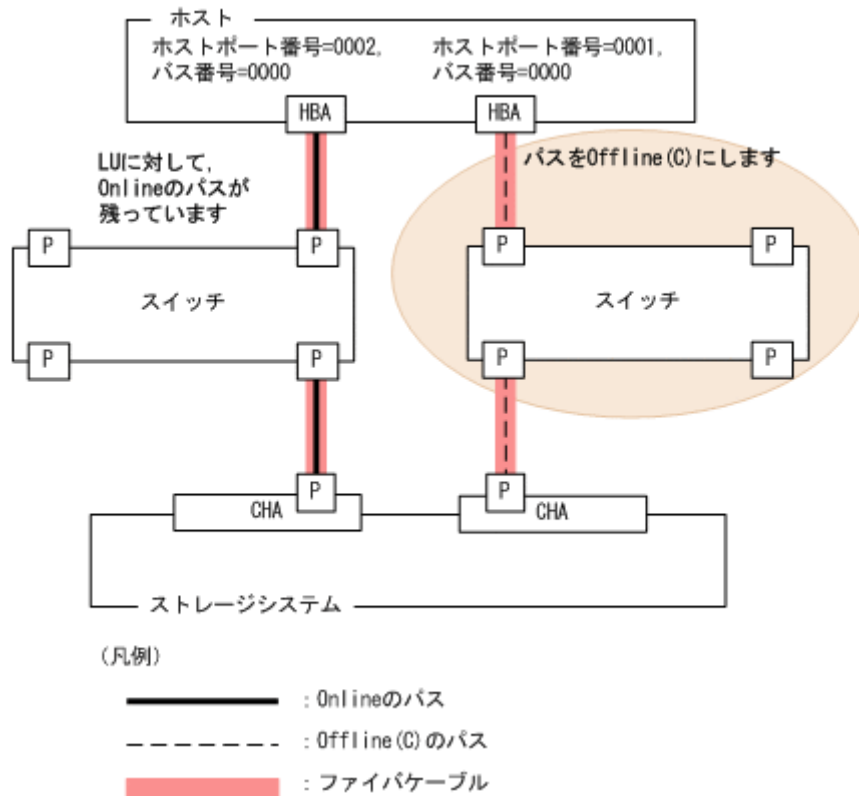
1. 交換するファイバチャネルスイッチを経由するパス(ファイバチャネルスイッチが接続している HBA を経由するパス) を Offline(C)状態にします。

ホストポート番号=0001, バス番号=0000 のパスを Offline(C)状態にする場合, 次のコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -hba 0001.0000
```

ホストポート番号=0001 の HBA を経由するパスが Offline 状態になりますが, ホストポート番号=0002 の HBA を経由するパスは Online 状態です。

図 4-5 交換するファイバチャネルスイッチを経由するパスを Offline(C)にした状態



2. パスを Offline(C)状態にしたファイバチャネルスイッチを交換します。
ここでは、ホストポート番号=0001のHBAに接続しているファイバチャネルスイッチを交換します。
3. 交換したファイバチャネルスイッチを経由するパスを Online 状態にします。
ホストポート番号=0001、バス番号=0000のHBAを経由するパスを Online 状態にする場合、次のコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -hba 0001.0000
```

4. パス情報を確認します。
次のコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
```

パス情報の詳細については、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

4.6.4 HDLM デバイスの構成変更

HDLM デバイスの構成を変更するための操作、手順を説明します。

なお、構成変更の基となる LU の設定/変更 (追加, 変更, 削除) の操作は HDLM の機能ではなく、ストレージシステムの管理プログラムを使用します。LU の設定/変更についてはストレージシステムに付属するマニュアルを参照してください。

また、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) による操作のすべては、ログとして /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfgmgr1.log ファイルに記録されます。このファイルを見ることで、ユーザは、どのような構成変更が行われたのか、またはどのような理由のために dlmcfmgr ユティリティの実行が失敗したのかを調査できます。dlmcfmgr ユティリティのログについては、

「2.12.1 採取するログの種類」も参照してください。また、dlmcfmgmgr ユティリティについては、「7.3 dlmcfmgmgr HDLM 構成定義ユティリティ」を参照してください。

(1) HDLM デバイスの構成を変更する場合の注意事項

HDLM デバイスの構成を変更する場合の注意事項を次に説明します。

- HDLM 管理対象外にしたデバイスへのパスが使用していたパス管理 PATH_ID は、管理対象外になったときに解放されます。このため、パスの解放後にパス管理 PATH_ID が、不連続に表示される場合があります。
- HDLM は、管理対象にしたデバイスへのパスに対して、パス管理 PATH_ID を空いている ID から若い順に割り当てます。
- HDLM 管理対象外のデバイスを管理対象にする場合、HDLM は管理対象外になる前のパスの状態 (Online(E), Offline(C)など) とは関係なく、管理対象になったデバイスのすべてのパスに対して、パスが正常ならば Online 状態とします。
- LU を使用している間 (I/O 実行中やマウント実行中などの場合)、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmgr) に、-o パラメタ、-i パラメタ、または -u パラメタを指定して実行しないでください。
- 複数のパスがある LU の一部のパスが断線している状態でディスクパーティションを作成または変更した場合、断線していたパスを接続してもディスクパーティションの構成が認識されないことがあります。その場合は、断線していたパスを接続したあと、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -r) を実行するか、ホストを再起動してください。
- dlmcfmgmgr ユティリティを実行して HDLM デバイスの構成を変更する場合、HAL デーモン※の影響で、メモリ不足になることがあります。この場合、ホストが応答しなくなります。これを回避するには、dlmcfmgmgr ユティリティを実行するとき HAL デーモンを停止してください。HAL デーモンを停止する手順については、「3.5.3 インストールについての注意事項」を参照してください。

注※

USB デバイス、CD-ROM の挿入など、ハードウェア構成の変化を検知します。

- dlmcfmgmgr ユティリティに -v パラメタを指定して実行した場合、次のように Device 列に「-」(ハイフン) と表示されることがあります。

```
# dlmcfmgmgr -v
HDevName      Management  Device      Host Channel Target Lun
/dev/sddlmaa  configured /dev/sdd    3         0         0  0
               /dev/sdk    3         0         1  0
               /dev/sdr    4         0         0  0
               -          4         0         1  0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgmgr completed normally.
```

このような状態が発生する要因としては、次のような操作例が想定されます。

- パスが断線している状態でホストを再起動した。
- LU を削除したあとにホストを再起動した。
- ファイバケーブルの接続を変更したあとにホストを再起動した。
- ファイバチャネルスイッチのゾーン設定を変更したあとにホストを再起動した。

なお、SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合は、システムの運用中に次に示す事象が起きたときにも発生します。

- パスが断線した。
- LU を削除した。
- ファイバケーブルの接続を変更した。

。 ファイバチャネルスイッチのゾーン設定を変更した。
「-」(ハイフン)の状態になっているパスを削除したい場合は、`dlnmcfmgr` ユティリティに `-u` パラメータを指定して実行してください。

詳細については「7.3 `dlnmcfmgr` HDLM 構成定義ユティリティ」を参照してください。

- LU の割り当てを解除し、その LU に接続していたパスを使って別の LU を割り当て直した場合、LU と対応する HDLM デバイスに変更されます。この場合、割り当てを解除した LU に対応する HDLM デバイスは削除され、割り当て直した LU には新しい HDLM デバイスが割り当てられます。

また、ストレージシステムを交換した場合、従来の LU 構成と同一にしても、それぞれの LU には新しい HDLM デバイスが割り当てられます。

(2) LU を追加する

HDLM がインストールされているホストに対して、新規に LU に対応する HDLM デバイスを追加する方法を、次に示します。

1. ストレージシステムの管理プログラムを使って、該当するホストにまだ割り当てていない LU を、該当するホストへのパスを持つストレージシステムのポートに割り当ててパスを設定します。

パスの設定については、ストレージシステムに付属するマニュアルを参照してください。

2. ホストを再起動しないで LU を追加する場合は、手順 3 と 4 を行います。再起動する場合は、手順 5 に進んでください。
3. 手順 1 で設定した全パス分の SCSI デバイスを作成します。

再起動なしでの追加のため、手順 1 で追加した LU 用の SCSI デバイスが作成されないので、次の表に示すデバイスの追加用のコマンドを手動で実行して、SCSI デバイスを作成する必要があります。

表 4-3 SCSI デバイスの追加と削除

操作目的	実行するコマンド
デバイスの追加 (FC-SAN 環境の場合)	<ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 1 で QLogic 社製の HBA ドライバを使用している場合 次の順序でコマンドを実行してください。 # <code>echo "scsi-qlascan" > /proc/scsi/driver-name/n</code> # <code>cat /proc/scsi/driver-name/n</code> コマンド出力結果の SCSI LUN Information:以下に出力される Id:Lun 部分を参照し、追加したデバイスのターゲット ID を基に以下のコマンドを実行してください。 # <code>echo "scsi add-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi</code> • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 1 で Emulex 社製の HBA ドライバを使用している場合 次のコマンドを実行してください。 # <code>echo "scsi add-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi</code> • 次に示す OS と HBA ドライバを使用している場合 <ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 3 以降と QLogic 社製 HBA ドライバ • Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 と QLogic 社製 HBA ドライバ • SUSE LINUX Enterprise Server と QLogic 社製 HBA ドライバ • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 3 以降と Emulex 社製 HBA ドライバ • Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 と Emulex 社製 HBA ドライバ • SUSE LINUX Enterprise Server と Emulex 社製 HBA ドライバ • Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 と Brocade 社製 HBA ドライバ • SUSE LINUX Enterprise Server と Brocade 社製 HBA ドライバ

操作目的	実行するコマンド
	<p>次のコマンドを実行してください。</p> <pre># echo "- - -" > /sys/class/scsi_host/hostn/scan</pre> <p>次のコマンドを実行して、OS がデバイスを認識しているかどうかを確認してください。</p> <pre># cat /proc/scsi/scsi</pre> <p>OS がデバイスを認識していない場合は、次の順序でコマンドを実行してください。</p> <pre># echo "1" > /sys/class/fc_host/hostn/issue_lip</pre> <pre># echo "- - -" > /sys/class/scsi_host/hostn/scan</pre> <p>Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、OS のホットプラグ機能によって自動的にデバイスが認識されることがあります。この場合、上記の手順は必要ありません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 日立製の HBA ドライバを使用している場合 <p>次のコマンドを実行してください。</p> <pre># echo "scsi add-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi</pre>
デバイスの追加 (IP-SAN 環境の場合)	<ul style="list-style-type: none"> iSCSI イニシエーターとセッションが確立されていないターゲットに追加したデバイスの場合 <p>次のコマンドを実行して、OS にターゲットを認識させてください。</p> <pre># iscsiadm -m discovery -t sendtargets -p ターゲットの IP アドレス</pre> <p>次に、セッションを確立するためターゲットにログインしてください。</p> <pre># iscsiadm -m node -T ターゲット名 -p ターゲットの IP アドレス:ターゲットのポート番号 --login</pre> <ul style="list-style-type: none"> iSCSI イニシエーターとセッションが確立されているターゲットに追加したデバイスの場合 <p>次のコマンドを実行してください。</p> <pre># iscsiadm -m session -R</pre>
デバイスの削除 (FC-SAN 環境の場合)	<pre># dlmcfgmgr -o HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</pre> <pre># echo "scsi remove-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi</pre> <pre># dlmcfgmgr -i HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</pre> <p>SUSE LINUX Enterprise Server 11, Red Hat Enterprise Linux 6, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, または Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用している場合、断線している状態のパスを削除するときは上記の手順は必要ありません。</p>
デバイスの削除 (IP-SAN 環境の場合)	<pre># echo "scsi remove-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi</pre> <p>SUSE LINUX Enterprise Server 11, Red Hat Enterprise Linux 6, Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5, または Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用している場合、断線している状態のパスを削除するときは上記の手順は必要ありません。</p>

(凡例)

a : Host ID (ホストポート番号)

b : Channel 番号 (パス番号)

c : Target ID (ターゲット ID)

d : Lun (ホスト LU 番号)

n : ホストポート番号

driver-name : qlaxxxx (使用しているドライバの名称)

指定例を次に示します。

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 で QLogic 社製の HBA ドライバを使用して、デバイスを追加する場合

```
# echo "scsi-qlascan" > /proc/scsi/qla2200/1
# cat /proc/scsi/qla2200/1
# echo "scsi add-single-device 1 0 1 1" > /proc/scsi/scsi
```

4. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfgmgr -r) を実行します。

手順 3 で作成した SCSI デバイスを基に、手順 1 で設定したパスに対応する HDLM デバイスが追加されます。dlmcfmgmgr ユティリティの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfmgmgr -r
```

5. HDLM がインストールされているホストを再起動します。

手順 3 と 4 を行っている場合は、再起動は不要です。手順 6 に進んでください。

再起動時に、手順 1 で設定したパスに対応する HDLM デバイスが自動的に追加されます。

6. /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgmgr1.log を参照するか、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -v) を実行して、追加した LU に対応する HDLM デバイスが作成されていることを確認します。

dlmcfmgmgr ユティリティを実行する場合の例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfmgmgr -v
```

(3) LU へのパスを追加する

既存の LU (HDLM デバイス) にパスを追加する方法を、次に示します。

1. ストレージシステムの管理プログラムを使って、該当する LU にパスを追加設定します。

パスの追加設定についてはストレージシステムに付属するマニュアルを参照してください。

2. ホストを再起動しないで LU へのパスを追加する場合は、手順 3 と 4 を行います。再起動する場合は、手順 5 に進んでください。

3. 手順 1 で追加設定した全パス分の SCSI デバイスを作成します。

再起動なしでのパス追加のため、手順 1 で追加設定したパス用の SCSI デバイスは作成されないため、「表 4-3 SCSI デバイスの追加と削除」に示すデバイスの追加用のコマンドを手動で実行して、SCSI デバイスを作成する必要があります。

4. HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmgr -r) を実行します。

手順 3 で作成した SCSI デバイスを基に、手順 1 で追加設定したパスが、該当する LU と HDLM デバイスを結ぶパスとして追加されます。dlmcfmgmgr ユティリティの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfmgmgr -r
```

5. HDLM がインストールされているホストを再起動します。

手順 3 と 4 を行っている場合は、再起動は不要です。手順 6 に進んでください。

再起動時に、手順 1 で追加設定したパスが、該当する LU と HDLM デバイスを結ぶパスとして自動的に追加されます。

6. /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgmgr1.log を参照するか、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -v) を実行して、該当する HDLM デバイスにパスが増えていることを確認します。

dlmcfmgmgr ユティリティを実行する場合の例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfmgmgr -v
```

(4) LU を削除する

既存の LU に対応する HDLM デバイスを削除する方法を、次に示します。

1. 該当する LU へのすべてのアクセスを停止します。

2. ストレージシステムの管理プログラムを使って、ストレージシステムのポートから、該当する LU へのすべてのパス割り当てを解除（パスを削除）します。
パス割り当ての解除（パス削除）についてはストレージシステムに付属するマニュアルを参照してください。
3. ホストを再起動しないで LU に対応する HDLM デバイスを削除する場合は、手順 4 から 5 を行います。再起動する場合は、手順 6 に進んでください。
4. 手順 2 で割り当てを解除したパス用の SCSI デバイスを削除します。
再起動なしでの削除のため、手順 2 で割り当てを解除したパス用の SCSI デバイスは削除されないのので、「表 4-3 SCSI デバイスの追加と削除」に示すデバイスの削除用のコマンドを手動で実行して、SCSI デバイスを削除する必要があります。
5. HDLM 構成定義ユーティリティ (`dlnmcfmgmgr -r`) を実行します。
手順 4 で解除した SCSI デバイスの情報を HDLM デバイスに反映させます。 `dlnmcfmgmgr` ユティリティの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dlnmcfmgmgr -r
```
6. HDLM がインストールされているホストを再起動します。
手順 4 から 5 を行っている場合は、再起動は不要です。手順 7 に進んでください。
7. `dlnmcfmgmgr` ユティリティ (`dlnmcfmgmgr -v`) か HDLM コマンドの view オペレーション (`dlnkmgr view -drv`) を実行します (任意)。
手順 2 でパス割り当てを解除した LU に対応するすべての SCSI デバイス名が「-」(ハイフン)になっていることを確認します。実行例を次に示します。
`dlnmcfmgmgr` ユティリティに `-v` オプションを指定して実行する場合

```
# /sbin/dlnmcfmgmgr -v
```


view オペレーションに `-drv` オプションを指定して実行する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv
```
8. 手順 2 でパス割り当てを解除した LU に対応するすべての HDLM デバイスに対して、`dlnmcfmgmgr` ユティリティ (`dlnmcfmgmgr -u` *HDLM デバイスの論理デバイスファイル名*) を実行し、HDLM デバイスの登録を解除します。
該当する HDLM デバイスに関するパスの情報が削除されます。 `dlnmcfmgmgr` ユティリティの実行例を次に示します。

```
# /sbin/dlnmcfmgmgr -u HDLM デバイスの論理デバイスファイル名
```
9. `/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlnmcfmgmgr1.log` を参照するか、`dlnmcfmgmgr` ユティリティ (`dlnmcfmgmgr -v`) を実行して、削除した LU に対応する HDLM デバイスが削除されていることを確認します。
`dlnmcfmgmgr` ユティリティを実行する場合の例を次に示します。

```
# /sbin/dlnmcfmgmgr -v
```

(5) LU へのパスを削除する

既存の LU (HDLM デバイス) へのパスを削除する方法を、次に示します。

1. 該当する LU へのすべてのアクセスを停止します。
2. ストレージシステムの管理プログラムを使って、該当する LU へのパスを削除します。
パスを削除する操作については、ストレージシステムに付属するマニュアルを参照してください。

3. ホストを再起動しないで LU へのパスを削除する場合は、手順 4 を行います。再起動する場合は、手順 5 に進んでください。
4. 手順 2 で削除したパス用の SCSI デバイスを削除します。
再起動なしでの削除のため、手順 2 で削除したパス用の SCSI デバイスは削除されないので、「表 4-3 SCSI デバイスの追加と削除」に示すデバイスの削除用のコマンドを手動で実行して、SCSI デバイスを削除する必要があります。
5. HDLM がインストールされているホストを再起動します。
手順 4 を行っている場合は、再起動は不要です。手順 6 に進んでください。
6. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmgr -v) か HDLM コマンド (dlnkmgr view -drv) を実行します (任意)。
手順 2 で削除したパスに対応する SCSI デバイス名が「- (ハイフン)」になっていることを確認します。実行例を次に示します。

dlmcfmgmgr ユティリティに -v オプションを指定して実行する場合
/sbin/dlmcfmgmgr -v

view オペレーションに -drv オプションを指定して実行する場合
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv

この操作は必要に応じて実行します。確認不要の場合は手順 7 に進んでください。
SCSI デバイス名が「- (ハイフン)」になっていない場合には、パスヘルスチェックの実行を待つか、該当する HDLM デバイスのパス管理 PATH_ID を指定して次に示す HDLM コマンドを実行することによって、ハイフンに変更できます。

/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -pathid パス管理 PATH_ID
7. 手順 2 で削除したパスに該当する HDLM デバイスに対して、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -u HDLM デバイスの論理デバイスファイル名) を実行し、HDLM デバイスの登録を解除します。
該当する HDLM デバイスに関するパスの情報が削除されます。dlmcfmgmgr ユティリティの実行例を次に示します。

/sbin/dlmcfmgmgr -u HDLM デバイスの論理デバイスファイル名

マルチパスからシングルパスに変更する場合などで HDLM デバイスにパスが存在するときに、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -u) を実行すると KAPL10340-E のメッセージが出力されます。その場合は、KAPL10340-E のメッセージの対処に従って /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgmgr[1-2].log ファイルを参照してください。
KAPL10362-W のメッセージが /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgmgr[1-2].log ファイルに出力されている場合、HDLM の動作上の問題はありません。手順 8 に進んでください。
8. /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgmgr1.log を参照するか、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -v) を実行して、該当する HDLM デバイスに対応するパスが削除されていることを確認します。
dlmcfmgmgr ユティリティを実行する場合の例を次に示します。

/sbin/dlmcfmgmgr -v

(6) HDLM 管理対象のデバイスを管理対象外にする

HDLM 管理対象のデバイスを管理対象外にする方法を、次に示します。この運用は再起動なしで行えます。

1. 該当する LU へのすべてのアクセスを停止します。
2. HDLM 構成定義ユーティリティ (`dlmcfmgr -v`) を実行して、管理対象外にする HDLM デバイスが管理対象になっているかどうかを確認します。
`dlmcfmgr` ユティリティの実行例を次に示します。


```
# /sbin/dlmcfmgr -v
```

実行結果の表示で、該当する HDLM デバイスの **Management** 状態が「`configured`」であれば、管理対象になっていることを示します。
3. 管理対象外にする HDLM デバイスに対して、`dlmcfmgr` ユティリティ (`dlmcfmgr -o` *HDLM デバイスの論理デバイスファイル名*) を実行します。
 指定した HDLM デバイスが HDLM の管理対象外になります。`dlmcfmgr` ユティリティの実行例を次に示します。


```
# /sbin/dlmcfmgr -o HDLM デバイスの論理デバイスファイル名
```
4. `/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgr1.log` を参照するか、`dlmcfmgr` ユティリティ (`dlmcfmgr -v`) または HDLM コマンドの `view` オペレーション (`dlnmgr view -path`) を実行して、該当する HDLM デバイスが管理対象外となったことを確認します。
`dlmcfmgr` ユティリティを実行する場合の例を次に示します。


```
# /sbin/dlmcfmgr -v
```

(7) HDLM 管理対象外のデバイスを管理対象にする

HDLM 管理対象外のデバイスを管理対象にする方法を、次に示します。この運用は再起動なしで行えます。

1. 該当する LU へのすべてのアクセスを停止します。
2. HDLM 構成定義ユーティリティ (`dlmcfmgr -v`) を実行して、管理対象にする HDLM デバイスが管理対象外になっているかどうかを確認します。
 実行結果の表示で、該当する HDLM デバイスの **Management** 状態が「`unconfigured`」であれば、管理対象外になっていることを示します。
 この操作は必要に応じて実行します。確認不要の場合は手順 3 から始めてください。
3. 管理対象にする HDLM デバイスに対して、`dlmcfmgr` ユティリティ (`dlmcfmgr -i` *HDLM デバイスの論理デバイスファイル名*) を実行します。
 指定した HDLM デバイスが HDLM の管理対象になります。`dlmcfmgr` ユティリティの実行例を次に示します。


```
# /sbin/dlmcfmgr -i HDLM デバイスの論理デバイスファイル名
```
4. `/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgr1.log` を参照するか、`dlmcfmgr` ユティリティ (`dlmcfmgr -v`) または HDLM コマンドの `view` オペレーション (`dlnmgr view -path`) を実行して、該当する HDLM デバイスが管理対象となったことを確認します。
`dlmcfmgr` ユティリティを実行する場合の例を次に示します。


```
# /sbin/dlmcfmgr -v
```

(8) 断線状態で起動されたパスを復元する（再起動が必要となる場合）

起動時に断線状態（ケーブルが外れていた、断線していたなど）だったパスを、再起動ありで復元する方法を、次に示します。この運用は HDLM 管理対象のデバイスに対してだけ適用できます。また、復元対象のパスの数が単数でも複数でも、または該当する HDLM デバイスのすべてのパスが復元対象の場合でも適用できます。

1. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr -v) または HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -drv) を実行して、ホストの起動時に、該当するパスが断線状態だったかどうかを確認します。

実行例を次に示します。

```
dlmcfmgr ユティリティに-v オプションを指定して実行する場合
# /sbin/dlmcfmgr -v
```

```
view オペレーションに-drv オプションを指定して実行する場合
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv
```

実行結果の表示で、該当する HDLM デバイスに対応する SCSI デバイス名が「-」（ハイフン）になっていれば、パスが断線状態だったことを示します。

この操作は必要に応じて実行します。確認不要の場合は、手順 2 から始めてください。

2. ケーブルを接続します。
断線している場合は交換します。
3. HDLM がインストールされているホストを再起動します。
SCSI デバイスが再作成され、ホスト起動時に手順 1 で断線状態だったパスが自動的に復元し、オンライン状態になります。
4. /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfmgr1.log を参照するか、dlmcfmgr ユティリティ (dlmcfmgr -v) を実行して、該当するパスが復元されたことを確認します。
dlmcfmgr ユティリティを実行する場合の例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfmgr -v
```

(9) 断線状態で起動されたパスを復元する（再起動が不要な場合）

起動時に断線状態（ケーブルが外れていた、断線していたなど）だったパスを、再起動なしで復元する方法を、次に示します。この運用は、HDLM 管理対象のデバイスに対してだけ適用できます。また、復元対象のパスの数が単数でも複数でも、または該当する HDLM デバイスのすべてのパスが復元対象の場合でも適用できます。

1. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr -v) または HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -drv) を実行して、ホストの起動時に、該当するパスが断線状態だったかどうかを確認します。

実行例を次に示します。

```
dlmcfmgr ユティリティに-v オプションを指定して実行する場合
# /sbin/dlmcfmgr -v
```

```
view オペレーションに-drv オプションを指定して実行する場合
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv
```

実行結果の表示で、該当する HDLM デバイスに対応する SCSI デバイス名が「-」（ハイフン）になっていれば、パスが断線状態だったことを示します。

この操作は必要に応じて実行します。確認不要の場合は手順 2 から始めてください。

2. ケーブルを接続します。

断線している場合は交換します。

3. 復元するバス用の SCSI デバイスを作成します。

再起動なしでの復元のため、起動時に断線状態だったバス用の SCSI デバイスは作成されないの
で、次の表に示すデバイスの追加用のコマンドを手動で実行して、SCSI デバイスを作成する必
要があります。

表 4-4 SCSI デバイスの追加

操作目的	実行するコマンド
デバイスの追加 (FC-SAN 環境の 場合)	<ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 1 で QLogic 社製の HBA ドライ バを使用している場合 次の順序でコマンドを実行してください。 # echo "scsi-qlascan" > /proc/scsi/driver-name /n # cat /proc/scsi/driver-name /n コマンド出力結果の SCSI LUN Information:以下に出力される Id:Lun 部 分を参照し、追加したデバイスのターゲット ID を基に以下のコマンドを実行し てください。 # echo "scsi add-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 1 で Emulex 社製の HBA ドライ バを使用している場合 次のコマンドを実行してください。 # echo "scsi add-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi • 次に示す OS と HBA ドライバを使用している場合 <ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 3 以降と QLogic 社製 HBA ドラ イバ • Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 と QLogic 社製 HBA ドライバ • SUSE LINUX Enterprise Server と QLogic 社製 HBA ドライバ • Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 Update 3 以降と Emulex 社製 HBA ド ライバ • Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 と Emulex 社製 HBA ドライバ • SUSE LINUX Enterprise Server と Emulex 社製 HBA ドライバ • Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 と Brocade 社製 HBA ドライバ • SUSE LINUX Enterprise Server と Brocade 社製 HBA ドライバ 次のコマンドを実行してください。 # echo "- - -" > /sys/class/scsi_host/hostn /scan 次のコマンドを実行して、OS がデバイスを認識しているかどうかを確認してく ださい。 # cat /proc/scsi/scsi OS がデバイスを認識していない場合は、次の順序でコマンドを実行してくださ い。 # echo "1" > /sys/class/fc_host/hostn /issue_lip # echo "- - -" > /sys/class/scsi_host/hostn /scan Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合は、OS のホットプラグ機能に よって自動的にデバイスが認識されることがあります。この場合、上記の手順は 必要ありません。 • 日立製の HBA ドライバを使用している場合 次のコマンドを実行してください。 # echo "scsi add-single-device a b c d" > /proc/scsi/scsi
デバイスの追加 (IP-SAN 環境の 場合)	<ul style="list-style-type: none"> • iSCSI イニシエーターとセッションが確立されていないターゲットに追加した デバイスの場合 次のコマンドを実行して、OS にターゲットを認識させてください。 # iscsiadm -m discovery -t sendtargets -p ターゲットの IP アド レス

操作目的	実行するコマンド
	<p>次に、セッションを確立するためターゲットにログインしてください。</p> <pre># iscsiadm -m node -T ターゲット名 -p ターゲットの IP アドレス: ターゲットのポート番号 --login</pre> <ul style="list-style-type: none"> • iSCSI イニシエーターとセッションが確立されているターゲットに追加したデバイスの場合 <p>次のコマンドを実行してください。</p> <pre># iscsiadm -m session -R</pre>

(凡例)

- a : Host ID (ホストポート番号)
- b : Channel 番号 (バス番号)
- c : Target ID (ターゲット ID)
- d : Lun (ホスト LU 番号)
- n : ホストポート番号
- driver-name : qlaxxxx (使用しているドライバの名称)

指定例を次に示します。

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 で QLogic 社製の HBA ドライバを使用して、デバイスを追加する場合

```
# echo "scsi-qlascan" > /proc/scsi/qla2200/1
# cat /proc/scsi/qla2200/1
# echo "scsi add-single-device 1 0 1 1" > /proc/scsi/scsi
```

4. 自動フェイルバック機能が動作するのを待つか、HDLM コマンド (dlnkmgr online -pathid *パス管理 PATH_ID*) を実行します。

HDLM コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -pathid パス管理 PATH_ID
```

該当するパスがオンライン状態となります。

5. /var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfgmgr1.log を参照するか、dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -v) を実行して、該当するパスが復元されたことを確認します。dlmcfgmgr ユティリティを実行する場合の例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
```

(10) 稼働中に断線状態となったパスを復元する

稼働中に断線状態 (ケーブルが外れていた、断線していたなど) となったパスを復元する方法を、次に示します。

1. HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr -v) を実行して、断線状態のパスを確認します。実行例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
```

実行結果の表示で、該当する HDLM デバイスに対応する SCSI デバイス名が「-」(ハイフン) になっていれば、パスが断線状態であることを示します。

2. ケーブルを接続します。
断線している場合は交換します。

ホストが再起動できる場合は、手順 3 に進んでください。ホストが再起動できない場合は、手順 4 に進んでください。

3. ホストを再起動します。
SCSI デバイスが再作成され、手順 1 で断線状態だったパスが復元し、オンライン状態になります。手順 6 に進んでください。

4. 復元するパス用の SCSI デバイスを作成します。
「表 4-4 SCSI デバイスの追加」に示すデバイスの追加用のコマンドを手動で実行して、復元するパス用の SCSI デバイスを作成してください。

5. 自動フェイルバック機能が動作するのを待つか、HDLM コマンド (dlnkmgr online -pathid パス管理 PATH_ID) を実行します。

HDLM コマンドの実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -pathid パス管理 PATH_ID
```

該当するパスがオンライン状態となります。

6. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -v) を実行して、該当するパスが復元されたことを確認します。

dlmcfgmgr ユティリティを実行する場合の例を次に示します。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
```

4.6.5 HDLM デバイス名の変更

HDLM デバイス名を変更する手順について説明します。

HDLM デバイス名は OS が新しい LU を認識したあとの最初の dlmcfgmgr で、HDLM の仕様により一意な名称が割り当てられます。この割り当てられた HDLM デバイス名は、HDLM デバイス名変更ユティリティ (dlmchname) を実行することで変更できます。dlmchname ユティリティの詳細については「7. ユティリティリファレンス」を参照してください。

1. 現在の HDLM デバイスの構成情報を基にデバイス名変更定義ファイルを作成します。
dlmchname ユティリティに -o パラメータを指定して実行すると、現在の HDLM デバイスの構成情報を基にデバイス名変更定義ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/dlmchname.conf) が作成されます。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmchname -o
```

2. 現在の HDLM デバイスの構成情報を確認して、名称を変更する HDLM デバイス名を特定します。

HDLM コマンドの view オペレーションを実行します。実行結果から、LU と HDLM デバイスの対応関係を確認し、名称を変更する HDLM デバイス名を特定してください。

実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
Product      : AMS
SerialNumber : 85011299
LUs          : 3
```

```
iLU  HDevName Device PathID Status
0090 sddlmab /dev/sda 000004 Online
      /dev/sdd 000005 Online
      /dev/sdj 000008 Online
      /dev/sdg 000009 Online
0091 sddlmac /dev/sdb 000006 Online
      /dev/sde 000007 Online
      /dev/sdh 000010 Online
```

```

/dev/sdk 000011 Online
0092 sddlmaa /dev/sdc 000000 Online
/dev/sdf 000001 Online
/dev/sdi 000002 Online
/dev/sdl 000003 Online
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss

```

なお、HDLM の管理対象外にしている LU は表示されません。HDLM の管理対象にしてから確認してください。LU と HDLM デバイスの対応関係が判明している場合は、手順 3 でデバイス名変更定義ファイルを編集してください。

3. デバイス名変更定義ファイルを編集します。

vi などのエディタを使用してデバイス名変更定義ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/dlmchname.conf) の HDLM デバイス名を変更します。

手順 2 で確認した SerialNumber が「85011299」で iLU が「0090」の HDLM デバイス名「sddlmaab」を、「sddlmad」に変更する例を次に示します。

(変更前)

```

# /bin/cat /etc/opt/DynamicLinkManager/dlmchname.conf
3585011299 0090 sddlmaab
3585011299 0091 sddlmac
3585011299 0092 sddlmaa

```

(変更後)

```

# /bin/cat /etc/opt/DynamicLinkManager/dlmchname.conf
3585011299 0090 sddlmad
3585011299 0091 sddlmac
3585011299 0092 sddlmaa

```

ブートディスクに使用している HDLM デバイスの名称を変更する場合は、手順 5 に進んでください。

4. 名称を変更する HDLM デバイスへのアクセスを停止します。

次の操作を実施して HDLM デバイスへのアクセスを停止します。

- HDLM デバイスがマウント中であればアンマウントする。
- HDLM デバイスが LVM で使用中であればボリュームグループを非活性化する。
- HDLM デバイスがアプリケーションで使用中であればアプリケーションを停止する。

また、dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -o) を実行して HDLM デバイスを管理対象外にしておくことで、HDLM デバイス名変更ユティリティ (dlmchname) を実行中に I/O が発行されることによる HDLM デバイスの名称変更が失敗するのを防げます。

dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -o) を実行した場合は、dlmchname ユティリティの実行後に dlmcfmgmgr ユティリティ (dlmcfmgmgr -i) を実行し、HDLM デバイスを管理対象に戻してください。

5. dlmchname ユティリティを実行します。

LVM のボリュームグループを構成している HDLM デバイスの名称を変更する場合は、dlmchname ユティリティの実行後に vgscan コマンドを実行してください。

ブートディスク以外に使用している HDLM デバイス名を変更する場合：

次のとおり dlmchname ユティリティを実行して、HDLM デバイス名を変更します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmchname
```

ブートディスクに使用している HDLM デバイス名を変更する場合：

dlmchname ユティリティに -f パラメタを指定して実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmchname -f
```

ブートディスク以外に使用している HDLM デバイス名を変更した場合は、手順 8 に進んでください。

6. HDLM デバイス名が記載されている設定ファイルを修正します。

ブートディスクに使用している HDLM デバイス名を変更した場合、`/etc/fstab` ファイルの内容の確認と修正も必要です。

7. ホストを再起動します。

ブートディスクに使用している HDLM デバイスの名称を変更した場合は、再起動が必要です。

```
# shutdown -r now
```

8. 現在の HDLM デバイスの構成情報を確認して、HDLM デバイス名が変更されていることを確認します。

HDLM コマンドの `view` オペレーションを実行します。出力結果から、HDLM デバイス名が変更されていることを確認してください。

実行例を次に示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
Product      : AMS
SerialNumber  : 85011299
LUs          : 3
```

```
iLU  HDevName Device PathID Status
0090 sddlmad /dev/sda 000004 Online
      /dev/sdd 000005 Online
      /dev/sdj 000008 Online
      /dev/sdg 000009 Online
0091 sddlmac /dev/sdb 000006 Online
      /dev/sde 000007 Online
      /dev/sdh 000010 Online
      /dev/sdk 000011 Online
0092 sddlmaa /dev/sdc 000000 Online
      /dev/sdf 000001 Online
      /dev/sdi 000002 Online
      /dev/sdl 000003 Online
```

KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = `yyyy/mm/dd hh:mm:ss`

なお、HDLM の管理対象外にしている LU は表示されません。HDLM の管理対象にしてから確認してください。

9. 名称を変更した HDLM デバイスへアクセスし、使用できることを確認します。

名称を変更した HDLM デバイスにアクセスするアプリケーションが正常に動作していることを確認してください。

4.6.6 新規 HDLM デバイス作成について

ホストの再起動時に、HDLM がパスを新規に検出する場合、検出されたパスが既存の LU (HDLM 管理対象のデバイス) に対するものか、新規に追加した LU に対するものかによって、HDLM デバイスの割り当て方法は異なります。ここでは、新規の LU に対して作成される、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名について説明します。

新規に検出されたパスが既存の LU に対するものだった場合、すでに登録されている HDLM デバイスが割り当てられます。

新規に検出されたパスが新規の LU に対するものだった場合、HDLM デバイスが新規に作成され、割り当てられます。このとき、HDLM デバイスの論理デバイスファイルの名称には、アルファベット順に空いている文字列が使用されます。

HDLM デバイスが新規に割り当てられる場合に、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名に付けられるファイル名称の例を次の表に示します。

表 4-5 HDLM デバイスの新規割り当て例

ホストの再起動前の状態	ホストの再起動後の状態
なし	<code>/dev/sddlmaa</code> ※

ホストの再起動前の状態	ホストの再起動後の状態
/dev/sddlmaa	/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab*
/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab	/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab /dev/sddlmac*
/dev/sddlmaa /dev/sddlmac	/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab * /dev/sddlmac
/dev/sddlmaab /dev/sddlmac	/dev/sddlmaa * /dev/sddlmaab /dev/sddlmac
/dev/sddlmaa : /dev/sddlmp	/dev/sddlmaa : /dev/sddlmp /dev/sddlmaa*
/dev/sddlmaa : /dev/sddlmaap	/dev/sddlmaa : /dev/sddlmaap /dev/sddlmbaa*

注※

新規に割り当てられた、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名です。

KAPL10357-E のメッセージが表示された場合は、新しい LU を認識しても HDLM デバイスは追加されません。その場合、ユーザは、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmr -u) を実行して、使用していない（または、「-」（ハイフン）表示になっている）HDLM デバイスを削除し、使用できる名称を解放することで新規 LU の HDLM デバイスファイルを作成できるようにする必要があります。

HDLM 管理対象外のデバイス（LU）にパスを追加してホストを再起動しても、追加したパスに対応する HDLM デバイスは管理対象外となります。

パス管理 PATH_ID は、ホスト起動時に HDLM が SCSI デバイスを認識した順番で割り当てられます。このため、ホストの起動ごとに同一パスのパス管理 PATH_ID が、変更される場合があります。

異なる LU に対して同じパス名が割り当てられた場合、ホストの再起動後に新しく割り当てられた LU に対して新しい HDLM デバイスが割り当てられます。その場合、以前の HDLM デバイスは自動的に登録が解除されます。

4.6.7 BladeSymphony の I/O ドロワーを追加する場合の注意事項

BladeSymphony の I/O ドロワーを追加※したあとにホストを再起動した場合、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmr -v) を実行すると、実行結果の Device 列に「-」（ハイフン）が表示されることがあります。

```
# dlmcfmgmr -v
HDevName      Management      Device           Host      Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured      /dev/sde         2         0         0        1
-              -              -                0         0         0        0
/dev/sddlmaab configured      /dev/sda         1         0         0        0
-              -              -                0         0         0        1
/dev/sddlmaab configured      /dev/sdf         2         0         0        2
/dev/sddlmaab configured      /dev/sdb         1         0         0        1
```

KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.

「-」(ハイフン)が表示されている状態を解消するには、dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -u) を実行してください。

dlmcfgmgr ユティリティについては、「[7.3 dlmcfgmgr HDLM 構成定義ユティリティ](#)」を参照してください。

注※

I/O ドロワーの追加とは、次の場合を指します。

- ホストに I/O ドロワーを追加する場合
- ホストに接続済みの I/O ドロワーに、HBA を追加する場合

トラブルシューティング

この章では、まず HDLM の障害情報を確認する方法について説明します。そのあとで、HDLM に障害が発生した場合の対処方法について説明します。対処方法は、パスの障害、HDLM のプログラムの障害、およびこれら以外が原因の障害の場合に分けて説明します。

- 5.1 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を使った障害情報の収集
- 5.2 メッセージでの障害情報の確認
- 5.3 パス障害時の対処
- 5.4 プログラム障害時の対処
- 5.5 パスやプログラム以外の障害時の対処

5.1 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を使った障害情報の収集

エラーが発生した場合、直ちに DLMgetras ユティリティを実行して障害情報を収集してください。DLMgetras ユティリティの実行前にマシンを再起動すると、障害情報が削除されてしまい、情報を収集できなくなるおそれがあります。

DLMgetras ユティリティで収集できる障害情報、および DLMgetras ユティリティについては、「7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユーティリティ」を参照してください。

5.2 メッセージでの障害情報の確認

syslog に HDLM のメッセージを出力したい場合、syslogd の設定ファイルに定義するシステム機能名は「user」を指定してください。次にシステム機能名が「user」で、かつ優先順位レベルが「情報メッセージ」(info) 以上のメッセージを/tmp/syslog.user.log ファイルに出力する例を示します。

```
user.info /tmp/syslog.user.log
```

パスの障害は、syslog に出力される KAPL08xxx のメッセージから確認できます。

パスについての詳細な情報を得たい場合は、メッセージの情報を基に view オペレーションの実行結果を確認してください。

view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

次にメッセージの例を示します。

```
KAPL08022-E パスの異常が発生しました。ErrorCode = aa...aa, PathID = bb...bb, PathName = cc...cc.dd...dd.ee...ee.ff...ff, DNum = gg...gg, HDevName = hh...hh
```

メッセージの各項目について説明します。

ErrorCode

Linux がパスの障害を検出したときのエラー番号を示します。

PathID

パスに付けられた ID で、パス管理 PATH_ID と呼びます。ホストの再起動時に割り当てられます。また、ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) の実行時にその LU の各パスにパス管理 PATH_ID が新しく割り当てられます。

これは、HDLM コマンドの view オペレーションで表示される「PathID」と同じです。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

PathName

パスを表す項目で、パス名と呼びます。システムの構成を変更する場合やハードウェアを交換する場合は、パス名を参照して影響を受けるパスを確認してください。

次に示す 4 つの項目をピリオドで区切ったものが、パス名として表示されます。

- ホストポート番号 (16 進数)
- バス番号 (16 進数)
- ターゲット ID (16 進数)

- ホスト LU 番号 (16 進数)

パス名は、コマンドの view オペレーションで表示される「PathName」と同じです。パス名の詳細については、「6.7 view 情報を表示する」を確認してください。

DNum

Dev 番号です。

Linux ではパーティション番号に該当します。

LU 内の各 Dev に、0 から順に付けられます。

Linux では、「0」(固定)が表示されます。

これは view オペレーションで表示される「DNum」と同じです。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

HDevName

ホストデバイス名です。

パスがアクセスする HDLM デバイスの論理デバイスファイル名からパーティション番号を除いたものが、sddlml[aa-pap]の形式で表示されます (例: sddlmlaa または sddlmlaaa)。

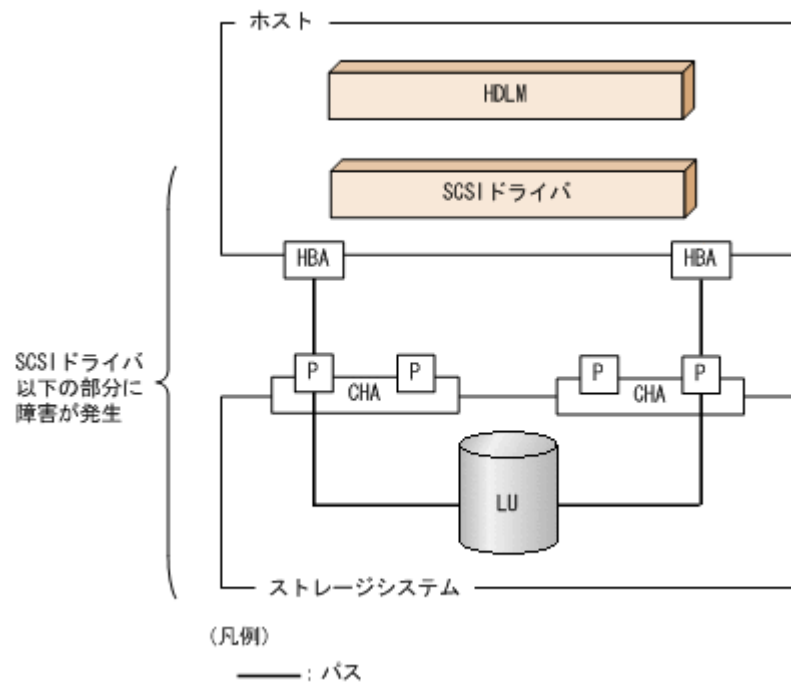
HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。

これは view オペレーションで表示される「HDevName」と同じです。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

5.3 パス障害時の対処

HDLM は、パスの障害を検知した場合、パスのフェイルオーバをするとともに、KAPL08022-E のメッセージを出力します。このメッセージが出力された場合、次の図に示す、パスを構成する部分に障害が発生しています。

図 5-1 KAPL08022-E が出力される場合の障害箇所



KAPL08022-E のメッセージが出力された場合の対処手順を次の図に示します。

図 5-2 パス障害時の対処手順



HDLM コマンドを使用してパス障害に対処する手順を次に説明します。

5.3.1 メッセージの監視

メッセージ監視用のアプリケーションやツールなどを使用して、ホストの `syslog` に出力されるメッセージを監視します。KAPL08022-E のメッセージが出力された場合、そのメッセージの内容を参照して、障害が発生したパスを確認してください。メッセージ内容については「5.2 メッセージでの障害情報の確認」を参照してください。

5.3.2 パス情報の取得

パスの情報を取得します。

次のコマンドを実行してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -iem -hbaportwwn > pathinfo.txt
```

`pathinfo.txt` はリダイレクト先のファイル名です。ファイル名は環境に合わせて決めてください。

5.3.3 障害パスの抽出

取得したパス情報を確認して、障害パスを探します。「Status」が「Offline(E)」, または「Online(E)」のパスが障害パスです。

5.3.4 障害発生ハードウェアの絞り込み

障害パスの「DskName」, 「iLU」, 「ChaPort」, および「HBAPortWWN」を確認して、障害が発生した可能性があるハードウェアを絞り込みます。「DskName」, 「iLU」, および「ChaPort」は、ストレージシステムの管理プログラムで参照して、物理的に特定してください。

5.3.5 障害個所の特定・ハードウェアへの障害対処

Linux, およびハードウェアの管理ツールなどで障害個所を特定して, 障害に対処します。

ハードウェアの保守については, ハードウェアの購入元会社, または保守契約があれば保守会社に連絡してください。

5.3.6 パスを稼働状態に変更

障害回復後, 障害のために閉塞状態になったパスを HDLM コマンドの online オペレーションで稼働状態にします。online オペレーションについては, 「6.5 online パスを稼働状態にする」を参照してください。次のコマンドを実行してください。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online
```

このコマンドを実行すると, すべての閉塞状態のパスが稼働状態になります。

障害が原因で稼働状態にできないパスがあった場合は, KAPL01039-W のメッセージが表示されません。稼働状態にできないパスを無視して処理を継続する場合は「y」を, 処理を中断する場合は「n」を入力してください。

稼働状態にできないパスについては, 再度状態を確認し, 障害回復のための対処をしてください。

5.4 プログラム障害時の対処

HDLM のプログラムで障害が発生した場合の対処について説明します。対処手順を次の図に示します。

図 5-3 プログラム障害時の対処手順



HDLM コマンドを使用してプログラム障害に対処する手順を次に説明します。

5.4.1 メッセージの監視

ホストの syslog に出力されるメッセージを監視します。HDLM のプログラムで障害が発生すると, KAPL08xxx 以外のメッセージが syslog に出力されます。メッセージの内容を参照して, メッセージのレベルが「E」(Error レベル) 以上の場合, 対処が必要です。

5.4.2 プログラム情報の取得

HDLM の購入元会社、または保守会社に連絡する情報を取得します。

HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を使用して、障害情報を収集してください。DLMgetras ユティリティで収集できる情報、および DLMgetras ユティリティについては、「[7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユーティリティ](#)」を参照してください。

DLMgetras ユティリティが収集する情報の中には、ホストの再起動時にクリアされるものがあります。障害発生時は DLMgetras ユティリティを速やかに実行してください。

5.4.3 プログラム障害への対処

「[8. メッセージ](#)」を参照して対処してください。

対処しても同じエラーが発生する場合は、HDLM コマンドの view オペレーションで HDLM のプログラムの状態を確認して、エラーに対処します。view オペレーションについては、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

次に示すコマンドを実行します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
```

コマンド実行後、KAPL01012-E のメッセージが出力された場合

次に、KAPL01012-E のメッセージを示します。

```
KAPL01012-E HDLM マネージャとの接続に失敗しました。オペレーション名 = view
```

この場合、HDLM マネージャを起動します。

HDLM マネージャの起動方法については、「[4.4.1 HDLM マネージャの起動](#)」を参照してください。

コマンド実行後、KAPL01013-E のメッセージが出力された場合

次に、KAPL01013-E のメッセージを示します。

```
KAPL01013-E HDLM コマンド内部処理で障害が発生しました。オペレーション名 = view, 詳細 = aa...aa
```

aa...aa には、文字列が表示されます。この場合、ホストを再起動します。

対処しても同じエラーが発生する場合は、「[5.4.4 HDLM の購入元会社、または保守会社に連絡](#)」に進んでください。

5.4.4 HDLM の購入元会社、または保守会社に連絡

エラーが解決されない場合、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) で取得した情報を、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。

5.5 パスやプログラム以外の障害時の対処

HDLM に関連すると思われる障害の原因が、パスでもプログラムでもない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して、情報を収集してください。そのあとで、取得した情報を、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティで収集できる情報、および DLMgetras ユティリティについては、「[7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユーティリティ](#)」を参照してください。

コマンドリファレンス

この章では、HDLM で使用するコマンドについて説明します。

- 6.1 コマンド概要
- 6.2 clear パスの統計情報を初期値にする
- 6.3 help オペレーションの形式を表示する
- 6.4 offline パスを閉塞状態にする
- 6.5 online パスを稼働状態にする
- 6.6 set 動作環境を設定する
- 6.7 view 情報を表示する
- 6.8 add パスを動的に追加する
- 6.9 delete パスを動的に削除する

6.1 コマンド概要

ここでは、HDLM で使用するコマンドの入力形式、およびオペレーションについて説明します。

コマンドの入力形式

コマンドの入力形式を次に示します。

```
dlnkmgr オペレーション名 [パラメタ [パラメタ値]]
```

dlnkmgr : コマンド名

オペレーション名 : dlnkmgr に続けて入力する操作の種類

パラメタ : オペレーションによって必要になる値

パラメタ値 : パラメタによって必要になる値

HDLM コマンドのオペレーション

HDLM コマンドのオペレーション、およびその機能を「表 6-1 HDLM コマンドのオペレーション一覧」に示します。

表 6-1 HDLM コマンドのオペレーション一覧

オペレーション	機能
clear	HDLM システムが管理する、すべてのパスの統計情報 (I/O 回数, I/O 障害回数) の値を初期値 (0) にします。詳細については、「6.2」を参照してください。
help	HDLM で使用するオペレーションの形式が表示されます。詳細については、「6.3」を参照してください。
offline	稼働状態のパスを閉塞状態にします。詳細については、「6.4」を参照してください。
online	閉塞状態のパスを稼働状態にします。詳細については、「6.5」を参照してください。
set	HDLM の動作環境を設定します。詳細については、「6.6」を参照してください。
view	HDLM のプログラム情報、パス情報、LU 情報、HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応が表示されます。詳細については、「6.7」を参照してください。
add	パスを HDLM の管理対象として動的に追加します。詳細については、「6.8」を参照してください。
delete	パスを HDLM の管理対象から動的に削除します。詳細については、「6.9」を参照してください。

注意事項

- root 権限を持つユーザで、コマンドを実行してください。
- パラメタで指定する値にスペースが含まれる場合には、値全体を「"」(引用符)で囲ってください。

6.2 clear パスの統計情報を初期値にする

HDLM システムが管理する、すべてのパスの統計情報 (I/O 回数, I/O 障害回数) の値を初期値 (0) にします。

6.2.1 形式

(1) パスの統計情報を初期値 (0) にする場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr clear -pdst [-s]
```

(2) clear オペレーションの形式を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr clear -help
```

6.2.2 パラメタ

(1) パスの統計情報を初期値 (0) にする場合

-pdst

HDLM が管理する、すべてのパスの統計情報 (I/O 回数, I/O 障害回数) の値を初期値にします。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr clear -pdst
KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = clear。よろしい
ですか? [y/n] : y
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = clear, 終
了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

-s

コマンド実行の確認メッセージを表示しないで実行します。シェルスクリプトやバッチファイルでコマンドを実行する場合など、確認メッセージへの入力を省略したいときに指定します。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr clear -pdst -s
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = clear, 終
了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

(2) clear オペレーションの形式を表示する場合

-help

clear オペレーションの形式が表示されます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr clear -help
clear:
  Format
  dlnkmgr clear -pdst [-s]
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = clear, 終
了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

6.3 help オペレーションの形式を表示する

HDLM コマンド, および HDLM コマンドの各オペレーションの形式が表示されます。

6.3.1 形式

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr help
```

```
[オペレーション名] [オペレーション名] ...
```

6.3.2 パラメタ

オペレーション名

形式を知りたいオペレーション名を指定します。

オペレーション名は、複数指定できます。複数のオペレーション名を指定した場合、指定した順に形式が表示されます。

指定できるオペレーション名は、次に示すどれかです。

- clear
- help
- offline
- online
- set
- view
- add
- delete

オペレーション名を省略すると、HDLM コマンドで使用できる、すべてのオペレーション名が表示されます。

使用例

使用例 1

HDLM コマンドで使用できるすべてのオペレーション名を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr help
dlnkmgr:
  Format
    dlnkmgr { clear | help | offline | online | set | view | add |
delete }
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = help, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 2

複数のオペレーションの形式を表示する場合

「AutoPATH_ID」はパス管理 PATH_ID を示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr help online offline help
online:
  Format
    dlnkmgr online [-path] [-s]
    dlnkmgr online [-path] -hba HBAPortNumber.BusNumber [-s]
    dlnkmgr online [-path] -cha -pathid AutoPATH_ID [-s]
    dlnkmgr online [-path] [-pathid AutoPATH_ID] [-s]
    dlnkmgr online [-path] [-device SCSI_Device_Name] [-s]
  Valid value
    AutoPATH_ID { 000000 - 999999 }(Decimal)
offline:
  Format
    dlnkmgr offline [-path] -hba HBAPortNumber.BusNumber [-s]
    dlnkmgr offline [-path] -cha -pathid AutoPATH_ID [-s]
    dlnkmgr offline [-path] -pathid AutoPATH_ID [-s]
    dlnkmgr offline [-path] -device SCSI_Device_Name [-s]
  Valid value
    AutoPATH_ID { 000000 - 999999 }(Decimal)
help:
  Format
    dlnkmgr help { clear | offline | online | set | view | add |
```



```
delete }
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = help, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 3

help オペレーションで指定できるオペレーション名を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr help help
help:
  Format
  dlnkmgr help { clear | offline | online | set | view | add |
delete }
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = help, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

6.4 offline パスを閉塞状態にする

稼働状態のバスを閉塞状態にします。HBA ポート単位、CHA ポート単位、バス単位で、閉塞状態にするバスを指定します。また、バスを指定する代わりに SCSI デバイス名を指定することもできます。

各 LU にアクセスする最後のバスは閉塞状態にできません。

多くのバスを閉塞状態にすると、障害発生時にバスを切り替えられなくなることがあります。バスを閉塞状態にする前に、view オペレーションでバスの稼働状態を確認してください。view オペレーションについては、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

6.4.1 形式

(1) パスを閉塞状態にする場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline
[-path]
{-hba ホストポート番号/バス番号
|-cha -pathid バス管理 PATH_ID
|-pathid バス管理 PATH_ID
|-device SCSI デバイス名}
[-s]
```

(2) offline オペレーションの形式を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -help
```

6.4.2 パラメタ

(1) パスを閉塞状態にする場合

-path

HDLM が管理しているバスを操作することを指定します。

offline オペレーションの対象物はバスだけなので、この指定は省略できます。

-hba, -cha, -pathid, または-device パラメタで、閉塞状態にするパスを必ず指定します。

-hba ホストポート番号.パス番号

HBA ポート単位でパスを閉塞状態にする場合に指定します。指定した番号の HBA ポートを通るすべてのパスを閉塞状態にします。

view オペレーションで表示されるパス名のうち、ホストポート番号、パス番号をピリオドで区切って指定します。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。

使用例

コマンド実行の確認をして、特定の HBA ポート（ホストポート番号「0010」、パス番号「0000」）を通るすべてのパスを閉塞状態にする場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -hba 0010.0000
KAPL01055-I 指定された HBA を通る全てのパスを Offline (C) にします。よろしいですか? [y/n] :y
KAPL01056-I 指定された HBA を通る全てのパスが Offline (C) になってもよい場合は y を入力してください。そうでない場合は n を入力してください。 [y/n] :y
KAPL01061-I 3 本のパスを Offline (C) にしました。失敗したパス = 0 本。オペレーション名 = offline
#
```

-cha -pathid パス管理 PATH_ID

CHA ポート単位でパスを閉塞状態にする場合に指定します。-pathid パラメタで指定したパスが経由している CHA ポートを通る、すべてのパスを閉塞状態にします。

view オペレーションで表示される、現在のパス管理 PATH_ID を指定してください。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。パス管理 PATH_ID の、左側の桁から 0 詰めされている 0 は省略できます (000001 と 1 は同値です)。ただし、パス管理 PATH_ID 「000000」を指定する場合は、「000000」または「0」を指定してください。

パス管理 PATH_ID は、ホストの再起動時に新しく割り当てられます。また、ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmgr) の実行時にその LU の各パスにパス管理 PATH_ID が新しく割り当てられます。必ず view オペレーションを実行して、閉塞状態にするパスの現在のパス管理 PATH_ID を確認してから、offline オペレーションを実行してください。

使用例

コマンド実行の確認をして、CHA ポート「0A」を通るすべてのパスを閉塞状態にする場合（パス管理 PATH_ID 「000001」が CHA ポート「0A」を通っているとき）

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -cha -pathid 000001
KAPL01055-I 指定された CHA port を通る全てのパスを Offline (C) にします。よろしいですか? [y/n] :y
KAPL01056-I 指定された CHA port を通る全てのパスが Offline (C) になってもよい場合は y を入力してください。そうでない場合は n を入力してください。 [y/n] :y
KAPL01061-I 2 本のパスを Offline (C) にしました。失敗したパス = 0 本。オペレーション名 = offline
#
```

-pathid パス管理 PATH_ID

単一のパスを閉塞状態にする場合に指定します。

view オペレーションで表示される、現在のパス管理 PATH_ID を指定します。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。パス管理 PATH_ID の、左側の桁から 0 詰めされている 0 は省略できます (000001 と 1 は同値です)。ただし、パス管理 PATH_ID 「000000」を指定する場合は、「000000」または「0」を指定してください。

パス管理 PATH_ID は、ホストの再起動時に新しく割り当てられます。また、ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には、dlmcfmgmr ユティリティの実行時にその LU の各パスにパス管理 PATH_ID が新しく割り当てられます。必ず view オペレーションを実行して、閉塞状態にするパスの現在のパス管理 PATH_ID を確認してから、offline オペレーションを実行してください。

-device SCSI デバイス名

SCSI デバイ스에接続されているパスを閉塞状態にする場合に指定します。

SCSI デバイス名には、次に示す view オペレーションで表示される Device を指定します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
```

view オペレーションを実行して SCSI デバイス名を表示する方法については「[6.7.2 パラメタ](#)」の「[\(3\) LU 情報を表示する場合](#)」を参照してください。指定できるパラメタ値は1つだけです。英字の大文字、小文字は区別されます。

使用例

コマンド実行の確認をして、SCSI デバイス名「/dev/sde」を通るパスを閉塞状態にする場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -path -device /dev/sde
KAPL01052-I 指定されたパスを Offline (C) にします。よろしいですか? [y/n]:y
KAPL01053-I 指定されたパスが Offline (C) になってもよい場合は y を入力してください。そうでない場合は n を入力してください。 [y/n]:y
KAPL01061-I 1 本のパスを Offline (C) にしました。失敗したパス = 0 本。オペレーション名 = offline
```

-s

コマンド実行の確認メッセージを表示しないで実行します。シェルスクリプトやバッチファイルでコマンドを実行する場合など、確認メッセージへの入力を省略したいときに指定します。

使用例

コマンド実行の確認をしないで、パス管理 PATH_ID 「000001」のパスを閉塞状態にする場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -pathid 1 -s
KAPL01061-I 1 本のパスを Offline (C) にしました。失敗したパス = 0 本。オペレーション名 = offline
#
```

(2) offline オペレーションの形式を表示する場合

-help

offline オペレーションの形式が表示されます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr offline -help
offline:
  Format
  dlnkmgr offline [-path] -hba HBAPortNumber.BusNumber [-s]
  dlnkmgr offline [-path] -cha -pathid AutoPATH_ID [-s]
  dlnkmgr offline [-path] -pathid AutoPATH_ID [-s]
  dlnkmgr offline [-path] -device SCSI_Device_Name [-s]
  Valid value
  AutoPATH_ID { 000000 - 999999 }(Decimal)
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = offline,
終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

#

参考

HDLM コマンドの `view` オペレーションと UNIX の標準コマンドを組み合わせると、特定の HBA ポート、または CHA ポートで、パスの情報を絞り込んで表示できます。view オペレーションについては、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

HBA ポート単位、または CHA ポート単位でパスを閉塞状態にする前に、次のコマンドを実行して、閉塞状態にするパスの情報を確認することをお勧めします。

例 1

特定の HBA ポート（ホストポート番号「0004」、パス番号「0000」）を通るすべてのパスを確認する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path | grep 0004.0000
```

指定した HBA ポートを通るパスの情報だけが表示されます。

例 2

SANRISE9500V シリーズの CHA ポート「0A」を通るすべてのパスを確認する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -stname | grep 9500V | grep 0A
```

指定した CHA ポートを通るパスの情報だけが表示されます。

6.5 online パスを稼働状態にする

閉塞状態のパスを稼働状態にします。稼働状態にするパスは、HBA ポート単位、CHA ポート単位、またはパス単位で指定できます。また、パスを指定する代わりに SCSI デバイス名を指定することもできます。

6.5.1 形式

(1) パスを稼働状態にする場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online  
[-path]  
[-hba ホストポート番号パス番号]  
|-cha -pathid パス管理 PATH_ID  
|-pathid パス管理 PATH_ID  
|-device SCSI デバイス名]  
[-s]
```

(2) online オペレーションの形式を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -help
```

6.5.2 パラメタ

(1) パスを稼働状態にする場合

`-path`

HDLM が管理しているパスを操作することを指定します。

`online` オペレーションの対象物はパスだけなので、この指定は省略できます。

`-hba`, `-cha`, `-pathid`, または `-device` パラメタで、稼働状態にするパスを指定できます。これらのパラメタを省略した場合は、すべての閉塞状態のパスを稼働状態にします。稼働状態にできないパスがあった場合、処理を継続するかどうかを確認するメッセージが表示されません。稼働状態にできなかったパスを閉塞状態のままにして処理を継続する場合は「y」を、処理を中断する場合は「n」を入力してください。

`-hba` ホストポート番号.バス番号

HBA ポート単位でパスを稼働状態にする場合に指定します。指定した番号の HBA ポートを通るすべてのパスを稼働状態にします。

`view` オペレーションで表示されるパス名のうち、ホストポート番号、バス番号をピリオドで区切って指定します。`view` オペレーションについては、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

使用例

コマンド実行の確認をして、特定の HBA ポート（ホストポート番号「0010」、バス番号「0000」）を通るすべてのパスを稼働状態にする場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -hba 0010.0000
KAPL01057-I 指定された HBA を通る全てのパスを Online にします。よろしいですか? [y/n] :y
KAPL01061-I 3本のパスを Online にしました。失敗したパス = 0本。オペレーション名 = online
#
```

`-cha -pathid`パス管理 *PATH_ID*

CHA ポート単位でパスを稼働状態にする場合に指定します。`-pathid` パラメタで指定したパスが経由している CHA ポートを通る、すべてのパスを稼働状態にします。

`view` オペレーションで表示される、現在のパス管理 *PATH_ID* を指定します。`view` オペレーションについては、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。パス管理 *PATH_ID* の、左側の桁から 0 詰めされている 0 は省略できます (000001 と 1 は同値です)。ただし、パス管理 *PATH_ID* 「000000」を指定する場合は、「000000」または「0」を指定してください。

パス管理 *PATH_ID* は、ホストの再起動時に新しく割り当てられます。また、ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には、HDLM 構成定義ユーティリティ (`dlnmcfmgmgr`) の実行時にその LU の各パスにパス管理 *PATH_ID* が新しく割り当てられます。必ず `view` オペレーションを実行して、稼働状態にするパスの現在のパス管理 *PATH_ID* を確認してから、`online` オペレーションを実行してください。

使用例

コマンド実行の確認をして、CHA ポート「0A」を通るすべてのパスを稼働状態にする場合（パス管理 *PATH_ID* 「000002」が CHA ポート「0A」を通過しているとき）

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -cha -pathid 000002
KAPL01057-I 指定された CHA port を通る全てのパスを Online にします。よろしいですか? [y/n] :y
KAPL01061-I 2本のパスを Online にしました。失敗したパス = 0本。オペレーション名 = online
#
```

`-pathid`パス管理 *PATH_ID*

単一のパスを稼働状態にする場合に指定します。

view オペレーションで表示される、現在のパス管理 PATH_ID を指定します。view オペレーションについては、「6.7 view 情報を表示する」を参照してください。パス管理 PATH_ID の、左側の桁から 0 詰めされている 0 は省略できます (000001 と 1 は同値です)。ただし、パス管理 PATH_ID 「000000」を指定する場合は、「000000」または「0」を指定してください。

パス管理 PATH_ID は、ホストの再起動時に新しく割り当てられます。また、ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には、dlmcfmgr ユティリティの実行時にその LU の各パスにパス管理 PATH_ID が新しく割り当てられます。必ず view オペレーションを実行して、稼働状態にするパスの現在のパス管理 PATH_ID を確認してから、online オペレーションを実行してください。

-device SCSI デバイス名

SCSI デバイ스에接続されているパスを稼働状態にする場合に指定します。

SCSI デバイス名には、次に示す view オペレーションで表示される Device を指定します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
view オペレーションを実行して SCSI デバイス名を表示する方法については「6.7.2 パラメタ」の「(3) LU 情報を表示する場合」を参照してください。指定できるパラメタ値は 1 つだけです。英字の大文字、小文字は区別されます。
```

使用例

コマンド実行の確認をして、SCSI デバイス名「/dev/sde」を通るパスを稼働状態にする場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -path -device /dev/sde
KAPL01050-I 指定されたパスを Online にします。よろしいですか? [y/n]:y
KAPL01061-I 1本のパスを Online にしました。失敗したパス = 0本。オペレーション名 = online
```

-s

コマンド実行の確認メッセージを表示しないで実行します。シェルスクリプトやバッチファイルでコマンドを実行する場合など、確認メッセージへの入力を省略したいときに指定します。

使用例

コマンド実行の確認をしないで、パス管理 PATH_ID 「000002」のパスを稼働状態にする場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -pathid 2 -s
KAPL01061-I 1本のパスを Online にしました。失敗したパス = 0本。オペレーション名 = online
#
```

(2) online オペレーションの形式を表示する場合

-help

online オペレーションの形式が表示されます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr online -help
online:
Format
dlnkmgr online [-path] [-s]
dlnkmgr online [-path] -hba HBAPortNumber.BusNumber [-s]
dlnkmgr online [-path] -cha -pathid AutoPATH_ID [-s]
```

```

        dlncmgr online [-path] [-pathid AutoPATH_ID] [-s]
        dlncmgr online [-path] [-device SCSI_Device_Name] [-s]
Valid value
        AutoPATH_ID      { 000000 - 999999 }(Decimal)
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = online, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

参考

HDLM コマンドの view オペレーションと UNIX の標準コマンドを組み合わせて実行すると、特定の HBA ポート、または CHA ポートで、パスの情報を絞り込んで表示できます。view オペレーションについては、「[6.7 view 情報を表示する](#)」を参照してください。

HBA ポート単位、または CHA ポート単位でパスを稼働状態にする前に、次のコマンドを実行して、稼働状態にするパスの情報を確認することをお勧めします。

例 1

特定の HBA ポート（ホストポート番号「0004」、バス番号「0000」）を通るすべてのパスを確認する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlncmgr view -path | grep 0004.0000
```

指定した HBA ポートを通るパスの情報だけが表示されます。

例 2

SANRISE9500V シリーズの CHA ポート「0A」を通るすべてのパスを確認する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlncmgr view -path -stname | grep 9500V | grep 0A
```

指定した CHA ポートを通るパスの情報だけが表示されます。

6.6 set 動作環境を設定する

HDLM の動作環境を設定します。

6.6.1 形式

(1) HDLM の動作環境を設定する場合

```

/opt/DynamicLinkManager/bin/dlncmgr set
        {-lb {on [-lbtype {rr|exrr|lio|exlio|lbk|exlbk}]}|off}
        |-ellv 障害ログ採取レベル
        |-elfs 障害ログファイルサイズ
        |-elfn 障害ログファイル数
        |-systflv トレースレベル
        |-systfs トレースファイルサイズ
        |-systfn トレースファイル数
        |-pchk {on [-intvl チェック間隔]}|off}
        |-afb {on [-intvl チェック間隔]}|off}
        |-iem {on [-intvl 障害監視時間] [-iemnum 障害発生回数]}|off}
        |-lic

```

```

|-audlog {on [-audlv 監査ログ採取レベル] [-category [[ss] [a] [ca]|
all]]|off}
|-audfac Facility 値
|-lbpathusetimes 同一パス使用回数
|-expathusetimes 同一パス使用回数
|-dpc {on|off} [-pathid パス ID -lu|-pathid パス ID -storage]
|-dpcintvl チェック間隔
}
[-s]

```

(2) set オペレーションの形式を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -help
```

6.6.2 パラメタ

(1) HDLM の動作環境を設定する場合

各設定のデフォルト値と推奨値を次の表に示します。set オペレーションで設定値を変更した場合、その値は直ちに有効になります。

表 6-2 各設定のデフォルト値と推奨値

項目名	デフォルト値	推奨値
ロードバランス	on アルゴリズムは拡張最少 I/O 数	on アルゴリズムの推奨値は運用環境によって異なります。
障害ログ採取レベル	3: Information レベル以上の障害情報を採取	3: Information レベル以上の障害情報を採取
障害ログファイルサイズ	9900 (KB)	9900 (KB)
障害ログファイル数	2	2
トレースレベル	0: トレースを出力しない	0: トレースを出力しない
トレースファイルサイズ	1000 (KB)	1000 (KB)
トレースファイル数	4	4
パスヘルスチェック	on チェック間隔: 30 分	on チェック間隔の推奨値は運用環境によって異なります。
自動フェイルバック	off	off
間欠障害監視	off	off
監査ログ採取	off	推奨値は運用環境によって異なります。 監査ログを採取したい場合「on」を設定してください。
監査ログの Facility	user	local0~7
ロードバランスの同一パス使用回数	32	推奨値は運用環境によって異なります。
拡張ロードバランスの同一パス使用回数	100	推奨値は運用環境によって異なります。
ダイナミック I/O パスコントロール※	off チェック間隔: 10 分	off

項目名	デフォルト値	推奨値
		チェック間隔の推奨値は運用環境によって異なります。

注※

ストレージシステムが Hitachi AMS2000 シリーズ, Hitachi SMS シリーズ, または HUS100 シリーズを使用している場合にだけ適用されます。

`-lb {on [-lbtype {rr|exrr|lio|exlio|lbk|exlbg}]|off}`

ロードバランス機能を有効, または無効にします。

on : 有効

off : 無効

`-lbtype {rr|exrr|lio|exlio|lbg|exlbg}`

ロードバランスのアルゴリズムを選択します。

rr : ラウンドロビン

exrr : 拡張ラウンドロビン

lio : 最少 I/O 数

exlio : 拡張最少 I/O 数

lbg : 最少ブロック数

exlbg : 拡張最少ブロック数

`-lbtype` で設定したアルゴリズムは, `-lb off` を指定してロードバランス機能を無効にしても, 記憶されています。そのため, 再度ロードバランス機能を有効にし, アルゴリズムを指定しなかった場合, 記憶されているアルゴリズムでロードバランスが実行されます。

`-ellv` 障害ログ採取レベル

障害ログとして採取する障害情報のレベルを設定します。

障害ログ採取レベルを設定できるログファイルは, HDLM マネージャのログ (`dlnmgr[1-16].log`) です。

障害ログ採取レベルの設定値とその説明を「表 6-3 障害ログ採取レベルの設定値」に示します。なお, 障害が発生したときは, 障害ログ採取レベルに「1」以上を選択してログを採取します。

表 6-3 障害ログ採取レベルの設定値

設定値	説明
0	障害ログを採取しません。
1	Error レベル以上の障害情報を採取します。
2	Warning レベル以上の障害情報を採取します。
3	Information レベル以上の障害情報を採取します。
4	Information レベル (保守情報も含む) 以上の障害情報を採取します。

設定値が大きいくほど出力されるログの量が多くなります。ログの出力量が多い場合, 古い障害ログファイルに上書きされるまでの時間が短くなります。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnmgr set -ellv 1
KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = set。よろしいですか? [y/n] : y
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = set, 終了時
```

刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

-elfs 障害ログファイルサイズ

障害ログファイル (dlmmgr[1-16].log) のサイズをキロバイト単位で設定します。100～2000000 の値を指定します。HDLM マネージャのログには指定値が反映されます。障害ログファイル数の指定と合わせて、採取できる障害ログの合計サイズの最大値は 32000000KB (約 30GB) です。

すべてのログファイルが設定サイズに達すると、いちばん古いログファイルから順に新しいログ情報が上書きされます。

-elfn 障害ログファイル数

障害ログファイル (dlmmgr[1-16].log) の数を設定します。2～16 の値を指定します。障害ログファイルサイズの指定と合わせて、採取できる障害ログの合計サイズの最大値は 32000000KB (約 30GB) です。

-systflv トレースレベル

トレースの出力レベルを設定します。トレースレベルを設定できるトレースファイルは、hdlmtr[1-64].log です。トレースレベルの設定値とその説明を「表 6-4 トレースレベルの設定値」に示します。なお、障害が発生したときは、トレースレベルに「1」以上を選択してログを採取します。

表 6-4 トレースレベルの設定値

設定値	説明
0	トレースを出力しません。
1	エラー情報だけ出力します。
2	プログラムの動作概略を出力します。
3	プログラムの動作詳細を出力します。
4	すべての情報を出力します。

設定値が大きいほど出力されるログの量が多くなります。ログの出力量が多い場合、古い障害ログファイルに上書きされるまでの時間が短くなります。

-systfs トレースファイルサイズ

トレースファイルのサイズをキロバイト単位で設定します。100～16000 の値を指定します。トレースファイル数の指定と合わせて、採取できるトレースの合計サイズの最大値は 1024000KB です。なお、設定されている値よりも小さい値を指定した場合、実行を確認する KAPL01097-W のメッセージが表示されてトレースファイルはいったん削除されます。ファイルサイズを設定できるトレースファイルは、hdlmtr[1-64].log です。トレースファイルは固定長です。したがって、書き込まれるトレース情報が設定したファイルサイズに満たない場合でも、出力されるトレースファイル 1 つ当たりのファイルサイズは常に固定です。すべてのトレースファイルにトレースが書き込まれると、いちばん古いトレースファイルから順に新しいトレースが上書きされます。

-systfn トレースファイル数

トレースファイルの数を設定します。2～64 の値を指定します。トレースファイルサイズの指定と合わせて、採取できるトレースの合計サイズの最大値は 1024000KB です。なお、設定されている値よりも小さい値を指定した場合、実行を確認する KAPL01097-W のメッセージが表示されてトレースファイルはいったん削除されます。ファイル数を設定できるトレースファイルは、hdlmtr[1-64].log です。

-pchk {on [-intvl チェック間隔]|off}

パスヘルスチェック機能を有効、または無効にします。

on : 有効

off : 無効

待機系ホストや、SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズのストレージシステムに接続しているホストでは、I/O が発行されないパスの障害を検出するために、パスヘルスチェック機能を有効にすることをお勧めします。「on」を指定した場合、パスヘルスチェックのチェック間隔を、後続パラメタで指定します。チェック間隔の指定を省略した場合、チェック間隔は次のとおりになります。

- これまでにチェック間隔を一度も指定していない場合
30 分間隔 (デフォルトの設定) になります。
- これまでにチェック間隔を指定している場合
前回指定したチェック間隔になります。

パスヘルスチェックのチェック間隔を指定する後続パラメタの形式を、次に示します。

-intvl チェック間隔

パスヘルスチェックのチェック間隔を、分単位で指定します。使用している環境に合わせて 1~1440 の値を指定します。チェック間隔を変更した場合、変更後のチェック間隔が直ちに有効になります。チェック間隔を短くした場合、前回のパスヘルスチェックの実行終了時から、すでに変更後のチェック間隔を経過しているときには、直ちにパスヘルスチェックが始まります。このパラメタで設定したチェック間隔は、-pchk off を指定してパスヘルスチェック機能を無効にしても、記憶されています。そのため、再度パスヘルスチェック機能を有効にし、チェック間隔を指定しなかった場合、記憶されているチェック間隔でパスヘルスチェックが実行されます。

-afb {on [-intvl チェック間隔] | off}

障害パスの自動フェイルバック機能を有効、または無効にします。

on : 有効

off : 無効

自動フェイルバック機能を有効にすると、保守作業などのためにユーザが意識的に障害状態にしていたパスが、自動的に稼働状態になってしまうことがあります。また、ストレージやパスで間欠障害が発生した場合、パスの状態が、閉塞状態と稼働状態を繰り返すため、I/O の性能が低下することがあります。

自動フェイルバックの対象となるのは、障害が発生して KAPL08022-E のメッセージが出力されたパス、および HDLM マネージャの起動時に障害となっているパスです。間欠障害が発生したときの I/O 性能の低下を防ぐため、自動フェイルバックを有効にする場合は、間欠障害監視を有効にすることをお勧めします。間欠障害監視は、自動フェイルバックが有効なときにだけ設定できます。自動フェイルバックと間欠障害監視の設定の関係については、「表 6-5 自動フェイルバックおよび間欠障害監視の設定状況と、実行できる操作の関係」を参照してください。

「on」を指定した場合、パスの状態を確認するチェック間隔を後続パラメタで指定します。チェック間隔の指定を省略した場合、チェック間隔は次のとおりになります。

- これまでにチェック間隔を一度も指定していない場合
1 分間隔 (デフォルトの設定) になります。
- これまでにチェック間隔を指定している場合
前回指定したチェック間隔になります。

パスの状態確認のチェック間隔を指定する後続パラメタの形式を、次に示します。

-intvl チェック間隔

パスの状態確認の終了から、次のパスの状態確認を開始するまでのチェック間隔を、分単位で指定します。1~1440 の値を指定します。デフォルト値は「1」です。システムの運用方法に合わせて設定してください。

間欠障害監視の設定が「on」で障害発生回数が「2」以上の場合、次の条件が満たされている必要があります。

間欠障害の障害監視時間 >=
自動フェイルバックのチェック間隔×間欠障害監視で指定する障害発生回数

この条件が満たされない場合は KAPL01080-W エラーになります。エラーになった場合は、自動フェイルバックのチェック間隔、間欠障害の監視時間、または間欠障害監視で指定する障害発生回数のどれかを変更してください。

障害発生回수에「1」を指定した場合、上記の条件を満たす必要はありません。

チェック間隔を変更した場合、変更後のチェック間隔が直ちに有効になります。チェック間隔を短くした場合、前回のパスの状態確認が終了したときから、すでに変更後のチェック間隔を経過しているときには、直ちにパスの状態確認が始まります。

このパラメタで設定したチェック間隔は、-afb off を指定して自動フェイルバック機能を無効にしても、記憶されています。そのため、再度自動フェイルバック機能を有効にし、チェック間隔を指定しなかった場合、記憶されているチェック間隔でパスの状態確認が実行されます。

```
-iem {on [-intvl 障害監視時間] [-iemnum 障害発生回数]|off}
```

間欠障害監視を有効、または無効にします。

on : 有効

off : 無効

間欠障害監視は、自動フェイルバックが「on」のときにだけ設定できます。間欠障害が発生したときの I/O 性能の低下を防ぐため、自動フェイルバックを有効にする場合は、間欠障害監視を有効にすることをお勧めします。「on」を指定した場合、障害監視時間および障害発生回数を、後続パラメタで指定します。間欠障害の監視が開始されてから指定した時間が経過するまでの間に、指定した回数の障害が発生した場合に、該当するパスに間欠障害が発生していると見なします。間欠障害が発生していると見なされたパスは、自動フェイルバックの対象外になります。間欠障害監視は、パスごとに実施されます。また、間欠障害監視は、自動フェイルバックによってパスが障害から回復した時点から開始されます。

障害監視時間または障害発生回数の指定を省略した場合、それぞれの値は次のとおりになります。

- これまでに障害監視時間または障害発生回数を一度も指定していない場合
障害監視時間は 30 分、障害発生回数は 3 回になります。
- これまでに障害監視時間または障害発生回数を指定している場合
前回指定した値になります。

障害監視時間と障害発生回数の設定値は障害発生回数が「2」以上の場合、次の条件を満たしている必要があります。

間欠障害の障害監視時間 >=
自動フェイルバックのチェック間隔×間欠障害監視で指定する障害発生回数

この条件が満たされない場合は KAPL01080-W エラーになります。エラーになった場合は、自動フェイルバックのチェック間隔、間欠障害の監視時間、または間欠障害監視で指定する障害発生回数のどれかを変更してください。

障害発生回数が「1」の場合、上記の条件を満たす必要はありません。

間欠障害の監視時間と障害の発生回数を指定する後続パラメタの形式を、次に示します。

-intvl 障害監視時間

間欠障害の監視時間を分単位で指定します。1~1440 の値を指定します。デフォルト値は「30」です。

間欠障害の監視中に障害監視時間を変更した場合、変更前までにカウントされた障害発生回数、および監視を開始してから経過した時間が 0 に初期化されます。そして、変更後の設定で監視が開始されます。間欠障害の監視時間外に障害監視時間を変更した場合、次に自動フェイルバックが成功した時点から、変更後の障害監視時間が有効になります。監視時間外は障害発生回数はカウントされていないため、回数の変更はありません。

このパラメタで設定した障害監視時間は、-iem off を指定して間欠障害監視を無効にしても記憶されています。そのため、再度間欠障害監視を有効にし、障害監視時間を指定しなかった場合、記憶されている障害監視時間で間欠障害監視が実行されます。

-iemnum 障害発生回数

障害の発生回数を指定します。1~99 の値を指定します。デフォルト値は「3」です。

間欠障害の監視中に障害発生回数を変更した場合、変更前までにカウントされた障害発生回数、および監視を開始してから経過した時間が 0 に初期化されます。そして、変更後の設定で監視が開始されます。間欠障害の監視時間外に障害発生回数を変更した場合、次に自動フェイルバックが成功した時点から変更後の障害発生回数が有効になります。監視時間外は障害発生回数はカウントされていないため、回数の変更はありません。

このパラメタで設定した障害発生回数は、-iem off を指定して間欠障害監視を無効にしても、記憶されています。そのため、再度、間欠障害監視を有効にし、障害発生回数を指定しなかった場合、記憶されている障害発生回数で間欠障害監視が実行されます。

間欠障害の監視中に set -iem on オペレーションを実行した場合、障害監視時間または障害発生回数を変更していなくても、それまでにカウントされた障害発生回数、および監視を開始してから経過した時間が初期化されます。間欠障害監視は継続されます。

間欠障害監視を「on」に設定しているときに、自動フェイルバックを「off」に設定すると、間欠障害監視は無効になります。ただし、view -sys オペレーションで HDLM の機能の設定情報を表示した場合、間欠障害監視 (Intermittent Error Monitor) の設定は「on」と表示されます。再度自動フェイルバックを「on」に設定すると、間欠障害監視が有効になります。

自動フェイルバックおよび間欠障害監視について実行できる操作は、それらの機能の設定状況に依存します。自動フェイルバックおよび間欠障害監視の設定状況と、それらの機能について実行できる操作の関係を、次の表に示します。

表 6-5 自動フェイルバックおよび間欠障害監視の設定状況と、実行できる操作の関係

設定状況		実行できる操作	操作の結果
AFB	IEM		
on	on	AFB を「on」にする	AFB と IEM の動作には変化なし
		AFB の設定値を変更する	AFB は変更後の設定で動作する※1
		AFB を「off」にする	<ul style="list-style-type: none">AFB および IEM が無効になるカウントされた障害発生回数、監視経過時間、および自動フェイルバック対象外の情報が初期化される
		IEM を「on」にする	<ul style="list-style-type: none">間欠障害監視中のパスは、カウントされた障害発生回数と監視経過時間が「0」に初期化され、改めて間欠障害監視が開始される間欠障害監視時間外のパスは、変化なし
		IEM の設定値を変更する	<ul style="list-style-type: none">間欠障害監視中のパスは、カウントされた障害発生回数と監視経過時間が「0」に初期化され、変更後の監視条件に従って、改めて間欠障害監視が開始される※1

設定状況		実行できる操作	操作の結果
AFB	IEM		
			<ul style="list-style-type: none"> 間欠障害監視時間外のパスは障害発生後、自動フェイルバックによって回復したときから設定値が有効となる
		IEMを「off」にする	<ul style="list-style-type: none"> IEMが無効になる カウントされた障害発生回数、監視経過時間、および自動フェイルバック対象外の情報が初期化される
	off	AFBを「on」にする	AFBとIEMの動作には変化なし
		AFBの設定値を変更する	AFBは変更後の設定で動作する
		AFBを「off」にする	AFBが無効になる
		IEMを「on」にする	IEMが有効になる※1
	off	on※2	AFBを「on」にする
AFBを「off」にする			AFBとIEMの動作には変化なし
off		AFBを「on」にする	AFBが有効になる
		AFBを「off」にする	AFBとIEMの動作には変化なし

(凡例)

AFB：自動フェイルバック

IEM：間欠障害監視

注※1

自動フェイルバックのチェック間隔の設定値と間欠障害監視の設定値の条件を満たさない場合、KAPL01080-W エラーになります。KAPL01080-W エラーとなった場合は間欠障害監視状態に変化はありません。

注※2

自動フェイルバックの設定が「off」なので、間欠障害監視は無効です。

使用例

間欠障害監視を有効にする場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -iem on -intvl 20 -
iemnum 2
KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = set。よろしいで
すか? [y/n] : y
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = set, 終了時
刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

-lic

ライセンスを更新する場合に指定します。ライセンスは、ライセンスキーまたはライセンスキーファイルで提供されます。ライセンスキーファイルは、ライセンスキーを格納したファイルです。

ライセンスキーファイルが提供されている場合

ライセンスキーファイルを、/var/tmp 直下に「hdlm_license」という名称で格納してから、set -lic オペレーションを実行します。ライセンスキーファイルに記述されているライセンスキーの種別に応じて、ライセンスキーが登録された旨のメッセージが出力されます。一時または非常ライセンスの場合は、期限満了日も表示されます (KAPL01071-I, KAPL01072-I)。

ライセンスキーが提供されている場合

set -lic オペレーションを実行すると、ユーザにライセンスキーの入力を求める KAPL01068-I のメッセージが出力されます。それに対して、ライセンスキーを入力します。入力したライセンスキーの種別に応じて、ライセンスキーが登録された旨のメッセージが表示されます。一時または非常ライセンスの場合は、期限満了日も表示されます (KAPL01071-I, KAPL01072-I)。

ライセンスキーの種別を次の表に示します。

表 6-6 ライセンスキー種別

種類	説明
永久ライセンスキー	永久的な製品の使用を可能とするためのライセンスキーです。
一時ライセンスキー※	ユーザが製品の評価などを行う場合に使用するライセンスキーです。期間には、「120」(120 日間)が、インストール時に設定されます。一時ライセンスキーは再利用できません。
非常ライセンスキー	永久ライセンスキー発行が間に合わない場合などに、一時的に使用するライセンスキーです。期間には「30」(30 日間)が、インストール時に設定されます。非常ライセンスキーは再利用できません。

注※

一時ライセンスキーは、set オペレーションでインストールできません。

使用例 1

ライセンスキーを更新する場合 (ライセンスキーファイルがあるとき)

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -lic
KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = set。よろしいで
すか? [y/n] : y
KAPL01071-I 永久ライセンスがインストールされました。
#
```

使用例 2

ライセンスキーを更新する場合 (ライセンスキーファイルがないとき)

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -lic
KAPL01049-I オペレーションを開始します。オペレーション名 = set。よろしいで
すか? [y/n] : y
KAPL01083-I ライセンスキーファイルがありません。ファイル名 = /var/tmp/
hdlm_license
KAPL01068-I ライセンスキーを入力して下さい : *****
KAPL01071-I 永久ライセンスがインストールされました。
#
```

-audlog {on [-audlv 監査ログ採取レベル] [-category [[ss] [a] [ca]|all]]|off}

監査ログの採取を指定します。

on : 採取する

off : 採取しない

-audlv 監査ログ採取レベル

監査ログとして採取する重要度 (Severity) のレベルを設定します。設定値を次の表に示します。デフォルトの設定値は「6」です。

表 6-7 監査ログ採取レベルの設定値

設定値 (重要度)	説明
0	監査ログを採取しません。
1	
2	Critical レベルの監査ログを採取します。

設定値 (重要度)	説明
3	Critical, および Error レベルの監査ログを採取します。
4	Critical, Error, および Warning レベルの監査ログを採取します。
5	
6	Critical, Error, Warning, および Informational レベルの監査ログを採取します。
7	

`-category [[ss] [a] [ca]|all]`

監査ログとして採取する種別を設定します。設定値を次の表に示します。デフォルトの設定値は「all」です。`-category` を指定して設定値を省略した場合は「all」が指定されたものと見なされます。

表 6-8 監査ログ種別の設定値

設定値	説明
ss	StartStop の監査ログ事象を採取します。
a	Authentication の監査ログ事象を採取します。
ca	ConfigurationAccess の監査ログ事象を採取します。
all	StartStop, Authentication, および ConfigurationAccess の監査ログ事象を採取します。

`-audfac Facility 値`

監査ログの Facility を指定します。

設定値を次の表に示します。デフォルトの設定値は「user」です。

表 6-9 監査ログの Facility の設定値

設定値	/etc/syslog.conf ファイルでの対応する Facility 値
user または 1	user
local0 または 16	local0
local1 または 17	local1
local2 または 18	local2
local3 または 19	local3
local4 または 20	local4
local5 または 21	local5
local6 または 22	local6
local7 または 23	local7

`-lbpashtimes 同一パス使用回数`

ロードバランスのアルゴリズムに、ラウンドロビン (rr), 最少 I/O 数 (lio), または最少ブロック数 (lbk) を適用する場合、I/O に同一のパスを使用する回数を指定します。

10 進数で 0~999999 の値を指定できます。デフォルトの設定値は「32」です。0 を指定すると、ロードバランス機能を無効にした場合と同じです。

`-expathsetimes 同一パス使用回数`

ロードバランスのアルゴリズムに、拡張ラウンドロビン (exrr), 拡張最少 I/O 数 (exlio), または拡張最少ブロック数 (exlbk) を適用する場合、シーケンシャル I/O に同一のパスを使用する回数を指定します。

10進数で0~999999の値を指定できます。デフォルトの設定値は「100」です。0を指定すると、シーケンシャル I/O が続く間は同一パスを使い続けます。

- `-dpc {on|off} [-pathid パス ID -lu | -pathid パス ID -storage]`
ストレージシステム単位または LU 単位でダイナミック I/O パスコントロール機能を有効、または無効にします。デフォルト値は「off」です。
- on : 有効
off : 無効
- `-pathid パス ID -lu`
ダイナミック I/O パスコントロール機能の有効または無効を LU 単位に設定します。目的の LU に接続されているパス ID のうちどれか1つを指定します。
- `-pathid パス ID -storage`
ダイナミック I/O パスコントロール機能の有効または無効をストレージシステム単位に設定します。目的のストレージシステムに接続されているパス ID のうちどれか1つを指定します。
- `-pathid` パラメタを指定しない場合は、システム単位の設定となり、ストレージシステム単位または LU 単位の設定はクリアされます。
- `-dpcintvl` チェック間隔
ダイナミック I/O パスコントロール機能の、ストレージシステム側で行われるコントローラ切り替え情報を見直すチェック間隔を、分単位で指定します。1~1440の値を指定します。デフォルト値は「10」です。
- `-s`
コマンド実行の確認メッセージを表示しないで実行します。シェルスクリプトやバッチファイルでコマンドを実行する場合など、確認メッセージへの入力を省略したいときに指定します。

(2) set オペレーションの形式を表示する場合

- `-help`
set オペレーションの形式が表示されます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr set -help
set:
  Format
  dlnkmgr set { -lb on [ -lbtype { rr | exrr | lio | exlio | lbk |
exlbnk } ]
                | -lb off
                | -ellv ElogLevel
                | -elfs ElogFileSize
                | -elfn Number-Of-ElogFiles
                | -systflv TraceLevel
                | -systfs TraceFileSize
                | -systfn Number-Of-TraceFiles
                | -pchk on [ -intvl Interval-Time ]
                | -pchk off
                | -afb on [ -intvl Interval-Time ]
                | -afb off
                | -iem on
                  [ -intvl Error-Monitor-Interval ]
                  [ -iemnum Number-Of-Times ]
                | -iem off
                | -lic
                | -audlog on
```

```

        [ -audlv AudlogLevel ]
        [ -category Category-Value ]
    | -audlog off
    | -audfac { Facility-Name | Facility-Number }
    | -lbpathusetimes Number-Of-PathUseTimes
    | -expathusetimes Number-Of-ExPathUseTimes
    | -dpc { on | off } [-pathid AutoPATH_ID { -lu | -
storage } ]
    | -dpcintvl Dpc-Interval
    }
[-s]

Valid value
ElogLevel          { 0 | 1 | 2 | 3 | 4 } (Default Value 3)
ElogFileSize       { 100 - 2000000 }(KB) (Default Value 9900)
Number-Of-ElogFiles { 2 - 16 }(Files) (Default Value 2)
TraceLevel        { 0 | 1 | 2 | 3 | 4 } (Default Value 0)
TraceFileSize     { 100 - 16000 }(KB) (Default Value 1000)
Number-Of-TraceFiles { 2 - 64 }(Files) (Default Value 4)
Interval-Time     { 1 - 1440 }(Minute) (Default Value 30)
(pchk)
Interval-Time     { 1 - 1440 }(Minute) (Default Value 1)
(afb)
Error-Monitor-Interval { 1 - 1440 }(Minute) (Default Value 30)
Number-Of-Times     { 1 - 99 }(Times) (Default Value 3)
AudlogLevel        { 0 - 7 } (Default Value 6)
Category-Value     { [ss] [a] [ca] |
                    all } (Default Value all)

Facility-Name      { user |
                    local0 - local7 } (Default Value user)
Facility-Number    { 1 | 16 - 23 } (Default Value 1)
Number-Of-PathUseTimes { 0 - 999999 }(Times) (Default Value 32)
Number-Of-ExPathUseTimes { 0 - 999999 }(Times) (Default Value 100)
AutoPATH_ID       { 000000 - 999999 }(Decimal)
Dpc-Interval      { 1 - 1440 }(Minute) (Default Value 10)
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = set, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

6.7 view 情報を表示する

HDLM のプログラム情報、パス情報、LU 情報、HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を表示します。

6.7.1 形式

(1) プログラム情報を表示する場合

```

/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys
[-sfunc|-msrv|-adrv|-pdrv|-lic|-audlog|-lbpathusetimes|-
expathusetimes]
[-t]

```

(2) パス情報を表示する場合

パス情報表示

```

/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path
[-hdev ホストデバイス名]
[-stname]
[-iem]
[-srt {pn|lu|cp}]

```

```
[-hbaportwwn]
[-t]
```

パス情報表示（表示項目を選択する場合）

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -item
[pn] [dn] [lu] [cp] [type] [ic] [ie] [dnu] [hd] [iep] [hbaportwwn]
[vid]
[-hdev ホストデバイス名]
[-stname]
[-srt {pn|lu|cp}]
[-t]
```

パス情報の概略表示

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -c
[-stname]
[-srt {lu|cp}]
[-t]
```

(3) LU 情報を表示する場合

LU 情報表示

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
[-hdev ホストデバイス名|-pathid パス管理 PATH_ID]
[-t]
```

LU 情報表示（表示項目を追加する場合）

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu -item
[ [slpr] [pn] [cp] [clpr] [type] [ic] [ie] [dnu] [iep] [hctl] [dpc]
[vid]
|all ]
[-hdev ホストデバイス名|-pathid パス管理 PATH_ID]
[-t]
```

LU 情報の概略表示

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu -c [-t]
```

LU 情報の概略表示（表示項目を追加する場合）

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu -c -item
[slpr]
[-t]
```

(4) HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv [-t]
```

(5) view オペレーションの形式を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -help
```

6.7.2 パラメタ

ここでは、view オペレーションのパラメタを次の順に説明します。

- (1) プログラム情報を表示する場合
- (2) パス情報を表示する場合
- (3) LU 情報を表示する場合
- (4) HDLM デバイス、SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を表示する場合
- (5) view オペレーションの形式を表示する場合

(1) プログラム情報を表示する場合

```
-sys [-sfunc|-msrv|-advr|-pdrv|-lic|-audlog|-lbpathusetimes|-  
expathusetimes]
```

HDLM のプログラム情報が表示されます。

後続パラメタで、情報を表示する対象を指定します。後続パラメタを省略した場合は、監査ログ採取の設定情報、ロードバランスの同一パス使用回数、および拡張ロードバランスの同一パス使用回数を除くすべてのプログラム情報が表示されます。指定するパラメタ、表示される情報、表示される項目、およびその説明を「表 6-10 プログラム情報の表示項目」に示します。

-t

各情報の項目名を表示しません。

表 6-10 プログラム情報の表示項目

パラメタおよび表示される情報	表示項目	説明
-sfunc HDLM の機能設定 情報	HDLM Version	HDLM のバージョン番号です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Service Pack Version	HDLM の SP バージョン番号です。SP がインストールされていない場合は、空白です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Load Balance	ロードバランス機能の設定状態です。 <ul style="list-style-type: none"> • 設定状態 on : 有効 off : 無効 • アルゴリズム 設定状態が on の場合, on のあとの()にロードバランスのアルゴリズムを表示します。 rr : ラウンドロビン extended rr : 拡張ラウンドロビン lio : 最少 I/O 数 extended lio : 拡張最少 I/O 数 lbk : 最少ブロック数 extended lbk : 拡張最少ブロック数
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Support Cluster	空白※
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Elog Level	障害ログ採取レベルです。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 : 障害ログを採取しない • 1 : Error レベル以上の障害情報を採取する • 2 : Warning レベル以上の障害情報を採取する • 3 : Information レベル以上の障害情報を採取する

パラメタおよび表示される情報	表示項目	説明
		<ul style="list-style-type: none"> 4 : Information レベル (保守情報も含む) 以上の障害情報を採取する
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Elog File Size(KB)	障害ログファイルのサイズです。単位は「キロバイト」です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Number Of Elog Files	障害ログファイル数です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Trace Level	<p>トレースの出力レベルです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 : トレースを出力しない 1 : エラー情報だけ出力する 2 : プログラムの動作概略を出力する 3 : プログラムの動作詳細を出力する 4 : すべての情報を出力する
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Trace File Size(KB)	トレースファイルのサイズです。単位は「キロバイト」です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Number Of Trace Files	トレースファイル数です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Path Health Checking	<p>パスヘルスチェック機能の設定状態です。</p> <ul style="list-style-type: none"> 設定状態 on : 有効 off : 無効 チェック間隔 設定状態が on の場合, on のあとの()にパスヘルスチェックを実行するチェック間隔を表示します。単位は「分」です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Auto Failback	<p>自動フェイルバック機能の設定状態です。</p> <ul style="list-style-type: none"> 設定状態 on : 有効 off : 無効 チェック間隔 設定状態が on の場合, on のあとの()に, パスの状態を確認するチェック間隔を表示します。単位は「分」です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Reservation Status	空白
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Intermittent Error Monitor	<p>間欠障害監視の設定状態です。</p> <ul style="list-style-type: none"> 設定状態 on : 有効 off : 無効 自動フェイルバックが「off」の場合, 間欠障害監視に「on」が表示されていても, 監視は無効です。自動フェイルバックが「on」になったときに間欠障害監視が有効になります。 障害監視時間および障害発生回数 設定状態が on の場合, on のあとの()に, 設定した障害監視時間および障害発生回数が, 「障害発生回数 / 障害監視時間」の形式で表示されます。単位は「回」と「分」です。
-sfunc HDLM の機能設定 情報	Dynamic I/O Path Control	<p>ダイナミック I/O パスコントロール機能の設定状態です。</p> <ul style="list-style-type: none"> 設定状態 on : 有効 off : 無効 チェック間隔 設定状態のあとの()に, ストレージシステム側で行われるコントローラ切り替え情報を見直すチェック間隔を表示します。単位は「分」です。

パラメタおよび表示される情報	表示項目	説明
		ストレージシステム単位または LU 単位ごとに異なる設定をしていた場合は、チェック間隔の()のあとに「*」が付加されます。
-msrv HDLM マネージャ の情報	HDLM Manager	HDLM マネージャの状態です。 Alive : 正常 Dead : 停止
	Ver	HDLM マネージャのバージョン番号です。
	WakeupTime	HDLM マネージャの起動時刻です。
-adrv HDLM アラートド ライバの情報	HDLM Alert Driver	HDLM アラートドライバの状態です。 Alive : 正常 Dead : 停止
	Ver	HDLM アラートドライバのバージョン番号です。
	WakeupTime	HDLM アラートドライバの起動時刻です。
	ElogMem Size	HDLM アラートドライバの障害ログメモリのサイズです。単位は「キロバイト」です。
-pdrv HDLM ドライバの 情報	HDLM Driver	HDLM ドライバの状態です。 Alive : 正常 Dead : 停止
	Ver	HDLM ドライバのバージョン番号です。
	WakeupTime	HDLM ドライバの起動時刻です。
-lic HDLM のライセン ス情報	License Type	ライセンスの種別です。 <ul style="list-style-type: none"> Permanent : 永久ライセンス Temporary : 一時ライセンス Emergency : 非常ライセンス
	Expiration	ライセンスの期限です。 <ul style="list-style-type: none"> 永久ライセンスの場合 : - 一時ライセンスまたは非常ライセンスの場合 : ライセンスの期限が <code>yyyy/mm/dd(n days after)</code> の形式で表示されます。ライセンスの期限まで <i>n</i> 日ある場合に <code>view -sys -lic</code> オペレーションを実行したときは、「<i>(n days after)</i>」と表示されます。 ライセンス期限の満了日 (2006 年 08 月 21 日) まであと 100 日ある場合の表示例 Expiration 2006/08/21(100days after)
-audlog 監査ログ採取の設定 情報	Audit Log	監査ログ採取の設定状態です。 <ul style="list-style-type: none"> 設定状態 on : 採取する off : 採取しない 監査ログ採取レベル 設定状態が on の場合、on のあとの()に、設定した採取レベルが表示されます。採取レベルは重要度 (Severity) を示し、0~7 で表示されます。
-audlog 監査ログ採取の設定 情報	Audit Log Category	監査ログの出力対象となっている種別を表示します。種別を表す文字列が「,」で区切って表示されます。 ss : StartStop a : Authentication ca : ConfigurationAccess 上記のすべての種別が設定されている場合は「all」が表示されます。 監査ログ採取をしない設定の場合は「-」が表示されます。
-audlog 監査ログ採取の設定 情報	Audit Log Facility	監査ログの Facility 名が表示されます。「user」、「local0」、「local1」、「local2」、「local3」、「local4」、「local5」、「local6」、または「local7」が表示されます。 監査ログ採取をしない設定の場合は「-」が表示されます。

パラメタおよび表示される情報	表示項目	説明
-lbpashtimes ロードバランスの同一パス使用回数	Times Same Path Was Used	ロードバランスのアルゴリズムに、ラウンドロビン (rr)、最少 I/O 数 (lio)、または最少ブロック数 (lbc) を適用する場合、I/O に同一のパスを使用する回数です。 Global Link Manager を使用して LU 単位で同一パス使用回数を設定している場合は、値のあとに「*」が付きます。
-expathsetimes 拡張ロードバランスの同一パス使用回数	Times Same ExPath Was Used	ロードバランスのアルゴリズムに、拡張ラウンドロビン (exrr)、拡張最少 I/O 数 (exlio)、または拡張最少ブロック数 (exlbc) を適用する場合、シーケンシャル I/O に同一のパスを使用する回数です。 Global Link Manager を使用して LU 単位で同一パス使用回数を設定している場合は、値のあとに「*」が付きます。

注※

クラスタソフトウェアを使用する場合、クラスタ機能の設定状態、およびクラスタサーバの種類は表示されませんが、実際にはクラスタ機能は問題なく動作します。

使用例

使用例 1

HDLM の機能設定情報を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -sfunc
HDLM Version                : x.x.x-xx
Service Pack Version        :
Load Balance                 : on(extended lio)
Support Cluster              :
Elog Level                   : 3
Elog File Size(KB)          : 9900
Number Of Elog Files        : 2
Trace Level                  : 0
Trace File Size(KB)         : 1000
Number Of Trace Files       : 4
Path Health Checking        : on(30)
Auto Failback                : off
Reservation Status          :
Intermittent Error Monitor   : off
Dynamic I/O Path Control    : off(10)
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 2

HDLM マネージャの情報を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -msrv
HDLM Manager Ver            WakeupTime
Alive      x.x.x-xx        yyyy/mm/dd hh:mm:ss
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 3

HDLM アラートドライバの情報を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -adrv
HDLM Alert Driver Ver      WakeupTime      ElogMem Size
Alive      x.x.x-xx        yyyy/mm/dd hh:mm:ss 1000
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 4

HDLM ドライバの情報を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -pdrv
HDLM Driver Ver      WakeupTime
Alive                x.x.x-xx          yyyy/mm/dd hh:mm:ss
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 5

HDLM のライセンス情報を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -lic
License Type Expiration
Permanent          -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 6

監査ログの設定情報を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -audlog
Audit Log           : off
Audit Log Category : -
Audit Log Facility : -
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 7

ロードバランスの同一パス使用回数を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -lbpathusetimes
Times Same Path Was Used : 32
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

使用例 8

拡張ロードバランスの同一パス使用回数を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -sys -expathusetimes
Times Same ExPath Was Used : 100
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

(2) パス情報を表示する場合

パス情報を表示する場合、`-path` パラメタと同時に`-item` パラメタや`-c` パラメタを指定すると、項目を選択して表示したり、パス情報の概略を表示したりできます。ここでは、それぞれのパラメタの説明をしたあとに、パス情報の表示項目を説明します。

パス情報表示

`-path`

`-path` パラメタと同時に、`-c` パラメタ、`-item` パラメタのどちらも指定しない場合、表示項目の短縮や選択を行わないで、HDLM が管理するパスの情報が表示されます。後続パラメタで表示するパスを絞り込んだり (`-hdev`)、パスの情報をソートしたり (`-srt`) できます。`-hdev` パラメタ、および`-srt` パラメタを省略した場合は、すべてのパスの情報がパス管理 `PATH_ID` 順に表示されます。

各表示項目の内容については、「表 6-12 パス情報の表示項目」を参照してください。

-path パラメタを指定した場合に表示されるパス管理 PATH_ID (PathID) は、ホスト起動時のパス検出の順番によって変わります。このため、パスを特定する場合は、必ずパス名 (PathName) を使用してください。

後続パラメタの形式を次に示します。

-hdev ホストデバイス名

指定したホストデバイスにアクセスするパスの情報だけが表示されます。

ホストデバイス名には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddlma[aa-pap]) からパーティション番号を除いたものを指定します。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。英字の大文字、小文字は区別されます。

-stname

プロダクト ID にストレージシステムのモデル ID が表示されます。指定しない場合は、プロダクト ID、またはエミュレーションタイプが表示されます。

プロダクト ID の表示内容については、「表 6-14 プロダクト ID の表示内容」を参照してください。

-iem

パス情報の項目に IEP が追加され、間欠障害に関する情報が表示されます。

-srt {pn|lu|cp}

パス情報が、指定したキーで昇順にソートして表示されます。

パス情報は、ストレージシステム名 (DskName) を第 1 キー、-srt パラメタで指定した項目を第 2 キー、パス管理 PATH_ID を第 3 キーとしてソートされます。第 2 キーとして指定できる項目は、パス名 (pn)、ストレージシステム内の LU 番号 (lu)、または CHA ポート番号 (cp) です。

-srt パラメタを省略した場合、パス情報はパス管理 PATH_ID 順に表示されます。

-hbaportwwn

ストレージシステムと接続している HBA のポート WWN 情報が表示されます。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

使用例

ホストデバイス「sddlmaa」にアクセスするパス情報を表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlinkmgr view -path -hdev sddlmaa
Paths:000004 OnlinePaths:000004
PathStatus IO-Count IO-Errors
Online 0 0

PathID PathName DskName iLU ChaPort Status Type IO-Count IO-Errors DNun HDevName
000000 0000.0000.0000000000000000.0000 HITACHI .DFE00F .0115 0000 0A Online Own 0 0 0 sddlmaa
000020 0000.0000.0000000000000001.0000 HITACHI .DFE00F .0115 0000 1A Online Non 0 0 0 sddlmaa
000040 0001.0000.0000000000000000.0000 HITACHI .DFE00F .0115 0000 0A Online Own 0 0 0 sddlmaa
000041 0001.0000.0000000000000001.0000 HITACHI .DFE00F .0115 0000 1A Online Non 0 0 0 sddlmaa

KAPLO1001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view。終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

パス情報表示 (表示項目を選択する場合)

-path -item

-path パラメタと同時に-item パラメタを指定した場合、HDLM が管理するパスの情報のうち、-item のパラメタ値で指定した項目だけを表示します。

-item パラメタでパラメタ値を何も指定しないで実行した場合、PathID と Status だけが表示されます。

-item パラメタで選択できる表示項目と、-item パラメタの後続に指定するパラメタ値との対応を次の表に示します。

表 6-11 -path -item パラメタで選択できる表示項目と指定する後続パラメタ

選択できる表示項目	後続パラメタ
PathID※	なし
PathName	pn
DskName	dn
iLU	lu
ChaPort	cp
Status※	なし
Type	type
IO-Count	ic
IO-Errors	ie
DNum	dnu
HDevName	hd
IEP	iep
HBAPortWWN	hbaportwwn
Physical-DskName	vid
Physical-iLU	vid
Physical-ChaPort	vid

注※

PathID と Status は常に表示される項目なので、パラメタ値の指定は不要です。

また、後続パラメタで表示するパスを絞り込んだり (-hdev)、情報をソートしたり (-srt) できます。-hdev パラメタおよび-srt パラメタを省略した場合は、すべてのパスの情報がパス管理 PATH_ID 順に表示されます。

後続パラメタの形式を次に示します。

-hdev ホストデバイス名

指定したホストデバイスにアクセスするパスの情報だけが表示されます。

ホストデバイス名には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddlml[aa-pap]) からパーティション番号を除いたものを指定します。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。

英字の大文字、小文字は区別されます。このパラメタを指定した場合、-item パラメタの値に hd を指定しなくても、HDevName が表示されます。

-stname

プロダクト ID にストレージシステムのモデル ID が表示されます。指定しない場合は、プロダクト ID、またはエミュレーションタイプが表示されます。

プロダクト ID の表示内容については、「表 6-14 プロダクト ID の表示内容」を参照してください。

このパラメタを指定した場合、-item パラメタの値に dn を指定しなくても、DskName が表示されます。

-srt {pn|lu|cp}

パス情報が、指定したキーで昇順にソートして表示されます。

パス情報は、ストレージシステム名 (DskName) を第 1 キー、-srt パラメタで指定した項目を第 2 キー、パス管理 PATH_ID を第 3 キーとしてソートされます。第 2 キーとして指定できる項目は、パス名 (pn)、ストレージシステム内の LU 番号 (lu)、または CHA ポート番号 (cp) です。

-srt パラメタを省略した場合、パス情報はパス管理 PATH_ID 順に表示されます。このパラメタを指定した場合、-item パラメタで指定しなくても、ソートのキー項目が、パス情報として表示されます。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

使用例

パス情報の表示項目のうち IO-Count を選択して、LU で昇順にソートして表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -item ic -srt lu -stname
Paths:000010 OnlinePaths:000010
PathStatus IO-Count IO-Errors
Online      500      0

PathID DskName                               iLU      Status      IO-Count
000003 HITACHI .SANRISE9500V .0123     0180      Online      400
000009 HITACHI .SANRISE9500V .0123     0180      Online      420
000004 HITACHI .SANRISE9500V .0123     0181      Online      410
000010 HITACHI .SANRISE9500V .0123     0181      Online      399
000005 HITACHI .SANRISE9500V .0123     0182      Online      405
000011 HITACHI .SANRISE9500V .0123     0182      Online      405
000000 HITACHI .USP_V       .0014050 000050     Online      1005
000006 HITACHI .USP_V       .0014050 000050     Online      897
000001 HITACHI .USP_V       .0014050 000051     Online      0
000007 HITACHI .USP_V       .0014050 000051     Online      0
000002 HITACHI .USP_V       .0014050 000052     Online      0
000008 HITACHI .USP_V       .0014050 000052     Online      0
KAPLO1001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd
hh:mm:ss
#
```

パス情報の概略表示

-path -c

-path パラメタと同時に -c パラメタを指定した場合、HDLM が管理するパスの情報のうち PathID, DskName, iLU, CP, Status, Type だけを表示します。表示内容を短縮して 1 つのパスの情報が 1 行で表示されます。

各表示項目の内容については、「表 6-12 パス情報の表示項目」を参照してください。

DskName に表示できるプロダクト ID は、10 文字以下です。プロダクト ID の文字数が 11 文字以上の場合、プロダクト ID の 8 文字目以降は短縮形 (...) で表示されます。

後続パラメタの形式を次に示します。

-stname

プロダクト ID にストレージシステムのモデル ID が表示されます。指定しない場合は、プロダクト ID、またはエミュレーションタイプが表示されます。

プロダクト ID の表示内容については、「表 6-14 プロダクト ID の表示内容」を参照してください。

-srt {lu|cp}

パス情報が、指定したキーで昇順にソートして表示されます。

パス情報は、ストレージシステム名 (DskName) を第 1 キー、-srt パラメタで指定した項目を第 2 キー、パス管理 PATH_ID を第 3 キーとしてソートされます。第 2 キーとして指定できる項目は、ストレージシステム内の LU 番号 (lu)、または CHA ポート番号

(cp) です。-srt パラメタを省略した場合、パス情報はパス管理 PATH_ID 順に表示されます。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

使用例

パス情報の概略を iLU の順番に表示する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -path -c -srt lu
Paths:000012 OnlinePaths:000012
PathStatus IO-Count IO-Errors
Online      1616      0

PathID DskName                iLU          CP Status   Type
000000 HITACHI .DF600F .0051      0005      0A Online   Own
000003 HITACHI .DF600F .0051      0005      1A Online   Non
000001 HITACHI .DF600F .0051      0014      0A Online   Non
000004 HITACHI .DF600F .0051      0014      1A Online   Own
000002 HITACHI .DF600F .0051      0015      0A Online   Non
000005 HITACHI .DF600F .0051      0015      1A Online   Own
000006 HITACHI .OPEN-3 .15001     0005      1H Online   Own
000009 HITACHI .OPEN-3 .15001     0005      2H Online   Own
000007 HITACHI .OPEN-3 .15001     0015      1H Online   Own
000010 HITACHI .OPEN-3 .15001     0015      2H Online   Own
000008 HITACHI .OPEN-3 .15001     0020      1H Online   Own
000011 HITACHI .OPEN-3 .15001     0020      2H Online   Own
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd
hh:mm:ss
#
```

パス情報の表示項目

パス情報の表示項目とその説明を「表 6-12 パス情報の表示項目」に示します。表の見出しについて、次に説明します。

- ・ 概略表示しない場合：-path または -path -item パラメタを指定した場合は示します。
- ・ 概略表示する場合：-path -c パラメタを指定した場合は示します。

表 6-12 パス情報の表示項目

表示項目		説明
概略表示しない場合	概略表示する場合	
Paths		表示対象のパスの総数が、10 進数で表示されます。
OnlinePaths		表示対象のパスのうち、稼働状態のパスの数が 10 進数で表示されます。「Paths」の数と「OnlinePaths」の数と同じであれば、すべてのパスが稼働状態です。「OnlinePaths」の数の方が少ない場合、閉塞状態のパスがあります。閉塞状態のパスを確認し、障害が発生していれば対処してください。
PathStatus		表示対象のパスの状態です。 <ul style="list-style-type: none"> ・ Online：すべてのパスを使用できる ・ Reduced：使用できないパスがある Reduced と表示されている場合、障害が発生しているパスがあるおそれがあります。確認して、障害が発生しているパスがあれば対処してください。
IO-Count		表示対象のすべてのパスの I/O 回数の合計数が、10 進数で表示されます。表示できる最大値は、 $2^{32}-1$ (4294967295) です。最大値を超えた場合、0 から再カウントします。

表示項目		説明
概略表示しない 場合	概略表示する場 合	
IO-Errors		表示対象のすべてのパスの I/O 障害回数の合計数が、10 進数で表示されます。表示できる最大値は、 $2^{32}-1$ (4294967295) です。最大値を超えた場合、0 から再カウントします。
PathID		パス管理 PATH_ID が、10 進数で表示されます。 ホストの再起動時に割り当てられます。また、ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmgr) の実行時にその LU の各パスにパス管理 PATH_ID が新しく割り当てられます。
PathName ^{※1}	—	パスを表す項目で、パス名と呼びます。システムの構成を変更する場合やハードウェアを交換する場合は、パス名を参照して影響を受けるパスを確認してください。次に示す 4 つの項目をピリオドで区切ったものが、パス名として表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ホストポート番号 (16 進数) ・ バス番号 (16 進数) ・ ターゲット ID (16 進数) ・ ホスト LU 番号 (16 進数) パス名を構成する項目と、各項目の Linux での表現については、「表 6-13」を参照してください。
DskName ^{※1}	DskName	ストレージシステム名です。この名前で、パスがアクセスするストレージシステムを特定できます。 次に示す 3 つの項目をピリオドで区切ったものが、ストレージシステム名として表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベンダ ID (表示例: HITACHI) : ストレージシステムのベンダ名 ・ プロダクト ID (表示例: OPEN-3) : ストレージシステムのプロダクト ID, エミュレーションタイプ, またはモデル ID 詳細については、「表 6-14」を参照してください。 ・ シリアル番号 (表示例: 15001) : ストレージシステムのシリアル番号 これらの情報をストレージシステムの管理プログラムで参照すると、物理的にストレージシステムを特定できます。
iLU ^{※1}	iLU	ストレージシステム内の LU 番号が表示されます。 この番号とストレージシステム名 (「DskName」に表示) を組み合わせると、パスがアクセスする LU を特定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ・ SANRISE2000 シリーズ, SANRISE9900V シリーズ, Hitachi NSC55, Hitachi Universal Storage Platform 100, Hitachi Universal Storage Platform 600, Hitachi Universal Storage Platform 1100, または HUS VM の場合 16 進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。 ・ H10000/H12000, XP10000/XP12000, P9500, SVS, または VP9500 の場合 16 進数で表示されます。iLU の先頭 3 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。 CU 番号の先頭 1 文字目は「0」の値が入ります。 ・ SANRISE9500V シリーズ, Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ, または HUS100 シリーズの場合 10 進数で表示されます。iLU 全体がストレージシステム内の内部 LU 番号になります。iLU をストレージシステムの管理プログラムで参照すると、物理的に LU を特定できます。 ・ Universal Storage Platform V/VM シリーズ, または Hitachi Virtual Storage Platform の場合

表示項目		説明
概略表示しない場合	概略表示する場合	
		16進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は論理 DKC (Disk Controller) 番号を示し、真ん中 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。
ChaPort ^{※1}	CP	CHA ポート番号です。この番号でストレージシステムに搭載されている CHA ポートを特定できます。この番号をストレージシステムの管理プログラムで参照すると、物理的に CHA ポートを特定できます。
Status		バスの状態です。 <ul style="list-style-type: none"> • Online : 稼働状態 • Offline(C) : コマンドでのオフライン操作による閉塞状態 • Offline(E) : 障害による閉塞状態 • Online(E) : 障害が発生している状態 (1 つの LU にアクセスするバスのうち、稼働状態 (Online) のバスがない場合、バスの 1 つが Online(E) になります) Offline(E)または Online(E)のバスについては対処が必要です。「5.3」を参照して対処してください。
Type ^{※1}	Type	バスの属性です。 <ul style="list-style-type: none"> • Own : オーナバス • Non : ノンオーナバス SANRISE2000 シリーズ, SANRISE9900V シリーズ, Hitachi USP シリーズ, Universal Storage Platform V/VM シリーズ, Virtual Storage Platform シリーズ, Hitachi AMS2000 シリーズ ^{※2} , Hitachi SMS シリーズ ^{※2} , HUS100 シリーズ ^{※2} , または HUS VM に接続している場合、すべてのバスがオーナバスです。
IO-Count ^{※1}	—	バスの I/O 回数の合計数が、10 進数で表示されます。表示できる最大値は、 $2^{32}-1$ (4294967295) です。最大値を超えた場合、0 から再カウントします。 IO-Count を 0 にしたい場合は、HDLM コマンドの clear オペレーションを実行してください。clear オペレーションを実行すると、I/O 障害回数 (IO-Errors) も 0 にクリアされます。clear オペレーションの詳細については、「6.2」を参照してください。
IO-Errors ^{※1}	—	バスの I/O 障害回数の合計数が、10 進数で表示されます。表示できる最大値は、 $2^{32}-1$ (4294967295) です。最大値を超えた場合、0 から再カウントします。 IO-Errors を 0 にしたい場合は、HDLM コマンドの clear オペレーションを実行してください。clear オペレーションを実行すると、I/O 回数 (IO-Count) も 0 にクリアされます。clear オペレーションの詳細については、「6.2」を参照してください。
DNum ^{※1}	—	Dev 番号です。 パーティション番号に該当します。 「0」(固定) が表示されます。
HDevName ^{※1}	—	ホストデバイス名です。HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddl[m[aa-pap]]) からパーティション番号を除いたものが表示されます。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。
IEP ^{※1}	—	間欠障害に関する情報が表示されます。この項目は、-path と同時に -iem を指定した場合だけ表示されます。1 本のバスにつき、次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • - 間欠障害の監視が無効、または間欠障害の監視時間外 (バスの状態は Online(E)または Offline(E)) • 0 以上の数値

表示項目		説明
概略表示しない場合	概略表示する場合	
		<p>間欠障害の監視中に発生した障害の回数 (パスの状態は Online(E), Offline(E)または Online)</p> <ul style="list-style-type: none"> * <p>間欠障害が発生 (自動フェイルバックの対象外) (パスの状態は Online, Online(E), Offline(E)または Offline(C))</p>
HBAPortWWN ※1	—	<p>ストレージシステムと接続している HBA のポート WWN 情報が 16 桁の 16 進数で表示されます。この項目は、-path と同時に-hbaportwwn を指定した場合だけ表示されます。</p> <p>なお、iSCSI インタフェースの場合は「-」(ハイフン) が表示されます。</p>
Physical-DskName	—	<p>仮想 ID を使用して移行したパスの場合、移行先のパスが接続しているストレージシステム名が表示されます。</p> <p>次に示す 3 つの項目をピリオドで区切ったものが、ストレージシステム名として表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ベンダ ID : ストレージシステムのベンダ名 プロダクト ID : ストレージシステムのプロダクト ID, エミュレーションタイプ, またはモデル ID <p>詳細については、「表 6-14」を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> シリアル番号 : ストレージシステムのシリアル番号 <p>仮想 ID を使用していない場合「-」(ハイフン) が表示されます。</p>
Physical-iLU	—	<p>仮想 ID を使用して移行したパスの場合、移行先のパスが接続しているストレージシステム内での LU 番号が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> HUS VM の場合 <p>16 進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。</p> Hitachi Virtual Storage Platform の場合 <p>16 進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は論理 DKC (Disk Controller) 番号を示し、真ん中 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。</p> <p>仮想 ID を使用していない場合「-」(ハイフン) が表示されます。</p>
Physical-ChaPort	—	<p>仮想 ID を使用して移行したパスの場合、移行先のパスが接続している CHA ポート番号が表示されます。</p> <p>仮想 ID を使用していない場合「-」(ハイフン) が表示されます。</p>

(凡例)

— : 表示されない項目

注※1

-path -item パラメタの場合、パラメタ値に指定したときだけ表示されます。

注※2

ダイナミック I/O パスコントロール機能を無効にしているときに対象になります。

表 6-13 パス名を構成する項目

項目	Linux での表現
ホストポート番号 (表示例 : 0000)	Host ID (ホストポート番号) です。
パス番号 (表示例 : 0000)	Channel 番号 (パス番号) です。
ターゲット ID (表示例 : 0000000000000003A)	Target ID (ターゲット ID) です。
ホスト LU 番号 (表示例 : 0005)	Lun (ホスト LU 番号) です。

各項目の情報は、HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfgmgr) を使用して取得してください。
dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3 dlmcfgmgr HDLM 構成定義ユーティリティ」を参照してください。

表 6-14 プロダクト ID の表示内容

ストレージシステム	表示内容		
	-stname パラメタ 指定なし	-stname パラメタ指定時 (下記のモデル ID を表示)	
		概略表示しない場合	概略表示する場合
Hitachi AMS2000 シリーズ	プロダクト ID*	AMS	AMS
HUS100 シリーズ	プロダクト ID*	HUS100	HUS100
SANRISE9500V シリーズ	プロダクト ID*	SANRISE 9500V	9500V
Hitachi AMS シリーズ	プロダクト ID*	SANRISE_AMS	AMS
Hitachi TMS シリーズ	プロダクト ID*	SANRISE_AMS	AMS
Hitachi WMS シリーズ	プロダクト ID*	SANRISE_WMS	WMS
Hitachi SMS シリーズ	プロダクト ID*	SMS	SMS
H20000	エミュレーションタイプ ※	H20000	H20000
H24000	エミュレーションタイプ ※	H24000	H24000
SANRISE2000 シリーズ	エミュレーションタイプ ※	SANRISE2000	2000
SANRISE9900V シリーズ	エミュレーションタイプ ※	SANRISE 9900V	9900V
SANRISE H128	エミュレーションタイプ ※	SANRISE H128	H128
SANRISE H1024	エミュレーションタイプ ※	SANRISE H1024	H1024
H10000	エミュレーションタイプ ※	SANRISE H10000	H10000
H12000	エミュレーションタイプ ※	SANRISE H12000	H12000
<ul style="list-style-type: none"> • Hitachi NSC55 • Hitachi Universal Storage Platform 100 • Hitachi Universal Storage Platform 600 • Hitachi Universal Storage Platform 1100 	エミュレーションタイプ ※	SANRISE_USP	USP
SVS	エミュレーションタイプ ※	SVS	SVS
<ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Universal Storage Platform V • Hitachi Universal Storage Platform VM 	エミュレーションタイプ ※	USP_V	USP_V
Hitachi Virtual Storage Platform	エミュレーションタイプ ※	VSP	VSP
HUS VM	エミュレーションタイプ ※	HUS_VM	HUS_VM

ストレージシステム	表示内容		
	-stname パラメータ 指定なし	-stname パラメータ指定時 (下記のモデル ID を表示)	
		概略表示しない場合	概略表示する場合
VP9500	エミュレーションタイプ ※	VP9500	VP9500
P9500	エミュレーションタイプ ※	P9500	P9500
XP128	エミュレーションタイプ ※	XP128	XP128
XP1024	エミュレーションタイプ ※	XP1024	XP1024
XP10000	エミュレーションタイプ ※	XP10000	XP10000
XP12000	エミュレーションタイプ ※	XP12000	XP12000
XP20000	エミュレーションタイプ ※	XP20000	XP20000
XP24000	エミュレーションタイプ ※	XP24000	XP24000

注※

-path -c パラメータで概略表示した場合、文字数が 11 文字以上のときは、8 文字目以降が短縮形 (...) で表示されます。

(3) LU 情報を表示する場合

LU 情報を表示する場合、-lu パラメータと同時に-item パラメータや-c パラメータ、-c -item パラメータを指定すると、項目を追加して表示したり、LU 情報の概略を表示したりできます。ここでは、それぞれのパラメータの説明をしたあとに、LU 情報の表示項目を説明します。

LU 情報表示

-lu

-lu パラメータと同時に-c パラメータまたは-item パラメータのどちらも指定しない場合、HDLM が認識している LU の情報が表示されます。iLU をキーとして、その iLU の構成情報が LU ごとに表示されます。後続パラメータ (-hdev または-pathid) で、表示する LU の情報を絞り込むことができます。-hdev パラメータまたは-pathid パラメータを指定しない場合は、HDLM が認識しているすべての LU の情報が表示されます。

各表示項目の内容については、「表 6-17 LU 情報の表示項目」を参照してください。

後続パラメータの形式を次に示します。

-hdev ホストデバイス名

指定したホストデバイス名に対応する LU の情報だけが表示されます。

ホストデバイス名には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddl[m[aa-pap]]) からパーティション番号を除いたものを指定します。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。

英字の大文字、小文字は区別されます。

-pathid パス管理 PATH_ID

指定したパス管理 PATH_ID を持つパスがアクセスする LU の情報だけが表示されます。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu
Product      : SANRISE 9500V
SerialNumber : 0115
LUs          : 5

iLU HDevName Device PathID Status
0000 sddlmac /dev/sds 000002 Online
      /dev/sdd 000007 Online
      /dev/sdi 000012 Online
      /dev/sdn 000017 Online
0001 sddlmad /dev/sdt 000003 Online
      /dev/sde 000008 Online
      /dev/sdj 000013 Online
      /dev/sdo 000018 Online
0002 sddlmae /dev/sdu 000004 Online
      /dev/sdf 000009 Online
      /dev/sdk 000014 Online
      /dev/sdp 000019 Online
0003 sddlmaa /dev/sdq 000000 Online
      /dev/sdv 000005 Online
      /dev/sdg 000010 Online
      /dev/sdl 000015 Online
0004 sddlmaB /dev/sdr 000001 Online
      /dev/sdw 000006 Online
      /dev/sdh 000011 Online
      /dev/sdm 000016 Online
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了
時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

LU 情報表示 (表示項目を追加する場合)

-lu -item

-item で指定した項目が -lu の表示項目に追加して表示されます。

-item パラメタでパラメタ値を何も指定しない場合、またはパラメタ値に all を指定した場合、DPC、Physical-Product、Physical-SerialNumber、Physical-iLU、および Physical-ChaPort を除く追加できる項目がすべて表示されます。

-item パラメタで追加できる表示項目と、-item パラメタの後続に指定するパラメタ値との対応を次の表に示します。

表 6-15 -lu -item パラメタで追加できる表示項目と指定する後続パラメタ

追加できる表示項目	後続パラメタ
SLPR	slpr
PathName	pn
ChaPort	cp
CLPR	clpr
Type	type
IO-Count	ic
IO-Errors	ie
DNum	dnu
IEP	iep

追加できる表示項目	後続パラメタ
HCTL	hctl
DPC	dpc
Physical-Product	vid
Physical-SerialNumber	vid
Physical-iLU	vid
Physical-ChaPort	vid
すべての項目	all

後続パラメタ (-hdev または -pathid) で、表示する LU の情報を絞り込むことができます。-hdev パラメタ または -pathid パラメタ を指定しない場合は、HDLM が認識しているすべての LU の情報が表示されます。

各表示項目の内容については、「表 6-17 LU 情報の表示項目」を参照してください。

後続パラメタの形式を次に示します。

-hdev ホストデバイス名

指定したホストデバイス名に対応する LU の情報だけが表示されます。

ホストデバイス名には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddlml[aa-pap]) からパーティション番号を除いたものを指定します。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。

英字の大文字、小文字は区別されます。

-pathid パス管理 PATH_ID

指定したパス管理 PATH_ID を持つパスがアクセスする LU の情報だけが表示されます。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

使用例 1

LU 情報の表示項目に、SLPR, PathName, ChaPort, CLPR, Type, IO-Count, IO-Errors, DNum, IEP, および HCTL を追加して表示する場合

```

# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu -item
Product      : SANRISE_USP
SerialNumber : 0376
LUs          : 4

iLU  SLPR HDevName Device PathID PathName          ChaPort CLPR Status   Type IO-Count  IO-Errors
0023  12  sddlmad /dev/sdd 000000 0002 0000 0000000000000000.0000 0B      1 Offline(E) Own      0      0
  0+  2.0.0.0
      /dev/sdh 000004 0002 0000 00000000000000001.0000 1B      1 Offline(E) Own      0      0
  0 3  2.0.1.0
      /dev/sdl 000008 0003 0000 0000000000000000.0000 1B      1 Online   Own      60     0
  0 2  3.0.0.0
      /dev/sdp 000009 0003 0000 00000000000000001.0000 0B      1 Online   Own      68     0
  0 3  3.0.1.0
0024  12  sddlmaa /dev/sds 000001 0002 0000 0000000000000000.0001 0B      1 Offline(E) Own      0      0
  0+  2.0.0.1
      /dev/sdl 000005 0002 0000 00000000000000001.0001 1B      1 Offline(E) Own      0      0
  0 3  2.0.1.1
      /dev/sdh 000010 0003 0000 0000000000000000.0001 1B      1 Online   Own     155817  0
  0 2  3.0.0.1
      /dev/sdj 000011 0003 0000 00000000000000001.0001 0B      1 Online   Own     155815  0
  0 3  3.0.1.1
0025  12  sddlmas /dev/sdf 000002 0002 0000 0000000000000000.0002 0B      1 Offline(E) Own      0      0
  0+  2.0.0.2
      /dev/sdj 000006 0002 0000 00000000000000001.0002 1B      1 Offline(E) Own      0      0
  0-  2.0.1.2
      /dev/sdh 000012 0003 0000 0000000000000000.0002 1B      1 Online   Own      0      0
  0-  3.0.0.2
      /dev/sdr 000013 0003 0000 00000000000000001.0002 0B      1 Online   Own     269035  0
  0-  3.0.1.2
0026  12  sddlmac /dev/sdg 000003 0002 0000 0000000000000000.0003 0B      1 Offline(E) Own      0      0
  0+  2.0.0.3
      /dev/sdk 000007 0002 0000 00000000000000001.0003 1B      1 Offline(E) Own      0      0
  0 3  2.0.1.3
      /dev/sds 000014 0003 0000 0000000000000000.0003 1B      1 Online   Own     10668  0
  0 2  3.0.0.3
      /dev/sds 000015 0003 0000 00000000000000001.0003 0B      1 Online   Own     11124  0
  0 3  3.0.1.3
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

使用例 2

Hitachi AMS2000 シリーズ, Hitachi SMS シリーズ, または HUS100 シリーズを使用している場合で, LU 情報の表示項目に DPC を追加して表示するとき

```

# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu -item dpc
Product      : HUS100
SerialNumber : 9203008
LUs          : 3
Dynamic I/O Path Control : on*

iLU    HDevName DPC PathID Status
000006 sddlmad  on  000000 Online
      000003 Online
000007 sddlmaa  off  000001 Online
      000004 Online
000008 sddlmas  on  000002 Online
      000005 Online
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#

```

LU 情報の概略表示

`-lu -c`

`-lu` パラメタと同時に `-c` パラメタを指定した場合, LU の構成情報の概略が 1 行で表示されま
す。各 LU に対して, 認識されているパスの総数および稼働状態のパスの本数も表示されま
す。`-c` パラメタを指定する場合, `-hdev` パラメタまたは `-pathid` パラメタを同時に指定でき
ません。

各表示項目の内容については, 「表 6-17 LU 情報の表示項目」を参照してください。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu -c
Product      S/N  LUs  iLU  HDevName Paths  OnlinePaths
SANRISE 9500V 0115   5 0000 sddlmac    4          4
                0001 sddlmad    4          4
                0002 sddlmae    4          4
                0003 sddlmaa    4          4
                0004 sddlmae    4          4
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了
時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

LU 情報の概略表示（表示項目を追加する場合）

-lu -c -item

-item で指定した項目が -lu -c の表示項目に追加して表示されます。

-item パラメタでパラメタ値を何も指定しない場合、追加できる項目がすべて表示されます。各表示項目の内容については、「表 6-17 LU 情報の表示項目」を参照してください。

-item パラメタで追加できる表示項目と、-item パラメタの後続に指定するパラメタ値との対応を、次の表に示します。

表 6-16 -lu -c -item パラメタで追加できる表示項目と指定する後続パラメタ

追加できる表示項目	後続パラメタ
SLPR	slpr

後続パラメタの形式を次に示します。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

使用例

LU 情報の概略表示項目に、SLPR を追加して表示する場合

```
#!/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -lu -c -item
Product      S/N  LUs  iLU  SLPR HDevName Paths  OnlinePaths
SANRISE 9500V 0375   4 0010 - sddlmai    4          1
                0011 - sddlmej    4          1
                0012 - sddlmaa    4          1
                0013 - sddlmae    4          1
KAPL01001-I HDLMコマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 = yyyy/mm/dd
hh:mm:ss
#
```

LU 情報の表示項目

LU 情報を表示する場合に、表示される項目とその説明を「表 6-17 LU 情報の表示項目」に示します。見出しについて、次に説明します。

- 概略表示しない場合：-lu または -lu -item パラメタを指定した場合を示します。
- 概略表示する場合：-lu -c または -lu -c -item パラメタを指定した場合を示します。

表 6-17 LU 情報の表示項目

表示項目		説明
概略表示しない場合	概略表示する場合	
Product		ストレージシステムのモデル ID です。
SerialNumber	S/N	ストレージシステムのシリアル番号です。
LUs		ストレージシステム内の LU のうち、HDLM 管理下の LU の総数です。
Dynamic I/O Path Control	—	<p>ストレージシステム単位にダイナミック I/O パスコントロール機能の設定情報が表示されます。</p> <p>on : ダイナミック I/O パスコントロール機能の設定が有効に設定されています。</p> <p>off : ダイナミック I/O パスコントロール機能の設定が無効に設定されています。</p> <p>- : ダイナミック I/O パスコントロール機能をサポートしていません。</p> <p>ストレージシステム単位の設定と異なる設定の LU が含まれる場合、表示された「on」または「off」のあとに「*」が付加されます。</p>
iLU		<p>ストレージシステム内の LU 番号が表示されます。</p> <p>この番号とストレージシステム名（「DskName」に表示）を組み合わせると、パスがアクセスする LU を特定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SANRISE2000 シリーズ, SANRISE9900V シリーズ, Hitachi NSC55, Hitachi Universal Storage Platform 100, Hitachi Universal Storage Platform 600, Hitachi Universal Storage Platform 1100, または HUS VM の場合 16 進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。 • H10000/H12000, XP10000/XP12000, P9500, SVS, または VP9500 の場合 16 進数で表示されます。iLU の先頭 3 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。CU 番号の先頭 1 文字目は「0」の値が入ります。 • SANRISE9500V シリーズ, Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ, または HUS100 シリーズの場合 10 進数で表示されます。iLU 全体がストレージシステム内の内部 LU 番号になります。iLU をストレージシステムの管理プログラムで参照すると、物理的に LU を特定できます。 • Universal Storage Platform V/VM シリーズ, または Hitachi Virtual Storage Platform の場合 16 進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は論理 DKC (Disk Controller) 番号を示し、真ん中 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。
SLPR ^{※1}	SLPR ^{※2}	LU が属する SLPR の番号が 0 から 31 までの 10 進数で表示されます。ストレージ論理分割機能がサポートされていないストレージシステム内の LU が表示対象の場合は「-」（ハイフン）が表示されます。
HDevName ^{※1}	HDevName	ホストデバイス名です。HDLM デバイスの論理デバイスファイル名（/dev/sddlmlaa-pap]）からパーティション番号を除いたものが表示されます。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。
DPC	—	<p>LU 単位にダイナミック I/O パスコントロール機能の設定情報が表示されます。</p> <p>on : ダイナミック I/O パスコントロール機能の設定が有効に設定されています。</p> <p>off : ダイナミック I/O パスコントロール機能の設定が無効に設定されています。</p> <p>- : ダイナミック I/O パスコントロール機能をサポートしていません。</p>

表示項目		説明
概略表示しない場合	概略表示する場合	
Device	—	<p>HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスが表示されます。ホスト起動時に断線状態だった場合、または LU の割り当てを解除した場合、「-」（ハイフン）が表示されます。</p> <p>なお、SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合は、システムの運用中に次に示す事象が起きたときにも、「-」（ハイフン）が表示されることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> パスが断線した。 LU を削除した。 ファイバケーブルの接続を変更した。 ファイバチャネルスイッチのゾーン設定を変更した。
PathID	—	<p>パス管理 PATH_ID が、10 進数で表示されます。ホストの再起動時に割り当てられます。また、ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行時にその LU の各パスにパス管理 PATH_ID が新しく割り当てられます。</p>
PathName ^{※1}	—	<p>パスを表す項目で、パス名と呼びます。システムの構成を変更する場合やハードウェアを交換する場合は、パス名を参照して影響を受けるパスを確認してください。次に示す 4 つの項目をピリオドで区切ったものが、パス名として表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ホストポート番号 (16 進数) パス番号 (16 進数) ターゲット ID (16 進数) ホスト LU 番号 (16 進数) <p>パス名を構成する項目と、各項目の Linux での表現については、「表 6-13」を参照してください。</p>
ChaPort ^{※1}	—	<p>CHA ポート番号です。この番号でストレージシステムに搭載されている CHA ポートを特定できます。この番号をストレージシステムの管理プログラムで参照すると、物理的に CHA ポートを特定できます。</p>
CLPR ^{※1}	—	<p>CHA ポートが属する CLPR の番号が 0 から 31 までの 10 進数で表示されます。ただし、次に示すものが表示対象の場合は「-」（ハイフン）が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> キャッシュ論理分割機能がサポートされていないストレージシステムに搭載されている CHA ポート Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズの Copy-on-write Snapshot の Snapshot イメージに接続するパス
Status	—	<p>パスの状態です。</p> <ul style="list-style-type: none"> Online：稼働状態 Offline(C)：コマンドでのオフライン操作による閉塞状態 Offline(E)：障害による閉塞状態 Online(E)：障害が発生している状態（1 つの LU にアクセスするパスのうち、稼働状態 (Online) のパスがない場合、パスの 1 つが Online(E)になります） <p>Offline(E)または Online(E)のパスについては対処が必要です。「5.3」を参照して対処してください。</p>
Type ^{※1}	—	<p>パスの属性です。</p> <ul style="list-style-type: none"> Own：オーナーパス Non：ノンオーナーパス <p>SANRISE2000 シリーズ, SANRISE9900V シリーズ, Hitachi USP シリーズ, Universal Storage Platform V/VM シリーズ, Virtual Storage Platform シリーズ, Hitachi AMS2000 シリーズ^{※3}, Hitachi SMS シリーズ^{※3}, HUS100 シリーズ^{※3}, または HUS VM に接続している場合、すべてのパスがオーナーパスです。</p>

表示項目		説明
概略表示しない場合	概略表示する場合	
IO-Count※ ¹	—	パスの I/O 回数の合計数が、10 進数で表示されます。表示できる最大値は、 $2^{32}-1$ (4294967295) です。最大値を超えた場合、0 から再カウントします。IO-Count を 0 にしたい場合は、HDLM コマンドの clear オペレーションを実行してください。clear オペレーションを実行すると、I/O 障害回数 (IO-Errors) も 0 にクリアされます。clear オペレーションの詳細については、「6.2」を参照してください。
IO-Errors※ ¹	—	パスの I/O 障害回数の合計数が、10 進数で表示されます。表示できる最大値は、 $2^{32}-1$ (4294967295) です。最大値を超えた場合、0 から再カウントします。IO-Errors を 0 にしたい場合は、HDLM コマンドの clear オペレーションを実行してください。clear オペレーションを実行すると、I/O 回数 (IO-Count) も 0 にクリアされます。clear オペレーションの詳細については、「6.2」を参照してください。
DNum※ ¹	—	Dev 番号です。 パーティション番号に該当します。 「0」(固定) が表示されます。
IEP※ ¹	—	表示対象のパスが、間欠障害と見なされ、自動フェイルバックの対象外になっているかどうか、表示されます。1 本のパスにつき、次のどれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • - : 間欠障害の監視が無効、または間欠障害の監視時間外 • 0 以上の数値 : 間欠障害の監視時間内に発生した障害の回数 • * : 間欠障害発生 (自動フェイルバックの対象外)
HCTL※ ¹	—	SCSI デバイスの構成情報です。次の内容が「abcd」の形式で表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • a : ホストポート番号 (10 進数) • b : バス番号 (10 進数) • c : ターゲット ID (10 進数) • d : ホスト LU 番号 (10 進数)
Physical-Product	—	仮想 ID を使用して移行したパスの場合、移行先のパスが接続しているストレージシステムのモデル ID が表示されます。 仮想 ID を使用していない場合「-」(ハイフン) が表示されます。
Physical-SerialNumber	—	仮想 ID を使用して移行したパスの場合、移行先のパスが接続しているストレージシステムのシリアル番号が表示されます。 仮想 ID を使用していない場合「-」(ハイフン) が表示されます。
Physical-iLU	—	仮想 ID を使用して移行したパスの場合、移行先のパスが接続しているストレージシステム内での LU 番号が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • HUS VM の場合 16 進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。 • Hitachi Virtual Storage Platform の場合 16 進数で表示されます。iLU の先頭 2 文字は論理 DKC (Disk Controller) 番号を示し、真ん中 2 文字は CU (Control Unit) 番号を示し、後ろ 2 文字は CU 内の内部 LU 番号を示します。 仮想 ID を使用していない場合「-」(ハイフン) が表示されます。
Physical-ChaPort	—	仮想 ID を使用して移行したパスの場合、移行先のパスが接続している CHA ポート番号が表示されます。 仮想 ID を使用していない場合「-」(ハイフン) が表示されます。
—	Paths	表示対象の LU に対して、認識されているパスの総数が、10 進数で表示されます。
—	OnlinePaths	表示対象のパスのうち、稼働状態のパスの数が 10 進数で表示されます。「Paths」の数と「OnlinePaths」の数が同じであれば、すべてのパスが

表示項目		説明
概略表示しない場合	概略表示する場合	
		稼働状態です。「OnlinePaths」の数の方が少ない場合、閉塞状態のパスがあります。閉塞状態のパスを確認し、障害が発生していれば対処してください。

(凡例)

— : 表示されない項目

注※1

-lu -item パラメタを使用してパラメタ値に表示項目もしくは all を指定した場合、またはパラメタ値に何も指定しなかった場合だけ表示されます。

注※2

-lu -c -item パラメタを使用してパラメタ値に表示項目を指定した場合、またはパラメタ値に何も指定しなかった場合だけ表示されます。

注※3

ダイナミック I/O パスコントロール機能を無効にしているときに対象になります。

(4) HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応を表示する場合

-drv

PathID, HDLM デバイスおよび HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスの情報, ストレージシステム内の LDEV 情報 (ストレージシステムのモデル ID, シリアル番号, および LU 番号をピリオドで区切った文字列) が表示されます。

各表示項目の内容については、「表 6-18 HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報」を参照してください。

-t

各情報の項目名が非表示になります。

表 6-18 HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報

項目	説明
PathID	パス管理 PATH_ID が, 10 進数で表示されます。 ホストの再起動時に割り当てられます。また, ホストを再起動しないで新規 LU を追加する場合には, HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行時にその LU の各パスにパス管理 PATH_ID が新しく割り当てられます。
HDevName	ホストデバイス名です。 HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddlma-pap) からパーティション番号を除いたものが表示されます。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6」を参照してください。
Device	HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスが表示されます。ホスト起動時に断線状態だった場合, または LU の割り当てを解除した場合, 「-」(ハイフン) が表示されます。 なお, SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合は, システムの運用中に次に示す事象が起きたときにも, 「-」(ハイフン) が表示されることがあります。 <ul style="list-style-type: none"> パスが断線した。 LU を削除した。 ファイバケーブルの接続を変更した。 ファイバチャネルスイッチのゾーン設定を変更した。
LDEV	ストレージシステムのモデル ID, シリアル番号, および iLU 番号が, ピリオドで区切った文字列で表示されます。LDEV の情報によって, LU を物理的に特定できます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -drv
PathID HDevName      Device              LDEV
000000 sddlmaa        /dev/sdag          SANRISE9900V.15001.05B7
000001 sddlmaa        /dev/sdq           SANRISE9900V.15001.05B7
000002 sddlmaab       /dev/sdr           SANRISE9900V.15001.05B0
000003 sddlmac        /dev/sds           SANRISE9900V.15001.05B1
000004 sddlmad        -                  SANRISE9900V.15001.05B2
000005 sddlmae        /dev/sdu           SANRISE9900V.15001.05B3
000006 sddlmaf        /dev/sdv           SANRISE9900V.15001.05B4
000007 sddlmag        /dev/sdw           SANRISE9900V.15001.05B5
000008 sddlmah        /dev/sdx           SANRISE9900V.15001.05B6
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

(5) view オペレーションの形式を表示する場合

-help

view オペレーションの形式が表示されます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr view -help
view:
  Format
    dlnkmgr view -sys [ -sfunc | -msrv | -adrv | -pdrv | -lic | -audlog
                      l -lbpathusetimes | -expathusetimes ] [-t]
    dlnkmgr view -path [ -hdev HostDeviceName ] [-stname] [-iem]
                      [-srt {pn | lu | cp}] [-
hbaportwwn] [-t]
    dlnkmgr view -path
                      -item [pn] [dn] [lu] [cp] [type] [ic] [ie] [dnu]
                      [hd] [iep] [hbaportwwn]
[vid]
                      [-hdev HostDeviceName] [-stname] [-srt {pn | lu | cp}]
[-t]
    dlnkmgr view -path -c [-stname] [-srt {lu | cp}] [-t]
    dlnkmgr view -lu [ -hdev HostDeviceName | -pathid AutoPATH_ID ] [-t]
    dlnkmgr view -lu
                      -item [ [slpr] [pn] [cp] [clpr] [type]
                      [ic] [ie] [dnu] [iep] [hctl]
[dpc] [vid] | all ]
                      [ -hdev HostDeviceName | -pathid
AutoPATH_ID ] [-t]
    dlnkmgr view -lu -c [-t]
    dlnkmgr view -lu -c -item [slpr] [-t]
    dlnkmgr view -drv [-t]
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = view, 終了時刻 =
yyyy/mm/dd hh:mm:ss
#
```

6.8 add パスを動的に追加する

ホストに接続されておりかつホストが認識していないパスを一括で追加します。このコマンドは、既存のパスへの影響なしに動的に実行できます。

6.8.1 形式

(1) パスを動的に追加する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr add -path [-s]
```

(2) add オペレーションの形式を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr add -help
```

6.8.2 パラメタ

(1) パスを動的に追加する場合

-path

HDLM が管理しているパスを操作することを指定します。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr add -path
KAPL01161-I パス構成変更を実行します。よろしいですか? [y/n] :y
KAPL01162-I パスを追加しました。パス ID = 00010, ストレージ =
HITACHI.HUS100.9100163, iLU = 0030
:
KAPL01159-I 2 パスを追加しました。終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

-s

コマンド実行の確認メッセージを表示しないで実行します。シェルスクリプトやバッチファイルでコマンドを実行する場合など、確認メッセージへの入力を省略したいときに指定します。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr add -path -s
KAPL01162-I パスを追加しました。パス ID = 00010, ストレージ =
HITACHI.HUS100.9100163, iLU = 0030
:
KAPL01159-I 2 パスを追加しました。終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

注意事項

コマンド実行前に、HDLM の管理対象にするパスが OS に認識されている必要があります。パスを OS に認識させるには「表 4-3 SCSI デバイスの追加と削除」に示すデバイスの追加用のコマンドを実行してください。

(2) add オペレーションの形式を表示する場合

-help

add オペレーションの形式が表示されます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr add -help
add:
  Format
  dlnkmgr add -path [-s]
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = help, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

6.9 delete パスを動的に削除する

OS から削除されているパスを一括して HDLM 管理対象から削除します。このコマンドは、既存のパスへの影響なしに動的に実行できます。

6.9.1 形式

(1) パスを動的に削除する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr delete -path [-s]
```

(2) delete オペレーションの形式を表示する場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr delete -help
```

6.9.2 パラメタ

(1) パスを動的に削除する場合

-path

HDLM が管理しているパスを操作することを指定します。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr delete -path
KAPL01161-I パス構成変更を実行します。よろしいですか? [y/n] :y
KAPL01165-I パスを削除しました。パス ID = 00010, ストレージ =
HITACHI.HUS100.9100163, iLU = 0030
      :
KAPL01164-I 2 パスを削除しました。終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

-s

コマンド実行の確認メッセージを表示しないで実行します。シェルスクリプトやバッチファイルでコマンドを実行する場合など、確認メッセージへの入力を省略したいときに指定します。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr delete -path -s
KAPL01165-I パスを削除しました。パス ID = 00010, ストレージ =
HITACHI.HUS100.9100163, iLU = 0030
      :
KAPL01164-I 2 パスを削除しました。終了時刻 = yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

注意事項

コマンド実行前に、HDLM の管理対象から除外するパスが、OS から削除されている必要があります。パスを OS から削除するには「表 4-3 SCSI デバイスの追加と削除」の「デバイスの削除(FC-SAN 環境の場合)」と「デバイスの削除(IP-SAN 環境の場合)」を参照してください。

(2) delete オペレーションの形式を表示する場合

-help

delete オペレーションの形式が表示されます。

使用例

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlnkmgr delete -help
delete:
  Format
  dlnkmgr delete -path [-s]
KAPL01001-I HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = help, 終了時刻
= yyyy/mm/dd hh:mm:ss
```

ユティリティリファレンス

この章では、HDLM で使用するユティリティについて説明します。

- 7.1 ユティリティ概要
- 7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユティリティ
- 7.3 dlmcfmgr HDLM 構成定義ユティリティ
- 7.4 dlmchname HDLM デバイス名変更ユティリティ
- 7.5 dlmmkinitrd ブートディスクサポートユティリティ
- 7.6 dlmpr HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ
- 7.7 dlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユティリティ
- 7.8 dlmstart HDLM 起動ユティリティ
- 7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユティリティ
- 7.10 installgetras HDLM インストール障害情報収集ユティリティ
- 7.11 installhdlm HDLM インストールユティリティ
- 7.12 installux.sh HDLM 共通インストーラユティリティ

7.1 ユティリティ概要

HDLM は、次に示すユティリティを提供します。

- **HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras)**
障害発生時に、HDLM の購入元会社、または保守会社に連絡する必要がある情報を持つファイルを収集します。DLMgetras ユティリティについては、「[7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユティリティ](#)」を参照してください。
- **HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr)**
HDLM がパスを管理するのに必要な情報の追加、更新、および削除をします。dlmcfgmgr ユティリティについては、「[7.3 dlmcfgmgr HDLM 構成定義ユティリティ](#)」を参照してください。
- **HDLM デバイス名変更ユティリティ (dlmchname)**
HDLM デバイス名を変更します。変更するには、HDLM デバイスへのアクセスを停止してください。ブートディスクに使用している HDLM デバイスのデバイス名を変更する場合は、ユティリティ実行後にホストを再起動してください。dlmchname ユティリティについては、「[7.4 dlmchname HDLM デバイス名変更ユティリティ](#)」を参照してください。
- **ブートディスクサポートユティリティ (dlmmkinitrd)**
HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための、初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。dlmmkinitrd ユティリティについては、「[7.5 dlmmkinitrd ブートディスクサポートユティリティ](#)」を参照してください。
- **HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ (dlmpr)**
何らかの要因で LU のパーシステントリザーブが解除されない場合、Reservation Key をクリアしてパーシステントリザーブを解除します。dlmpr ユティリティについては、「[7.6 dlmpr HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ](#)」を参照してください。
- **HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (dlmsetopt)**
HDLM のフィルタドライバに対する設定変更をします。設定変更後、設定値を有効にするにはホストマシンを再起動してください。dlmsetopt ユティリティについては、「[7.7 dlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユティリティ](#)」を参照してください。
- **HDLM 起動ユティリティ (dlmstart)**
HDLM のインストール後に実行する必要がある次の操作を順に実行します。
 - HDLM のアラートドライバおよびフィルタドライバのロード
 - HDLM デバイスの構成
 - HDLM マネージャの起動dlmstart ユティリティについては、「[7.8 dlmstart HDLM 起動ユティリティ](#)」を参照してください。
- **システムスクリプト更新ユティリティ (dlmupdatesysinit)**
initscripts パッケージの更新によって HDLM の情報が消失した場合、HDLM の情報を再登録します。「[7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユティリティ](#)」を参照してください。
- **HDLM インストール障害情報収集ユティリティ (installgetras)**
インストール中に障害が発生したとき、HDLM の購入元会社、または保守会社に連絡する必要がある情報を持つファイルを収集します。installgetras ユティリティについては、「[7.10 installgetras HDLM インストール障害情報収集ユティリティ](#)」を参照してください。
- **HDLM インストールユティリティ (installhdlm)**
HDLM の新規インストール、アップグレードインストールまたは再インストールを実行します。installhdlm ユティリティについては、「[7.11 installhdlm HDLM インストールユティリティ](#)」を参照してください。インストールの手順については、「[3.6 HDLM のインストール](#)」を参照してください。

- HDLM 共通インストーラユーティリティ (installux.sh)
インストール先の OS を判別して DVD-ROM から OS に対応した HDLM をインストールします。また、パラメタを指定することでサイレントインストールも実行できます。
installux.sh ユティリティについては、「7.12 installux.sh HDLM 共通インストーラユーティリティ」を参照してください。このユーティリティを使ったインストールの手順については、「3.6 HDLM のインストール」を参照してください。

注意事項

ユーティリティは、root 権限を持つユーザで実行してください。

7.2 DLMgetras HDLM 障害情報収集ユーティリティ

HDLM で発生した障害の解析に必要な障害ログ、プロセス別トレース情報ファイル、トレースファイル、定義ファイル、コアファイル、ライブラリなどの情報を収集します。収集した情報はファイルにまとめ、指定されたディレクトリに出力します。出力するファイルは次のとおりです。

- cluster.tar.gz
クラスタ情報を圧縮したファイルです。
- hbsa.tar.gz
HDLM 以外の Hitachi Command Suite 製品の障害情報を圧縮したファイルです。
障害情報の収集対象となる Hitachi Command Suite 製品を使用している場合だけ出力されません。
- getras.tar.gz
HDLM およびシステムの情報を圧縮したファイルです。

各出力ファイルに含まれる情報の詳細については、「7.2.3 収集される障害情報」を参照してください。

「7.2.3 収集される障害情報」に記載されている以外の情報を収集したい場合は、収集したい情報を収集情報定義ファイルに定義してください。収集情報定義ファイルに定義した情報は、getras.tar.gz に圧縮されます。

なお、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) が収集する情報には、ホストの再起動時に消去されてしまうものもあります。障害発生時は、速やかにこのユーティリティを実行してください。

7.2.1 形式

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/DLMgetras { 収集情報出力先ディレクトリ [-f 収集情報定義ファイル名 ]|-h}
```

ユーティリティ名には次のように小文字 (dlmgetras) も使用できます。

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmgetras { 収集情報出力先ディレクトリ [-f 収集情報定義ファイル名 ]|-h}
```

7.2.2 パラメタ

収集情報出力先ディレクトリ

HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) で収集した情報の出力先ディレクトリを指定します。収集された情報は、「機能」に示した 3 つのファイルにまとめられ、指定したディレクトリに出力されます。

-f 収集情報定義ファイル名

情報を収集したいディレクトリ，またはファイルを任意に指定する場合に指定します。情報を収集したいディレクトリ，またはファイルを，収集情報定義ファイルに記述して，このパラメータを指定します。

収集情報定義ファイル名は，絶対パスで指定してください。

収集情報定義ファイルの記述例を次に示します。ここでは，DLMgetras ユティリティが収集しない OS のファイルを取得する場合の記述例，および上位のアプリケーションに PostgreSQL を使用していて，そのファイルを取得する場合の記述例を示します。

図 7-1 収集情報定義ファイルの記述例

<pre># System Memory Information /proc/kcore</pre>	システムの物理メモリ情報を収集
<pre># kernel symbols /var/log/ksyms.*</pre>	エクスポートされているカーネルシンボルの情報を収集
<pre># PostgreSQL Database /usr/local/pgsql/data</pre>	データベース (PostgreSQL) のユーザデータ用のディレクトリを収集

収集情報定義ファイルの記述規則と注意事項

- 収集するディレクトリ，またはファイルは，絶対パスで指定してください。誤って相対パスで指定した場合は，DLMgetras ユティリティを実行したディレクトリ内で，指定したディレクトリ，またはファイルが検索され，ファイルが収集されます。
- 収集情報出力先ディレクトリを含むディレクトリを指定しないでください。指定した場合，DLMgetras ユティリティが終了しなくなります。
- 行の先頭に「#」がある場合，その行をコメント行と見なします。
- 行の先頭以外に「#」がある場合は，「#」をパスの一部と見なします。
- 1 行につき，1 つのファイルまたはディレクトリを指定してください。
- ルートディレクトリ「/」は指定できません。
- ディレクトリが指定された場合，指定されたディレクトリ内のすべてのファイルを取得します。その場合，指定されたディレクトリ内にあるサブディレクトリ内のファイルも含まれます。ただし，ディレクトリ内にファイルがない場合，そのディレクトリについてはファイルを取得しません。取得先のディレクトリにもディレクトリは作成しません。
- 指定したファイルまたはディレクトリは，root 権限で読み取りできる設定にしてください。読み取りできないファイルまたはディレクトリの情報は取得できません。

-h

DLMgetras ユティリティの形式を表示します。

注意事項

- 障害情報は，指定された収集情報出力先ディレクトリに格納してから圧縮するため，情報収集する領域は余裕を持って見積もってください。
- 指定した収集情報出力先ディレクトリがすでにある場合，上書きを確認するメッセージが表示されます。「y」を入力すると，既存のファイルはすべて上書きされます。「n」やそのほかのキーを入力すると，DLMgetras ユティリティは実行されないで終了します。

前回，障害情報を収集したときに作成したディレクトリの名称を変更してからユティリティを実行するか，重複しないディレクトリ名を指定してユティリティを実行してください。

- DLMgetras ユティリティを実行すると、/proc ディレクトリ下または/sys ディレクトリ下のファイルのコピー処理で KAPL10034-E のメッセージが getras.log ファイルに出力されることがあります。しかし、HDLM の動作に問題はありません。

7.2.3 収集される障害情報

DLMgetras ユティリティ実行時に収集される障害情報を、出力されるファイルごとに示します。

- cluster.tar.gz
クラスタ情報です。cluster.tar.gz に含まれる情報の詳細は、「表 7-1 cluster.tar.gz に含まれる情報」に示します。また、DLMgetras ユティリティ実行時に OS やクラスタのコマンドによって記録され、cluster.tar.gz ファイルに格納される情報の詳細を「表 7-2 DLMgetras ユティリティ実行時に OS や HDLM のコマンドによって記録され、cluster.tar.gz ファイルに格納される情報」に示します。
- hbsa.tar.gz
HDLM 以外の Hitachi Command Suite 製品の障害情報を圧縮したファイルです。
障害情報の収集対象となる Hitachi Command Suite 製品を使用している場合だけ出力されます。
- getras.tar.gz
HDLM およびシステムの情報です。
収集情報定義ファイルを指定して DLMgetras ユティリティを実行した場合、収集情報定義ファイルに定義された情報も、getras.tar.gz に含まれます。
getras.tar.gz に含まれる情報の詳細は、「表 7-3 getras.tar.gz に含まれる情報」に示します。また、DLMgetras ユティリティ実行時に OS や HDLM のコマンドによって記録され、getras.tar.gz ファイルに格納される情報の詳細を「表 7-4 DLMgetras ユティリティ実行時に OS や HDLM のコマンドによって記録され、getras.tar.gz ファイルに格納される各種情報」に示します。
なお、「表 7-3 getras.tar.gz に含まれる情報」には、収集情報定義ファイルの指定の有無に関わらず収集される情報を示しています。

表 7-1 cluster.tar.gz に含まれる情報

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
/etc または /etc/cluster	cluster.conf※2 または cluster.xml※2	RHCM の設定ファイル (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/etc/ha.d	authkeys	Heart Beat 設定情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	ha.cf	
	haresources	
/etc/ha.d/resource.d	すべてのサブディレクトリおよびファイル	SUSE Heart Beat クラスタリソース情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/etc/VRTSvcs/conf/config	すべてのサブディレクトリおよびファイル※2	VCS の設定ファイル
/var/log	ha-log	Heart Beat ログファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	ha-debug	Heart Beat デバッグ用ログファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
/var/VRTSvcs/log	すべてのサブディレクトリおよびファイル※2	VCS のログファイル

注※1

cluster.tar.gz を展開したときに、指定したディレクトリ内に作成されるディレクトリです。

注※2

収集対象のソフトウェアがインストールされているときだけ収集されます。

表 7-2 DLMgetras ユティリティ実行時に OS や HDLM のコマンドによって記録され、cluster.tar.gz ファイルに格納される情報

実行されるコマンド	ファイル	説明
/bin/rpm -qlv clumanager または/bin/rpm -qlv rgmanager	RHCM_rpm-qlv.txt※	RHCM のパッケージファイル情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/bin/rpm -qlv heartbeat	HA_rpm-qlv.txt	HeartBeat のパッケージファイル情報
/bin/rpm -qlv VRTSvcs	VCS_rpm-qlv.txt※	VCS のパッケージファイル情報
/etc/init.d/heartbeat status	HA_status.txt	HeartBeat クラスタ状態情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/opt/VRTSvcs/bin/haclus -display	VCS_haclus-display.txt※	VCS のクラスタの設定情報
/opt/VRTSvcs/bin/haclus -notes	VCS_haclus-notes.txt※	VCS の管理情報
/opt/VRTSvcs/bin/hagrp -display	VCS_hagrp-display.txt※	VCS のグループ情報
/opt/VRTSvcs/bin/hagrp -dep	VCS_hagrp-dep.txt※	VCS のグループ依存情報
/opt/VRTSvcs/bin/hagrp -state	VCS_hagrp-state.txt※	VCS のグループ状態情報
/opt/VRTSvcs/bin/hares -display	VCS_hares-display.txt※	VCS のリソース情報
/opt/VRTSvcs/bin/hares -dep	VCS_hares-dep.txt※	VCS のリソース依存情報
/opt/VRTSvcs/bin/hares -state	VCS_hares-state.txt※	VCS のリソース状態情報
/opt/VRTSvcs/bin/hastatus -summary	VCS_hastatus-summary.txt※	VCS のクラスタ状態情報
/opt/VRTSvcs/bin/hasys -display	VCS_hasys-display.txt※	VCS の各ノードの情報
/opt/VRTSvcs/bin/hasys -state	VCS_hasys-state.txt※	VCS の各ノードの状態情報
/sbin/cluconfig -l	RHCM_cluconfig-l.txt※	RHCM のクラスタの設定情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)

実行されるコマンド	ファイル	説明
/sbin/clustat	RHCM_clustat.txt※	RHCM のクラスタ状態情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/sbin/clustonith -L	RHCM_Clustonith-L.txt※	RHCM のユティリティ情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/sbin/clustonith -vSl	RHCM_Clustonith-vSl.txt※	RHCM のユティリティリスト情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/usr/sbin/stonith -L	HA_stonith-L.txt	HeartBeat ユティリティリスト情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/usr/sbin/stonith -vSl	HA_stonith-vSl.txt	HeartBeat のユティリティリスト情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)

注※

収集対象のソフトウェアがインストールされているときだけ収集されます。

表 7-3 getras.tar.gz に含まれる情報

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
DLMgetras ユティリティ実行時に指定する収集情報の出力先ディレクトリ	getras.log	DLMgetras ユティリティのログファイル
/boot/efi/efi/redhat	elilo.conf	ブートローダ設定ファイル (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(IPF), または Red Hat Enterprise Linux 5(IPF)を使用している場合)
/boot/efi/efi/SuSE	elilo.conf	ブートローダ設定ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server(IPF)を使用している場合)
/boot/grub	menu.lst	ブート選択リスト (SUSE LINUX Enterprise Server(IA32/EM64T/AMD64)を使用している場合)
	grub.conf	ブートローダ設定ファイル (Red Hat Enterprise Linux(IA32/EM64T/AMD64)を使用している場合)
/etc	crypttab	LUKS を使用したブロックデバイス情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
	dracut.conf	dracut 設定ファイル
	drbd.conf	DRBD の設定ファイル

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
	exports	ネットワークファイルシステムにエクスポートしたファイルシステム情報
	evms.conf	デフォルト値情報ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	fstab	起動時のファイルシステムの自動マウント情報
	hba.conf	HBA 設定ファイル
	inittab	ブートプロセススクリプト
	kdump.conf	kdump の設定ファイル
	lilo.conf	ブートローダ設定ファイル (IA32, EM64T, または AMD64 の場合)
	lpfc.conf	Emulex ドライバ設定ファイル
	mdadm.conf	md デバイス設定情報
	modprobe.conf	ロードモジュール情報ファイル (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, Red Hat Enterprise Linux 5, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	modprobe.conf.local	ロードモジュール情報ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	mtab	マウント情報
	qla*.conf	QLogic ドライバ設定ファイル
	raidtab	md デバイス設定情報
	raw	キャラクタ型デバイス情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	rc.sysinit	起動時初期化スクリプト (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
	syslog.conf	syslogd 設定ファイル (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)
/etc/ais	openais.conf	OpenAIS の設定ファイル
/etc/cron*	すべてのサブディレクトリおよびファイル	cron ファイル
/etc/dracut.conf.d	すべてのサブディレクトリおよびファイル	dracut 設定ディレクトリ
/etc/hotplug	blacklist	ホットプラグでロードされていないモジュールの情報
/etc/init.d	boot	起動初期化スクリプト (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	boot.*	起動初期化スクリプト (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
	halt	シャットダウンスクリプト
/etc/init.d/boot.d	すべてのサブディレクトリおよびファイル	起動初期化スクリプト (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/etc/iscsi	initiatorname.iscsi	iSCSI イニシエーター名設定ファイル
	iscsid.conf	iSCSI の設定ファイル
/etc/iscsi/nodes	すべてのサブディレクトリおよびファイル	ターゲットの設定ファイル
/etc/libvirt/qemu	*.xml	KVM 関連のハードウェア設定ファイル (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
/etc/lvm	.cache	有効な LVM 情報ファイル (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	lvm.conf	LVM の構成設定ファイル
/etc/lvm/backup	すべてのサブディレクトリおよびファイル	LVM 関連ファイル
/etc/lvm/cache	.cache	有効な LVM 情報ファイル (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
/etc/modprobe.d	すべてのファイル	ロードモジュール情報ファイル (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
/etc/ocfs2	cluster.conf	Oracle Cluster File System 2 の設定ファイル
/etc/opt/DynamicLinkManager	auditlog.dat	監査ログ設定ファイル
	.dlmfdrv.conf	構成定義ファイル
	.dlmfdrv1.conf .dlmfdrv2.conf .dlmfdrv3.conf	構成定義ファイルバックアップ
	.dlmfdrv.unconf	除外ディスク定義ファイル
	.dlmfdrv1.unconf .dlmfdrv2.unconf .dlmfdrv3.unconf	除外ディスク定義ファイルバックアップ
	d1mchname.conf	デバイス名変更定義ファイル
	d1mchname1.conf d1mchname2.conf d1mchname3.conf	デバイス名変更定義ファイルバックアップ
	.dlmfdrv*.save	構成定義ログファイル
	d1mmgr.xml	マネージャ設定情報
	d1mmgr_DPC.xml	ダイナミック I/O パスコントロール機能の設定ファイル

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
	dlnwebagent.properties	Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントの設定ファイル
	hdlm.conf	HDLM 構成情報ファイル
	hdlmboot*.log	HDLM ブートのログ
	hdlm_kernel_version	HDLM をインストールしたときのカーネルバージョン情報
	hdlm_utillog.conf	HDLM ユティリティログ設定ファイル
/etc/sysconfig	boot	ブートプロセス情報ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	hwconf	ハードウェア情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)
	irqbalance	割り込み処理情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
	kdump	kdump の設定ファイル
	kernel	カーネルの設定ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	lvm	起動時の LVM 情報ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	rawdevices	キャラクタ型デバイス情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用している場合)
	scsidev	SCSI デバイスの設定ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	sysctl	sysrq 情報ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	xendomains	Xen の設定ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/etc/sysconfig/hdlm-scripts	すべてのサブディレクトリおよびファイル	HDLM 関連スクリプト
/etc/sysconfig/mkinitrd	すべてのサブディレクトリおよびファイル	initrd 関連ファイル (Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)
/etc/sysconfig/network	ifcfg-eth*	NIC のネットワーク情報
/etc/sysconfig/network-scripts	ifcfg-eth*	NIC のネットワーク情報
/etc/syslog-ng	syslog-ng.conf	syslog-ng 設定ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/etc/udev	udev.conf	udev 構成ファイル※2

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
/etc/udev/rules.d	*.rules ファイル	udev ルールファイル (Red Hat Enterprise Linux, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/etc/xen	*.sxp ファイル	Xen の設定ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/etc/xen/auto	すべてのサブディレクトリおよびファイル	domain を自動的に起動するための関連ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/etc/xen/vm	すべてのサブディレクトリおよびファイル	domain の関連ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/lib/modules/カーネル名	modules.dep	モジュールの依存関係の情報
/proc	cmdline	カーネル起動時のパラメタ情報
	config.gz	カーネルコンフィグレーション情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	cpuinfo	CPU 情報
	devices	デバイス情報
	diskstats	ディスクの統計情報
	dma	DMA 関連情報
	drbd	DRBD 状態情報
	filesystems	ファイルシステムリスト
	interrupts	プロセッサへの割り込み情報
	iomem	I/O メモリマップ情報
	ioports	I/O ポート情報
	kallsyms	カーネルシンボル情報
	loadavg	平均ロード時間情報
	locks	ファイルロック情報
	mdstat	md デバイス情報
	meminfo	メモリ情報
	misc	MISC ドライバ情報
	modules	ロードモジュール情報
	mounts	マウント情報
	partitions	カーネルが認識しているパーティション情報
pci	PCI デバイス一覧 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用している場合)	
slabinfo	slab cache の情報	
stat	統計情報	
swaps	SWAP 情報	
uptime	システム稼働時間情報	
version	カーネルバージョン情報	

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
/proc/irq	すべてのサブディレクトリ およびファイル	IRQ 情報
/proc/net	すべてのサブディレクトリ およびファイル	ネットワークデバイス情報
/proc/scsi	すべてのサブディレクトリ およびファイル	SCSI デバイス情報
/proc/sysvipc	すべてのサブディレクトリ およびファイル	SystemV IPC オブジェクト情報
/proc/sys/dev	すべてのサブディレクトリ およびファイル	デバイス関連パラメタ情報
/proc/sys/fs	すべてのサブディレクトリ およびファイル	ファイルシステムパラメタ情報
/proc/sys/kernel	すべてのサブディレクトリ およびファイル	カーネルパラメタ情報
/proc/sys/vm	すべてのサブディレクトリ およびファイル	仮想メモリパラメタ情報
/proc/xen	balloon	Xen の関連情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場 合)
	capabilities	
/tmp	qemu.log	KVM 関連のログファイル (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している 場合)
/var/lib/dhclient	dhclient*	DHCP ネットワーク情報
/var/lib/dhcpd	dhcpd*	DHCP ネットワーク情報
/var/lib/heartbeat/crm	cib.xml	Pacemaker の設定ファイル
/var/lib/iscsi/nodes	すべてのサブディレクトリ およびファイル	ターゲットの設定ファイル
/var/lib/xend	すべてのサブディレクトリ およびファイル	domain の関連ファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用し ている場合)
/var/log	boot.*	起動時のログ, メッセージ情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
	boot.log*	起動ログファイル (Red Hat Enterprise Linux を使用している場 合)
	cron*	cron ログファイル (Red Hat Enterprise Linux を使用している場 合)
	messages*	シスログファイル(クラスタのログも 含む)
	rpmkpgs*	パッケージ情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している 場合)
/var/log/xen	すべてのサブディレクトリ およびファイル	Xen のログファイル (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場 合)

出力先ディレクトリ※1	ファイル	説明
/var/opt/DynamicLinkManager/ log	dlmmgr1.log : dlmmgr16.log	HDLM マネージャのログファイル (ドライバのログを含む)
	dlmwebagent[1- N].log※3	Hitachi Command Suite 共通エー ジェントコンポーネントのログ
	dlminquiry.log	inquiry の情報のログファイル
	dlmcfgmgr1.log, dlmcfgmgr2.log	dlmcfgmgr ユティリティのログ ファイル
	.dlmomtrace1.log .dlmomtrace2.log : .dlmomtrace5.log	オンメモリトレースのログ
	dlnkmgr1.log, dlnkmgr2.log	プロセス別トレース情報ファイル
	hdlmtr1.log : hdlmtr64.log	トレースファイル
/var/opt/DynamicLinkManager/ log/mmap	dlnkmgr.mm	プロセス別トレース関連ファイル
	hdlmtr.mm	トレース管理ファイル
/var/spool/cron	すべてのファイル	ユーザ定義の cron エントリ情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用 している場合)
/var/spool/cron/tabs	すべてのファイル	ユーザ定義の cron エントリ情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/var/tmp/hdlminstlog	すべてのサブディレクトリ およびファイル	インストールログ情報

注※1

getras.tar.gz ファイルを展開したときに、指定したディレクトリ内に作成されるディレ
クトリです。

注※2

udev.conf ファイルの項目「udev_rules=」で記述されている rules ファイルも収集しま
す。

ファイル名が指定されている場合は、そのファイルを収集します。

ディレクトリ名が指定されている場合は、そのディレクトリ内の*.rules ファイルを収集しま
す。

注※3

N の値は、dlmwebagent.properties ファイルの設定に依存します。デフォルト値は「2」
です。

**表 7-4 DLMgetras ユティリティ実行時に OS や HDLM のコマンドによって記録され、
getras.tar.gz ファイルに格納される各種情報**

実行されるコマンド	ファイル	説明
/bin/df	bdf.txt	ファイルシステムのディスク容量 使用状況
/bin/dmesg	dmesg.txt	システム診断メッセージ

実行されるコマンド	ファイル	説明
/bin/ls -altR /dev	dev_dsk.txt	ブロック型デバイスとして扱うディスクの一覧
/bin/ls -altR /dev/raw	dev_raw.txt	キャラクタ型デバイスとして扱うディスクの一覧
/bin/ls -altR /etc/rc.d	rc.txt	スクリプトファイル一覧 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/bin/ls -altR /etc/init.d	init.txt	スクリプトファイル一覧 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/bin/ls -altR /opt/ DynamicLinkManager	DLMfilelist.txt	次のディレクトリのファイル一覧 <ul style="list-style-type: none"> • /opt/DynamicLinkManager • /var/opt/ DynamicLinkManager/log
/bin/ls -altRZ /dev	dev_dsk_security.txt	セキュリティコンテキスト情報を含んだブロック型デバイスとして扱うディスクの一覧 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/bin/ls -altRZ /dev/raw	dev_raw_security.txt	セキュリティコンテキスト情報を含んだキャラクタ型デバイスとして扱うディスクの一覧 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/bin/ls -altRZ /etc/rc.d	rc_security.txt	セキュリティコンテキスト情報を含んだスクリプトファイル一覧 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/bin/ls -altRZ /opt/ DynamicLinkManager	DLMfilelist_security.txt	セキュリティコンテキスト情報を含んだ次のディレクトリのファイル一覧 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合) <ul style="list-style-type: none"> • /opt/DynamicLinkManager • /var/opt/ DynamicLinkManager/log
/bin/mount -v	mount-v.txt	ファイルシステムのマウント情報
/bin/ps -elF	ps-elF.txt	プロセス情報
/bin/ps -elL	ps-elL.txt	スレッド情報 (LWD カラムに表示)
/bin/ps -elT	ps-elT.txt	スレッド情報 (SPID カラムに表示)
/bin/ps -elm	ps-elm.txt	スレッド情報 (プロセス情報のあとに表示)
/bin/ps -elZ	ps-elZ.txt	セキュリティコンテキスト情報を含んだプロセス情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/bin/rpm -qai	rpm-qai.txt	インストール済みのパッケージ一覧
/bin/rpm -qlv HDLM	HDLM_rpm-qlv.txt	HDLM のパッケージファイル情報
/bin/rpm -V HDLM	rpm-V.txt	HDLM のパッケージの改変情報
/bin/uname -a	uname-a.txt	OS のバージョン

実行されるコマンド	ファイル	説明
/etc/init.d/drbd status	drbd-status.txt	DRBD 状態情報
/etc/init.d/o2cb status	o2cb-status.txt	o2cb 状態情報
/etc/init.d/openais status	openais-status.txt	OpenAIS 状態情報
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlmgetomtrace	dlmgetomtrace.dmp	HDLM の関数のトレース情報
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlmpr -k	dlmpr-k.txt	Persistent Reserve 情報
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -lu -item slpr pn cp clpr type ic ie dnu hctl dpc	dlmmgr-lu.txt	HDLM の LU 情報
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -lu -item all	dlmmgr-lu-all.txt	HDLM の LU 情報 (間欠障害の発生回数を含むすべての項目)
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -path	dlmmgr-path.txt	HDLM のパス情報
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -path - hbaportwwn	dlmmgr-path.txt	HDLM パス情報 (HBA のポート WWN 情報を含む)
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -path - iem	dlmmgr-path-iem.txt	HDLM のパス情報 (間欠障害の発生回数を含む)
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -drv	dlmmgr-drv.txt	HDLM デバイス, SCSI デバイスおよび LDEV 情報の対応情報
/opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - sfunc, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - msrv, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - adrv, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - pdrv, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - lic, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - audlog, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - lspathusetimes, /opt/DynamicLinkManager/ bin/dlnkmgr view -sys - expathusetimes	dlmmgr-sys.txt	HDLM のプログラム情報
/sbin/blkid	blkid.txt	ブロックデバイスの属性情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, または

実行されるコマンド	ファイル	説明
		Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
/sbin/chkconfig --list	chkconfig.txt	サービスの設定
/sbin/cryptsetup luksDump デバイスファイル	cryptsetup-luksDump.txt	SCSI デバイスファイル, および HDLM デバイスファイルの LUKS ヘッダー情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
/sbin/cryptsetup status デ バイスマップで使用するデバイ ス名	cryptsetup-status.txt	HDLM デバイスとデバイスマッ パーで 사용되는デバイスのマッ ピング情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用してい る場合)
/sbin/e2label	e2label.txt	ラベル情報 (ラベル情報は, すべて の SCSI デバイス名とそのデバイス に対するラベル名を各行に表示し ます。ラベルが設定されていない 場合は, ラベルの部分に「-」(ハイ フン)が表示されます。また, Linux のファイルシステムに ext ファイ ルシステム以外のファイルシステ ムを使用している場合は, ラベル情 報にラベル名は記録されません)
/sbin/dlmcfgmgr -v -udev	dlmcfgmgr-v.txt	HDLM デバイスの構成情報と管理 状態
/sbin/fdisk -l	fdisk-l.txt	ディスク情報 (IA32, EM64T, ま たは AMD64 の場合)
/sbin/ifconfig -a	ifconfig-a.txt	全 NIC 情報
/sbin/iscsiadm -m session -P 3	iscsi_m_session.txt※1	iSCSI でのセッション情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使 用している場合)
/sbin/iscsiadm -m fw	iscsi_m_fw.txt※1	iSCSI でのファームウェア情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合)
/sbin/lilo -t	lilo-t.txt	ブートローダ情報 (IA32, EM64T, または AMD64 の場合)
/sbin/lsmmod	lsmmod.txt	ロードモジュール一覧
/sbin/lspci -v	lspci-v.txt	PCI 情報
/sbin/lvmdiskscan	lvmdiskscan.txt	lvm ディスク情報 (Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用 している場合)
/sbin/lvs	lvs.txt	論理ボリューム情報 (Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用 している場合)

実行されるコマンド	ファイル	説明
/sbin/o2cb_ctl -V	o2cb_ctl-V.txt	Oracle Cluster File System 2 バージョン情報
/sbin/parted -s HDLM デバイス print	parted-s.txt	HDLM デバイスのパーティション情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(IPF), または Red Hat Enterprise Linux 5(IPF)を使用している場合)
/usr/sbin/parted -s HDLM デバイス print	parted-s.txt	HDLM デバイスのパーティション情報 (SUSE LINUX Enterprise Server(IPF)を使用している場合)
/sbin/pvs	pvs.txt	物理ボリューム情報 (Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/sbin/pvscan	pvscan.txt	物理ボリューム情報
/sbin/raw -qa	raw-qa.txt	キャラクタ型デバイス情報 (SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合)
/sbin/runlevel	runlevel.txt	ランレベル情報
/sbin/sysctl -A	sysctl.txt	カーネルパラメタ情報
/sbin/vgdisplay -v	vgdisplay-v.txt	ボリュームグループ情報 (Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/sbin/vgs	vgs.txt	ボリュームグループ情報 (Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
ulimit -a	ulimit-a.txt	プロセスで使用できるシステム資源 (データセグメント, スタックセグメント, ファイル記述子) の制限値
/usr/bin/env	env.txt	環境変数情報
/usr/bin/free	free.txt	メモリ情報
/usr/bin/getconf PAGESIZE	getconfPAGESIZE.txt	メモリページサイズ情報
/usr/bin/ident dlnkmgr dlmmgr DLMgetras libdlm.so libhdlmhcc-* libhdlmhccmp- * dlmcfgmgr sddlmdrv.ko sddlmfdrv.ko	whatlist.txt	プログラム (dlnkmgr, dlmmgr, DLMgetras, libdlm.so, libhdlmhcc-*, libhdlmhccmp-*, dlmcfgmgr, sddlmdrv.ko および sddlmfdrv.ko) のビルド番号
/usr/bin/iostat	iostat.txt	デバイスの統計情報
/usr/bin/iostat -p	iostat-p.txt	ブロックデバイスの統計情報
/usr/bin/lsdev	lsdev.txt	ドライバー一覧 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/usr/bin/procinfo	procinfo.txt	マシン情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)

実行されるコマンド	ファイル	説明
/usr/bin/raw -qa	raw-qa.txt	キャラクタ型デバイス情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用している場合)
/bin/raw -qa	raw-qa.txt	キャラクタ型デバイス情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
/usr/sbin/raw -qa	raw-qa.txt	キャラクタ型デバイス情報 (SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用している場合)
/usr/bin/uptime	uptime.txt	システムの稼働時間情報
/usr/bin/udevinfo -d	udevinfo-d.txt※2	udev データベース情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, Red Hat Enterprise Linux 5, または SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用している場合)
/sbin/udevadm info -e	udevadminfo-e.txt	udev データベース情報 (Red Hat Enterprise Linux 6, または SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合)
/usr/bin/virsh list --all	virsh-list.txt	KVM のゲスト OS 情報 (Red Hat Enterprise Linux 5, または Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合)
/usr/sbin/clvmd -V	clvmd-V.txt	clvmd バージョン情報
/usr/sbin/crm_resource -L	crm_resource-L.txt	Pacemaker リソース一覧
/usr/sbin/getsebool -a	getsebool-a.txt	デーモン実行に対するセキュリティ制御値 (SELinux 上のブール値) (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/usr/sbin/lsscsi	lsscsi.txt	SCSI デバイスのリスト情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/usr/sbin/lvmdiskscan	lvmdiskscan.txt	lvm ディスク情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)
/usr/sbin/lvs	lvs.txt	論理ボリューム情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)
/usr/sbin/pvs	pvs.txt	物理ボリューム情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)
/usr/sbin/sestatus -v	sestatus-v.txt	SELinux 情報 (Red Hat Enterprise Linux を使用している場合)
/usr/sbin/vgdisplay -v	vgdisplay-v.txt	ボリュームグループ情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)

実行されるコマンド	ファイル	説明
/usr/sbin/vgs	vgs.txt	ボリュームグループ情報 (Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4, または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合)
/usr/sbin/xm info	xm-info.txt	domain0 の情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)
/usr/sbin/xm list, /usr/sbin/xm list --long	xm-list.txt	domain の情報 (SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合)

注※1

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 では収集されません。

注※2

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 では収集されません。

7.3 dlmcfmgmgr HDLM 構成定義ユーティリティ

HDLM で管理できるように、Linux が保持している SCSI デバイスの情報を取得 (ホストとストレージシステムの間を結ぶパスの情報を検出) して HDLM に登録し、HDLM デバイスの作成、更新、および削除を行います。また、HDLM デバイスを管理対象外にしたり、管理対象にしたりできます。

なお、ユーティリティの実行時に既存の HDLM デバイスを更新する場合、その HDLM デバイスの定義は引き継がれます。

ストレージシステムの構成変更 (LU やパスの追加、削除)、LU のパーティション変更、またはホスト側のハード構成変更を実施した場合は必ず、ホストを再起動するか、dlmcfmgmgr ユティリティを実行してください。これによって、HDLM デバイスを再構成します。

dlmcfmgmgr ユティリティの実行時に、処理中のログを取得します。

7.3.1 形式

```
/sbin/dlmcfmgmgr
  [-s]
  {-r
  |-o {HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 ...|all}
  |-i {HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 ...|all}
  |-v [-udev]
  |-u {HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 ...|all}
  |-logfs [dlmcfmgmgr ユティリティのログファイルのファイルサイズ]}
```

7.3.2 パラメタ

各パラメタ名と機能を次の表に示します。

表 7-5 dlmcfmgmgr ユティリティのパラメタの機能

パラメタ	機能
-s	確認メッセージを表示しないで dlmcfmgmgr ユティリティを実行します
-r	ホストの稼働中に HDLM デバイスへのパスの登録を実行します
-o	管理対象の HDLM デバイスを管理対象外にします

パラメタ	機能
-i	管理対象外にしていた HDLM デバイスを管理対象に戻します
-v [-udev]	HDLM が認識しているすべての HDLM デバイスの管理状態と構成情報を表示します
-u	-v パラメタを指定して表示された HDLM デバイスの構成情報で、Device 列に「-」（ハイフン）が表示されているパスを削除します
-logfs	dlnmcfmgmgr ユティリティのログファイル (dlnmcfmgmgr[1-2].log) のファイルサイズを変更します

-s

dlnmcfmgmgr ユティリティの実行時に確認メッセージを表示しない場合に、指定します。また、このパラメタを指定してユティリティを実行した場合、HDLM デバイスごとの確認メッセージを表示しません。

このパラメタは、シェルスクリプトやバッチファイルでコマンドを実行する場合など、確認メッセージへの入力を省略したい（人手による介入をしたくない）ときに指定します。

-v パラメタを指定した場合は、この指定を省略しても、実行するかどうかの確認メッセージは表示されません。

-r

HDLM がまだ認識していないパスを認識して、HDLM に登録する場合に指定します。

dlnmcfmgmgr ユティリティの実行時、必要な HDLM デバイスの論理デバイスファイルを /dev ディレクトリ下に作成します。その結果、ストレージシステムの LDEV を HDLM デバイスとして、ユーザが利用できるようになります。

このパラメタは、ストレージシステムの構成変更 (LU やパスの追加)、またはホスト側のハード構成変更など、新規に HDLM デバイスの定義を作成するときに指定します。

HDLM に一度登録されたパスの定義情報は、ホストの起動時にそのパスが断線状態になっていても引き継がれます。

新規に検出され登録されるパスで、そのパスの SCSI デバイスがすでに登録されていた（ホストとストレージシステムの LU とのパスがすでに存在し、さらにパスを追加した）場合、そのパスには同じ HDLM デバイスが割り当てられます。新規に検出され登録されるパスで、そのパスの SCSI デバイスが未登録の（ホストとストレージシステムの LU を結ぶパスを新たに定義した）場合、そのパスにはアルファベットの若い順番に、空いている HDLM デバイスが割り当てられます。HDLM デバイスが新規に割り当てられる場合の簡単な事例を次の表に示します。

表 7-6 HDLM デバイスの新規割り当て例

-r パラメタを指定して dlnmcfmgmgr ユティリティを実行する前の状態	-r パラメタを指定して dlnmcfmgmgr ユティリティを実行したあとの状態
なし	/dev/sddlmaa*
/dev/sddlmaa	/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab *
/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab	/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab /dev/sddlmac *
/dev/sddlmaa /dev/sddlmac	/dev/sddlmaa /dev/sddlmaab * /dev/sddlmac
/dev/sddlmaab /dev/sddlmac	/dev/sddlmaa * /dev/sddlmaab /dev/sddlmac
/dev/sddlmaa	/dev/sddlmaa

-r パラメータを指定して dlmcfgmgr ユティリティを実行する前の状態	-r パラメータを指定して dlmcfgmgr ユティリティを実行したあとの状態
: /dev/sddlmp	: /dev/sddlmp /dev/sddlmaa*
/dev/sddlmaa : /dev/sddlmaap	/dev/sddlmaa : /dev/sddlmaap /dev/sddlmbaa*

注※

新規に割り当てられた HDLM デバイスの論理デバイスファイル名です。

ホストの起動時には毎回、このパラメータを指定した dlmcfgmgr ユティリティが自動的に実行されます。また、このユティリティは、ホストの起動後に必要に応じて何回でも実行できます。実行時、このユティリティは、現在の HDLM の設定を調べて、新規にパスを検出した場合には動的に HDLM に登録して使用できるようにします。また Offline(C)以外の既存のパスや新規に検出されたパスについては、そのパスの現在の状態に変更しません。この場合、パスヘルスチェックや自動フェイルバック機能も同時に実行されます。

KAPL10357-E のメッセージが表示された場合は、新しい LU を認識しても HDLM デバイスは追加されません。その場合には、-u パラメータを指定して dlmcfgmgr ユティリティを実行して使用していない HDLM デバイスを削除し、使用できる名称を解放することによって新規 LU の HDLM デバイスの論理デバイスファイルを作成できます。

管理対象外になっている HDLM デバイスにパスを追加して-r パラメータを指定した dlmcfgmgr ユティリティを実行しても、追加したパスに対応する HDLM デバイスは管理対象外となります。

-o { HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 ... |all }

管理対象の HDLM デバイスを管理対象外にする場合に、指定します。

このパラメータに指定する値には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddl[aa-pap]) を複数指定できます。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。

すべての HDLM デバイスを対象とする場合には、all を指定します。all と HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を同時に指定した場合には、エラーとなります。

-o パラメータだけを指定してパラメータ値を省略した場合には、エラーとなります。また、存在しない HDLM デバイス、HDLM デバイス以外のデバイス、すでに管理対象外になっている HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を指定した場合には無視されます。

このパラメータを指定した dlmcfgmgr ユティリティは、Linux が起動している間に何回でも実行でき、指定した HDLM デバイスが使用中の場合を除いて、実行後、すぐに管理対象外にします。指定した HDLM デバイスが使用中の場合には、エラーとなります。

このパラメータは、HDLM での管理が不要となった HDLM デバイスを管理対象外にする場合に指定します。管理対象外になった HDLM デバイスは、HDLM コマンドの view オペレーションを実行しても表示されなくなり、HDLM デバイスファイルも作成されないため、ユーザが使用できない HDLM デバイスになります。

-i { HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 ... |all }

管理対象外にしていた HDLM デバイスを管理対象に戻す場合に、指定します。

このパラメータに指定する値には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 (/dev/sddl[aa-pap]) を複数指定できます。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル」を参照してください。

すべての HDLM デバイスを対象とする場合には all を指定します。all と HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を同時に指定した場合にはエラーとなります。

-i パラメタだけを指定してパラメタ値を省略した場合には、エラーとなります。また、存在しない HDLM デバイス、HDLM デバイス以外のデバイス、すでに管理対象になっている HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を指定した場合には無視されます。

このパラメタを指定した `dlmcfmgmgr` ユティリティは、Linux が起動している間に何回でも実行でき、実行後、指定した HDLM デバイスはすぐに使用できるようになります。

このパラメタは、HDLM での管理が必要となった HDLM デバイスを管理対象に戻す場合に指定します。管理対象になった HDLM デバイスは、HDLM コマンドの `view` オペレーションなどでも表示され、HDLM デバイスファイルも作成されるようになるため、再びユーザが使用できる HDLM デバイスとなります。

-v [-udev]

HDLM が認識しているすべての HDLM デバイスの管理状態と構成情報を表示する場合に、指定します。

このパラメタは、HDLM デバイスの現在の管理状態、構成情報などを知りたい場合に指定します。

なお、このパラメタを指定した `dlmcfmgmgr` ユティリティの実行時に、`-s` パラメタの指定を省略しても、実行するかどうかの確認メッセージは表示されません。また、`-o`、`-i`、または `-u` パラメタを指定した場合とは異なり、HDLM デバイスへの I/O 中であっても動作します。

HDLM デバイスと対応している SCSI デバイスの `udev` 名もあわせて確認したい場合、`-udev` パラメタを指定します。

-u { HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 ... |all }

`-v` パラメタを指定して表示された HDLM デバイスの構成情報で、Device 列に「-」（ハイフン）が表示されているパスを削除する場合に、指定します。

`-u` パラメタに指定する値には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名（`/dev/sddlm[aa-pap]`）を複数指定できます。HDLM デバイス論理デバイスファイル名については、「[2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル](#)」を参照してください。`-u` パラメタだけを指定してパラメタ値を省略した場合には、エラーとなります。

すべての HDLM デバイスを対象とする場合には、`all` を指定します。`all` と HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を同時に指定した場合には、エラーとなります。また、存在しない HDLM デバイス、または HDLM デバイス以外の論理デバイスファイル名を指定した場合には無視されます。

このパラメタを指定した `dlmcfmgmgr` ユティリティは、Linux が起動している間に何回でも実行でき、実行後、再構成された HDLM デバイスをすぐに使用できます。

このパラメタは、HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスが存在しないパス（`-v` パラメタを指定して表示された HDLM デバイスの構成情報で、Device 列に「-」（ハイフン）が表示されているパス）の情報を削除して、HDLM への登録を解除する場合に指定します。

通常、HDLM デバイスへのパスの情報は、起動時に認識されると追加されますが、このパスが断線状態だったり、LU の割り当てが解除されていたりして、認識された HDLM デバイスが使用できない状態であっても、HDLM によって自動的に削除されることはありません。このため、使用しない HDLM デバイスの情報が残り続ける状態になり、新たに定義した LU や追加したパスが、使用できなくなることがあります。このパラメタは、このような事態を解消する場合に指定します。

なお、`all` を指定した場合、ホスト起動時に断線状態になっていただけで、本当は使用している HDLM デバイスも削除対象と見なして削除するおそれがあるため注意が必要です。`all` を指定して実行する場合は、`-v` パラメタを指定した `dlmcfmgmgr` ユティリティを実行するなどして、削除対象を確認してからにしてください。

-logfs [dlmcfmgmgr ユティリティのログファイルのファイルサイズ]

`dlmcfmgmgr` ユティリティログ（`dlmcfmgmgr[1-2].log`）のファイルサイズを変更する場合に指定します。

d1mcfmgmr ユティリティのログファイルのファイルサイズには、キロバイト単位で 1024～999999 の値を指定します。

HDLM の管理対象の LU 数が 65 以上またはパス数が 129 以上の場合は、10240KB 以上の値に設定することを推奨します。

なお、ログファイルサイズを変更した場合、この時点で存在している d1mcfmgmr[1-2].log のサイズは変更されません。次回に作成される d1mcfmgmr[1-2].log が、設定したファイルサイズとなります。

d1mcfmgmr ユティリティのログファイルのファイルサイズの指定を省略した場合は、現在の設定値が表示されます。

使用例

(例 1) 実行の確認をして、HDLM がまだ認識していないパスを登録する場合

確認メッセージに対して、ユティリティを実行する場合は「y」を、実行しない場合は「n」を入力してください。

```
# /sbin/d1mcfmgmr -r
KAPL10339-I This operation will change the configuration of HDLM devices. Do you want to
continue? [y/n] :
```

(例 2) 実行の確認をしないで、HDLM デバイス「sddlmaa」を管理対象外にする場合

```
# /sbin/d1mcfmgmr -s -o /dev/sddlmaa
KAPL10341-I The HDLM device configurations have been changed.
KAPL10302-I /sbin/d1mcfmgmr completed normally.
#
```

(例 3) 実行の確認をして、使用できないすべてのパスの情報を削除し、HDLM への登録を解除する場合

確認メッセージに対して、ユティリティを実行する場合は「y」を、実行しない場合は「n」を入力してください。

```
# /sbin/d1mcfmgmr -u all
KAPL10339-I This operation will change the configuration of HDLM devices. Do you want to
continue? [y/n] : y
KAPL10341-I The HDLM device configurations have been changed.
KAPL10302-I /sbin/d1mcfmgmr completed normally.
#
```

(例 4) HDLM デバイスの管理状態と構成情報を表示する場合

```
# /sbin/d1mcfmgmr -v
HDevName      Management      Device      Host      Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa   configured       /dev/sda    2         0        0        0
               /dev/sdb        2         0        0        1
/dev/sddlmaB   unconfigured    /dev/sdc    2         0        1        0
               -                2         0        1        1
KAPL10302-I /sbin/d1mcfmgmr completed normally.
#
```

表示される項目とその説明を次の表に示します。

表 7-7 HDLM デバイスの管理状態と構成を示す情報

項目	説明
HDevName	HDLM デバイスの論理デバイスファイル名が、フルパスで表示されます。該当する LU の最初のパスにだけ表示されます。
Management	HDLM デバイスの現在の管理状態が表示されます。 configured : 管理対象であることを示す unconfigured : 管理対象外であることを示す

項目	説明
Device	<p>HDLM デバイスに対応するパスが、表示されます。</p> <p>表示されるのは、SCSI デバイスの論理デバイスファイルです。</p> <p>LU の割り当てを解除したパスや起動時に断線していたパスは、HDLM に仮登録され「-」（ハイフン）で表示されます。</p> <p>なお、SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用している場合は、システムの運用中に次に示す事象が起きたときにも、「-」（ハイフン）が表示されることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ パスが断線した。 ・ LU を削除した。 ・ ファイバケーブルの接続を変更した。 ・ ファイバチャネルスイッチのゾーン設定を変更した。
Host	Host ID（ホストポート番号）です。
Channel	Channel 番号（バス番号）です。
Target	Target ID（ターゲット ID）です。
Lun	Lun（ホスト LU 番号）です。
Udev	<p>udev 名です。</p> <p>udev 機能でデバイス名をカスタマイズしていないデバイスは「-」（ハイフン）で表示されます。</p>

(例 5) dlmcfgmgr ユティリティのログのファイルサイズを設定する場合

dlmcfgmgr ユティリティログのファイルサイズを設定する例を次に示します。

```
#dlmcfgmgr -logfs 10240
```

上記の例では、dlmcfgmgr ユティリティログのファイルサイズの設定値は 10240KB となります。

(例 6) dlmcfgmgr ユティリティのログのファイルサイズの設定値を表示する場合

dlmcfgmgr ユティリティのログのファイルサイズの設定値を表示する例を次に示します。

```
#dlmcfgmgr -logfs
KAPL10938-I dlmcfgmgr Log File Size(KB) : 10240
#
```

参考

パラメタを指定しない場合、dlmcfgmgr ユティリティの指定形式が表示されます。

```
# /sbin/dlmcfgmgr
KAPL10319-W usage: /sbin/dlmcfgmgr [-s]
        { -r
        | -o {special-file-name ... | all}
        | -i {special-file-name ... | all}
        | -v [-udev]
        | -u {special-file-name ... | all}
        | -logfs [log-file-size]}
#
```

注意事項

- ・ 同じバス（ホストポート番号、バス番号、ターゲット ID、ホスト LU 番号）に異なる LDEV を割り当てた場合、以前の LDEV の HDLM デバイス名と、新しく割り当てた LDEV の HDLM デバイス名が同じになることがあります。例えば、ホストの動作中に、ある LDEV の割り当てを解除して、その LDEV と同じバスだが、異なる LDEV を割り当てる場合が考えられます。こ

の場合、その HDLM デバイス名を使用する設定（アプリケーションなど）が残っていると、HDLM の上位プログラムプロダクトなどは、LDEV が変更されたことを認識しないままアクセスしてデータを破壊するおそれがあります。したがって、LDEV の割り当てを解除する場合には、使用していた HDLM デバイス名がどこにも残っていないことを確認してください。

- dlmcfmgmgr ユティリティは複数を同時に実行できません。
- HDLM 起動ユティリティ (dlmstart) を実行中に、dlmcfmgmgr ユティリティは実行できません。
- dlmcfmgmgr ユティリティの -i, -o または -u パラメタで指定できる HDLM デバイスファイルの論理デバイスファイル名は、1 ファイルにつき 4095 文字までです。4096 文字以上だった場合には KAPL10358-E のメッセージが表示されます。
- もし同じホスト LU 番号で異なる LU を割り当て直したとしても、HDLM は異なる LU として取り扱いません。したがって、構成変更をした場合にはホストを再起動してください。
- -s パラメタを指定して複数の HDLM デバイスを指定した場合、それぞれの HDLM デバイスについて処理を実行したあとに確認メッセージは表示されません。例えば、/dev/sddlmaa, /dev/sddlmaab および /dev/sddlmac に対して -o パラメタの処理をする場合、それぞれの HDLM デバイスに対して処理を実行するたびに、確認メッセージ KAPL10339-I は表示しません。処理の開始時に一度表示され、「y」を入力すると、指定した HDLM デバイス (/dev/sddlmaa, /dev/sddlmaab および /dev/sddlmac) が続けて処理されます。
- 管理対象外にしていた HDLM デバイスに対応する LU のパーティション構成を SCSI デバイスより直接変更したあと、HDLM デバイスを管理対象に戻す場合、次の操作を実行してください。
 - a. -i パラメタを指定して dlmcfmgmgr ユティリティを実行する。
 - b. -r パラメタを指定して dlmcfmgmgr ユティリティを実行する。
- 管理対象外の HDLM デバイスは、dlmcfmgmgr ユティリティに -i パラメタを指定し、実行することで管理対象にできます。このとき、接続するパスの一部に障害が発生している HDLM デバイスを管理対象にすると、KAPL08026-E のメッセージが syslog に出力されることがあります。しかし、このような場合でも HDLM の動作に問題はありません。
- -r パラメタを指定して dlmcfmgmgr ユティリティを実行した場合、HDLM コマンド (dlmkmgr view -path) の実行時に表示される既存のパスの I/O カウントおよび I/O エラーカウントの値は、0 に初期化されます。
- クラスタ環境を構築しているとき、主系ホストで管理対象としている HDLM デバイスを待機系ホストにしてから管理対象外にすると、ノードをフェイルオーバーしたときにエラーが発生します。-o パラメタを伴う dlmcfmgmgr ユティリティを実行して待機系ホストから管理対象外にする場合、主系ホストでもその HDLM デバイスを管理対象外としておいてください。
- raw デバイスにバインドされた HDLM デバイスを、-o パラメタを伴う dlmcfmgmgr ユティリティによって管理対象外としないでください。管理対象外にした状態で raw デバイスをアクセスしようとするとうエラーが発生します。
- dlmcfmgmgr ユティリティを実行して HDLM デバイスを構成したあとに、SCSI デバイスを扱う sysfs インタフェースの設定値を変更しないでください。
- dlmcfmgmgr ユティリティを実行して HDLM デバイスを構成したあとに、HBA ドライバのアンロードを実行した場合は、次の手順を実行してください。次の手順を実行しないで HBA ドライバをロードすると、使用できない HDLM のパスが増加するおそれがあります。
 - a. -r パラメタを指定して dlmcfmgmgr ユティリティを実行し、HDLM デバイスに SCSI デバイスが使用できない情報を反映します。
 - b. -u パラメタに all を指定して dlmcfmgmgr ユティリティを実行し、HDLM デバイスを削除します。

- SCSI デバイスを動的に削除したあと `-r` パラメタを指定して `dlnmcfmgmgr` ユティリティを実行すると、HDLM デバイスが使用できない状態になります。そのあと SCSI デバイスを動的に追加して、さらに `-r` パラメタを指定して `dlnmcfmgmgr` ユティリティを実行した場合、`/proc/partitions` にある HDLM のパーティション情報が失われます。この場合は次の手順を実行して回復してください。
 - a. 追加した SCSI デバイスをいったん削除します。
 - b. 再度、SCSI デバイスを動的に追加します。
 - c. `online` オペレーションを実行して、パスの状態をオンラインにします。
 - d. `-r` パラメタを指定して `dlnmcfmgmgr` ユティリティを実行します。
- HDLM デバイ스에 접속するすべてのパスが断線している状態で、`-r` パラメタを指定して `dlnmcfmgmgr` ユティリティを実行した場合、`/proc/partitions` にある HDLM のパーティション情報が失われます。この場合は次の手順を実行して HDLM のパーティション情報を回復してください。
 - a. パスを接続して、オンライン状態にします。
 - b. `blockdev --rereadpt <HDLM デバイス>` を実行して、パーティション情報を更新します。

7.4 dlmchname HDLM デバイス名変更ユティリティ

HDLM デバイス名を変更します。複数のホスト間で同じ用途のディスクに同じ HDLM デバイス名を付けたり、クラスタの共有ディスクを同じ HDLM デバイス名にしたりできます。

HDLM デバイス名を変更する手順は、「[4.6.5 HDLM デバイス名の変更](#)」を参照してください。

7.4.1 形式

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmchname [-f | -o]
```

7.4.2 パラメタ

- f
使用中の HDLM デバイスを名称変更の対象にする場合に指定します。
コマンド実行後にホストの再起動が必要です。
- o
現在の iLU と HDLM デバイス名の対応関係をデバイス名変更定義ファイル (`/etc/opt/DynamicLinkManager/dlmchname.conf`) に出力します。
既存のデバイス名変更定義ファイルは 3 世代分バックアップされます。

補足事項

- パラメタを指定しないで `dlmchname` ユティリティを実行した場合、HDLM が管理するすべてのパスの統計情報 (I/O 回数, I/O 障害回数) の値が初期値(0)になります。
- `-f` パラメタを指定しない場合、使用中の HDLM デバイス名は変更できません。
- システムディスクのように運用中にオフラインにできないディスクの場合は、`-f` パラメタを使用して HDLM デバイス名変更ユティリティを実行し、ホストを再起動することで名称を変更できます。
`-f` パラメタを指定して HDLM デバイスを名称変更した場合、ホストを再起動するまでは次の制限があります。

- `dlnmcfmgr` ユティリティの実行時にエラーが発生します。
- I/O は変更前の HDLM デバイス名で行われます。
- LVM のボリュームグループを構成している HDLM デバイスの名称を変更した場合は、`dlnmchname` ユティリティの実行後に `vgscan` コマンドを実行してください。
- HDLM デバイスが構成されていない場合、`dlnmchname` ユティリティは実行できません。

7.4.3 デバイス名変更定義ファイルの編集方法

ここでは、デバイス名変更定義ファイル (`/etc/opt/DynamicLinkManager/dlnmchname.conf`) の編集方法について説明します。

(1) デバイス名変更定義ファイルの記述規則

デバイス名変更定義ファイルを編集する場合の記述規則を次に示します。

- 1 行につき、ストレージシステムのシリアル番号、iLU、および HDLM デバイス名をスペースで区切って記載してください。
- コメント行を入れる場合は、行の頭に「#」を記載してください。

(2) デバイス名変更定義ファイルの定義内容

デバイス名変更定義ファイルには、ストレージシステムのシリアル番号、iLU、および HDLM デバイス名の対応関係を記載します。

`dlnmchname` ユティリティに `-o` パラメータを指定して実行すると、デバイス名変更定義ファイル (`/etc/opt/DynamicLinkManager/dlnmchname.conf`) が作成されます。次に例を示します。

```
3585011299 0090 sddlmac
3585011299 0091 sddlmaab
3585011299 0092 sddlmaa
```

HDLM デバイス名を変更するときは、HDLM デバイス名を記載している第 3 フィールドだけを編集してください。

HDLM デバイス名に使用できるアルファベットは「[2.6 HDLM デバイスの論理デバイスファイル](#)」を参照してください。

注

ストレージシステムのシリアル番号の先頭には数桁の数字が付与されて出力されますが、無視してください。

7.5 dlmmkinitrd ブートディスクサポートユティリティ

HDLM デバイスをブートディスクとして使用するための、初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

Red Hat Enterprise Linux 6 の場合、`dlmmkinitrd` ユティリティはインストールされません。Red Hat Enterprise Linux 6 で初期 RAM ディスクイメージファイルを作成する場合は、`dracut` コマンドを使用してください。

7.5.1 形式

(1) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 の場合

`/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd`

```
[-v]
[-f]
[-fstab fstab-name]
initrd-image
kernel-version
```

(2) SUSE LINUX Enterprise Server の場合

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd
[-i initrd-image]
[-b boot-directory]
[-h]
```

7.5.2 パラメタ

(1) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 の場合

-v
dlmmkinitrd ユティリティ実行時のログを、コンソールに出力する場合に指定します。

-f
すでにある初期 RAM ディスクイメージファイルと同じ名前のファイルを作成する場合に指定します。このオプションを指定して dlmmkinitrd ユティリティを実行すると、作成される初期 RAM ディスクイメージファイルを上書きします。

-fstab *fstab-name*
ルートデバイスファイルシステムを決定するための *fstab* ファイルを指定します。デフォルト値は、`/etc/fstab` です。

initrd-image
dlmmkinitrd ユティリティが作成する初期 RAM ディスクイメージファイル名をフルパス、または相対パスで指定します。

kernel-version
初期 RAM ディスクイメージファイルを作成するために使用するカーネルを指定します。

使用例

Red Hat Enterprise Linux 5 の場合の実行例を、次に示します。

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmkinitrd /boot/initrd- 2.6.18-194.el5-  
hdlm.img `uname -r`
```

(2) SUSE LINUX Enterprise Server の場合

初期 RAM ディスクイメージファイルを作成するに当たって、イメージファイル名や作成先のパスを指定しない方法とパラメタを使って指定する方法があります。

パラメタの指定を省略した場合

現在動作中のカーネルを使用して、`/boot` ディレクトリ以下に初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

カーネル「`vmlinuz-バージョン`」のデフォルトの初期 RAM ディスクイメージファイル名は「`initrd-バージョン.hdlm`」になります。

例

カーネル「vmlinuz-2.6.16.46-0.14-bigsmpl」の初期 RAM ディスクイメージファイル名は「initrd-2.6.16.46-0.14-bigsmpl.hd1m」になります。

`-i initrd-image`

dlmmkinitrd ユティリティが作成する初期 RAM ディスクイメージファイル名を指定します。初期 RAM ディスクイメージファイルを、デフォルトのファイル名称 (initrd-バージョン.hd1m) 以外に作成したい場合に使用します。

初期 RAM ディスクイメージファイル名をフルパスで指定した場合

同時に `-b` パラメタを指定しても、`-b` パラメタの指定は無効になります。

初期 RAM ディスクイメージファイル名を相対パスで指定して、`-b` パラメタを同時指定しなかった場合

`/boot` ディレクトリからの相対パスになります。

初期 RAM ディスクイメージファイル名を相対パスで指定して、`-b` パラメタを同時指定した場合

`-b` パラメタで指定した初期 RAM ディスクイメージの作成先からの相対パスになります。

`-b boot-directory`

初期 RAM ディスクイメージファイルの作成先のパスを指定します。初期 RAM ディスクイメージファイルを、デフォルトのディレクトリ (`/boot`) 以外に作成したい場合に使用します。

`-h`

ブートディスクサポートユティリティ (dlmmkinitrd) の形式を表示します。

7.6 dlmpd HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ

何らかの要因で LU のパーシステントリザーブが解除されない場合、Reservation Key をクリアしてパーシステントリザーブを解除します。

このユティリティは、ホストの OS が次の場合に使用できます。

- Red Hat Enterprise Linux 5
- Red Hat Enterprise Linux 6
- Oracle Enterprise Linux 5

7.6.1 形式

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmpd {{-k | -c} [sdn] [sdn] ... [-a] | -h}
```

7.6.2 パラメタ

`-k`

Reservation Key を表示する場合に指定します。`-k` 指定時に表示される項目について説明します。

Reservation Key

Reservation Key が設定されていない場合は、[0x0000000000000000]を表示します。

Regist Key

登録されている Key を表示します。

Key Count

登録されている Key の数を表示します。

-c

Reservation Key をクリアする場合に指定します。

sdn

Reservation Key を表示またはクリアする SCSI デバイス (sdn) を指定します。複数指定できます。

このパラメタを省略した場合、すべての SCSI デバイスの Reservation Key を表示またはクリアします。

-a

途中で障害が発生してもすべての SCSI デバイス (sdn) の処理を続行します。

-h

HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティの形式を表示します。

使用例

Reservation Key を確認したあと、Reservation Key をクリアする場合の実行例を次に示します。

1. dlmpd ユティリティを実行して、「sda」「sdb」「sdc」「sdd」「sde」「sdf」の Reservation Key を表示します。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmpd -k sda sdb sdc sdd sde sdf
sda Reservation Key : [0xaaaaaaaaaaaaaaaa]
   Regist Key : [0xaaaaaaaaaaaaaaaa], Key Count : 1
sdb Reservation Key : [0xbbbbbbbbbbbbbbbbb]
   Regist Key : [0xaaaaaaaaaaaaaaaa], Key Count : 2
   Regist Key : [0xbbbbbbbbbbbbbbbbb], Key Count : 2
sdc Reservation Key : [0xbbbbbbbbbbbbbbbbb]
   Regist Key : [0xbbbbbbbbbbbbbbbbb], Key Count : 4
sdd Reservation Key : [0xaaaaaaaaaaaaaaaa]
   Regist Key : [0xaaaaaaaaaaaaaaaa], Key Count : 4
sde Reservation Key : [0x0000000000000000]
sdf Reservation Key : [0x0000000000000000]
   Regist Key : [0xaaaaaaaaaaaaaaaa], Key Count : 1
   Regist Key : [0xbbbbbbbbbbbbbbbbb], Key Count : 1
```

2. dlmpd ユティリティを実行して、Reservation Key をクリアします。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmpd -c sdb sdc
```

3. 確認メッセージが表示されます。クリアする場合は「y」を、クリアしない場合は「n」を入力してください。

```
KAPL10641-I Reservation Key will now be cleared. Is this OK? [y/n]:y
KAPL10642-I Reservation Key of sdb was cleared.
KAPL10642-I Reservation Key of sdc was cleared.
```

注意事項

- dlmpr ユティリティを実行する前に、パーシステントリザーブを解除する LU に対してアクセスしていないことを確認してください。

次の条件をすべて満たす状態で、次の操作を行うと、Reservation-key の読み込みに失敗して、[0x????????????]と表示されます。

発生条件

- HDLM デバイスがマルチパスで構成されている場合
- パーシステントリザーブがクラスタソフトウェアから設定されている場合

操作

1. SCSI デバイスを指定してパーシステントリザーブを解除します。
2. 別のパスに対応した SCSI デバイスの PersistentReserve の情報を-k パラメタに指定して dlmpr ユティリティを実行します。

この現象が発生した場合は、再度-k パラメタを指定して dlmpr ユティリティを実行してください。

7.7 dlmsetopt HDLM ドライバオプション設定ユティリティ

HDLM のフィルタドライバに対する設定を変更します。設定した値を有効にするにはホストマシンを再起動してください。なお、dlmsetopt ユティリティの実行回数ごとにホストを再起動する必要はありません。dlmsetopt ユティリティの実行が完了したら、ホストを一回だけ再起動してください。再起動すると、設定した値がすべて有効になります。

7.7.1 形式

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmsetopt {-r retrycount | -inqt InquiryTimeout | -inqr InquiryRetry | -prsup ReserveStatus | -h}
```

7.7.2 パラメタ

-r

フィルタドライバ内部でメモリを確保するときのリトライ回数を指定します。メモリ確保に失敗した場合には 0.05 秒間隔でリトライをします。リトライが長時間続くことによって I/O が実行されない場合は、適切なリトライ回数を設定してください。リトライ回数を超えて、メモリ確保に失敗した場合は syslog および HDLM マネージャのログに KAPL05708-E のメッセージを出力します。

retrycount

-1~2147483646 の数値を指定します。

-1 : メモリが確保できるまでリトライします。システムの初期値です。

0 : リトライを行いません。

1~2147483646 : 指定した回数だけリトライします。

-1 より小さい数値, 2147483646 より大きい数値, または数値以外を指定したときは KAPL12559-E のメッセージを表示して終了します。

-inqt

SCSI INQUIRY コマンドのタイムアウト値を秒単位で指定します。HDLM はタイムアウト値の初期値を 30 秒としています。なお、-inqt パラメタで指定するタイムアウト値は、

HDLM から実行する SCSI INQUIRY コマンドにだけ適用されます。ほかのアプリケーションから実行している SCSI INQUIRY コマンドには影響しません。

InquiryTimeout

- 1, または 1~3600 の数値を指定します。
- 1 : タイムアウトを HDLM の初期値である 30 秒に設定します。
- 1~3600 : タイムアウト値 (秒単位)
- 0, -1 より小さい数値, 3600 より大きい数値, または数値以外を指定したときは KAPL12553-W のメッセージを表示して終了します。

-inqr

SCSI INQUIRY コマンドのリトライ回数を指定します。HDLM はリトライ回数の初期値を 1 回としています。なお、-inqr パラメタで指定するリトライ回数は、HDLM から実行する SCSI INQUIRY コマンドにだけ適用されます。ほかのアプリケーションから実行している SCSI INQUIRY コマンドには影響しません。

InquiryRetry

- 1~2147483646 の数値を指定します。
- 1 : リトライを HDLM の初期値である 1 回に設定します。
- 0 : リトライを行いません。
- 1~2147483646 : 指定した回数だけリトライします。
- 1 より小さい数値, 2147483646 より大きい数値, または数値以外を指定したときは KAPL12553-W のメッセージを表示して終了します。

-prsup

パーシステントリザーブをサポートするクラスタ (HA モニタおよび RHCM) と連携する場合に指定します。

ReserveStatus

- on または off を指定します。デフォルト値は「off」です。
 - on : パーシステントリザーブをサポートするクラスタと連携します。
 - off : パーシステントリザーブをサポートするクラスタと連携しません。
- このパラメタを指定できる OS は次のとおりです。
- Red Hat Enterprise Linux 5
 - Red Hat Enterprise Linux 6
 - Oracle Enterprise Linux 5

-h

HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ (dlmsetopt) の形式を表示します。

使用例

(例 1) リトライ回数に「100000」を指定する場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmsetopt -r 100000
KAPL12554-I HDLM ドライバオプション設定ユーティリティを起動しました。
KAPL12555-I HDLM ドライバオプション設定ユーティリティが正常終了しました。
KAPL12558-I オプション設定を有効にするためシステムを再起動してください。
```

(例 2) ヘルプを表示する場合

Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, Oracle Enterprise Linux 5 の場合 :

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmsetopt -h
```

```

KAPL12554-I HDLM ドライバオプション設定ユーティリティを起動しました。
Usage: dlmsetopt {-r retrycount | -inqt InquiryTimeout | -inqr
InquiryRetry | -prsup ReserveStatus | -h}
    retrycount: -1          = Infinite
                  0          = No Retry
                  1-2147483646 = Retry Count
    InquiryTimeout: -1      = Default Timeout (30 (s))
                  1-3600    = Inquiry Timeout Value
    InquiryRetry: -1        = Default Retry (1)
                  0          = No Retry
                  1-2147483646 = Inquiry Retry Count
    ReserveStatus: on       = Persistent Reserve Support
                  off        = No Persistent Reserve
Support (Default)
KAPL12555-I HDLM ドライバオプション設定ユーティリティが正常終了しました。

```

上記以外の場合：

```

# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmsetopt -h
KAPL12554-I HDLM ドライバオプション設定ユーティリティを起動しました。
Usage: dlmsetopt {-r retrycount | -inqt InquiryTimeout | -inqr
InquiryRetry | -h}
    retrycount: -1          = Infinite
                  0          = No Retry
                  1-2147483646 = Retry Count
    InquiryTimeout: -1      = Default Timeout (30 (s))
                  1-3600    = Inquiry Timeout Value
    InquiryRetry: -1        = Default Retry (1)
                  0          = No Retry
                  1-2147483646 = Inquiry Retry Count
KAPL12555-I HDLM ドライバオプション設定ユーティリティが正常終了しました。

```

注意事項

- dlmsetopt ユティリティで指定した内容は、conf ファイルの options sddlmfdrv の行に記述されます。この行は vi などのエディタで編集しないでください。dlmsetopt ユティリティで使用される conf ファイルの名称を次の表に示します。

表 7-8 dlmsetopt ユティリティで使用される conf ファイル

OS	conf ファイル名
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4	/etc/modprobe.conf
Red Hat Enterprise Linux 5	
Oracle Enterprise Linux 5	
SUSE LINUX Enterprise Server	
Red Hat Enterprise Linux 6	/etc/modprobe.d/dlmdrvopt.conf

- ブートディスクに HDLM デバイスを使用した環境で dlmsetopt ユティリティを使用する場合は、設定を変更したあとに初期 RAM ディスクイメージファイルを再作成する必要があります。初期 RAM ディスクイメージファイルを再作成するには、Red Hat Enterprise Linux 6 の場合は dracut コマンド、それ以外の OS の場合はブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) を実行してください。そのあとで初期 RAM ディスクイメージファイル名を変更した場合には、次の表を参照して、作成した初期 RAM ディスクイメージファイルを起動時に使用するようブートローダの設定ファイルを変更してください。

表 7-9 ブートローダの設定ファイル名

ブートローダ	ファイル名
LILO	/etc/lilo.conf
GRUB	Red Hat Enterprise Linux の場合 /etc/grub.conf

ブートローダ		ファイル名
	SUSE LINUX Enterprise Server の場合	/boot/grub/menu.lst
ELILO		/etc/elilo.conf

- `-prsup on` パラメタを指定した場合、設定を有効にするにはホストを再起動する必要があります。また、Lifekeeper と連携する場合は、`-prsup on` パラメタを設定しないでください。

7.8 dlmstart HDLM 起動ユーティリティ

HDLM のインストール後には、次の操作を実行する必要があります。

- HDLM のアラートドライバおよびフィルタドライバのロード
- HDLM デバイスの構成
- HDLM マネージャの起動

`dlmstart` ユティリティを実行すると、上記の操作を一括して実行できます。

また、HDLM のアラートドライバおよびフィルタドライバのロード、または HDLM マネージャの起動が実行済みである場合は、その操作は実行されません。

7.8.1 形式

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmstart
```

注意事項

- `dlmstart` ユティリティは複数と同時に実行できません。
- HDLM 構成定義ユーティリティ (`dlmcfmgmgr`) を実行中に、`dlmstart` ユティリティは実行できません。
- `dlmstart` ユティリティを実行した場合、HDLM コマンド (`dlnmgr view -path`) の実行時に表示される既存のパスの I/O カウントおよび I/O エラーカウントの値は、0 に初期化されます。
- `dlmstart` ユティリティを実行した場合、HDLM デバイスを構成したあとに SCSI デバイスを扱う `sysfs` インタフェースの設定値を変更しないでください。

7.9 dlmupdatesysinit システムスクリプト更新ユーティリティ

Red Hat Enterprise Linux を使用している環境で、HDLM のインストール後に `initscripts` パッケージを更新すると、`/etc/rc.d/rc.sysinit` ファイルから HDLM の情報が消失することがあります。

また、SUSE LINUX Enterprise Server を使用している環境で、HDLM をインストール後に `aaa_base` パッケージ、`raidtools` パッケージ、`mdadm` パッケージ、または `lvm2` パッケージを更新すると、`/etc/init.d/boot.localfs` ファイル、`/etc/init.d/boot.md` ファイル、または `/etc/init.d/boot.lvm` ファイルのどれか、またはすべてのファイルから HDLM の情報が消失することがあります。

HDLM の情報が消失した場合、`dlmupdatesysinit` ユティリティを実行して HDLM の情報を再登録してください。`dlmupdatesysinit` ユティリティを実行する条件については、「[3.5.2 Linux](#) に関する注意事項」を参照してください。

7.9.1 形式

```
/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmupdatesysinit
```

使用例

(例 1) Red Hat Enterprise Linux を使用している環境で、HDLM の情報が消失している場合
次の実行例では、`rc.sysinit` ファイルに HDLM 情報を再登録しています。

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmupdatesysinit
KAPL13501-I The utility for update system scripts started.
KAPL13503-I A system script has been modified. File name = /etc/rc.d/rc.sysinit
KAPL13502-I The utility for update system scripts completed successfully.
```

(例 2) 再登録が不要だった場合

```
# /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmupdatesysinit
KAPL13501-I The utility for update system scripts started.
KAPL13502-I The utility for update system scripts completed successfully.
```

7.10 installgetras HDLM インストール障害情報収集ユティリティ

HDLM インストール時に発生した、障害の解析に必要な障害ログの情報を収集します。収集した情報はファイルにまとめ、指定されたディレクトリに出力します。出力するファイルは次のとおりです。

- `installgetras.tar.gz`

HDLM のインストール処理に関する情報を圧縮したファイルです。

出力ファイルに含まれる情報の詳細については、「[7.10.3 収集される障害情報](#)」を参照してください。

7.10.1 形式

HDLM インストール媒体のマウントポイント/`installgetras` 収集情報出力先ディレクトリ

7.10.2 パラメタ

収集情報出力先ディレクトリ

HDLM インストール障害情報収集ユティリティ (`installgetras`) で収集した情報の出力先ディレクトリを指定します。収集された情報は、`installgetras.tar.gz` ファイルにまとめられ、指定したディレクトリに出力されます。

収集情報の出力先ディレクトリに、ルートディレクトリ「/」は指定できません。

7.10.3 収集される障害情報

HDLM インストール実行時に収集される情報を次に示します。

- `installgetras.tar.gz`

HDLM インストール時の障害情報です。`installgetras.tar.gz` に含まれる情報の詳細を次の表に示します。

表 7-10 `installgetras.tar.gz` に含まれる情報

出力先ディレクトリ※	ファイル	説明
<code>installgetras</code> ユティリティ実行時に指定する収集情報の出力先ディレクトリ	<code>installgetras.log</code>	<code>installgetras</code> ユティリティのログファイル
<code>/var/log</code>	<code>messages</code>	OS の <code>syslog</code> ファイル
<code>/var/tmp/hdlminstlog</code>	すべてのサブディレクトリおよびファイル	HDLM インストール時に作成されるログ情報

注※

`installgetras` ユティリティの実行時に指定した、収集情報出力先ディレクトリ内に作成されるディレクトリです。

7.11 installhdml HDLM インストールユティリティ

HDLM の新規インストール、アップグレードインストールまたは再インストールを実行します。

また、サイレントインストールの実行もできます。サイレントインストールとは、インストール時に応答処理を省略できるインストール方法です。サイレントインストールを実行する場合、応答処理の内容はあらかじめインストール情報設定ファイルに定義しておきます。

インストールの手順については、「3.6 HDLM のインストール」を参照してください。

7.11.1 形式

HDLM インストール媒体のマウントポイント/`installhdml [-v | -h | [-f インストール情報設定ファイル]`

7.11.2 パラメタ

`-v`

インストールする HDLM のバージョンを表示します。

`-h`

HDLM インストールユティリティ (`installhdml`) の形式を表示します。

`-f` インストール情報設定ファイル

HDLM をサイレントインストールする場合に指定します。このパラメタには、インストール情報設定ファイルを指定します。

インストール情報設定ファイルについては、「7.11.3 インストール情報設定ファイルの編集方法」を参照してください。

7.11.3 インストール情報設定ファイルの編集方法

ここでは、インストール情報設定ファイルの編集方法について説明します。

(1) インストール情報設定ファイルの記述規則

インストール情報設定ファイルを編集する場合の記述規則を次に示します。

- ・ インストール情報設定ファイルに記載するキーは、サンプルファイル (sample_installhdlm.conf) に記載してあるキーの順番で記載してください。
- ・ キーと設定値は、1行につき1つの情報を記載してください。
- ・ キー名=設定値の形式で記載してください。
- ・ コメント行を入れる場合は、行の頭に「#」を記載してください。
- ・ キーの設定値に定義できる内容以外を指定した場合は、KAPL09212-E および KAPL09228-W のメッセージが出力されます。

(2) インストール情報設定ファイルの定義内容

インストール情報設定ファイルで定義する内容について、次に示します。

セクション[INSTALLATION_SETTINGS]

installhdlm ユティリティの動作情報を定義します。このセクション名はインストール情報設定ファイルの先頭行に指定してください。ただし、セクション[INSTALLATION_SETTINGS]の前に空行またはコメント行が存在してもかまいません。

セクション[INSTALLATION_SETTINGS]で定義するキーの一覧を次の表に示します。

表 7-11 セクション[INSTALLATION_SETTINGS]のキー

キー名	説明	定義の要否		指定できる長さ (文字)
		新規インストール	アップグレードインストールまたは再インストール	
licensekeyfile ^{※1}	ライセンスキーファイルが「*.plk」形式で提供されている場合、ファイル名を絶対パス名称で指定します。 デフォルトは「/var/tmp/hdlm_license」です。 なお、ライセンスを更新しないでアップグレードインストールまたは再インストールを行う場合は、licensekeyfile キーと設定値を削除してください。	省略可 ^{※2}	省略可 ^{※2}	1024
licensekey ^{※1}	ライセンスキーファイルを次のコマンドで作成した場合、ファイル名を絶対パス名称で指定します。 # echo "ライセンスキー" > "ライセンスキーファイル" デフォルトは「/etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_key」です。 なお、ライセンスを更新しないでアップグレードインストールまたは再インストールを行う場合は、licensekey キーと設定値を削除してください。	省略可 ^{※2}	省略可 ^{※2}	1024
driver_config	HDLM ドライバのロードおよび HDLM デバイスの構成を行うかどうかを、次の値で指定します。	省略可	省略可	1

キー名	説明	定義の要否		指定できる長さ (文字)
		新規インストール	アップグレードインストールまたは再インストール	
	y: HDLM ドライバのロードおよび HDLM デバイスの構成を行います (デフォルト)。 n: HDLM ドライバのロードおよび HDLM デバイスの構成を行いません。			
restart	インストール終了後に、ホストの再起動を行うかどうかを、次の値で指定します。 y: 再起動します。 n: 再起動しません (デフォルト)。 IP-SAN 環境にインストールする場合は、「n」を指定してください。	省略可	省略可	1

(凡例)

省略可: キーと設定値を記載しない場合は、デフォルト値を使用します。

ただし、アップグレードインストールまたは再インストールの場合、licensekeyfile キーと licensekey キーは以前のライセンス情報が引き継がれます。

注※1

どちらにも値を指定しなかった場合は、次に示すファイルが順に読み込まれます。

- a. ライセンスキーファイル (/var/tmp/hdml_license)
- b. ライセンスキーが記載されたファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_key)

なお、新規インストールの場合でこれらのファイルが存在しないときは、KAPL09011-E および KAPL09212-E のメッセージが出力されます。

licensekey キーまたは licensekeyfile キーを指定した場合、指定したファイルは installhdml ユティリティの実行後に削除されません。どちらにも値を指定しなかった場合、ライセンスキーファイル (/var/tmp/hdml_license) またはライセンスキーが記載されたファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_key) は installhdml ユティリティの実行後に削除されます。

注※2

HDLM を新規インストールする場合、またはライセンスの有効期限が過ぎている状態でアップグレードインストールする場合は、ライセンスキーファイルを用意してください。

セクション[ENVIRONMENT_SETTINGS]

HDLM の設定情報を定義します。このセクションは省略できます。このセクションの定義を省略した場合、次のようになります。

- 新規インストールの場合は、次の「表 7-12 セクション[ENVIRONMENT_SETTINGS]のキー」に示す各キーのデフォルト値が適用されます。
- アップグレードまたは再インストールの場合は、以前の HDLM の設定情報が引き継がれます。

セクション[ENVIRONMENT_SETTINGS]で定義するキーの一覧を次の表に示します。

表 7-12 セクション[ENVIRONMENT_SETTINGS]のキー

キー名※1	説明※2	定義の要否		指定できる長さ (文字)
		新規インストール	アップグレードインストールまたは再インストール	
load_balance	ロードバランス機能を有効,または無効にするかを, 次の値で指定します。 on: 有効 (デフォルト) off: 無効	省略可	省略可	3
load_balance_type	ロードバランスのアルゴリズムを, 次の値で指定します。 rr: ラウンドロビン exrr: 拡張ラウンドロビン lio: 最少 I/O 数 exlio: 拡張最少 I/O 数 (デフォルト) lbk: 最少ブロック数 exlbk: 拡張最少ブロック数	省略可	省略可	5
load_balance_same_path_use_times	ロードバランスのアルゴリズムに, ラウンドロビン (rr), 最少 I/O 数 (lio), または最少ブロック数 (lbk) を適用する場合, I/O に同一のパスを使用する回数を指定します。 回数は, 「0~999999」の値を設定できます。デフォルトは「32」です。	省略可	省略可	6
lbex_usetimes_limit	ロードバランスのアルゴリズムに, 拡張ラウンドロビン (exrr), 拡張最少 I/O 数 (exlio), または拡張最少ブロック数 (exlbk) を適用する場合, シーケンシャル I/O に同一のパスを使用する回数を指定します。 回数は, 「0~999999」の値を設定できます。デフォルトは「100」です。	省略可	省略可	6
error_log_level	障害ログとして採取する障害情報のレベルを設定します。 レベルは, 「0~4」が設定できます。デフォルトは「3」です。	省略可	省略可	1
error_log_size	障害ログファイル(dlmmgr[1-16].log)のサイズを KB 単位で設定します。 サイズは, 「100~2000000」の値を設定できます。デフォルトは「9900」です。	省略可	省略可	7
error_log_number	障害ログファイル(dlmmgr[1-16].log)の数を設定します。 ファイル数は, 「2~16」の値を設定できます。デフォルトは「2」です。	省略可	省略可	2
trace_level	トレースの出力レベルを設定します。 レベルは, 「0~4」が設定できます。デフォルトは「0」です。	省略可	省略可	1
trace_file_size	トレースファイル(hdlmtr[1-64].log)のサイズを KB 単位で設定します。 サイズは, 「100~16000」の値を設定できます。デフォルトは「1000」です。	省略可	省略可	5
trace_file_number	トレースファイル(hdlmtr[1-64].log)の数を設定します。	省略可	省略可	2

キー名※1	説明※2	定義の要否		指定できる長さ(文字)
		新規インストール	アップグレードインストールまたは再インストール	
	ファイル数は、「2～64」の値を設定できます。デフォルトは「4」です。			
path_health_check	パスヘルスチェック機能を有効,または無効にするかを, 次の値で指定します。 on : 有効 (デフォルト) off : 無効	省略可	省略可	3
path_health_check_interval	パスヘルスチェックのチェック間隔を, 分単位で指定します。 チェック間隔は, 「1～1440」の値を設定できます。デフォルトは「30」です。	省略可	省略可	4
auto_failback	障害パスの自動フェイルバック機能を有効,または無効にするかを, 次の値で指定します。 on : 有効 off : 無効 (デフォルト)	省略可	省略可	3
auto_failback_interval	パスの状態確認の終了から, 次のパスの状態確認を開始するまでのチェック間隔を, 分単位で指定します。 チェック間隔は, 「1～1440」の値を設定できます。デフォルトは「1」です。	省略可	省略可	4
intermittent_error_monitor※3	間欠障害監視を有効,または無効にするかを, 次の値で指定します。 on : 有効 off : 無効 (デフォルト)	省略可	省略可	3
intermittent_error_monitor_interval	間欠障害の監視時間を分単位で指定します。 チェック間隔は, 「1～1440」の値を設定できます。 デフォルトは「30」です。	省略可	省略可	4
intermittent_error_monitor_number	障害の発生回数を指定します。 発生回数は, 「1～99」の値を設定できます。 デフォルトは「3」です。	省略可	省略可	2
dynamic_io_path_control	ダイナミック I/O パスコントロール機能を有効,または無効にするかを次の値で指定します。なお, この機能を設定するとストレージシステム単位またはLU 単位の設定はクリアされます。 on : 有効 off : 無効 (デフォルト)	省略可	省略可	3
dynamic_io_path_control_interval	ダイナミック I/O パスコントロール機能の, ストレージシステム側で行われるコントローラ切り替え情報の見直しチェック間隔を, 分単位で指定します。※4 チェック間隔は, 「1～1440」の値を設定できます。デフォルトは「10」です。	省略可	省略可	4

(凡例)

省略可 : キーと設定値を記載しない場合は, デフォルト値を使用します。

注※1

アップグレードインストールまたは再インストールする場合にキーが指定されていないときは、設定値が引き継がれます。

注※2

設定する機能の詳細については、「6.6 set 動作環境を設定する」を参照してください。

注※3

次に示す場合だけ、キーを指定できます。

- 新規インストールの場合
インストール情報設定ファイルの `auto_failback` キーに「on」を指定している。
- アップグレードインストールまたは再インストールの場合
インストール情報設定ファイルの `auto_failback` キーに「on」を指定しているか、またはインストール前の設定で、自動フェイルバック機能を有効にしている。

注※4

ダイナミック I/O パスコントロール機能の有効、または無効に関わらずチェック間隔を設定できます。

インストール情報設定ファイルの編集例を、次に示します。

```
[INSTALLATION_SETTINGS]
licensekeyfile=/var/tmp/hdlm_license
licensekey=/etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_key
driver_config=y
restart=n

[ENVIRONMENT_SETTINGS]
load_balance=on
load_balance_type=exlio
load_balance_same_path_use_times=32
lbex_usetimes_limit=100
error_log_level=3
error_log_size=9900
error_log_number=2
trace_level=0
trace_file_size=1000
trace_file_number=4
path_health_check=on
path_health_check_interval=30
# auto_failback=off
# auto_failback_interval=1
# intermittent_error_monitor=off
# intermittent_error_monitor_interval=210
# intermittent_error_monitor_number=3
# dynamic_io_path_control=off
# dynamic_io_path_control_interval=10
```

7.12 installux.sh HDLM 共通インストーラユーティリティ

インストール先の OS を判別して DVD-ROM から OS に対応した HDLM をインストールします。また、パラメタを指定することでサイレントインストールも実行できます。

このユーティリティを使ったインストールの手順については、「3.6 HDLM のインストール」を参照してください。

7.12.1 形式

HDLM インストール媒体のマウントポイント/`installux.sh` [-v | -h | [-f インストール情報設定ファイル]]

7.12.2 パラメタ

-v

インストールする *HDLM* のバージョンを表示します。

-h

`installux.sh` の形式を表示します。

-f インストール情報設定ファイル

HDLM をサイレントインストールする場合に指定します。このパラメタには、インストール情報設定ファイルを指定します。

インストール情報設定ファイルについては、「7.11.3 インストール情報設定ファイルの編集方法」を参照してください。

7.12.3 ログファイルについて

`installux.sh` ユティリティは、実行ログを `/var/tmp/hdlm_installux_sh.log` に出力します。 `hdlm_installux_sh.log` ファイルがすでにある場合、実行ログを追記します。

ユティリティを起動したときにログファイルのサイズが **1MB** 以上となっている場合、ファイル名を `hdlm_installux_sh2.log` に変更します。その後、`hdlm_installux_sh.log` ファイルを新規に作成して実行ログを出力します。

注意事項

`hdlm_installux_sh.log` ファイルおよび `hdlm_installux_sh2.log` ファイルは、*HDLM* をアンインストールしても削除されません。 `hdlm_installux_sh.log` ファイルおよび `hdlm_installux_sh2.log` ファイルが不要になったときは、手動で削除してください。

メッセージ

この章では、HDLM から出力されるメッセージを参照するときに知っておいてほしい情報について説明します。そのあと、HDLM の運用に関わるメッセージと対処を説明します。「8.15 Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントのリターンコード」では、Global Link Manager から HDLM へ要求があった場合に、HDLM が出力するリターンコードの意味と対処を説明します。

- 8.1 メッセージ一覧を参照するための前提知識
- 8.2 KAPL01001～KAPL02000
- 8.3 KAPL03001～KAPL04000
- 8.4 KAPL04001～KAPL05000
- 8.5 KAPL05001～KAPL06000
- 8.6 KAPL06001～KAPL07000
- 8.7 KAPL07001～KAPL08000
- 8.8 KAPL08001～KAPL09000
- 8.9 KAPL09001～KAPL10000
- 8.10 KAPL10001～KAPL11000
- 8.11 KAPL11001～KAPL12000
- 8.12 KAPL12001～KAPL13000
- 8.13 KAPL13001～KAPL14000
- 8.14 KAPL15001～KAPL16000
- 8.15 Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントのリターンコード

8.1 メッセージ一覧を参照するための前提知識

ここでは、「8.2 KAPL01001～KAPL02000」以降に記載するメッセージ一覧を参照するために必要な、次の情報について説明します。

- メッセージ ID の出力形式と意味
- メッセージおよびメッセージの説明で使用する用語
- メッセージの言語種別

上記の情報について、次に説明します。

8.1.1 メッセージ ID の出力形式と意味

各メッセージにはメッセージ ID が付いています。メッセージ ID の形式と意味を次の表に示します。

表 8-1 メッセージ ID (KAPLnnnnnI) の形式と意味

形式	意味
KAPL	HDLM のメッセージであることを示します。
nnnnn	モジュール別のメッセージの通し番号です。
I	メッセージのレベルです。 C : Critical E : Error W : Warning I : Information

8.1.2 メッセージおよびメッセージの説明で使用する用語

メッセージに表示される用語、およびメッセージの説明（意味、説明、対処）で使用する用語を次の表に示します。

表 8-2 メッセージとメッセージの説明で使用する用語

用語	意味
aa...aa	変数（1つのメッセージに2つ以上の変数がある場合、bb...bb, cc...cc のように続きます）
オペレーション名	コマンド名「dlnkmgr」に続けて入力する操作の種類

8.1.3 メッセージの言語種別

メッセージの言語種別は、出力元のコンポーネントごとに異なります。

それぞれのメッセージの節の冒頭で、言語種別を説明しています。また、言語種別を変更できるものについては、言語種別の変更方法についても説明しています。

コンポーネントや言語種別の設定に関係なく、syslog には英語のメッセージだけが出力されます。

syslog に出力されるメッセージがあるコンポーネントを次に示します。

- HDLM マネージャ
- HDLM ドライバ（フィルタ部）
- HDLM アラートドライバ
- HDLM 管理対象物

8.2 KAPL01001～KAPL02000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。出力されるメッセージの言語種別を変更したい場合は、次のように LANG 環境変数の値を変更してください。デフォルトでは、英語のメッセージが出力されます。

BourneAgain シェル、または Korn シェルの場合

```
LANG=LANG 環境変数の値
```

```
export LANG
```

C シェルの場合

```
setenv LANG LANG 環境変数の値
```

LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-3 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
KAPL01001-I	HDLM コマンドが正常終了しました。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> , 終了時刻 = <i>bb...bb</i> The HDLM command completed normally. Operation name = <i>aa...aa</i> , completion time = <i>bb...bb</i>	説明 コマンドが正常に終了しました。 <i>aa...aa</i> : clear, help, offline, online, set, または view <i>bb...bb</i> : 西暦/月/日 時:分:秒 対処 特にありません。
KAPL01002-I	HDLM コマンドを開始しました。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> The HDLM command started. Operation name = <i>aa...aa</i>	説明 コマンドが実行されました。 <i>aa...aa</i> : clear, offline, online, set, または view 対処 特にありません。
KAPL01003-W	オペレーション名が指定されていません。 No operation name is specified.	対処 オペレーション名を指定してから、再実行してください。
KAPL01004-W	オペレーション名が誤っています。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> The operation name is invalid. Operation name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 指定したオペレーション名 対処 HDLM コマンドの help を実行してオペレーション名を確認してから、再実行してください。help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL01005-W	パラメタが誤っています。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> , パラメタ = <i>bb...bb</i> A parameter is invalid. Operation name = <i>aa...aa</i> , parameter = <i>bb...bb</i>	説明 <i>aa...aa</i> : clear, set, online, offline, または view <i>bb...bb</i> : 指定したパラメタ 対処 HDLM コマンドの help オペレーション名を実行してパラメタを確認してから、再実行してください。 help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。
KAPL01006-W	必要なパラメタが指定されていません。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> A necessary parameter is not specified. Operation name = <i>aa...aa</i>	説明 指定したオペレーションに必要なパラメタがありません。 <i>aa...aa</i> : clear, set, offline, または view 対処 HDLM コマンドの help オペレーション名を実行してパラメタを確認し、正しいパラメタを指定してから、再実行してください。help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。
KAPL01007-W	パラメタが重複して指定されています。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> , パラメタ = <i>bb...bb</i> A duplicate parameter is specified. Operation name = <i>aa...aa</i> , parameter = <i>bb...bb</i>	説明 <i>aa...aa</i> : clear, offline, online, set, または view <i>bb...bb</i> : 重複しているパラメタ 対処 重複したパラメタを削除して、再実行してください。
KAPL01008-W	必要なパラメタ値が指定されていません。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> , パラメタ = <i>bb...bb</i> A necessary parameter value is not specified. Operation name = <i>aa...aa</i> , parameter = <i>bb...bb</i>	説明 <i>aa...aa</i> : offline, online, set, または view <i>bb...bb</i> : パラメタ名 対処 パラメタ値を指定して、再実行してください。
KAPL01009-W	パラメタ値が誤っています。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> , パラメタ = <i>bb...bb</i> , パラメタ値 = <i>cc...cc</i> , 有効値 = <i>dd...dd</i> A parameter value is invalid. Operation name = <i>aa...aa</i> , parameter = <i>bb...bb</i> , parameter value = <i>cc...cc</i> , Valid value = <i>dd...dd</i>	説明 <i>aa...aa</i> : offline, online, set, または view <i>bb...bb</i> : パラメタ名 <i>cc...cc</i> : 指定したパラメタ値 <i>dd...dd</i> : パラメタ値の指定可能範囲 対処 パラメタに正しい値を指定してから、再実行してください。
KAPL01012-E	HDLM マネージャとの接続に失敗しました。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> Could not connect the HDLM manager. Operation name = <i>aa...aa</i>	説明 view オペレーションの -sys -sfunc パラメタでは HDLM マネージャから情報を取得する必要がありますが、HDLM マネージャに対してアクセスできません。 <i>aa...aa</i> : view 対処

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		HDLM コマンドの view オペレーションを実行し、HDLM マネージャが起動されているか確認してください。起動されていない場合は、HDLM マネージャを起動してから HDLM コマンドを再実行してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01013-E	HDLM コマンド内部処理で障害が発生しました。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> , 詳細 = <i>bb...bb</i> An error occurred in internal processing of the HDLM command. Operation name = <i>aa...aa</i> details = <i>bb...bb</i>	説明 コマンド処理中にユーザ操作以外が原因と思われるエラーが発生しました。 <i>aa...aa</i> : clear, offline, online, set, または view <i>bb...bb</i> : エラーの発生した関数名, 処理内容 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL01014-W	HDLM コマンドを実行する権限がありません。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> No authority to execute the HDLM command. Operation name = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM コマンドの実行に必要な管理者権限がありません。 <i>aa...aa</i> : clear, offline, online, set, または view 対処 root 権限を持つユーザで実行してください。
KAPL01015-W	操作対象の HBA がありませんでした。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> The target HBA was not found. Operation name = <i>aa...aa</i>	説明 -hba パラメタで指定したポート番号、パス番号を持つパスが見つかりません。 <i>aa...aa</i> : offline または online 対処 HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path) を実行して、「PathName」に表示される値を確認してください。そのあと、操作する HBA ポートの「PathName」上位 2 つの値を指定して、再実行してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01016-W	操作対象の CHA ポートがありませんでした。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> The target CHA port was not found. Operation name = <i>aa...aa</i>	説明 -cha パラメタで必要な -pathid で示すパス ID が、HDLM の管理対象ではありません。 <i>aa...aa</i> : offline または online 対処 HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path) を実行して、「ChaPort」に表示される

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>値を確認してください。そのあと、操作する CHA ポートを通るパスのうち、どれかのバス管理 PATH_ID の値を指定して再実行してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。</p>
KAPL01018-W	<p>操作対象のデバイスがありませんでした。 オペレーション名 = aa...aa The target device was not found. Operation name = aa...aa</p>	<p>説明</p> <p>指定したホストデバイス名はありません。 aa...aa : view</p> <p>対処</p> <p>HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -path) を実行して、「HDevName」に表示される値を確認してください。そのあと、操作するホストデバイスの「HDevName」の値を指定して、再実行してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。</p>
KAPL01019-W	<p>操作対象のバスがありませんでした。オペレーション名 = aa...aa The target path was not found. Operation name = aa...aa</p>	<p>説明</p> <p>aa...aa : offline, online, または view</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ offline, online オペレーションの場合 バスの指定が間違っています。 ◦ view オペレーションの場合 HDLM の環境構築, または運用環境の構成変更が正しく完了していないため, バスが構成されていません。 <p>対処</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ offline, online オペレーションの場合 HDLM コマンドの view オペレーションで指定値を確認して, 再実行してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。 ◦ view オペレーションの場合 「3.」, または「4.6」を参照して, バスを構成してください。そのあともこのメッセージが出力される場合は, HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し, HDLM の購入元会社, または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL01021-E	<p>メモリ不足により HDLM コマンドが実行できません。 Cannot execute the HDLM command due to insufficient memory.</p>	<p>説明</p> <p>HDLM コマンド処理に必要なメモリが確保できませんでした。</p> <p>対処</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		不要なアプリケーションを終了させて空きメモリを増やし、再実行してください。
KAPL01023-W	デバイスに対する最後の稼働状態のパスは閉塞することができません。 The last Online path for the device cannot be placed Offline(C).	説明 offline オペレーションで指定したパスは該当する LU への最後のパスであるため、Offline(C)にはできません。 対処 HDLM コマンドの view オペレーションでパスの状態を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01024-W	同時に指定できないパラメタが指定されています。オペレーション名 = aa...aa, パラメタ = bb...bb The specified parameters cannot be specified at the same time. Operation name = aa...aa, parameters = bb...bb	説明 aa...aa : clear, offline, online, set, または view bb...bb : 同時に指定できないパラメタ 対処 HDLM コマンドの help オペレーション名を実行し、指定できるパラメタを確認してから、再実行してください。help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。
KAPL01036-E	パスの回復に失敗しました。PathID = aa...aa The Offline path cannot be placed online. PathID = aa...aa	説明 aa...aa : パス ID (10 進数) 対処 該当するパスの障害を取り除いたあと、再度コマンドを実行してください。
KAPL01039-W	HDLM コマンドの online オペレーションの処理中に、状態を Online にできないパスを検出しました。PathID = aa...aa。 online オペレーションの処理を継続しますか? [y/n]: During the online operation processing of the HDLM command, a path that cannot be placed in the Online status was detected. PathID = aa...aa Would you like to continue the processing of the online operation? [y/n]:	説明 マルチパスのオンライン処理を実行中に、Online 状態にできないパスがありました。該当するパスを無視して次のパスのオンライン処理を行う場合は「y」を、処理を中止する場合は「n」を入力してください。 aa...aa : パス ID (10 進数) 対処 ほかのパスに対して、HDLM コマンドの online オペレーションの処理を継続する場合は「y」を、そのまま中止する場合は「n」を入力してください。online オペレーションについては、「6.5」を参照してください。
KAPL01040-W	入力の値が不正です。再入力してください。 [y/n]: The entered value is invalid. Re-enter [y/n]:	説明 「y」または「n」の入力要求に対して「y」または「n」以外が入力されました。「y」または「n」のどちらかの値を入力してください。 対処 「y」または「n」を入力してください。
KAPL01041-E	入力の値が不正です。オペレーションを中断します。オペレーション名 = aa...aa	説明

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	The entered value is invalid. The operation stops. Operation name = <i>aa...aa</i>	<p>入力要求に対し、3回間違った入力を行ったため、コマンドの処理を中止します。</p> <p><i>aa...aa</i> : clear, offline, online, または set</p> <p>対処 入力する値を確認して、HDLM コマンドを再実行してください。</p>
KAPL01044-W	<p>パラメタ値が重複して指定されています。オペレーション名 = <i>aa...aa</i>, パラメタ = <i>bb...bb</i>, パラメタ値 = <i>cc...cc</i></p> <p>A duplicate parameter value is specified. Operation name = <i>aa...aa</i>, parameter = <i>bb...bb</i>, parameter value = <i>cc...cc</i></p>	<p>説明 <i>aa...aa</i> : view <i>bb...bb</i> : パラメタ名 <i>cc...cc</i> : 重複しているパラメタ値</p> <p>対処 重複したパラメタ値を削除して、再実行してください。</p>
KAPL01045-W	<p>パラメタ値が多過ぎます。オペレーション名 = <i>aa...aa</i>, パラメタ = <i>bb...bb</i>, パラメタ値 = <i>cc...cc</i></p> <p>Too many parameter values are specified. Operation name = <i>aa...aa</i>, parameter = <i>bb...bb</i>, parameter value = <i>cc...cc</i></p>	<p>説明 <i>aa...aa</i> : offline, online, set, または view <i>bb...bb</i> : パラメタ名 <i>cc...cc</i> : パラメタ値</p> <p>対処 HDLM コマンドの help オペレーション名を実行してパラメタ値を確認してから、再実行してください。help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。</p>
KAPL01048-W	<p>ヘルプ情報が存在しません。オペレーション名 = <i>aa...aa</i></p> <p>Help information cannot be found. Operation name = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明 指定したオペレーションは HDLM コマンドのオペレーションではありません。</p> <p><i>aa...aa</i> : 指定オペレーション名</p> <p>対処 HDLM コマンドの help オペレーションでオペレーション名を確認してから再実行してください。help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。</p>
KAPL01049-I	<p>オペレーションを開始します。オペレーション名 = <i>aa...aa</i>。よろしいですか? [y/n]:</p> <p>Would you like to execute the operation? Operation name = <i>aa...aa</i> [y/n]:</p>	<p>説明 clear または set オペレーションを開始します。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。</p> <p><i>aa...aa</i> : clear または set</p> <p>対処 オペレーションを実行する場合は「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。clear オペレーションについては、「6.2」を参照してください。set オペレーションについては、「6.6」を参照してください。</p>
KAPL01050-I	<p>指定されたバスを Online にします。よろしいですか? [y/n]:</p>	<p>説明 online オペレーションを開始します。続行してよい場合は「y」を、続</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	The currently selected paths will be changed to the Online status. Is this OK? [y/n]:	行しない場合は「n」を入力してください。 対処 指定したパスを Online 状態にする場合は「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。online オペレーションについては、「6.5」を参照してください。
KAPL01051-I	パスが指定されていないので、Offline(C),Offline(E),Online(E)のパスを Online にします。よろしいですか? [y/n]: Because no path has been selected among the currently displayed paths, the paths in the Offline(C), Offline(E), and Online(E) statuses will be changed to the Online status. Is this OK? [y/n]:	説明 online オペレーションでパスを選択するパラメタが指定されていないので、すべてのパスを Online にします。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。 対処 Offline(C), Offline(E), Online(E)のパスを Online にする場合は「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。実行する前に必ず HDLM コマンドの view オペレーションでパスの状態を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。online オペレーションについては、「6.5」を参照してください。
KAPL01052-I	指定されたパスを Offline(C)にします。よろしいですか? [y/n]: The currently selected paths will be changed to the Offline(C) status. Is this OK? [y/n]:	説明 offline オペレーションを開始します。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。 対処 指定したパスを Offline(C)にする場合は「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。offline オペレーションについては、「6.4」を参照してください。
KAPL01053-I	指定されたパスが Offline(C)になってもよい場合は y を入力してください。そうでない場合は n を入力してください。 [y/n]: If you are sure that there would be no problem when the path is placed in the Offline(C) status, enter y. Otherwise, enter n. [y/n]:	説明 offline オペレーションを開始します。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。 対処 指定したパスを Offline(C)にする場合は「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。offline オペレーションについては、「6.4」を参照してください。
KAPL01054-W	HDLM コマンドの offline オペレーションの処理中に、状態を Offline(C)にできないパスを検出しました。PathID = aa...aa。offline オペレーションの処理を継続しますか? [y/n]: During the offline operation processing of the HDLM command, a path that	説明 マルチパスのオフライン処理中に、Offline(C)にできないパスがありました。該当するパスを無視して次のパスのオフライン処理を行う場合は「y」を、処理を中止する場合は「n」を入力してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	cannot be placed in the Offline(C) status was detected. PathID = aa...aa Would you like to continue the processing of the offline operation? [y/n]:	<p>aa...aa : パス ID (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>ほかのパスに対して、HDLM コマンドの offline オペレーションの処理を継続する場合は「y」を、そのまま中止する場合は「n」を入力してください。offline オペレーションについては、「6.4」を参照してください。</p>
KAPL01055-I	<p>指定された aa...aa を通る全てのパスを Offline(C)にします。よろしいですか? [y/n]:</p> <p>All the paths which pass the specified aa...aa will be changed to the Offline(C) status. Is this OK? [y/n]:</p>	<p>説明</p> <p>-hba または -cha パラメタが指定されたため、複数のパスをまとめて Offline(C)状態にします。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。</p> <p>aa...aa : CHA port または HBA</p> <p>対処</p> <p>指定した対象物を通るすべてのパスを Offline(C)にするには「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。</p>
KAPL01056-I	<p>指定された aa...aa を通る全てのパスが Offline(C)になってもよい場合は y を入力してください。そうでない場合は n を入力してください。 [y/n]:</p> <p>If you are sure that there would be no problem when all the paths which pass the specified aa...aa are placed in the Offline(C) status, enter y. Otherwise, enter n. [y/n]:</p>	<p>説明</p> <p>パスを Offline(C)にしてよいかどうかを再度確認します。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。</p> <p>aa...aa : CHA port または HBA</p> <p>対処</p> <p>指定した対象物を通るすべてのパスを Offline(C)にするには「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。</p>
KAPL01057-I	<p>指定された aa...aa を通る全てのパスを Online にします。よろしいですか? [y/n]:</p> <p>All the paths which pass the specified aa...aa will be changed to the Online status. Is this OK? [y/n]:</p>	<p>説明</p> <p>-hba または -cha パラメタが指定されたため、複数のパスをまとめて Online 状態にします。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。</p> <p>aa...aa : CHA port または HBA</p> <p>対処</p> <p>指定した対象物を通るすべてのパスを Online するには「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。</p>
KAPL01058-W	<p>不要なパラメタ値が指定されました。オペレーション名 = aa...aa, パラメタ = bb...bb, パラメタ値 = cc...cc</p> <p>The specified parameter value is not needed. Operation name = aa...aa, parameter = bb...bb, parameter value = cc...cc</p>	<p>説明</p> <p>値を必要としないパラメタにパラメタ値が指定されました。</p> <p>aa...aa : clear, offline, online, set, または view</p> <p>bb...bb : パラメタ名</p> <p>cc...cc : パラメタ値</p> <p>対処</p> <p>HDLM コマンドの help オペレーション名を実行してパラメタおよびパラメタ値を確認してから、再実行してください。help オペレーション</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		については、「6.3」を参照してください。
KAPL01059-W	<p>パラメタ <i>aa...aa</i> にパラメタ値 <i>bb...bb</i> を指定した場合、同時にパラメタ <i>cc...cc</i> は指定できません。オペレーション名 = <i>dd...dd</i></p> <p>Cannot specify the parameter <i>cc...cc</i> at the same time if you specify parameter <i>aa...aa</i> and parameter value <i>bb...bb</i>.</p> <p>Operation name = <i>dd...dd</i></p>	<p>説明</p> <p>パラメタ値とほかのパラメタの指定が矛盾しています。</p> <p><i>aa...aa</i> : パラメタ名</p> <p><i>bb...bb</i> : パラメタ値</p> <p><i>cc...cc</i> : パラメタ名</p> <p><i>dd...dd</i> : view または set</p> <p>対処</p> <p>HDLM コマンドの help オペレーション名を実行してパラメタおよびパラメタ値を確認してから、再実行してください。help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。</p>
KAPL01060-I	<p>ユーザの指定により、オペレーションの処理を中断しました。オペレーション名 = <i>aa...aa</i></p> <p>The user terminated the operation.</p> <p>Operation name = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明</p> <p>確認に対し「n」が入力されたため、コマンドの処理を中止します。</p> <p><i>aa...aa</i> : online, offline, set, または clear</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL01061-I	<p><i>aa...aa</i> 本のパスを <i>bb...bb</i> にしました。失敗したパス = <i>cc...cc</i> 本。オペレーション名 = <i>dd...dd</i></p> <p><i>aa...aa</i> path(s) were successfully placed</p> <p><i>bb...bb</i>; <i>cc...cc</i> path(s) were not.</p> <p>Operation name = <i>dd...dd</i></p>	<p>説明</p> <p>online オペレーションまたは offline オペレーションで処理したパス数を示します。</p> <p><i>aa...aa</i> : online オペレーションまたは offline オペレーションが成功したパス数 (10 進数)</p> <p><i>bb...bb</i> : Online または Offline(C)</p> <p><i>cc...cc</i> : online オペレーションまたは offline オペレーションに失敗したパス数 (10 進数)</p> <p><i>dd...dd</i> : online または offline</p> <p>対処</p> <p>特にありません。online オペレーションについては、「6.5」を参照してください。offline オペレーションについては、「6.4」を参照してください。</p>
KAPL01063-I	<p>操作対象のパスは既に <i>aa...aa</i> です。</p> <p>The target path(s) are already <i>aa...aa</i>.</p>	<p>説明</p> <p>online オペレーションまたは offline オペレーションを実行した結果、指定されたパスはすでに Online または Offline(C) となっています。</p> <p><i>aa...aa</i> : Online または Offline(C)</p> <p>対処</p> <p>HDLM コマンドの view オペレーションでパスの状態を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。online オペレーションについては、「6.5」を参照してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		offline オペレーションについては、「6.4」を参照してください。
KAPL01068-I	ライセンスキーを入力して下さい： Enter a license key:	説明 ライセンスを更新します。ライセンスキーを入力してください。 対処 特にありません。
KAPL01069-W	入力されたライセンスキーが不正です。 The entered license key is invalid.	説明 入力したライセンスキーが不正です。再入力してください。 対処 正しいライセンスキーを入力してください。
KAPL01070-E	入力されたライセンスキーが不正です。ライセンスの更新を中断します。 The entered license key is invalid. Renewal of the license key will now stop.	説明 3回不正なライセンスキーが入力されたため、ライセンス更新を中断します。 対処 正しいライセンスキーを取得したあと、再実行してください。
KAPL01071-I	永久ライセンスがインストールされました。 The permanent license was installed.	説明 ライセンスが永久ライセンスに更新されました。 対処 特にありません。
KAPL01072-I	非常ライセンスがインストールされました。期限満了日はaa...aa です。 The emergency license was installed. The license expires on aa...aa .	説明 ライセンスが非常ライセンスに更新されました。 aa...aa : 西暦 (4桁) /月 (01~12) /日 (01~31) 対処 期限満了日までに、永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL01073-E	一時ライセンスの期限が切れています。 The temporary license expired.	説明 一時ライセンスの期限が切れています。永久ライセンスをインストールしてください。 対処 永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL01074-E	非常ライセンスの期限が切れています。 The emergency license expired.	説明 非常ライセンスの期限が切れています。永久ライセンスをインストールしてください。 対処 永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL01075-E	HDLM 内で重大エラーが発生しました。システム環境が不正です。 A fatal error occurred in HDLM. The system environment is invalid.	説明 ライセンス情報ファイルがありません。 対処 HDLM を再インストールしてください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL01076-I	永久ライセンスがインストールされています。 The permanent license has been installed.	説明 すでに永久ライセンスがインストールされているので、ライセンスのインストールは必要ありません。 対処 特にありません。
KAPL01079-W	自動フェイルバック機能が無効のため、間欠障害監視機能の設定ができません。 The intermittent error monitoring function cannot be set up because automatic failback is disabled.	説明 自動フェイルバック機能が無効のため、間欠障害監視は設定できません。 対処 自動フェイルバック機能を有効に設定してから、間欠障害監視を設定してください。
KAPL01080-W	障害監視時間、および障害発生回数が自動フェイルバックチェック間隔と矛盾しています。 The error monitoring interval and the number of times that the error is to occur conflict with the automatic failback checking interval.	説明 自動フェイルバックで指定したチェック間隔と、間欠障害監視で指定した障害監視時間および障害発生回数の値では、間欠障害を検出できません。 対処 間欠障害監視の障害監視時間は、「自動フェイルバックで指定するチェック間隔×間欠障害監視で指定する障害発生回数」以上に設定してください。
KAPL01081-E	ライセンスキーファイルが不正です。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> The license key file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ライセンスキーファイルの形式に不正があります。 <i>aa...aa</i> : /var/tmp/hdml_license 対処 正しいライセンスキーファイルを所定のディレクトリに格納してから、再実行してください。 /var/tmp/hdml_license
KAPL01082-E	インストール可能なライセンスキーがライセンスキーファイル内にありません。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> There is no installable license key in the license key file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ライセンスキーファイル中に、HDLM のインストールが可能なライセンスキーがありません。 <i>aa...aa</i> : /var/tmp/hdml_license 対処 ライセンスキーファイルが正しいか確認してから、再実行してください。 /var/tmp/hdml_license
KAPL01083-I	ライセンスキーファイルがありません。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> There is no license key file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ライセンスキーファイルが所定のディレクトリにありません。 <i>aa...aa</i> : /var/tmp/hdml_license 対処 ライセンスキーの入力を促すメッセージが表示されるので、ライセンスキーを入力してください。 または、HDLM コマンドを中断し、正しいライセンスキーファイルを所定のディレクトリに格納してから、

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		HDLM コマンドを再実行してください。 /var/tmp/hdlm_license
KAPL01084-W	ライセンスキーファイルの削除に失敗しました。ファイル名 = <i>aa...aa</i> An attempt to delete the license key file has failed. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /var/tmp/hdlm_license 対処 ライセンスキーファイルが存在している場合は、削除してください。 /var/tmp/hdlm_license
KAPL01088-W	同時に指定できないパラメタ値が指定されています。オペレーション名 = <i>aa...aa</i> , パラメタ = <i>bb...bb</i> , パラメタ値 = <i>cc...cc</i> The specified parameter values cannot be specified at the same time. Operation name = <i>aa...aa</i> , parameter = <i>bb...bb</i> , parameter values = <i>cc...cc</i>	説明 <i>aa...aa</i> : view <i>bb...bb</i> : パラメタ名 <i>cc...cc</i> : 同時に指定できないパラメタ値 対処 HDLM コマンドの help オペレーション名を実行し、指定できるパラメタ値を確認してから、再実行してください。help オペレーションについては、「6.3」を参照してください。
KAPL01089-E	HDLM コマンドの set -lic オペレーションまたは、更新インストール時におけるライセンスの更新が同時に実行されました。 One of the following was executed at the same time as an HDLM command set -lic operation: another set -lic operation, or an update of the license for an update installation.	対処 HDLM コマンドの view -sys -lic オペレーションでライセンスを確認し、必要に応じて、再度 HDLM コマンドの set -lic オペレーションを実行してください。同じエラーメッセージが表示される場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 なお、次の操作は行わないでください。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ HDLM コマンドの set -lic オペレーションの同時実行 ◦ HDLM コマンドの set -lic オペレーションとアップグレードまたは再インストール時のライセンスの更新の同時実行
KAPL01095-E	HDLM のバージョン情報の取得に失敗しました。詳細 = <i>aa...aa</i> An attempt to acquire the HDLM version information has failed. details = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : エラーの発生要因コード 対処 再実行してください。繰り返し同じエラーが発生する場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL01096-E	Service Pack のバージョン情報の取得に失敗しました。詳細 = <i>aa...aa</i> An attempt to acquire the Service Pack version information has failed. details = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : エラーの発生要因コード 対処 再実行してください。繰り返し同じエラーが発生する場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		(DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL01097-W	既存のトレースファイルが全て削除されます。よろしいですか? [y/n]: All the current trace files will be deleted. Is this OK? [y/n]	説明 トレースファイルサイズ、またはファイル数を現在の設定値より縮小する場合は、既存のトレースファイルがすべて削除されます。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。 対処 操作を続行する場合は「y」を入力してください。続行しない場合は「n」を入力してください。
KAPL01100-I	aa...aa	説明 実行したコマンドラインを示します。 aa...aa : 実行したコマンド 対処 特にありません。
KAPL01107-I	オペレーションを開始します。オペレーション名 = set。本オペレーションを実行すると、LU 個別に設定されているロードバランス種別が無効になります。よろしいですか? [y/n]: The load balancing type specified for individual LUs will become invalid when this operation is executed. Do you want to execute the operation anyway? Operation name = set [y/n]:	対処 システムのロードバランス種別を設定するには「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。
KAPL01111-E	インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致しません。 The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version.	説明 インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。 対処 現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。
KAPL01112-E	HDLM ドライバとの接続に失敗しました。オペレーション名 = aa...aa An attempt to connect to the HDLM driver has failed. Operation name = aa...aa	説明 実行した HDLM コマンドのオペレーションは HDLM ドライバから情報を取得する必要がありますが、HDLM ドライバにアクセスできません。 aa...aa : clear, offline, online, set, または view 対処 HDLM の構成設定を未実行の場合は、HDLM の構成設定を行ってください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		上記に当てはまらない場合、または、上記の対処の実施後も繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL01113-E	HDLM のファイルが不正です。ファイル名 = <i>aa...aa</i> The HDLM file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。 <i>aa...aa</i> : 異常が見つかったファイル名 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL01114-W	監査ログ設定ファイルがありません。マネージャを再起動した後、"dlnkmgr view -sys -audlog" コマンドを実行して、設定を確認してください。 The audit log configuration file does not exist. Restart the HDLM Manager, and execute the "dlnkmgr view -sys -audlog" command and check the setting.	説明 監査ログ設定ファイルが存在しません。 対処 マネージャを再起動したあと、dlnkmgr view -sys -audlog コマンドを実行してください。そのあと、必要に応じて dlnkmgr set -audlog コマンドまたは dlnkmgr set -audfac コマンドで設定してください。
KAPL01115-W	監査ログ設定ファイルがオープンできません。"dlnkmgr view -sys -audlog" コマンドを実行して、結果が正常に表示されるか確認してください。 The audit log configuration file cannot be opened. Execute the "dlnkmgr view -sys -audlog" command and check whether a normal result is displayed.	説明 監査ログ設定ファイルがオープンできません。 対処 dlnkmgr view -sys -audlog コマンドを実行した結果、正常に表示されない場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL01116-W	監査ログ設定ファイルが不正です。マネージャを再起動した後、"dlnkmgr view -sys -audlog" コマンドを実行して設定を確認してください。 The audit log configuration file is invalid. Restart the HDLM Manager, and execute the "dlnkmgr view -sys -audlog" command and check the setting.	説明 監査ログ設定ファイルが不正です。 対処 マネージャを再起動したあと、dlnkmgr view -sys -audlog コマンドを実行してください。そのあと、必要に応じて dlnkmgr set -audlog コマンドまたは dlnkmgr set -audfac コマンドで設定してください。
KAPL01117-W	監査ログ設定ファイルの読み込み処理でエラーが発生しました。 An error occurred during processing to read the audit log configuration file.	説明 監査ログ設定ファイルの読み込み中に内部エラーが発生しました。 対処 HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
KAPL01118-W	監査ログの出力処理でエラーが発生しました。 An error occurred during processing to output the audit log configuration file.	説明 監査ログの出力中に内部パラメタエラーが発生しました。 対処 HDLM の購入元会社, または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL01119-W	監査ログの出力処理でエラーが発生しました。 An error occurred during processing to output the audit log configuration file.	説明 監査ログの出力中に内部エラーが発生しました。 対処 HDLM の購入元会社, または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL01120-W	ストレージシステムのモデル ID を表示できませんでした。 詳細 = <i>aa...aa, bb...bb</i> A storage system model ID could not be displayed. Details = <i>aa...aa, bb...bb</i>	説明 ストレージシステムのモデル ID を表示できませんでした。 <i>aa...aa</i> : ストレージ認識情報 <i>bb...bb</i> : エラーコード 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し, HDLM の購入元会社, または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては, 「7.2」を参照してください。
KAPL01122-W	ファイルがありません。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> The file does not exist. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : / etc/.DynamicLinkManager/ Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL01123-W	ファイルに読み取り権限がありません。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> You do not have read permission for the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : / etc/.DynamicLinkManager/ Path00 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し, HDLM の購入元会社, または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては, 「7.2」を参照してください。
KAPL01124-W	ファイルの内容が不正です。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> The file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : / etc/.DynamicLinkManager/ Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL01125-E	ディレクトリがありません。 ディレクトリ名 = <i>aa...aa</i>	説明

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	The directory does not exist. Directory name = <i>aa...aa</i>	<i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先パス、 /HDLM インストール先パス/lib 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL01126-E	実行ファイルがありません。ファイル名 = <i>aa...aa</i> The execution file does not exist. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先パス/bin/.dlnkmgr_exe 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL01127-E	ファイルに実行権限がありません。ファイル名 = <i>aa...aa</i> You do not have execute permission for the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先パス/bin/.dlnkmgr_exe 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL01128-W	HNTRLib2 の初期化に失敗しました。プロセス別トレース情報は採取されません。HNTRLib2 initialization failed. Trace per process information cannot be collected.	HNTRLib2 の初期化に失敗しました。プロセス別トレース情報は採取されません。HNTRLib2 initialization failed. Trace per process information cannot be collected.
KAPL01154-W	すでにシステム単位で(<i>aa...aa</i>)設定済みです。 The dynamic I/O path control function is already set to <i>aa...aa</i> for the system.	説明 <i>aa...aa</i> : on または off 対処 HDLM コマンドの view オペレーションでホスト単位、ストレージシステム単位、および LU 単位の設定を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01155-W	すでにストレージ単位で(<i>aa...aa</i>)設定済みです。 The dynamic I/O path control function is already set to <i>aa...aa</i> for storage.	説明 <i>aa...aa</i> : on または off 対処 HDLM コマンドの view オペレーションでストレージシステム単位の設定を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01156-I	ストレージ単位で(<i>aa...aa</i>)設定しました。 The dynamic I/O path control function was set to <i>aa...aa</i> for storage.	説明 <i>aa...aa</i> : on または off 対処 HDLM コマンドの view オペレーションでストレージシステム単位および LU 単位の設定を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01157-I	システム単位で(<i>aa...aa</i>)設定しました。	説明 <i>aa...aa</i> : on または off

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	The dynamic I/O path control function was set to <i>aa...aa</i> for the system.	対処 HDLM コマンドの view オペレーションでホスト単位, ストレージシステム単位, および LU 単位の設定を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01158-E	指定したストレージは動的パス制御が適用できないストレージ装置です。 Dynamic I/O path control cannot be applied to the specified storage.	対処 HDLM コマンドの view オペレーションでパス ID を確認してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。
KAPL01159-I	<i>aa...aa</i> パスを追加しました。終了時刻 = <i>bb...bb</i> Paths were added. (number of paths added = <i>aa...aa</i> , completion time = <i>bb...bb</i>)	説明 add オペレーションは成功しました。 <i>aa...aa</i> : 追加したパス数 <i>bb...bb</i> : 西暦(4桁)/月/日 時:分:秒 対処 HDLM コマンドの view オペレーションで追加されたパス情報を確認してください。
KAPL01160-W	パス構成は変更されませんでした。 The path configuration was not changed.	説明 add オペレーション実行時 パスが追加されませんでした。 delete オペレーション実行時 パスが削除されませんでした。 対処 add オペレーション実行時 ・OS コマンドを実行し, OS にパス追加が認識されているかどうか確認してください。 ・HDLM コマンドの view オペレーションでパスがすでに追加済みではないかどうか確認してください。 delete オペレーション実行時 ・削除対象のパスが切断されているかどうか確認してください。 ・HDLM コマンドの view オペレーションでパスが削除済みかどうか確認してください。
KAPL01161-I	パス構成変更を実行します。よろしいですか? [y/n] : This operation will change the path configuration. Do you want to continue? [y/n]:	説明 add オペレーションまたは delete オペレーションでパス構成変更の実行を確認します。 対処 パス構成変更を実行する場合は「y」、実行を取り消す場合は「n」を入力してください。
KAPL01162-I	パスを追加しました。パス ID = <i>aa...aa</i> , ストレージ = <i>bb...bb</i> , iLU = <i>cc...cc</i> A path was added. (path ID = <i>aa...aa</i> , storage = <i>bb...bb</i> , iLU = <i>cc...cc</i>)	説明 add オペレーションを実行したあと, 追加したパスの情報を表示します。 <i>aa...aa</i> : 追加したパスのパス ID

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>bb...bb</i>: 追加したパスが接続されているストレージ(ベンダ ID.プロダクト ID.シリアル番号)</p> <p><i>cc...cc</i>: 追加したパスが接続されている LU 番号</p> <p>対処</p> <p>HDLM コマンドの view オペレーションで追加されたパス情報を確認してください。</p>
KAPL01163-E	<p>パスの構成変更が失敗しました。詳細 = <i>aa...aa</i></p> <p>The path configuration change failed. (details = <i>aa...aa</i>)</p>	<p>説明</p> <p>add オペレーションまたは delete オペレーションの実行が失敗しました。</p> <p><i>aa...aa</i>: 発生したエラーの内容を示すコード</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL01164-I	<p><i>aa...aa</i> パスを削除しました。終了時刻 = <i>bb...bb</i></p> <p>Paths were deleted. (number of paths deleted = <i>aa...aa</i>, completion time = <i>bb...bb</i>)</p>	<p>説明</p> <p>delete オペレーションは成功しました。</p> <p><i>aa...aa</i>: 削除したパス数</p> <p><i>bb...bb</i>: 西暦(4桁)/月/日 時:分:秒</p> <p>対処</p> <p>HDLM コマンドの view オペレーションでパスが削除されたことを確認してください。</p>
KAPL01165-I	<p>パスを削除しました。パス ID = <i>aa...aa</i>, ストレージ = <i>bb...bb</i>, iLU = <i>cc...cc</i></p> <p>A path was deleted. (path ID = <i>aa...aa</i>, storage = <i>bb...bb</i>, iLU = <i>cc...cc</i>)</p>	<p>説明</p> <p>delete オペレーションを実行したあと、削除したパスの情報を表示します。</p> <p><i>aa...aa</i>: 削除したパスのパス ID</p> <p><i>bb...bb</i>: 削除したパスが接続されていたストレージ(ベンダ ID.プロダクト ID.シリアル番号)</p> <p><i>cc...cc</i>: 削除したパスが接続されていた LU 番号</p> <p>対処</p> <p>HDLM コマンドの view オペレーションでパスが削除されたことを確認してください。</p>
KAPL01166-I	<p>オペレーションを開始します。オペレーション名 = <i>set</i>。本オペレーションを実行すると、LU 個別に設定されている同一パス使用回数が無効になります。よろしいですか? [y/n]:</p> <p>If you execute this operation, the specified number of times that the same path can be used for individual LUs will become invalid. Do you want to execute the operation anyway? Operation name = <i>set</i> [y/n]:</p>	<p>説明</p> <p>LU 単位に設定された同一パス使用回数設定が無効になります。続行してよい場合は「y」を、続行しない場合は「n」を入力してください。</p> <p>対処</p> <p>システムの同一パス使用回数を設定する場合は「y」を入力してください。中止する場合は「n」を入力してください。</p>

8.3 KAPL03001～KAPL04000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。デフォルトでは、英語のメッセージが出力されます。メッセージの言語種別は、LANG 環境変数の値に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-4 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
KAPL03001-I	HDLM A P I 情報 - <i>aa...aa</i> HDLM API information - <i>aa...aa</i>	説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : API トレース情報 対処 特にありません。
KAPL03003-E	HDLM A P I エラー情報 - <i>aa...aa</i> HDLM API Error information - <i>aa...aa</i>	説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : API トレース (エラー) 情報 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL03004-C	HDLM A P I 内で重大エラーが発生しました。 - <i>aa...aa</i> A critical error occurred in the HDLM API. (<i>aa...aa</i>)	説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : API トレース (エラー) 情報 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL03006-E	HDLM ドライバのアクセスでエラーが発生しました。 - <i>aa...aa</i> An access to the HDLM driver causes an error. (<i>aa...aa</i>)	説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : API トレース (エラー) 情報 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡して

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		ください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL03007-E	HDLM マネージャとの通信処理中にエラーが発生しました。 - <i>aa...aa</i> An error occurred during communication with the HDLM manager. (<i>aa...aa</i>)	説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : API トレース (エラー) 情報 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL03008-E	HDLM アラートドライバのログ入力処理でエラーが発生しました。 - <i>aa...aa</i> An error occurred during log input to the HDLM alert driver. (<i>aa...aa</i>)	説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : API トレース (エラー) 情報 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL03999-E	予期しない障害が発生しました。 An unexpected error occurred.	説明 HDLM 内部で使用するモジュールのバージョンに矛盾があります。 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。

8.4 KAPL04001～KAPL05000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。出力されるメッセージの言語種別は、LANG 環境変数の設定に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-5 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL04001-I	HDLM マネージャが起動しました。 HDLM manager started.	対処 特にありません。
KAPL04002-E	HDLM マネージャの起動に失敗しました。 Could not start the HDLM manager.	説明 HDLM マネージャが正しく動作する環境ではないために HDLM マネージャの起動に失敗しました。 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL04003-E	スタートアップパラメタが不当です。 The startup parameter is invalid.	説明 HDLM マネージャが内部的に保持しているパラメタにエラーがあります。 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL04004-I	HDLM マネージャを終了します。 HDLM manager will now terminate.	対処 特にありません。
KAPL04008-E	オプション定義ファイル(aa...aa)がオープンできません。 Cannot open the option definition file (aa...aa).	説明 HDLM マネージャが正常に起動できませんでした (オプション定義ファイルのオープンに失敗しました)。 aa...aa : オプション定義ファイル名 対処 ファイルをほかのプログラムで使用していないか (テキストエディタなどで開いていないか)、ファイルを間違っって削除していないか確認してください。
KAPL04009-E	オプション定義が不当です。 The option definition is invalid.	説明 HDLM マネージャが正常に起動できませんでした (オプション定義ファイル中の定義が不当です)。 対処 このメッセージのあとに KAPL04033-W メッセージが出力されている場合は、HDLM コマンドの view -sys -sfunc オペレーションを実行して、オプション設定を確認してください。設定値がデフォルト値に戻っているオプションは、set オペレーションで再設定してください。 KAPL04033-W メッセージが出力されていない場合は、HDLM マネージャを再起動してください。 対処しても同じエラーが発生する場合は、HDLM を再インストールしてください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。set オペレーシ

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		ンについては、「6.6」を参照してください。
KAPL04010-E	障害ログファイルのオープンに失敗しました。 Could not open the error log file.	説明 HDLM マネージャが正常に起動できませんでした (障害ログファイル (/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmmgr[1-16].log) のオープンに失敗しました)。 対処 ファイルをほかのプログラムで使用していないか (テキストエディタなどで開いていないか)、ファイルを間違えて削除していないか確認してください。
KAPL04011-E	障害ログファイルの出力に失敗しました。 Could not output the error log file.	説明 障害ログファイル (/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmmgr[1-16].log) へのログ情報の出力に失敗しました。 対処 ディスクに空き容量があるか確認してください。
KAPL04012-E	通信パイプの作成に失敗しました。RC = aa...aa Could not create a communication pipe. RC = aa...aa	説明 HDLM マネージャが正常に起動できませんでした (HDLM コマンドとの通信に使用するパイプファイルの作成に失敗しました)。 aa...aa : OS のエラーコード (10 進数) 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL04013-E	通信パイプからの入力に失敗しました。 RC = aa...aa Input is impossible via the communication pipe. RC = aa...aa	説明 HDLM コマンドとの通信時、パイプファイルからのデータ入力に失敗しました。 aa...aa : OS のエラーコード (10 進数) 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL04014-E	通信パイプへの出力に失敗しました。 RC = aa...aa Output is impossible via the communication pipe. RC = aa...aa	説明 HDLM コマンドとの通信時、パイプファイルへのデータ出力に失敗しました。 aa...aa : OS のエラーコード (10 進数) 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡して

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>ください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL04019-E	<p>障害情報取得に失敗しました。RC = <i>aa...aa</i> Could not collect the error information. RC = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明 アラートドライバからログ情報を入力できませんでした。 <i>aa...aa</i> : API のリターンコード (10 進数)</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL04021-I	<p>HDLM マネージャ情報 - <i>aa...aa</i> HDLM manager information - <i>aa...aa</i></p>	<p>説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : HDLM マネージャトレース情報</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL04022-W	<p>HDLM マネージャ警告情報 - <i>aa...aa</i> HDLM manager warning information - <i>aa...aa</i></p>	<p>説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : HDLM マネージャトレース (警告) 情報</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL04023-E	<p>HDLM マネージャエラー情報 - <i>aa...aa</i> HDLM manager error information - <i>aa...aa</i></p>	<p>説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : HDLM マネージャトレース (エラー) 情報</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL04024-C	<p>HDLM マネージャ内で重大エラーが発生しました。 - <i>aa...aa</i> A critical error occurred in the HDLM manager. (<i>aa...aa</i>)</p>	<p>説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : HDLM マネージャトレース (エラー) 情報</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL04025-C	<p>HDLM マネージャでメモリ不足が発生しました。 A memory shortage occurred in the HDLM manager.</p>	<p>説明 HDLM マネージャの処理に必要なメモリを確保できませんでした。</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		不要なアプリケーションを終了させ、空きメモリを増やすか、ホストを再起動してください。
KAPL04026-I	一時ライセンスが有効です。一時ライセンス満了まであと <i>aa...aa</i> 日です (<i>bb...bb</i>)。 The temporary license is valid. The license expires in <i>aa...aa</i> days on (<i>bb...bb</i>).	説明 <i>aa...aa</i> : 有効日数 <i>bb...bb</i> : 期限満了日 西暦 (4桁) /月 (01~12) /日 (01~31) 対処 期限満了日までに、永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL04027-I	非常ライセンスが有効です。非常ライセンス満了まであと <i>aa...aa</i> 日です (<i>bb...bb</i>)。 The emergency license is valid. The license expires in <i>aa...aa</i> days on (<i>bb...bb</i>).	説明 <i>aa...aa</i> : 有効日数 <i>bb...bb</i> : 期限満了日 西暦 (4桁) /月 (01~12) /日 (01~31) 対処 期限満了日までに、永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL04028-E	一時ライセンスの期限が切れています。 The temporary license expired.	対処 永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL04029-E	非常ライセンスの期限が切れています。 The emergency license expired.	対処 永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL04030-E	一時ライセンスの期限が切れました。 The temporary license has already expired.	対処 永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL04031-E	非常ライセンスの期限が切れました。 The emergency license has already expired.	対処 永久ライセンスをインストールしてください。
KAPL04032-C	HDLM 内で重大エラーが発生しました。システム環境が不正です。 A fatal error occurred in HDLM. The system environment is invalid.	説明 HDLM 構成ファイルの一部がありません。 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL04033-W	オプション定義ファイルを再作成しました。 The option definition file was re-created.	説明 オプション定義ファイルをデフォルト値で再作成しました。一部のオプションが読めた場合は指定値が設定されています。 対処 デフォルト以外のオプションについては、set オペレーションでオプションを再設定してください。set オペレーションについては、「6.6」を参照してください。
KAPL04034-E	オプション定義ファイルの作成に失敗しました。 An attempt to create the option definition file has failed.	説明 オプション定義ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/dlmmgr.xml) をデフォルト値で再作成しようとしたが、失敗しました。 対処 不要ファイルを削除して、ファイルシステムの空き容量を確保してください。ディレクトリの書き込み権限、ファイルの書き込み権限を確認してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL04035-I	ヘルスチェックを開始します。全パス数 = <i>aa...aa</i> The path health check will now start. Total number of paths = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 全パス数 対処 特にありません。
KAPL04036-I	<i>aa...aa</i> パスのヘルスチェックを実行しました。異常パス数 = <i>bb...bb</i> The path health check for the path <i>aa...aa</i> was executed. Number of error paths = <i>bb...bb</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ヘルスチェック対象パス数 <i>bb...bb</i> : ヘルスチェックが失敗したパス数 対処 特にありません。
KAPL04042-I	HDLM SNMP TRAP 情報 - <i>aa...aa</i> HDLM SNMP TRAP information - <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : Start または Stop 対処 特にありません。
KAPL04045-I	HDLM SNMP TRAP を送信しました。 Trap ID = <i>aa...aa</i> , IP アドレス = <i>bb...bb</i> , ポート番号 = <i>cc...cc</i> , Community = <i>dd...dd</i> , Trap データ = <i>ee...ee</i> HDLM SNMP TRAP was sent. Trap ID = <i>aa...aa</i> , IP Address = <i>bb...bb</i> , Port Number = <i>cc...cc</i> , Community = <i>dd...dd</i> , Trap Data = <i>ee...ee</i>	説明 <i>aa...aa</i> : Trap ID <i>bb...bb</i> : Trap 送信先の IP アドレス <i>cc...cc</i> : Trap 送信先のポート番号 <i>dd...dd</i> : Trap に付与した Community 名 <i>ee...ee</i> : 送信データ 対処 特にありません。
KAPL04047-W	ファイルがありません。ファイル名 = <i>aa...aa</i> The file does not exist. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL04048-W	ファイルに読み取り権限がありません。ファイル名 = <i>aa...aa</i> You do not have read permission for the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/Path00 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL04049-W	ファイルの内容が不正です。ファイル名 = <i>aa...aa</i> The file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL04050-E	ディレクトリがありません。ディレクトリ名 = <i>aa...aa</i> The directory does not exist. Directory name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先パス、/ HDLM インストール先パス/lib 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL04051-E	実行ファイルがありません。ファイル名 = <i>aa...aa</i> The execution file does not exist. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先パス/ bin/.dlnmgr_exe 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL04052-E	ファイルに実行権限がありません。 ファイル名 = <i>aa...aa</i>	説明

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	You do not have execute permission for the file. File name = <i>aa...aa</i>	<i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先パス / bin/.dlnkmgr_exe 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL04053-W	オプション定義ファイルを作業ファイルから回復しました。 The option definition file was recovered from a work file.	対処 HDLM コマンドの view オペレーション (dlnkmgr view -sys) を実行して、設定値が回復されているかどうかを確認してください。設定値が回復されていない場合は、HDLM コマンドの set オペレーションを実行して設定値を回復してください。view オペレーションについては、「6.7」を参照してください。set オペレーションについては、「6.6」を参照してください。
KAPL04054-I	オーナーコントローラの見直しを開始します。対象 LU 数 = <i>aa...aa</i> The owner controller will now be revised. (number of LUs = <i>aa...aa</i>)	説明 <i>aa...aa</i> : 見直し対象の LU 数 対処 特にありません。
KAPL04055-I	オーナーコントローラの見直しを終了しました。変更 LU 数 = <i>aa...aa</i> The owner controller was revised. (number of changed LUs = <i>aa...aa</i>)	説明 <i>aa...aa</i> : オーナーコントローラの変更が行われた LU 数 対処 特にありません。
KAPL04056-W	Online 状態のパスが無いため見直し処理は行いませんでした。LU = <i>aa...aa</i> The owner controller cannot be revised because no paths are in the Online status. (LU = <i>aa...aa</i>)	説明 <i>aa...aa</i> : 見直し処理が行われなかった LU の ID (シリアル番号+iLUN) 対処 パス障害を回復し、Online 状態にしてください。または、該当 LU を追従対象外として設定してください。

8.5 KAPL05001～KAPL06000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。デフォルトでは、英語のメッセージが出力されます。メッセージの言語種別は、LANG 環境変数の値に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-6 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL05003-I	Disk(aa...aa),Partition(bb...bb)への HDLM ドライバ(フィルタ部)のアタッチに成功しました。 The HDLM driver (filter component) was successfully attached to Disk (aa...aa), Partition (bb...bb).	説明 コアロジックへ Disk (aa...aa), Partition (bb...bb) のパス登録に成功しました。 aa...aa : ディスクの通番 (10 進数) bb...bb : パーティションの通番 (10 進数) 対処 特にありません。
KAPL05008-E	メモリ確保に失敗しました。 (aa...aa:bb...bb) DLMgetras ユティリティを実行して、障害情報を購入元会社または保守会社に連絡してください。 Could not allocate memory. (aa...aa:bb...bb) Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company. Refer to the HDLM User's Guide for instructions how to execute the DLMgetras utility.	説明 aa...aa : ファイル ID, 行番号 (16 進数) bb...bb : メモリ確保サイズ (16 進数) 対処 HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (dlmsetopt) を実行して、メモリ確保のリトライ回数を増やしてください。dlmsetopt ユティリティについては、「7.7」を参照してください。システムにメモリの増設を行ってください。不要なプロセスを停止させてください。問題が解決しない場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL05011-E	Disk(aa...aa),Partition(bb...bb)への HDLM ドライバ(フィルタ部)のアタッチに失敗しました。(cc...cc:dd...dd) DLMgetras ユティリティを実行して、障害情報を購入元会社または保守会社に連絡してください。 Could not attach the HDLM driver (filter component) to Disk (aa...aa), Partition (bb...bb). (cc...cc:dd...dd) Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company. Refer to the HDLM User's Guide for instructions how to execute the DLMgetras utility.	説明 コアロジックへ Disk, Partition のパス登録に失敗しました。 aa...aa : ディスクの通番 (10 進数) bb...bb : パーティションの通番 (10 進数) cc...cc : エラーコード (16 進数) dd...dd : HDLM フィルタドライバ管理テーブルアドレス (16 進数) 対処 HDLM ドライバが正常に開始しているか確認してください。開始していないか、エラー状態の場合、エラーと詳細コードを HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL05014-I	デバイスオブジェクト(aa...aa)をパス(bb...bb)として登録しました。 The device object (aa...aa) was registered as the path (bb...bb).	説明 HDLM フィルタドライバのアタッチに成功し、パスとして登録しました。 aa...aa : フィルタドライバ管理テーブルアドレス (16 進数) bb...bb : パス ID (16 進数) 対処 特にありません。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
KAPL05018-W	<p>パス(aa...aa)での FO 処理が失敗しました。(bb...bb'cc...cc)aa...aa のパス接続状態を確認してください。パス接続状態に問題が無い場合、DLMgetras ユティリティを実行して、障害情報を購入元会社または保守会社に連絡してください。</p> <p>The FO processing in the path (aa...aa) failed. (bb...bb'cc...cc) Check the connection status of the path aa...aa. If there is no problem with the connection status, execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company. Refer to the HDLM User's Guide for instructions how to execute the DLMgetras utility.</p>	<p>説明</p> <p>パスのフェイルオーバー処理が失敗しました。</p> <p>aa...aa : FO 失敗したコアロジックパス識別子 (16 進数)</p> <p>bb...bb : エラーコード (16 進数)</p> <p>cc...cc : 0 固定</p> <p>対処</p> <p>処理中の I/O は破棄されます。パスの状態を確認して適切な処置をしてください。パス接続状態に問題がない場合、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL05019-I	<p>パス(aa...aa)での FO 処理が完了しました。I/O 要求はパス(bb...bb)で処理されました。</p> <p>The FO processing in the path (aa...aa) finished. The I/O request was processed in the path (bb...bb).</p>	<p>説明</p> <p>パスのフェイルオーバー処理が完了しました。I/O 要求はパスで処理されました。</p> <p>aa...aa : パス ID (16 進数)</p> <p>bb...bb : パス ID (16 進数)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL05020-I	<p>IOCTL(aa...aa)の処理を開始します。Processing of IOCTL(aa...aa) will now start.</p>	<p>説明</p> <p>IOCTL 要求を受け付けました。</p> <p>aa...aa : IOCTL コード (16 進数)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL05021-I	<p>IOCTL(aa...aa)の処理は正常に完了しました。Processing of IOCTL(aa...aa) completed normally.</p>	<p>説明</p> <p>要求された IOCTL に対応する処理が成功しました。</p> <p>aa...aa : IOCTL コード (16 進数)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL05023-E	<p>IOCTL(aa...aa)の処理に失敗しました。(bb...bb'cc...cc) HDLM マネージャや HDLM コマンドのメッセージを確認して、対処してください。適切な対処方法が不明な場合は、DLMgetras ユティリティを実行して、障害情報を購入元会社または保守会社に連絡してください。Could not process the IOCTL(aa...aa). (bb...bb'cc...cc) Check the message of the HDLM command or the HDLM manager, and then take the appropriate action. If you do not know the appropriate action, execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company. Refer to the HDLM User's Guide for instructions how to execute the DLMgetras utility.</p>	<p>説明</p> <p>要求された IOCTL に対応する処理が失敗しました。</p> <p>aa...aa : IOCTL コード (16 進数)</p> <p>bb...bb : エラーコード (16 進数)</p> <p>cc...cc : I/O 発行元のスレッド ID (16 進数)</p> <p>対処</p> <p>次の確認をしてください。確認後、問題が解決しない場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> root 権限のあるユーザでコマンドを実行しているか確認してください。 メモリが不足しています。不要なプロセスを停止させてください。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>c. デバイス管理用ファイル (/dev/dlm/sddlmfdrv0) に IOCTL を発行していないか確認してください。アプリケーションへの影響は、IOCTL 発行元のアプリケーションで確認してください。</p>
KAPL05701-I	<p>HDLM version <i>aa...aa</i> Build <i>bb...bb</i> <i>cc...cc dd...dd ee...ee</i></p>	<p>説明</p> <p>HDLM のバージョンを示しています。 <i>aa...aa</i> : HDLM バージョン (文字列) <i>bb...bb</i> : HDLM ビルド番号 (10 進数) <i>cc...cc</i> : 月日西暦 (文字列) <i>dd...dd</i> : 時分秒 (文字列) <i>ee...ee</i> : 内部コード (問題発生時の調査に必要な情報) (16 進数)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL05704-E	<p>HDLM デバイスの LDEV 情報が変更されました。HCTL = <i>aa...aa bb...bb cc...cc dd...dd</i></p> <p>The LDEV information for an HDLM device has changed. HCTL value = <i>aa...aa bb...bb cc...cc dd...dd</i></p>	<p>説明</p> <p>出力された HCTL に該当する HDLM デバイスの LDEV 情報が変更されました。LDEV 情報 (ストレージシステムの機種名, シリアル番号, および LU 番号をピリオドで区切った文字列)</p> <p><i>aa...aa</i> : Host ID (ホストポート番号) (10 進数) <i>bb...bb</i> : Channel 番号 (バス番号) (10 進数) <i>cc...cc</i> : Target ID (ターゲット ID) (10 進数) <i>dd...dd</i> : Lun (ホスト LU 番号) (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>次の手順を実行してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> エラーメッセージに出力された SCSI デバイスの HCTL の値を記録してください。 手順 a で記録した HCTL の値を基に、次のコマンドの実行結果から HDLM デバイスを特定してください。 <pre># dlmcfgmgr -v</pre> 次のコマンドを使って手順 b で特定した HDLM デバイスの登録を解除してください。 <pre># dlmcfgmgr -u <i>HDLM</i> デバイスの論理デバイスファイル名</pre> 次のコマンドを使って SCSI デバイスを HDLM に再構成してください。 <pre># dlmcfgmgr -r</pre>
KAPL05708-E	<p>メモリ確保のリトライを <i>aa...aa</i> 回実行しましたが失敗しました。 (<i>bb...bb cc...cc</i>)</p> <p>The system retried to allocate memory <i>aa...aa</i> times, but the retries failed. (<i>bb...bb cc...cc</i>)</p>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : メモリ確保リトライ回数 (10 進数) <i>bb...bb</i> : ファイル ID, 行番号 (16 進数) <i>cc...cc</i> : メモリ確保サイズ (16 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ (dlmsetopt) を実行してメモリ確</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		保のリトライ回数を増やしてください。 d1msetopt ユティリティについては、「7.7」を参照してください。システムにメモリの増設を行ってください。不要なプロセスを停止させてください。 問題が解決しない場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL05709-I	メモリ確保のリトライ回数は <i>aa...aa</i> です。 The system will retry to allocate memory <i>aa...aa</i> times.	説明 <i>aa...aa</i> : メモリ確保リトライ回数 (10 進数) 対処 特にありません。
KAPL05711-I	SCSI INQUIRY のタイムアウト値とリトライ回数を設定しました。タイムアウト値 = <i>aa...aa</i> , リトライ回数 = <i>bb...bb</i> The timeout value and retry count of SCSI INQUIRY has been set. (timeout value = <i>aa...aa</i> , retry count = <i>bb...bb</i>)	説明 <i>aa...aa</i> : SCSI INQUIRY のタイムアウト値 (10 進数) <i>bb...bb</i> : SCSI INQUIRY のリトライ回数 (10 進数) 対処 特にありません。
KAPL05713-I	Reservation Key の登録状態の確認を開始します。 The registration status of the reservation key will now be checked.	説明 Reservation Key の登録状態の確認を開始します。 対処 特にありません。
KAPL05714-I	Reservation Key の登録状態の確認を実行しました。 The registration status of the reservation key was checked.	説明 Reservation Key の登録状態の確認を実行しました。 対処 特にありません。
KAPL05819-I	保守用トレースデータです。 <i>aa...aa bb...bb cc...cc dd...dd</i> Data for maintenance: <i>aa...aa bb...bb cc...cc dd...dd</i> .	説明 フィルタドライバが保守用に出力しているメッセージです。 <i>aa...aa</i> : 保守情報 (16 進数) <i>bb...bb</i> : 保守情報 (16 進数) <i>cc...cc</i> : 保守情報 (16 進数) <i>dd...dd</i> : 保守情報 (16 進数) 対処 特にありません。

8.6 KAPL06001～KAPL07000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。デフォルトでは、英語のメッセージが出力されます。メッセージの言語種別は、LANG 環境変数の値に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-7 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
KAPL06004-E	メモリ確保に失敗しました。 (aa...aa:bb...bb) Could not allocate memory. (aa...aa:bb...bb)	説明 アラート情報を保存するメモリの確保に失敗しました。 aa...aa : プログラムライン (16 進数) bb...bb : メモリ確保サイズ (16 進数) 対処 HDLM ドライバが正常に開始しているか確認してください。開始していないか、エラー状態の場合、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL06007-I	IOCTL(aa...aa)の処理を開始します。 IOCTL processing (aa...aa) will now start.	説明 IOCTL 要求を受け付けました。 aa...aa : IOCTL コード (16 進数) 対処 特にありません。
KAPL06008-I	IOCTL(aa...aa)の処理は正常に完了しました。 IOCTL processing (aa...aa) completed normally.	説明 IOCTL 要求を正常に処理しました。 aa...aa : IOCTL コード (16 進数) 対処 特にありません。
KAPL06009-I	不正な IOCTL(aa...aa)を受け取りました。処理はキャンセルされます。 Invalid IOCTL(aa...aa) was received. The processing is canceled.	説明 不正な IOCTL コードでアラートドライバへ要求されました。 aa...aa : IOCTL コード (16 進数) 対処 特にありません。
KAPL06010-E	IOCTL(aa...aa)の処理に失敗しました。 (bb...bb:cc...cc) Could not process the IOCTL(aa...aa). (bb...bb:cc...cc)	説明 IOCTL 要求は正常に処理されませんでした。 aa...aa : IOCTL コード (16 進数) bb...bb : エラーコード (16 進数) cc...cc : 0 固定 対処 HDLM コマンドや HDLM マネージャのメッセージを確認して、対処してください。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>い。適切な対処方法が不明な場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL06013-E	<p>ログ情報をログバッファに書き込めませんでした。(aa...aa'bb...bb) Could not write log information into the log buffer. (aa...aa'bb...bb)</p>	<p>説明 フィルタドライバからのログ情報が、メモリ確保の失敗のため、ログバッファに書き込まれないで破棄されました。 aa...aa : メッセージコード (16 進数) bb...bb : バッファサイズ (16 進数)</p> <p>対処 ほかにエラーが発生していないか確認してください。書き込みに失敗したログ情報は破棄されます。ほかにエラーが発生していない場合、実メモリサイズを見直してください。 実メモリが不足している場合は、実メモリを増設してください。 実メモリが不足していない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL06014-E	<p>緊急情報を緊急情報バッファに書き込めませんでした。(aa...aa'bb...bb) Could not write emergency information into the emergency information buffer. (aa...aa'bb...bb)</p>	<p>説明 フィルタドライバからの緊急情報がメモリ確保の失敗によって、緊急情報バッファに書き込まれないで破棄されました。 aa...aa : メッセージコード (16 進数) bb...bb : バッファサイズ (16 進数)</p> <p>対処 ほかにエラーが発生していないか確認してください。書き込みに失敗した情報は破棄されます。ほかにエラーが発生していない場合、実メモリサイズを見直してください。 実メモリが不足している場合は、実メモリを増設してください。 実メモリが不足していない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL06100-E	<p>The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently booting kernel version.</p>	<p>説明 インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致していません。そのため、アラートドライバをロードすることができません。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>HDLM をインストールしたときのカーネルと異なるカーネルで OS を起動しているおそれがあります。</p> <p>対処 現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。</p>
KAPL06101-E	The HDLM file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	<p>説明 HDLM の処理に必要なファイルがありません。または、ファイルの内容が不正です。そのため、アラートドライバをロードすることができません。</p> <p><i>aa...aa</i> : 異常が見つかったファイル名</p> <p>対処 HDLM を再インストールしてください。</p>

8.7 KAPL07001～KAPL08000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。デフォルトでは、英語のメッセージが出力されます。メッセージの言語種別は、LANG 環境変数の値に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-8 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL07819-I	<p>保守用トレースデータです。: <i>aa...aa</i> <i>bb...bb cc...cc dd...dd</i> Data for maintenance: <i>aa...aa bb...bb</i> <i>cc...cc dd...dd</i>.</p>	<p>説明 コアロジックが保守用に出力しているメッセージです。</p> <p><i>aa...aa</i> : 詳細情報 1 (10 進数) <i>bb...bb</i> : コアロジック内部の関数番号 (10 進数) <i>cc...cc</i> : 詳細情報 2 (10 進数) <i>dd...dd</i> : 詳細情報 3 (10 進数)</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL07824-I	<p>バス(<i>aa...aa</i>)に接続されている LU の オーナー・コントローラを(<i>bb...bb</i>)に変更 しました。</p>	<p>説明 <i>aa...aa</i> で示すバス ID に接続されている LU のオーナーコントローラを変更しまし た。</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	The owner controller of the LU connected to the path (<i>aa...aa</i>) was changed to (<i>bb...bb</i>).	<i>aa...aa</i> : 変更した LU のパス ID (view - path の PathID と同じ) (10 進数) <i>bb...bb</i> : 変更後のオーナコントローラの ID (16 進数) 対処 特にありません。
KAPL07825-I	パス(<i>aa...aa</i>)に接続されている LU の オーナ・コアを(<i>bb...bb</i>)に変更しました。 The owner core of the LU connected to the path (<i>aa...aa</i>) was changed to (<i>bb...bb</i>).	説明 <i>aa...aa</i> で示すパス ID に接続されている LU のオーナ・コアを変更しました。 <i>aa...aa</i> : 変更した LU のパス ID (view - path の PathID と同じ) (10 進数) <i>bb...bb</i> : 変更後のオーナ・コアの ID (16 進数) 対処 特にありません。

8.8 KAPL08001～KAPL09000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。デフォルトでは、英語のメッセージが出力されます。メッセージの言語種別は、LANG 環境変数の値に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-9 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
KAPL08019-E	パス(<i>aa...aa</i>)が障害(<i>bb...bb</i>)を検知しました。 <i>(cc...cc)</i> The path (<i>aa...aa</i>) detected an error (<i>bb...bb</i>). <i>(cc...cc)</i>	説明 断線などによって、パスで障害が発生しました。 <i>aa...aa</i> : パス識別子 (16 進数) <i>bb...bb</i> : エラーコード (16 進数) <ul style="list-style-type: none"> バスヘルスチェック、または online オペレーションによって障害が検出された場合 0x000F0000 が表示されます。 I/O エラーによって障害が検出された場合 OS のエラーコードが表示されます。 <i>cc...cc</i> : 0x00000000 固定 対処 障害を検知したバスを確認してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL08022-E	<p>パスの異常が発生しました。</p> <p>ErrorCode = <i>aa...aa</i>, PathID = <i>bb...bb</i>, PathName = <i>cc...cc dd...dd ee...ee ff...ff</i>, DNum = <i>gg...gg</i>, HDevName = <i>hh...hh</i></p> <p>A path error occurred. ErrorCode = <i>aa...aa</i>, PathID = <i>bb...bb</i>, PathName = <i>cc...cc dd...dd ee...ee ff...ff</i>, DNum = <i>gg...gg</i>, HDevName = <i>hh...hh</i></p>	<p>説明</p> <p>物理的または論理的なパス障害が発生しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : エラーコード (16 進数)</p> <ul style="list-style-type: none"> パスヘルスチェック, または online オペレーションによって障害が検出された場合 0x000F0000 が表示されます。 I/O エラーによって障害が検出された場合 OS のエラーコードが表示されます。 <p><i>bb...bb</i> : パス ID (view -path の PathID と同じ) (10 進数)</p> <p><i>cc...cc</i> : ホストポート番号 (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>dd...dd</i> : パス番号 (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>ee...ee</i> : ターゲット ID (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>ff...ff</i> : ホスト LU 番号 (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>gg...gg</i> : Dev 番号 (view -path の DNum と同じ) (10 進数)</p> <p><i>hh...hh</i> : ホストデバイス名 (view -path の HDevName と同じ)</p> <p>対処</p> <p>パスで障害が発生したおそれがあります。「5.3」を参照して、メッセージ中に表示されたパスを稼働状態にしてください。PathName のターゲット ID の値が、0000000000000100 以上で表示される Offline (E) のパスは、online コマンドもしくは、自動フェイルバック機能では稼働状態になりません。このパスをオンラインにするためには、dlmcfmgr ユティリティ (dlmcfmgr -r) を実行してください。</p>
KAPL08023-I	<p>パスを回復しました。PathID = <i>aa...aa</i>, PathName = <i>bb...bb cc...cc dd...dd ee...ee</i>, DNum = <i>ff...ff</i>, HDevName = <i>gg...gg</i></p> <p>A path was recovered. PathID = <i>aa...aa</i>, PathName = <i>bb...bb cc...cc dd...dd ee...ee</i>, DNum = <i>ff...ff</i>, HDevName = <i>gg...gg</i></p>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : パス ID (view -path の PathID と同じ) (10 進数)</p> <p><i>bb...bb</i> : ホストポート番号 (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>cc...cc</i> : パス番号 (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>dd...dd</i> : ターゲット ID (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>ee...ee</i> : ホスト LU 番号 (view -path の PathName と同じ) (16 進数)</p> <p><i>ff...ff</i> : Dev 番号 (view -path の DNum と同じ) (10 進数)</p> <p><i>gg...gg</i> : ホストデバイス名 (view -path の HDevName と同じ)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL08026-E	<p>LU への全てのパスで障害が発生しています。PathID = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	An error occurred on all the paths of the LU. PathID = aa...aa	<p>断線などによって、1つのLUに対する最後のパスで障害が発生しました。 aa...aa:パス ID (view -path の PathID と同じ) (10 進数)</p> <p>対処 LU に対するすべてのパスで障害が発生しました。「5.3」を参照して、メッセージ中に表示されたパス、および該当 LU に対するそのほかのパスを稼働状態にしてください。</p>
KAPL08027-E	<p>パスを自動フェイルバック対象から除外しました。PathID = aa...aa</p> <p>A path was excluded from the items subject to automatic failback. PathID = aa...aa</p>	<p>説明 該当パスに間欠障害が発生していると判断したため、自動フェイルバックの対象外としました。 aa...aa:パス ID (view -path の PathID と同じ) (10 進数)</p> <p>対処 間欠障害が発生しています。パスで障害が発生したおそれがあります。「5.3」を参照して、メッセージ中に表示されたパスを稼働状態にしてください。</p>
KAPL08032-I	<p>パスを回復しました。PathID = aa...aa</p> <p>A path was recovered. (PathID = aa...aa)</p>	<p>説明 パスが Online になりました。 aa...aa:パス ID (view -path の PathID と同じ) (10 進数)</p> <p>対処 特にありません。</p>

8.9 KAPL09001～KAPL10000

この節で説明するメッセージの言語種別は、英語だけです。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
KAPL09001-E	There is no system management permission. Login with root permission and re-install HDLM.	<p>説明 カレントユーザに管理者権限がないため、HDLM をインストールできません。</p> <p>対処 root 権限を持つユーザで再度インストールしてください。</p>
KAPL09003-E	Cannot install in this system. Install HDLM on a supported OS.	<p>説明 このシステムには HDLM をインストールできません。</p> <p>対処 「3.1.1」を参照して、サポート対象の OS にインストールしてください。</p>
KAPL09005-E	Could not stop the HDLM manager. Stop it manually, and then try the installation program or the remove program again.	<p>説明 HDLM マネージャサービスの停止に失敗しました。</p> <p>対処 手動で HDLM マネージャを停止してください。その後、インストールプログラム、またはアンインストールプログラムを再実行してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL09011-E	Cannot find a license key file /etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_key.	<p>説明</p> <p>指定されたディレクトリにライセンスキーファイル/etc/opt/DynamicLinkManager/dlm.lic_keyがありません。</p> <p>対処</p> <p>ライセンスキーファイルを作成して再度実行してください。</p>
KAPL09013-E	Some HDLM drivers could not be removed.	<p>説明</p> <p>幾つかの HDLM ドライバの削除に失敗しました。</p> <p>HDLM のアップグレードインストール、再インストール、またはアンインストール時に、HDLM デバイスが使用中であったため HDLM ドライバの削除に失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM デバイスがマウントされていないか確認し、マウントされている場合はマウント解除後、再度 HDLM ドライバを削除してください。dlmcfmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL09019-E	An attempt to cancel the registration of the bundle PP name of Hitachi Network Objectplaza Trace Library 2 failed. Remove Hitachi Network Objectplaza Trace Library 2 by referring to HDLM User's Guide section "Removing Hitachi Network Objectplaza Trace Library (HNTRLib2)".	<p>説明</p> <p>Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2) のバンドル PP 名称の登録解除に失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>手でバンドル PP 名称の登録解除と HNTRLib2 のアンインストールを行ってください。再度、バンドル PP 名称の登録解除と HNTRLib2 のアンインストールに失敗した場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09020-E	An attempt to remove Hitachi Network Objectplaza Trace Library 2 failed.	<p>説明</p> <p>HNTRLib2 のアンインストールに失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>手で HNTRLib2 のアンインストールを行ってください。再度、アンインストールに失敗した場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09021-E	An attempt to register the bundle PP name of Hitachi Network Objectplaza Trace Library 2 failed.	<p>説明</p> <p>HNTRLib2 の PP 名称登録に失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09023-E	A file or directory related to HDLM could not be found. Re-install HDLM.	<p>説明</p> <p>HDLM に関連するファイルのうち、HDLM 以外の Hitachi Command Suite 製品のディレクトリにコピーする対象のファイルがありません。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>対処</p> <p>HDLM を再度インストールしてください。</p> <p>SUSE LINUX Enterprise Server 11 の場合、nfs-client パッケージがインストールされているか確認してください。未インストールの場合は、nfs-client パッケージをインストール後に HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL09024-E	An attempt to copy a file or directory related to HDLM has failed. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明</p> <p>HDLM 以外の Hitachi Command Suite 製品のディレクトリに HDLM に関連するファイルをコピーする処理が失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再度インストールしてください。</p>
KAPL09026-I	Hitachi Network Objectplaza Trace Library 2 wasn't removed because it was being used for other products.	<p>説明</p> <p>Hitachi Network Objectplaza トレース 共通ライブラリ (HNTRLlib2) はほかの製品に利用されているためアンインストールされませんでした。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL09028-E	An attempt to install Hitachi Network Objectplaza Trace Library 2 failed.	<p>説明</p> <p>Hitachi Network Objectplaza トレース 共通ライブラリ (HNTRLlib2) のインストールに失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09035-E	The HDLM driver could not be loaded. Execute the dlmstart utility. For details on the dlmstart utility, refer to the HDLM User's Guide section "dlmstart (Utility for Starting HDLM)".	<p>説明</p> <p>HDLM ドライバをロードできませんでした。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 起動ユーティリティ(dlmstart)を実行してください。dlmstart ユティリティについては「7.8」を参照してください。</p>
KAPL09036-E	The HDLM manager could not be started. Execute the /etc/init.d/DLMManager command with the start parameter to start the HDLM manager.	<p>説明</p> <p>HDLM マネージャを起動できませんでした。</p> <p>対処</p> <p>/etc/init.d/DLMManager start を実行し、HDLM マネージャを起動してください。</p>
KAPL09037-E	The status of the HDLM manager could not be checked. If the HDLM manager does not start, execute the /etc/init.d/DLMManager command with the start parameter to start the HDLM manager.	<p>説明</p> <p>HDLM マネージャの状態をチェックできませんでした。</p> <p>HDLM マネージャの状態の取得に失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM マネージャが起動していない場合は、/etc/init.d/DLMManager start</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		を実行し、HDLM マネージャを起動してください。
KAPL09038-E	The HDLM configuration could not be deleted.	<p>説明</p> <p>HDLM 管理対象のデバイスが使用されているため、HDLM 構成の削除に失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 管理対象のデバイスを使用しているアプリケーションを停止し、マウントしている HDLM 管理対象のデバイスをアンマウントしてください。そのあと、再度アンインストールを実行してください。</p>
KAPL09039-E	The HDLM devices could not be configured. Execute the HDLM-configuration definition utility (dlmcfmgr) with the -r parameter specified. For details on the dlmcfmgr utility, refer to the HDLM User's Guide section "dlmcfmgr (HDLM-Configuration Definition Utility)".	<p>説明</p> <p>HDLM デバイスを構成できませんでした。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) を -r パラメタを指定して実行してください。dlmcfmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL09040-E	The file could not be edited. File name = aa...aa	<p>説明</p> <p>ファイルの編集に失敗しました。 aa...aa : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>File name で示すファイルが編集可能か確認してください。</p>
KAPL09043-I	The installation of aa...aa completed successfully.	<p>説明</p> <p>HDLM がインストールされました。 aa...aa : インストールファイル名</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL09044-I	The remove of aa...aa completed successfully.	<p>説明</p> <p>HDLM がアンインストールされました。 aa...aa : アンインストールファイル名</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL09045-E	An attempt to create a file or directory related to HDLM has failed. Make sure that sufficient disk space exists, and then re-install HDLM.	<p>説明</p> <p>HDLM の関連ファイルまたはディレクトリの作成に失敗したため、インストールを実行できませんでした。</p> <p>対処</p> <p>ディスク容量が十分にあるか確認してから、再度インストールを実行してください。</p>
KAPL09046-E	The RPM file is not in the correct path. Confirm that the installation medium is correct, and then re-install HDLM.	<p>説明</p> <p>RPM ファイルが適切なパスにないため、インストールを実行できませんでした。</p> <p>対処</p> <p>インストール媒体を確認後、再度インストールを実行してください。</p>
KAPL09047-E	Downgrading from aa...aa to bb...bb is not supported.	<p>説明</p> <p>aa...aa から bb...bb へのダウングレードは未サポートです。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>aa...aa</i> : HDLM のバージョン <i>bb...bb</i> : HDLM のバージョン</p> <p>対処 HDLM をアンインストールしてください。そのあとインストールプログラムを再実行してください。</p>
KAPL09049-W	An attempt to delete a file or directory related to HDLM has failed. Name = <i>aa...aa</i>	<p>説明 HDLM の関連ファイルまたはディレクトリの削除に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : ファイル名またはディレクトリ名</p> <p>対処 Name に示すファイル, またはディレクトリを削除してください。</p>
KAPL09050-E	The driver module dependencies could not be updated. Contact your HDLM vendor or the maintenance company if there is a maintenance contract of HDLM.	<p>説明 ドライバモジュールの依存情報が更新できないため, インストールまたはアンインストールに失敗しました。</p> <p>対処 HDLM の購入元会社, または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09051-E	You do not have permission to execute the file. File name = <i>aa...aa</i>	<p>説明 ファイルの実行権限がないため, インストールまたはアンインストールに失敗しました。 <i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処 File name で示すファイルが実行可能か確認してください。</p>
KAPL09076-I	The permanent license was installed.	<p>説明 永久ライセンスがインストールされました。</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL09077-I	The temporary license was installed. The license expires on <i>aa...aa</i> .	<p>説明 一時ライセンスがインストールされました。期限満了日は, <i>aa...aa</i> です。 <i>aa...aa</i> : 西暦 (4 桁) / 月 (01~12) / 日 (01~31)</p> <p>対処 期限満了日までに, 永久ライセンスをインストールしてください。</p>
KAPL09078-I	The emergency license was installed. The license expires on <i>aa...aa</i> .	<p>説明 非常ライセンスがインストールされました。期限満了日は, <i>aa...aa</i> です。 <i>aa...aa</i> : 西暦 (4 桁) / 月 (01~12) / 日 (01~31)</p> <p>対処 期限満了日までに, 永久ライセンスをインストールしてください。</p>
KAPL09079-I	The permanent license has been installed.	<p>説明 永久ライセンスがインストールされています。</p> <p>対処 特にありません。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL09080-I	The temporary license has been installed. The license expires on <i>aa...aa</i> .	<p>説明</p> <p>一時ライセンスがインストールされています。期限満了日は、<i>aa...aa</i> です。 <i>aa...aa</i> : 西暦 (4桁) /月 (01~12) /日 (01~31)</p> <p>対処</p> <p>期限満了日までに、永久ライセンスをインストールしてください。</p>
KAPL09081-I	The emergency license has been installed. The license expires on <i>aa...aa</i> .	<p>説明</p> <p>非常ライセンスがインストールされています。期限満了日は、<i>aa...aa</i> です。 <i>aa...aa</i> : 西暦 (4桁) /月 (01~12) /日 (01~31)</p> <p>対処</p> <p>期限満了日までに、永久ライセンスをインストールしてください。</p>
KAPL09082-W	The temporary license expired.	<p>説明</p> <p>一時ライセンスの期限が切れています。</p> <p>対処</p> <p>永久ライセンスのライセンスキーを入力してください。</p>
KAPL09083-W	The emergency license expired.	<p>説明</p> <p>非常ライセンスの期限が切れています。</p> <p>対処</p> <p>永久ライセンスのライセンスキーを入力してください。</p>
KAPL09087-E	The entered license key is invalid. Renewal of the license key will now stop. Obtain a valid license key, and then re-install HDLM.	<p>説明</p> <p>不正なライセンスキーが入力されたため、ライセンス更新を中断します。</p> <p>対処</p> <p>正しいライセンスキーを取得後、再度インストールしてください。</p>
KAPL09088-E	The entered license key is invalid. The HDLM installation will now terminate. Obtain a valid license key, and then re-install HDLM.	<p>説明</p> <p>ライセンスキーが不正です。インストールを中止します。</p> <p>対処</p> <p>正しいライセンスキーを取得後、再度インストールしてください。</p>
KAPL09090-W	This operation will now be continued without updating the license.	<p>説明</p> <p>ライセンスを更新しないで処理を続行します。</p> <p>対処</p> <p>別途、永久ライセンスをインストールしてください。</p>
KAPL09091-E	A fatal error occurred in HDLM. The system environment is invalid. Contact your HDLM vendor or the maintenance company if there is a maintenance contract of HDLM.	<p>説明</p> <p>HDLM 内で重大エラーが発生しました。システム環境が不正です。HDLM 構成ファイルの一部がありません。</p> <p>対処</p> <p>HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09092-I	The installation was stopped because a stop request was received.	<p>説明</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>中断要求を受け付けたため、インストールを中断しました。</p> <p>対処 インストールを途中で終了しています。rpm ファイルがインストールされている場合には rpm コマンドを用いてアンインストールを行ってください。</p>
KAPL09093-I	<i>aa...aa</i> will be installed. Is this OK? [y/n]:	<p>説明 <i>aa...aa</i> をインストールします。よろしいですか？ [y/n]: <i>aa...aa</i> : インストールする HDLM のバージョンまたはインストールする SP の HDLM バージョン</p> <p>対処 インストールを実行する場合には「y」を、インストールを中止する場合には「n」を入力してください。</p>
KAPL09094-W	The entered value is invalid. Re-enter [y/n]:	<p>説明 入力の値が不正です。再入力してください。 [y/n]:</p> <p>対処 「y」または「n」を入力してください。</p>
KAPL09095-E	The entered value is invalid. The installation has been stopped.	<p>説明 入力の値が不正です。インストールを中断しました。</p> <p>対処 インストールを実行する場合には再度インストーラを実行してください。</p>
KAPL09096-I	The user stopped the installation.	<p>説明 ユーザの指定によって、インストールを中断しました。</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL09097-E	A package installable on this system was not found. Please check whether HDLM is supported for this system. For details about installing the package on a supported OS, refer to the HDLM User's Guide section "Hosts and OSs Supported by HDLM".	<p>説明 このシステムにインストール可能なパッケージがありません。</p> <p>対処 HDLM がサポートしているシステムであるか確認してください。「3.1.1」を参照して、サポート対象の OS にインストールしてください。</p>
KAPL09098-E	An attempt to install <i>aa...aa</i> has failed. Code = <i>bb...bb</i>	<p>説明 <i>aa...aa</i> のインストールに失敗しました。 <i>aa...aa</i> : プログラム名 <i>bb...bb</i> : コード (10 進数)</p> <p>対処 前後のメッセージを確認し問題を解決したあと、再度 HDLM をインストールしてください。</p>
KAPL09106-E	An invalid parameter has been specified.	<p>説明 HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) に誤ったパラメタが指定されました。</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		正しいオプションを指定して、再度 installhdlm ユティリティを実行してください。
KAPL09113-E	There is no installable license key in the license key file. File name = <i>aa...aa</i> Make sure that the license key file is correct, and then re-install HDLM.	説明 ライセンスキーファイル中に、HDLM のインストールが可能なライセンスキーがありません。 <i>aa...aa</i> : /var/tmp/hdlm_license 対処 ライセンスキーファイルが正しいか確認してから、再度インストールしてください。 /var/tmp/hdlm_license
KAPL09114-I	There is no license key file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ライセンスキーファイルが所定のディレクトリにありません。 <i>aa...aa</i> : /var/tmp/hdlm_license 対処 正しいライセンスキーファイルを所定のディレクトリに格納してから、再度インストールしてください。 /var/tmp/hdlm_license
KAPL09115-W	An attempt to delete the license key file has failed. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ライセンスキーファイルの削除に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : /var/tmp/hdlm_license 対処 ライセンスキーファイルが存在している場合は、削除してください。 /var/tmp/hdlm_license
KAPL09116-W	The command could not be installed. (command = <i>aa...aa</i>)	説明 コマンドのインストールができませんでした。出力された HDLM のコマンドは使用できません。 <i>aa...aa</i> : コマンド名 対処 出力されたコマンドは別名称で実行が可能です。出力された名称で実行する場合は、上書き、または再度インストールしてください。
KAPL09121-E	<i>aa...aa</i> is not present at <i>bb...bb</i> .	説明 <i>aa...aa</i> は <i>bb...bb</i> にありません。 <i>aa...aa</i> : インストーラ名 <i>bb...bb</i> : インストーラのパス 対処 DVD-ROM から HDLM をインストールしてください。 また、DVD-ROM をコピーしたディレクトリからインストールしている場合は、DVD-ROM の内容がディレクトリにすべてコピーされていることを確認してからインストールしてください。
KAPL09135-E	One of the following was executed at the same time as an HDLM command set -lic operation: another set -lic	説明 HDLM コマンドの set -lic オペレーションまたは、HDLM のアップグレード

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	operation, or an update of the license for an update installation.	<p>もしくは再インストール時のライセンスの更新が同時に実行されました。</p> <p>対処</p> <p>view -sys -lic オペレーションでライセンスを確認し、必要に応じてインストール中、またはインストール後に set -lic オペレーションを使用してライセンスを更新してください。</p> <p>同じメッセージが表示される場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>なお、次の操作は行わないでください。set -lic オペレーションと HDLM のアップグレードまたは再インストール時のライセンスの更新の同時実行</p>
KAPL09142-E	HDLM <i>aa...aa</i> cannot be performed. Wait a while, and then perform <i>aa...aa</i> again. Error Code = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>HDLM をインストールまたはアンインストールできませんでした。</p> <p><i>aa...aa</i> : installation または remove</p> <p><i>bb...bb</i> : 内部コード (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>時間を置いてから再度インストールまたはアンインストールを行ってください。</p>
KAPL09143-E	HDLM <i>aa...aa</i> cannot be performed. Error Code = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>HDLM をインストールまたはアンインストールできませんでした。</p> <p><i>aa...aa</i> : installation または remove</p> <p><i>bb...bb</i> : 内部コード (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09146-E	A directory required by HDLM not found. Directory = <i>aa...aa</i> . Create the directory displayed in this message, then re-install HDLM.	<p>説明</p> <p>HDLM で必要とするディレクトリが見つかりませんでした。</p> <p><i>aa...aa</i> : 参照先ディレクトリ名</p> <p>対処</p> <p>メッセージに表示されたディレクトリを確認してください。メッセージに表示されたディレクトリを作成後、HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL09147-E	An attempt to create a file related to HDLM has failed. File name = <i>aa...aa</i> . Remove unnecessary files and secure free space on the file system. Check the write permissions for the directory. Re-install HDLM.	<p>説明</p> <p>HDLM に関連するファイルの作成に失敗しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : 作成しようとしたファイル名</p> <p>対処</p> <p>不要ファイルを削除して、ファイルシステムの空き容量を確保してください。ディレクトリの書き込み権限を確認してください。HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL09160-E	HDLM does not support this kernel. Install HDLM on a supported OS.	<p>説明</p> <p>HDLM は、現在動作中のカーネルをサポートしていません。</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>または、HDLM は現在使用中の CPU と動作中のカーネルの組み合わせをサポートしていません。</p> <p>対処 現在動作中のカーネルおよび使用中のサーバの CPU 種別を確認してください。</p>
KAPL09163-E	An HDLM package installable on this kernel was not found in the mount point. Mount point = <i>aa...aa</i> . Check the HDLM installation media, or check the current kernel.	<p>説明</p> <p>メッセージ中に示すマウントポイントにマウントされている HDLM の DVD-ROM には、現在動作中のカーネル用の HDLM が格納されていません。 <i>aa...aa</i> : マウントポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 の場合 /media/cdrom /media/cdrecorder ◦ Red Hat Enterprise Linux 5 または Red Hat Enterprise Linux 6 の場合 /media/cdrom ◦ SUSE LINUX Enterprise Server の場合 /media/メディアのボリューム ID <p>対処</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ HDLM の DVD-ROM を確認してください。 ◦ 現在動作中のカーネルを確認してください。
KAPL09168-E	The directory was not found. Directory = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールしましたが、インストーラ実行シェルスクリプトの <code>installhdlm</code> コマンドの <code>-p</code> オプションに指定したディレクトリが存在しません。 <i>aa...aa</i> : インストーラ実行シェルスクリプトの <code>installhdlm</code> コマンドの <code>-p</code> オプションに指定したディレクトリ</p> <p>対処</p> <p>JP1/NETM/DM 用の登録ファイルの <code>InstallDirectory</code> に指定したディレクトリ名と、インストーラ実行シェルスクリプトの <code>installhdlm</code> コマンドの <code>-p</code> オプションに指定したディレクトリ名を確認してください。JP1/NETM/DM 用の登録ファイルとインストーラ実行シェルスクリプトの作成方法については、「3.6.2」を参照してください。</p>
KAPL09169-E	The HDLM package was not found in the directory. Directory = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールしましたが、インストーラ実行シェルスクリプトの <code>installhdlm</code> コマンドの <code>-p</code> オプションに指定したディレクトリに、HDLM のパッケージが存在しません。 <i>aa...aa</i> : インストーラ実行シェルスクリプトの <code>installhdlm</code> コマンドの <code>-p</code> オプションに指定したディレクトリ</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>対処</p> <p>JP1/NETM/DM 用の登録ファイルの InstallDirectory に指定したディレクトリ名と、インストーラ実行シェルスクリプトの installhdlm コマンドの -p オプションに指定したディレクトリ名を確認してください。JP1/NETM/DM 用の登録ファイルとインストーラ実行シェルスクリプトの作成方法については、「3.6.2」を参照してください。</p>
KAPL09170-E	An HDLM package installable on this kernel was not found in the directory. Directory = aa...aa	<p>説明</p> <p>JP1/NETM/DM を使用して HDLM をリモートインストールしましたが、インストーラ実行シェルスクリプトの installhdlm コマンドの -p オプションに指定したディレクトリに、現在動作中のカーネル用の HDLM が格納されていません。 aa...aa : インストーラ実行シェルスクリプトの installhdlm コマンドの -p オプションに指定したディレクトリ</p> <p>対処</p> <p>JP1/NETM/DM 用の登録ファイルの InstallDirectory に指定したディレクトリ名と、インストーラ実行シェルスクリプトの installhdlm コマンドの -p オプションに指定したディレクトリ名を確認してください。JP1/NETM/DM 用の登録ファイルとインストーラ実行シェルスクリプトの作成方法については、「3.6.2」を参照してください。</p>
KAPL09177-I	HDLM version: aa...aa	<p>説明</p> <p>aa...aa : インストールする HDLM のバージョン</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL09191-W	The installation information settings file does not exist.	<p>説明</p> <p>HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) の第 2 パラメタに指定されているファイルが存在しません。</p> <p>対処</p> <p>正しいインストール情報設定ファイルのパス名称を指定して、再実行してください。</p>
KAPL09199-E	HDLM does not support this operating system.	<p>説明</p> <p>HDLM は、現在動作中の OS をサポートしていません。 HDLM がサポートしている OS については、「表 3-2」、「表 3-3」、「表 3-4」、「表 3-5」、「表 3-6」、「表 3-7」、「表 3-8」および「表 3-9」を参照してください。</p> <p>対処</p> <p>現在動作中の OS が HDLM でサポートしている OS かどうか確認してください。</p>
KAPL09210-I	aa...aa will now start.	説明

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>aa...aa</i> を開始しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : installhdlm, installhdlm_analysis, ENVIRONMENT_SETTINGS, driver_config_settings, または dlmcfgmgr</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL09211-I	<i>aa...aa</i> completed successfully.	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> が正常終了しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : installhdlm, installhdlm_analysis, ENVIRONMENT_SETTINGS, driver_config_settings, または dlmcfgmgr</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL09212-E	<i>aa...aa</i> ended abnormally.	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> が異常終了しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : installhdlm, または installhdlm_analysis</p> <p>対処 このメッセージ以前に出力されているエラーメッセージを確認し、そのエラーメッセージの対処を実行してください。</p>
KAPL09213-W	An error occurred during <i>aa...aa</i> processing.	<p>説明</p> <p>HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) の処理は最後まで実行されましたが、途中でエラーになった処理があります。</p> <p><i>aa...aa</i> : ENVIRONMENT_SETTINGS, driver_config_settings, または installhdlm</p> <p>対処 このメッセージ以前に出力されているメッセージが KAPL01008-W または KAPL01009-W の場合は、インストール情報設定ファイルの記載内容に誤りがないか確認してください。インストール情報設定ファイルについては、「7.11.3」を参照してください。 上記以外のメッセージが出力されている場合は、そのメッセージの対処を実行してください。</p>
KAPL09215-E	The system environment is invalid. Error Code = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) を実行するシステム環境に不正があります。</p> <p><i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数)</p> <p>対処 Error Code = 4 の場合 /var/tmp ディレクトリの空き容量が足りないか、/var/tmp ディレクトリに書き込み権限がありません。 十分な空き容量を確保する、または/</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>var/tmp ディレクトリに書き込み権限があるか確認をしてから再実行してください。</p> <p>Error Code = 6 の場合 /etc/opt ディレクトリの空き容量が足りないか、/etc/opt ディレクトリに書き込み権限がありません。十分な空き容量を確保する、または/etc/opt ディレクトリに書き込み権限があるか確認をしてから再実行してください。</p> <p>上記以外の Error Code が出力された場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09216-E	An error occurred during I/O of a file that installhdlm uses. Error Code = aa...aa.bb...bb	<p>説明</p> <p>HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) が使用するファイルの入出力でエラーが発生しました。 aa...aa : 実行した処理を特定するエラー番号(10 進数) bb...bb : 実行した処理の返り値(10 進数)</p> <p>対処</p> <p>/tmp ディレクトリの容量に不足がないか確認してください。/tmp ディレクトリの容量が不足している場合は、十分な空き容量を確保したあとに再実行してください。必要な空き容量は、「3.1.12」の「(2)」を参照してください。</p>
KAPL09217-E	An error occurred during reading of the installation information settings file. Error Code = aa...aa.bb...bb	<p>説明</p> <p>インストール情報設定ファイルの読み込みでエラーが発生しました。 aa...aa : 実行した処理を特定するエラー番号(10 進数) bb...bb : 実行した処理の返り値(10 進数)</p> <p>対処</p> <p>Error Code = 9001,-1 の場合 インストール情報設定ファイルに読み取り権限がありません。指定したファイルのアクセス権限を確認してください。</p> <p>上記以外の Error Code が出力された場合は HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09218-E	aa...aa cannot be executed.	<p>説明</p> <p>HDLM インストールユーティリティ (installhdlm) が使用するユーティリティやコマンドが規定の場所がない、または実行権限がありません。 aa...aa : installhdlm_analysis, dlmcfgmgr, または dlncmgr</p> <p>対処</p> <p>aa...aa が dlncmgr の場合</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>規定の場所は/opt/ DynamicLinkManager/bin ディレクトリです。</p> <p>規定の場所になかった, または実行権限がなかった場合は, 再度 installhdlm ユティリティを実行してください。</p> <p><i>aa...aa</i> が installhdlm_analysis の場合</p> <p>規定の場所は/DVDのマウントディレクトリ/HDLM_Linux/bin ディレクトリです。</p> <p>規定の場所になかった場合は, 必要なファイルをコピーして再実行してください。実行権限がなかった場合は, 実行権限を与えてから再実行してください。</p> <p><i>aa...aa</i> が dlmcfgmgr の場合</p> <p>規定の場所は/sbin ディレクトリです。</p> <p>規定の場所になかった, または実行権限がなかった場合は, 再度 installhdlm ユティリティを実行してください。</p>
KAPL09219-E	An internal error occurred in the installhdlm_analysis. Error Code = <i>aa...aa.bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>installhdlm_analysis で内部エラーが発生しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数)</p> <p><i>bb...bb</i> : 実行した処理の返り値(10進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM の購入元会社, または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL09220-W	The composition of the installation information settings file is invalid. Error Code = <i>aa...aa.bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>インストール情報設定ファイルの構成チェック中に 1023 文字を超える行がありました。または, 空行およびコメント行を除いて, 最初の行の内容が [INSTALLATION_SETTINGS] 以外でした。</p> <p><i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数)</p> <p><i>bb...bb</i> : 実行した処理の返り値(10進数)</p> <p>対処</p> <p>内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して, 再実行してください。</p>
KAPL09221-W	The definition of the installation information settings file includes an unusable character. Error Code = <i>aa...aa.bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>コメント行以外の行で使用できない文字を使用しています。</p> <p><i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数)</p> <p><i>bb...bb</i> : 実行した処理の返り値(10進数)</p> <p><i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>対処</p> <p>内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09227-W	The definition of the installation information settings file includes an invalid key. Error Code = <i>aa...aa bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>存在しないキーが記載されています。 <i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数) <i>bb...bb</i> : 実行した処理の戻り値(10進数) <i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p> <p>対処</p> <p>内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09228-W	The definition of the installation information settings file includes an invalid key value. Error Code = <i>aa...aa bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>キー値の形式が不正です。 <i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数) <i>bb...bb</i> : 実行した処理の戻り値(10進数) <i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p> <p>対処</p> <p>内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09229-W	The definition of the installation information settings file includes an invalid section name. Error Code = <i>aa...aa bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>存在しないセクション名が記載されています。 <i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数) <i>bb...bb</i> : 実行した処理の戻り値(10進数) <i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p> <p>対処</p> <p>内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09230-W	The definition of the installation information settings file includes a duplicated section name. Error Code = <i>aa...aa bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>同一名称のセクション名が記載されています。 <i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数) <i>bb...bb</i> : 実行した処理の戻り値(10進数) <i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p> <p>対処</p> <p>内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09231-W	The definition of the installation information settings file includes a duplicated key. Error Code = <i>aa...aa bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>同一名称のキーが記載されています。 <i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数) <i>bb...bb</i> : 実行した処理の戻り値(10進数)</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p> <p>対処 内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09232-W	The composition of the definition of the installation information settings file is invalid. Error Code = <i>aa...aa.bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明 キー、キー値、または=が記載されていません。 <i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数) <i>bb...bb</i> : 実行した処理の戻り値(10進数) <i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p> <p>対処 内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09233-W	The definition of the installation information settings file is too long. Error Code = <i>aa...aa.bb...bb</i> , line = <i>cc...cc</i>	<p>説明 1行の定義文の長さが1023文字を超えています。 <i>aa...aa</i> : 実行した処理を特定するエラー番号(10進数) <i>bb...bb</i> : 実行した処理の戻り値(10進数) <i>cc...cc</i> : インストール情報設定ファイルの行番号(10進数)</p> <p>対処 内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09234-W	A folder or file specified by the installation information settings file does not exist. Name = <i>aa...aa</i>	<p>説明 インストール情報設定ファイルで指定されたフォルダまたはファイルがありませんでした。 <i>aa...aa</i> : 存在しなかったフォルダ名、またはファイル名(文字列)</p> <p>対処 内容を訂正したインストール情報設定ファイルを指定して、再実行してください。</p>
KAPL09238-W	The specified file is not a normal one. Fail name = <i>aa...aa</i>	<p>説明 通常ファイル以外(ディレクトリファイル、スペシャルファイルなど)が指定されています。 <i>aa...aa</i> : 指定されたファイル名(文字列)</p> <p>対処 正しいファイルの名称を指定して、再実行してください。</p>
KAPL09239-I	The system will now restart.	<p>説明 インストール情報設定ファイルで再起動するように指定されているため、ホストを再起動します。</p> <p>対処 特にありません。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL09240-I	There is no license key file. File name = <i>aa...aa</i> If you want to update the HDLM license, create a license key file (referring to the HDLM installation instructions in the user's guide, if necessary), and then re-execute the installation program.	説明 指定されたディレクトリにライセンスキーファイルがありません。 <i>aa...aa</i> : dlm.lic_key 対処 特にありません。
KAPL09244-E	Could not create file supporting driver update.	説明 ドライバアップデート対応のファイルを作成できませんでした。 対処 HDLM を再インストールしてください。再度、HDLM のインストールに失敗した場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL09245-E	Could not delete file supporting driver update.	説明 ドライバアップデート対応のファイルを削除できませんでした。 対処 HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL09267-W	The file does not exist. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/Path00, /etc/.HBaseAgent/Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL09268-W	You do not have read permission for the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/Path00, /etc/.HBaseAgent/Path00 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL09269-W	The file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/Path00, /etc/.HBaseAgent/Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL09270-E	The directory does not exist. Directory name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先ディレクトリ, /HBsA インストール先ディレクトリ 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL09501-E	HDLM is not installed on this system.	説明 このシステムには HDLM がインストールされていないため、SP は適用できません。 対処

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		システムに HDLM が正しくインストールされていることを確認してください。
KAPL09505-E	<i>aa...aa</i> cannot be applied to the installed <i>bb...bb</i> .	<p>説明</p> <p>インストールされている HDLM または SP (<i>bb...bb</i>) に対して、この HDLM または SP (<i>aa...aa</i>) はアップグレードまたは再インストールできません。</p> <p><i>aa...aa</i> : インストールしようとした HDLM のバージョンまたは SP のバージョン</p> <p><i>bb...bb</i> : インストール済みの HDLM のバージョンまたは SP のバージョン</p> <p>対処</p> <p>インストール済みの HDLM、または SP に対してアップグレードまたは再インストールはできません。HDLM をインストールする場合、アンインストールを行ってから再度インストールを実行してください。SP をインストールする場合、インストール済みの HDLM に適用可能な SP、または修正版を入手して、再度インストールを実行してください。</p>
KAPL09509-E	Service Pack <i>aa...aa</i> cannot be installed. The same version has already been installed.	<p>説明</p> <p>インストールしようとしている SP と同等のバージョンがすでにインストールされているため、SP のインストールを中断しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : インストールする SP のバージョン</p> <p>対処</p> <p>インストールしようとしている SP は、インストールの必要がありません。インストールされている HDLM をそのままお使いください。</p>
KAPL09510-E	Service Pack <i>aa...aa</i> cannot be installed. A newer version has already been installed.	<p>説明</p> <p>インストールしようとしている SP (<i>aa...aa</i>) より新しいバージョンがインストールされているため、SP のインストールを中断しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : インストールする SP のバージョン</p> <p>対処</p> <p>インストールしようとしている SP は、インストールの必要がありません。インストールされている HDLM をそのままお使いください。</p>
KAPL09511-E	The RPM file for the service pack was not found.(directory = <i>aa...aa</i>)	<p>説明</p> <p>メッセージで示すディレクトリに、インストールされている HDLM に対応する修正パッチの RPM ファイルが存在しません。</p> <p><i>aa...aa</i> : ディレクトリ名</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		修正パッチ版インストールファイルを再度ダウンロードし、再度インストールを実行してください。

8.10 KAPL10001~KAPL11000

この節で説明するメッセージの言語種別は、英語だけです。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10001-W	No parameter has been specified.	<p>説明</p> <p>パラメタ (収集情報出力先ディレクトリ) が指定されていません。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10002-W	Too many parameters have been specified.	<p>説明</p> <p>パラメタが 4 個以上指定されました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10003-W	The first parameter has not been set to a directory. Value = aa...aa	<p>説明</p> <p>第 1 パラメタにディレクトリ以外の値が指定されました。第 1 パラメタには収集情報出力先ディレクトリを指定してください。</p> <p>aa...aa : 第 1 パラメタ</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10004-W	The parameter contains an incorrect value. Value = aa...aa	<p>説明</p> <p>パラメタ値が誤っています。第 1 パラメタにはディレクトリを指定してください。第 2 パラメタには「-f」を指定してください。</p> <p>aa...aa : 不当なパラメタ</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10005-W	The number of parameters is insufficient.	<p>説明</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>パラメタが不足しています。「-f」パラメタはありますが、収集情報定義ファイル名がありません。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10006-W	The file for defining the information to be collected does not exist, or cannot be read. Value = aa...aa	<p>説明</p> <p>指定した収集情報定義ファイルがありません。または指定したファイルがあっても読み取り権限がありません。</p> <p>aa...aa : 収集情報定義ファイル名</p> <p>対処</p> <p>指定した収集情報定義ファイルの有無、または収集情報定義ファイルのアクセス権限を確認してください。</p>
KAPL10007-W	A directory has been specified in the third parameter. Value = aa...aa	<p>説明</p> <p>「-f」パラメタでディレクトリが指定されています。</p> <p>aa...aa : 第3パラメタ</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10008-W	You lack write permission for the specified directory. Value = aa...aa	<p>説明</p> <p>指定したディレクトリに書き込み権限がありません。または、指定したディレクトリのサブディレクトリの作成に失敗しました。</p> <p>aa...aa : 第1パラメタ</p> <p>対処</p> <p>次のことを確認してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 指定したディレクトリのアクセス権限を確認してください。 指定したディレクトリ名が正しいかどうかを確認してください。 ディスクに空き容量があるか確認してください。
KAPL10009-W	The specified directory already exists. Do you want to overwrite it? [y/n]:	<p>説明</p> <p>指定したディレクトリがすでに存在します。上書きする場合は「y」、中止する場合は「n」を入力してください。</p> <p>対処</p> <p>指定したディレクトリはすでに存在します。「y」を指定したときには、上書きします。「n」またはそのほかのキーを入力した場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行しないで終了します。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10010-W	A root directory has been specified. Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>収集情報定義ファイル内で、収集するディレクトリとして「/」を指定しました。 <i>aa...aa</i> : 収集情報定義ファイルの行番号 (10進数)</p> <p>対処</p> <p>指定したファイル内のルートディレクトリの記述を削除してください。HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) は、指定されたディレクトリを無視して処理を続行します。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10011-W	More than one file or directory has been specified on one line. Line = <i>aa...aa</i> , Value = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>収集情報定義ファイル内の行に、2 つ以上ファイル名またはディレクトリ名があります。 <i>aa...aa</i> : 収集情報定義ファイルの行番号 (10進数) <i>bb...bb</i> : 行の記載内容</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) 終了後、メッセージに記述された収集情報定義ファイルの内容を確認してください。内容に誤りがあった場合、内容を修正し、再度障害情報を取得してください。DLMgetras ユティリティは、指定されたファイルまたはディレクトリを無視して処理を続行します。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10012-W	The specified file or directory does not exist. Line = <i>aa...aa</i> , Value = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>収集情報定義ファイル内で指定したファイルまたはディレクトリがありません。 <i>aa...aa</i> : 収集情報定義ファイルの行番号 (10進数) <i>bb...bb</i> : 行の記載内容</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) 終了後、メッセージに記述された収集情報定義ファイルの内容を確認してください。内容に誤りがあった場合、内容を修正し、再度障害情報を取得してください。DLMgetras ユティリティは、指定されたファイルまたはディレクトリを無視して処理を続行します。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10013-W	You lack read permission for the specified file. Line = <i>aa...aa</i> Value = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>収集情報定義ファイル内で指定したファイルに読み取り権限がありません。 <i>aa...aa</i> : 収集情報定義ファイルの行番号 (10進数) <i>bb...bb</i> : 行の記載内容</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) 終了後、メッセージに記述された収集情報定義ファイルの内容を確認してください。内容に誤りがあった場合、内容を修正し、再度障害情報を取得してください。DLMgetras ユティリティは、指定されたファイルを無視して処理を続行します。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10014-W	You lack read permission for the specified directory. Line = <i>aa...aa</i> , Value = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>収集情報定義ファイル内で指定したディレクトリに読み取り権限がありません。 <i>aa...aa</i> : 収集情報定義ファイルの行番号 (10 進数) <i>bb...bb</i> : 行の記載内容</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) 終了後、メッセージに記述された収集情報定義ファイルの内容を確認してください。内容に誤りがあった場合、内容を修正して、再度障害情報を取得してください。DLMgetras ユティリティは、指定されたディレクトリを無視して処理を続行します。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10015-W	The file format is invalid. Value = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>ファイルの形式が不正です。収集情報定義ファイルのファイルタイプがテキスト形式のファイルではありません。 <i>aa...aa</i> : 第 3 パラメタ</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) 終了後、メッセージに記述された収集情報定義ファイルがテキストファイルであるかどうかを確認してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10016-W	The root directory has been specified in the first parameter.	<p>説明</p> <p>第 1 パラメタにルートディレクトリが指定されました。収集情報出力先ディレクトリに「/」は指定できません。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10017-W	You lack privileges for executing the utility for collecting HDLM error information.	<p>説明</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行する権限がありません。DLMgetras ユティリティは root 権限を持つユーザで実行する必要があります。</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		root 権限を持つユーザで再実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10020-I	The file has been obtained successfully. File = <i>aa...aa</i> , Collection time = <i>bb...bb</i> (GMT: <i>bb...bb</i>)	説明 収集対象ファイルを取得しました。 <i>aa...aa</i> : 収集したファイル名 <i>bb...bb</i> : 西暦/月/日 時:分:秒 対処 特にありません。
KAPL10021-I	Processing terminated before completion because a signal was received.	説明 実行中に [Ctrl] + [C] など中断したため、処理を中止しました。 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を途中で終了しました。収集情報出力先に指定したディレクトリが不要な場合は、ディレクトリを削除してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10022-I	The utility for collecting HDLM error information completed normally.	説明 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) が正常終了しました。障害情報の収集が終了しました。 対処 特にありません。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10030-I	A user terminated the utility for collecting HDLM error information.	説明 確認に対し「n」が入力されたため、DLMgetras ユティリティの処理を中止しました。 対処 特にありません。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10031-W	The entered value is invalid. Continue operation? [y/n]:	説明 「y」または「n」の入力要求に対して「y」または「n」以外が入力されました。「y」または「n」を入力してください。 対処 「y」、または「n」を入力してください。
KAPL10032-W	The entered value is invalid. The utility for collecting HDLM error information stops.	説明 入力要求に対し、3回間違った入力をしたため、DLMgetras ユティリティの処理を中止します。 対処 再度 DLMgetras ユティリティを実行してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10033-W	The file does not exist. Filename = <i>aa...aa</i>	説明 収集しようとしたファイルがありません。 <i>aa...aa</i> : 収集対象ファイル 対処 特にありません。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10034-E	The file could not be copied. Filename = <i>aa...aa</i> , Details = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>cp コマンドの実行が失敗しました。 <i>aa...aa</i> : コピーしようとしたファイル名 <i>bb...bb</i> : cp コマンドの出力メッセージ</p> <p>対処</p> <p>収集対象のファイルのコピー中にエラーが発生しました。ユーザ環境が安定していなかったおそれがあります。システム構成を確認してください。</p>
KAPL10035-E	An attempt to archive the error information failed. Details = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>障害情報のアーカイブの生成に失敗しました。tar コマンドの実行が失敗しました。 <i>aa...aa</i> : tar コマンドの出力メッセージ</p> <p>対処</p> <p>メッセージに記載された詳細情報を参照して、エラー要因を取り除いてください。障害情報については、実行時に指定した出力先ディレクトリをアーカイブなどにまとめて HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL10036-E	An attempt to compress the error information failed. Details = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>障害情報の圧縮に失敗しました。gzip コマンドの実行が失敗しました。 <i>aa...aa</i> : gzip コマンドの出力メッセージ</p> <p>対処</p> <p>メッセージに記載された詳細情報を参照して、エラー要因を取り除いてください。障害情報については、実行時に指定した出力先ディレクトリの下のアークाइブを取得して HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL10037-W	The file does not exist or does not have executable permissions. Filename = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>出力されたファイルがない、または実行権限がありません。 <i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>指定されたファイルがあること、および実行権限があることを確認してください。</p>
KAPL10049-I	Error information collection command = <i>aa...aa</i> , Return value = <i>bb...bb</i> , Execution time = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>収集対象情報を取得するためにコマンドを実行しました。 <i>aa...aa</i> : 実行したコマンド <i>bb...bb</i> : 実行したコマンドの戻り値 <i>cc...cc</i> : 西暦 (4桁) /月/日 時:分:秒</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL10050-I	The utility for collecting HDLM error information started. Start time = <i>aa...aa</i> (GMT <i>aa...aa</i>)	<p>説明</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras)を開始しました。 <i>aa...aa</i> : 西暦 (4桁) /月/日 時:分:秒</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10301-I	/sbin/dlmcfgmgr started: <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfgmgr) を起動しました。 <i>aa...aa</i> : 日時 (例 : Fri May 14 19:12:50 2004)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10302-I	/sbin/dlmcfgmgr completed normally.	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfgmgr) が正常終了しました。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10305-E	A special file could not be created. Filename = <i>aa...aa</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>HDLM デバイスの論理デバイスファイルが生成できません。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10306-W	The configuration definition file is invalid. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明</p> <p>構成定義ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf) が無効です。</p> <p>対処</p> <p>構成定義ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf) を別名に変更し、ホストを再起動してください。このとき HDLM デバイスの論理デバイスファイル名が変更される場合がありますので、再起動後 HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を確認して、変更があった場合には上位プログラムへの指定を設定し直してください。</p>
KAPL10308-W	The configuration definition file could not be created. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>構成定義ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf) が生成できません。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10309-W	The HDLM management-target disk does not exist. Check the system configuration.	説明 HDLM 管理対象デバイスが存在しません。 対処 システム構成を確認してください。
KAPL10312-I	HDLM has created an HDLM device special file. Device = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM デバイスの論理デバイスファイルを作成しました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 対処 特にありません。
KAPL10313-I	HDLM has deleted an HDLM device special file. Device = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM デバイスの論理デバイスファイルを削除しました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 対処 特にありません。
KAPL10314-I	HDLM has updated an HDLM device special file. Device = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM デバイスの論理デバイスファイルを更新しました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 対処 特にありません。
KAPL10316-E	Could not allocate memory. Size = <i>aa...aa</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	説明 メモリ確保に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : 確保しようとしたメモリサイズ (10 進数) 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10318-E	An internal error occurred in the HDLM-configuration definition utility. Code = <i>aa...aa</i> Errno = <i>bb...bb</i> <i>cc...cc</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	説明 HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmr) で内部エラーが発生しました。 <i>aa...aa</i> : エラー発生行番号 (10 進数) <i>bb...bb</i> : エラー番号 (errno) (10 進数) <i>cc...cc</i> : 詳細情報 (任意) 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10319-W	usage: /sbin/dlmcfmgmr [-s] { -r -o	説明 HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgmr) のパラメタが不正なため、ユーティリティの実行に失敗しました。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	<pre>{special-file-name ... all} -i {special-file-name ... all} -v [-udev] -u {special-file-name ... all} - logfs [log-file-size]}</pre>	<p>dlnmcfmgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p> <p>対処 正しいパラメータを指定して、再度 dlnmcfmgmgr ユティリティを実行してください。</p>
KAPL10320-E	The file format is invalid. File name = aa...aa. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明 ファイル形式が不正なため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlnmcfmgmgr) の実行に失敗しました。 aa...aa : ファイル名</p> <p>対処 再度 dlnmcfmgmgr ユティリティを実行してください。同じメッセージが出力される場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。dlnmcfmgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10321-W	The specified HDLM device is invalid. Device = aa...aa. Specify a valid logical device file name of an HDLM device, and then execute the dlnmcfmgmgr utility.	<p>説明 指定した HDLM デバイスの論理デバイスファイル名が不正なため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlnmcfmgmgr) の実行に失敗しました。 aa...aa : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処 正しい HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を指定して、再度 dlnmcfmgmgr ユティリティを実行してください。 dlnmcfmgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10322-E	A file that defines HDLM-unmanaged disks could not be created. File name = aa...aa, Errno = bb...bb. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明 除外ディスク定義ファイルが作成できないため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlnmcfmgmgr) の実行に失敗しました。 aa...aa : ファイル名 bb...bb : エラー番号 (10 進数)</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10323-E	The registration of the block device driver for HDLM failed. All dynamic major numbers are exhausted. Unload (remove from the kernel) an	<p>説明 すべてのダイナミックメジャー番号が使用されているため、HDLM のブロックデバイスドライバの登録に失敗しました。</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	unnecessary driver, and then execute the dlmcfgmgr utility again.	不要なドライバをアンロード（カーネルから削除）し、再度 HDLM 構成定義ユーティリティ（dlmcfgmgr）を実行してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。
KAPL10324-I	The device configuration of the system has changed. Device = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM デバイスに対する、システムのデバイス構成が変更されました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイス名 対処 特にありません。
KAPL10325-E	A regular expression cannot be established. The files will not be deleted. Errno = <i>aa...aa</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	説明 正規表現を使用して HDLM デバイスの検索ができなかったため、HDLM デバイスを削除できませんでした。 <i>aa...aa</i> : エラー番号（10 進数） 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ（DLMgetras）を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10326-E	You lack permission for executing the HDLM-configuration definition utility. Execute the dlmcfgmgr utility as a user with root permission.	説明 カレントユーザでは HDLM 構成定義ユーティリティ（dlmcfgmgr）を実行する権限がありません。 対処 root 権限を持つユーザで、再度 dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。
KAPL10327-W	The entered value is invalid.	説明 HDLM 構成定義ユーティリティ（dlmcfgmgr）の実行確認メッセージに入力した値が不正です。 対処 KAPL10339-I メッセージが出力されたあと、正しい値[y/n]を入力してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。
KAPL10328-E	The entered value is invalid. The HDLM-configuration definition utility processing will now stop. Execute the HDLM-configuration definition utility again.	説明 HDLM 構成定義ユーティリティ（dlmcfgmgr）の実行確認メッセージに対し 3 回以上不正な値が入力されたため、処理が中断されました。 対処 再度 dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。
KAPL10329-E	A file could not be opened. File name = <i>aa...aa</i> , Errno = <i>bb...bb</i> . Refer to the Messages section of the HDLM User's	説明 ファイルのオープンに失敗しました。 <i>aa...aa</i> : ファイル名 <i>bb...bb</i> : エラー番号（10 進数）

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	Guide for instructions to correct this problem.	<p>対処</p> <p>ファイルの有無を確認してください。異常がない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10330-E	A symbolic link cannot be created. File name = aa...aa, Errno = bb...bb. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>シンボリックリンクの作成に失敗しました。</p> <p>aa...aa : ファイル名</p> <p>bb...bb : エラー番号 (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10331-E	The registering of the block device driver for HDLM failed. Errno = aa...aa. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>HDLM のブロックデバイスドライバの登録に失敗しました。</p> <p>aa...aa : エラー番号 (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10332-E	The registering of the partition information for HDLM device(s) failed. Errno = aa...aa. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>HDLM のパーティション情報の登録に失敗しました。</p> <p>aa...aa : エラー番号 (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10333-E	An internal error occurred in the file operation. File name = aa...aa. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>ファイル操作中に内部エラーが発生しました。</p> <p>aa...aa : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10334-E	Ioctl <i>aa...aa</i> failed with errno = <i>bb...bb</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	説明 IOCTL の発行に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : IOCTL 名 <i>bb...bb</i> : エラー番号 (10 進数) 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10335-E	A directory cannot be created. Directory = <i>aa...aa</i> , Errno = <i>bb...bb</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	説明 ディレクトリの作成に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : ディレクトリ名 <i>bb...bb</i> : エラー番号 (10 進数) 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL10336-W	A file cannot be deleted. File name = <i>aa...aa</i> . Manually delete the file <i>aa...aa</i>	説明 ファイルの削除に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : ファイル名 対処 File name に示すファイルを削除してください。
KAPL10337-W	A special device exists with a different major number. The device will now be unlinked. Device = <i>aa...aa</i>	説明 論理デバイスファイルが異なるメジャー番号で存在するため、 <i>aa...aa</i> で示す HDLM デバイスを削除しました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名 対処 特にありません。
KAPL10338-W	A directory cannot be deleted. Directory = <i>aa...aa</i> . Manually delete the directory <i>aa...aa</i>	説明 ディレクトリの削除に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : ディレクトリ名 対処 Directory に示すディレクトリを削除してください。
KAPL10339-I	This operation will change the configuration of HDLM devices. Do you want to continue? [y/n]:	説明 HDLM デバイスの構成定義の変更を確認するメッセージです。 対処 継続する場合は「y」、中止する場合は「n」を入力してください。
KAPL10340-E	Several processes failed. See the <i>aa...aa</i> file. Check the message output before this message.	説明 HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgr) の実行で幾つかの処理に失

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>敗しました。ファイルを参照してください。</p> <p><i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlmcfgmgr1.log ファイルを参照し、このメッセージの前に出力されているメッセージを確認してください。</p> <p>dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10341-I	The HDLM device configurations have been changed.	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、HDLM デバイスの構成が変更されました。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10343-I	HDLM has detected and registered a new HDLM device. HDLM device = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、新しく検出された HDLM デバイスが、HDLM デバイス構成定義に登録されました。</p> <p><i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処</p> <p>特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10344-I	HDLM has detected and registered a new path to an already registered HDLM device. HDLM device = <i>aa...aa</i> , Device = <i>bb...bb</i> (Host: <i>cc...cc</i> Channel: 0 ID: <i>dd...dd</i> Lun: <i>ee...ee</i>)	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、登録済みの HDLM デバイスに新しく検出されたパスが追加されました。</p> <p><i>aa...aa</i> : HDLM デバイス名 <i>bb...bb</i> : SCSI デバイス名 <i>cc...cc</i> : ホスト ID (10 進数) Channel : チャンネル ID (0 固定) (10 進数) <i>dd...dd</i> : ターゲット ID (10 進数) <i>ee...ee</i> : Lun (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10345-I	HDLM has unregistered the existing path to an HDLM device. HDLM device = <i>aa...aa</i> , Device = <i>bb...bb</i> (Host: <i>cc...cc</i> Channel: 0 ID: <i>dd...dd</i> Lun: <i>ee...ee</i>)	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、登録済みの HDLM デバイスから既存のパスが登録解除されました。</p> <p><i>aa...aa</i> : HDLM デバイス名 <i>bb...bb</i> : SCSI デバイス名 <i>cc...cc</i> : ホスト ID (10 進数) Channel : チャンネル ID (0 固定) (10 進数) <i>dd...dd</i> : ターゲット ID (10 進数)</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>ee...ee</i> : Lun (10 進数)</p> <p>対処 特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10346-I	HDLM has unregistered an existing HDLM device. HDLM device = <i>aa...aa</i>	<p>説明 HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、登録済みの HDLM デバイスが登録解除されました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処 特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10347-I	The HDLM device is no longer under management. HDLM device = <i>aa...aa</i>	<p>説明 HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、HDLM デバイスが HDLM の管理対象外になりました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処 特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10348-I	The HDLM device is now under management. HDLM device = <i>aa...aa</i>	<p>説明 HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、HDLM デバイスが HDLM の管理対象になりました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処 特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10349-I	HDLM will remove unavailable paths or devices. HDLM device = <i>aa...aa</i>	<p>説明 HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行によって、HDLM デバイスの、使用できないパスや論理デバイスファイルが削除されました。 <i>aa...aa</i> : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処 特にありません。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10350-E	The HDLM driver(s) is not loaded. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明 HDLM ドライバがロードされていないため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行に失敗しました。</p> <p>対処 次の手順を実行してください。</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>a. 次のコマンドを実行して HDLM ドライバをロードしてください。</p> <pre># /opt/DynamicLinkManager/bin/dlminsadvr # modprobe sddlmfdrv</pre> <p>b. 再度 dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。</p> <p>dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10351-E	The specified HDLM-configuration definition utility is invalid. Operation name = aa...aa, Parameter = bb...bb	<p>説明</p> <p>指定したオペレーション名またはパラメータが不正なため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行に失敗しました。</p> <p>aa...aa : オペレーション名 bb...bb : パラメータ</p> <p>対処</p> <p>オペレーション名、パラメータを確認し、再度 dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10352-W	The HDLM device is in use. HDLM device = aa...aa. Stop the application using the HDLM device, unmount the HDLM device being mounted, and then execute the dlmcfgmgr utility again.	<p>説明</p> <p>指定した HDLM デバイスが使用中のため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行に失敗しました。</p> <p>aa...aa : HDLM デバイス名</p> <p>対処</p> <p>HDLM デバイスを使用しているアプリケーションを停止、およびマウントしている HDLM デバイスをアンマウントし、再度 dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10353-W	An error occurred while a backup of the HDLM files was being acquired. File name = aa...aa. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>HDLM のファイルのバックアップ取得でエラーが発生しました。</p> <p>aa...aa : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10354-E	An attempt to unregister a block device driver for HDLM failed. Stop the application using the HDLM device, and unmount the mounting HDLM device, and then execute the dlmcfgmgr utility again.	<p>説明</p> <p>HDLM ブロックデバイスドライバの登録解除ができないため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行に失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM デバイスを使用しているアプリケーションを停止、およびマウントしている HDLM デバイスをアンマウントし、再度 dlmcfgmgr ユティリティを実行して</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>ください。dlmcfmgmr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10355-E	An attempt to unregister partition information for the HDLM device(s) failed. Stop the application using the HDLM device, and unmount the mounting HDLM device, and then execute the dlmcfmgmr utility again.	<p>説明 HDLM デバイスのパーティション情報の登録解除ができないため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行に失敗しました。</p> <p>対処 HDLM デバイスを使用しているアプリケーションを停止、およびマウントしている HDLM デバイスをアンマウントし、再度 dlmcfmgmr ユティリティを実行してください。dlmcfmgmr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10356-E	An unused major number could not be released. Major number = aa...aa. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明 現在使用していないメジャー番号の解放に失敗しました。 aa...aa : メジャー番号 (10 進数)</p> <p>対処 ホストを再起動してください。ホストが修復されていない場合には、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10357-E	The maximum number of HDLM device files has been reached. Maximum number = aa...aa. Modify the configuration of the HDLM device to reduce the number of HDLM devices used, and then execute the dlmcfmgmr utility again.	<p>説明 最大数の HDLM デバイスの論理デバイスファイルが作成されているため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行に失敗しました。 aa...aa : HDLM デバイスの論理デバイスファイルの最大作成数 (10 進数)</p> <p>対処 HDLM デバイスの構成を見直し、使用する HDLM デバイスを減らし、再度 dlmcfmgmr ユティリティを実行してください。dlmcfmgmr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10358-E	The device name is too long. Maximum length = aa...aa. Check that the logical device file name of the HDLM device is correct, and then execute the dlmcfmgmr utility again.	<p>説明 HDLM デバイスの論理デバイスファイル名が長過ぎるため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行に失敗しました。 aa...aa : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名の最大文字数 (10 進数)</p> <p>対処 HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を確認し、再度 dlmcfmgmr ユティリティを実行してください。dlmcfmgmr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10359-E	Multiple instances of the HDLM-configuration definition utility cannot be executed concurrently. Wait until the running dlmcfmgmr utility ends, and then try the dlmcfmgmr utility again.	<p>説明</p> <p>dlmcfmgmr ユティリティを同時に複数実行しようとしたため、dlmcfmgmr ユティリティの実行に失敗しました。</p> <p>対処</p> <p>実行中の dlmcfmgmr ユティリティが終了してから、再度 dlmcfmgmr ユティリティを実行してください。dlmcfmgmr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10360-I	HDLM has activated a path for an HDLM device. HDLM device = <i>aa...aa</i> , Device = <i>bb...bb</i> (Host: <i>cc...cc</i> Channel: 0 ID: <i>dd...dd</i> Lun: <i>ee...ee</i>)	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行によって、HDLM デバイスのパスが活性化されました。</p> <p><i>aa...aa</i> : HDLM デバイス名 <i>bb...bb</i> : SCSI デバイス名 <i>cc...cc</i> : ホスト ID (10 進数) Channel : チャンネル ID (0 固定) (10 進数) <i>dd...dd</i> : ターゲット ID (10 進数) <i>ee...ee</i> : Lun (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。dlmcfmgmr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10361-I	HDLM has deactivated a path for the HDLM device. HDLM device = <i>aa...aa</i> , Device = <i>bb...bb</i> (Host: <i>cc...cc</i> Channel: 0 ID: <i>dd...dd</i> Lun: <i>ee...ee</i>)	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行によって、HDLM デバイスのパスが非活性化されました。</p> <p><i>aa...aa</i> : HDLM デバイス名 <i>bb...bb</i> : SCSI デバイス名 <i>cc...cc</i> : ホスト ID (10 進数) Channel : チャンネル ID (0 固定) (10 進数) <i>dd...dd</i> : ターゲット ID (10 進数) <i>ee...ee</i> : Lun (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。dlmcfmgmr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10362-W	HDLM has detected an active path that cannot be deleted. HDLM device = <i>aa...aa</i> , Device = <i>bb...bb</i> (Host: <i>cc...cc</i> Channel: 0 ID: <i>dd...dd</i> Lun: <i>ee...ee</i>). Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明</p> <p>指定した HDLM デバイスに動作中のパスがあるため、HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgmr) の実行に失敗しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : HDLM デバイス名 <i>bb...bb</i> : SCSI デバイス名 <i>cc...cc</i> : ホスト ID (10 進数) Channel : チャンネル ID (0 固定) (10 進数) <i>dd...dd</i> : ターゲット ID (10 進数) <i>ee...ee</i> : Lun (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM デバイスを使用しているアプリケーションを停止、およびマウントしている HDLM デバイスをアンマウントし、再</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		度 dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。
KAPL10363-W	A data mismatch was found. HDLM device = aa...aa. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の実行時に、HDLM デバイス構成情報の不整合を検出しました。 aa...aa : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10364-I	The LDEV for an HDLM device has changed. HDLM will now change the configuration. HDLM device = aa...aa	<p>説明</p> <p>HDLM デバイスに対応する LDEV が変更されているため、構成が変更されました。 aa...aa : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL10365-W	The LDEV for an HDLM device has changed. The processing for that HDLM device will be cancelled. HDLM device = aa...aa. Execute the HDLM-configuration definition utility (dlmcfgmgr) with the -v option, and then check the configuration of the HDLM device.	<p>説明</p> <p>HDLM デバイスに対応する LDEV が変更されているため、該当する HDLM デバイスへの処理が中断されました。 aa...aa : HDLM デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) を -v オプションを指定して実行し、HDLM デバイスの構成を確認してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10366-I	Unsupported SCSI device was found. Device = aa...aa	<p>説明</p> <p>メッセージに記述された SCSI デバイスは未サポートの SCSI デバイスです。 aa...aa : SCSI デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL10641-I	Reservation Key will now be cleared. Is this OK? [y/n]:	<p>説明</p> <p>Reservation Key をクリアする場合は「y」、クリアしない場合は「n」を入力します。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL10642-I	Reservation Key of aa...aa was cleared.	<p>説明</p> <p>Reservation Key をクリアしました。 aa...aa : HDLM 管理対象デバイスの論理デバイスファイル名</p> <p>対処</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		特にありません。
KAPL10643-W	A necessary parameter is not specified.	<p>説明</p> <p>HDLM パーシステントリザーブ解除ユーティリティ (dlmpr) にパラメタが指定されていません。</p> <p>対処</p> <p>dlmpr ユティリティの-h パラメタを指定して実行し、パラメタを確認してから、再実行してください。dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。</p>
KAPL10644-W	The specified parameters cannot be specified at the same time. parameter = aa...aa	<p>説明</p> <p>HDLM パーシステントリザーブ解除ユーティリティ (dlmpr) に同時に指定できないパラメタが指定されました。</p> <p>aa...aa : 指定されたパラメタ</p> <p>対処</p> <p>dlmpr ユティリティの-h パラメタを指定して実行し、パラメタを確認してから、再実行してください。dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。</p>
KAPL10645-W	A parameter value is invalid. parameter = aa...aa	<p>説明</p> <p>HDLM パーシステントリザーブ解除ユーティリティ (dlmpr) に誤ったパラメタ値が指定されました。</p> <p>aa...aa : 指定されたパラメタ値</p> <p>対処</p> <p>正しいパラメタ値を指定してから、再実行してください。dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。</p>
KAPL10646-W	A parameter is invalid. parameter = aa...aa	<p>説明</p> <p>HDLM パーシステントリザーブ解除ユーティリティ (dlmpr) に誤ったパラメタが指定されました。</p> <p>aa...aa : 指定されたパラメタ</p> <p>対処</p> <p>dlmpr ユティリティを、-h パラメタを指定して実行し、指定できるパラメタを確認してから、再実行してください。dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。</p>
KAPL10648-E	An internal error occurred in the dlmpr utility. Error Code = aa...aa	<p>説明</p> <p>HDLM パーシステントリザーブ解除ユーティリティ (dlmpr) 処理中にユーザ原因でないと思われるエラーが発生しました。</p> <p>aa...aa : エラー番号 (文字列)</p> <p>対処</p> <p>Error Code が 1 の場合は、メモリが不足していないことを確認してください。</p> <p>Error Code が 2 の場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		Error Code が 4 または 5 の場合は、SCSI デバイスファイルのパーミッションが読み書き可能であることを確認してください。 dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。
KAPL10649-E	aa...aa : An attempt to perform Reservation Key clear processing has failed.	説明 Reservation Key のクリアに失敗しました。 aa...aa : HDLM デバイス (dlmfdrv) 対処 HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL10650-I	aa...aa : NO RESERVATION	説明 LU が Reservation されていません。 aa...aa : HDLM デバイス (dlmfdrv) 対処 特にありません。
KAPL10651-I	The user terminated the operation.	説明 確認に対し「n」が入力されたため、HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ (dlmpr) の処理を中止します。 対処 特にありません。dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。
KAPL10652-E	The entered value is invalid. The operation stops.	説明 入力要求に対し、3 回以上間違えて入力されました。HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ (dlmpr) を中断します。 対処 再度 dlmpr ユティリティを実行してください。dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。
KAPL10653-W	The entered value is invalid. Please re-enter it [y/n]:	説明 「y」または「n」の入力要求に対して「y」または「n」以外が入力されました。 対処 「y」または「n」のどちらかの値を入力してください。
KAPL10665-I	The dlmpr utility completed.	説明 HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ (dlmpr) が正常終了しました。 対処 特にありません。dlmpr ユティリティについては、「7.6」を参照してください。
KAPL10920-W	Processing for HDLM Config Manager interrupted. Execute the HDLM-configuration definition utility (dlmcfgmgr) again.	説明 HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfgmgr) の処理を中断しました。 対処 再度 dlmcfgmgr ユティリティを実行してください。dlmcfgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10922-E	The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version. Install the HDLM software that supports this kernel version.	<p>説明</p> <p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。</p> <p>対処</p> <p>現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。</p>
KAPL10923-E	The HDLM file is invalid. File name = aa...aa. Reinstall the HDLM software.	<p>説明</p> <p>HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。</p> <p>aa...aa : 異常が見つかったファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL10934-W	A file could not be opened. File name = /etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf, Errno = aa...aa. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明</p> <p>HDLM ユティリティログ設定ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf) のオープンに失敗しました。dlmcfmgr ユティリティはログファイルのサイズの上限を 1024KB として、処理を続行します。</p> <p>aa...aa : エラー番号 (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>ファイルの有無を確認してください。異常がない場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10935-W	An internal error occurred in the file operation. File name = /etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>HDLM ユティリティログ設定ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf) の操作中に内部エラーが発生しました。dlmcfmgr ユティリティはログファイルのサイズの上限を 1024KB として、処理を続行します。</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10936-W	The file format is invalid. File name = /etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明</p> <p>HDLM ユティリティログ設定ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf) の形式が不正です。dlmcfmgr ユティリティはログファイルのサイズの上限を 1024KB として、処理を続行します。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>対処</p> <p>dlmcfmgmgr ユティリティを-logfs パラメタ指定で再実行してください。再実行してもエラーが出力される場合は、通常ファイルではない/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf が存在する可能性があります。/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm_utillog.conf を削除してから、dlmcfmgmgr ユティリティを再実行してください。dlmcfmgmgr ユティリティについては、「7.3」を参照してください。</p>
KAPL10937-W	The maximum number of paths was exceeded. Revise the configuration so that the number of paths is less than, or the same as, the maximum number. Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明</p> <p>システム全体のパス数が、HDLM がサポートするパス数の上限値を超えたので、構成の見直しを行ってください。</p> <p>対処</p> <p>HDLM がサポートするパス数の上限値を超えているため、システム全体のパス数の見直しを行ってください。HDLM がサポートするパス数については「3.1.13」を参照してください。</p>
KAPL10938-I	dlmcfmgmgr Log File Size(KB) : aa...aa	<p>説明</p> <p>aa...aa : dlmcfmgmgr ユティリティのログファイルのファイルサイズの設定値またはデフォルト値</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL10939-W	An error occurred during processing to read a file. File name = aa...aa	<p>説明</p> <p>ファイルの読み込み処理でエラーが発生しました。</p> <p>aa...aa : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>このメッセージよりも前に出力されたメッセージに従って対応してください。</p>
KAPL10940-W	The maximum wait time has been reached. Maximum wait time = aa...aa, Checking interval = bb...bb	<p>説明</p> <p>最大待ち時間に到達しました。</p> <p>aa...aa : 最大待ち時間</p> <p>bb...bb : チェック間隔</p> <p>対処</p> <p>HDLM デバイスが正しく構成されていることを確認してください。</p> <p>正しく構成されていない場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10941-W	The file could not be opened. File name = aa...aa, Errno = bb...bb	<p>説明</p> <p>ファイルのオープンに失敗しました。</p> <p>aa...aa : ファイル名</p> <p>bb...bb : エラー番号</p> <p>対処</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>HDLM デバイスが正しく構成されていることを確認してください。</p> <p>正しく構成されていない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10942-W	Memory could not be allocated. Size = <i>aa...aa</i> , Errno = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>メモリの確保に失敗しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : サイズ</p> <p><i>bb...bb</i> : エラー番号</p> <p>対処</p> <p>HDLM デバイスが正しく構成されていることを確認してください。</p> <p>正しく構成されていない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10943-W	An error occurred during processing to read a file in the (<i>aa...aa</i>) function. File name = <i>bb...bb</i> , Errno = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>関数 (<i>aa...aa</i>) でファイルの読み込みに失敗しました。</p> <p><i>bb...bb</i> : ファイル名</p> <p><i>cc...cc</i> : エラー番号</p> <p>対処</p> <p>HDLM デバイスが正しく構成されていることを確認してください。</p> <p>正しく構成されていない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p> <p>DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10944-I	Checking will now start. Checking interval = <i>aa...aa</i> , Check count = <i>bb...bb</i> , Maximum wait time = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p>チェックを開始します。</p> <p><i>aa...aa</i> : チェック間隔</p> <p><i>bb...bb</i> : チェック回数</p> <p><i>cc...cc</i> : 最大待ち時間</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL10948-W	An invalid entry is registered in the file. File name = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>ファイルの登録内容が不正です。</p> <p><i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>/etc/opt/DynamicLinkManager/hdlm.conf ファイルを次のとおり修正し、ホストを再起動してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ FC-SAN 環境の場合 iscsi_boot=n ◦ IP-SAN 環境の場合 iscsi_boot=y

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL10949-E	A necessary file was not found. File name = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>必要なファイルが見つかりませんでした。 <i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL10950-E	An error occurred during creation of an HDLM temporary file. File name = <i>aa...aa</i> . Refer to the Messages section of the HDLM User's Guide for instructions to correct this problem.	<p>説明</p> <p>HDLM の一時ファイル作成でエラーが発生しました。 <i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>ルートディレクトリ「/」に十分な空き容量があることを確認してください。 ルートディレクトリ「/」に十分な空き容量がある場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL10959-E	The configuration definition file is invalid. Error Code = <i>aa...aa</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p>構成定義ファイル (/etc/opt/DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf) の内容が不正です。 <i>aa...aa</i> : 内部コード (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>

8.11 KAPL11001~KAPL12000

メッセージの言語種別は、Linux の LANG 環境変数の値に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。

表 8-10 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL11901-I	<i>aa...aa</i> を開始しました。 <i>aa...aa</i> has started.	<p>説明</p> <p>ホスト上でのオペレーションを開始しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : オペレーション (文字列※)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ パス情報取得 (Get Path Information) ◦ オプション情報取得 (Get Option Information) ◦ オプション情報設定 (Set Option Information) ◦ データクリア (Clear Data) ◦ HDLM ドライバステータス取得 (Get HDLM Driver Status) ◦ HDLM マネージャステータス取得 (Get HDLM Manager Status) ◦ HDLM アラートドライバステータス取得 (Get HDLM Alert Driver Status) ◦ SNMP Trap 情報取得 (Get SNMP Trap Information) ◦ SNMP Trap 情報設定 (Set SNMP Trap Information) ◦ LU 単位ロードバランスアルゴリズム設定 (Set LU Load Balance) ◦ パスステータスログ情報取得 (Get Path Status Log Information) ◦ ローカル時間取得 (Get Local Time) ◦ パス情報追加 (Add Path Information) ◦ パス情報削除 (Delete Path Information) ◦ ストレージ認識情報設定 (Set Storage Identification Information) <p>注※</p> <p>英語メッセージ中では、括弧内の英文字列が出力されます。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL11902-I	<i>aa...aa</i> を開始しました。PathID = <i>bb...bb</i> <i>aa...aa</i> has started. PathID = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>ホスト上でのオペレーションを開始しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : オペレーション (文字列※)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ オンライン (Online) ◦ オフライン (Offline) <p><i>bb...bb</i> : オペレーション対象パスの PathID (10 進数)</p> <p>注※</p> <p>英語メッセージ中では、括弧内の英文字列が出力されます。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL11903-I	<i>aa...aa</i> が正常終了しました。 <i>aa...aa</i> has completed normally.	<p>説明</p> <p>ホスト上でのオペレーションが正常に終了しました。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>aa...aa</i> : 次を示すオペレーション (文字列※)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ パス情報取得 (Get Path Information) ◦ オプション情報取得 (Get Option Information) ◦ オプション情報設定 (Set Option Information) ◦ データクリア (Clear Data) ◦ HDLM ドライバステータス取得 (Get HDLM Driver Status) ◦ HDLM マネージャステータス取得 (Get HDLM Manager Status) ◦ HDLM アラートドライバステータス取得 (Get HDLM Alert Driver Status) ◦ オンライン (Online) ◦ オフライン (Offline) ◦ SNMP Trap 情報取得 (Get SNMP Trap Information) ◦ SNMP Trap 情報設定 (Set SNMP Trap Information) ◦ LU 単位ロードバランスアルゴリズム設定 (Set LU Load Balance) ◦ パスステータスログ情報取得 (Get Path Status Log Information) ◦ ローカル時間取得 (Get Local Time) ◦ パス情報追加 (Add Path Information) ◦ パス情報削除 (Delete Path Information) ◦ ストレージ認識情報設定 (Set Storage Identification Information) <p>注※ 英語メッセージ中では、括弧内の英文字列が出力されます。</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL11904-E	<p><i>aa...aa</i> が異常終了しました。エラーステータス = <i>bb...bb</i> <i>aa...aa</i> has completed abnormally. Error status = <i>bb...bb</i></p>	<p>説明 ホスト上でのオペレーションが異常終了しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : オペレーション (文字列※)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ パス情報取得 (Get Path Information) ◦ オプション情報取得 (Get Option Information) ◦ オプション情報設定 (Set Option Information) ◦ データクリア (Clear Data) ◦ HDLM ドライバステータス取得 (Get HDLM Driver Status) ◦ HDLM マネージャステータス取得 (Get HDLM Manager Status)

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<ul style="list-style-type: none"> HDLM アラートドライバステータス取得 (Get HDLM Alert Driver Status) オンライン (Online) オフライン (Offline) SNMP Trap 情報取得 (Get SNMP Trap Information) SNMP Trap 情報設定 (Set SNMP Trap Information) LU 単位ロードバランスアルゴリズム設定 (Set LU Load Balance) パスステータスログ情報取得 (Get Path Status Log Information) パス情報追加 (Add Path Information) パス情報削除 (Delete Path Information) ストレージ認識情報設定 (Set Storage Identification Information) <p><i>bb...bb</i> : API からのエラーステータス (文字列)</p> <p>注※ 英語メッセージ中では、括弧内の英文字列が出力されます。</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL11905-E	予測できないエラーが発生しました。 An unexpected error occurred.	<p>説明 ホスト内での処理で例外が発生しました。</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL11906-I	GUI 情報 - <i>aa...aa</i> GUI information - <i>aa...aa</i>	<p>説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : トレース情報 (文字列)</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL11907-I	XML 受信 - <i>aa...aa</i> XML reception - <i>aa...aa</i>	<p>説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : XML 情報 (文字列)</p> <p>対処 特にありません。</p>
KAPL11908-I	XML 送信 - <i>aa...aa</i> XML transmission - <i>aa...aa</i>	<p>説明 問題発生時の調査に必要な情報です。 <i>aa...aa</i> : XML 情報 (文字列)</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		特にありません。

8.12 KAPL12001～KAPL13000

この節で説明するメッセージの言語種別には、英語、または日本語が選択できます。出力されるメッセージの言語種別は、LANG 環境変数の設定に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。英語だけが表示されているメッセージについては常に英語で出力されます。

表 8-11 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL12035-E	インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致しません。 The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version.	説明 インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。 対処 現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。
KAPL12036-E	HDLM のファイルが不正です。 ファイル名 = aa...aa The HDLM file is invalid. File name = aa...aa	説明 HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。 aa...aa : 異常が見つかったファイル名 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL12301-E	ブートディスクサポートユーティリティは dlmmkinitrd という名称のみで実行できます。 This script can only be executed with the name dlmmkinitrd.	対処 ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) の名称を dlmmkinitrd に変更してください。
KAPL12302-E	ブートディスクサポートユーティリティは複数同時に実行できません。 Multiple instances of the utility for supporting the boot disk	対処 実行中のブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) が終了してから、再度 dlmmkinitrd ユティリティを実行してください。dlmmkinitrd ユティリティについては、「7.5」を参照してください。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	cannot be executed concurrently.	
KAPL12303-E	<p>ファイルまたはディレクトリが存在しません。ファイル名 = <i>aa...aa</i></p> <p>A file or directory does not exist. File name = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : 存在しないファイル名</p> <p>対処</p> <p>dracut コマンドの場合</p> <p>メッセージ中表示されたファイル名が、以下に示す HDLM のファイル名の場合は、HDLM が正しくインストールされていないおそれがあります。再度 HDLM をインストールしてください。</p> <p><code>/etc/dracut.conf.d/hdlm-dracut.conf</code></p> <p>メッセージ中表示されたファイル名が、その他のファイル名の場合</p> <p>OS(カーネル)または HBA ドライバが正しくインストールされていないおそれがあります。</p> <p>表示されたファイルの有無を確認してください。</p> <p>dlmmkinitrd の場合</p> <p>メッセージ中表示されたファイル名が、ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) の <code>-fstab</code> パラメタで指定したファイル名の場合</p> <p>指定したファイル名を確認し、存在する <code>fstab</code> のファイル名を指定して再度実行してください。</p> <p>メッセージ中表示されたファイル名が、以下に示す HDLM のファイル名の場合は、HDLM が正しくインストールされていないおそれがあります。再度 HDLM をインストールしてください。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合は、<code>/lib/modules/カーネルのリリース番号/kernel/drivers/DynamicLinkManager/</code> を次のとおりに読み替えてください。</p> <p><code>/lib/modules/2.6.18-xxx/extra/hitachi/DynamicLinkManager</code> ファイル名のカーネルのリリース番号は <code>uname -r</code> コマンドで表示される値を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <code>/etc/opt/DynamicLinkManager/dlmmkinitrd.conf</code> <code>/lib/modules/カーネルのリリース番号/kernel/drivers/DynamicLinkManager/sddlmfdrv.o</code>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<ul style="list-style-type: none"> • /lib/modules/カーネルのリリース番号/kernel/drivers/DynamicLinkManager/sddlmfdrv.ko • /lib/modules/カーネルのリリース番号/kernel/drivers/DynamicLinkManager/sddlmadv.o • /lib/modules/カーネルのリリース番号/kernel/drivers/DynamicLinkManager/sddlmadv.ko <p>メッセージ中に表示されたファイル名が、その他のファイル名の場合 OS(カーネル)または HBA ドライバが正しくインストールされていないおそれがあります。表示されたファイルの有無を確認してください。</p>
KAPL12305-I	ブートディスクサポートユーティリティの実行がユーザによって中断されました。 The utility for supporting the boot disk was stopped by the user.	対処 再実行してください。
KAPL12306-I	初期 RAM ディスクイメージファイルの構成リストを作成中です。 The list of files required in the initial ramdisk image is being created.	対処 特にありません。
KAPL12307-I	初期 RAM ディスクファイルシステムを作成中です。 The initial ramdisk file system is being created.	対処 特にありません。
KAPL12308-I	初期 RAM ディスクファイルシステムをマウント中です。マウントポイント = aa...aa The initial ramdisk file system is being mounted. Mount point = aa...aa	説明 aa...aa : 使用するマウントポイント 対処 特にありません。
KAPL12309-I	初期 RAM ディスクにファイルをコピー中です。 Required files are being copied to the initial ramdisk.	対処 特にありません。
KAPL12310-I	linuxrc ファイルを作成中です。 The linuxrc executable is being created.	対処 特にありません。
KAPL12311-I	初期 RAM ディスクに fstab ファイルを作成中です。 The fstab file for the initial ramdisk is being created.	対処 特にありません。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL12312-I	初期 RAM ディスクにディレクトリを作成中です。 The directories for the initial ramdisk are being created.	対処 特にありません。
KAPL12313-I	初期 RAM ディスクファイルシステムをアンマウント中です。 Initial ramdisk is being unmounted.	対処 特にありません。
KAPL12314-I	初期 RAM ディスクイメージファイルを圧縮中です。 The compressed initial ramdisk image is being created.	対処 特にありません。
KAPL12315-I	RAM ディスクサイズが <i>bb...bb</i> KB の初期 RAM ディスクイメージファイル (<i>aa...aa</i>) を作成しました。 A compressed initial ramdisk image <i>aa...aa</i> was created with the ramdisk size = <i>bb...bb</i> KB.	説明 <i>aa...aa</i> : 作成した初期 RAM ディスクイメージファイル名 <i>bb...bb</i> : 作成した初期 RAM ディスクイメージファイルが必要とするメモリサイズ (10 進数) 対処 特にありません。
KAPL12316-I	ルートパーティションとしてマウントされた SCSI デバイスは <i>aa...aa</i> です。 The SCSI root partition is <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ルートパーティションとしてマウントされた SCSI デバイス名 対処 特にありません。
KAPL12318-W	Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 の場合 使用例: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmmkinitrd [-v] [-f] [-fstab fstab-name] initrd-image kernel-version Usage: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmmkinitrd [-v] [-f] [-fstab fstab-name] initrd-image kernel-version SUSE LINUX Enterprise Server の場合 使用例: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmmkinitrd [-i initrd-image] [-b boot-directory] [-h] Usage: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmmkinitrd [-i initrd-image] [-b boot-directory] [-h]	対処 ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) 実行時に指定したパラメータを確認してから再実行してください。 dlmmkinitrd ユティリティについては、「7.5」を参照してください。
KAPL12319-E	ブートディスクサポートユーティリティが処理に失敗しました。 The utility for supporting the boot disk has failed.	対処 このメッセージよりも前に出力されたメッセージに従って対応してください。
KAPL12320-E	ファイルまたはディレクトリがすでに存在しています。ファイル名 = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 重複が見つかったファイル名 対処

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	A file or directory already exists. File name = <i>aa...aa</i>	ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd)のパラメタに指定する初期 RAM ディスクイメージファイル名には、既存のファイル名を指定しないでください。ただし、既存のファイルに上書きする場合は、 <i>-f</i> パラメタを指定してください。なお、初期 RAM ディスクイメージファイル名に既存のディレクトリ名を指定した場合には、 <i>-f</i> パラメタを指定しても上書きできません。ディレクトリを削除してから再度実行してください。
KAPL12321-E	ファイルに無効なルートパーティションが登録されています。ファイル名 = <i>aa...aa</i> An invalid root partition is specified in the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 問題が見つかったファイル名 対処 /etc/fstab ファイルで指定されるルートパーティションを SCSI または HDLM デバイスに変更してください。 または、/etc/fstab ファイルで指定されるルートパーティションを表すデバイスが HDLM の管理対象になるように設定してください。
KAPL12322-I	Execution of linuxrc started.	説明 linuxrc を開始しました。 対処 特にありません。
KAPL12323-I	The insertion of the module was started. Module name = <i>aa...aa</i>	説明 モジュールのロードを開始しました。 <i>aa...aa</i> : ロードを開始したカーネルモジュール名 対処 特にありません。
KAPL12324-E	The module could not be inserted. Module name = <i>aa...aa</i>	説明 モジュールのロードに失敗しました。 <i>aa...aa</i> : ロードに失敗したカーネルモジュール名 対処 初期 RAM ディスクイメージファイルを作成してからシステムの環境を変更していないか確認してください。 ブートローダのコンフィグファイルに指定した初期 RAM ディスクイメージファイルに誤りがないか確認してください。
KAPL12325-I	コマンドを開始しました。コマンド名 = <i>aa...aa</i> The command started. Command name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 実行を開始したコマンド名 対処 特にありません。
KAPL12326-E	コマンドの実行に失敗しました。コマンド名 = <i>aa...aa</i> The command could not execute. Command name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 実行に失敗したコマンド名 対処 dracut コマンドの場合 出力されたコマンドに応じて次の確認を行ってから、dracut コマンドを再実行してください。 また、このメッセージの前にエラーメッセージが出力されていれば、メッセージの

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>内容を参照して、エラー要因を取り除いてください。</p> <p>cp の場合</p> <p>ルートディレクトリ「/」に、十分な空き容量があることを確認してください。また、ディレクトリに書き込み権限があることを確認してください。</p> <p>dlmofgmgr の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • 初期 RAM ディスクイメージファイルを作成してから OS のバージョンを変えていないか確認してください。 • コンフィグマネージャのログに出力された内容に従って対処してください。 • ルートディレクトリ「/」に書き込み権限があることを確認してください。 <p>dlmkmgr の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • HDLM の構成がされているか確認してください。 • コンフィグマネージャのログに出力された内容に従って対処してください。 • ルートディレクトリ「/」に書き込み権限があることを確認してください。 <p>mkdir の場合</p> <p>次のディレクトリに、十分な空き容量があることを確認してください。また、ディレクトリに書き込み権限があることを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • /etc/opt/ DynamicLinkManager • /opt/DynamicLinkManager • ルートディレクトリ「/」 <p>mount の場合</p> <p>loop デバイスに空きがあることを確認してください。</p> <p>umount の場合</p> <p>一時ファイルが作成されたままになるため次の手順で回復してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. /etc/opt/ DynamicLinkManager/tmp/ initrdmnt.\$\$ (\$\$はプロセス ID) をアンマウントしてください。 2. /etc/opt/ DynamicLinkManager/tmp/ initrdmnt.\$\$ (\$\$はプロセス ID) ファイルを削除してください。 <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p> <p>dlmmkinitrd の場合 出力されたコマンドに応じて次の確認を行ってから、ブートディスクサポートユティリティ(dlmmkinitrd)を再実行してください。</p> <p>また、このメッセージの前にエラーメッセージが出力されていれば、メッセージの内容を参照して、エラー要因を取り除いてください。</p> <p>cp の場合 ルートディレクトリ「/」に、十分な空き容量があることを確認してください。また、ディレクトリに書き込み権限があることを確認してください。</p> <p>cpio または dd の場合 /etc/opt/DynamicLinkManager ディレクトリに、十分な空き容量があることを確認してください。また、ディレクトリに書き込み権限があることを確認してください。</p> <p>dlmcfmgr の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • 初期 RAM ディスクイメージファイルを作成してから OS のバージョンを変えていないか確認してください。 • コンフィグマネージャのログに出力された内容に従って対処してください。 • ルートディレクトリ「/」に書き込み権限があることを確認してください。 <p>dlnmgr の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • HDLM の構成がされているか確認してください。 • コンフィグマネージャのログに出力された内容に従って対処してください。 • ルートディレクトリ「/」に書き込み権限があることを確認してください。 <p>gzip の場合 初期 RAM ディスクイメージファイルの作成先に十分な空き容量があることを確認してください。また、ディレクトリに書き込み権限があることを確認してください。</p> <p>mke2fs または touch の場合 ルートディレクトリ「/」に書き込み権限があることを確認してください。</p> <p>mkdir の場合 次のディレクトリに、十分な空き容量があることを確認してください。</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>また、ディレクトリに書き込み権限があることを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • /etc/opt/ DynamicLinkManager • /opt/DynamicLinkManager • ルートディレクトリ「/」 <p>mount の場合 loop デバイスに空きがあることを確認してください。</p> <p>umount の場合 一時ファイルが作成されたままになるため次の手順で回復してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. /etc/opt/ DynamicLinkManager/tmp/ initrdmnt.\$\$ (\$\$はプロセス ID) をアンマウントしてください。 2. /etc/opt/ DynamicLinkManager/tmp/ initrdmnt.\$\$ (\$\$はプロセス ID) ファイルを削除してください。 <p>vol_id の場合 /etc/fstab ファイルに記載されたルートディレクトリ「/」に、ファイルシステムが作成されていることを確認してください。</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL12327-E	<p>ファイルの登録内容が不正です。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> An invalid entry is registered in the file. File name = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明 <i>aa...aa</i> : 問題が見つかったファイル名</p> <p>対処</p> <p>dracut コマンドの場合 出力されたファイル名に応じて次の対処を実行してから、dracut コマンドを再実行してください。</p> <p>/etc/lvm/lvm.conf ファイルの場合 次の行を「3.7.5」または「3.7.6」を参照して編集してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • filter • types • md_component_detection <p>dlmmkinitrd の場合 出力されたファイル名に応じて次の対処を実行してから、ブートディスクサポートユーティリティ(dlmmkinitrd)を再実行してください。</p> <p>/etc/lvm/lvm.conf ファイルの場合 次の行を「3.7.5」または「3.7.6」を参照して編集してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • filter • types

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<ul style="list-style-type: none"> md_component_detection /etc/opt/DynamicLinkManager/dlmmkinitrd.conf ファイルの場合 HDLM がブートディスクとしてサポートする HBA ドライバをインストールしてください。または、HDLM がブートディスクとしてサポートする HBA を使用してください。 /etc/sysconfig/kernel ファイルの場合 OS の環境が不正です。/etc/sysconfig/kernel ファイルの「INITRD_MODULES=」の行に、初期 RAM ディスクイメージファイルに含める必要がある HBA ドライバ名を追加してください。
KAPL12328-I	Execution of linuxrc completed.	説明 linuxrc が終了しました。 対処 特にありません。
KAPL12329-I	ブートディスクサポートユーティリティを開始しました。 The utility for supporting the boot disk started.	対処 特にありません。
KAPL12330-I	ブートディスクサポートユーティリティが終了しました。 The utility for supporting the boot disk completed.	対処 特にありません。
KAPL12331-E	指定されたバージョンのカーネルのディレクトリが見つかりません。ディレクトリ名 = aa...aa A directory with the specified kernel version does not exist. Directory name = aa...aa	説明 aa...aa : カーネルモジュールが格納されているディレクトリ Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 の場合 /lib/modules/ディレクトリ以下は、パラメタで指定されたカーネルバージョン SUSE LINUX Enterprise Server の場合 /lib/modules/ディレクトリ以下は、ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) が認識したカーネルバージョン 対処 次の確認を行ってから、再度 dlmmkinitrd ユティリティを実行してください。 <ol style="list-style-type: none"> メッセージ中に表示されたバージョンのカーネルがインストールされていることを確認してください。 Red Hat Enterprise Linux の場合、パラメタに指定したカーネルバージョンを確認してください。 パラメタの詳細については、「7.5」を参照してください。 問題が解決しない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL12332-E	ファイルにルートパーティションを見つけることができません。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> The root partition could not be found in the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ブートディスクサポートユティリティ (dlmmkinitrd) が参照したファイル名 対処 /etc/fstab ファイルにルートパーティションが設定されていることを確認してください。 ルートパーティションがマウントされていることを確認してください。
KAPL12333-E	ファイルに HDLM がブートディスクとしてサポートできる HBA が見つかりません。ファイル名 = <i>aa...aa</i> An HBA that HDLM can support as a boot disk was not found in the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ブートディスクサポートユティリティ (dlmmkinitrd) が参照したファイル名 対処 HDLM デバイスをブートディスクとして使用する場合にサポートする HBA ドライバが下記のファイルに設定されていることを確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 または Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合 /etc/modprobe.conf ファイル SUSE LINUX Enterprise Server を使用している場合 /etc/sysconfig/kernel ファイルの INITRD_MODULES= の行 また、その HBA ドライバがインストールされていることを確認してください。
KAPL12334-E	ファイルにルートパーティションが複数登録されています。ファイル名 = <i>aa...aa</i> Multiple root partition entries exist in the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ブートディスクサポートユティリティ (dlmmkinitrd) が参照したファイル名 対処 dlmmkinitrd ユティリティの -fstab パラメータで指定した fstab ファイル、または /etc/fstab ファイルのルートパーティションの設定を変更してから、再度実行してください。
KAPL12335-E	ファイルに HDLM がブートディスクとしてサポートできるファイルシステムが見つかりません。ファイル名 = <i>aa...aa</i> A file system that HDLM can support as a boot disk was not found in the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ブートディスクサポートユティリティ (dlmmkinitrd) が参照したファイル名 対処 dlmmkinitrd ユティリティ -fstab パラメータで指定した fstab ファイル、または /etc/fstab ファイルのルートパーティションのファイルシステムを、HDLM デバイスをブートディスクとして使用する場合に適用可能なファイルシステム (ext2 または ext3) に変更してから再度実行してください。または、カーネルパッケージが正しくインストールされていることを確認してください。
KAPL12336-E	ブートディスクサポートユティリティを実行する権限がありません。	対処 ルート権限を持つユーザで再実行してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	The user does not have permission to execute the utility for supporting the boot disk.	
KAPL12337-E	ルートパーティションの UUID および LABEL 情報が取得できませんでした。 UUID and LABEL information on the root partition were not able to be acquired.	対処 ルートパーティションに UUID または LABEL が設定されていることを確認してください。設定されていない場合、ルートパーティションに UUID または LABEL を設定して再実行してください。
KAPL12338-E	コマンドが存在しない、または実行権限がありません。コマンド名 = <i>aa...aa</i> The command does not exist or does not have executable permissions. Command name = <i>aa...aa</i>	説明 指定されたコマンドが存在しない、または指定されたコマンドに実行権限がありません。 <i>aa...aa</i> : コマンド名 対処 指定されたコマンドが存在すること、および実行権限があることを確認してください。
KAPL12340-E	A backup of the configuration definition file was used to configure the HDLM devices. Confirm that the HDLM devices are properly configured, and then make them management targets before using them again.	説明 HDLM の SAN ブートにおいて、サーバ起動時に構成定義ファイルが破損していたため、構成定義ファイルバックアップを使用してサーバを起動しました。 対処 全ての HDLM デバイスと LDEV の対応が正しいことを確認してください。 対応が正しい場合は、管理対象外になっている HDLM デバイスを管理対象に戻してから使用してください。 また、対応が正しくない場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL12341-I	Execution of bootup script started.	対処 特にありません。
KAPL12342-I	Execution of bootup script completed.	対処 特にありません。
KAPL12343-I	ブート用ファイルを作成中です。 The bootup executable is being created.	対処 特にありません。
KAPL12344-I	初期 RAM ディスクイメージファイル(<i>aa...aa</i>)を作成しました。 A compressed initial ramdisk image (<i>aa...aa</i>) was created.	説明 <i>aa...aa</i> : 作成した初期 RAM ディスクイメージファイル名 対処 特にありません。
KAPL12345-E	インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致しません。 The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the	説明 インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。 対処 現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	currently running kernel version.	
KAPL12346-E	HDLM のファイルが不正です。 ファイル名 = <i>aa...aa</i> The HDLM file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。 <i>aa...aa</i> : 異常が見つかったファイル名 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL12350-E	The HDLM device corresponding to root device could not be found. Root device name = <i>aa...aa</i>	説明 ルートデバイス名と一致する HDLM デバイス名が見つかりませんでした。 <i>aa...aa</i> : ルートデバイス名 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL12351-I	The collection of files for HDLM started.	説明 HDLM に必要なファイルの収集を開始しました。 対処 特にありません。
KAPL12352-I	The collection of files for HDLM completed.	説明 HDLM に必要なファイルの収集が終了しました。 対処 特にありません。
KAPL12361-E	The specified parameter of the utility for changing HDLM device names is invalid. Parameter = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 指定したパラメタ 対処 正しいパラメタを指定して、再度 HDLM デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)を実行してください。
KAPL12362-W	Usage: <i>aa...aa</i> [-f -o]	説明 <i>aa...aa</i> : dlmchname 対処 正しいパラメタを指定して、再度 HDLM デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)を実行してください。
KAPL12363-E	Memory could not be allocated. Size = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 確保しようとしたメモリサイズ(10 進数) 対処 不要なアプリケーションが動作している場合は停止してください。また、実メモリサイズが不足している場合はメモリを増設してください。実メモリが十分にある場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ(DLMgetras)を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL12364-E	An internal error occurred in the file operation. File name = <i>aa...aa</i> , Code = <i>bb...bb</i> , Errno = <i>cc...cc</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i>: ファイル名 <i>bb...bb</i>: 内部コード(10進数) <i>cc...cc</i>: エラー番号(errno)(10進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras)を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL12365-E	Multiple instances of the utility for changing HDLM device names and the utility for managing the HDLM configuration cannot be executed concurrently. Wait until the utility for changing HDLM device names or the utility for managing the HDLM configuration ends, and then re-execute the utility for changing HDLM device names.	<p>対処</p> <p>次に示すいずれかの方法を実行してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 実行中のデバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)が終了してから、再度デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)を実行してください。 実行中のデバイス構成ユーティリティ (dlmcfmgr)が終了してから、再度デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)を実行してください。
KAPL12366-E	The file format is invalid. File name = <i>aa...aa</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i>: /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras)を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL12367-E	You lack permissions required to execute the utility for changing HDLM device names. Execute the utility as a user who has root permissions.	<p>対処</p> <p>ルート権限を持つユーザで、再度 HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname) を実行してください。</p>
KAPL12368-E	An error occurred during creation of an HDLM temporary file. File name = <i>aa...aa</i> , Code = <i>bb...bb</i> , Errno = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i>: ファイル名</p> <ol style="list-style-type: none"> /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmfdrv.unconf /etc/opt/DynamicLinkManager/ dlmchname.conf <p><i>bb...bb</i>: 内部コード(10進数) <i>cc...cc</i>: エラー番号(errno)(10進数)</p> <p>対処</p> <p>ルートディレクトリ「/」に十分な空き容量があることを確認してください。 ルートディレクトリ「/」に十分な空き容量がある場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras)を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約</p>

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL12369-E	The file could not be created. File name = <i>aa...aa</i> , Code = <i>bb...bb</i> , Errno = <i>cc...cc</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i>: ファイル名</p> <p>a /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf</p> <p>b /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmfdrv.unconf</p> <p>c /etc/opt/DynamicLinkManager/ dlmchname.conf</p> <p><i>bb...bb</i>: 内部コード(10 進数)</p> <p><i>cc...cc</i>: エラー番号(errno)(10 進数)</p> <p>対処</p> <p>ルートディレクトリ「/」に十分な空き容量があることを確認してください。 ルートディレクトリ「/」に十分な空き容量がある場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL12370-E	An internal error occurred in the utility for changing HDLM device names. Code = <i>aa...aa</i> , Errno = <i>bb...bb</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i>: 内部コード(10 進数)</p> <p><i>bb...bb</i>: エラー番号(errno)(10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL12371-E	A file could not be opened. File name = <i>aa...aa</i> , Code = <i>bb...bb</i> , Errno = <i>cc...cc</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i>: ファイル名</p> <p>a /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmfdrv.conf</p> <p>b /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmfdrv.unconf</p> <p>c /etc/opt/DynamicLinkManager/ dlmchname.conf</p> <p><i>bb...bb</i>: 内部コード(10 進数)</p> <p><i>cc...cc</i>: エラー番号(errno)(10 進数)</p> <p>対処</p> <p>HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
KAPL12372-W	The entered value is invalid.	<p>対処</p> <p>KAPL12374-I のメッセージが出力されたあと、正しい値[y/n]を入力してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL12373-E	The entered value is invalid. The utility for changing HDLM device names will now stop. Re-execute the utility.	対処 再度 HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)を実行してください。
KAPL12374-I	This operation will change the HDLM device configuration. Do you want to continue? [y/n]:	対処 継続する場合は'y', 中止する場合は'n'を入力してください。
KAPL12375-W	Processing of the utility for changing HDLM device names was interrupted. Re-execute the utility.	対処 再度 HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)を実行してください。
KAPL12376-E	The value entered for the storage system serial number and LU number is incorrect in the device name change definition file. Incorrect value = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 不正なストレージサブシステムのシリアル番号と内部 LU 番号 対処 表示されたストレージサブシステムのシリアル番号と内部 LU 番号を元にデバイス名変更定義ファイルを修正して、再度 HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)を実行してください。
KAPL12377-I	The utility for changing HDLM device names started: <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 日時(例: Fri Aug 23 19 : 12 : 50 2004) 対処 特にありません。
KAPL12378-I	Restart the machine for configuration changes to take effect.	対処 古い HDLM デバイス名を使っていたアプリケーションは新しい HDLM デバイス名を使うように変更して、HDLM デバイス名の変更を有効にするためシステムを再起動してください。
KAPL12379-I	The utility for changing HDLM device names finished normally.	対処 特にありません。
KAPL12380-E	The file does not exist. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ファイル名 a /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlmdrv.conf b /etc/opt/DynamicLinkManager/ dlmchname.conf 対処 次に示すいずれかの方法を実行してください。 a 構成定義ファイル(.dlmdrv.conf)が存在しない場合、HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart)を実行して HDLM デバイスを構成してください。HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart)については、「7.8」を参照してください。 b デバイス名変更定義ファイル (dlmchname.conf)が存在しない場合は、 o オプションをつけて HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)を実行してデバイス名変更定義ファイル (dlmchname.conf)を作成してください。 HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)については、「7.4」を参照してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL12386-E	An internal error occurred in the utility for changing HDLM device names. File name = <i>aa...aa</i> , Code = <i>bb...bb</i> , Errno = <i>cc...cc</i> . Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	説明 <i>aa...aa</i> : ファイル名 <i>bb...bb</i> : 内部コード(10進数) <i>cc...cc</i> : エラー番号(errno)(10進数) 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras)を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL12387-E	An internal error occurred in the utility for changing HDLM device names. Execute the DLMgetras utility to collect error information, and then contact your vendor or maintenance company.	対処 構成定義ファイルと除外ディスクファイルを、HDLM デバイス名変更ユーティリティ実行前の状態に戻しました。正常な状態に戻すためシステムを再起動してください。
KAPL12388-E	The utility for changing HDLM device names ended abnormally.	対処 このメッセージ以前に出力されているエラーメッセージを確認し、そのエラーメッセージの対処を実行してください。
KAPL12389-E	Required entries were not found in the device name change definition file.	対処 HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)については、「7.4」を参照してください。
KAPL12390-I	The user terminated the operation.	対処 特にありません。
KAPL12391-E	The specified HDLM device name in the device name change definition file is already in use. HDLM device name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 使われている HDLM デバイス名 対処 デバイス名変更定義ファイル (dlmchname.conf)の内容を確認してください。そして、HDLM デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)を実行してください。HDLM デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)については、「7.4」を参照してください。
KAPL12392-E	Duplicated entries were found in the dlmchname.conf file. Duplicated entry = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 重複する項目 対処 デバイス名変更定義ファイル (dlmchname.conf)の内容を確認してください。そして、HDLM デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)を実行してください。HDLM デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)については、「7.4」を参照してください。
KAPL12393-E	The file format of the device name definition file is invalid. Incorrect line = <i>aa...aa</i> Duplicated entries were found in the dlmchname.conf file. Duplicated entry = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : デバイス名変更定義ファイル (dlmchname.conf)の無効な項目 対処 デバイス名変更定義ファイル (dlmchname.conf)の内容を確認してください。そして、HDLM デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)を実行してください。HDLM

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		デバイス名変更ユーティリティ(dlmchname)については、「7.4」を参照してください。
KAPL12394-E	An HDLM device specified in the device name change definition file is invalid. HDLM device name = aa...aa	説明 aa...aa: 指定された HDLM デバイス名 対処 デバイス名変更定義ファイル (dlmchname.conf)で指定された HDLM デバイス名の形式を確認してください。そして HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)を再実行してください。HDLM デバイス名の形式は「2.6」を参照してください。HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)については、「7.4」を参照してください。
KAPL12395-E	The utility for changing HDLM device names cannot be executed because the HDLM driver has not been loaded.	対処 HDLM 起動ユーティリティ(dlmstart)を実行して HDLM デバイスを構成してから HDLM デバイス名変更ユーティリティを実行してください。HDLM デバイス名変更ユーティリティ (dlmchname)については、「7.4」を参照してください。
KAPL12551-E	HDLM ドライバオプション設定ユーティリティは dlmsetopt という名称のみで実行できます。The utility for setting HDLM driver option can be executed with the name dlmsetopt only.	対処 ユーティリティ名を dlmsetopt に戻して実行してください。
KAPL12552-E	HDLM ドライバオプション設定ユーティリティ (dlmsetopt) は複数同時に実行できません。Multiple instances of the utility for setting HDLM driver option (dlmsetopt) cannot execute concurrently.	対処 実行中のユーティリティが完了してから再度実行してください。 ユーティリティが複数同時に実行されていない場合は次のファイルを削除してから再度実行してください。 /etc/opt/ DynamicLinkManager/.dlm_modules.conf.lock
KAPL12553-W	Red Hat Enterprise Linux 5, Red Hat Enterprise Linux 6, Oracle Enterprise Linux 5 の場合 : 使用例: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmsetopt {-r retrycount -inqt InquiryTimeout - inqr InquiryRetry -prsup ReserveStatus -h} Usage: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmsetopt {-r retrycount -inqt InquiryTimeout - inqr InquiryRetry -prsup ReserveStatus -h} 上記以外の場合 :	対処 「7.7」を参照してください。それから正しい引数を指定して dlmsetopt ユティリティを再実行してください。

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
	使用例: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmsetopt {r retrycount -inqt InquiryTimeout - inqr InquiryRetry -h} Usage: /opt/ DynamicLinkManager/bin/ dlmsetopt {r retrycount -inqt InquiryTimeout - inqr InquiryRetry -h}	
KAPL12554-I	HDLM ドライバオプション設定 ユティリティを起動しました。 The utility for setting HDLM driver option has started.	対処 特にありません。
KAPL12555-I	HDLM ドライバオプション設定 ユティリティが正常終了しまし ました。 The utility for setting HDLM driver option completed normally.	対処 特にありません。
KAPL12556-I	HDLM ドライバオプション設定 ユティリティの実行に失敗しまし ました。 An attempt to execute the utility for setting HDLM driver option has failed.	対処 このメッセージの前に出力されるエラーメッ セージの対処に従って対処してください。
KAPL12557-I	HDLM ドライバオプション設定 ユティリティの実行がユーザに よって中断されました。 The user stopped the utility for setting HDLM driver option.	説明 このメッセージの前に KAPL12555-I のメッ セージが出力されていても、dlmsetopt ユティ リティの実行により設定された内容が無効とな り、dlmsetopt ユティリティを実行する前の状 態に戻ります。 対処 必要に応じて dlmsetopt ユティリティを再実 行してください。
KAPL12558-I	オプション設定を有効にするため システムを再起動してください。 Please restart the computer so that the option settings take effect.	対処 システムを再起動してください。
KAPL12559-E	パラメタに不正な値が指定されま した。オプション = aa...aa, パラ メタ = bb...bb An invalid value was specified in the parameter. Option = aa...aa, Parameter = bb...bb	説明 aa...aa : オプション bb...bb : 指定したパラメタ (最大 10 文字。10 文字を超えたら、10 文字分出力して「...」を付 加) 対処 「7.7」を参照してください。それから正しい引 数を指定して dlmsetopt ユティリティを再実 行してください。
KAPL12560-E	オプションが指定されていませ ん。 An option is not specified.	対処 「7.7」を参照してください。それから正しい引 数を指定して dlmsetopt ユティリティを再実 行してください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL12561-E	不正なオプションが指定されました。オプション = <i>aa...aa</i> An invalid option was specified. Option = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : オプション 対処 「7.7」を参照してください。それから正しい引数を指定して <code>d1msetopt</code> ユティリティを再実行してください。
KAPL12562-E	必要なファイルまたはディレクトリが見つかりませんでした。ファイルまたはディレクトリ名 = <i>aa...aa</i> A necessary file or directory was not found. File or directory name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 参照先ファイルまたはディレクトリ名 対処 メッセージに表示されたディレクトリまたはファイル名を変更していないことを確認してください。変更している場合は元に戻してから HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (<code>d1msetopt</code>) を再実行してください。
KAPL12563-E	ディレクトリの作成に失敗しました。ディレクトリ = <i>aa...aa</i> An attempt to create a directory has failed. Directory = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 作成しようとしたディレクトリ 対処 ディスクに十分な空き容量があることを確認してから HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (<code>d1msetopt</code>) を再実行してください。ファイルシステム上に不要なファイルが多数存在する場合は、削除してから <code>d1msetopt</code> ユティリティを再度実行してください。
KAPL12564-E	ファイルのバックアップに失敗しました。ファイル名 = <i>aa...aa</i> An attempt to back up a file has failed. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : バックアップ元ファイル名 対処 ディスクに十分な空き容量があることを確認してから HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (<code>d1msetopt</code>) を再実行してください。
KAPL12565-E	ファイルの更新ができませんでした。ファイル名 = <i>aa...aa</i> Could not modify file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : 更新ファイル名 対処 ディスクに十分な空き容量があることを確認してから HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (<code>d1msetopt</code>) を再実行してください。それでもこのメッセージが表示される場合は、不要なプロセスを止めてから HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (<code>d1msetopt</code>) を再実行してください。
KAPL12566-E	HDLM ドライバオプション設定ユティリティの実行が前回不正に停止されました。 The utility for setting HDLM driver option was executed and ended abnormally last time.	対処 <code>/etc/modprobe.conf</code> ファイルと <code>/etc/opt/DynamicLinkManager/DLMSETOPT/modprobe.conf</code> ファイルの内容を比較してください。その結果に応じて、次に示す手順を実行してください。 <code>/etc/opt/DynamicLinkManager/DLMSETOPT/modprobe.conf</code> ファイルは、 HDLM ドライバオプション設定ユティリティ (<code>d1msetopt</code>) を実行する前に HDLM がバックアップ用にコピーしたファイルです。Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合、 <code>/etc/modprobe.conf</code> を <code>/etc/modprobe.d/d1mdrvopt.conf</code> に読み替えてください。 。 ファイルの内容が一致した場合

メッセージ ID	メッセージテキスト	説明
		<p>/etc/opt/DynamicLinkManager/DLMSETOPT/modprobe.conf ファイルを削除してください。それから、再度 dlmsetopt ユティリティを実行して、エラーが発生しないことを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ファイルの内容が不一致だった場合 <p>/etc/opt/DynamicLinkManager/DLMSETOPT/modprobe.conf ファイルを/etc/modprobe.conf ファイルに上書きしたあと、/etc/modprobe.conf ファイルに設定した内容をユーザの環境に応じて再設定してください。そのあと、/etc/opt/DynamicLinkManager/DLMSETOPT/modprobe.conf ファイルを削除してください。それから、再度 dlmsetopt ユティリティを実行して、エラーが発生しないことを確認してください。</p>
KAPL12567-E	<p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致しません。</p> <p>The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version.</p>	<p>説明</p> <p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。</p> <p>対処</p> <p>現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。</p>
KAPL12568-E	<p>HDLM のファイルが不正です。</p> <p>ファイル名 = aa...aa</p> <p>The HDLM file is invalid. File name = aa...aa</p>	<p>説明</p> <p>HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。</p> <p>aa...aa : 異常が見つかったファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL12801-E	<p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致しません。</p> <p>The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version.</p>	<p>説明</p> <p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。</p> <p>対処</p> <p>現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。</p>
KAPL12802-E	<p>HDLM のファイルが不正です。</p> <p>ファイル名 = aa...aa</p> <p>The HDLM file is invalid. File name = aa...aa</p>	<p>説明</p> <p>HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。</p> <p>aa...aa : 異常が見つかったファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL12851-E	<p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカー</p>	<p>説明</p> <p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	<p>ネルのバージョンが一致しません。</p> <p>The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version.</p>	<p>をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。</p> <p>対処</p> <p>現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。</p>
KAPL12852-E	<p>HDLM のファイルが不正です。</p> <p>ファイル名 = <i>aa...aa</i></p> <p>The HDLM file is invalid. File name = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明</p> <p>HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。</p> <p><i>aa...aa</i> : 異常が見つかったファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL12901-E	<p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致しません。</p> <p>The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version.</p>	<p>説明</p> <p>インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが異なります。HDLM をインストールしたあとにカーネルのパッケージをインストールした可能性があります。</p> <p>対処</p> <p>現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。</p>
KAPL12902-E	<p>HDLM のファイルが不正です。</p> <p>ファイル名 = <i>aa...aa</i></p> <p>The HDLM file is invalid. File name = <i>aa...aa</i></p>	<p>説明</p> <p>HDLM の処理に必要なファイルがないか、内容が不正です。</p> <p><i>aa...aa</i> : 異常が見つかったファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>

8.13 KAPL13001～KAPL14000

メッセージの言語種別は、Linux の LANG 環境変数の値に従います。LANG 環境変数の値と、出力メッセージの言語種別の対応を次の表に示します。英語だけが表示されているメッセージについては常に英語で出力されます。

表 8-12 LANG 環境変数の値と出力メッセージの言語種別

対象 OS	LANG 環境変数の値	出力メッセージの言語種別
Red Hat Enterprise Linux	ja_JP.UTF-8	日本語 (UTF-8 コード)
	ja_JP.UTF-8 以外	英語 (ASCII コード)
SUSE LINUX Enterprise Server	ja_JP.eucJP	日本語 (EUC コード)
	ja_JP.eucJP 以外	英語 (ASCII コード)

注

LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数に、LANG 環境変数で指定した以外の言語種別を指定していないか確認してください。LC_ALL 環境変数関数や LC_CTYPE 環境変数と、LANG 環境変数に指定された言語種別が異なる場合は、英語のメッセージが出力されます。この注意事項は、HDLM がサポートするすべての Linux が対象となります。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL13204-W	The file does not exist. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ファイルがありません。 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/ Path00, /etc/.HBaseAgent/Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL13205-W	You do not have read permission for the file. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ファイルに読み取り権限がありません。 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/ Path00, /etc/.HBaseAgent/Path00 対処 HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
KAPL13206-W	The file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 ファイルの内容が不正です。 <i>aa...aa</i> : /etc/.DynamicLinkManager/ Path00, /etc/.HBaseAgent/Path00 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL13207-E	The directory does not exist. Directory name = <i>aa...aa</i>	説明 ディレクトリがありません。 <i>aa...aa</i> : /HDLM インストール先ディレクトリ, /HBsA インストール先ディレクトリ 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL13401-E	No parameter has been specified.	説明 パラメタ (収集情報出力先ディレクトリ) が指定されていません。 対処 HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。
KAPL13402-E	The first parameter has not been set to a directory. Value = <i>aa...aa</i>	説明 第1パラメタにディレクトリ以外の値が指定されました。第1パラメタには収集情報出力先ディレクトリを指定してください。 <i>aa...aa</i> : 第1パラメタ 対処 HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。
KAPL13403-E	You lack write permission for the specified directory. Value = <i>aa...aa</i>	説明 指定したディレクトリに書き込み権限がありません。または、指定したディレクトリのサブディレクトリの作成に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : 第1パラメタ 対処 次の確認をしてください。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<ul style="list-style-type: none"> a 指定したディレクトリのアクセス権を確認してください。 b 指定したディレクトリ名が正しいかどうかを確認してください。 c ディスクに空き容量があるか確認してください。
KAPL13404-W	The specified directory already exists. Do you want to overwrite it? [y/n]:	<p>説明</p> <p>指定したディレクトリがすでに存在します。上書きする場合は「y」、中止する場合は「n」を入力してください。</p> <p>対処</p> <p>指定したディレクトリはすでに存在します。「y」を指定したときには、上書きします。「n」またはそのほかのキーを入力した場合は、HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) を実行しないで終了します。</p>
KAPL13405-E	The root directory has been specified in the first parameter.	<p>説明</p> <p>第1パラメータにルートディレクトリが指定されました。収集情報出力先ディレクトリに「/」は指定できません。</p> <p>対処</p> <p>HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) のパラメータをチェックしてから、再実行してください。</p>
KAPL13406-E	You lack privileges for executing the utility for collecting HDLM install error information.	<p>説明</p> <p>HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) を実行する権限がありません。installgetras ユティリティは root 権限を持つユーザで実行する必要があります。</p> <p>対処</p> <p>root 権限を持つユーザで再実行してください。</p>
KAPL13407-I	The file has been obtained successfully. File = aa...aa, Collection time = bb...bb (GMT:cc...cc)	<p>説明</p> <p>収集対象ファイルを取得しました。 aa...aa : 収集したファイル名 bb...bb : 西暦/月/日 時:分:秒 cc...cc : GMT (西暦/月/日 時:分:秒)</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL13408-E	Processing terminated before completion because a signal was received.	<p>説明</p> <p>実行中に [Ctrl] + [C]などで中断したため、処理を中止しました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) を途中で終了しました。収集情報出力先に指定したディレクトリが不要な場合は、ディレクトリを削除してください。</p>
KAPL13409-I	The utility for collecting HDLM install error information completed normally.	<p>説明</p> <p>HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) が正常終了しました。障害情報の収集が終了しました。</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		特にありません。
KAPL13410-I	A user terminated the utility for collecting HDLM install error information.	説明 確認応答に対し「n」が入力されたため、 HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ(<i>installgetras</i>)の処理を中止しました。 対処 特にありません。
KAPL13411-W	The entered value is invalid. Continue operation? [y/n]:	説明 「y」または「n」の入力要求に対して「y」、 「n」以外が入力されました。「y」または 「n」のどちらかの値を入力してください。 対処 「y」または「n」を入力してください。
KAPL13412-E	The entered value is invalid. The utility for collecting HDLM install error information stops.	説明 応答要求に対し、3回間違った入力を行ったため、 HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (<i>installgetras</i>) の処理を中止します。 対処 再度 HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (<i>installgetras</i>) を実行してください。
KAPL13413-W	The file does not exist. File = <i>aa...aa</i>	説明 収集しようとしたファイルがありません。 <i>aa...aa</i> : 収集対象ファイル名 対処 特にありません。
KAPL13414-E	The file could not be copied. File = <i>aa...aa</i> , Details = <i>bb...bb</i>	説明 <i>cp</i> コマンドの実行が失敗しました。 <i>aa...aa</i> : コピーしようとしたファイル名 <i>bb...bb</i> : <i>cp</i> コマンドの出力メッセージ 対処 収集対象のファイルのコピー中にエラーが発生しました。ユーザ環境が安定していなかった可能性があります。システム構成を確認してください。
KAPL13415-E	An attempt to archive the install error information failed. Details = <i>aa...aa</i>	説明 インストール障害情報のアーカイブの生成に失敗しました。 <i>tar</i> コマンドの実行が失敗しました。 <i>aa...aa</i> : <i>tar</i> コマンドの出力メッセージ 対処 メッセージに記載された詳細情報を参照して、エラー要因を取り除いてください。障害情報については、実行時に指定した出力先ディレクトリをアーカイブなどにまとめて HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL13416-E	An attempt to compress the install error information failed. Details = <i>aa...aa</i>	説明 インストール障害情報の圧縮に失敗しました。 <i>gzip</i> コマンドの実行が失敗しました。 <i>aa...aa</i> : <i>gzip</i> コマンドの出力メッセージ

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>対処</p> <p>メッセージに記載された詳細情報を参照して、エラー要因を取り除いてください。障害情報については、実行時に指定した出力先ディレクトリをアーカイブなどにまとめて HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL13417-E	The install error information does not exist.	<p>説明</p> <p>インストール障害情報が存在しません。</p> <p>対処</p> <p>HDLM のインストール実行後に、再度 HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) を実行してください。</p>
KAPL13418-E	Too many parameters have been specified.	<p>説明</p> <p>パラメタが 2 個以上指定されました。</p> <p>対処</p> <p>HDLM インストール障害情報収集ユーティリティ (installgetras) のパラメタをチェックしてから、再実行してください。</p>
KAPL13501-I	The utility for update system scripts started.	<p>説明</p> <p>システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) を起動しました。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL13502-I	The utility for update system scripts completed successfully.	<p>説明</p> <p>システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) が正常終了しました。</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL13503-I	A system script has been modified. File name = aa...aa	<p>説明</p> <p>システムスクリプトを更新しました。 aa...aa : 更新したシステムスクリプトのファイル名</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL13504-I	A symbolic link has been modified. Symbolic link name = aa...aa	<p>説明</p> <p>シンボリックリンクを更新しました。 aa...aa : 更新したシンボリックリンク名</p> <p>対処</p> <p>特にありません。</p>
KAPL13505-E	A system script cannot be modified. File name = aa...aa	<p>説明</p> <p>システムスクリプトを更新できません。 aa...aa : 更新できないシステムスクリプトのファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。</p>
KAPL13506-E	Modification of a system script has failed. File name = aa...aa	<p>説明</p> <p>システムスクリプトの更新に失敗しました。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>aa...aa</i> : 更新に失敗したシステムスクリプトのファイル名</p> <p>対処 このメッセージの前に出力された KAPL13521-E のメッセージの対処に従ってください。</p>
KAPL13507-E	Modification of a symbolic link has failed. Symbolic link name = <i>aa...aa</i>	<p>説明 シンボリックリンクの更新に失敗しました。</p> <p><i>aa...aa</i> : リンクの更新できなかったファイル名</p> <p>対処 このメッセージの前に出力された KAPL13521-E のメッセージの対処に従ってください。</p>
KAPL13508-E	You lack permission for executing the utility for update system scripts.	<p>説明 システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) を実行する権限がありません。dlmupdatesysinit ユティリティは root 権限を持つユーザで実行する必要があります。</p> <p>対処 root 権限を持つユーザで dlmupdatesysinit ユティリティを再実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。</p>
KAPL13509-E	The utility for update system scripts can be executed with the name dlmupdatesysinit only.	<p>説明 システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) は、dlmupdatesysinit という名称でだけ実行できます。</p> <p>対処 ユーティリティ名を dlmupdatesysinit に戻して実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。</p>
KAPL13510-E	Multiple instances of the utility for update system scripts cannot be executed concurrently.	<p>説明 システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit) は複数同時に実行できません。</p> <p>対処 実行中の dlmupdatesysinit ユティリティの実行結果を確認し、必要であれば再度 dlmupdatesysinit ユティリティを実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。</p>
KAPL13511-E	The version of the kernel supported by the installed HDLM does not match the currently running kernel version.	<p>説明 インストールされている HDLM が対応しているカーネルのバージョンと、現在動作しているカーネルのバージョンが一致しません。</p> <p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		現在動作しているカーネルのバージョンに対応した HDLM をインストールしてください。
KAPL13512-E	The user stopped the utility for update system scripts.	<p>説明</p> システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit)の実行がユーザによって中断されました。
		<p>対処</p> 必要に応じて dlmupdatesysinit ユティリティを再実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。
KAPL13513-E	An invalid parameter was specified. Parameter = aa...aa	<p>説明</p> 不正なパラメタが指定されたため、システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit)の実行に失敗しました。 aa...aa : パラメタ
		<p>対処</p> パラメタを確認し、再度 dlmupdatesysinit ユティリティを実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。
KAPL13514-W	Usage: /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmupdatesysinit	<p>説明</p> 不正なパラメタが指定されたため、システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit)の実行に失敗しました。
		<p>対処</p> パラメタを確認し、再度 dlmupdatesysinit ユティリティを実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。
KAPL13515-E	A command required by HDLM not found. Command = aa...aa	<p>説明</p> システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit)の実行に必要なコマンドがシステムに組み込まれていません。 aa...aa : コマンドのファイル名
		<p>対処</p> メッセージに表示されたコマンドを含むパッケージをシステムに組み込んだあとで、dlmupdatesysinit ユティリティを実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。
KAPL13516-E	A file required by HDLM not found. File name = aa...aa	<p>説明</p> システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit)の実行に必要なシステムのファイルが見つかりません。 aa...aa : ファイル名
		<p>対処</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p>メッセージに表示されたファイルを確認してください。そのファイルを回復したあとで、dlmupdatesysinit ユティリティを実行してください。</p> <p>dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。</p>
KAPL13517-E	A directory required by HDLM not found. Directory name = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>システムスクリプト更新ユティリティ (dlmupdatesysinit) の実行に必要なシステムのディレクトリが見つかりません。 <i>aa...aa</i> : ディレクトリ名</p> <p>対処</p> <p>メッセージに表示されたディレクトリを確認してください。そのディレクトリを回復したあとで、dlmupdatesysinit ユティリティを実行してください。 dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。</p>
KAPL13518-E	A system file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>システムのファイルの内容が不正です。 <i>aa...aa</i> : 異常が見つかったファイル名</p> <p>対処</p> <p>メッセージに表示されたシステムのファイルを確認してください。そのシステムのファイルを回復したあとで、システムスクリプト更新ユティリティ (dlmupdatesysinit) を実行してください。dlmupdatesysinit ユティリティについては「7.9」を参照してください。</p>
KAPL13519-E	An HDLM file required for the dlmupdatesysinit utility was not found. File name = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>システムスクリプト更新ユティリティ (dlmupdatesysinit) の実行に必要な HDLM のファイルが見つかりません。 <i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL13520-E	An HDLM directory required for the dlmupdatesysinit utility was not found. Directory name = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>システムスクリプト更新ユティリティ (dlmupdatesysinit) の実行に必要な HDLM のディレクトリが見つかりません。 <i>aa...aa</i> : ディレクトリ名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再インストールしてください。</p>
KAPL13521-E	A command has failed. Command = <i>aa...aa</i> , Details = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>コマンドの実行に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : 実行に失敗したコマンド <i>bb...bb</i> : コマンドが出力したメッセージ</p> <p>対処</p> <p>メッセージに表示されたコマンドの出力メッセージを参照して、エラー要因を取り除いたあと、システムスクリプト更新ユティリティ (dlmupdatesysinit) を再度実行してください。dlmupdatesysinit</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		ユーティリティについては「7.9」を参照してください。
KAPL13522-E	The HDLM file is invalid. File name = <i>aa...aa</i>	説明 システムスクリプト更新ユーティリティ (dlmupdatesysinit)の実行に必要な HDLM のファイルがないか、内容が不正です。 <i>aa...aa</i> : 異常が見つかったファイル名 対処 HDLM を再インストールしてください。
KAPL13601-W	監査ログ設定ファイルがありません。マネージャを再起動した後、"dlnmgr view -sys -audlog"コマンドを実行して、設定を確認してください。 The audit log configuration file does not exist. Restart the HDLM Manager, and execute the "dlnmgr view -sys -audlog" command and check the setting.	説明 監査ログ設定ファイルが存在しません。 対処 HDLM マネージャを再起動したあと、dlnmgr view -sys -audlog コマンドを実行してください。そのあと、必要に応じて dlnmgr set -audlog または dlnmgr set -audfac コマンドで、設定を行ってください。
KAPL13602-W	監査ログ設定ファイルがオープンできません。 "dlnmgr view -sys -audlog"コマンドを実行して、結果が正常に表示されるか確認してください。 The audit log configuration file cannot be opened. Execute the "dlnmgr view -sys -audlog" command and check whether a normal result is displayed.	説明 監査ログ設定ファイルがオープンできません。 対処 dlnmgr view -sys -audlog コマンドを実行した結果、正常に表示されない場合は、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL13603-W	監査ログ設定ファイルが不正です。マネージャを再起動した後、"dlnmgr view -sys -audlog"コマンドを実行して設定を確認してください。 The audit log configuration file is invalid. Restart the HDLM Manager, and execute the "dlnmgr view -sys -audlog" command and check the setting.	説明 監査ログ設定ファイルが不正です。 対処 HDLM マネージャを再起動したあと、dlnmgr view -sys -audlog コマンドを実行してください。そのあと、必要に応じて dlnmgr set -audlog または dlnmgr set -audfac コマンドで、設定を行ってください。
KAPL13604-W	監査ログ設定ファイルの読み込み処理でエラーが発生しました。 An error occurred during processing to read the audit log configuration file.	説明 監査ログ設定ファイルの読み込み中に内部エラーが発生しました。 対処 HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL13605-W	監査ログの出力処理でエラーが発生しました。 An error occurred during processing to output the audit log configuration file.	説明 監査ログの出力中に内部パラメタエラーが発生しました。 対処 HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL13606-W	監査ログの出力処理でエラーが発生しました。	説明 監査ログの出力中に内部エラーが発生しました。 対処

メッセージID	メッセージテキスト	説明
	An error occurred during processing to output the audit log configuration file.	HDLM の購入元会社,または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。
KAPL13901-I	The utility for HDLM start completed successfully.	説明 HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart) が正常終了しました。 対処 特にありません。
KAPL13902-I	Alert driver had been loaded. Alert driver's loading was skipped.	説明 アラートドライバがすでにロードされているため,アラートドライバのロード処理をスキップしました。 対処 特にありません。
KAPL13903-I	The process related to Alert driver had been completed. The process related to Alert driver was skipped.	説明 アラートドライバ関連の処理がすでに完了しているため,アラートドライバ関連の処理をスキップしました。 対処 特にありません。
KAPL13904-I	Filter driver had been loaded. Filter driver's loading was skipped.	説明 フィルタドライバがすでにロードされているため,フィルタドライバのロード処理をスキップしました。 対処 特にありません。
KAPL13905-I	HDLM manager had started. HDLM manager's start processing was skipped.	説明 DLMManager がすでに起動しているため, DLMManager 起動処理をスキップしました。 対処 特にありません。
KAPL13906-I	<i>aa...aa</i> will now start.	説明 <i>aa...aa</i> を開始しました。 <i>aa...aa</i> : Alert driver's loading, The process related to Alert driver, Filter driver's loading, dlmcfgmgr, または DLMManager 対処 特にありません。
KAPL13907-I	<i>aa...aa</i> completed successfully.	説明 <i>aa...aa</i> が正常終了しました。 <i>aa...aa</i> : Alert driver's loading, The process related to Alert driver, Filter driver's loading, dlmcfgmgr, または DLMManager 対処 特にありません。
KAPL13908-W	An error occurred in processing of module. Module = <i>aa...aa</i>	説明 HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart) の処理中にモジュール <i>aa...aa</i> でエラーが発生しました。 <i>aa...aa</i> : エラーが発生したモジュール名 対処

メッセージID	メッセージテキスト	説明
		<p><i>aa...aa</i> が <code>dlmcfmgr</code> の場合 このメッセージの前に出力されているメッセージを確認してください。</p> <p><i>aa...aa</i> が <code>DLManager</code> の場合 <code>/opt/DynamicLinkManager/bin/dlmmgr</code> ファイルがないか、実行権限がありません。HDLM を再度インストールしてください。</p>
KAPL13909-W	Usage: /opt/DynamicLinkManager/bin/dlmstart	<p>説明 不正なパラメタが指定されたため、HDLM 起動ユーティリティ (<code>dlmstart</code>) の実行に失敗しました。</p> <p>対処 パラメタを確認し、再度 <code>dlmstart</code> ユティリティを実行してください。<code>dlmstart</code> ユティリティについては「7.8」を参照してください。</p>
KAPL13910-W	The error occurred while processing the utility for HDLM start.	<p>説明 HDLM 起動ユーティリティ (<code>dlmstart</code>) の処理中にエラーが発生しました。</p> <p>対処 このメッセージの前に出力された KAPL13908-W の対処を参照してください。</p>
KAPL13911-E	The utility for HDLM start ended abnormally. Error Code = <i>aa...aa</i>	<p>説明 HDLM 起動ユーティリティ (<code>dlmstart</code>) が異常終了しました。 <i>aa...aa</i> : エラー番号 (10 進数)</p> <p>対処</p> <p>Error Code = 1 の場合 <code>/dev/dlm/sddlmdrv0</code> ファイルまたはキャラクタデバイスファイル以外のファイルがある場合は、手動で削除してから再実行してください。</p> <p>Error Code = 2 の場合 <code>/sbin/dlmcfgmgr</code> ファイルがないか、実行権限がありません。HDLM を再度インストールしてください。</p> <p>Error Code = 3 の場合 <code>/etc/init.d/DLManager</code> ファイルがないか、実行権限がありません。HDLM を再度インストールしてください。</p>
KAPL13912-E	An invalid parameter was specified. Parameter = <i>aa...aa</i>	<p>説明 不正なパラメタが指定されたため、HDLM 起動ユーティリティ (<code>dlmstart</code>) の実行に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : パラメタ</p> <p>対処 パラメタを確認し、再度 <code>dlmstart</code> ユティリティを実行してください。<code>dlmstart</code> ユティリティについては「7.8」を参照してください。</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL13913-E	A command has failed. Command = <i>aa...aa</i> , details = <i>bb...bb</i>	<p>説明</p> <p>コマンドの実行に失敗しました。 <i>aa...aa</i> : 実行に失敗したコマンド <i>bb...bb</i> : コマンドが出力したメッセージ</p> <p>対処</p> <p>Command = /sbin/modprobe の場合 HDLM を再度インストールしてください。</p> <p>Command = /bin/mknod の場合 メッセージに表示されたコマンドの出力メッセージを参照して、エラー要因を取り除いたあとで、HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart) を再度実行してください。HDLM 起動ユーティリティについては「7.8」を参照してください。</p>
KAPL13914-E	A file required by HDLM not found. File name = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p>HDLM 起動ユーティリティ (dlmstart) の実行に必要なシステムのファイルが見つかりません。 <i>aa...aa</i> : ファイル名</p> <p>対処</p> <p>HDLM を再度インストールしてください。</p>

8.14 KAPL15001~KAPL16000

この節で説明するメッセージの言語種別は、英語だけです。

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL15001-I	The registered value of ReserveKey was successfully displayed. Command Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユーティリティ名</p>
KAPL15002-E	An attempt to display the registered value of ReserveKey has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユーティリティ名</p>
KAPL15010-W	The HDLM utility was executed by the user who does not have the authority. Command Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユーティリティ名</p>
KAPL15040-I	Creation of the HDLM configuration file and addition of HDLM devices succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユーティリティ名</p>
KAPL15041-E	An attempt to create an HDLM configuration file and add HDLM devices has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユーティリティ名</p>
KAPL15042-I	Processing to remove devices from HDLM management succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユーティリティ名</p>
KAPL15043-E	Processing to remove devices from HDLM management has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	<p>説明</p> <p><i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユーティリティ名</p>

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL15044-I	Processing to add devices to HDLM management succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15045-E	Processing to add devices to HDLM management has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15046-I	The management status and configuration information of HDLM devices was successfully displayed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15047-E	An attempt to display the management status and configuration information of HDLM devices has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15048-I	The status of HDLM devices was checked, and then the unusable devices were successfully removed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15049-E	An attempt to check the status of HDLM devices, and then remove the unusable devices, has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15050-I	An initial RAM disk image file for using an HDLM device as a boot disk was successfully created. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15051-E	An attempt to create an initial RAM disk image file for using an HDLM device as a boot disk has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15052-I	The number of retries to allocate memory was successfully set. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15053-E	An attempt to set the number of retries to allocate memory has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15054-I	The timeout value for the SCSI INQUIRY command was successfully set. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15055-E	An attempt to set the timeout value for the SCSI INQUIRY command has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15056-I	The number of retries for the SCSI INQUIRY command was successfully set. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15057-E	An attempt to set the number of retries for the SCSI INQUIRY command has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15058-I	Processing to re-register the HDLM information was successful. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL15059-E	Processing to re-register the HDLM information failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15060-I	DLMgetras was invoked. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15061-I	DLMgetras successfully executed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15062-I	Processing to start HDLM was successful. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15063-E	Processing to start HDLM failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15064-I	ReserveKey was cleared successfully on <i>aa...aa</i> SCSI device(s) and failed on <i>bb...bb</i> SCSI device(s). Command Line = <i>cc...cc</i>	説明 <i>aa...aa</i> : Reservation Key のクリア処理が成功した SCSI デバイス数 <i>bb...bb</i> : Reservation Key のクリア処理が失敗した SCSI デバイス数 <i>cc...cc</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15065-E	An attempt to clear ReserveKey has failed on <i>aa...aa</i> SCSI device(s). Command Line = <i>bb...bb</i>	説明 <i>aa...aa</i> : Reservation Key のクリア処理が失敗した SCSI デバイス数 <i>bb...bb</i> : ユーザが実行したユティリティ名
KAPL15101-I	Clear operation was completed successfully. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15102-E	Clear operation has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15103-I	<i>aa...aa</i> path(s) were successfully placed <i>bb...bb</i> . <i>cc...cc</i> path(s) were not. Command Line = <i>dd...dd</i>	説明 <i>aa...aa</i> : online または offline が成功したパス数 <i>bb...bb</i> : Online または Offline (C) <i>cc...cc</i> : online または offline に失敗したパス数 <i>dd...dd</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15104-W	<i>aa...aa</i> path(s) were failed to place <i>bb...bb</i> . Command Line = <i>cc...cc</i>	説明 <i>aa...aa</i> : online または offline に失敗したパス数 <i>bb...bb</i> : Online または Offline (C) <i>cc...cc</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15105-I	Setting up the operating environment succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15106-E	Setting up the operating environment failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15107-I	Program information was successfully displayed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15108-E	An attempt to display program information has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15109-I	Information about HDLM-management targets was successfully displayed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン

メッセージID	メッセージテキスト	説明
KAPL15110-E	An attempt to display information about HDLM-management targets has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15111-W	The HDLM command was started or stopped by the user who does not have the authority. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15117-I	Addition of path(s) succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15118-W	Addition of path(s) failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15119-I	Deletion of path(s) succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15120-W	Deletion of path(s) failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15301-I	Creation of the device name change definition file succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15302-E	Creation of the device name change definition file failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15303-I	Processing to change the HDLM device name succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15304-E	Processing to change the HDLM device name failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15305-I	Processing to forcefully change the HDLM device name succeeded. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15306-E	Processing to forcefully change the HDLM device name failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15307-I	The persistent reserve support was successfully set. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15308-E	An attempt to set the persistent reserve support has failed. Command Line = <i>aa...aa</i>	説明 <i>aa...aa</i> : ユーザが実行したコマンドライン
KAPL15401-I	HDLM Manager successfully started.	—
KAPL15402-E	Could not start the HDLM manager.	—
KAPL15403-I	HDLM Manager successfully stopped.	—
KAPL15404-W	The HDLM Manager was executed by the user who does not have the authority.	—

8.15 Hitachi Command Suite 共通エージェントコンポーネントのリターンコード

Global Link Manager から HDLM へ要求した動作が異常終了した場合、または正常終了しても警告がある場合に HDLM がリターンコードを出力します。

リターンコード	説明
1002	<p>説明 操作対象のパスがありませんでした。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、パス情報を確認したあとに再度オペレーションを実行してください。</p>
1003	<p>説明 パスを検出できませんでした。</p> <p>対処 ホストストレージシステム間のパスが接続されているかを確認してください。パスが接続されている場合は、HDLM が正しく構成されているかを確認してください。</p>
1004	<p>説明 HDLM の内部処理に必要なメモリが確保できませんでした。</p> <p>対処 不要なアプリケーションを終了させ、空きメモリを増やすか、ホストを再起動してください。</p>
1006	<p>説明 パスの回復に失敗しました。</p> <p>対処 パスの障害を取り除いたあと、再度オンライン操作を実行してください。</p>
1007	<p>説明 オフラインの対象として指定されたパスはデバイスの最後のパスであるため、オフライン状態にはできません。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、パスの状態を確認したあとに再度オフライン操作を実行してください。</p>
1015	<p>説明 パスの回復に失敗しました。</p> <p>対処 パスの障害を取り除いたあと、再度オンライン操作を実行してください。 HDLM コマンドの view オペレーション (-path または -lu 指定) を実行して、PathName のターゲット ID (16 進数) の値が、0000000000000100 以上で表示される Offline(E) のパスは、online コマンドもしくは、自動フェイルバック機能ではオンライン状態になりません。このパスをオンラインにするためには、dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -r) を実行してください。</p>
1016	<p>説明 操作対象のパスはすでに Online です。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、パスの状態を確認してください。</p>
1017	<p>説明 操作対象のパスはすでに Offline(C)です。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、パスの状態を確認してください。</p>
1019	<p>説明 HDLM の内部処理で障害が発生しました。</p> <p>対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡</p>

リターンコード	説明
	してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
1020	説明 HDLM の内部処理で予測できないエラーが発生しました。 対処 HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
1025	説明 パラメタ値が誤っています。 対処 ホストの情報を更新して、再度オペレーションを実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
1026	説明 パス情報取得中にパスの構成が変更されたため、パス情報取得を中断します。 対処 ホストの情報を更新して、パス情報を確認したあとに再度オペレーションを実行してください。
1027	説明 障害監視時間、および障害発生回数が自動フェイルバックチェック間隔と矛盾しています。 対処 間欠障害監視の障害監視時間は、「自動フェイルバックで指定するチェック間隔×間欠障害監視で指定する障害発生回数」以上に設定してください。
1033	説明 HDLM のバージョン情報の取得に失敗しました。 対処 再実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
1034	説明 HDLM のバージョン情報または SP のバージョン情報の取得に失敗しました。 対処 再実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
1035	説明 HDLM のバージョン情報または SP のバージョン情報の取得に失敗しました。 対処 再実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
1036	説明 HDLM のバージョン情報または SP のバージョン情報の取得に失敗しました。 対処

リターンコード	説明
	再実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。 DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。
1037	<p>説明 パラメタ値が誤っています。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、再度オペレーションを実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
1041	<p>説明 HDLM マネージャとの通信に失敗しました。</p> <p>対処 ホストの HDLM マネージャが起動されているか確認してください。</p>
1042	<p>説明 指定した LU のパス構成情報は、HDLM が保持しているパス構成情報と一致しません。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、パス情報を確認したあとに再度オペレーションを実行してください。</p>
1045	<p>説明 パラメタ値が誤っています。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、再度オペレーションを実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>
1046	<p>説明 パラメタ値が誤っています。</p> <p>対処 ホストの情報を更新して、再度オペレーションを実行してください。繰り返し同じエラーとなる場合は、HDLM 障害情報収集ユーティリティ (DLMgetras) を実行して障害情報を取得し、HDLM の購入元会社、または HDLM の保守契約があれば保守会社に連絡してください。DLMgetras ユティリティについては、「7.2」を参照してください。</p>

Linux のコマンドおよびファイルの注意事項

Linux のコマンドおよびファイルの注意事項を説明します。

- [A.1 /proc/partitions ファイルについての注意事項](#)
- [A.2 Linux のコマンドについての注意事項](#)
- [A.3 iostat コマンドについての注意事項](#)
- [A.4 mkfs コマンドについての注意事項](#)
- [A.5 fdisk コマンドについての注意事項](#)
- [A.6 sar コマンドについての注意事項](#)
- [A.7 fdisk コマンドまたは parted コマンドについての注意事項](#)
- [A.8 parted コマンドについての注意事項](#)
- [A.9 vgrename コマンドおよび lvrename コマンドについての注意事項](#)

A.1 /proc/partitions ファイルについての注意事項

Linux に認識されていて使用できる HDLM デバイスと HDLM デバイスの各パーティションは、/proc/partitions ファイルに記録されています。/proc/partitions ファイルは、デバイスごとの I/O の統計を記録していますが、HDLM デバイスの I/O の統計については記録されません。常に 0 となります。

HDLM デバイスに対する統計情報を取得する場合は、HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスに記録されている値から算出してください。統計情報の例を次に示します。

図 A-1 /proc/partitions ファイルの表示例

```
# cat /proc/partitions
major minor #blocks name      rio rmerge rsect ruse wio wmerge wsect wuse running use aveq
253     0   2403360 sddlmaa 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
253     1   2401686 sddlmaa1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
253    16   2403360 sddlmaab 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
253    17    803218 sddlmaab1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
253    18    803250 sddlmaab2 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
253    19    795217 sddlmaab3 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
      ⋮
      ⋮
      ⋮
8         0   2403360 sda 6 0 12 80 0 0 0 0 0 80 80
8         1   2401686 sda1 4 0 8 0 0 0 0 0 0 0 0
8        16   2403360 sdb 12 6 36 100 1 0 2 0 0 100 100
8        17    803218 sdb1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
8        18    803250 sdb2 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
8        19    795217 sdb3 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
```

A.2 Linux のコマンドについての注意事項

HDLM は、ホストとストレージシステムを複数のパスで接続している場合、それぞれのパスをすべて HDLM デバイスとして使用します。したがって、HDLM デバイスへの Open(), Close() システムコール処理の延長でそれぞれのパスに Open または Close 処理を行います。lvmddiskscan, pvscan などの Linux のコマンドを 1 回実行すると、複数の HDLM デバイスに連続して Open(), Close() システムコールを実行するので、実行時間が HDLM のインストール前より長くなります。

HDLM をインストールする前とインストールしたあとの Linux コマンド実行時間の計測例を「表 A-1 Linux のコマンド実行時間の計測例」に示します。「表 A-1 Linux のコマンド実行時間の計測例」に示す実行時間は、LVM1 のコマンドを使用して計測した結果です。LVM2 を使用する場合は、HDLM をインストールする前とあとで実行時間の差はほとんどありません。

表 A-1 Linux のコマンド実行時間の計測例

Linux コマンド	実行時間			
	環境例 1※1		環境例 2※2	
	HDLM インストール前	HDLM インストール後	HDLM インストール前	HDLM インストール後
lvmddiskscan	6.1 秒	19.6 秒	3.8 秒	10.6 秒
pvscan	2.6 秒	12.6 秒	1.5 秒	5.2 秒

注※1

CPU: Pentium III 1.4GHz×2

メモリ: 1GB

ホストとストレージ間の構成: 64LU×2 パス(合計 128 パス)

注※2

CPU: Xeon 2.0GHz×2

メモリ: 2GB

ホストとストレージ間の構成: 64LU×2 パス(合計 128 パス)

A.3 iostat コマンドについての注意事項

iostat コマンドに HDLM デバイスを指定しない場合、HDLM デバイスは表示されません。iostat コマンドに HDLM デバイスを指定した場合 (iostat -x /dev/sddlmaa などの場合) にだけ HDLM デバイスに対する情報が表示されます。表示される情報 (CPU や I/O の統計情報) は、HDLM デバイスに対しては常に 0 が表示されて、実際の値は HDLM デバイスに対応するそれぞれの SCSI デバイスに対して表示されます。

HDLM デバイスに対する情報を取得する場合は、HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスの値から算出してください。iostat コマンドの実行例を次に示します。

図 A-2 iostat コマンドの実行例

```
# iostat -x /dev/sddlmaa /dev/sda /dev/sdq
Linux 2.6.18-194.el5 (localhost)      yyyy年mm月 dd日

CPU平均:  %user   %nice    %sys %iowait  %idle
           0.09    0.00    0.10   0.02   99.78

デバイス: rrqm/s  wrqm/s  r/s    w/s    rsec/s  wsec/s  kB/s   kB/s   avgrq-sz  avgqu-sz  await
svctm %util
sddlmaa  0.00    0.00  0.00  0.00   0.00    0.00   0.00   0.00    0.00    0.00  0.00  0.00
0.00
sdq      0.00    0.00  0.00  0.00   0.00    0.00   0.00   0.00    8.00    0.00  2.86  2.86
0.00
sda      0.17    1.37  0.09  0.20   2.02   12.62   1.01   6.31   50.58    0.02  55.36  1.11
0.03
```

A.4 mkfs コマンドについての注意事項

HDLM デバイスに対してファイルシステムを作成する場合、mkfs コマンドに HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を指定します。ただし、すでに使用していた SCSI デバイスに対してファイルシステムを作成している場合は、新規にファイルシステムを mkfs コマンドで作成しなくても、該当する HDLM デバイスに対して、すでにファイルシステムが作成されている状態になっています。

また、SCSI デバイスに対して mkfs コマンドを実行した場合は、コマンドを実行するかどうかの確認メッセージが表示されますが、HDLM デバイスを指定した場合は、その確認メッセージは表示されません。

A.5 fdisk コマンドについての注意事項

fdisk コマンドに HDLM デバイスの論理デバイスファイル名を指定して実行することで、HDLM デバイスのパーティションを操作できます。パーティションは SCSI デバイスと同様に 15 パーティションまで作成できます。また、HDLM デバイスにパーティションを設定することによって、対応する SCSI デバイスのパーティションにも同時にパーティションを設定できます。

ただし、HDLM が管理している SCSI デバイスに対してパーティションを作成しても、HDLM 管理対象のデバイスのパーティションは同時に動的に作成されません。この場合、ホストを再起動することで、対応する SCSI デバイスと同じパーティションとなります。

HDLM を新規インストールした場合、対応する SCSI デバイスのパーティションを引き継いだ HDLM デバイスが自動的に作成されます。

A.6 sar コマンドについての注意事項

sar コマンドに `-d` オプションまたは `-A` オプションを指定して実行しても、HDLM デバイスは表示されません。HDLM デバイスに対する統計情報を取得する場合は、HDLM デバイスに対応する SCSI デバイスの値から算出してください。sar コマンドの実行例を次に示します。

図 A-3 sar コマンドの実行例

```
# sar -d
Linux 2.6.18-194.el5 (localhost)      yyyy年mm月dd日

00時00分00秒  DEV      tps  rd_sec/s  wr_sec/s
00時10分00秒  dev65-0   0.00   0.00     0.00
00時10分00秒  dev65-16  0.00   0.00     0.00
00時10分00秒  dev65-32  0.00   0.00     0.00
      ⋮
平均値:      dev65-0   0.00   0.00     0.00
平均値:      dev65-16  0.00   0.00     0.00
平均値:      dev65-32  0.00   0.00     0.00
      ⋮
```

A.7 fdisk コマンドまたは parted コマンドについての注意事項

HDLM デバイス上にパーティションを作成する場合は、fdisk コマンドまたは parted コマンドのどちらか一方だけを使用してください。

HDLM デバイス上に fdisk コマンドまたは parted コマンドでパーティションを作成した場合、fdisk コマンドで作成したパーティションの一部が parted コマンドから見えないことや、parted コマンドで作成したパーティションの一部が fdisk コマンドから見えないことがあります。この場合、例えば fdisk コマンドでパーティションを作成したあとに、parted コマンドでパーティションの操作を行ったとき、既存のパーティションを壊してしまうおそれがあります。

A.8 parted コマンドについての注意事項

parted コマンドで HDLM デバイス上にパーティションを作成した場合は、パーティション作成後に次のコマンドを実行してください。

コマンドの実行形式

```
# blockdev --rereadpt HDLM device SCSI device 1 ... SCSI device n
```

HDLM device : パーティションを作成した HDLM デバイス名 (例: /dev/sddlmd)

SCSI device 1...N : HDLM デバイスが管理している SCSI デバイス名 (例: /dev/sda)

A.9 vgrename コマンドおよび lvrename コマンドについての注意事項

md デバイス上に論理ボリュームを作成している場合、vgrename コマンドまたは lvrename コマンドを使用してボリュームグループまたは論理ボリュームの名称を変更できます。名称を変更したあとで、vgdisplay -v -D コマンド、vgscan コマンド、または lvscan コマンドを実行した場合、変更前のボリュームグループまたは論理ボリュームの情報が表示されることがあります。変更後の表示にするためには、いったんボリュームグループを非活性化し、md デバイスを再起動したあとでボリュームグループを活性化してください。

weak-modules スクリプトを使用している 製品の障害時の対処

weak-modules スクリプトを使用している製品をインストールまたはアンインストールした場合に、障害が発生したときの対処について説明しています。

- [B.1 概要](#)
- [B.2 weak-modules スクリプトを使用している製品のインストール](#)
- [B.3 weak-modules スクリプトを使用している製品のアンインストール](#)

B.1 概要

Red Hat Enterprise Linux 5 で HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合、weak-modules スクリプトを使用している製品をインストールまたはアンインストールすると、次のメッセージが出力され、weak-modules スクリプトを使用している製品のインストールまたはアンインストールに失敗するおそれがあります。

```
grubby fatal error: unable to find a suitable template
```

したがって、Red Hat Enterprise Linux 5 で HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合に、weak-modules スクリプトを使用している製品をインストールまたはアンインストールするときは、事前に次に示すコマンドを実行してください。

インストール前

```
# rpm -qp 製品のパッケージファイル名※ --scripts | grep weak-modules
```

アンインストール前

```
# rpm -q 製品のパッケージファイル名※ --scripts | grep weak-modules
```

注※

weak-modules スクリプトを使用している製品のパッケージファイル名が不明な場合は、「[B.2 weak-modules スクリプトを使用している製品のインストール](#)」や「[B.3 weak-modules スクリプトを使用している製品のアンインストール](#)」の手順を実行してください。

上記の rpm コマンドを実行しても特にメッセージが出力されない場合、その製品は weak-modules スクリプトを使用していません。通常どおり製品をインストールまたはアンインストールできます。

メッセージが出力された場合、その製品は weak-modules スクリプトを使用しています。「[B.2 weak-modules スクリプトを使用している製品のインストール](#)」や「[B.3 weak-modules スクリプトを使用している製品のアンインストール](#)」の手順を実行してください。

B.2 weak-modules スクリプトを使用している製品のインストール

weak-modules スクリプトを使用している製品をインストールする場合は、次の手順を実行してください。

1. /etc/fstab ファイルに記述された、ルートディレクトリ「/」を指すデバイスを確認します。それぞれの例で、下線部分が該当するデバイスになります。

ブートローダが elilo で、LVM を使用していない場合の例

```
# cat /etc/fstab
/dev/sddlmaa2      /                ext3      defaults    1 1
/dev/sddlmaa1     /boot/efi       vfat     defaults    0 0
tmpfs              /dev/shm        tmpfs     defaults    0 0
devpts             /dev/pts        devpts    gid=5,mode=620 0 0
sysfs              /sys            sysfs     defaults    0 0
proc               /proc           proc      defaults    0 0
/dev/sddlmaa3     swap            swap      defaults    0 0
#
```

ブートローダが **grub** で、**LVM** を使用している場合の例

```
# cat /etc/fstab
/dev/VolGroup00/LogVol100 /          ext3    defaults    1 1
/dev/VolGroup00/LogVol102 /tmp    ext3    defaults    1 2
/dev/VolGroup00/LogVol104 /usr    ext3    defaults    1 2
/dev/VolGroup00/LogVol103 /opt    ext3    defaults    1 2
/dev/sddlmaa1          /boot   ext3    defaults    1 2
tmpfs                  /dev/shm tmpfs    defaults    0 0
devpts                 /dev/pts devpts   gid=5,mode=620 0 0
sysfs                  /sys    sysfs    defaults    0 0
proc                   /proc   proc     defaults    0 0
/dev/VolGroup00/LogVol101 swap     swap     defaults    0 0
#
```

2. ブートローダの設定ファイルにパラメタを追加します。

現在使用しているブートローダの設定ファイルに、**HDLM** をブートディスクとして使用するためのエントリが記述されています。このエントリにカーネルパラメタ「**root=デバイス**」を追加してください。

デバイスには手順 1 で確認したデバイスを入力してください。

それぞれの例で、下線部がこの手順で追加したカーネルパラメタです。

ブートローダが **elilo** で、**LVM** を使用していない場合の例

```
          :
          :
image=vmlinuz-2.6.18-92.el5
label=linux-HDLM
initrd=initrd-2.6.18-92.el5.img.hdml
read-only
append="console=ttyS0,19200 rhgb quiet root=/dev/sddlmaa2"
          :
          :
```

ブートローダが **grub** で、**LVM** を使用している場合の例

```
          :
          :
title Red Hat Enterprise Linux Server (2.6.18-92.el5-HDLM)
root (hd0,0)
kernel /vmlinuz-2.6.18-92.el5 ro rhgb quiet root=/dev/
VolGroup00/LogVol100
initrd /initrd-2.6.18-92.el5.img.hdml
          :
          :
```

3. **weak-modules** スクリプトを使用している製品をインストールします。
製品（パッケージ）のマニュアルに従って、インストールを実行してください。
4. 現在使用している **HDLM** 用の初期 **RAM** ディスクイメージファイルをバックアップします。
5. ブートディスクサポートユティリティ (**dlmmkinitrd**) に **-f** パラメタを指定して実行し、**HDLM** 用の初期 **RAM** ディスクイメージファイルを作成します。
パラメタに指定する初期 **RAM** ディスクイメージファイル名は、現在使用しているファイル名と同じ名前を指定してください。
6. ブートローダの設定ファイルから手順 2 で追加したカーネルパラメタを削除します。
ブートローダの設定ファイルに、**HDLM** をブートディスクとして使用するためのエントリのほかにもエントリがある場合、カーネルパラメタ「**root=HDLM デバイス**」が指定されていないことを確認し、手順 9 に進んでください。「**root=HDLM デバイス**」が指定されている場合は、手順 7 に進んでください。

7. HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) に `-v` パラメータを指定して実行して、HDLM デバイスと SCSI デバイスの対応関係を確認します。

```
# dlmcfmgr -v
HDevName      Management   Device      Host  Channel Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda   2     0      0      0
              /dev/sdb   2     0      1      0
KAPL10302-I /sbin/dlmcfmgr completed normally.
```

HDevName 列は HDLM デバイス、Device 列は SCSI デバイスになります。

対応する SCSI デバイスが複数存在する場合は、先に表示された SCSI デバイスを指定してください。ここでは、`/dev/sda` が SCSI デバイスです。

8. ブートローダの設定ファイルの「`root=HDLM デバイス`」を「`root=SCSI デバイス`」に書き換えます。

手順 7 で確認した SCSI デバイスに書き換えてください。

```
      :
      :
title Red Hat Enterprise Linux Server (2.6.18-92.el5PAE)
      root (hd0,0)
      kernel /vmlinuz-2.6.18-92.el5PAE ro rhgb quiet root=/dev/sda2
      initrd /initrd-2.6.18-92.el5PAE.img
      :
      :
```

ここでは、`root=/dev/sda2` に書き換えます。

9. ホストを再起動します。
10. `mount` コマンドや `vgdisplay` コマンドを使用して、ルートディレクトリ「`/`」が HDLM デバイスであることを確認します。

LVM を使用していない場合の実行例

下線部がルートディレクトリ「`/`」を指すデバイスです。

```
# mount
/dev/sddlmaa2 on / type ext3 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
sysfs on /sys type sysfs (rw)
devpts on /dev/pts type devpts (rw,gid=5,mode=620)
/dev/sddlmaa1 on /boot/efi type vfat (rw)
tmpfs on /dev/shm type tmpfs (rw)
none on /proc/sys/fs/binfmt_misc type binfmt_misc (rw)
sunrpc on /var/lib/nfs/rpc_pipefs type rpc_pipefs (rw)
#
```

LVM を使用している場合の例

下線部がルートディレクトリ「`/`」を指すボリュームグループです。

```
# mount
/dev/mapper/VolGroup00-LogVol00 on / type ext3 (rw)
proc on /proc type proc (rw)
sysfs on /sys type sysfs (rw)
devpts on /dev/pts type devpts (rw,gid=5,mode=620)
/dev/sddlmaa1 on /boot type ext3 (rw)
tmpfs on /dev/shm type tmpfs (rw)
/dev/mapper/VolGroup00-LogVol02 on /tmp type ext3 (rw)
/dev/mapper/VolGroup00-LogVol04 on /usr type ext3 (rw)
/dev/mapper/VolGroup00-LogVol03 on /opt type ext3 (rw)
none on /proc/sys/fs/binfmt_misc type binfmt_misc (rw)
sunrpc on /var/lib/nfs/rpc_pipefs type rpc_pipefs (rw)
#
```


このボリュームグループを構成する物理ボリュームが **HDLM** デバイスであることを、次の `vgdisplay` コマンドで確認してください。

下線部がルートディレクトリ「/」を指すボリュームグループを構成するデバイスです。

```
# vgdisplay -v
--- Volume group ---
VG Name                VolGroup00
System ID
:
--- Logical volume ---
LV Name                /dev/VolGroup00/LogVol100
VG Name                VolGroup00
:
--- Physical volumes ---
PV Name                /dev/sddlmaa2
:
#
```

B.3 weak-modules スクリプトを使用している製品のアンインストール

`weak-modules` スクリプトを使用している製品をアンインストールする場合は、次の手順を実行してください。

1. ブートローダの設定ファイルにパラメタを追加します。
「**B.2 weak-modules スクリプトを使用している製品のインストール**」の手順 1 から手順 2 を参照してください。
2. `weak-modules` スクリプトを使用している製品をアンインストールします。
製品（パッケージ）のマニュアルに従って、アンインストールを実行してください。
3. HDLM 用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成し、ブートローダの設定ファイルの「`root=HDLM デバイス`」を「`root=SCSI デバイス`」に書き換えます。
「**B.2 weak-modules スクリプトを使用している製品のインストール**」の手順 4 から手順 10 を参照してください。

kdump 機能の設定手順

HDLM デバイスをブートディスクとする環境で、kdump 機能を使用するために必要な設定手順について説明します。

設定を誤ると、OS が起動できなくなることがあるので注意してください。HDLM デバイスから OS が起動できない場合は、「[3.7.7 HDLM デバイスからの OS の起動に失敗した場合の対処](#)」を参照し、対処してください。

- [C.1 前提条件](#)
- [C.2 設定手順](#)
- [C.3 注意事項](#)

C.1 前提条件

kdump 機能を使用するには、次の前提条件を満たす必要があります。

- ホストの OS に、Red Hat Enterprise Linux 5、Red Hat Enterprise Linux 6、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5、または Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を適用していること。

ただし、Red Hat Enterprise Linux 5.4 以前、または Red Hat Enterprise Linux 5.4 Advanced Platform 以前の場合は、あらかじめ kexec-tools (kexec-tools-1.102pre-xxx.e15.yyyy[※]) を適用する必要があります。

注※

xxx が 96 以降のバージョンをサポートします。また、yyyy は OS のカーネルアーキテクチャを表します。

- ホストとストレージシステムとの接続に、FC-SAN を適用していること。
- ブートディスクに、HDLM デバイスまたは HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使用していること。

C.2 設定手順

kdump 機能を使用する設定手順を、次の順序で説明します。

- カーネルダンプ出力用のディスクを追加する
- カーネルダンプの出力先を設定する
- ブートローダの設定ファイルを編集する
- kdump 機能用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成する
- カーネルダンプが正しく採取されることを確認する

C.2.1 カーネルダンプ出力用のディスクを追加する

カーネルダンプの出力先となるディスクを追加します。

システムディスク (/var ディレクトリ) のファイルシステムに異常が発生した場合でもカーネルダンプを採取できるようにするため、カーネルダンプ出力用のディスクは、システムディスクから独立した別のディスクに設定することを推奨します。

次のどちらかの条件に該当する場合、ディスクの追加は不要です。

- ブートディスクに HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使用していない環境で、カーネルダンプの出力先をデフォルトのディレクトリ (/var/crash) にする場合
「C.2.2 カーネルダンプの出力先を設定する」の手順 5 に進んでください。
- カーネルダンプの出力先を内蔵ディスクの任意のディレクトリにする場合
「C.2.2 カーネルダンプの出力先を設定する」の手順 1 に進んでください。

- ストレージシステム上のボリュームにカーネルダンプ出力用のディスクを作成し、ホストにシングルパスで接続します。
- HDLM 構成定義ユティリティ (dlmcfmgr -r) を実行して、カーネルダンプ出力用のディスクを HDLM に認識させます。

KAPL10339-I メッセージが表示されたら、「y」を入力してください。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -r
```

```
KAPL10339-I This operation will change the configuration of HDLM
devices. Do you want to continue? [y/n]: y
KAPL10341-I The HDLM device configurations have been changed.
KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.
```

3. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -v) を実行して、カーネルダンプ出力用のディスクが認識されたことを確認します。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
HDevName      Management  Device      Host  Channel  Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda    0     0         0     0
                /dev/sdc    1     0         0     0
/dev/sddlmac  configured  /dev/sdb    0     0         0     1
                /dev/sdd    1     0         0     1
/dev/sddlmac  configured  /dev/sde    0     0         0     2
KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.
```

下線部に新しいディスクが追加されています。

4. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -o) を実行して、カーネルダンプ出力用のディスクを HDLM の管理対象外にします。

KAPL10339-I メッセージが表示されたら、「y」を入力してください。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -o /dev/sddlmac
KAPL10339-I This operation will change the configuration of HDLM
devices. Do you want to continue? [y/n]: y
KAPL10341-I The HDLM device configurations have been changed.
KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.
```

5. dlmcfgmgr ユティリティ (dlmcfgmgr -v) を実行して、カーネルダンプ出力用のディスクが HDLM の管理対象外になったことを確認します。

```
# /sbin/dlmcfgmgr -v
HDevName      Management  Device      Host  Channel  Target  Lun
/dev/sddlmaa  configured  /dev/sda    0     0         0     0
                /dev/sdc    1     0         0     0
/dev/sddlmac  configured  /dev/sdb    0     0         0     1
                /dev/sdd    1     0         0     1
/dev/sddlmac  unconfigured /dev/sde    0     0         0     2
KAPL10302-I /sbin/dlmcfgmgr completed normally.
```

Management 列に「unconfigured」が表示されていることを確認してください。

C.2.2 カーネルダンプの出力先を設定する

次の操作を実行して、カーネルダンプの出力先を設定します。

- パーティションを作成する
- ファイルシステムを作成する
- /etc/fstab ファイルを編集する
- kdump 機能の設定ファイル (/etc/kdump.conf) を編集する

次に示す条件をすべて満たす場合、手順 1 から 4 は実行しないで、手順 5 から実行してください。

- ブートディスクに HDLM デバイス上の論理ボリューム (LVM2) を使用していない
- カーネルダンプの出力先をデフォルトのディレクトリ (/var/crash) にする

1. fdisk コマンドを実行して、カーネルダンプ出力用のディスクにパーティションを作成します。fdisk のコマンドは、次の下線部に示すとおりに入力してください。

```
# fdisk /dev/sde

The number of cylinders for this disk is set to 10240.
There is nothing wrong with that, but this is larger than 1024,
and could in certain setups cause problems with:
1) software that runs at boot time (e.g., old versions of LILO)
2) booting and partitioning software from other OSs
   (e.g., DOS FDISK, OS/2 FDISK)

Command (m for help): p

Disk /dev/sde: 10.7 GB, 10737418240 bytes
64 heads, 32 sectors/track, 10240 cylinders
Units = cylinders of 2048 * 512 = 1048576 bytes

   Device Boot      Start         End      Blocks   Id  System
Command (m for help): n
Command action
   e   extended
   p   primary partition (1-4)
p
Partition number (1-4): 1
First cylinder (1-10240, default 1): _
Using default value 1
Last cylinder or +size or +sizeM or +sizeK (1-10240, default 10240):
Using default value 10240

Command (m for help): p

Disk /dev/sde: 10.7 GB, 10737418240 bytes
64 heads, 32 sectors/track, 10240 cylinders
Units = cylinders of 2048 * 512 = 1048576 bytes

   Device Boot      Start         End      Blocks   Id  System
/dev/sde1          1         10240    10485744    83  Linux

Command (m for help): w
The partition table has been altered!

Calling ioctl() to re-read partition table.
Syncing disks.
```

2. **mkfs** コマンドを実行して、作成したパーティションにファイルシステムを作成します。

LABEL を使用する場合

-L パラメタには、任意のボリュームラベルを設定します。**kdump** 機能で使用していることがわかるラベル名を推奨します。カーネルダンプの出力先にボリュームラベルを指定することで、デバイスの構成が変更された場合でも設定ファイルを修正する手間が省けます。次の実行例では、ボリュームラベルを「**kdump_disk**」としています。

```
# mkfs -t ext3 -L kdump_disk /dev/sde1
mke2fs 1.39 (29-May-2006)
Filesystem label=kdump_disk
OS type: Linux
Block size=4096 (log=2)
Fragment size=4096 (log=2)
1310720 inodes, 2621436 blocks
131071 blocks (5.00%) reserved for the super user
First data block=0
Maximum filesystem blocks=2684354560
80 block groups
32768 blocks per group, 32768 fragments per group
16384 inodes per group
Superblock backups stored on blocks:
    32768, 98304, 163840, 229376, 294912, 819200, 884736,
1605632
```

```
Writing inode tables: done
Creating journal (32768 blocks): done
Writing superblocks and filesystem accounting information: done

This filesystem will be automatically checked every 24 mounts or
180 days, whichever comes first. Use tune2fs -c or -i to override.
```

UUID を使用する場合

ファイルシステムを作成したあと、設定された UUID を確認します。

```
# mkfs -t ext4 /dev/sdel
mke2fs 1.41.12 (17-May-2010)
Filesystem label=
OS type: Linux
Block size=4096 (log=2)
Fragment size=4096 (log=2)
Stride=0 blocks, Stripe width=0 blocks
65536 inodes, 262094 blocks
13104 blocks (5.00%) reserved for the super user
First data block=0
Maximum filesystem blocks=268435456
8 block groups
32768 blocks per group, 32768 fragments per group
8192 inodes per group
Superblock backups stored on blocks:
    32768, 98304, 163840, 229376
```

```
Writing inode tables: done
Creating journal (4096 blocks): done
Writing superblocks and filesystem accounting information: done

This filesystem will be automatically checked every 30 mounts or
180 days, whichever comes first. Use tune2fs -c or -i to override.

blkid コマンドを実行して、設定された UUID を確認します。
UUID="bf5d6d8d-d18b-45f8-8187-86837d895488" TYPE="ext4"
```

3. /etc/fstab ファイルに、カーネルダンプの出力先を追加します。

LABEL を使用する場合

LABEL には、手順 2 で設定したボリュームラベルを指定します。

```
LABEL=kdump_disk /var/crash ext3 defaults 1 2
```

UUID を使用する場合

手順 2 で確認した UUID を指定します。

```
UUID=bf5d6d8d-d18b-45f8-8187-86837d895488 /var/crash ext4
defaults 1 2
```

4. kdump 機能の設定ファイル (/etc/kdump.conf) に、カーネルダンプの出力先を追加します。

LABEL を使用する場合

LABEL には、手順 2 で設定したボリュームラベルを指定します。

```
path hdlm
ext3 LABEL=kdump_disk
```

UUID を使用する場合

手順 2 で確認した UUID を指定します。

```
path hdlm
ext4 UUID=bf5d6d8d-d18b-45f8-8187-86837d895488
```

5. `kdump` 機能の設定ファイル (`/etc/kdump.conf`) に、タイムアウトの設定を追加します。

```
disk_timeout 1
```

C.2.3 ブートローダの設定ファイルを編集する

ブートローダの設定ファイルに、`kdump` 機能のオプションを追加します。

ブートローダとして GRUB を使用している場合（カーネルパラメータに LABEL を使用する場合）

`/etc/grub.conf` ファイルの編集例を次に示します。下線部の個所を編集してください。

```

:
:
default=0
timeout=5
splashimage=(hd0,0)/grub/splash.xpm.gz
hiddenmenu

#title HDLM-Red Hat Enterprise Linux Server (2.6.18-8.el5)
#   root (hd0,0)
#   kernel /vmlinuz-2.6.18-8.el5 ro rhgb quiet
#   initrd /initrd-2.6.18-8.el5-hdlm.img
title HDLM-kdump-Red Hat Enterprise Linux Server (2.6.18-8.el5)
   root (hd0,0)
   kernel /vmlinuz-2.6.18-8.el5 ro root=LABEL= rhgb quiet
crashkernel=128M@16M
   initrd /initrd-2.6.18-8.el5-hdlm.img
:
:
```

1. HDLM デバイスから起動する既存の設定をコピーします。
2. コピー元の既存の設定は、先頭に#を付けてコメントアウトします。
3. `title` で始まる行には、任意の設定名を指定します。`kdump` 機能で使用していることがわかる設定名を推奨します。
4. ブートディスクに LVM2 を適用していない環境の場合は、`root` オプション (`root=LABEL=`) を追加します。ブートディスクに LVM2 を適用している環境の場合は、`root` オプションの編集は不要です。
5. `kdump` 機能のオプション (`crashkernel=128M@16M*`) を追加します。

注※

使用している OS によって、`crashkernel` に指定する内容は異なります。

「`crashkernel=128M@16M`」は、OS に Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合の例です。

ブートローダとして GRUB を使用している場合（カーネルパラメータに UUID を使用する場合）

`/etc/grub.conf` ファイルの編集例を次に示します。下線部の個所を編集してください。

```

:
:
default=0
timeout=5
splashimage=(hd0,0)/grub/splash.xpm.gz
```



```

hiddenmenu

#title HDLM-Red Hat Enterprise Linux Server (2.6.32-220.el6.x86_64)
#       root (hd0,0)
#       kernel /vmlinuz-2.6.32-220.el6.x86_64 ro
root=UUID=43a23c95-4a5f-42ad-bce6-23fcf4c1f13a
#       rd_NO_LUKS rd_NO_MD
#       initrd /initrd-2.6.32-220.el6.x86_64-hdlm.img
title HDLM-kdump-Red Hat Enterprise Linux Server (2.6.32-220.el6.x86_64)
       root (hd0,0)
       kernel /vmlinuz-2.6.32-220.el6.x86_64 ro
root=UUID=43a23c95-4a5f-42ad-bce6-23fcf4c1f13a
       rd_NO_LUKS rd_NO_MD crashkernel=128M
       initrd /initrd-2.6.32-220.el6.x86_64-hdlm.img
       :
       :

```

1. HDLM デバイスから起動する既存の設定をコピーします。
2. コピー元の既存の設定は、先頭に#を付けてコメントアウトします。
3. title で始まる行には、任意の設定名を指定します。kdump 機能で使用していることがわかる設定名を推奨します。
4. kdump 機能のオプション (crashkernel=128M[※]) を追加します。

注※

使用している OS によって、crashkernel に指定する内容は異なります。

「crashkernel=128M」は、OS に Red Hat Enterprise Linux 6 を使用している場合の例です。

ブートローダとして ELILO を使用している場合

/etc/elilo.conf ファイルの編集例を次に示します。下線部の個所を編集してください。

```

       :
       :
prompt
timeout=10
default=HDLM-kdump-Red_Hat_Enterprise_Linux_Server_2.6.18-8.el5
relocatable

#image=vmlinuz-2.6.18-8.el5
#       label=HDLM-Red_Hat_Enterprise_Linux_Server_2.6.18-8.el5
#       initrd=initrd-2.6.18-8.el5-hdlm.img
#       read-only
#       append="rhgb quiet"
image=vmlinuz-2.6.18-8.el5
       label=HDLM-kdump-Red_Hat_Enterprise_Linux_Server_2.6.18-8.el5
       initrd=initrd-2.6.18-8.el5-hdlm.img
       read-only
       append="rhgb quiet root=LABEL=/ crashkernel=256M@256M"
       :
       :

```

1. HDLM デバイスから起動する既存の設定をコピーします。
2. コピー元の既存の設定は、先頭に#を付けてコメントアウトします。
3. label で始まる行には、任意の設定名を指定します。kdump 機能で使用していることがわかる設定名を推奨します。
4. ブートディスクに LVM2 を適用していない環境の場合は、root オプション (root=LABEL=/) を追加します。ブートディスクに LVM2 を適用している環境の場合は、root オプションの編集は不要です。
5. kdump 機能のオプション (crashkernel=256M@256M[※]) を追加します。

- 上記で作成した設定で起動するように、「default=」で始まる行の記述を手順3で指定した label 名に変更します。

注※

使用している OS によって、crashkernel に指定する内容は異なります。

「crashkernel=256M@256M」は、OS に Red Hat Enterprise Linux 5 を使用している場合の例です。

C.2.4 kdump 機能用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成する

カーネルダンプの採取時に、セカンドカーネルで使用される kdump 機能用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

- ホストを再起動します。

```
# shutdown -r now
```

- ホストが再起動したら、root 権限を持つユーザでログインします。

- kdump サービスを再起動して、kdump 機能用の初期 RAM ディスクイメージファイルを作成します。

```
# touch /etc/kdump.conf
# /sbin/service kdump restart
Stopping kdump: [ OK ]
Detected /etc/kdump.conf or /boot/vmlinuz-2.6.18-8.el5 change
Rebuilding /boot/initrd-2.6.18-8.el5kdump.img
Starting kdump: [ OK ]
```

- 初期 RAM ディスクイメージファイルが作成されたことを確認します。

```
# ls -l /boot/initrd-`uname -r`kdump.img
-rw-r--r-- 1 root root 2769763 mmm dd hh:mm
/boot/initrd-2.6.18-8.el5kdump.img
```

表示されたファイルの更新時刻を確認してください。

C.2.5 カーネルダンプが正しく採取されることを確認する

カーネルパニックを発生させて、カーネルダンプが正しく採取されることを確認します。

- 次のコマンドを実行して、カーネルパニックを発生させます。

```
# echo c > /proc/sysrq-trigger
```

カーネルパニックが発生すると、カーネルダンプが採取されます。そのあと、ホストが再起動します。

- ホストが再起動したら、/var/crash/hd1m ディレクトリにカーネルダンプ (vmcore ファイル) が作成されていることを確認します。

```
# ls -lR /var/crash/
/var/crash/:
total 24
drwxr-xr-x 3 root root 4096 mmm dd hh:mm hd1m
drwx----- 2 root root 16384 mmm dd hh:mm lost+found

/var/crash/hd1m:
total 4
drwxr-xr-x 2 root root 4096 mmm dd hh:mm 127.0.0.1-yyyy-mm-dd-hh:mm:ss
```

```
/var/crash/hdlm/127.0.0.1-yyyy-mm-dd-hh:mm:ss:  
total 1971852  
-r----- 1 root root 2017199848 mmm dd hh:mm vmcore  
  
/var/crash/lost+found:  
total 0
```

以上で、**kdump** 機能を使用するために必要な設定は終了です。

C.3 注意事項

- HDLM の使用環境（非ブートディスク環境，ブートディスク環境）に関係なく，カーネルダンプの出力先として，HDLM デバイスを指定することはできません。
- カーネルダンプの出力先として，HDLM デバイスに作成したファイルシステム内のディレクトリを指定している場合，カーネルダンプの採取時に HDLM は動作しません。

バージョン間の機能差異

ここでは、HDLM の旧バージョンで提供していた機能について、変更前と変更後の相違点を示します。

- D.1 7.6 以降と 7.6 より前のバージョンとの機能差異
- D.2 7.2 以降と 7.2 より前のバージョンとの機能差異
- D.3 6.2.1 以降と 6.2.1 より前のバージョンとの機能差異
- D.4 6.1 以降と 6.1 より前のバージョンとの機能差異
- D.5 6.0 以降と 6.0 より前のバージョンとの機能差異
- D.6 05-94 以降と 05-94 より前のバージョンとの機能差異
- D.7 05-91 以降と 05-91 より前のバージョンとの機能差異
- D.8 05-90 以降と 05-90 より前のバージョンとの機能差異
- D.9 05-80 以降と 05-80 より前のバージョンとの機能差異
- D.10 05-71 以降と 05-71 より前のバージョンとの機能差異
- D.11 05-70/A 以降と 05-70/A より前のバージョンとの機能差異
- D.12 05-70 以降と 05-70 より前のバージョンとの機能差異
- D.13 05-63 以降と 05-63 より前のバージョンとの機能差異
- D.14 05-40 以降と 05-40 より前のバージョンとの機能差異

D.1 7.6 以降と 7.6 より前のバージョンとの機能差異

FC-SAN 環境の場合、システム（パス）構成を変更していない、かつパス障害が発生していない状態で、サーバを再起動しても Offline(E)のパスが増えないように変更しました。IP-SAN 環境の場合は、機能差異はありません。

D.2 7.2 以降と 7.2 より前のバージョンとの機能差異

Red Hat Enterprise Linux 6 で初期 RAM ディスクイメージファイルを作成する場合、ブートディスクサポートユーティリティ (dlmmkinitrd) ではなく dracut コマンドを使用するように変更しました。

これに伴い、Red Hat Enterprise Linux 6 の環境では dlmmkinitrd ユティリティはインストールされなくなりました。

D.3 6.2.1 以降と 6.2.1 より前のバージョンとの機能差異

HDLM コマンドの動作ログの出力先を、Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2) の統合トレース情報ファイル (/var/opt/hitachi/HNTRLib2/spool/hntr2n.log[※]) から、プロセス別トレース (マルチプロセス対応トレース) 情報ファイル (/var/opt/DynamicLinkManager/log/dlnkmgm.log[※]) に変更しました。

注※

n はファイルの番号を示します。

D.4 6.1 以降と 6.1 より前のバージョンとの機能差異

HDLM の新規インストール時、ロードバランスのアルゴリズムのデフォルト値をラウンドロビンから拡張最少 I/O 数に変更しました。

D.5 6.0 以降と 6.0 より前のバージョンとの機能差異

- HDLM のコマンドやユーティリティの実行結果で表示される、HDLM のバージョンの表記を変更しました。
- 6.0 より前のバージョンでは、HDLM をインストールする場合、KAPL09210-I、KAPL09211-I、および KAPL09212-E のメッセージは出力されません。
6.0 以降では、HDLM をインストールする場合、KAPL09210-I、KAPL09211-I、または KAPL09212-E のメッセージが出力されます。

D.6 05-94 以降と 05-94 より前のバージョンとの機能差異

- HDLM が保証する 1 ストレージ 1 ポートごとの最大 LU 数を、ストレージシステムごとから OS ごとに変更しました。
- HDLM が保証する合計 LU 数を最大 512 に拡張しました。このため、HDLM 論理デバイスファイル名の規則を拡張しました。

- HDLM 構成定義ユーティリティ (dlmcfmgr) 実行時に出力される、ログファイルサイズの最大値を指定できるようになりました。ファイルサイズの最大値は、dlmcfmgr ユティリティで指定できます。

D.7 05-91 以降と 05-91 より前のバージョンとの機能差異

- 05-91 より前のバージョンでは、SCSI INQUIRY のタイムアウト値が固定となっていました。このため、接続しているストレージシステムによっては、SCSI INQUIRY の応答遅延に対応できずタイムアウトが発生してしまいました。

05-91 以降では dlmsetopt ユティリティを使って、利用しているストレージシステムに応じたタイムアウト値にカスタマイズできるようになりました。

- 05-91 より前のバージョンでは、HDLM をインストールする場合、次に示すメッセージは出力されません。

05-91 以降では、HDLM をインストールする場合、次に示すメッセージが出力されます。

- Preparing packages for installation...

または

パッケージインストールの準備中...

- HDLM-x.xx.x.xxx.-xx

Red Hat Enterprise Linux AS4 の場合の実行例を次に示します。

```
# /media/cdrom/installhldm
KAPL09093-I HDLM xx-xx will be installed. Is this OK ? [y/n]: y
Preparing packages for installation...
KAPL09076-I The permanent license was installed.
HDLM-x.xx.x.xxx.-xx
KAPL09043-I The installation of HDLM-x.xx.x.xxx.-xx completed
successfully.
#
```

D.8 05-90 以降と 05-90 より前のバージョンとの機能差異

HDLM GUI および HDLM Web GUI で HDLM を操作する機能のサポートを終了しました。

D.9 05-80 以降と 05-80 より前のバージョンとの機能差異

ホスト上で HDLM GUI を使用する場合に前提となる JRE/JDK のバージョンを次の表に示します。

表 D-1 HDLM GUI 使用時の JRE/JDK のバージョン

OS	前提となる JRE/JDK のバージョン	
	HDLM 05-71 以前	HDLM 05-80 以降
Red Hat Enterprise Linux AS3/ES3(IA32) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(IA32) SUSE LINUX Enterprise Server 9(IA32)	JRE v1.4.2_08	JRE v1.4.2_09
Red Hat Enterprise Linux AS3/ES3(IPF) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(IPF)	JDK v1.4.2_08	JDK v1.4.2_09
Red Hat Enterprise Linux AS3/ES3(EM64T/AMD64) Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4(EM64T/AMD64)	JRE v1.5.0_03	JRE v1.5.0_05

OS	前提となる JRE/JDK のバージョン	
	HDLM 05-71 以前	HDLM 05-80 以降
SUSE LINUX Enterprise Server 9(EM64T/AMD64)	(64 ビット版の JRE をサポート)	(32 ビット版の JRE をサポート)

D.10 05-71 以降と 05-71 より前のバージョンとの機能差異

05-71 より前のバージョンでは、HDLM デバイスへの I/O 実行時に HDLM ドライバで I/O 処理用のメモリ確保に失敗すると、リトライをしないでその I/O に対してエラーが返されます。

05-71 以降では前述のメモリを確保するようにリトライをして、I/O が正常に実行されます。リトライ回数はユーザが指定できて、デフォルト値はメモリが確保できるまでリトライをします。

D.11 05-70-/A 以降と 05-70-/A より前のバージョンとの機能差異

05-70-/A より前のバージョンでは、複数のパスがすべて断線しているとき、Online(E)のパスに I/O を発行すると Offline(E)に変わり、別のパスが Online(E)となります。05-70-/A 以降では Online(E)のパスに I/O を発行しても Online(E)の状態のままになります。

すべてのパスに障害が発生したあとにパスを回復するには、自動フェイルバックまたはコマンドでパスの状態を Online にしないとデータのアクセスができません。

D.12 05-70 以降と 05-70 より前のバージョンとの機能差異

05-70 以降では、`/etc/opt/DynamicLinkManager` ディレクトリの配下にファイルが存在しない場合、HDLM のアンインストール時にこのディレクトリは削除されます。

D.13 05-63 以降と 05-63 より前のバージョンとの機能差異

ホスト上で HDLM GUI を使用する場合に前提となる JRE/JDK のバージョンを次の表に示します。

表 D-2 HDLM GUI 使用時の JRE/JDK のバージョン

OS	前提となる JRE/JDK のバージョン		
	HDLM 05-42 以前	HDLM 05-60～05-62	HDLM 05-63
Red Hat Enterprise Linux AS2.1(IA32) SUSE LINUX Enterprise Server 8(IA32)	JRE v1.3.1_08	JRE v1.3.1_15	JRE v1.4.2_08
Red Hat Enterprise Linux AS3/ES3(IA32)	JRE v1.4.2_03	JRE v1.4.2_07	JRE v1.4.2_08
Red Hat Enterprise Linux AS2.1(IPF) Red Hat Enterprise Linux AS3/ES3(IPF)	JRE v1.4.2_03	JRE v1.4.2_07	JRE v1.4.2_08

OS	前提となる JRE/JDK のバージョン		
	HDLM 05-42 以前	HDLM 05-60～05-62	HDLM 05-63
SUSE LINUX Enterprise Server 8(IPF)			

D.14 05-40 以降と 05-40 より前のバージョンとの機能差異

- 障害ログファイル(/var/DynamicLinkManager/log/dlmmgrX.log)の権限を 600 に変更しました。
- トレースログディレクトリ(/var/opt/hitachi/HNTRLlib2/spool)の権限を 755 に、ログファイル(/var/opt/hitachi/HNTRLlib2/spool/hntr2X.log)の権限を 644 に変更しました。
- 04-00,05-02,05-03 で使用していたライセンスキーは、05-40 で使用することはできません。

このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

- E.1 関連マニュアル
- E.2 このマニュアルでの表記
- E.3 このマニュアルで使用している略語
- E.4 KB (キロバイト) などの単位表記について

E.1 関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

- Hitachi Command Suite Global Link Manager Software ユーザーズガイド (3020-3-X11)
- Hitachi Command Suite Global Link Manager Software 導入・設定ガイド (3020-3-X12)
- Hitachi Command Suite Global Link Manager Software メッセージ (3020-3-X13)
- Hitachi Adaptable Modular Storage シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Hitachi Simple Modular Storage シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Hitachi Tape Modular Storage シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Hitachi Unified Storage シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Hitachi Universal Storage Platform シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Hitachi Workgroup Modular Storage シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- SANRISE 9580V シリーズ ディスクアレイ ユーザーズガイド
- Universal Storage Platform V シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Universal Storage Platform VM シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Virtual Storage Platform シリーズ用 各種ユーザーズガイド
- Hitachi Gigabit Fibre Channel アダプタ ユーザーズガイド
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager (3000-3-841)
- JP1 Version 7i JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3020-3-G37)
- JP1 Version 7i JP1/NETM/DM システム運用 1 (Windows(R)用) (3020-3-G32)
- JP1 Version 7i JP1/NETM/DM システム運用 2 (Windows(R)用) (3020-3-G33)
- JP1 Version 7i JP1/NETM/DM システム構築 (Windows(R)用) (3020-3-G31)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3020-3-L43)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用) (3020-3-L38)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2 (Windows(R)用) (3020-3-L39)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R)用) (3020-3-L37)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R)用) (3020-3-L36)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3020-3-S85)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用) (3020-3-S81)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2 (Windows(R)用) (3020-3-S82)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R)用) (3020-3-S80)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R)用) (3020-3-S79)

E.2 このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名称を次のように表記します。

このマニュアルでの表記	製品名称または意味
ACFS	ASM Cluster File System
ADVM	ASM Dynamic Volume Manager
Compute Systems Manager	Hitachi Compute Systems Manager

このマニュアルでの表記	製品名称または意味
Deployment Manager	JP1/Server Conductor/Deployment Manager
Device Manager エージェント	Hitachi Device Manager に含まれる Device Manager エージェント
Global Link Manager	Hitachi Global Link Manager
H10000	Hitachi Universal Storage Platform H10000
H12000	Hitachi Universal Storage Platform H12000
H20000	Hitachi Universal Storage Platform H20000
H24000	Hitachi Universal Storage Platform H24000
HDLM	Hitachi Dynamic Link Manager
Hitachi AMS シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Adaptable Modular Storage 1000 • Hitachi Adaptable Modular Storage 500 • Hitachi Adaptable Modular Storage 200
Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Adaptable Modular Storage 1000 • Hitachi Adaptable Modular Storage 500 • Hitachi Adaptable Modular Storage 200 • Hitachi Tape Modular Storage シリーズ • Hitachi Workgroup Modular Storage シリーズ
Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Adaptable Modular Storage 2000 シリーズ • Hitachi Adaptable Modular Storage 1000 • Hitachi Adaptable Modular Storage 500 • Hitachi Adaptable Modular Storage 200 • Hitachi Tape Modular Storage シリーズ • Hitachi Workgroup Modular Storage シリーズ • Hitachi Simple Modular Storage シリーズ
Hitachi AMS2000 シリーズ	Hitachi Adaptable Modular Storage 2000 シリーズ
Hitachi NSC55	Hitachi Network Storage Controller NSC55
Hitachi SMS シリーズ	Hitachi Simple Modular Storage シリーズ
Hitachi TMS シリーズ	Hitachi Tape Modular Storage シリーズ
Hitachi USP シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Universal Storage Platform 1100 • Hitachi Universal Storage Platform 600 • Hitachi Universal Storage Platform 100 • Hitachi Network Storage Controller NSC55 • Hitachi Universal Storage Platform H12000 • Hitachi Universal Storage Platform H10000 • HP StorageWorks XP12000 Disk Array • HP StorageWorks XP10000 Disk Array • HP StorageWorks 200 Storage Virtualization System
Hitachi WMS シリーズ	Hitachi Workgroup Modular Storage シリーズ
HUS100 シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Unified Storage 150 • Hitachi Unified Storage 130 • Hitachi Unified Storage 110 • BladeSymphony 専用エントリークラスディスクアレイ装置 BR1650 シリーズ
HUS VM	Hitachi Unified Storage VM
Itanium	Itanium®
JDK	Java Development Kit

このマニュアルでの表記	製品名称または意味
JP1/NETM/DM	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> JP1/NETM/DM Manager JP1/NETM/DM Client
JRE	Java 2 Runtime Environment, Standard Edition
Linux	Linux [®]
LUKS	Linux Unified Key Setup
Oracle9i RAC	Oracle9i Real Application Clusters
Oracle Enterprise Linux 4	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Oracle Enterprise Linux 4 Update 5 Oracle Enterprise Linux 4 Update 6
Oracle Enterprise Linux 5	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Oracle Enterprise Linux 5 Update 1 Oracle Enterprise Linux 5 Update 4 Oracle Enterprise Linux 5 Update 5 Oracle Enterprise Linux 5 Update 6 Oracle Enterprise Linux 5 Update 7
Oracle RAC	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Oracle9i Real Application Clusters Oracle Real Application Clusters 10g Oracle Real Application Clusters 11g
Oracle RAC 10g	Oracle Real Application Clusters 10g
Oracle RAC 11g	Oracle Real Application Clusters 11g
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 Update 6 Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 Update 7
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 Update 2 Oracle Linux 6 Update 3 Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 Oracle Linux 6 Update 4 Unbreakable Enterprise Kernel Release 2
P9500	HP StorageWorks P9500 Disk Array
Pentium	Pentium [®]
Red Hat Enterprise Linux	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Red Hat Enterprise Linux[®] AS4/ES4 Red Hat Enterprise Linux[®] 5 Red Hat Enterprise Linux[®] 6
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Red Hat Enterprise Linux[®] AS 4 Red Hat Enterprise Linux[®] AS 4.5 Red Hat Enterprise Linux[®] AS 4.6 Red Hat Enterprise Linux[®] AS 4.7 Red Hat Enterprise Linux[®] AS 4.8 Red Hat Enterprise Linux[®] AS 4.9 Red Hat Enterprise Linux[®] ES 4 Red Hat Enterprise Linux[®] ES 4.5 Red Hat Enterprise Linux[®] ES 4.6 Red Hat Enterprise Linux[®] ES 4.7 Red Hat Enterprise Linux[®] ES 4.8 Red Hat Enterprise Linux[®] ES 4.9

このマニュアルでの表記	製品名称または意味
Red Hat Enterprise Linux 5	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.0 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.0 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.1 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.1 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.2 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.2 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.3 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.3 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.4 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.4 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.5 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.5 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.6 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.6 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.7 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.7 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.8 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.8 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.9 • Red Hat Enterprise Linux[®] 5.9 Advanced Platform
Red Hat Enterprise Linux 6	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.0 • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.0 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.1 • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.1 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.2 • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.2 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.3 • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.3 Advanced Platform • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.4 • Red Hat Enterprise Linux[®] 6.4 Advanced Platform
RHCM	Red Hat Cluster Manager
SANRISE9900V シリーズ	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SANRISE9900V シリーズ • SANRISE H1024 • SANRISE H128 • HP StorageWorks XP1024 Disk Array • HP StorageWorks XP128 Disk Array
SUSE LINUX Enterprise Server	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SUSE LINUX[®] Enterprise Server 10 • SUSE LINUX[®] Enterprise Server 11
SVS	HP StorageWorks 200 Storage Virtualization System
Universal Storage Platform V/VM シリーズ	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Universal Storage Platform V • Hitachi Universal Storage Platform VM • Hitachi Universal Storage Platform H24000 • Hitachi Universal Storage Platform H20000 • HP StorageWorks XP24000 Disk Array • HP StorageWorks XP20000 Disk Array
VCS	Veritas Cluster Server

このマニュアルでの表記	製品名称または意味
Virtual Storage Platform シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> Hitachi Virtual Storage Platform Hitachi Virtual Storage Platform VP9500 HP StorageWorks P9500 Disk Array
VP9500	Hitachi Virtual Storage Platform VP9500
VxFS	Veritas File System
VxVM	Veritas Volume Manager
Windows	Microsoft® Windows®
XP128	HP StorageWorks XP128 Disk Array
XP1024	HP StorageWorks XP1024 Disk Array
XP10000	HP StorageWorks XP10000 Disk Array
XP12000	HP StorageWorks XP12000 Disk Array
XP20000	HP StorageWorks XP20000 Disk Array
XP24000	HP StorageWorks XP24000 Disk Array
XP シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none"> HP StorageWorks XP24000 Disk Array HP StorageWorks XP20000 Disk Array HP StorageWorks XP12000 Disk Array HP StorageWorks XP10000 Disk Array HP StorageWorks XP1024 Disk Array HP StorageWorks XP128 Disk Array

このマニュアルでは、AIX, Solaris, Linux, および HP-UX を区別する必要がない場合、UNIX と表記しています。

また、次のとおり適宜読み替えてください。

- 「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4」と記述された個所で、Oracle Enterprise Linux 4 に関する断り書きがない場合、それらを Oracle Enterprise Linux 4 に読み替えてください。
- 「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux 5」と記述された個所で、Oracle Enterprise Linux 5 に関する断り書きがない場合、それらを Oracle Enterprise Linux 5 に読み替えてください。
- 「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux 5」と記述された個所で、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 に関する断り書きがない場合、それらを Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 に読み替えてください。
- 「Red Hat Enterprise Linux」または「Red Hat Enterprise Linux 6」と記述された個所で、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 に関する断り書きがない場合、それらを Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 に読み替えてください。

E.3 このマニュアルで使用している略語

このマニュアルでは、次に示す略語を使用しています。

略語	正式名称
AMD64	Advanced Micro Devices 64
API	Application Programming Interface
ASCII	American Standard Code for Information Interchange

略語	正式名称
ASM	Automatic Storage Management
BIOS	Basic Input / Output System
CHA	Channel Adapter
CLPR	Cache Logical Partition
CPU	Central Processing Unit
CU	Control Unit
DBMS	Database Management System
Dev	Device
DMI	Desktop Management Interface
DNS	Domain Name Server
DRBD	Distributed Replicated Block Device
ELILO	Extensible Firmware Interface Linux Loader
EM64T	Extended Memory 64 Technology
EUC	Extended UNIX Code
EVMS	Enterprise Volume Management System
ext	Extended File System
FC	Fibre Channel
FC-SP	Fibre Channel Security Protocol
FO	Failover
FQDN	Fully Qualified Domain Name
GMT	Greenwich Mean Time
GRUB	GRand Unified Bootloader
GUI	Graphical User Interface
HBA	Host Bus Adapter
HDev	Host Device
HLU	Host Logical Unit
HTTP	Hypertext Transfer Protocol
I/O	Input/Output
IA32	Intel Architecture 32
IDE	Integrated Drive Electronics
IP	Internet Protocol
IPC	Inter Process Communication
IPF	Itanium Processor Family
IRQ	Interrupt ReQuest
iSCSI	Internet Small Computer System Interface
KVM	Kernel-based Virtual Machine
LAN	Local Area Network
LDAP	Lightweight Directory Access Protocol
LDEV	Logical Device
LILO	Linux Loader
LU	Logical Unit
LUN	Logical Unit Number
LVM	Logical Volume Manager

略語	正式名称
md	Multiple Devices
NAS	Network Attached Storage
NIC	Network Interface Card
NTP	Network Time Protocol
OS	Operating System
P	Port
PCI	Peripheral Component Interconnect
RADIUS	Remote Authentication Dial in User Service
SAN	Storage Area Network
SCSI	Small Computer System Interface
SLPR	Storage Logical Partition
SMTP	Simple Mail Transfer Protocol
SNMP	Simple Network Management Protocol
SP	Service Pack
SSL	Secure Sockets Layer
SVP	Service Processor
UUID	Universally Unique Identifier
VG	Volume Group
WWN	World Wide Name

E.4 KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ 1,024 バイト, $1,024^2$ バイト, $1,024^3$ バイト, $1,024^4$ バイトです。

用語解説

ここでは、マニュアル中で使用している用語を解説します。

(英字)

CHA (Channel Adapter)

ストレージシステムのチャンネルを制御するアダプタです。

CLPR (Cache Logical Partition)

Hitachi USP シリーズ, Universal Storage Platform V/VM シリーズ, Virtual Storage Platform シリーズ, Hitachi AMS2000/AMS/TMS/WMS/SMS シリーズ, HUS100 シリーズ, および HUS VM がサポートするキャッシュの論理的な分割機能です。この機能を使用すると、ストレージシステム内でパリティグループ単位にキャッシュを分割するため、キャッシュ性能がほかのパリティグループの影響を受けません。

Dev (Device)

HDLM が制御、操作する対象で、LU を論理的に分割した単位を指します。Linux ではパーティションに相当します。

Linux では、各 LU は複数の Dev に分けて使用できます。

各 Dev には「Dev 番号」が付けられています。

また、Dev にはアクセス方式の異なるブロック型デバイスとキャラクタ型デバイスの 2 種類があります。

(関連用語 : Dev 番号)

Dev 番号

HDLM では構成表示での Dev 番号 (DNum 欄) を指します。

LU 内の各 Dev に付けられる番号です。Linux ではパーティション番号と呼ばれています。

HDLM は、Dev を LU 単位で管理するため、「0」で固定です。

(関連用語 : Dev)

domain

OS が Xen で動作する環境です。

Xen を管理する権限がある domain を domain0 と呼びます。domain0 以外の domain を domainU と呼びます。

FC-SAN (Fibre Channel - Storage Area Network)

FC を使った SAN を指します。

HBA (Host Bus Adapter)

ホストと外部装置を接続するインタフェースとなるデバイスです。

このマニュアルでは、ホストとストレージ間を FC で接続するときに、ホストに搭載するインタフェース・カードを指します。

HDLM アラートドライバ

HDLM ドライバが検知した障害情報を受け取り、HDLM マネージャに通知するプログラムです。

HDLM ドライバ

HDLM の機能の制御、パスの管理、および障害検知をするプログラムです。

HDLM マネージャ

障害情報を管理するプログラムです。HDLM アラートドライバから障害情報を受け取って、障害ログを採取します。

IP-SAN (Internet Protocol - Storage Area Network)

iSCSI 規格を用いてホストとストレージシステムを接続する、データ転送用のネットワークです。

KVM (Kernel-based Virtual Machine)

Linux のカーネル自体をハイパーバイザとする仕組みです。QEMU を使用してゲスト OS を制御します。
(関連用語：QEMU)

LDEV (Logical Device)

LDEV は、ストレージシステムの製品名称、シリアル番号、および内部 LU を組み合わせた値で表示されます。HDLM は、この値によって LU を識別しています。

LU (Logical Unit)

論理ユニットです。ストレージシステム側で定義した、論理的なボリュームです。ホストからの入出力対象となります。
(関連用語：ホスト LU)

QEMU

ホストのシステム全体を対象とした仮想エミュレータです。
(関連用語：KVM)

SAN (Storage Area Network)

ホストとストレージシステムを結ぶ高速ネットワークです。LAN とは独立していて、データ転送専用に使われます。SAN を使用することで、ストレージシステムへのアクセスを高速化できます。また、大容量のデータが流れて LAN の性能が劣化することを防げます。

SCSI デバイス

SCSI ディスクのデバイスです。

SLPR (Storage Logical Partition)

Hitachi USP シリーズ、Universal Storage Platform V/VM シリーズ、および Virtual Storage Platform シリーズがサポートするストレージシステムの論理的な分割機能です。この機能を使用すると、ストレージシステム内のリソース（ポート、CLPR、ボリュームなど）を分割するため、それぞれのリソースを独立して管理できます。

Xen

Linux 上で仮想化環境を提供するソフトウェアです。

(ア行)

エミュレーションタイプ

ホストからアクセスできる LU の種類です。

HDLM のホストはオープン系ホスト (PC, または UNIX) であるため, HDLM のホストからは, オープン系のエミュレーションタイプを持つ LU にだけアクセスできます。

ストレージシステムがサポートするエミュレーションタイプの詳細については, 各ストレージシステムの保守マニュアルを参照してください。

オーナコントローラ

SANRISE9500V シリーズ, または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合, ストレージシステム側で LU のオーナコントローラに設定したコントローラです。

オーナコントローラ以外のコントローラは, ノンオーナコントローラと呼びます。

SANRISE2000 シリーズ, SANRISE9900V シリーズ, Hitachi USP シリーズ, Universal Storage Platform V/VM シリーズ, Virtual Storage Platform シリーズ, Hitachi AMS2000 シリーズ, Hitachi SMS シリーズ, HUS100 シリーズ, または HUS VM を使用している場合には, すべてのコントローラがオーナコントローラになります。

(関連用語: オーナパス, ノンオーナコントローラ)

オーナパス

SANRISE9500V シリーズ, または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合, ストレージシステム側で LU のオーナコントローラに設定したコントローラを経由するパスです。オーナコントローラ以外のコントローラを経由するパスをノンオーナパスと呼びます。

SANRISE2000 シリーズ, SANRISE9900V シリーズ, Hitachi USP シリーズ, Universal Storage Platform V/VM シリーズ, Virtual Storage Platform シリーズ, Hitachi AMS2000 シリーズ※, Hitachi SMS シリーズ※, HUS100 シリーズ※, または HUS VM を使用している場合には, すべてのパスがオーナパスになります。

(関連用語: オーナコントローラ, ノンオーナパス)

注※ ダイナミック I/O パスコントロール機能を無効にしているときに対象になります。

(カ行)

間欠障害

ケーブルの接触不良などが原因で, 断続的に発生する障害です。

クラスタ

同一の OS, またはプラットフォーム (同一のアプリケーションを動作できる環境) を持つ 2 台以上のホストを接続して, 1 つのシステムとして扱うシステムです。

(サ行)

自動フェイルバック

一定間隔でパスの状態を確認し, 障害が発生したパスの状態が回復したときに, パスの状態を自動的に稼働状態にする機能です。

「Offline(E)」状態, または「Online(E)」状態だったパスが正常に戻った場合, パスの状態を「Online」にします。

自動フェイルバックの対象となるのは, 障害が原因で「Offline(E)」状態, または「Online(E)」状態になっているパスです。offline オペレーションを実行して「Offline(C)」状態になったパスは, 自動フェイルバックの対象になりません。offline オペレーションについては, 「6.4 offline パスを閉塞状態にする」を参照してください。

(ナ行)

ノード

クラスタメンバのサーバです。

ノンオーナコントローラ

オーナコントローラ以外のコントローラです。

ノンオーナコントローラは、SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合にだけあります。

(関連用語：オーナコントローラ、ノンオーナパス)

ノンオーナパス

オーナコントローラ以外のコントローラを経由するパスです。

ノンオーナパスは、SANRISE9500V シリーズ、または Hitachi AMS/TMS/WMS シリーズを使用している場合にだけあります。

(関連用語：オーナパス、ノンオーナコントローラ)

(ハ行)

パーシステントリザーブ

リザーブと同様、あるサーバが 1 つの LU を占有したい場合、その LU に対して占有を宣言し、ほかのサーバからその LU にアクセスできないように保護する機能です。ただし、リザーブはパス 1 本を占有しますが、パーシステントリザーブは複数のパスを占有できます。

したがって、HDLM がパーシステントリザーブを支援する場合、複数のパスを占有できるため、占有した複数のパスでロードバランスができるようになります。

(関連用語：リザーブ)

ハイパーバイザ

ホストの仮想化を実現するソフトウェアです。

パス

ホストからストレージシステムへのアクセス経路です。ホスト側の HBA と、ストレージシステム側の CHA を結ぶケーブルを経由して、ストレージシステム側の LU 内の領域にアクセスします。

各パスには「パス管理 PATH_ID」が付けられています。

(関連用語：パス管理 PATH_ID)

パス管理 PATH_ID

HDLM がシステム起動時にパスに付ける ID です。すべてのパスが固有のパス管理 PATH_ID を持ちます。

(関連用語：パス)

パスヘルスチェック

一定間隔でパスの状態を確認する機能です。

「Online」状態だったパスに障害が発生した場合、パスの状態を「Offline(E)」にします。パスヘルスチェックの対象となるのは、「Online」状態のパスです。

パス名

次に示す 4 つの項目をピリオドで区切って表される名前です。

- ・ホストポート番号 (16 進数)
- ・パス番号 (16 進数)
- ・ターゲット ID (16 進数)
- ・ホスト LU 番号 (16 進数)

パス名で物理パスを特定してください。

(関連用語：ホスト LU 番号)

ブートディスク環境

起動ディスクを、ホストではなくストレージシステムに置く環境です。

フェイルオーバー

あるパスに障害が発生したときに、ほかの正常なパスに切り替えてシステムの運用を続ける機能です。

フェイルバック

障害が発生していたパスが障害から回復したときに、障害から回復したパスの状態を稼働状態にして、パスを切り替える機能です。

物理パス

ホストから LU までのアクセス経路です。物理パスは、パス名で特定してください。

ホスト

サーバ、およびクライアントの総称です。

ホスト LU

ホストが認識する LU です。
各ホスト LU には「ホスト LU 番号」が付けられています。
(関連用語：LU, ホスト LU 番号, ホストデバイス)

ホスト LU 番号

ホスト LU に付けられている番号です。パス名の一部になります。
(関連用語：ホスト LU, パス名)

ホストデバイス

ホスト LU 内の領域です。
(関連用語：ホスト LU, ホストデバイス名)

ホストデバイス名

ホストデバイスに付けられている名前です。ホストデバイス名には、HDLM デバイスの論理デバイスファイル名が割り当てられます。
(関連用語：ホストデバイス)

(ラ行)

リザーブ

あるホストが 1 つの LU を占有したい場合、その LU に対して占有を宣言し、ほかのホストから LU にアクセスできないように保護する機能です。リザーブを発行したホストには、そのリザーブを発行したパスに LU へのアクセス許可が与えられるため、複数のパスで同時に LU にアクセスできません。そのため、ロードバランスはできません。
(関連用語：パーシステントリザーブ)

ロードバランス

LU 内の領域にアクセスするパスが複数ある場合、それらの複数のパスを使用して I/O を行うことで、パスに掛かる負荷を分散する機能です。
次に示す 6 つのアルゴリズムがあります。

- ・ラウンドロビン
- ・拡張ラウンドロビン
- ・最少 I/O 数

- ・拡張最少 I/O 数
- ・最少ブロック数
- ・拡張最少ブロック数

論理デバイスファイル

/dev 下にある論理デバイスファイルです。

ただし、ここでいう「論理デバイス」は、LDEV ではありません。

索引

記号

/proc/partitions ファイルについての注意事項 608

A

add [HDLM コマンドのオペレーション] 442

ASMLib 305

ASMLib 構成ファイル 305

B

BladeSymphony 環境

Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合 165

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合
121

BladeSymphony の I/O ドロワーを追加する場合の注意
事項 388

C

CHA 29

CHA (Channel Adapter) 643

clear [HDLM コマンドのオペレーション] 398

CLPR (Cache Logical Partition) 643

cluster.tar.gz 447

CLUSTERPRO の設定 302

Critical [障害レベル] 53

D

delete [HDLM コマンドのオペレーション] 443

Dev 28, 29, 643

Dev 番号 643

dlnmcfmgr 463

dlnmchname 470

DLMgetras 396, 447

dlnmkinitrd 471

dlnmpr 473

dlnmsetopt 475

dlnmstart 478

dlnmupdatesysinit 478

domain 643

DRBD 76, 78

E

Error [障害レベル] 53

EVMS 76, 78

F

FC-SAN 28, 29, 643

fdisk コマンドについての注意事項 609

G

getras.tar.gz 447

Global Link Manager 60

H

HBA 29, 83

HBA (Host Bus Adapter) 643

HBA の交換 366, 367

hbsa.tar.gz 447

HDev 32

HDLM

アップグレードインストール 222

アンインストール 336

インストール 204

再インストール 217

サイレントインストール 226

新規インストール 212

- 設定解除 321
 - ディスク複製 OS インストール 230
 - HDLM アラートドライバ 34, 644
 - HDLM インストール障害情報収集ユティリティ 479
 - 収集情報出力先ディレクトリ 479
 - HDLM インストール障害情報収集ユティリティ (installgetras) を使用したインストール障害情報の収集 54
 - HDLM インストールユティリティ 480
 - HDLM が検知した障害情報 52
 - HDLM が検知する障害 53
 - HDLM がサポートする IP-SAN 環境 30
 - HDLM 管理対象外のデバイスを管理対象にする 381
 - HDLM 管理対象デバイス 28
 - HDLM 管理対象のデバイスへの操作 321
 - HDLM 管理対象のデバイスを管理対象外にする 380
 - HDLM 起動ユティリティ 478
 - HDLM 共通インストーラユティリティ 485
 - HDLM 構成定義ユティリティ 463
 - HDLM コマンド 33, 398
 - HDLM コマンドのオペレーション 398
 - HDLM 障害情報収集ユティリティ 396, 447
 - 収集情報出力先ディレクトリ 447
 - HDLM 障害情報収集ユティリティ (DLMgetras) を使用した障害情報の収集 54
 - HDLM で監査ログに出力する種別と監査事象 56
 - HDLM で管理するデバイス 28
 - HDLM で使用するコマンド 398
 - HDLM デバイス 31
 - HDLM デバイスの論理デバイスファイル 35
 - HDLM デバイス名の変更 385
 - HDLM デバイス名変更ユティリティ 470
 - HDLM とは 24
 - HDLM ドライバ 34, 644
 - HDLM ドライバオプション設定ユティリティ 475
 - HDLM ドライバと HDLM デバイスの位置づけ 34
 - HDLM のアンインストール 337
 - HDLM のインストール
 - 事前知識 200
 - 種別 199
 - HDLM のインストールの種別
 - HDLM のアップグレードインストール 200
 - HDLM の再インストール 200
 - HDLM の新規インストール 200
 - HDLM の概要 23
 - HDLM の環境構築 63
 - HDLM の機能 27
 - HDLM の再インストール 217
 - HDLM のシステム構成
 - FC-SAN を使用する HDLM のシステム構成 28
 - IP-SAN を使用する HDLM のシステム構成 30
 - HDLM の使用上の注意事項 348
 - HDLM の常駐プロセス一覧 365
 - HDLM の統合管理 60
 - HDLM の特長 24
 - HDLM のプログラム情報 420
 - HDLM パーシステントリザーブ解除ユティリティ 473
 - HDLM マネージャ 33, 644
 - 起動 364
 - 停止 364
 - HDLM ユティリティ 33
 - Heartbeat の設定 303
 - Heartbeat の設定解除 322
 - help [HDLM コマンドのオペレーション] 399
 - Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ
 - 使用する場合の注意事項 316
 - Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2)
 - アンインストール 344
 - HLU 32
- ## I
- I/O 回数 398
 - I/O 障害回数 398
 - Information [障害レベル] 53
 - installgetras 479
 - installgetras.tar.gz 479
 - installhdlm 480
 - installlux.sh 485
 - Intel 製 CPU 66
 - iostat コマンドについての注意事項 609
 - IP-SAN 29, 30, 644
 - iSCSI 30, 644
 - iSCSI ソフトウェア 29
- ## K
- KAPL08022-E メッセージの項目
 - DNum 393
 - ErrorCode 392
 - HDevName 393
 - PathID 392
 - PathName 392
 - kdump 機能の設定手順 619
 - KVM 197, 644
 - KVM の設定 301
 - KVM の設定解除 325
- ## L
- LDEV (Logical Device) 644
 - Linux のコマンドおよびファイルの注意事項 607
 - Linux のコマンドについての注意事項 608
 - LU 29

LU (Logical Unit) 644
LUKS の設定 280
LUKS の設定解除 335
LUKS を使用する際の注意事項 280
LU 構成 31
LU へのパスを削除する 379
LU へのパスを追加する 378
LU を削除する 378
LU を追加する 376
LVM2
 設定 292
 設定解除 326
LVM2 を使用する際の注意事項 292

M

md デバイス
 作成 283
 設定 282
 設定解除 330
 注意事項 282
mkfs コマンドについての注意事項 609

N

NIC 30, 83

O

offline [HDLM コマンドのオペレーション] 401
Offline(C)状態 45
Offline(E)状態 45
online [HDLM コマンドのオペレーション] 404
Online(E)状態 44
Online 状態 44
Oracle Enterprise Linux 4
 カーネル 78
 ファイルシステム 187
 ブートディスク環境 187
 ボリュームマネージャ 187
Oracle Enterprise Linux 5
 カーネル 79
 クラスタソフトウェア 188
 ファイルシステム 189
 ブートディスク環境 190
 ボリュームマネージャ 189
Oracle RAC の設定 303
Oracle RAC の設定解除 323
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5
 カーネル 80
 クラスタソフトウェア 190
 ファイルシステム 191

ブートディスク環境 191
ボリュームマネージャ 191
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6
 カーネル 81
 クラスタソフトウェア 192
 ファイルシステム 193
 ブートディスク環境 193
 ボリュームマネージャ 192
OS 65
 アップデートパッケージの適用 352

P

P 29
Persistent Binding 機能 201

Q

QEMU 644

R

Red Hat Enterprise Linux 5
 カーネル 71
 クラスタソフトウェア 127
 ファイルシステム 162
 ブートディスク環境と BladeSymphony 環境 165
 ボリュームマネージャ 158
Red Hat Enterprise Linux 6
 カーネル 74
 クラスタソフトウェア 171
 ファイルシステム 177
 ブートディスク環境 178
 ボリュームマネージャ 176
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4
 カーネル 66
 クラスタソフトウェア 84
 ファイルシステム 121
 ブートディスク環境と BladeSymphony 環境 121
 ボリュームマネージャ 117
RHCM の設定 305
RHCM の設定解除 323
RHCM を使用する際の注意事項 306

S

SAN (Storage Area Network) 644
sar コマンドについての注意事項 610
SCSI デバイス 644
set [HDLM コマンドのオペレーション] 407
SLPR (Storage Logical Partition) 644

SUSE LINUX Enterprise Server 10

- カーネル 75
- クラスタソフトウェア 179
- ファイルシステム 182
- ブートディスク環境 182
- ボリュームマネージャ 181

SUSE LINUX Enterprise Server 11

- カーネル 77
- ファイルシステム 185
- ブートディスク環境 185
- ボリュームマネージャ 183

syslog 53

syslogd の設定ファイル 207

U

uname コマンド 66

V

VCS の設定 307

VCS の設定解除 324

view [HDLM コマンドのオペレーション] 418

W

Warning [障害レベル] 53

X

Xen 197, 644

Xen の設定 208, 217, 300

Xen の設定解除 324

あ

アップグレードインストール 200, 222

アンインストール

HDLM デバイスをブートディスクとして使用している場合 337

HDLM のアンインストール 336

Hitachi Network Objectplaza トレース共通ライブラリ (HNTRLib2) 344

い

インストール 204

アップグレードインストール 222

再インストールまたはアップグレードインストール

する前の準備 216

サイレントインストール 204, 226

新規インストール 212

ディスク複製 OS インストール 230

ブートディスク環境 239

リモートインストール 208

インストール情報設定ファイル

記述規則 481

定義内容 481

編集方法 480

え

エミュレーションタイプ 645

お

オーナコントローラ 38, 645

オーナパス 38, 645

オペレーション 488

オペレーション一覧 398

オペレーションの形式を表示する 399

か

カーネル

Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合 78

Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合 79

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する
場合 80

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する
場合 81

Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合 71

Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合 74

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する
場合 66

SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する
場合 75

SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する
場合 77

アーキテクチャ 65

カーネルパッケージの更新 352

各ディストリビューションのマウントポイント 212

確認

CPU のベンダ 65

カーネルアーキテクチャ 65

パス構成 307

ボリュームグループ 205

仮想環境 197

稼働状態 404

稼働中に断線状態となったパスを復元する 384

間欠障害 645

間欠障害監視 310, 311

監査ログの採取 55

監査ログの出力形式 59

監視

メッセージ 395

関連製品

Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合 186

Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合 188

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する
場合 190

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する
場合 192

Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合 127

Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合 171

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する
場合 84

SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する
場合 179

SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する
場合 183

き

起動

HDLM マネージャ 364

機能の設定 308

キャラクタ型デバイスファイル 316

く

クラスタ 645

クラスタソフトウェア

Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合 188

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する
場合 190

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する
場合 192

Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合 127

Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合 171

Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する
場合 84

SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する
場合 179

クラスタ対応 61

こ

コアロジック部 34

構成

プログラム 33

コマンド

概要 398

入力形式 398

コンポーネント情報を参照する 363

さ

再インストール 200, 217

再インストールまたはアップグレードインストールする
前の準備 216

採取するログの種類 52

サイレントインストール 204, 226

インストール情報設定ファイル 480

作成

md デバイス 283

し

システム構成 28, 29

システムスクリプト更新ユティリティ 478

自動パス切り替え 41

自動フェイルオーバー 42

自動フェイルオーバーの対象となる障害 42

自動フェイルバック 43, 310, 645

自動マウントの設定 318

収集情報定義ファイルの記述規則と注意事項 448

収集情報定義ファイルの記述例 448

収集情報定義ファイル名 448

主系ホスト 61

手動パス切り替え 44

取得

パス情報 394

プログラム情報 396

障害

メッセージ 392

障害個所特定 395

障害管理 51

障害情報の種類 52

障害情報のフィルタリング 53

障害パス

抽出 394

障害発生ハードウェアの絞り込み 394

障害レベル 53

障害ログ 53

障害ログ採取レベル 312

障害ログ採取レベルの設定値 409

障害ログファイルサイズ 313, 410

障害ログファイル数 410

情報を表示する 418

初期 RAM ディスクイメージファイル 471

シリアル番号 429, 431

新規 HDLM デバイス作成について 387

新規インストール 200, 212

新規インストールする前の準備 204

す

ストレージシステム 24, 81

せ

- 設定 407
 - CLUSTERPRO 302
 - Heartbeat 303
 - KVM 301
 - LUKS 280
 - LVM2 292
 - md デバイス 282
 - Oracle RAC 303
 - RHCM 305
 - VCS 307
 - Xen 208, 217, 300
 - 動作環境 [set オペレーション] 407
- 設定解除
 - HDLM 321
 - Heartbeat 322
 - KVM 325
 - LUKS 335
 - LVM2 326
 - md デバイス 330
 - Oracle RAC 323
 - RHCM 323
 - VCS 324
 - Xen 324

た

- ターゲット ID 431
- 対処
 - パス障害 393
 - プログラム障害 396
 - プログラム障害時 395
- ダイナミック I/O パスコントロール 311
- 断線状態で起動されたパスを復元する (再起動が必要となる場合) 382
- 断線状態で起動されたパスを復元する (再起動が不要な場合) 382

ち

- チャンネルアダプタ 28
- 注意事項
 - /proc/partitions ファイル 608
 - Device Manager エージェント 204
 - fdisk コマンド 609, 610
 - HDLM デバイスの構成 375
 - iostat コマンド 609
 - Linux 201
 - Linux のコマンド 608
 - lvrename コマンド 611
 - md デバイス 282
 - mkfs コマンド 609

- Oracle Enterprise Linux 4 349
- Oracle Enterprise Linux 5 350
- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 350
- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 350
- OS 共通 348
- parted コマンド 610
- Red Hat Enterprise Linux 5 350
- Red Hat Enterprise Linux 6 350
- Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 349
- sar コマンド 610
- SUSE LINUX Enterprise Server 10 350
- SUSE LINUX Enterprise Server 11 351
- vgrename コマンド 611
- インストール 202
- 再インストールまたはアップグレードインストール 203
- ハードウェアの設定 201
- 抽出
 - 障害パス 394

て

- 停止
 - HDLM マネージャ 364
- ディスク複製 OS インストール 230

と

- 統計情報 398
- 動作環境 407
 - 参照 [view オペレーション] 423
 - 設定 [set オペレーション] 407
- 動作環境を参照または設定する 360
- トレースファイル 53
- トレースファイルサイズ 410
- トレースファイル数 410
- トレースレベル 312, 410

の

- ノード 646
- ノンオーナコントローラ 38, 646
- ノンオーナパス 38, 646

は

- パーシステントリザーブ 646
- バージョン情報を参照する 362
- パーティション 208
- ハードウェア障害対処 395
- ハイパーバイザ 646

- パス 28, 646
 - パス管理 PATH_ID 28, 646
 - パス切り替えによるフェイルオーバーとフェイルバック 41
 - パス構成
 - 確認 307
 - パス障害
 - 対処 393
 - パス情報
 - 取得 394
 - パスの状態遷移 44, 45
 - パスの状態を変更する 357
 - パスの情報を参照する 356
 - パスの統計情報を初期値にする 359, 398
 - パス番号 431
 - パスヘルスチェック 50, 310, 410, 646
 - パス名 646
 - パス名を構成する項目 429, 431, 439
 - パスを稼働状態にする 404
 - パスを稼働状態に変更 395
 - パスを動的に削除する 443
 - パスを動的に追加する 442
 - パスを閉塞状態にする 401
- ふ**
- ファイバケーブルの交換 371
 - ファイバチャネルスイッチの交換 372
 - ファイルシステム
 - Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合 187
 - Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合 189
 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する
場合 191
 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する
場合 193
 - Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合 162
 - Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合 177
 - Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合
121
 - SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合
182
 - SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合
185
 - 構築（ボリューム管理ソフトウェアを使用しない場
合） 317
 - ファイルシステムの作成例 318
 - フィルタ部 34
 - フィルタリング 54
 - ブートディスク環境 647
 - Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合 187
 - Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合 190
 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する
場合 191
 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する
場合 193
 - Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する場合 165
 - Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する場合 178
 - Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する場合
121
 - SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する場合
182
 - SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する場合
185
 - ブートディスクサポートユーティリティ 471
 - ブートローダの設定ファイル 243, 477
 - フェイルオーバー 41, 647
 - フェイルバック 41, 647
 - 物理パス 28, 647
 - プログラム
 - 構成 33
 - 役割 33
 - プログラム障害
 - 対処 395, 396
 - プログラム情報 420
 - 取得 396
 - プログラム情報表示 418
 - プロセス別トレース情報ファイル 52, 316
 - プロダクト ID 429, 431
- へ**
- 閉塞状態 401
 - ベンダ ID 429, 431
- ほ**
- ポート 28
 - 保証する LU 数 195
 - 保証するパス数 195
 - ホスト 65, 647
 - 必要条件 65
 - ホスト LU 32, 647
 - ホスト LU 番号 431, 647
 - ホスト側で認識される LU の構成 32
 - ホストデバイス 32, 647
 - ホストデバイス名 647
 - ホストバスアダプタ 28
 - ホストポート番号 431
 - ボリュームマネージャ
 - Oracle Enterprise Linux 4 を使用する場合 187
 - Oracle Enterprise Linux 5 を使用する場合 189
 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 5 を使用する
場合 191

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel 6 を使用する
場合 192
Red Hat Enterprise Linux 5 を使用する
場合 158
Red Hat Enterprise Linux 6 を使用する
場合 176
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 を使用する
場合 117
SUSE LINUX Enterprise Server 10 を使用する
場合 181
SUSE LINUX Enterprise Server 11 を使用する
場合 183

ま

マウント 317
マウントポイント
Red Hat Enterprise Linux 5 208, 212
Red Hat Enterprise Linux 6 208, 212
Red Hat Enterprise Linux AS4/ES4 212
SUSE LINUX Enterprise Server 212

め

メッセージ 487
ID の形式と意味 488
監視 395
障害 392
説明で使用する用語 488
表示される用語 488
レベル 488
メモリ所要量 193

ゆ

ユティリティ
HDLM インストール障害情報収集ユティリティ 479
HDLM インストールユティリティ 480
HDLM 共通インストーラユティリティ 485
HDLM 構成定義ユティリティ 463
HDLM デバイス名変更ユティリティ 470
HDLM ドライバオプション設定ユティリティ 475
HDLM パーシステントリザード解除ユティリティ
473
概要 446
システムスクリプト更新ユティリティ 478
障害情報収集ユティリティ 447
ブートディスクサポートユティリティ 471

よ

用語解説 643

り

リザード 647
リモートインストール 208
前提条件 209
流れ 208
配布指令の作成および登録 211
パッケージング 210

ろ

ロードバランス 36, 310, 409, 647
ロードバランスが適用されるパス 38
ロードバランスによる負荷分散 36
ロードバランスのアルゴリズム 40
論理デバイスファイル 648
論理ユニット 28